

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第188集

寝屋川市

# 讃良郡条里遺跡 IX

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

— 本 文 編 —

2009年3月

財団法人 大阪府文化財センター

讃良郡条里遺跡 IX

— 本 文 編 —

二〇〇九年三月

財団法人  
大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第188集

寝屋川市

# 讃良郡条里遺跡 IX

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

— 本 文 編 —

財団法人 大阪府文化財センター







(1) 調査地遠景 (南西から)



(2) 調査地遠景 (北西から)



巻頭図版 2



(1) 第1面微高地1 (03-5-6トレンチ 南から)



(2) 第1面微高地2 (03-5-8トレンチ 南から)







巻頭図版 4



(1) 第1面 流路1 (03-5-4トレンチ 南西から)



(2) 第1面 流路1 杭列6 (03-5-10トレンチ 南から)





(1) 第1面 流路1 遺物出土状況 (03-5-4トレンチ 北東から)



(2) 第1面 流路1 遺物出土状況 (03-5-2トレンチ 東から)



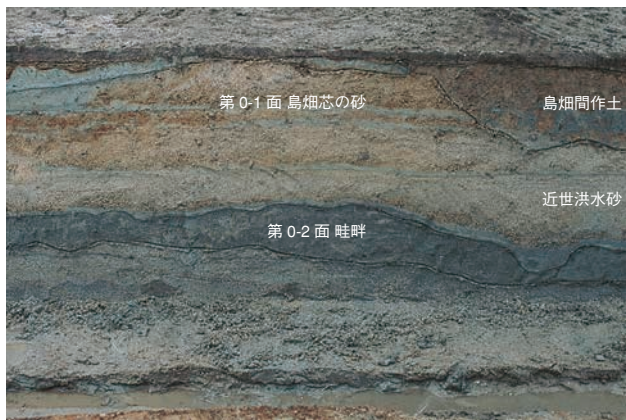


(1) 第2-2面 水田 (03-5-2トレンチ 南東から)



(2) 第2-3面 水田 (03-5-4トレンチ 西から)





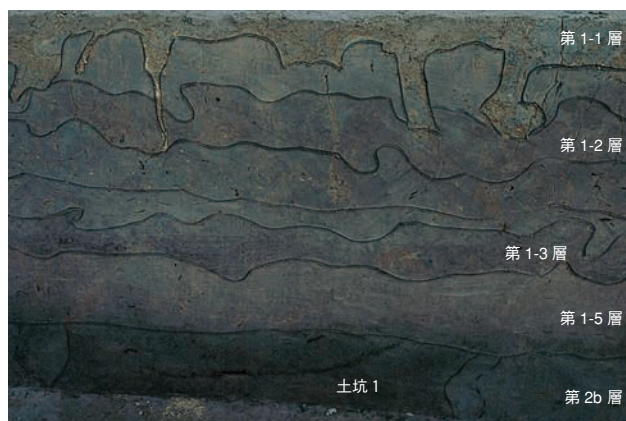
(1) Y=-34,030ライン断面 (西から)



(2) 03-5-4トレンチセンターライン断面 (南東から)



(3) 03-5-2トレンチセンターライン断面 (南東から)



(4) Y=-33,980ライン断面 (西から)



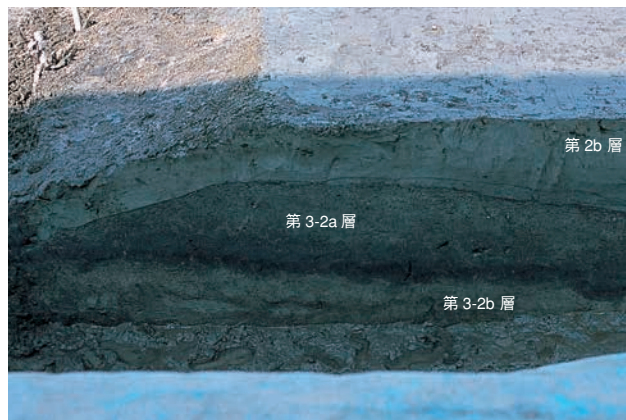
(5) 03-5-2トレンチ南北断面 (南西から)



(6) 03-5-2トレンチセンターライン断面 (南東から)



(7) 03-5-2トレンチ南北断面 (南西から)



(8) 南側溝断面 (南から)



巻頭図版 8



(1) Y=-33,980ライン断面 (西から)



(2) Y=-34,030ライン断面 (西から)



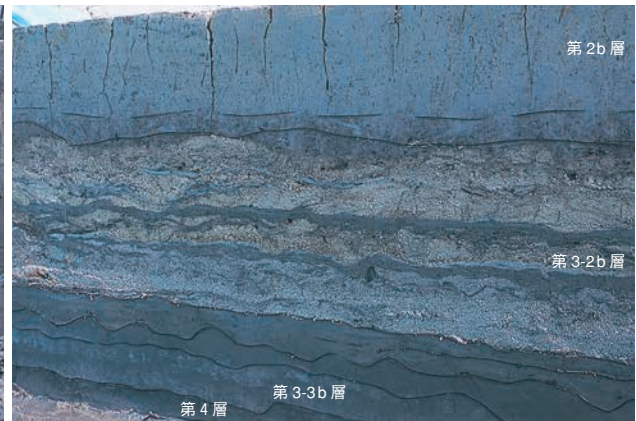
(3) 03-5-4トレンチ南北断面 (西南から)



(4) X=-138,820ライン断面 (南から)



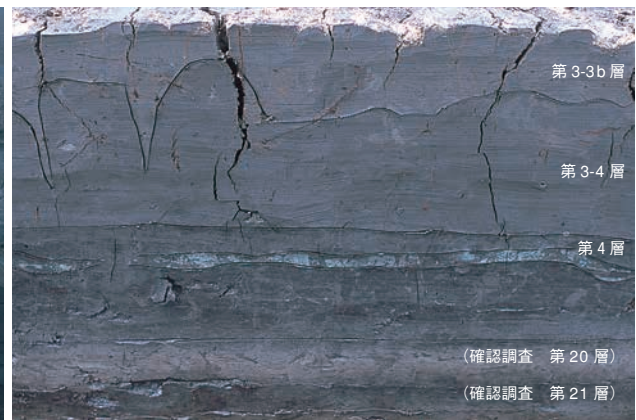
(5) X=-138,940ライン断面 (北から)



(6) Y=-33,980ライン断面 (西から)



(7) X=-138,830ライン断面 (北から)



(8) X=-138,860ライン断面 (南から)



# 序 文

讃良郡条里遺跡は寝屋川市と四條畷市にまたがって広がる遺跡で、その名前は条里型地割が良好に残っていることに由来します。この遺跡の範囲内を横切って、一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路が新設されることになり、このたび大規模な発掘調査を順次、実施してまいりました。本書で報告する讃良郡条里遺跡03-5・06-2調査は遺跡範囲内のうちでも西南寄りに位置し、平成15年度から平成18年度にかけて発掘調査を実施いたしました。

今回報告いたします範囲では、弥生時代から近世にいたるまでの農耕地や集落の変遷があきらかになりました。とりわけ、古墳時代の流路からは千数百点にのぼる土器や木製品、鉄器、石製品などが出土しましたが、その中には朝鮮半島からの渡来人が用いた韓式系土器や、木製の鞍、馬の骨などが含まれており、「河内馬飼」にかかわる遺跡である可能性が高まりました。さらに折り曲げられた鉄剣やほとんどさびていない鉄鏃、土製の馬、700点をこえる石の小玉など、流路で行われた祭祀の姿を彷彿とさせる遺物の出土もみられ、馬飼いに加え、北河内地域における文物の流通拠点としての讃良郡条里遺跡のもつ歴史的重要性を、あらためて認識させる成果が得られました。加えて今回の調査では考古学的な調査に加え、自然科学の方法を用いた分析を実施し、地形の変遷や周辺の植生の変化などについても新たな知見を得ることができました。

このような調査成果も、多くの方々のご協力があったはじめて得られるものであります。とりわけ国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所をはじめとする関係機関の方々には多大なご協力を賜り、また大阪府教育委員会、寝屋川市教育委員会、四條畷市教育委員会、寝屋川市新家自治会の皆様からは調査の実施にあたりご指導とご配慮をいただきました。深く感謝申し上げますとともに、今後とも当センターの事業に変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成21年3月

財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 水野正好



# 例 言

1. 本書は、大阪府寝屋川市新家2丁目地先に所在する、讃良郡条里（さらぐんじょうり）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 現地調査および報告書作成にかかわる受託契約と契約期間、工事請負契約の名称、期間は以下のとおりである。

## 平成15年度

受託事業契約名 第二京阪道路（大阪北道路）讃良郡条里遺跡発掘調査（その6）

受託契約期間 平成15年4月1日～平成16年3月31日

## 平成16年度

受託事業契約名 第二京阪道路（大阪北道路）讃良郡条里遺跡発掘調査（その6の2）

受託契約期間 平成16年4月1日～平成17年3月31日

## 平成17年度

受託事業契約名 第二京阪道路（大阪北道路）讃良郡条里遺跡発掘調査（その6の3）

受託契約期間 平成17年4月1日～平成18年3月31日

## 平成18年度

受託事業契約名 第二京阪道路（大阪北道路）讃良郡条里遺跡遺物整理  
讃良郡条里（6）遺物整理

受託契約期間 平成18年4月1日～平成19年3月31日

## 平成19年度

受託事業契約名 第二京阪道路（大阪北道路）讃良郡条里遺跡他遺物整理（その2）  
讃良郡条里（6）遺物整理

受託契約期間 平成19年4月1日～平成20年3月31日

## 平成20年度

受託事業契約名 第二京阪道路（大阪北道路）讃良郡条里遺跡他遺物整理（その3）  
讃良郡条里（6）遺物整理

受託契約期間 平成20年4月1日～平成21年3月31日

03-5調査 工事請負契約名 讃良郡条里遺跡（その8）発掘調査に伴う工事

03-5調査 工事請負契約期間 平成15年4月17日～平成17年10月31日

4. 本事業の実施体制は以下のとおりである。

年度	本部		調査担当(平成15年度は京阪支所調査第二係、平成16～17年度は京阪調査事務所調査第二係、平成18年度は同調査第一係、平成19年度は同調査第四係、平成20年度は同調査第二係)					
	調査部長	調整課長	所長	係長	写真担当	調査・報告書作成担当		
平成15年度	玉井 功	赤木克視	渡邊昌宏	寺川史郎	主査 上野貞子	主査 吉村正親	技師 森本 徹 (6月～)	専門調査員 宮本飛鳥
平成16年度	玉井 功	赤木克視	渡邊昌宏	寺川史郎	主査 上野貞子	技師 高橋 潔	技師 森本 徹	専門調査員 宮本飛鳥
平成17年度	赤木克視	田中和弘	山本 彰	金光正裕	主査 上野貞子	技師 高橋 潔	技師 森本 徹	専門調査員 上本志穂
平成18年度	赤木克視	田中和弘	山本 彰	藤永正明	主査 上野貞子	技師 高橋 潔	技師 森本 徹	
平成19年度	赤木克視	田中和弘	山本 彰	藤永正明	主査 上野貞子		技師 森本 徹	専門調査員 市来真澄
平成20年度	赤木克視	田中和弘	山本 彰	秋山浩三	主査 上野貞子		副主査 森本 徹	専門調査員 市来真澄

5. 発掘調査では土壌の分析を、パリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社パレオ・ラボに委託し、遺物整理作業では出土木製品の樹種同定、出土石材の岩石種同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。また出土動物遺体の同定を京都大学大学院、丸山真史氏に依頼した。出土種子類の同定、出土木製品の樹種同定の一部、鉄製品のX線写真撮影についてはセンター中部調査事務所（現・資料活用課）主査、山口誠治・専門調査員、橋本俊範が行なった。

6. 調査の実施にあたっては、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所、西日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）関西支社枚方工事事務所、大阪府教育委員会、寝屋川市教育委員会、四條畷市教育委員会、寝屋川市新家自治会をはじめとする、関係各位からご協力を得た。また、以下の方々から調査内容の検討に際し、ご教示を得た。記して感謝の意を表します。（順不同）

濱田延充、野島 稔、神谷正弘、原田昌則、右島和夫、松井 章、村上恭通、宮路淳子、丸山真史、権五栄、柳基正、河承哲、崔榮柱、山岡邦章、大岡由記子、小林正史、中野 咲

7. 現地での写真撮影は調査担当者がおこなった。遺物写真撮影、報告書図版版下用紙焼きについては主査 上野貞子が担当した。

8. 本書の編集は森本が担当した。本文の執筆は森本が行ったが、第5章の一部については、市来真澄、パリノ・サーヴェイ株式会社 辻本裕也氏・辻 康男氏、高橋 敦氏、京都大学大学院 丸山真史氏、奈良県立橿原考古学研究所 中野 咲氏により起稿されたものを受け、森本が総括した。

9. 出土遺物ならびに実測図、写真などの各種資料は当センターで保管している。

10. 本書は、当センターが刊行した、讚良郡条里遺跡単独の報告書の第9冊目にあたり、書名を『讚良郡条里遺跡Ⅸ』とした。この方法による報告書名は平成16年度以降刊行のものについて用いており、それより以前に刊行されたものについては刊行順に、番号を付したものとして読み替えることとしている。それらを含む、これまでに刊行された讚良郡条里遺跡単独の報告書は下記のとおりである。

(財) 大阪府文化財センター調査報告書第98集『讚良郡条里遺跡 (その2)』平成15年6月刊行

(財) 大阪府文化財センター調査報告書第109集『讚良郡条里遺跡 (その1)』平成16年2月刊行

(財) 大阪府文化財センター調査報告書第114集『讚良郡条里遺跡 (その3)』平成16年3月刊行

(財) 大阪府文化財センター調査報告書第138集『讚良郡条里遺跡 Ⅳ』平成18年2月刊行

(財) 大阪府文化財センター調査報告書第160集『讚良郡条里遺跡 Ⅴ』平成19年3月刊行

(財) 大阪府文化財センター調査報告書第173集『讚良郡条里遺跡 Ⅵ』平成20年3月刊行

(財) 大阪府文化財センター調査報告書第182集『讚良郡条里遺跡 Ⅶ』平成20年9月刊行

(財) 大阪府文化財センター調査報告書第187集『讚良郡条里遺跡 Ⅷ』平成21年1月刊行

# 凡 例

1. 発掘調査及び整理作業の実施に際しては当センター制定の「遺跡調査基本マニュアル【暫定版】」(2003年8月)に準拠した。
2. 本書に掲載した遺構実測図に付した北方位は全て、国土座標第Ⅵ系の座標北を示す。なお調査ならびに本書における使用測地系は、世界測地系(測地成果2000)である。
3. 本書で用いる標高は全て東京湾平均海面(T.P.)を基準とする表示である。
4. 遺構図などに記載した座標値の単位、mは全て省略した。
5. 本書で用いた土色番号・名称は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』2004年版に従った。
6. 本書で用いる遺構名称・番号は現地調査終了後、報告書作成に際し新規に付したもので、調査時の遺構番号とは異なるものである。本書使用名称・番号と調査時の遺構番号との対照は、本書巻末の遺構一覧表において示した。
7. 本書における遺物番号は実測図、写真図版とも一致する通し番号である。
8. 本書掲載の出土遺物実測図の縮尺は、土器類を1/3に、打製石器類を2/3に、鉄製品を1/2にすることを原則としたが、適宜縮尺を変更したものがある。木製品、石製品、土製品などについては、遺物の法量に応じて、適宜縮尺を設定した。個々の縮尺については各図のスケールバーを参照されたい。
9. 遺物実測図には一部、アミフセ表現を行ったものがある。木製品におけるアミフセは彩色などの残存範囲を示した。土師器把手については、欠損部分を濃、芯の露出部分を中、破断面部分を薄のアミフセで示した。
10. 本書の記載にかかわる参考文献は文末に一括して記載するが、第5章については節ごとに参考・引用文献をまとめ、各節末に記載することとした。表記の体裁については統一していない。



# 目 次

巻頭図版

序文

例言・凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 讚良郡条里遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3節 既往の調査成果と葦屋北遺跡	5
第3章 調査の方法	7
第4章 調査成果	11
第1節 土層序の認識と微地形	11
第2節 第1面の調査成果	31
第3節 第2面の調査成果	268
第4節 第3面の調査成果	314
第5節 近世～中世の調査成果	317
第5章 分析	331
第1節 古環境分析	331
第2節 樹種同定	365
第3節 動物遺存体の同定・分析	376
第4節 古墳時代集落構造の基礎分析	381
第5節 ヘラ記号・底部圧痕	385
第6節 土器煮沸具に残されたスス・コゲ等の分析	387
第7節 土師器把手の分析	399
第6章 総括	403
参考文献	407

遺構一覧表（1）～（4） 411

木製品一覧表（1）～（3） 469

石製品一覧表（1）～（6） 473

動物遺存体一覧表（1）～（2） 483

遺物観察表（1）～（54） 415

鉄製品一覧表 472

白玉一覧表（1）～（4） 479

植物遺存体一覧表（1）～（4） 485

報告書抄録



## 巻頭図版目次

### 巻頭図版 1

- (1) 調査地遠景 (南西から)
- (2) 調査地遠景 (北西から)

### 巻頭図版 2

- (1) 第1面微高地 (03-5-6トレンチ 南から)
- (2) 第1面微高地 2 (03-5-8トレンチ 南から)

### 巻頭図版 3

- (1) 井戸 1 (南から)
- (2) 中世井戸出土土器
- (3) 井戸 3 (南東から)
- (4) 井戸 4 (南西から)
- (5) 土坑42 (南西から)
- (6) 土坑 7 (東から)
- (7) 建物 8 (北西から)
- (8) 建物 3 柱穴09 (西から)

### 巻頭図版 4

- (1) 第1面 流路 1 (03-5-4トレンチ 南西から)
- (2) 第1面 流路 1 杭列 6 (03-5-10トレンチ 南から)

### 巻頭図版 5

- (1) 第1面 流路 1 遺物出土状況 (03-5-4トレンチ 北東から)
- (1) 第1面 流路 1 遺物出土状況 (03-5-2トレンチ 東から)

### 巻頭図版 6

- (1) 第2-2面 水田 (03-5-2トレンチ 南西から)
- (1) 第2-3面 水田 (03-5-4トレンチ 西から)

### 巻頭図版 7

- (1) Y=-34,030ライン断面 (西から)
- (2) 03-5-4トレンチセンターライン断面 (南東から)
- (3) 03-5-2トレンチセンターライン断面 (南東から)
- (4) Y=-33,980ライン断面 (西から)
- (5) 03-5-2トレンチ南北トレンチ断面 (南西から)
- (6) 03-5-2トレンチセンターライン断面 (南東から)
- (7) 03-5-2トレンチ南北トレンチ断面 (南西から)
- (8) 南側溝断面 (南から)

### 巻頭図版 8

- (1) Y=-33,980ライン断面 (西から)
- (2) Y=-34,030ライン断面 (西から)
- (3) 03-5-4トレンチ南北断面 (西南から)
- (4) X=-138,820ライン断面 (南から)
- (5) X=-138,940ライン断面 (北から)
- (6) Y=-33,980ライン断面 (西から)
- (7) X=-138,830ライン断面 (北から)
- (8) X=-138,860ライン断面 (南から)

## 挿図目次

図 1	調査地の位置	1
図 2	地形分類図	3
図 3	周辺遺跡分布図	4
図 4	讚良郡条里遺跡 (本書報告範囲) と 部屋北遺跡	6
図 5	地区割りの方法	8
図 6	地区割り・トレンチ区分・確認調査位置・断面図作成位置	9
図 7	センターライン土層断面模式図	12
図 8	03-5-4トレンチ南北土層断面図	13~14
図 9	03-5-2トレンチ南北土層断面図	15~16
図10-1	X=-138,820ライン土層断面図	17~18
図10-2	X=-138,830ライン土層断面図	19~20
図11-1	Y=-33,980ライン土層断面図	21~22
図11-2	Y=-33,980ライン土層断面図	23~24
図12	X=-138,860ライン土層断面図	25~26
図13	X=-138,940ライン土層断面図	27~28

図14	第1面 (第1a面) 第2a層分布図	33~34
図15	第1面 (第1b面) 遺構分布図・エリア区分図	35~36
図16	第1面 微高地 1・微低地 1 遺構分布図	38
図17	第1面 微高地 1 建物群 分布図	39
図18	建物 1 平・断面図	40
図19	建物 2 平・断面図	41
図20	微高地 1 建物 出土遺物 1	42
図21	建物 3 平・断面図	43
図22	建物 4 平・断面図	44
図23	建物 5 平面図	45
図24	建物 6 平・断面図	46
図25	微高地 1 建物 出土遺物 2	47
図26	井戸 1 平・断面図 遺物出土状況図	49
図27	微高地 1 井戸 1 出土遺物	50
図28	土坑 1・2・4・6・8 平・断面図	52

図29	土坑3・5・7 平・立面図	53	図81	土坑66~70 平面図	113
図30	土坑9 平・断面図	54	図82	土坑66・68・69・70 断面図	114
図31	第1面 微高地1 西縁土坑群 分布図	55	図83	土坑71 平・断面図	115
図32	土坑11~19 平・断面図	57	図84	土坑72 平・断・立面図	116
図33	土坑20~22 平・断面図	59	図85	微高地3 遺構 出土遺物1	117
図34	土坑23~31 平・断面図	60	図86	微高地3 遺構 出土遺物2	118
図35	微高地1 土坑 出土遺物1	61	図87	微高地3 遺構 出土遺物3	119
図36	土坑42 平・立・断面図	62	図88	微高地3 遺構 出土遺物4	120
図37	微高地1 土坑 出土遺物2	63	図89	溝12~15・17 平・断面図 溝12・13遺物 出土状況図	121
図38	微高地1 ピット 出土遺物	64	図90	溝15 遺物出土状況	122
図39	微高地1 層 出土遺物1	66	図91	微高地3 遺構 出土遺物5	123
図40	微高地1 層 出土遺物2	67	図92	微高地3 遺構 出土遺物6	124
図41	微高地1 層 出土遺物3	68	図93	微高地3 遺構 出土遺物7	125
図42	微高地1 層 出土遺物4	69	図94	微高地3 遺構 出土遺物8	126
図43	微高地1 層 出土遺物5	70	図95	微高地3 層 出土遺物1	127
図44	微高地1 層 出土遺物6	71	図96	微高地3 層 出土遺物2	128
図45	微高地1 層 出土遺物7	72	図97	微高地3 層 出土遺物3	129
図46	土器集中1 平面図	73	図98	流路1 断面図	132
図47	微低地1 土器集中1 出土遺物	74	図99	流路1・流路2 平面図	133~134
図48	微低地1 層 出土遺物	74	図100	流路1 遺物出土状況図	135
図49	第1面 微高地2・微低地3 遺構分布図	76	図101	流路1内杭列1・2 平・立面図	136
図50	第1面 微高地2 建物群分布図	77	図102	流路1 杭列4~7 平面図	137
図51	建物7 平・断面図	78	図103	杭列6・7 断・立面図	138
図52	建物8 平・断面図	79	図104	杭列4・5 立・断面図	139
図53	建物9 平・断面図	80	図105	流路1-1域 出土遺物1	141
図54	井戸2 平・立面図	81	図106	流路1-1域 出土遺物2	142
図55	井戸3 平・立面図	82	図107	流路1-1域 出土遺物3	143
図56	微高地2 遺構 出土遺物1	84	図108	流路1-1域 出土遺物4	144
図57	井戸4 平・立面図	86	図109	流路1-1域 出土遺物5	145
図58	微高地2 井戸4 出土遺物1	87	図110	流路1-1域 出土遺物6	147
図59	微高地2 井戸4 出土遺物2	88	図111	流路1-1域 出土遺物7	148
図60	微高地2 井戸4 出土遺物3	89	図112	流路1-1域 出土遺物8	149
図61	溝5 平・断面図	91	図113	流路1-1域 出土遺物9	150
図62	ピット148・ピット153 平・立・断面図	92	図114	流路1-1域 出土遺物10	151
図63	微高地2 遺構 出土遺物2	93	図115	流路1-2域 出土遺物1	154
図64	溝9 平・断面図	94	図116	流路1-2域 出土遺物2	155
図65	井戸5 平・断面図	95	図117	流路1-2域 出土遺物3	156
図66	土坑55 平・断面図	96	図118	流路1-2域 出土遺物4	157
図67	土坑58・59 平・断面図	96	図119	流路1-2域 出土遺物5	158
図68	微低地3 遺構 出土遺物1	97	図120	流路1-2域 出土遺物6	159
図69	微低地3 遺構 出土遺物2	98	図121	流路1-2域 出土遺物7	161
図70	微高地2・微低地3 層 出土遺物1	99	図122	流路1-2域 出土遺物8	162
図71	微高地2・微低地3 層 出土遺物2	100	図123	流路1-2域 出土遺物9	163
図72	微高地2・微低地3 層 出土遺物3	101	図124	流路1-2域 出土遺物10	164
図73	微高地2・微低地3 層 出土遺物4	102	図125	流路1-2域 出土遺物11	165
図74	微高地2・微低地3 層 出土遺物5	103	図126	流路1-2域 出土遺物12	166
図75	第0-5面 遺構 出土遺物1	104	図127	流路1-2域 出土遺物13	167
図76	第0-5面・第1面 溝群分布図	105~106	図128	流路1-2域 出土遺物14	168
図77	第0-5面 遺構 出土遺物2	107	図129	流路1-2域 出土遺物15	169
図78	第1面 微高地3・微高地4 遺構分布図	109	図130	流路1-2域 出土遺物16	170
図79	土坑60・61・63 平・断面図	110	図131	流路1-2域 出土遺物17	171
図80	土坑64・65 平・断・立面図	112			

图132	流路1-2域	出土遺物18	·····	172	图184	流路1-4域	出土遺物38	·····	229
图133	流路1-2域	出土遺物19	·····	173	图185	流路1-4域	出土遺物39	·····	230
图134	流路1-2域	出土遺物20	·····	174	图186	流路1-4域	出土遺物40	·····	231
图135	流路1-2域	上層出土遺物 1	·····	175	图187	流路1-4域	出土遺物41	·····	233
图136	流路1-2域	上層出土遺物 2	·····	176	图188	流路1-4域	出土遺物42	·····	234
图137	流路1-3域	出土遺物 1	·····	178	图189	流路1-4域	出土遺物43	·····	235
图138	流路1-3域	出土遺物 2	·····	179	图190	流路1-4域	出土遺物44	·····	236
图139	流路1-3域	出土遺物 3	·····	180	图191	流路1-4域	出土遺物45	·····	238
图140	流路1-3域	出土遺物 4	·····	181	图192	流路1-4域	出土遺物46	·····	239
图141	流路1-3域	出土遺物 5	·····	182	图193	流路1-4域	出土遺物47	·····	240
图142	流路1-3域	出土遺物 6	·····	183	图194	流路1-4域	出土遺物48	·····	241
图143	流路1-3域	出土遺物 7	·····	184	图195	流路1-4域	出土遺物49	·····	242
图144	流路1-3域	出土遺物 8	·····	185	图196	流路1-4域	出土遺物50	·····	243
图145	流路1-3域	上層出土遺物 1	·····	186	图197	流路1-4域	出土遺物51	·····	244
图146	流路1-3域	上層出土遺物 2	·····	187	图198	流路1-4域	出土遺物52	·····	245
图147	流路1-4域	出土遺物 1	·····	189	图199	流路1-4域	出土遺物53	·····	246
图148	流路1-4域	出土遺物 2	·····	190	图200	流路1-4域	出土遺物54	·····	248
图149	流路1-4域	出土遺物 3	·····	191	图201	流路1-4域	出土遺物55	·····	249
图150	流路1-4域	出土遺物 4	·····	192	图202	流路1-4域	出土遺物56	·····	250
图151	流路1-4域	出土遺物 5	·····	193	图203	流路1-4域	出土遺物57	·····	251
图152	流路1-4域	出土遺物 6	·····	194	图204	流路1-4域	出土遺物58	·····	252
图153	流路1-4域	出土遺物 7	·····	195	图205	流路1-4域	出土遺物59	·····	253
图154	流路1-4域	出土遺物 8	·····	197	图206	流路1-4域	出土遺物60	·····	255~256
图155	流路1-4域	出土遺物 9	·····	198	图207	流路1-4域	上層出土遺物 1	·····	257
图156	流路1-4域	出土遺物10	·····	199	图208	流路1-4域	上層出土遺物 2	·····	258
图157	流路1-4域	出土遺物11	·····	200	图209	流路1-4域	上層出土遺物 3	·····	259
图158	流路1-4域	出土遺物12	·····	201	图210	流路1-4域	上層出土遺物 4	·····	260
图159	流路1-4域	出土遺物13	·····	202	图211	流路2	土層断面图	·····	261
图160	流路1-4域	出土遺物14	·····	203	图212	流路2	遺物出土狀況图 杭列 8 平·断面图	·····	262
图161	流路1-4域	出土遺物15	·····	204	图213	流路2	出土遺物 1	·····	264
图162	流路1-4域	出土遺物16	·····	205	图214	流路2	出土遺物 2	·····	265
图163	流路1-4域	出土遺物17	·····	206	图215	流路2	出土遺物 3	·····	266
图164	流路1-4域	出土遺物18	·····	207	图216	流路2	出土遺物 4	·····	267
图165	流路1-4域	出土遺物19	·····	208	图217	第 2 面 (第2-1面)	遺構分布图	·····	269~270
图166	流路1-4域	出土遺物20	·····	209	图218	杭列 9	平·立面图	·····	271
图167	流路1-4域	出土遺物21	·····	210	图219	杭列10	平·立面图	·····	272
图168	流路1-4域	出土遺物22	·····	211	图220	第2b層	出土遺物 1	·····	273
图169	流路1-4域	出土遺物23	·····	212	图221	第2b層	出土遺物 2	·····	274
图170	流路1-4域	出土遺物24	·····	213	图222	第2b層	出土遺物 3 · 第2-1面出土遺物	·····	275
图171	流路1-4域	出土遺物25	·····	214	图223	第 2 面 (第2-2面)	遺構分布图	·····	277~278
图172	流路1-4域	出土遺物26	·····	215	图224	第2b-2面	南微高地 遺構分布图	·····	281
图173	流路1-4域	出土遺物27	·····	216	图225	第2-2b面	遺構出土遺物 1	·····	282
图174	流路1-4域	出土遺物28	·····	217	图226	第2-2b面	遺構出土遺物 2	·····	283
图175	流路1-4域	出土遺物29	·····	219	图227	第2-2b面	遺構出土遺物 3	·····	284
图176	流路1-4域	出土遺物30	·····	220	图228	南微高地	第3-2a層 出土遺物 1	·····	285
图177	流路1-4域	出土遺物31	·····	221	图229	南微高地	第3-2a層 出土遺物 2	·····	286
图178	流路1-4域	出土遺物32	·····	222	图230	南微高地	第3-2a層 出土遺物 3	·····	287
图179	流路1-4域	出土遺物33	·····	223	图231	南微高地	第3-2a層 出土遺物 4	·····	288
图180	流路1-4域	出土遺物34	·····	224	图232	南微高地	第3-2a層 出土遺物 5	·····	289
图181	流路1-4域	出土遺物35	·····	225	图233	南微高地	第3-2a層 出土遺物 6	·····	290
图182	流路1-4域	出土遺物36	·····	226	图234	第 2 面 (第2-3面)	遺構分布图	·····	293~294
图183	流路1-4域	出土遺物37	·····	227					

図235	第2-3面 足跡	295~296
図236	西北低地 第3-1~3-4層出土遺物 1	297
図237	西北低地 第3-1~3-4層出土遺物 2	298
図238	西北低地 第3-1~3-4層出土遺物 3	299
図239	第3-1・3-2層出土石器	300
図240	第2面(第2-4面) 遺構分布図	303~304
図241	土坑82~87 平・断面図	305
図242	木材集中1 平・断面図	306
図243	西低地域第3層出土遺物 1	307
図244	第3-3層出土石器 1	308
図245	第3-3層出土石器 2	309
図246	第3-3層出土石器 3	310
図247	西低地域第3層出土遺物 2	311
図248	西低地域第3層出土遺物 3	312
図249	東低地域第3層出土遺物	313
図250	第3面 遺構分布図	315~316
図251	近世 遺構変遷図	318
図252	近世層出土遺物	320
図253	中世 遺構変遷図	322
図254	東半 第1-2層 出土遺物 1	324
図255	東半 第1-2層 出土遺物 2	325
図256	溝33 平・断面図 出土遺物	326
図257	東半 第1-3~1-5層 出土遺物	327
図258	西半 第1層 出土遺物 1	328
図259	西半 第1層 出土遺物 2	329
図260	西半 第1層 出土遺物 3	330
図261	03-5-5~7トレンチの柱状模式断面図および分析試料採取地点	332
図262	03-5-8~10トレンチの柱状模式断面図および分析試料採取地点	333
図263	2・3・4地点主要珪藻化石群集の層位分布	334
図264	6地点主要珪藻化石群集の層位分布	334
図265	7地点の主要珪藻化石群集の層位分布	335
図266	8地点の主要珪藻化石群集の層位分布	335
図267	9地点の主要珪藻化石群集の層位分布	336
図268	10地点の主要珪藻化石群集の層位分布	336
図269	11地点の主要珪藻化石群集の層位分布	337
図270	14地点の主要珪藻化石群集の層位分布	337
図271	2・3・4地点の花粉化石群集の層位分布	339
図272	7地点の花粉化石群集の層位分布	340
図273	9地点の花粉化石群集の層位分布	340
図274	10地点の花粉化石群集の層位分布	340
図275	14地点の花粉化石群集の層位分布	341
図276	1~4地点の植物珪酸体含量の層位変化	343
図277	03-5-5~7トレンチ15~19地点の機動細胞植物珪酸体含量の層位変化	343
図278	7地点の植物珪酸体含量の層位分布	344
図279	9地点の植物珪酸体含量の層位分布	344
図280	10地点の植物珪酸体含量の層位分布	345
図281	14地点の植物珪酸体含量の層位分布	345
図282	讚良郡条里遺跡(03-5・06-2)における堆積物の累重状況	347

図283	讚良郡条里遺跡03-4・03-5調査区柱状模式断面図	348
図284	7地点の軟X線写真とその解釈図	354
図285	7地点試料および軟X線写真	355
図286	14地点の軟X線写真とその解釈図	358
図287	14地点試料および軟X線写真	359
図288	ウマの部位組成(N=48)	377
図289	第1面動物遺存体分布図	380
図290	居住域構成の比較	383
図291	底部圧痕	385
図292	須恵器ヘラ記号	386
図293	法量分布と容量分布	387
図294	小型壺・小型甕の使用痕観察図	388
図295	中型球胴甕の使用痕観察図	389
図296	長胴甕・長胴系甕の使用痕観察図	390
図297	平底土器の使用痕観察図	391
図298	大型直口壺の使用痕観察図	391
図299	観察資料出土位置図	398
図300	接合方法分類模式図	401

## 挿入表目次

表1	樹種同定結果	366~369
表2	弥生時代中期および弥生時代後期~古墳時代前期の器種別種類構成	370
表3	古墳時代中期~後期の器種別種類構成	371
表4	種名表	376
表5	推定されるウマの大きさ	378
表6	推定されるウマの年齢	379
表7	観察結果一覧表	392~393
表8	把手一覧表	400

## 写真図版目次

### 図版1 遺構

- (1) 調査地遠景 (南西から)
- (2) 調査地遠景 (北西から)

### 図版2 遺構

- (1) 第1面 微高地1 (03-5-5トレンチ 北から)
- (2) 第1面 微高地1 (03-5-5トレンチ 南西から)

### 図版3 遺構

- (1) 第1面 微高地1 (03-5-6トレンチ 南西から)
- (2) 第1面 微高地1 (03-5-6トレンチ 北から)

### 図版4 遺構

- (1) 第1面 微高地1 (03-5-7トレンチ 南から)
- (2) 第1面 微高地1・微低地1 (03-5-7トレンチ 南西から)

### 図版5 遺構

- (1) 第1面 建物1 (南西から)
- (2) 第1面 建物3 (南から)

### 図版6 遺構

- (1) 建物1 柱穴08 (南東から)
- (2) 建物1 柱穴02 (北西から)
- (3) 建物2 柱穴02 (北西から)
- (4) 建物4 柱穴02 (北から)
- (5) 建物3 柱穴11 (西から)
- (6) 建物3 柱穴13 (南から)
- (7) 建物3 柱穴09 (西から)
- (8) 建物3 柱穴01 (北から)

### 図版7 遺構

- (1) 第1面 建物6 (北西から)
- (2) 第1面 建物4 (北から)

### 図版8 遺構

- (1) 第1面 井戸1 全景 (南から)
- (2) 第1面 井戸1 断面 (南から)
- (3) 第1面 井戸1 遺物出土状況 (南から)
- (4) 第1面 井戸1 井戸側 (南から)
- (5) 第1面 井戸1 井戸側曲物外面 (南から)

### 図版9 遺構

- (1) 第1面 土坑3 (北から)
- (2) 第1面 土坑5 (東から)

### 図版10 遺構

- (1) 第1面 土坑7 (東から)
- (2) 第1面 土坑9 (西から)

### 図版11 遺構

- (1) 第1面 土坑42 (南西から)
- (2) 第1面 土坑42 検出状況 (南から)
- (3) 第1面 土坑42 断面 (南西から)
- (4) 第1面 土坑42 遺物出土状況 (南から)
- (5) 第1面 土坑1 (西から)

### 図版12 遺構

- (1) 第1面 微高地1 西縁辺土坑群 (03-5-7トレンチ 南から)
- (2) 第1面 微高地1 西縁辺土坑群 (03-5-5トレンチ 西から)

### 図版13 遺構

- (1) 第1面 土坑16 (南から)
- (2) 第1面 土坑20 (南東から)
- (3) 第1面 土坑17 (南から)
- (4) 第1面 土坑18 (南から)
- (5) 第1面 土坑26 (南から)

### 図版14 遺構

- (1) 第1面 微低地1・2 (03-5-4トレンチ 北から)
- (2) 第1面 微低地1 土器集中1 (北東から)

### 図版15 遺構

- (1) 第1面 微高地2 (03-5-8トレンチ 南から)
- (2) 第1面 微高地2 (03-5-8トレンチ 東から)

### 図版16 遺構

- (1) 第1面 建物7 (北東から)
- (2) 第1面 建物8・9 (南東から)

### 図版17 遺構

- (1) 第1面 建物8 (北西から)
- (2) 第1面 建物7 (北西から)

### 図版18 遺構

- (1) 建物9 柱穴01 (北から)
- (2) 建物9 柱穴01 (南から)
- (3) 建物9 柱穴09 (北西から)
- (4) 建物7 柱穴06 (南西から)
- (5) 建物8 柱穴03 (北西から)
- (6) 建物8 柱穴04 (南東から)
- (7) 建物8 柱穴01 (北西から)
- (8) 建物8 柱穴02 (南東から)

### 図版19 遺構

- (1) 第1面 井戸2 全景 (西から)
- (2) 第1面 井戸2 井戸側 (西から)

### 図版20 遺構

- (1) 第1面 井戸3 全景 (南東から)
- (2) 第1面 井戸3 井戸側 (南東から)

### 図版21 遺構

- (1) 第1面 井戸4 全景 (南東から)
- (2) 第1面 井戸4 井戸側 (南東から)

### 図版22 遺構

- (1) 第1面 ピット148 (南から)
- (2) 第1面 ピット153 (西から)

### 図版23 遺構

- (1) 第1面 微低地3 (03-5-2トレンチ 北東から)
- (2) 第1面 微低地3 (03-5-9トレンチ 南東から)

### 図版24 遺構

- (1) 第1面 井戸5 遺物出土状況 (南から)
- (2) 第1面 井戸5 断面 (南西から)

### 図版25 遺構

- (1) 第1面 土坑55 (南から)
- (2) 第1面 土坑58 (西から)

### 図版26 遺構

- (1) 第1面 土坑58 (南から)
- (2) 第1面 溝9 (南から)

### 図版27 遺構

- (1) 第1面 微高地3 (03-5-2トレンチ 西から)
- (2) 第1面 微高地3 (03-5-10トレンチ 北から)

図版28 遺構

- (1) 第1面 微高地3 (06-2-3トレンチ 東北から)
- (2) 第1面 微高地3 (06-2-3トレンチ 北西から)

図版29 遺構

- (1) 第1面 土坑60(南東から)
- (2) 第1面 土坑60断面(東から)
- (3) 第1面 土坑61(南から)
- (4) 第1面 土坑61断面(南から)
- (5) 第1面 土坑63(南東から)
- (6) 第1面 土坑63断面(南から)
- (7) 第1面 土坑64(北から)
- (8) 第1面 土坑64断面(北東から)

図版30 遺構

- (1) 第1面 土坑65(西から)
- (2) 第1面 土坑65断面(北から)
- (3) 第1面 土坑66(東から)
- (4) 第1面 土坑68断面(北東から)
- (5) 第1面 土坑69断面(東から)
- (6) 第1面 土坑69遺物出土状況(北から)
- (7) 第1面 土坑71断面(北から)
- (8) 第1面 土坑71遺物出土状況(北から)

図版31 遺構

- (1) 第1面 土坑70断面(北から)
- (2) 第1面 土坑72(西から)
- (3) 第1面 土坑72断面(南西から)
- (4) 第1面 土坑72遺物出土状況(南東から)

図版32 遺構

- (1) 第1面 溝12遺物出土状況(南西から)
- (2) 第1面 溝12遺物出土状況(南から)
- (3) 第1面 溝13遺物出土状況(南から)
- (4) 第1面 溝15遺物出土状況(南西から)
- (5) 第1面 微高地4 (06-2-2トレンチ 北から)

図版33 遺構

- (1) 第1面 微高地1 溝群(03-5-6トレンチ 南から)
- (2) 第1面 微高地1 溝群(03-5-5トレンチ 北から)

図版34 遺構

- (1) 第1面 微高地1 溝群(03-5-7トレンチ 東から)
- (2) 第1面 微高地2 溝群(06-2-4トレンチ 西から)

図版35 遺構

- (1) 第1面 流路1(流路1-1域 東から)
- (2) 第1面 流路1(流路1-1域 西から)

図版36 遺構

- (1) 第1面 流路1(流路1-1域 南東から)
- (2) 第1面 流路1断面(流路1-1域 南東から)
- (3) 第1面 流路1遺物出土状況(流路1-1域 北西から)
- (4) 第1面 流路1遺物出土状況(流路1-1域 東から)
- (5) 第1面 流路1遺物出土状況(流路1-1域 北から)

図版37 遺構

- (1) 第1面 流路1(流路1-2域 南西から)
- (2) 第1面 流路1(流路1-2域 北西から)

図版38 遺構

- (1) 第1面 流路1全掘(流路1-2域 南西から)
- (2) 第1面 流路1全掘(流路1-2域 北から)

図版39 遺構

- (1) 第1面 流路1遺物出土状況(流路1-2域 南から)

- (2) 第1面 流路1遺物出土状況(流路1-2域 南東から)
- (3) 第1面 流路1遺物出土状況(流路1-2域 北から)
- (4) 第1面 流路1遺物出土状況(流路1-2域 北から)
- (5) 第1面 流路1遺物出土状況(流路1-2域 北から)
- (6) 第1面 流路1遺物出土状況(流路1-2域 北西から)
- (7) 第1面 流路1遺物出土状況(流路1-2域 北東から)
- (8) 第1面 流路1遺物出土状況(流路1-2域 東から)

図版40 遺構

- (1) 第1面 流路1(流路1-3域 南東から)
- (2) 第1面 流路1内杭列1(流路1-3域 北東から)

図版41 遺構

- (1) 第1面 流路1断面(流路1-3域 南東から)
- (2) 第1面 流路1断面(流路1-3域 南東から)
- (3) 第1面 流路1断面(流路1-3域 南東から)
- (4) 第1面 流路1断面(流路1-3域 南東から)
- (5) 第1面 流路1遺物出土状況(流路1-3域 東から)

図版42 遺構

- (1) 第1面 流路1(流路1-4域 南東から)
- (2) 第1面 流路1(流路1-4域 南から)

図版43 遺構

- (1) 第1面 流路1内杭列2(流路1-4域 南から)
- (2) 第1面 流路1内杭列6(流路1-4域 南から)

図版44 遺構

- (1) 第1面 流路1内杭列4(流路1-4域 南から)
- (2) 第1面 流路1内杭列5(流路1-4域 南から)

図版45 遺構

- (1) 第1面 流路1遺物出土状況(流路1-4域 南から)
- (2) 第1面 流路1遺物出土状況(流路1-4域 南西から)
- (3) 第1面 流路1遺物出土状況(流路1-4域 南から)
- (4) 第1面 流路1遺物出土状況(流路1-4域 東から)
- (5) 第1面 流路1遺物出土状況(流路1-4域 南東から)
- (6) 第1面 流路1遺物出土状況(流路1-4域 北西から)
- (7) 第1面 流路1遺物出土状況(流路1-4域 南西から)
- (8) 第1面 流路1遺物出土状況(流路1-4域 北から)

図版46 遺構

- (1) 第1面 流路2(東から)
- (2) 第1面 流路2断面(東から)
- (3) 第1面 流路2(西から)
- (4) 第1面 流路2遺物出土状況(北から)
- (5) 第1面 流路2遺物出土状況(北西から)

図版47 遺構

- (1) 第2-1面 流路3(南から)
- (2) 第2-1面 流路4(西から)

図版48 遺構

- (1) 第2-1面 流路3内杭列9(南から)
- (2) 第2-1面 流路3内杭列10(北から)

図版49 遺構

- (1) 第2-1面(03-5-2トレンチ 東から)
- (2) 第2-2面(03-5-2トレンチ 東から)

図版50 遺構

- (1) 第2-2面 水田(03-5-2トレンチ 南東から)
- (2) 第2-1面 水田(03-5-1トレンチ 北から)

図版51 遺構

- (1) 第2-2面 水田(03-5-10トレンチ 北から)
- (2) 第2-2面 水田(06-2-3トレンチ 北東から)

図版52 遺構

- (1) 第2-3・2-4面 (03-5-8トレンチ 北東から)
- (2) 第2-3・2-4面 (03-5-9トレンチ 南東から)

図版53 遺構

- (1) 第2-2面 (06-2-2トレンチ 北から)
- (2) 第2-3面 (03-5-2トレンチ 西から)

図版54 遺構

- (1) 第2-4面 (03-5-10トレンチ 北から)
- (2) 第2-4面 水田 (03-5-10トレンチ 北東から)

図版55 遺構

- (1) 第2-4面 (03-5-2トレンチ 北から)
- (2) 第2-4面 (03-5-2トレンチ 東から)

図版56 遺構

- (1) 第2-3面 (03-5-4トレンチ 西から)
- (2) 第2-3面 (03-5-4トレンチ 北から)

図版57 遺構

- (1) 第2-3面 水田 (03-5-4トレンチ 東から)
- (2) 第2-3面 水田 (03-5-4トレンチ 西から)
- (3) 第2-3面 水田面の足跡 (03-5-4トレンチ 南から)
- (4) 第2-3面 溝30 (03-5-4トレンチ 南東から)
- (5) 第2-4面 (03-5-1トレンチ 南東から)

図版58 遺構

- (1) 第2-3面 (03-5-5トレンチ 南西から)
- (2) 第2-3面 (03-5-6トレンチ 南から)

図版59 遺構

- (1) 第2-3面 (03-5-7トレンチ 南西から)
- (2) 第2-4面 (03-5-8トレンチ 北西から)

図版60 遺構

- (1) 第2-4面 木材集中 (03-5-8トレンチ 北から)
- (2) 第2-4面 木材集中 (03-5-8トレンチ 北から)
- (3) 第2-4面 遺物出土状況 (03-5-8トレンチ 南から)
- (4) 第2-4面 遺物出土状況 (03-5-8トレンチ 北から)
- (5) 第2-4面 (03-5-5トレンチ 南から)

図版61 遺構

- (1) 第2-4面 土坑82 (南東から)
- (2) 第2-4面 土坑83 (南から)
- (3) 第2-4面 土坑84 (北西から)
- (4) 第2-4面 土坑85・86 (南西から)
- (5) 第2-4面 土坑87 (南から)

図版62 遺構

- (1) 第3面 (03-5-6トレンチ 南から)
- (2) 第3面 (03-5-7トレンチ 南西から)

図版63 遺構

- (1) 第3面 (03-5-5トレンチ 南西から)
- (2) 第3面 (03-5-4トレンチ 南西から)

図版64 遺構

- (1) 近世面1・第0-1面 (03-5-5トレンチ 南東から)
- (2) 近世面1・第0-1面 (03-5-7トレンチ 南西から)

図版65 遺構

- (1) 近世面2・第0-2面 坪境 (03-5-6トレンチ 南から)
- (2) 近世面2・第0-2面 (03-5-7トレンチ 南西から)

図版66 遺構

- (1) 中世面1・第0-3面 (03-5-6トレンチ 南東から)
- (2) 中世面1・第0-3面 (03-5-7トレンチ 北東から)

図版67 遺構

- (1) 中世面2・第0-4面 溝33 (03-5-7トレンチ 西から)
- (2) 中世面2・第0-4面 溝33遺物出土状況 (03-5-7トレンチ 西南から)

図版68 遺物 3・19・11・12・16・18・20・25

図版69 遺物 8・10・9・13・15

図版70 遺物 17・23・21・26・22・28・31・33・32・30

図版71 遺物 24・29・36・34・27

図版72 遺物 37・35・40・41・42・48・44・45・46・43

図版73 遺物 54・47・74・75・71・63・49・57・50・51  
52・55

図版74 遺物 59・56・60・58・53・61・62・64・65・66

図版75 遺物 67・69・68・76・78・72・77・70・73

図版76 遺物 80・86・88・90・83・85・87・118

図版77 遺物 79・81・82・84・91・92・95・89・93・94

図版78 遺物 96・98・97・99・100・101・103・102・105  
104・106・107・108・109

図版79 遺物 110・111・114・112・113・115・116・119  
120・117・121

図版80 遺物 124・123・125・122・126・127・128・129・  
130・131・132

図版81 遺物 133・145・146・138・137

図版82 遺物 136・148・156・157・139・134・147・165・  
166

図版83 遺物 135・140・141・142・143・144・151・152・  
153・154・155

図版84 遺物 158・159・167・164・168・160・161・162・  
163

図版85 遺物 171・175・177・187・169・170・172・183・  
213

図版86 遺物 198・199・203・204・205・200

図版87 遺物 173・174・176・178・179・180・181・185・  
182・186・184

図版88 遺物 201・202・206・207・208・209・210・211・  
212

図版89 遺物 218・234・219・215・216・217・220・221・  
222・223・224・225

図版90 遺物 226・227・228・229・230・231・233・235

図版91 遺物 232・238・257・236・237・239・240・241・  
242・243・244

図版92 遺物 245・246・247・248・249・250・251・253・  
255・252・254・256

図版93 遺物 258・259・260・261・262・263・264・268・  
269・270・271

図版94 遺物 267・275・276・272・274・277・273・278・  
279

図版95 遺物 280・283・281・286・282・290・292・288・  
289・291・296・293・294・295

図版96 遺物 298・287・299・300・301・302・308・307・  
310・305

図版97 遺物 306・309・303・304・332・330・331・334・  
333

図版98 遺物 312・313・315・318・326・327・324・325・  
328・329

図版99 遺物 314・316・317・319・321・320・322・323

函版100	遺物	335 · 336 · 337 · 338 · 339 · 340 · 344 · 341 · 342 · 343 · 345	函版135	遺物	681 · 682
函版101	遺物	347 · 348 · 350 · 351 · 349 · 352 · 353 · 354	函版136	遺物	677 · 674 · 670 · 679 · 680
函版102	遺物	355 · 356 · 357 · 358 · 361 · 359 · 360 · 365 · 362 · 363 · 364	函版137	遺物	683 · 686 · 688 · 689 · 694 · 697 · 698 · 700 · 703 · 704 · 705
函版103	遺物	346 · 369 · 374 · 375 · 372 · 373 · 404 · 405	函版138	遺物	684 · 685 · 687 · 690 · 692 · 691 · 693
函版104	遺物	366 · 367 · 370 · 368 · 371 · 387 · 388 · 389 · 390 · 391 · 396 · 398 · 399 · 400	函版139	遺物	695 · 701 · 696 · 702 · 699 · 706 · 710 · 713 · 709 · 714
函版105	遺物	401 · 402 · 403 · 407 · 408 · 406 · 409 · 410 · 411 · 412 · 413	函版140	遺物	707 · 708 · 711 · 712 · 715 · 716 · 717 · 718 · 719
函版106	遺物	392 · 393 · 394 · 395 · 397 · 415 · 417 · 418 · 419	函版141	遺物	720 · 721 · 722 · 723 · 724 · 725 · 726 · 736
函版107	遺物	425 · 423 · 424 · 429	函版142	遺物	727 · 728 · 729 · 730 · 731 · 732 · 733 · 734 · 735 · 738
函版108	遺物	426 · 427 · 428	函版143	遺物	739 · 743 · 746
函版109	遺物	430 · 420 · 421 · 416 · 422	函版144	遺物	737 · 768 · 782 · 791 · 767
函版110	遺物	432 · 433 · 436 · 438 · 441 · 442 · 450	函版145	遺物	742 · 740 · 745 · 744 · 741 · 747 · 751 · 752 · 748 · 750 · 749
函版111	遺物	431 · 439 · 440 · 434 · 437 · 435 · 447 · 448 · 443 · 444 · 449 · 455 · 456 · 458	函版146	遺物	766 · 770 · 771 · 769 · 772 · 773 · 774 · 775 · 776 · 777 · 778 · 779 · 780
函版112	遺物	451 · 452 · 453 · 454 · 457 · 445 · 446	函版147	遺物	783 · 784 · 785 · 786 · 787 · 788 · 789 · 790
函版113	遺物	459 · 461 · 462 · 465 · 466 · 468 · 469 · 471 · 472 · 473	函版148	遺物	794 · 795 · 796 · 803 · 798 · 799 · 800
函版114	遺物	460 · 470 · 464 · 467 · 463 · 474 · 475 · 476 · 477 · 478 · 480 · 479 · 481 · 482 · 483	函版149	遺物	807 · 805 · 810
函版115	遺物	474 · 494 · 495 · 496 · 500 · 503 · 504 · 505 · 511	函版150	遺物	797 · 801 · 802 · 804 · 806 · 808 · 809 · 814 · 821 · 823 · 826 · 827
函版116	遺物	499 · 498 · 497 · 501 · 502 · 506 · 507 · 508 · 509 · 510	函版151	遺物	811 · 812 · 815 · 816 · 813 · 817 · 818 · 819
函版117	遺物	515 · 527 · 528 · 529 · 530 · 531 · 533 · 535	函版152	遺物	820 · 822 · 824 · 825 · 828 · 829 · 830 · 831
函版118	遺物	512 · 513 · 514 · 516 · 522 · 526 · 525 · 523 · 524	函版153	遺物	833 · 835 · 838 · 839 · 841 · 847 · 849 · 855 · 859
函版119	遺物	517 · 518 · 519 · 520 · 521 · 534 · 540 · 536 · 532 · 541 · 537 · 542	函版154	遺物	843 · 844 · 851
函版120	遺物	538 · 539 · 543 · 545 · 549 · 551 · 554 · 555	函版155	遺物	832 · 834 · 836 · 837 · 840 · 842 · 845 · 846 · 848 · 850
函版121	遺物	557 · 561 · 563 · 565 · 566 · 567 · 568 · 569	函版156	遺物	852 · 853 · 854 · 856 · 857 · 858 · 859 · 860 · 861 · 862 · 863
函版122	遺物	570 · 571 · 575 · 586 · 574	函版157	遺物	864 · 865 · 866 · 868 · 870
函版123	遺物	544 · 548 · 546 · 550 · 547 · 552 · 553 · 556 · 558 · 559 · 560 · 562 · 564	函版158	遺物	869 · 871 · 874 · 876 · 877 · 878 · 879 · 880 · 883
函版124	遺物	587 · 572 · 573 · 579 · 583 · 580 · 576 · 581 · 577 · 578 · 582	函版159	遺物	867 · 881 · 882 · 875 · 889 · 884
函版125	遺物	600 · 601 · 588 · 589 · 585 · 590 · 591 · 592 · 593	函版160	遺物	885 · 886 · 888 · 893 · 894 · 895 · 896 · 897
函版126	遺物	594 · 598 · 596 · 597 · 595 · 599 · 603 · 605	函版161	遺物	890 · 891 · 892 · 906 · 887
函版127	遺物	602 · 607 · 604 · 606 · 609 · 614 · 610 · 611 · 615	函版162	遺物	900 · 901 · 910 · 913 · 909 · 911 · 914
函版128	遺物	612 · 617 · 620 · 616 · 618 · 621 · 625 · 627	函版163	遺物	902 · 903 · 904 · 905 · 907 · 908 · 912 · 915 · 916 · 917 · 918
函版129	遺物	608 · 613 · 619 · 622 · 623 · 624 · 626 · 636 · 637	函版164	遺物	920 · 922 · 926 · 928 · 929 · 933 · 934 · 937 · 938 · 943 · 944
函版130	遺物	628 · 629 · 630 · 632 · 633 · 638 · 634 · 631 · 635	函版165	遺物	919 · 921 · 923 · 924 · 925 · 927 · 931 · 930 · 932 · 936
函版131	遺物	639 · 640 · 641 · 650 · 655 · 656 · 665	函版166	遺物	930 · 952 · 953 · 954 · 947 · 955 · 960
函版132	遺物	642 · 644 · 643 · 645 · 646 · 647 · 648 · 649 · 651 · 652 · 653 · 654	函版167	遺物	935 · 939 · 940 · 941 · 942 · 945 · 946 · 948 · 949 · 950 · 951
函版133	遺物	657 · 658 · 659 · 660 · 661 · 662 · 663 · 664 · 672 · 675	函版168	遺物	957 · 958 · 959 · 961 · 966 · 969 · 973 · 978 · 981 · 992
函版134	遺物	666 · 667 · 668 · 669 · 671 · 673 · 676 · 678 ·	函版169	遺物	956 · 962 · 963 · 964 · 965 · 967 · 968
			函版170	遺物	976 · 975 · 989 · 970 · 971 · 974 · 972
					977 · 979 · 982 · 983 · 984 · 980 · 987 · 986 · 988 · 985 · 990 · 991 · 993 · 994 · 995 · 996



函版171	遺物	997 · 998 · 999 · 1001 · 1002 · 1003 · 1004 · 1005 · 1010 · 1011 · 1012 · 1014	函版196	遺物	1260 · 1262 · 1263 · 1264 · 1265 · 1266 · 1269 · 1267 · 1270 · 1273 · 1277
函版172	遺物	1015 · 1021 · 1022 · 1023 · 1027 · 1030 · 1031 · 1032 · 1033 · 1034	函版197	遺物	1275 · 1276 · 1280 · 1282 · 1283 · 1278 · 1284 · 1285 · 1286
函版173	遺物	1000 · 1006 · 1007 · 1008 · 1009 · 1013 · 1016 · 1017 · 1018 · 1019 · 1020 · 1024 · 1025 · 1026 · 1028 · 1029	函版198	遺物	1287 · 1288 · 1290 · 1291 · 1292 · 1294 · 1295 · 1296 · 1297
函版174	遺物	1035 · 1036 · 1038 · 1042 · 1043 · 1045 · 1046 · 1047 · 1048	函版199	遺物	1279 · 1281 · 1289 · 1293 · 1299 · 1302 · 1303
函版175	遺物	1037 · 1039 · 1040 · 1041 · 1044 · 1050 · 1051 · 1053 · 1054 · 1056 · 1058 · 1063 · 1065 · 1066	函版200	遺物	1298 · 1300 · 1301 · 1304 · 1306 · 1307 · 1308 · 1310
函版176	遺物	1049 · 1052 · 1055 · 1057 · 1059 · 1060 · 1061 · 1062 · 1064	函版201	遺物	1311 · 1312 · 1313 · 1317 · 1305 · 1309 · 1318 · 1321 · 1319 · 1320
函版177	遺物	1069 · 1075 · 1079 · 1082 · 1087 · 1089 · 1097 · 1099	函版202	遺物	1314 · 1315 · 1316
函版178	遺物	1067 · 1068 · 1070 · 1076 · 1071 · 1072 · 1073 · 1074 · 1078 · 1077	函版203	遺物	1322 · 1324 · 1327 · 1329 · 1333 · 1331 · 1334 · 1338 · 1341 · 1343 · 1344
函版179	遺物	1080 · 1081 · 1083 · 1084 · 1085 · 1086 · 1088 · 1091 · 1096 · 1090 · 1092 · 1098	函版204	遺物	1323 · 1325 · 1326 · 1328 · 1330 · 1332 · 1335 · 1336
函版180	遺物	1093 · 1094 · 1095 · 1100	函版205	遺物	1337 · 1339 · 1340 · 1342 · 1346 · 1345
函版181	遺物	1104 · 1105	函版206	遺物	1346 · 1347 · 1348 · 1349
函版182	遺物	1101 · 1102 · 1103 · 1107 · 1108 · 1109 · 1110 · 1111 · 1112	函版207	遺物	1350 · 1351 · 1353 · 1354 · 1355 · 1356 · 1358 · 1361 · 1362
函版183	遺物	1106 · 1115 · 1113 · 1116 · 1114 · 1120	函版208	遺物	1352 · 1357 · 1359 · 1360 · 1363 · 1365 · 1366 · 1367 · 1364 · 1368
函版184	遺物	1125 · 1135 · 1142 · 1157 · 1160 · 1154 · 1156 · 1133 · 1187	函版209	遺物	1369 · 1373 · 1377 · 1379 · 1388 · 1451 · 1455
函版185	遺物	1117 · 1118 · 1119 · 1121 · 1122 · 1123 · 1124 · 1126 · 1127 · 1129 · 1128 · 1130 · 1131	函版210	遺物	1370 · 1371 · 1372 · 1374 · 1375 · 1376 · 1378 · 1382 · 1380 · 1381 · 1383 · 1386 · 1387 · 1384 · 1385 · 1389
函版186	遺物	1132 · 1133 · 1134 · 1136 · 1137 · 1138 · 1139 · 1140 · 1141 · 1143 · 1158	函版211	遺物	1391 · 1390 · 1392 · 1393 · 1394 · 1395 · 1396 · 1397
函版187	遺物	1144 · 1145 · 1146 · 1147 · 1148 · 1149 · 1150 · 1151 · 1152 · 1153 · 1155 · 1161 · 1159	函版212	遺物	1398 · 1399
函版188	遺物	1162 · 1163 · 1164 · 1165 · 1166 · 1167 · 1168 · 1169 · 1170 · 1174 · 1171 · 1172 · 1173	函版213	遺物	1400 · 1401 · 1402 · 1403 · 1404 · 1405 · 1406 · 1407 · 3017 · 1408
函版189	遺物	1175 · 1176 · 1180 · 1177 · 1178 · 1179 · 1181 · 1182 · 1183 · 1185 · 1186 · 1193 · 1194	函版214	遺物	1409 · 1410 · 1411 · 1412 · 1413 · 1414 · 1415 · 1416 · 1417 · 1418 · 1419 · 1420 · 1421 · 1422
函版190	遺物	1184	函版215	遺物	1423 · 1424 · 1425 · 1426 · 1427 · 1428 · 1429 · 1430 · 1431 · 1432 · 1433 · 1434 · 1435 · 1436 · 1437 · 1438
函版191	遺物	1188 · 1189 · 1190 · 1191 · 1192 · 1195 · 1196 · 1197 · 1198 · 1199 · 1200 · 1201 · 1202 · 1203 · 1204 · 1205 · 1206 · 1207 · 1208 · 1209 · 1210 · 1211 · 1212 · 1213 · 1214 · 1215 · 1216	函版216	遺物	1439 · 1440 · 1441 · 1442 · 1443 · 1444 · 1445 · 1446 · 1452 · 1447 · 1448 · 1450
函版192	遺物	1217 · 1218 · 1221 · 1225 · 1226 · 1228 · 1234 · 1235 · 1236 · 1240 · 1241 · 1242	函版217	遺物	1449 · 1454 · 1453 · 1456 · 1457
函版193	遺物	1244 · 1251 · 1252 · 1253 · 1256 · 1257 · 1259 · 1261 · 1268 · 1271 · 1272 · 1274	函版218	遺物	1458 · 1460 · 1459 · 1461 · 1462 · 1463 · 1464 · 1465 · 1466
函版194	遺物	1219 · 1220 · 1222 · 1223 · 1224 · 1227 · 1229 · 1230 · 1231 · 1232 · 1233 · 1237	函版219	遺物	1467 · 1468 · 1469 · 1470 · 1471 · 1472 · 1473 · 1474 · 1475 · 1476 · 1477
函版195	遺物	1238 · 1239 · 1245 · 1243 · 1246 · 1247 · 1248 · 1249 · 1254 · 1250 · 1255 · 1258	函版220	遺物	1478 · 1479 · 1480 · 1481 · 1482 · 1483 · 1484 · 1485 · 1486 · 1487 · 1488 · 1489 · 1490 · 1491 · 1492
			函版221	遺物	1493 · 1494 · 1495 · 1496 · 1497 · 1498 · 1499
			函版222	遺物	1500 · 1501 · 1502 · 1503 · 1504 · 1505 · 1507 · 1509 · 1506 · 1510 · 1508
			函版223	遺物	1512 · 1513 · 1514 · 1515 · 1516 · 1517 · 1518 · 1519 · 1521 · 1524 · 1525 · 1529

図版224	遺物	1511・1520・1522・1523・1526・1530・ 1531・1532・1533・1534・1535・1536	1881・1884・1885
図版225	遺物	1527・1528・1537・1538・1539	図版247 遺物 1870・1875・1882・1896・1897・1901・ 1883・1903・1904・1905
図版226	遺物	1625・1626・1632・1640・1641・1642・ 1643・1644・1650	図版248 遺物 1899・1898・1900・1894・1895・1902・ 1904・1906・1907・1908・1909・1910・ 1911
図版227	遺物	1616・1617・1618・1619・1620・1621・ 1622・1623・1624・1627・1628・1629・ 1630・1631・1633・1634・1635・1636・ 1637・1638	図版249 遺物 1912・1913・1914・1916・1915・1919・ 1917・1918・1920・1921・1922・1923
図版228	遺物	1639・1645・1646・1647・1648・1649・ 1651・1652	図版250 遺物 1930・1936・1939・1954・1924・1925・ 1926・1927
図版229	遺物	1654・1656・1657・1658・1659・1660・ 1661・1662・1665・1664・1663・1666	図版251 遺物 1932・1933・1928・1929・1934・1931・ 1935・1937・1940・1942・1941・1944・ 1938・1943・1945
図版230	遺物	1653・1655・1669・1671・1672	図版252 遺物 1964・1965・1967・1969・1972・1973・ 1974・2016・2036
図版231	遺物	1674・1677・1678・1681・1682・1683・ 1684・1685	図版253 遺物 1955・1956・1957・1958・1959・1961・ 1960・1962・1963・1966・1967・1968・ 1970・1971・1975
図版232	遺物	1670・1675・1673・1679・1676・1680	図版254 遺物 2015・2017・2018・2021・2019・2020・ 2022・2023・2024・2025・2026・2027・ 2028・2029・2030・2031・2032・2033・ 2034・2035
図版233	遺物	1688・1693・1696・1697・1699・1701・ 1702・1704	図版255 遺物 2037・2038・2039・2040・2041・2042・ 2043・2044・2047・2048・2049・2050・ 2051
図版234	遺物	1695・1708・1687・1689・1891・1686・ 1690	図版256 遺物 2056・2063・2065・2069・2073・2070・ 2077・2088・2094
図版235	遺物	1692・1698・1700・1694・1703・1706・ 1705・1709・1707	図版257 遺物 2057・2058・2059・2060・2061・2062・ 2064・2066・2067・2068・2071・2072・ 2075・2076・2078・2079
図版236	遺物	1718・1721・1722・1726・1727・1732・ 1733・1734	図版258 遺物 2082・2083・2084・2085・2086・2087・ 2091・2092・2090・2089・2093・2095・ 2096・2097・2098・2099・2100・2104・ 2105
図版237	遺物	1715・1717・1720・1716・1719・1723・ 1724・1729・1730・1725・1731・1728・ 1735	図版259 遺物 2102・2103・2101・2106・2107・2108・ 2109
図版238	遺物	1744・1745・1750・1759・1749・1765・ 1775・1776	図版260 遺物 2112・2111・2074・2081・2080・2110
図版239	遺物	1739・1740・1741・1742・1743・1746・ 1747・1748・1751・1753・1755・1756・ 1754・1757・1752・1758	図版261 遺物 2046・781・2045・898
図版240	遺物	1760・1761・1762・1764・1766・1763・ 1767・1768・1769・1770・1771・1772・ 1773・1774	図版262 遺物 1542・1540・899・584・1544・1668・ 1545
図版241	遺物	1777・1779・1782・1783・1792・1795・ 1819・1866・1868・1869	図版263 遺物 1543・1541
図版242	遺物	1780・1781・1784・1785・1786・1787・ 1788・1789・1790・1791・1793・1794・ 1796・1797・1798・1799・1800・1801	図版264 遺物 1546・1547・1548・1555・1554・1553・ 484・377・2117・2121・1556・378・2118・ 2119・2122・1557・379・2120・2123
図版243	遺物	1802・1803・1804・1805・1806・1807・ 1808・1809・1810・1811・1812・1813・ 1814・1815・1816・1817・1818・1819・ 1820・1821・1822・1823・1824・1825・ 1826・1827・1828	図版265 遺物 266・285・1549・1550・1551・380・381・ 1552・2115・382・265・1888
図版244	遺物	1829・1830・1831・1832・1833・1834・ 1835・1836・1837・1838・1839・1840・ 1841・1842・1843・1844・1845・1846・ 1847・1848・1849・1850・1851・1852・ 1853	図版266 遺物 2124~2523
図版245	遺物	1854・1855・1856・1857・1858・1859・ 1861・1863・1860・1862	図版267 遺物 2524~2902
図版246	遺物	1864・1865・1867・1871・1872・1873・ 1874・1876・1878・1877・1879・1880・	図版268 遺物 1584・1979・1950・150・1985・1978・ 384・385
			図版269 遺物 386・1980・1889・1948・1946・1738・ 1947・1585・2055・39・1981
			図版270 遺物 1983・2054・1984・1951・297
			図版271 遺物 1949・1982・1586・1890・284
			図版272 遺物 414・1587・1992・1995

函版273	遺物	1886 · 1977 · 1976 · 1887 · 2903	1997
函版274	遺物	149 · 1558 · 2052 · 1667 · 2116 · 793 · 1559 · 1560	函版314 遺物 2010 · 2014 · 2002 · 1999
函版275	遺物	1561	函版315 遺物 2114 · 2113 · 311
函版276	遺物	1 · 2053 · 1571 · 757	函版316 遺物 1611 · 1612 · 1613 · 1614 · 1615
函版277	遺物	2904 · 1566 · 1567	函版317 遺物 2001 · 2013 · 1998
函版278	遺物	376 · 1569 · 2905 · 1568 · 1563 · 1564 · 1565 · 2906	函版318 遺物 3003 · 3004 · 3005 · 3006 · 3007 · 3008 · 3009 · 3010
函版279	遺物	754 · 2907 · 2908 · 1893 · 2909 · 2910	函版319 遺物 3011 · 3012 · 3013
函版280	遺物	2911 · 2912 · 2913 · 2914 · 2915 · 2916 · 2917 · 2918	函版320 遺物 3014 · 3015 · 3016 · 3018 · 3019
函版281	遺物	383 · 1583	
函版282	遺物	756 · 1581	
函版283	遺物	1714 · 1582 · 1580	
函版284	遺物	214 · 792	
函版285	遺物	485 · 1572 · 1737 · 1570	
函版286	遺物	1736 · 1891 · 1579 · 1573 · 1892	
函版287	遺物	1712 · 1778	
函版288	遺物	1578 · 873 · 1711 · 755 · 753	
函版289	遺物	1577 · 1574 · 1562 · 1713 · 1576 · 2919 · 2920 · 2921 · 2922 · 2923	
函版290	遺物	38 · 1952 · 1953 · 1993 · 1987 · 1990 · 1989 · 1988 · 1986 · 1991 · 1994 · 2924 · 2925 · 2926 · 2927 · 2928 · 2929 · 2930 · 2931 · 2932 · 2933 · 2934 · 2935 · 2936 · 2937 · 2938	
函版291	遺物	2939 · 2940 · 2941 · 2942 · 2943 · 2944 · 2945 · 2946 · 2947 · 2948 · 2949 · 2950 · 2951 · 2952 · 2953 · 2954 · 2955 · 2956 · 2957 · 2958 · 2959 · 2960 · 2961 · 2962 · 2963 · 2964 · 2965 · 2966 · 2967 · 2968	
函版292	遺物	1710 · 1575 · 2969 · 2970 · 2971 · 2972 · 2973 · 2974 · 2975 · 2976 · 2977 · 2978	
函版293	遺物	2979 · 2980 · 2981 · 2982 · 2983 · 2984	
函版294	遺物	2985 · 2986 · 2987 · 2988 · 2989 · 2990 · 2991	
函版295	遺物	2992 · 2993 · 2994 · 2995	
函版296	遺物	2 · 7 · 14 · 4 · 5 · 6	
函版297	遺物	486 · 489 · 490	
函版298	遺物	493 · 487	
函版299	遺物	492 · 491 · 488	
函版300	遺物	760	
函版301	遺物	761 · 762 · 759 · 763	
函版302	遺物	758 · 872 · 1605 · 1593 · 1592 · 1604	
函版303	遺物	765 · 1609 · 764	
函版304	遺物	1588 · 1597 · 1589 · 1610	
函版305	遺物	1601 · 1602 · 1590 · 1603	
函版306	遺物	1606 · 1595 · 1594	
函版307	遺物	1598 · 1599 · 1600 · 1596 · 1591	
函版308	遺物	1607 · 1608	
函版309	遺物	188 · 189 · 190 · 191	
函版310	遺物	192 · 193 · 194 · 195 · 196 · 197	
函版311	遺物	2003 · 2011 · 2012	
函版312	遺物	2000 · 2004	
函版313	遺物	2005 · 2006 · 2007 · 2008 · 2009 · 1996 ·	

# 第1章 調査に至る経緯と調査の経過

## 第1節 調査に至る経緯

大阪府北部地域と京都府南部地域を結ぶ交通は、古来より主要な幹線経路のひとつであったが、物流の根幹を自動車輸送が担う現代社会においては、既設の道路は渋滞が慢性化し、効率的な物流を妨げていた。国ならびに日本道路公団（現・西日本高速道路株式会社）はその対策の一部として、第二京阪道路の新設などの事業を計画し、推進している。新設される第二京阪道路計画路線内には周知の埋蔵文化財包蔵地が多数含まれており、その取り扱いについては事業者である国土交通省、日本道路公団と、工事の届出を受けた大阪府教育委員会の間で協議が進められ、建設工事に先立つ埋蔵文化財の確認調査ならびに発掘調査実施の指示がなされることとなった。この指示に従い、平成8年度に実施した門真市三ツ島遺跡の確認調査以降、財団法人大阪府文化財センターが順次、発掘調査を実施している。

本書報告範囲を含む、讃良郡条里遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地であり、平成12年度から平成14年度にかけて確認調査を実施した。おおむね路線全域において遺構、遺物の広がり確認されるという結果を受け、遺跡範囲北東側より順次、全面調査に着手することとなった。本書において報告する讃良郡条里遺跡03-5・06-2調査については、平成13年度に実施された確認調査（確認その2・その3）の結果を受けて、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所を事業者とし、平成15年度から平成17年度の3箇年度にわたる全面調査を03-5調査として実施することとなった。また当初の予定範囲内でありながら、その間に調査に着手できなかった部分については、06-2調査として平成18年度に実施することとなった。

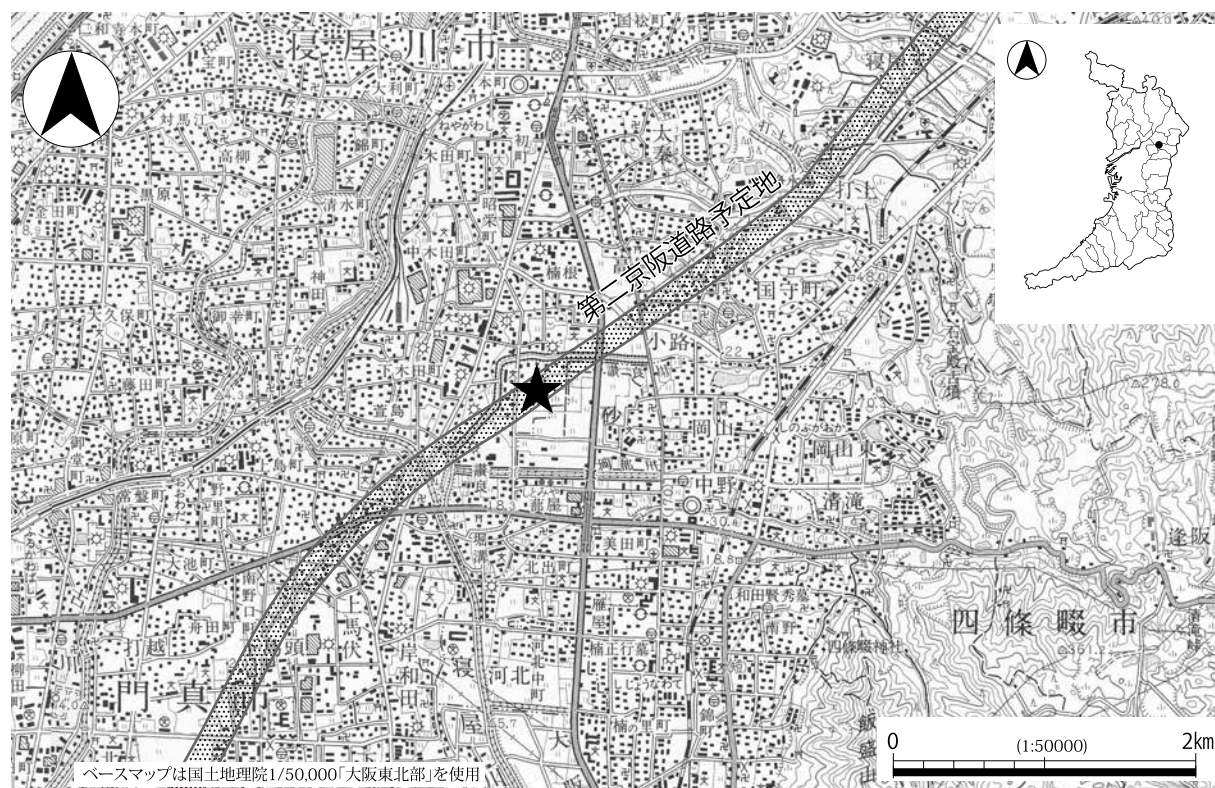


図1 調査地の位置

## 第2節 調査の経過

現地での発掘調査は、平成15年4月1日から平成19年3月31日にわたる4本の受託契約において実施し、平成17年度からは平成18年度には遺物整理事業も一部並行して実施した。平成19年4月1日から平成20年3月31日にわたる受託契約においては、遺物整理事業と報告書作成事業を実施した。また平成20年4月1日から平成21年3月31日にわたる受託契約において、印刷・製本を含む報告書作成業務を継続し、平成21年3月、本書の刊行をもって、讃良郡条里遺跡03-5・06-2調査にかかわる一連の業務を完了した。

今回の讃良郡条里遺跡03-5・06-2調査は4年間にわたる長期のものとなった。ここでは各年度の経過を簡単に記載しておきたい。

03-5調査は当初、平成15年度から平成17年度にわたる期間を予定し、調査範囲全体を10ヶ所の調査区に分割し、順次調査を進めることとした。

平成15年度は1～3トレンチの調査を実施した。1トレンチは平成15年8月21日、機械掘削に着手、平成16年1月21日、調査を終了した。2トレンチは平成15年12月9日、機械掘削に着手、平成16年4月14日、調査を終了した。3トレンチは平成15年11月4日、機械掘削に着手、12月26日、調査を終了した。

平成16年度は4～7トレンチの調査を実施した。4トレンチは平成16年3月26日、機械掘削に着手、8月5日、調査を終了した。5トレンチは平成16年7月12日、機械掘削に着手、11月30日、調査を終了した。7トレンチは平成16年9月15日、機械掘削に着手、平成16年3月1日、調査を終了した。6トレンチは平成16年12月10日、機械掘削に着手、平成17年4月25日、調査を終了した。

平成17年度は8～10トレンチの調査を実施した。9トレンチは平成17年3月25日、機械掘削に着手、7月27日、調査を終了した。8トレンチは平成17年4月14日、機械掘削に着手、8月3日、調査を終了した。10トレンチは平成17年6月29日、機械掘削に着手、9月26日、調査を終了した。

03-5調査においては諸処の要因により未調査の範囲がのこされたが、平成18年度に道路本体工事と併行して、06-2調査としてこれらの範囲についての調査を実施した。4ヶ所の調査区を設定したが、本体工事との調整の結果、断続的な調査となった。1トレンチは平成18年9月11日、機械掘削に着手、10月26日、調査を終了した。2トレンチは平成18年8月30日、機械掘削に着手、10月26日、調査を終了した。3トレンチは平成18年11月20日、機械掘削に着手、12月27日、調査を終了した。4トレンチは平成19年1月15日、機械掘削に着手、2月21日、調査を終了した。

調査期間中には現地公開などを実施しえなかったが、調査終了後の平成17年10月15日に開催された讃良郡条里遺跡03-4・03-6調査の現地公開に際し、出土遺物の展示を現地にて行った。また同年11月19日から11月23日の期間、寝屋川市民会館を会場に開催した「北河内発掘！緑立つ道に歴史わきたつ 第二京阪道路内遺跡の発掘調査成果展」において、調査写真や出土遺物多数を展示し、調査成果の公開と普及に努めた。

現地調査終了後、平成17年10月から平成18年3月までの間、調査資料、出土遺物の基礎整理作業を京阪調査事務所整理棟において実施した。平成18年度は06-2調査と並行して、遺物整理作業を進め、平成19～20年度は京阪調査事務所整理棟より名称が変更となった京阪調査事務所寝屋川分室において、遺物整理作業と報告書作成作業を実施した。平成20年9月末日をもって作成作業、資料収納作業を終了し、報告書の印刷・製本を行った。



## 第2章 讃良郡条里遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

大阪府埋蔵文化財分布図に記された讃良郡条里遺跡の範囲は、現地表面に条里型地割が良好に残存する、南北2.5km、東西1.5kmにわたる広大なもので、大阪府寝屋川市から四條畷市にかけて所在する。広い遺跡範囲の中には多くの字名を有するが、本書において報告する、讃良郡条里遺跡03-5・06-2調査地は寝屋川市新家に所在する。讃良郡条里遺跡の範囲内では南西寄りに位置することとなる。

讃良郡条里遺跡の地形環境については既刊の報告書において詳述されているので（井上2008）、一部を引用し、03-5・06-2調査地の地形環境を概観しておきたい。讃良郡条里遺跡の範囲には、遺跡東寄りの沖積扇状地面から遺跡西寄りの後背湿地といった多様な地形がみられるが、03-5・06-2調査地はほぼ全域が後背湿地域に含まれている。現地表面の標高はT.P.+3m前後を測り、遺跡範囲内でも最も標高の低い部分といえる。現代の盛土がなされたところ以外では、ほぼ水田として利用されており、近接して小面積ではあるが蓮根畑も残されている。調査地の東方は03-4調査区付近から扇状地地形となり、北側には讃良川によって形成されたと考えられる高まり、南側には岡部川によって形成された高まりがあり、それらに囲まれた低い部分に位置している。南北両河川により形成されたと考えられる高まりは「新期の扇状地ロープ・自然堤防」とされており、讃良川のもの中世末～近世始め以降に、岡部川のもは平安時代末頃を始まりとし、中世末～近世に形成されたものと考えられている。調査範囲においても、讃良川により形成された自然堤防を構成すると思われる堆積層が認められ、北東寄りに厚く、南西寄りに薄い砂層を確認した。この砂層以下、およそ中世に帰属すると考えられる層準においても泥質の層が厚くみられ、後背湿地という地形環境は少なくとも中世にまでさかのぼるものと推測する。

調査中においてもたびたび経験することとなったが、降雨による冠水後の復旧に苦慮するような状況が、中世以降の土地利用にも大きな制約となっていたものと推測する。

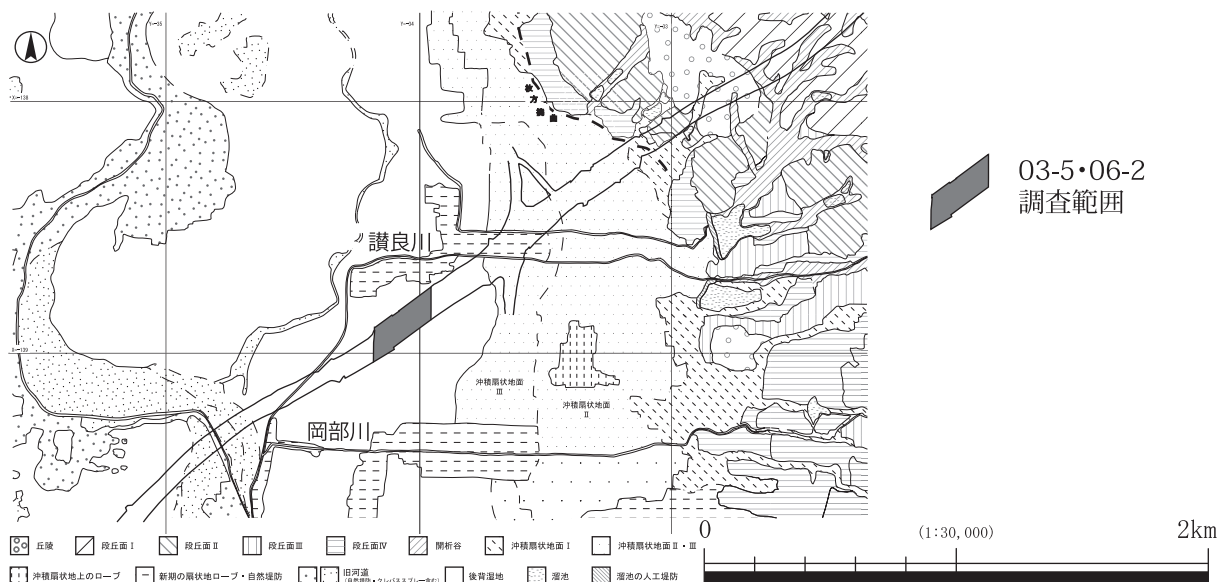


図2 地形分類図（井上2008 図6 を縮小・加筆）

## 第2節 歴史的環境

讃良郡条里遺跡の位置する北河内地域では近年、大規模開発による埋蔵文化財の発掘調査事例も増加し、とりわけ第二京阪道路の建設に伴う事前調査により各時代の多様な調査成果が蓄積されつつある。それ以前の調査事例も含めた周辺地域の歴史環境については、第二京阪道路関連の発掘調査報告書において詳細に整理されているので（市本2006など）、逐一繰り返すことは避け、今回の調査地における中心的な調査成果である古墳時代の様相を中心に整理しておきたい。

古墳時代前期の集落遺構についてはいまだ様相の不明な部分が多い。弥生時代中期段階の寝屋川市高宮八丁遺跡や四條畷市雁屋遺跡のような拠点的な集落は認められず、讃良郡条里遺跡03-1調査において確認された竪穴建物、掘立柱建物、井戸などを小規模な溝で区画する居住域といった単位が散在する可



図3 周辺遺跡分布図



能性がある。近接する小路遺跡において前方後方形のものを含む周溝墓群が調査されており関連も想起されるが、一方で全長87mという規模の前方後円墳である四條畷市忍ヶ丘古墳も築造されており、その被葬者の居住域にふさわしい中心的な集落については今のところ候補を見出すことができない。

古墳時代中期には集落の形成は活況を呈するようになる。高宮遺跡では丘陵の斜面から竪穴建物が29棟検出され、斜面地を造成することで居住域を確保した様相が認められる。方形のプランをとり、竈を有する建物が大半を占める。出土遺物については現在整理作業中であるが、韓式系土器や初期須恵器、鉄鋌といった特徴的な遺物がみられるようである。詳細な時期の比較はなしえないが、同じ頃かやや後れて四條畷市葦屋北遺跡、長保寺遺跡、楠遺跡といった、低地部においても集落の形成が始まるようである。葦屋北遺跡については今回の調査地との関係が深いと考えられるので、項を別けて整理したい。長保寺遺跡では規模の大きい流路に接して居住域が形成されたようで、井戸側に準構造船の部材や倉庫の扉板といった転用材を用いる井戸が確認されている。また移動式竈やU字形板状土製品、韓式系土器、ウマ遺体といったような特徴的な遺物を含む、多量の遺物が流路内に投棄されている。倉庫の扉に関してはやはり井戸側に使用された例であるが、大東市北新町遺跡において建具一式を伴う出土例がある。ウマに関しては四條畷市域の扇状地上からも多くの遺構、遺物の出土をみる。古墳時代中期の中野遺跡、鎌田遺跡、岡山南遺跡、中期から後期にかけての奈良井遺跡などがよく知られている。ウマ遺体の出土状態としては、流路、溝などに投棄されたようなものもあれば、井戸や祭祀場と目される周溝状遺構などにおいて祭祀に供されたものもあると考えられる。いずれの遺跡からも製塩土器が多量に出土しており、製塩作業自体も周辺地域で行われた可能性が指摘される。いわゆる首長系譜とされる前方後円墳は前期以降継続しないが、太秦古墳群では初期群集墳と目される一群が調査され、これまでに28基の古墳が確認されている。また近接して直径37m規模の造出付円墳の太秦高塚古墳が築造される。

古墳時代後期には葦屋北遺跡では依然、多くの掘立柱建物が営まれるが、周辺地域での集落の様相は不明瞭となる。低地部分では高宮八丁遺跡や長保寺遺跡なども継続するようであるが、飛鳥時代以降には丘陵上に竪穴建物、掘立柱建物が営まれ、高宮遺跡、大尾遺跡、太秦遺跡、寝屋東遺跡、寝屋南遺跡などにおいて確認されている。後期古墳としては寝屋古墳、四條畷市大上2号墳などが知られるが、極めて散漫な分布を示し、横穴式石室の確認例が極めて少ない地域として認識される。

### 第3節 既往の調査成果と葦屋北遺跡

今回の調査地においては平成13年度に2次にわたる確認調査が実施され、その成果が報告されている(清水2003・黒須2003)。讚良郡条里遺跡(確認その2)①～③調査区と、(確認その3)第①～第③トレンチが今回の調査範囲内に位置している。報告書では確認調査位置の記載と、調査区名称に混乱があるようで、その成果を今回の調査成果と直接対照することは困難であるが、おおよその地形環境の変遷と確認調査担当者による土地利用についての予測を念頭に本調査に臨むこととなった。確認調査の成果からは今回の調査範囲が総じて低湿な堆積環境にあったという点、最下位で確認された縄文海進期の海成層以降の多くの層準が認められる点、その中でも弥生時代と考えられる水田、古墳時代後期の土坑以外には顕著な遺構が認められない点、全体的に遺物の出土量が希薄であるという点が示され、これらに留意することとなった。確認調査は現地表面以下5mまでを対象としたが、上記成果を受け、本調査では現地表面から約2m程度の古墳時代の遺構面、さらにはその下層に存在する弥生時代の遺構面をおおむねの調査対象とする指示がなされた。



確認調査の実施時期と併行して大阪府教育委員会により葦屋北遺跡の調査が進められた。葦屋北遺跡は当初、讃良郡条里遺跡の一部として周知されていたが、調査成果に鑑み、改めて葦屋北遺跡として範囲が設定・周知された。平成12年に実施された確認調査を受け、平成13年度に調査が実施されたH地区は、木製の輪鏡の出土がみられ注目されたが、今回の調査範囲から南に200mの至近に位置する調査区である。その後、なわて水環境保全センター建設に伴う大規模な調査が平成18年度まで続けられ、興味深い調査成果が明らかになりつつある。

現在、正報告書の作成作業中ということであり、既刊の概要報告書により提示された成果を概観するととどまるが、古墳時代中期～後期の遺構面では、集落形成の初期にあたるTK73型式段階には方形周溝状の墳墓と考えられる遺構がみられ、以降、竪穴建物、掘立柱建物、井戸といった居住域を構成する遺構が多数、重なって営まれる。低湿な地形環境であることも反映するが、掘立柱建物には柱根がそのまま残存する形で廃絶されたものが多数みられ、建物の建替えにかかわる具体的な行為を知ることができる。居住域各所に営まれる井戸には井戸側に準構造船の材を転用したものや、井桁状の井戸枠を持つものが含まれ、内部より多数の遺物の出土もみる。また居住域の一角にウマ遺体全身を取めた埋葬土坑があり、各所で出土するウマ遺体とも併せて馬飼集団の居住域という集落の性格を示唆する遺構とされている。集落の西端を画するとされる南北方向の大溝を中心に多量の遺物が出土しているが、馬具（木製鞍・木製輪鏡・鉄製轡）、製塩土器、ウマ遺体といったウマの飼育にかかわる遺物や、製鉄や玉作といった手工業生産にかかわる遺物、初期須恵器や百済系の韓式系土器、竈の付属具たるU字形板状土製品といった、居住集団の出自や集落の機能にかかわる可能性のある遺物などの出土が特徴的である。この大溝が本書において報告する流路1とつながる可能性があるなど、本書における報告内容とも深くかわる様相が多く認められる。一方で5世紀代の重要な調査成果の影に埋もれがちではあるが、6世紀代に帰属する建物遺構、遺物も多くみられることは、6世紀後半まで居住域として活発に利用されていることを示しているが、この点は本書報告内容と異なる様相であり、注目される。これらの調査成果を総合的に捉えることで、周辺地域における古墳時代の様相把握は飛躍的に進むものとおもわれる。



図4 讃良郡条里遺跡(本書報告範囲)と葦屋北遺跡(s=1/10000)

## 第3章 調査の方法

今回の調査および整理作業・報告書作成は、(財)大阪府文化財センター作成の『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』および、その後の追加修正指示に則って実施した。

### 調査単位

本書において報告する範囲は、事業者からの受託事業名称を「讃良郡条里遺跡(6)」とするもので、当初、平成15年度～17年度の期間で実施する予定であった。この調査については調査名として「讃良郡条里遺跡03-5」が付され、調査に当たったが、実際の調査実施に際しては、作業ヤード、残土置場、進入路などの諸条件を勘案して、10箇所単位(トレンチ)に細分し、順次作業を進めることとした。平成15年度には1～3トレンチ、平成16年度には4～7トレンチ、平成17年度には8～10トレンチの調査をそれぞれ実施した。平成17年度の工期末段階で、進入路や代替地の関係で着手承諾が取れなかった範囲などが未調査区として残されたが、この部分の調査を道路本体工事と併行して平成18年度に実施することとなった。この調査については「讃良郡条里遺跡06-2」という調査名が付されたが、やはり現地状況を勘案して4ヶ所のトレンチ(1～4トレンチ)に細分し、調査を進めた。したがって、調査名としては2本、調査区の細分としては14ヶ所の単位を包括することとなった。

### 地区割

全体の調査範囲を世界測地系(測地成果2000)第Ⅵ系国土座標に基づく10m×10mの区画に分割し、原則的にこれを単位として地区呼称、ならびに遺物の取り上げを行った。区画の設定方法については図5に示した。今回の報告範囲においては、第Ⅰ区画は「I 6」、第Ⅱ区画は「15」及び「16」に含まれる(図6)。調査マニュアルには10m×10mの区画である第Ⅳ区画より細かい区画として第Ⅴ区画、第Ⅵ区画の設定方法があるが、今回の調査においては使用していない。

### 遺構名・遺構番号

調査において検出した遺構のうち、遺物の出土をみたもの、個別の記録を作成したものなど、遺構個々の特定が必要となるものについては遺構番号を付した。複数のトレンチを同時に並行して調査する状況が生じたため、遺構番号はトレンチごとの通し番号とした。この結果、流路など複数のトレンチにまたがる遺構については、同一の遺構でありながら、トレンチごとに異なる遺構番号が付される状況も生じた。このような状況も勘案し、本書における報告に際しては、遺構種別ごとに番号を付け直すこととした。本書における遺構名称・番号と調査時の遺構番号との対応は、本書巻末に掲載する遺構一覧表において示すこととした。

### 掘削

確認調査の成果を受け、本調査に着手することとなったが、厳密な遺構面の評価がなされている状況ではなかったため、調査の進捗に併せて機械掘削、ならびに人力掘削の深度を変更した。機械掘削については、現代の盛土・作土以下、調査範囲西半分では中世段階と想定される層までを対象としたが、ト

レンチごとに細部は異なる。調査範囲東半分では中世段階以降の遺構面が確認される部分においては近世の層までを対象とした。いずれも重機を用いて慎重に掘削をおこなった。人力掘削深度についてはトレンチごとに大阪府教育委員会の立会い指導を受け、その指示に従った。03-5-1トレンチ（以下、トレンチを省略）においては西半分を第2-4面まで、東半分を第2-2面までを調査の対象とした。03-5-2では第2-4面、03-5-3では第1面流路1の埋土途中までを対象とした。03-5-4～03-5-8では第3面までを対象とした。03-5-9においては第2-2面までを対象とした。03-5-10では第2-4面までを対象とした。06-2-1～06-2-2では第2-1面まで、06-2-3では第2-2面まで、06-2-4では第1面までを掘削の対象とした。なお、今回の調査においては鋼矢板などの土留め工を行えなかったため、調査時における安全確保の観点から、調査区周囲ならびの個々のトレンチの壁面を、高さ1に対して幅2の割合の勾配をとって掘削した。その掘りしる部分については未掘削のまま残されたか、あるいは不十分な調査となった。また同様の理由により、03-5-3ならびに03-5-10においては第1面流路1の掘削を、埋土の途中で中止することとした。

### 測量

調査成果の記録においてはヘリコプターによる航空測量を実施し、1/50スケールの平面図を作成した。調査の開始に当たっては遺構面の認識が十分でなかったため、調査の進捗に併せて航空測量対象面を随時設定した。03-5-1トレンチ（以下、トレンチを省略）においては西半分について第2-1面を、東半分について第2-2面を航空測量の対象とした。03-5-2では第2-1面を、03-5-3では第1面流路1の埋土途中を対

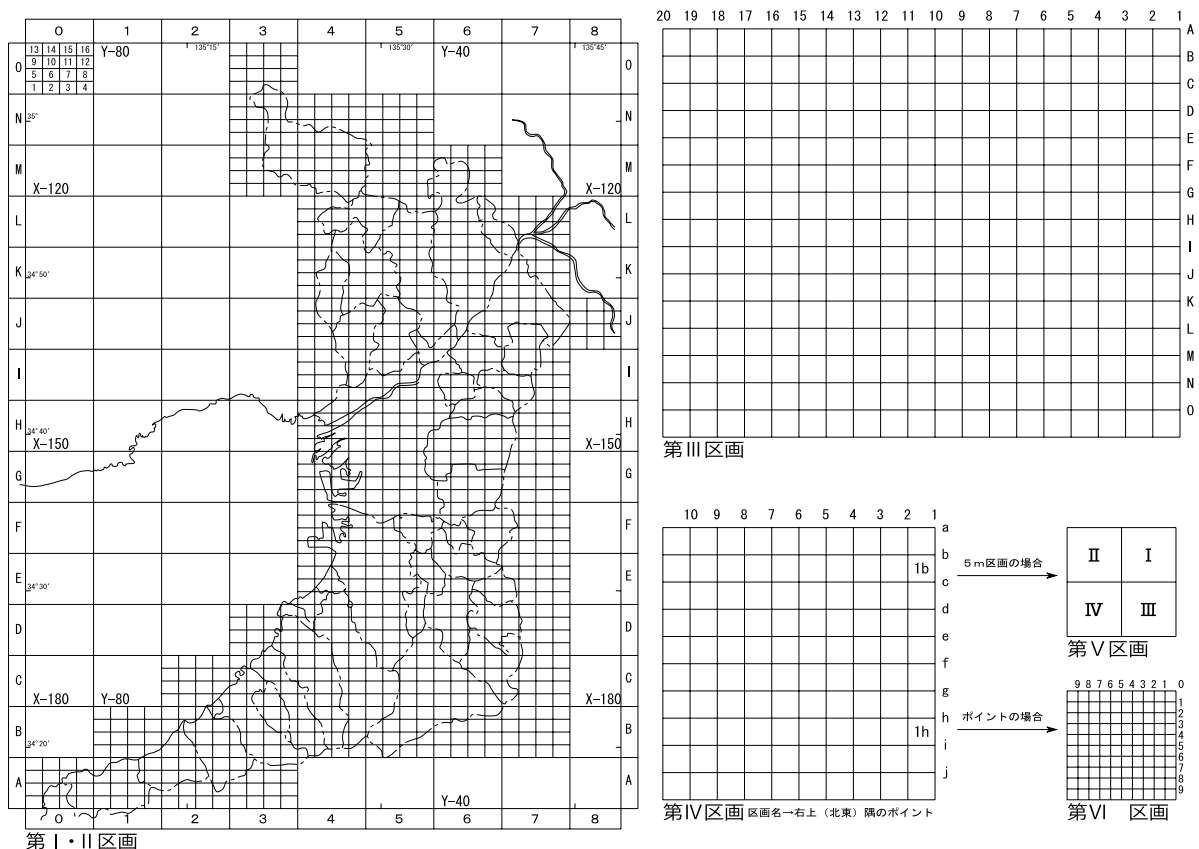
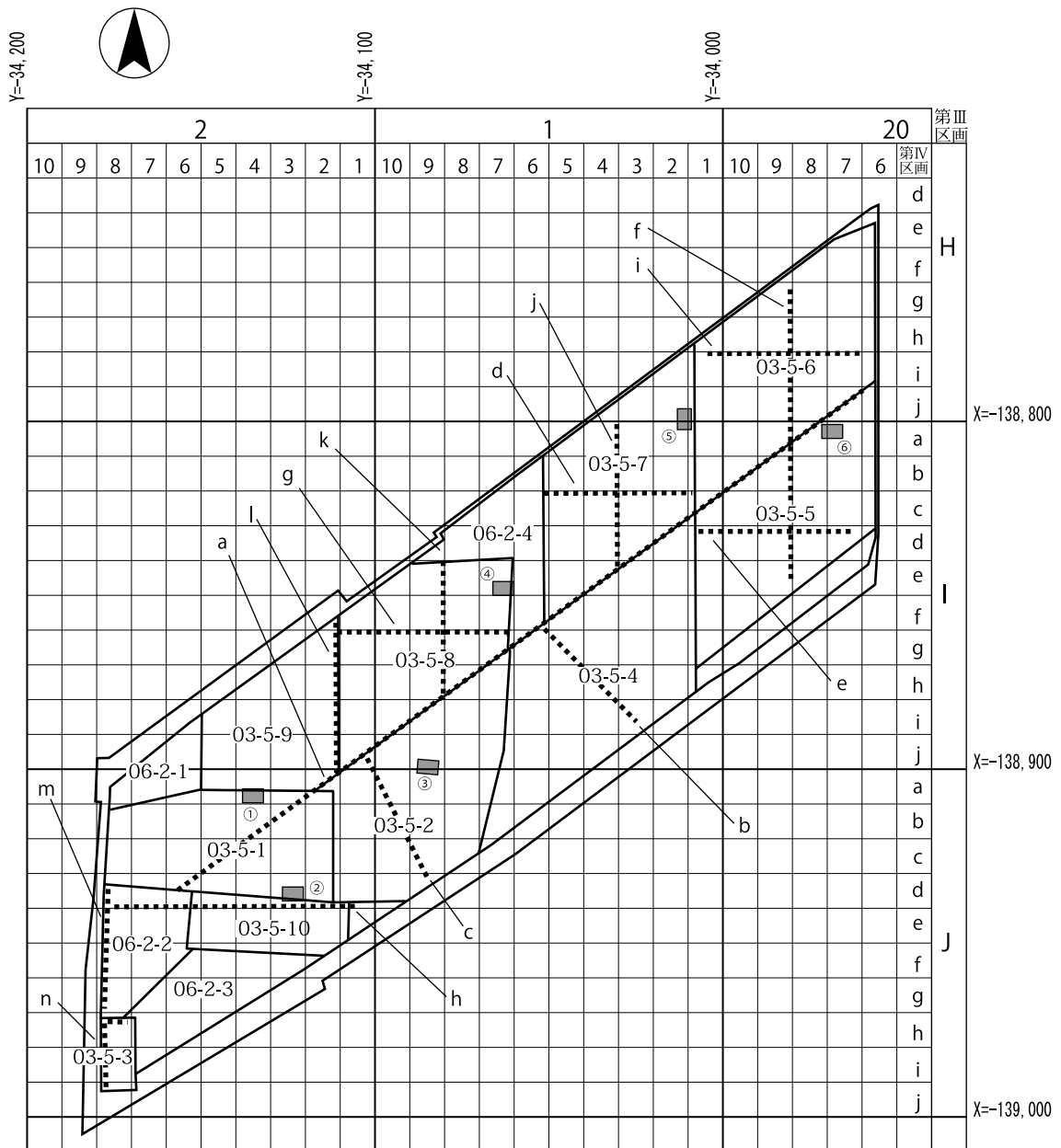


図5 地区割りの方法



..... 土層断面図作成位置

- a : センターライン (図7)
- b : 03-5-4 南北断面 (図8)
- c : 03-5-2 南北断面 (図9)
- d : X=-138,820 ライン (図 10-1)
- e : X=-138,830 ライン (図 10-2)
- f : Y=-33,980 ライン (図 11)
- g : X=-138,860 ライン (図 12)
- h : X=-138,940 ライン (図 13)
- i : X=-138,780 ライン
- j : Y=-34,930 ライン
- k : Y=-34,080 ライン
- l : Y=-34,110 ライン
- m : 06-2-2 西壁
- n : 03-5-3 西・北壁

■ 確認調査トレンチ

- ①: 確認 (その2)①トレンチ
- ②: 確認 (その2)②トレンチ
- ③: 確認 (その2)③トレンチ
- ④: 確認 (その3)①トレンチ
- ⑤: 確認 (その3)②トレンチ
- ⑥: 確認 (その3)③トレンチ

図6 地区割り・トレンチ区分・確認調査位置・断面図作成位置 (s=1/2000)

象とした。03-5-4～03-5-8では第1面および第2-3面の2面を対象とした。03-5-9においては第1面および第2-2面を対象とした。03-5-10では第1面および第2-2面を対象とした。06-2-1～06-2-2では第1面および第2-1面を、06-2-3では第1面および第2-2面を、06-2-4では第1面のみを対象とした。このような経緯により、結果的には連続する面を1枚の航空測量図として表現することはできなかった。航空測量の対象とした以外の遺構面については、平板を用いた測量を行い1/100スケールの平面図を作成したほか、個別の遺構図面などについても適宜、割付測量を実施した。本書においてはそれぞれの遺構面の対応関係を考慮し、再度各遺構面の全体図を作成し、掲載した。

土層断面図については、調査着手時に担当者間で協議し、調査範囲全体を通しての第二京阪道路路線のセンターラインの断面を作成することで、調査単位を越えて、地形、層序の検討に供することのできる資料の作成を行うこととした。これ以外の土層断面図としては03-5-2、03-5-4では第1面流路1を横断する形での北西-南東断面図を作成したほか、国土座標に沿うかたちで、03-5-5では $X = -138,830$ ライン、 $Y = -33,980$ ライン、03-5-6では $X = -138,780$ ライン、 $Y = -33,980$ ライン、03-5-7では $X = -138,820$ ライン、 $Y = -34,030$ ライン、03-5-8では $X = -138,860$ ライン、 $Y = -34,080$ ライン、03-5-9では $Y = -34,110$ ライン、03-5-10では $X = -138,940$ ラインについて1/20スケールの土層断面図をそれぞれ作成した(図6)。原則として人力掘削の対象とした層準について作成することとしたため、トレンチごとに測量対象の層準は微妙に異なっている。本書においては、作成した図面の中からセンターライン模式(図7)、03-5-4南北断面(図8)、03-5-2南北断面(図9)、 $X = -138,820$ ライン・ $X = -138,830$ ライン(図10)、 $Y = -33,980$ ライン(図11)  $X = -138,860$ ライン(図12)、 $X = -138,940$ ライン(図13)を掲載した。

#### 自然科学分析

現地での調査に併行し、自然科学分析を実施した。平成16年度には主に弥生時代の土壌を対象に、植物珪酸体分析、植物珪酸体・花粉・珪藻分析を実施した。平成17年度にはやはり弥生時代の土壌を対象に、植物珪酸体・花粉・珪藻分析、土壌軟X線写真撮影分析を実施した。平成18年度・19年度には出土木製品、材などを対象とした樹種同定分析をそれぞれ実施し、平成19年度には出土石製品、石材を対象に岩石種同定(肉眼観察)分析を実施した。以上は分析委託として実施したが、これに加えて地形環境分析、ウマなどの動物遺存体についての同定・分析、植物種子同定などを行った。現地調査ならびに整理作業においてはこれらの分析成果を意識し、総合的な考察を行うように努めた。また分析成果の一部については、内容を再構成した上で本書に掲載した。

#### 土壌洗浄

第1面検出の流路1においては、埋土に微細遺物の存在が予想されたため、03-5-7トレンチと03-5-10トレンチにおいて検出した部分の埋土の一部を対象に、土壌の洗浄を実施し、微細遺物の検出に勤めた。基本的に現地において実施したが、03-5調査の工期以降には京阪調査事務所整理棟(現寝屋川分室)において実施した。滑石製白玉、ガラス小玉、鉄滓、鞆羽口といった微細遺物を検出し、滑石製白玉については総数700点を超えるものとなった。

## 第4章 調査成果

### 第1節 土層序の認識と微地形

今回の調査における土層の認識が結果的に不十分なものとなった点は否めない。調査を実施する上での最小限の遺構面認識は行い得たわけであるが、層序単位の垂直方向の認識や水平方向の広がり、異なる地点における層序の対応、それぞれの形成過程の把握については、調査担当者としての理解をふまえて調査を進めたものの、それを客観的に検証可能な記録として残しえたかどうかは不安が残るものとなった。その原因について弁明を試みたところで調査成果の質的理解の向上につながるわけではないので、本章では調査の進捗に応じた土層の理解を時系列的に記述することで、調査成果を相対的に把握するための一助としたい。なお、第5章第1節、分析委託に伴う地形環境分析成果も参照されたい。

最初に調査に着手した03-5-1トレンチでは、最上層に存在した旧作土を重機により除去すると、粗い砂層が現れた。この砂は確認調査においても認められていた近世段階の砂層と判断されたため、その下面に足跡などのあることを認識しつつ、重機により除去することとした。この砂層以下には厚いシルト～粘土層があり、おそらくは中世段階に属するものと判断し、これ以下を人力掘削とした。この段階では層名について今回の掘削で確たる認識が得られるまでは、確認調査段階のものを用いることとしていたが、砂層が第Ⅱ層に対応するものと思われ、第Ⅲ層以下が厚い粘土層と認識された。センターラインに設定した筋掘りとともに、トレンチの周囲に排水と土層の確認をかねた側溝を先行して掘削し、面的な掘り下げを進めたわけであるが、その断面では厚い粘土層の細分は行えるものの、果たして地表面として認識できるものかどうか極めて不明瞭であった。後の検討で地震動による変形の痕跡であることが判明したが、植物遺体を含む有機質層が乱れた状態で認められるなど、判断に迷う状況が続き、層として認識できる単位で掘削を重ねたが、遺構面と呼べる様相は見出しがたく、遺物もほとんどみられなかった。T.P.+1.0m付近まで掘り下げると、様相が大きく変わり、青灰色のシルト層をベースに暗灰色のシルトが遺構埋土として入る状況が断面で確認された。この青灰色シルト層（第2b層）の上面を第1の遺構面と認識し、遺構の検出を行った。調査区内は壁面からの湧水のみならず、検出した遺構面からも湧水が著しく、遺構検出も困難を極めたが、大きく暗灰色シルトの輪郭を把握することができた。結果的にこの土は第1面流路1の輪郭であったわけであるが、この段階では側溝の深度からその全容を把握することができず、また壁面の崩落が頻繁におきる状態であったことから、側溝に必要な深度を設定することもかなわなかった。結果、これを流路の堆積層としてではなく、土壌層として掘り下げることとなり、流路に含まれる遺物の多くも層出土の遺物として取り上げてしまうこととなった。さらに当初、青灰色シルト層の上面を遺構面として認識したわけであるが、明確に遺構を確認することができなかつたため、さらに下層の遺構面を求めて掘削を進めたが、1トレンチ西半分と南東部では水田作土と思しき土壌層の最上部が側溝において確認されたため、これを遺構面（第2面）と認識し検出を進めた。この土壌（第3-2a層）は東南部では厚い砂層をベースとする土壌と判断されたが、この面を検出した段階で以下の調査は必要がないとの指示がなされたため、この面で掘削を終了した。また西半分では間層を挟まず重なる土壌層2層（第3-1a層、第3-2a層）と、その下に比較的細かい粒子の堆積層を挟んでみられる黒色粘土層（第3-3a）層が確認され、面呼称は未整理なままではあったが、それぞれについて面的

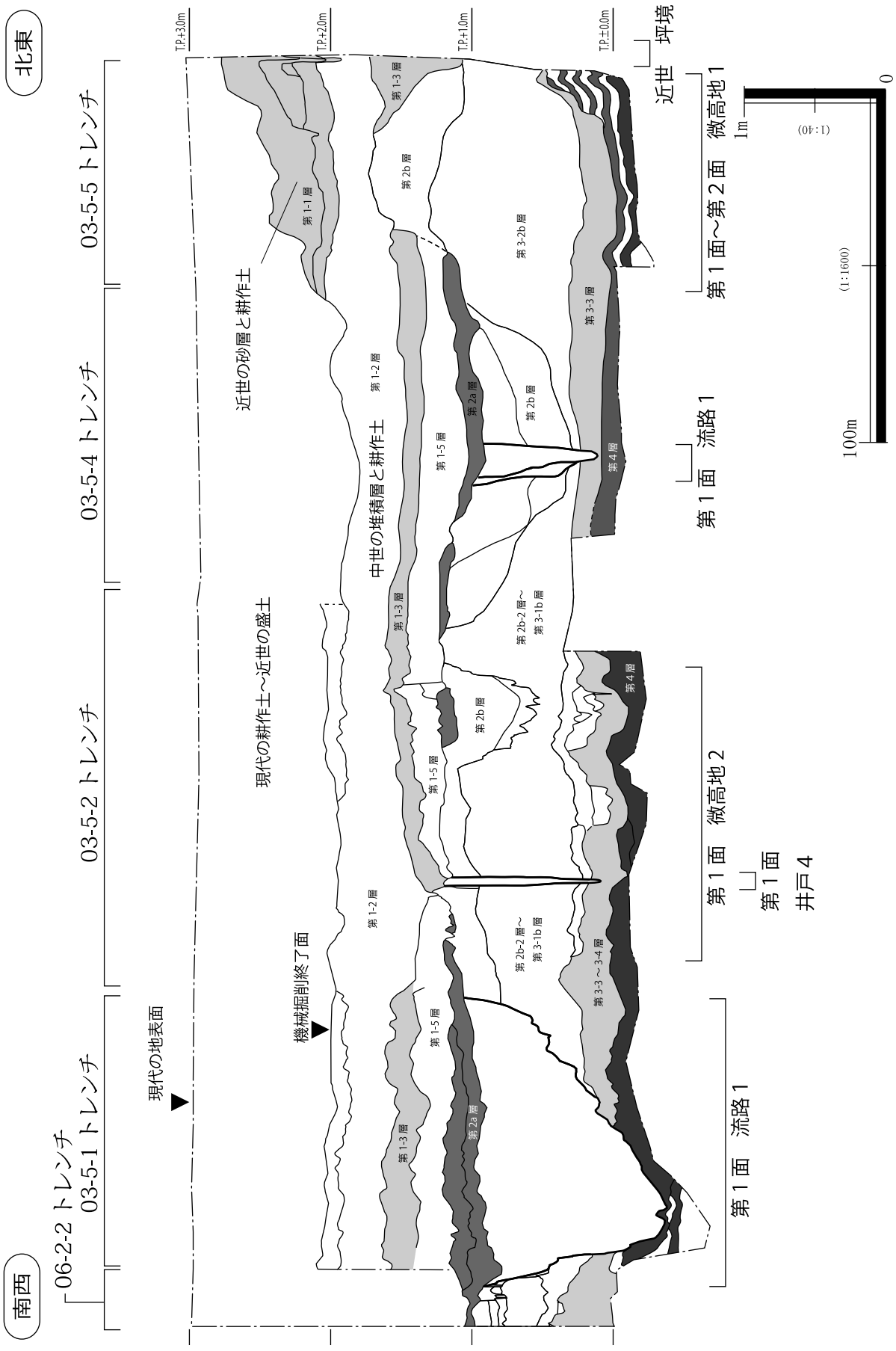
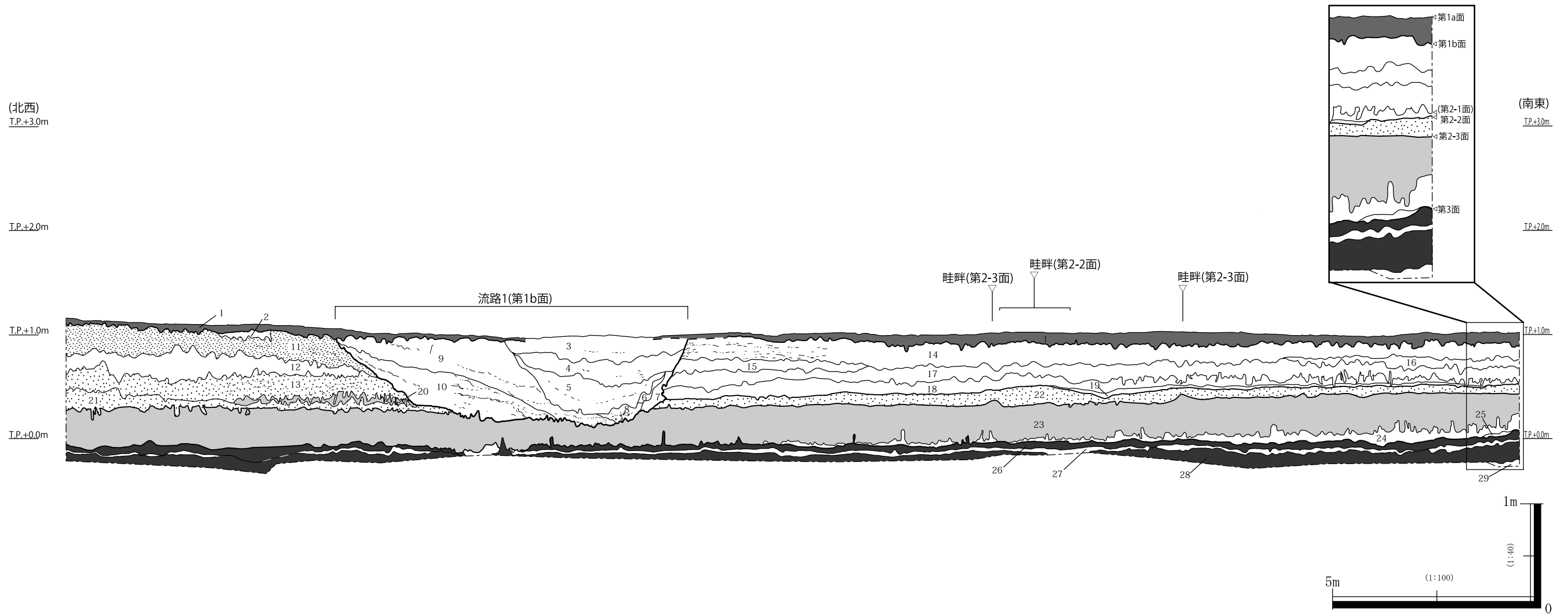


図7 センターライン土層断面模式図

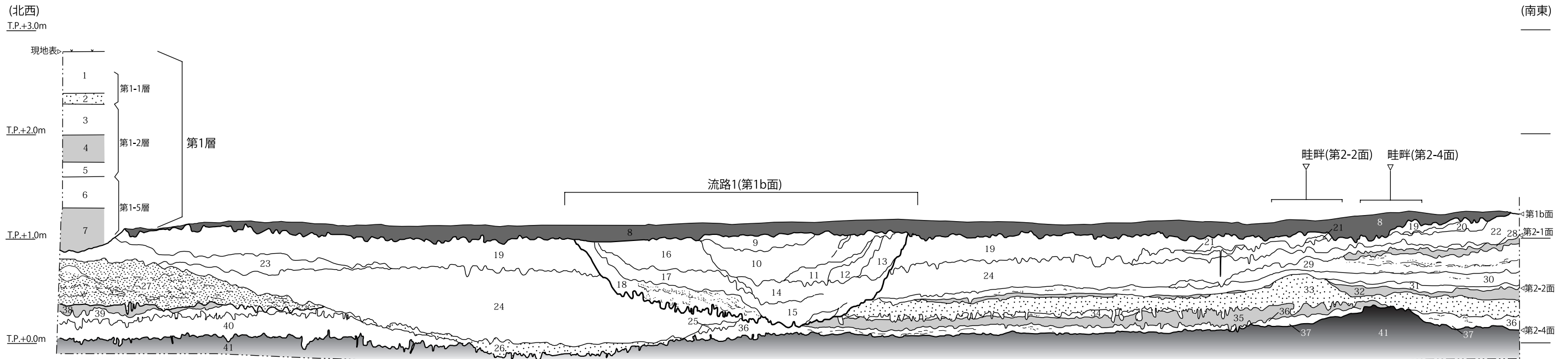


1. 黄灰 2.5Y4/1 シルト 粗粒砂わずかに含む 極細粒砂多く混じる。11 との間、凹凸の著しいところあり (地震変形?) (第 2a 層)
2. 黄灰 2.5Y5/1 極細粒砂 11 のブロックとの混合層 (第 2a 層、但し第 1 面遺構埋土の一部の可能性残す)
3. 灰 5Y4/1 シルト～粘土 炭化物粒多く含む 4 との境界は不明瞭 炭化物がラミナ状にはいるところあり、Fe 多い (流路 1)
4. 灰 5Y4/1 シルト 3 との境界は不明瞭 植物遺体、炭化物多く含む (流路 1)
5. 灰 5Y4/1 極細粒砂～シルト 細粒砂多く含む 炭酸鉄 (貝) 多く含む 植物遺体多く含む (流路 1)
6. 灰 5Y4/1 シルト 極細粒砂多く含む 青灰色シルトブロック (第 2b 層) 植物遺体多く含む (流路 1)
7. 灰 7.5Y4/1 シルトブロック主体 灰 5Y4/1 シルトブロック 植物遺体多く混じる (流路 1)
8. 灰黄褐 10YR4/1 しまりの良い粗粒砂主体 径 1～2 cm 大の青灰シルトブロック多く含む (流路 1 の最下層)
9. 黄灰 2.5Y4/1 シルト 灰白 5Y7/2 細粒砂 灰白 5Y7/1 中粒砂の互層  
上位極細粒砂中にシルトブロック多く混じり、下位の砂層にはラミナみられる (流路 1)
10. 上位 灰白 5Y7/2 細～中粒砂 ラミナ顕著、下位 灰 5Y5/1 細～極細粒砂の乱れた堆積 (流路 1)
11. 灰黄 2.5Y6/2 細粒砂～極細粒砂 一部にラミナみられるが全体的にゆるやかな土壌化を受ける (第 2b 層)
12. 灰 5Y5/1 シルト～極細粒砂 植物遺体含む 下位に灰黄褐 10YR5/2 を呈するところ多い (第 2b 層)
13. 灰黄 2.5Y4/1 シルト質極細粒砂 灰白 2.5Y7/1 中粒砂の互層 一部にラミナみられる 下位に黄灰 2.5Y4/1 シルト部分的にあり (第 3 層?)
14. 灰白 5Y7/2 極細粒砂 ラミナ顕著～暗青灰 10BG4/1 シルトに変化、ラミナみられず (第 2b 層)
15. 灰 7.5Y4/1 シルト 10Y4/1 灰シルトブロック入るが、ブロックとして明瞭ではない 炭化物粒多く含む (第 2b 層)

16. 14 と 17 の混合層 但しこの付近 17 が粗粒砂多く含むのに対して 16 はほとんど含まず 17 に植物遺体覆多く含まれるが 16 では若干に留まる
17. 灰 10Y4/1 シルト～暗青灰 10BG4/1 シルトベース、灰 5Y4/1 シルトに混じるに変化、植物遺体多く混じる (第 2b 層)
18. 灰 5Y4/1 シルト炭化物粒、植物遺体多く含む 特に 22 との境に炭化物が薄い層をなしてはいる (第 3-1b 層)
19. 黒褐 2.5Y3/1 シルト 植物遺体多く含む (第 3-1b 層)
20. 灰 5Y4/1 シルト質粗粒砂～中粒砂 下面に凹凸顕著 (第 3-2a 層?)
21. 灰白 2.5Y7/1 中～粗粒砂 ラミナはみられない (第 3-2b 層?)
22. 灰白 5Y7/1 粗粒砂 ラミナはみられないが流水堆積 (第 3-2b 層)
23. 灰 7.5Y4/1 シルト 植物遺体わずかに含む (第 3-3a 層)
24. 暗灰 N3/0 シルト 灰 N5/0 灰シルトの小ブロック (径 0.5 cm 大) を多く含む (第 3-4a 層)
25. 灰 N5/0 シルトの小ブロックが密集
26. 黒 N2/0 シルト (第 4a 層)
27. 緑灰 10GY6/1 シルトのブロック (径 1～3 cm 大) が密集、同じブロックは 28 にも若干含まれる (第 4b 層)
28. 黒 N1.5/0 シルト 27 のブロック若干含む (第 4 層下部)
29. 灰 5Y4/1 シルト植物遺体多く含む ねばり強い (確認調査第 20 層)

図 8 03-5-4 トレンチ南北土層断面図

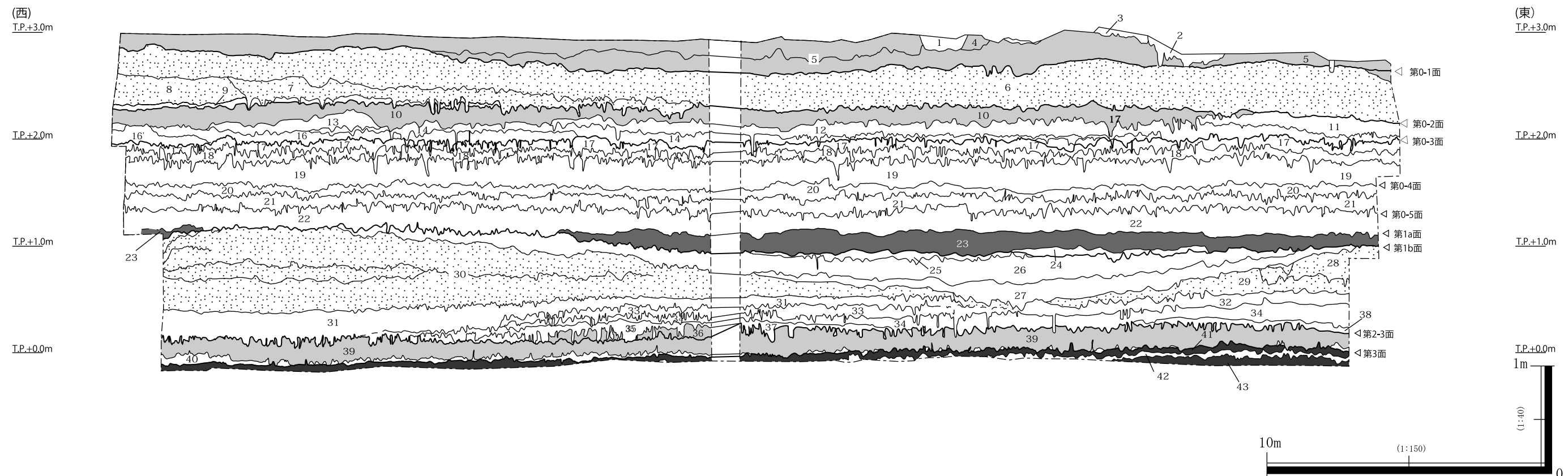




1. 現代作土～第 1-1 層
2. 第 1-1 層・近世洪水砂
- 3.4.5. 第 1-2 層
- 6.7. 第 1-5 層
8. 灰 10Y4/1 シルト 中粒砂若干含む、下層との境凹凸多い 第 2b 層、第 3 層に伴う土壌 上面は削平を受ける (第 2a 層)
9. 黄灰 2.5Y4/1 シルト～極細粒砂 ラミナみられず極細砂ブロック状にはいる (流路 1)
10. 灰 5Y4/1 シルト 炭化物粒若干含む (流路 1)
11. 黄灰 2.5Y5/1 砂質シルトブロック (径 3～5cm 大) と、灰黄 2.5Y7/2 極細粒砂ブロック (径 3～5cm 大) との混合 (流路 1)
12. 黄灰 2.5Y4/1 シルト 極細砂ブロック若干混じる (流路 1)
13. 黄灰 2.5Y5/1 極細粒砂ベースにシルトブロック若干混じる (流路 1)
14. 黄灰 2.5Y4/1 シルト質極細粒砂 炭化物 植物遺体 貝遺体多く含む (流路 1)
15. 黄灰 2.5Y4/1 シルト (流路 1)
16. 黄灰 2.5Y4/1 シルト～極細粒砂 粒状構造みられる (流路 1)
17. 黄灰 2.5Y4/1 シルト (流路 1)
18. 灰黄 2.5Y7/2 灰白 2.5Y7/1 中～細粒砂と黄灰 2.5Y4/1 極細粒砂 部分的に乱れたラミナがみられるが、多くは混濁層、下面に凹凸多い (流路 1)
19. 青灰 5B5/1 砂質シルト～極細粒砂 中央やや上位に浅黄 5Y7/3 極細粒砂が入りラミナ顕著 8 との境凹凸が多い ゆるやかな堆積か? (第 2b 層の上部)
20. 青灰 5B5/1 砂質シルト～極細粒砂 中央やや上位に浅黄 5Y7/3 極細粒砂が入りラミナ顕著 8 の降下少ない (第 2b 層)
21. 明青灰 5B7/1 極細粒砂 極細粒砂～砂質シルト 下面の乾痕にはいる (第 2b 層)
22. 灰 5Y5/1 極細砂～砂質シルト シルトブロック (径 2cm 大) わずかに混じる～シルト主体へ変化- 上面に乾痕多くみられる (第 2b 層)
23. 青灰 5B5/1 シルト 炭化物ラミナ状にわずかにはいる 19.24 との境不明瞭、上面に乾痕顕著 (第 2b 層)
24. 黄灰 2.5Y4/1 シルト 炭化物 植物遺体 多く含む (第 2b 層)

25. 黄灰 2.5Y4/1 シルト質粗粒砂 小礫若干混じる (24 に削られず残存した 26 に伴う土壌?あるいはその 2 次堆積?)
26. 黄灰 2.5Y6/1 シルト質粗粒砂～小礫 ラミナはみられない (24 の堆積の下部か?)
27. 灰白 10YR8/1 中粒砂～黄灰 2.5Y5/1 砂質シルト 乱れたラミナ顕著 (第 2b 層あるいは第 3 層 砂層)
28. 黄灰 2.5Y4/1 シルト質粗粒砂 炭化物粒多く含む 灰色シルトブロックで入る (第 3-1a 層 水田土壌)
29. 黄灰 2.5Y7/1 粗粒砂～小礫 ラミナは顕著ではないが中位にシルトの薄層はさむ (第 3-1a 層 28 のベース)
30. 黄灰 2.5Y4/1 シルト 植物遺体 炭化物ラミナ状に多くはいる 下層 = 土壌を削っているか? (第 3-1 b 層)
31. 灰 5Y4/1 シルト 植物遺体多く含むが、ラミナ状にははまらない (第 3-1 b 層)
32. 灰 5Y4/1 シルト質中粒砂 粗粒砂多く混じる (第 3-2a 層 33 に対する土壌か?)
33. 灰白 2.5Y7/1 粗粒砂～小礫 しまり良いラミナみえず (第 3-2a 層あるいは第 3-2b 層 水田ベースの砂 但し盛土か?)
34. 褐灰 10YR4/1 極細粒砂～シルト 細いラミナ顕著 上面 33 による凹凸多くみられる (第 3-2b 層下部)
35. 褐灰 10YR4/1 シルト 粗粒砂～中粒砂多く混じる シルトブロックわずかに混じる (第 3-3a 層 第 14 層に対応する土壌か?)
36. 灰 5Y5/1 シルト～粘土 炭化物が薄くラミナ状にはいる 37 との境は不明瞭で一体のものと考えられる (第 3-3b 層?)
37. 灰白 5Y7/1 ～明オリーブ灰 2.5GY7/1 粘土 炭化物わずかにラミナ状にはいる (第 3-3b 層?)
38. 灰黄褐 10YR8/1 シルト 植物遺体多く含む 上面に足跡みられる南、東寄りで極細粒砂へと変化し、なくなる (第 3-3b 層下部)
39. 灰黄 2.5Y6/2 粗粒砂 ラミナはみられない 部分的に上位が黄灰 2.5Y4/1 シルト質粗粒砂のところあり 下面に足跡顕著 (第 3-3b 層下部)
40. 黄灰 10YR4/1 シルト 炭化物粒 植物遺体 貝の変質したカルシウム?あり 上面に足跡顕著 (第 3-3a 層)
41. 黒褐 2.5Y3/1 シルト 分解のすすんでない植物遺体 一部はラミナ状に入る 炭酸カルシウム?あり (第 4a～4b 層)

図 9 03-5-2 トレンチ南北土層断面図

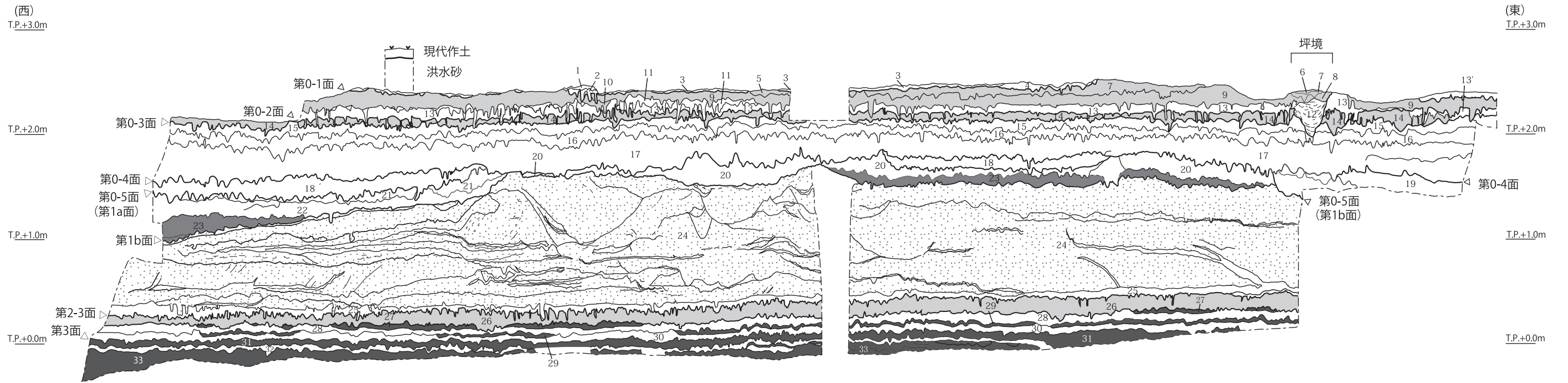


1. 攪乱(工事用進入路側溝)
2. 灰5Y4/1シルト質細粒砂 中～粗粒砂多く含む 小礫若干含む 細粒砂がブロック状に入るところあり  
しまり悪い(現代水田部分の溝状の落)
3. 灰5Y5/1シルト質細粒砂 中～粗粒砂多く含む 小礫若干含む しまり良(現代の作土)
4. 灰オリーブ5Y6/2シルト質細粒砂 中～粗粒砂多く含む 小礫若干含む しまりやや悪い(現代の作土の深いところ)
5. 上位:ぶい黄橙10Y6/3(第0-1面鳥畑間作土) 下位:灰5Y5/1 シルト質粗粒砂 細～中粒砂多く含む ゆるやかな攪拌  
上下間に青灰5B5/1極細粒砂～シルト挟む
6. 灰白5Y8/1～オリーブ黄5Y6/3細粒砂～粗粒砂 小礫まじる
7. 灰白5Y7/1粗粒砂主体 青灰5B6/1シルトブロック混じる 10との境にシルトがリパース・グレーディング(R.G.)の状況で一部残る  
10を覆う洪水砂中をヒトが歩いた状況か? ゆるやかな攪拌(近世洪水砂)
8. 灰白5Y8/1粗粒砂 ラミナ顕著 10直上にR.G.顕著 7のベース? 攪拌を受けていない
9. 8のR.G.
10. 暗オリーブ灰5GY4/1シルト質中粒砂多く含む 攪拌著しいがシルト極細粒砂がラミナ状に入るところあり(第0-2面作土)
11. 青灰5B5/1 明青灰5B7/1 極細粒砂(上位)シルト(下位) ラミナ顕著 6のR.G.ではない
12. 緑灰5G5/1シルト 極細粒砂の一部にラミナを残す形ではいる(第1-1層 11のR.G.か?)
13. 灰白N8/0中～粗粒砂 ラミナ顕著ではないが、一部にグレーディング認められる(10のベース 第1-1層)
14. 青灰10BG5/1極細粒砂～シルト ラミナ顕著 1 2のR.G.か?(第1-1層)
15. 明緑灰5G7/1シルト 細かいラミナみられる 14のR.G.か?(第1-1層)

16. 青灰10BG5/1シルト～極細粒砂 14のR.G.か? ラミナ顕著(第1-1層)
- 16' 上位:中～粗粒砂 下位:極細粒砂 いずれもラミナ顕著 シルト含まない点で16と分離(第1-1層)
17. 青灰5B5/1シルト 地震による変形顕著(第1-2層作土)
18. 暗黄2.5Y5/2シルト 植物遺体層 地震による変形顕著(第1-2層堆積層)
19. 青灰5B5/1シルト 炭酸鉄粒多く含む 粗粒砂若干含む 地震による変形顕著(第1-2層作土?)
20. 青灰5B6/1シルト(第1-3層)
21. 青灰5B6/1シルト 炭化物非常に多く含む(第1-3層)
22. 褐灰10YR5/1シルト 粗粒砂若干含む 炭酸鉄若干含む～部分的に多く含む(第1-5層)
23. 黄灰2.5Y4/1シルト 粗粒砂多く混じる 東寄りで顕著(第2a層)
24. 灰N4/0シルト 炭化物若干混じる(第2a層)
25. 灰N4/0シルト 炭化物粒多く含む(第2b層最上層)
26. 緑灰10Y6/1シルト 炭化物若干混じる 27との境は不明瞭(第2b層シルト)
27. 黒褐10YR3/1粘土～シルト～極細粒砂 植物遺体 炭化物多く含む よどんだ堆積(第2b層下部)
28. 黄灰2.5Y7/2中～粗粒砂 東寄りでラミナ明瞭(第3-2b層 洪水砂)
29. 黒褐2.5Y3/2極細粒砂～砂質シルトに灰N6/0極細粒砂はいる(第3-2b層 洪水砂)
30. 上方:青灰10BG5/1極細粒砂～細粒砂 浅黄5Y7/4細粒砂～中粒砂  
下方:オリーブ黒5Y3/1細粒砂(植物遺体含む)と灰白5Y7/2中粒砂が入り乱れる 浅黄5Y8/3と浅黄2.5Y7/4の粗粒砂 斜交葉理  
黄灰2.5Y7/2中～粗粒砂 西寄りでラミナやや明瞭 18との境不明瞭(第3-2b層)

31. 黒褐2.5Y3/2砂質シルト～極細粒砂 植物遺体含む(第3-2b層か?)
32. 黄灰2.5Y7/2中～粗粒砂 東寄りでラミナ明瞭(第3-2b層 洪水砂)
33. 黄灰2.5Y7/2中～粗粒砂 ラミナ乱れる(第3-2b層)
34. 灰黄褐10YR4/2砂質シルトが下位にあり 灰N6/0極細粒砂(ラミナ明瞭)が上位にある(第3-2b層 洪水砂)
35. 灰5Y4/1～灰白2.5Y7/1粗粒砂 38上面に足跡状にはいる(第3-2b層)
36. 灰5Y4/1～灰白2.5Y7/1粗粒砂 39上面に足跡状にはいる
37. 褐灰10YR4/1砂質シルト 下面に凹凸多い(第3-2b層 R.G.?)
38. 黒10YR2/1シルト 39ベースに黒褐10YR3/2シルト(上層のR.G.?)がまだらにはいる(第3-3a層)
39. 黒10YR2/1シルト(第3-3a層)
40. 緑灰10G5/1シルト～粘土(第4b層)  
※39のベースとなるが、本来40に伴っていた土壌は39に削られている
41. 黒N5/0粘土 粒状構造?(第4a層)
42. 緑灰5G5/1粘土(第4b層)
43. 黒N5/0粘土(第4b層)

図10-1 X=-138,820ライン土層断面図



1. 灰10Y4/1シルト 上にかぶる砂層のリバース・グレーディング(R.G.) 3と同じかどうかは不明
2. 浅黄2.5Y7/3粗粒砂～中粒砂 緩やかな攪拌を受けているが、最下にR.G.わずかに見られる
3. 灰10Y4/1シルト 上にかぶさる砂のR.G.
4. 灰白10YR8/2 中～細粒砂
5. 暗緑灰10GY4/1シルト質細粒砂 中～粗粒砂若干混じる(第0-1面 作土)
6. 灰10Y4/1極細粒砂 上にかぶさる砂のR.G.
7. 灰オーリーブ7.5Y6/2シルト質細粒砂 中～粗粒砂多く含む 比較的しまり良い(作土)
8. 灰白N8/0中～粗粒砂 細粒砂多く含む 乱れた砂の堆積(盛土もしくは攪拌のゆるやかな作土?)
9. 青灰5BG5/1シルトと黄灰2.5Y7/2シルト質中粒砂との混合 10よりは攪拌が進んだ様相で比較的しまり良い  
灰白N8/0中～粗粒砂、細粒砂多く含む 乱れた砂(盛土 もしくはゆるい作土?)
10. 灰黄2.5Y7/2シルト質中粒砂を主体とし 細粒砂多く混じる シルトのブロック若干混じる ゆるやかな攪拌を受けた砂層(作土あるいは盛り土)
11. 灰白5Y8/1粗粒砂～中粒砂 細粒砂～極細粒砂ブロック状に入る 13を踏み込む 足跡状の落ち込み
12. 青灰10BG6/1中～粗粒砂 中～下位にラミナ顕著 溝状の落(南北方向)内の堆積 上位の土壌化が8か
13. 青灰5BG5/1極細粒砂 青灰5BG6/1シルトの互層 ラミナ顕著にみられる 下面に巣穴上の窪み多くみられる ゆるやかな流水堆積
- 13'. 13のラミナが乱れた様相 ゆるやかな攪拌か(盛土)
14. 緑灰5G5/1シルト 極細粒砂が一部ラミナを残す形ではいる ゆるやかな攪拌?(第1-1層)
15. 暗青灰10BG4/1シルト 青灰シルトのブロック混じる(第1-2層)
16. 暗灰黄2.5Y5/2シルト 植物遺体多く含む(第1-2層)
17. 暗青灰10BG4/1シルト 粗粒砂多く混じる 炭酸鉄粒多く混じる よく練れた土壌(第1-2層)
18. 灰N4/0シルト 中～粗粒砂多く含む 下位に炭化物粒多く含む 下面に円形の窪み径10～15cm多く残る(根?)(落ち込み埋土:第1-3層)
- 18'. 上位:緑灰5G5/1シルト 中～粗粒砂多く混じる 中位:灰N5/0シルト 炭化物粒多く混じる  
下位:緑灰5G5/1シルト 中粒砂若干混じる(落ち込み埋土:第1-3層)

19. 灰10Y4/1シルト 中～粗粒砂多く混じる
  20. 灰10Y5/1シルト 細粒砂多く混じる(第1-5層)
  21. 灰10Y4/1シルト 中～粗粒砂多く混じる(第2a層)
  22. 暗緑灰10G4/1シルト 中～粗粒砂多く混じるが21よりは少ない 部分的に砂の少ないところあり 粘性強い(第2a層)
  23. 暗青灰5B4/1シルト 中～粗粒砂非常に多く混じる 炭化物粒若干混じる 土壌化著しい(第2a層)
  24. 浅黄5Y7/4 上位:極細粒砂～細粒砂(上方やや土壌化) 下位:中粒砂～粗粒砂(下方ほど粗くなる)(第3-2b層)  
灰白5Y8/2中粒砂～粗粒砂 ～オーリーブ黒5Y3/1極細粒砂～シルト ラミナ顕著 洪水によるグレーディングの繰り返し(第3-2b層)  
灰白5Y8/2中粒砂～粗粒砂 攪拌され、一部ラミナ見えず(第3-2b層)
  25. 灰黄褐10YR4/2シルト 植物質多く含む 炭化物まばらに含む(第3-2b層下部)
  26. オリーブ黒7.5Y3/1シルト 砂粒はほとんど混じらない(第3-3 a層)
  27. オリーブ黒10Y3/1シルト(第4a層)
  28. 緑灰10GY5/1シルト 27・28 漸次的に変化 明瞭な境界なし(第4b層)
  29. 灰10Y4/1シルト(第4a層)
  30. 緑灰10GY5/1シルト 29・30 漸次的に変化 明瞭な境界なし(第4b層)
  31. 黒N2/0シルト(第4a層)
  32. 緑灰10GY3/1シルト 31・32 漸次的に変化 明瞭な境界なし(第4b層)
  33. 緑黒7.5GY2/1シルト(第4b層)
- ※27～33の層呼称については、便宜的に第4a層と第4b層を重複して使用。

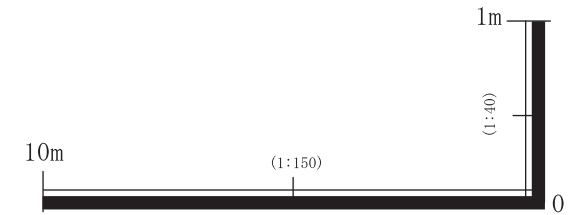


図10-2 X=-138,830ライン土層断面図



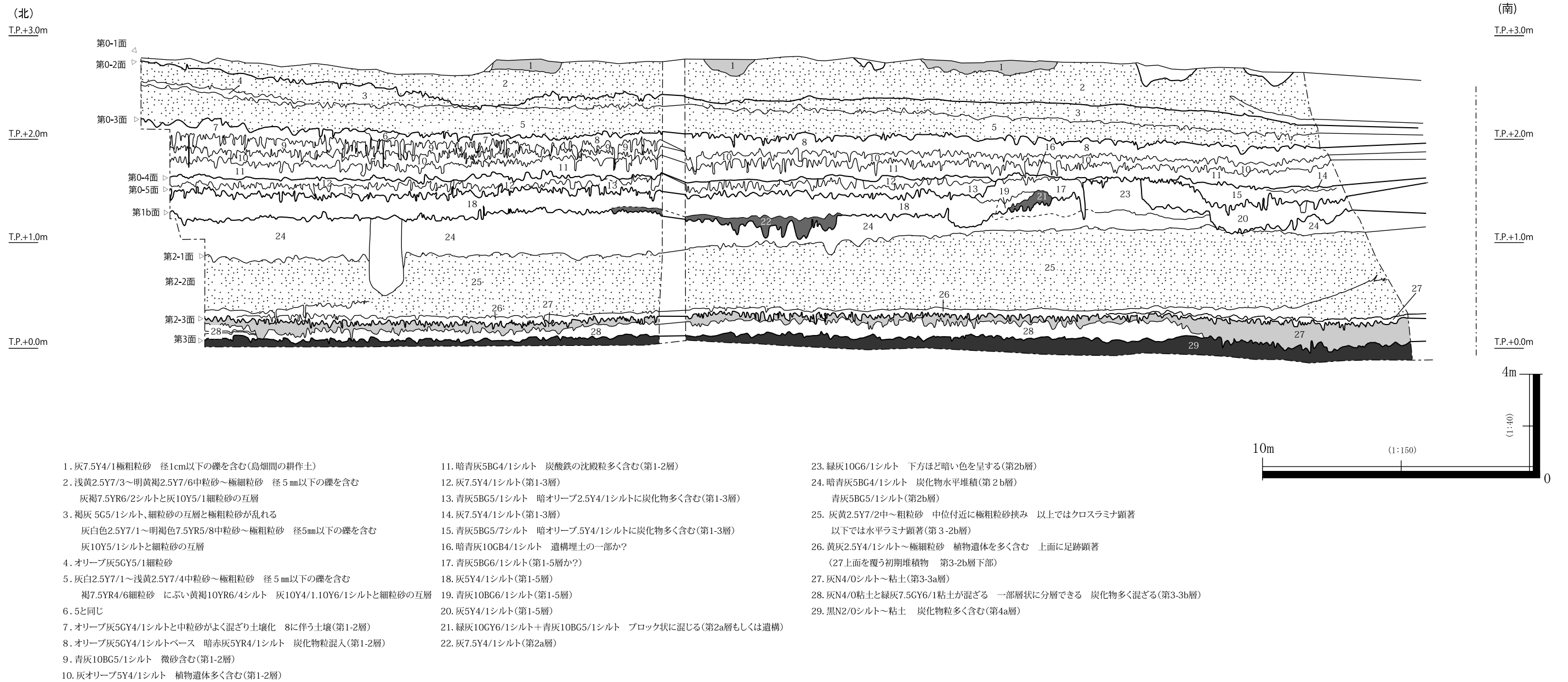
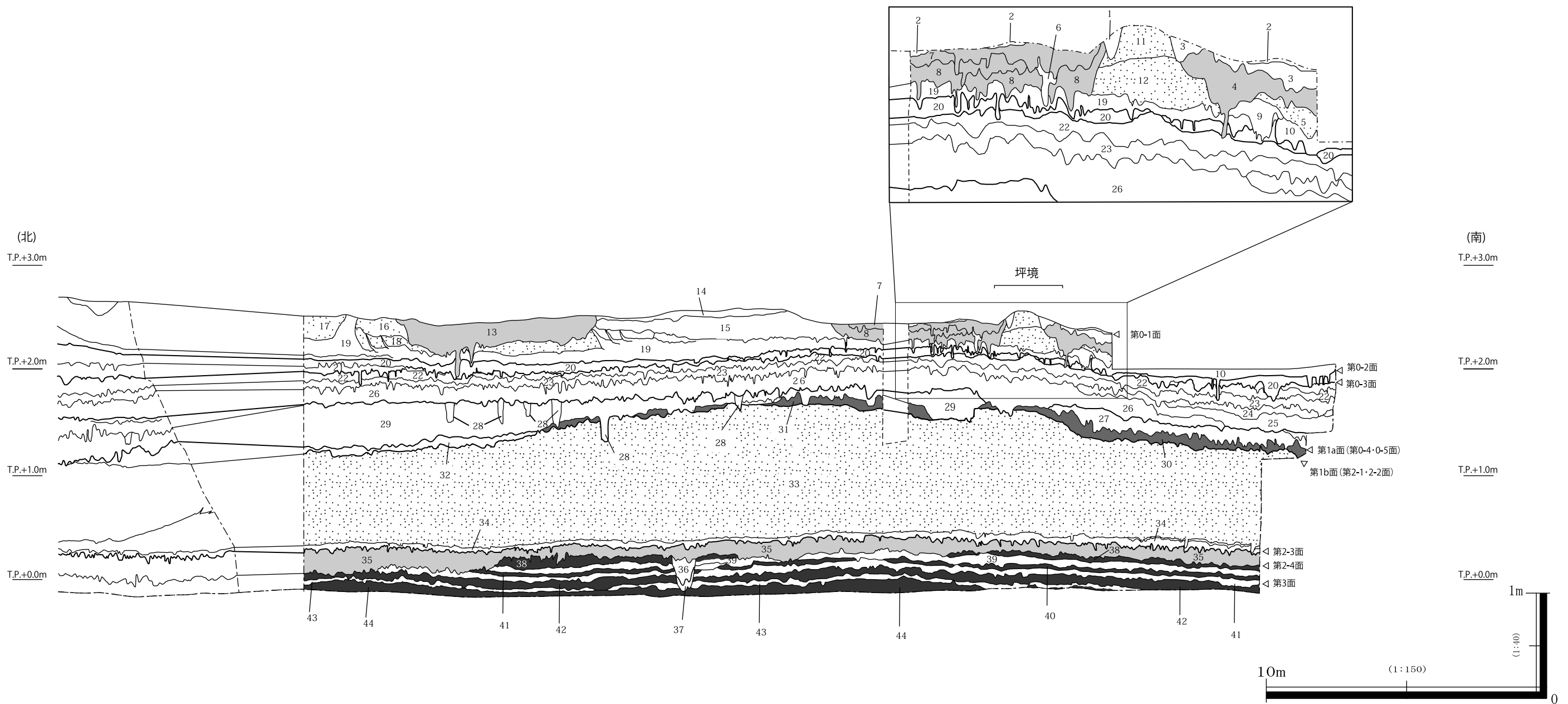


図11-1 Y=-33,980ライン土層断面図

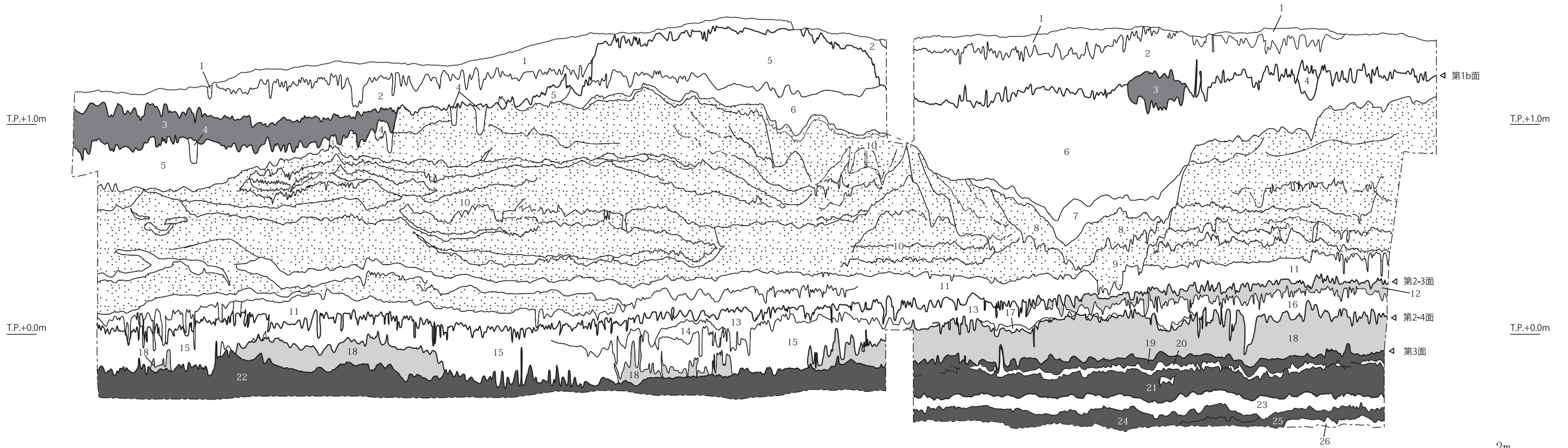


- |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. 現代作土の溝</p> <p>2. 灰10Y4/1シルト 上にかぶる砂のリバース・グレーディング(R.G)</p> <p>3. 灰オリーブ7.5Y5/2極細粒砂 シルトがラミナ状に入るが汚れた砂 (4の低いところに入る作土?あるいは堆積層?)</p> <p>4. 浅黄2.5Y7/3中～粗粒砂 シルトのブロック入る 汚れた砂、ゆるやかな攪拌(作土)</p> <p>5. 灰10Y5/1細～極細粒砂 ラミナ顕著(流水堆積)</p> <p>6. 灰5Y6/2シルト質粗粒砂 中～粗粒砂、極細粒砂のブロック入る 汚れた砂、ゆるやかな攪拌(作土)</p> <p>7. 灰5Y6/2シルト質粗粒砂 中～粗粒砂、極細粒砂のブロック入る 汚れた砂 ゆるやかな攪拌(作土)</p> <p>8. 灰白5Y7/1シルト質粗粒砂 中～粗粒砂多く混じる 極細粒砂のブロック入る 12よりしまりない(作土?) ゆるやかな攪拌 下面に凹凸顕著</p> <p>9. 灰黄2.5Y6/2中～粗粒砂 汚れた砂 ゆるやかな攪拌(作土?)</p> <p>10. 緑灰5G5/1シルト 極細粒砂が一部にラミナを残す形に入る ゆるやかな攪拌?(第1-1層)</p> <p>11. 浅黄2.5Y7/3シルト質粗粒砂 シルトラミナ状に入るが汚れた砂(畦畔盛土)</p> <p>12. にぶい黄2.5Y6/3中～粗粒砂 ラミナ顕著 細粒砂の薄層ラミナ状に入る(坪境畦畔芯の砂)</p> <p>13. 浅黄2.5Y7/3中～粗粒砂 極細粒砂のブロック混じる(上位) 暗緑灰5G4/1シルト質粗粒砂 粗粒砂多く混じる(下位)(島畑間の水田作土?)</p> <p>14. 青灰10BG5/1極細粒砂 ラミナ顕著(流水堆積=島畑の芯の砂)</p> <p>15. 灰黄2.5Y7/2 上位:中～粗粒砂 下位:中～細粒砂 ラミナ顕著(島畑の芯の堆積層)</p> | <p>16. 灰白7.5Y7/1中～粗粒砂 水平方向のラミナ顕著(島畑の芯の砂)</p> <p>17. 灰白7.5Y7/1中～粗粒砂 極細粒砂ラミナ状に入る ラミナ顕著(島畑の芯の砂)</p> <p>18. 浅黄2.5Y7/3中～粗粒砂 ラミナのない乱れた砂 19との境不明瞭(島畑の芯の砂)</p> <p>19. 青灰5BG5/1細粒砂～極細粒砂と青灰5BG6/1シルトの互層 ラミナ顕著にみられる 灰白5Y7/1粗粒砂(16～19は一連の堆積か?)</p> <p>20. 緑灰5G5/1シルト 極細粒砂が一部ラミナを残す形ではいる ゆるやかな攪拌か(第1-1層)</p> <p>21. 灰白N7/0粗粒砂～中粒砂 ラミナは明瞭ではないが 流水堆積層(第1-1b層)</p> <p>22. 暗青灰10BG4/1シルト 青灰色シルトの小ブロック混じる(第1-2層)</p> <p>23. 暗青灰2.5Y5/2シルト 植物遺体多く混じる(第1-2層)</p> <p>24・25 26の上部 植物遺体(地下茎?)多く含む(第1-2層)</p> <p>26. 暗青灰10BG4/1シルト 粗粒砂多く混じる 炭酸鉄粒多く混じる 土壌(第1-2層)</p> <p>27. 上位 緑灰5G5/1シルト 中～粗粒砂多く混じる 下位 灰N5/0シルト 炭化物粒多く混じる 下面に凹凸多い(第1-3層)</p> <p>28. 青灰5B5/1シルト 粗粒砂多く混じる(遺構埋土)</p> <p>29. 灰10Y5/1シルト 細粒砂多く混じる(分層はできなかったが 上位に細粒砂多く混じり土壌化(第1-4層) 溝は その下面で検出(第1-5層)</p> <p>30. 暗青灰5B4/1シルト 中～粗粒砂非常に多く混じる 炭化物粒混じる 土壌化著しい(第2a層)</p> <p>31. 30に同じ</p> | <p>32. 暗青灰5B4/1シルト質 中粒砂～粗粒砂 ベース粗粒砂の土壌化 但し攪拌はないか? ベース砂層との境不明瞭(第3-2b層)</p> <p>33. 浅黄5Y7/4 上位 極細粒砂～粗粒砂 下位 中粒砂～粗粒砂(下ほど粗くなる) 灰白5Y8/2中粒砂～粗粒砂 オリーブ黒5Y3/1極細粒砂～シルト ラミナ顕著 洪水によるグレーディングの繰り返し 水平堆積 灰白5Y8/2中粒砂～粗粒砂 下方ほど粗いが上半はラミナほとんどみられず(第3-2b層)</p> <p>34. 灰黄褐10YR4/2シルト 植物質多く含む 炭化物まばらに含む(第3-2層下部)</p> <p>35. オリーブ黒7.5Y3/1シルト 北寄りで砂粒多く含む 土壌化著しい 南寄りでは 砂粒ほとんど混じらない(第3-3a層)</p> <p>36. 青灰10BGシルト 暗青灰10BG3/1シルト混在 部分的に粗砂混じる(土坑?埋土)</p> <p>37. 黒5Y2/1シルト(土坑?埋土)</p> <p>38. オリーブ黒10Y3/1シルト(第4a層)</p> <p>39. 緑灰10GY5/1シルト(第4b層) 38,39漸次的に変化 明瞭な境界なし</p> <p>40. 灰10Y4/1シルト(第4a層)</p> <p>41. 緑灰10GY5/1シルト(第4b層) 40,41漸次的に変化 明瞭な境界なし</p> <p>42. 黒N2/0シルト(第4a層)</p> <p>43. 緑灰10GY3/1シルト(第4b層) 42,43漸次的に変化 明瞭な境界なし</p> <p>44. 緑黒7.5Y2/1シルト(第4a層)</p> <p>※38～44の呼称については、便宜的に第4a層と第4b層を重複して使用</p> |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

図11-2 X=-33,980ライン土層断面図

(西)  
T.P.+2.0m

(東)  
T.P.+2.0m



1. 青灰5B6/1シルト～粘土 炭化物多く混じる(第1-3層)
2. 褐灰10YR5/1シルト 中～粗粒砂若干含む 炭酸鉄多量に含む 特に下層との境付近に集中(第1-5層)
3. 灰5Y4/1シルト～シルト質細粒砂 細～中粒砂混じる 炭化物若干混じる(第2a層)
4. 3と5のブロックの混合(遺構埋土)
5. 青灰5B6G/1シルト ラミナは不明瞭 よもぎ色はいる(第2b層)
6. 青灰5B5/1極細粒砂～細粒砂 ラミナ有り 10との境界不明瞭  
青灰5B6G/1シルト ラミナは不明瞭(第2b-1層)
7. 灰黄褐10YR4/2シルト～砂質シルト 植物遺体多く含む 6の最下部 8との境界不明瞭(第2b-1層)
8. 黄灰2.5Y5/1極細粒砂～中粒砂 ラミナ有り 植物遺体多く含む 西側で10を緩やかに切るが不明瞭(第2b-1層)
9. 黄灰2.5Y6/1細粒砂 ラミナ不明瞭 東側で10を比較的是っきりと切る(第2b-1層)
10. 浅黄5Y7/3細粒砂～粗粒砂 灰5Y5/1極細粒砂最上位に有り 灰黄褐5Y5/1極細粒砂を2～3層挟む  
全体的に水平方向 細部では乱れたラミナ多くみえる 6との境界も曖昧 11との境は明瞭 一連の堆積か(第2b-2層)  
浅黄2.5Y7/4中～細粒砂主体(上位)～灰白5Y7/2細粒砂 褐灰10YR4/1極細粒砂 細かいラミナ顕著にみられる(第2b-2層)
11. 灰黄褐10YR5/2シルト 上面に足跡?顕著(第2b-2層下部)
12. 黄灰2.5Y4/1シルト粗粒砂 中粒砂までを多く含む  
下面の凹部に灰白2.5Y7/1粗粒砂入る(残)ところ有り 西寄りで粗粒砂の割合減じる(第3-2a層?)
13. 黒2.5Y4/1シルト 粗粒砂含む 粗粒砂は東寄りではなく 西寄りでも多く含む(ベース砂の影響か)(第3-2a層?)

14. 灰白5Y7/1～浅黄5Y7/4粗粒砂 ラミナは明瞭ではないが堆積層(第3-2b層)
15. オリーブ黒5Y3/1シルト 18のブロック多く含む 植物遺体多く含む(第3-2b層下部)
16. 黄灰2.5Y4/1シルト(第3-2b層)
17. 灰白5Y7/2シルト 炭酸鉄の集合か?
18. 黄灰2.5Y4/1シルトに黒褐2.5Y3/1シルトが小ブロックで混じる 炭酸鉄多く含む(第3-3a層)
19. 黒N2/0粘土 上部を18に削られる(第4a層)
20. 緑灰10GY6/1シルト(第4b層)
21. 黒N1.5/0シルト(第4a層)
22. 黒N2/0粘土 上部を18に削られる(第4a層)  
※19～22の呼称については、便宜的に第4a層と第4b層を重複して使用
23. 灰オリーブ5Y5/2シルト(確認調査第20層)
24. 黒2.5Y2/1シルト(確認調査第21層)
25. 黒2.5Y2/1シルト(確認調査第21層)
26. 黄灰2.5Y4/1シルト～極細粒砂(確認調査第22層)

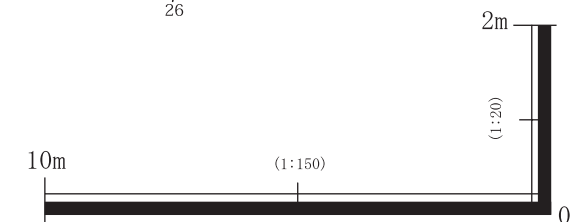
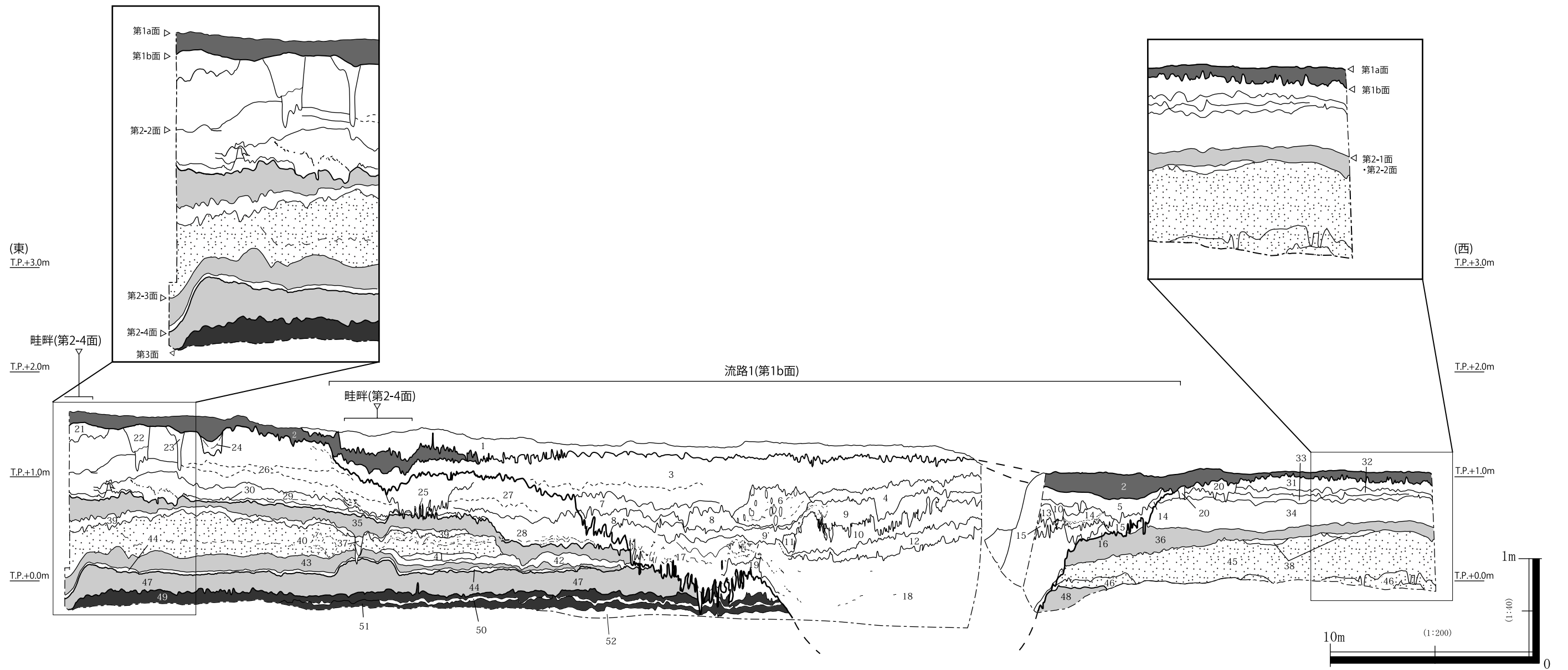


図12 X=-138,860ライン土層断面図





1. 青灰 5B5/1 シルトに 黄灰 2.5Y4/1 シルト混じる 粗粒砂多く混じる(第1-5層)
2. 暗青灰 5B4/1 中～細粒砂混シルト～粘土 粗粒砂若干含む  
灰 N4/0 シルト 細粒砂わずかに含む(第2a層)
3. 暗青灰 5B4/1 青灰 10BG5/1 シルト 中～細粒砂若干含む  
上位に根 Fe の降下著しい 4・6 との境界ややあいまい(流路1)
4. 暗青灰 10GB4/1 極細粒砂～シルト(流路1)
5. 灰 N4/0 シルト やや暗い色調 下位に細粒砂(流路1)
6. 緑灰 5G6/1 極細粒砂に青灰 10BG5/1 シルトのブロック(径 5 ～ 15 cm大)混じる(流路1内盛土)
7. 青灰 10BG5/1 シルト 中粒砂若干含む(流路1)
8. 青灰 5B5/1 ～灰白 N7/0 細粒砂～極細粒砂 ラミナ著しく乱れる 植物遺体(流木)多く含む(流路1)
9. 青灰 5B6/1 ～青灰 5B5/1 細粒砂 ラミナ著しく乱れる(流路1)
10. 灰白 N7/0 細粒砂～極細粒砂(流路1)
11. 青灰 5B6/1 極細粒砂と黄灰 2.5Y4/1 シルトの混じり 炭酸鉄、植物遺体多く含む(流路1)
12. 灰 N5/0 細粒砂～極細粒砂 ラミナ不明瞭(流路1)
13. 灰 N5/0 青灰 5BG6/1 のシルトブロック間に青灰 5BG6/1 極細粒砂入る(流路1)
14. 灰 5Y6/1 細粒砂～極細粒砂 炭化物含みラミナ著しい  
青灰 5BG5/1 シルト 極細粒砂 ラミナなし 2 僅かに入る(流路1)
15. 灰 5Y6/1 シルト 灰～オリブ黒 10Y4/1 ～ 3/1 シルトブロック 14 混じる(流路1)
16. 緑灰 10G6/1 シルト～粘土 炭化物がラミナ状に入る(2～3単位)(第2b層)
17. 灰 N4/0 細粒砂～極細粒砂に灰白 N7/0 粗粒砂入る 著しく乱れた状況 植物遺体多く含む(流路1)  
東寄り中で～細粒砂へ変化

18. 灰 N4/0 シルト～極細粒砂(流路1)
19. 灰 N4/0 細粒砂～極細粒砂に灰白 N7/0 粗粒砂入る 著しく乱れた状況 植物遺体多く含む  
東寄り中で～細粒砂へ変化(流土) 20. 青灰 5BG6/1 シルトブロック(31,33起源)に2,32がブロックではいる(第1b面遺構)
21. 青灰 5B5/1 シルト～極細粒砂(第1b面遺構)
22. 上位: 青灰 5B5/1 シルト～極細粒砂 下位: 上位と26のブロック混じる(第1b面 溝17)
23. 青灰 5B5/1 シルト～極細粒砂(第1b面遺構)
24. 青灰 5B5/1 シルト 上位に炭化物帯状にはいる(第1b面 溝15)
25. 青灰 10BG6/1 極細粒砂～シルト質細粒砂(流路1)
26. 青灰 5BG5/1 極細粒砂～シルト 上位に少量、下位に多く炭化物ラミナ状にはいる(第2b層)
27. 灰 N4/0 シルト～極細粒砂 乱 東寄りに水平方向に炭化物帯状にはいる(第2b層)
28. 黄灰 2.5Y4/1 シルト 植物遺体の細片がラミナ状にはいる 水平方向のラミナ (第3-1b層)
29. 灰黄 2.5Y6/2 粗粒砂～灰白 2.5Y8/1 細粒砂 下位にラミナ顕著 西寄りで極細粒砂の薄層へ変化(第3-1b層?)
30. 灰 N5/0 シルトに炭化物水平方向に多くはいる 35上の植物が35を覆う泥の中に倒れた? 35は水浸(第3-1b層最下部)
31. 青灰 5B5/1 シルト～極細粒砂 炭化物ラミナ状にはいる(第2b層)
32. 青灰 5B6/1 極細粒砂(第2b層)
33. 青灰 5B6/1 極細粒砂(第2b層)
34. 緑灰 10G6/1 シルト～粘土 炭化物がラミナ状にはいる(2～3単位) (第2b層下部)
35. 灰 N4/0 シルト質中粒砂 粗粒砂多く混じる(第3-2a層)
36. 暗灰 N3/0 シルト 下位に粗粒砂多く含む(第3-2a層)
37. 上: オリーブ黒 5Y3/1 シルト 植物遺体入る 中: 35と上のブロックが混じる 下: 下位の細粒砂の流れ込み(第2-2b面 溝22)
38. 黒 N2/0 シルト 粗粒砂多く含む(第3-2a層下部)

39. 灰 N4/0 シルト質粗粒砂 37の小ブロック混じる(第3-2a層下部)
40. 灰 N6/0 細粒砂～灰白 7.5Y7/1 粗粒砂 一部にラミナ残る(第3-2b層)
41. 上: 灰 N4/0 シルト 植物遺体多く含む 下: 灰白 5Y7/1 粗粒砂(第3-2b層)
42. 灰 N5/0 シルトブロック間に灰白 N7/0 細粒砂入る(第3-2b層)
43. 黄灰 2.5Y5/1 シルト 炭化物帯状に入る(第3-3a層～b層)
44. 灰白 10Y7/1 粘土 43と一連の泥堆積(第3-2b層最下部)  
灰 2.5Y4/1 シルト 植物遺体が水平方向のラミナ状に入る
45. 灰白 7.5Y8/1 粗粒砂 ラミナ有り(第3-2b層 洪水砂)
46. 黒褐 10YR3/2 極細粒砂～シルト 植物遺体多く含む(第3-2b層下部)
47. 黒 2.5Y2/1 シルト～粘土 植物遺体多く含む(第3-4a層)
48. 黒 2.5Y2/1 ～黄灰 2.5Y4/1 シルト 細粒砂多く含む(第3-4a層)
49. 黒 N2/0 粘土 上を47に削られる(第4a層)
50. 緑灰 10GY6/1 シルト(第4b層)
51. 黒 N1.5/0 シルト(確認調査第19層)
52. 黄灰 2.5Y6/1 シルト(確認調査第20層)

図13 X=-138,940ライン土層断面図

な把握を行った。掘削深度についての指示は第3-3a層上面までであり、ここで掘削を終えた。いずれの水田域も北に向かって下がる地形を呈していたが、これに第1面の流路がほぼ重複していて、第2面の検出時に流路埋土を掘削するという混乱が生じることとなった。

2トレンチにおいては1トレンチの反省をふまえ、調査区壁の傾斜をゆるくすることで比較的深い側溝の掘削を行い、層序関係をより総合的に捉えることをこころがけた。T.P.+1.0m付近の青灰色シルト上面を第1面とする認識は変わらず、青灰色シルトを第2b層、これに伴う土壌を第2a層とし、第2a層より上の泥層を一括して第1層とした。調査中の湧水は1トレンチよりも相対的に少なく、第1面から掘り下げた南北方向の筋掘り（図9）において流路1の断面、第3層以下における複数の土壌の重なりを確認することができた。少なくとも3層の土壌とそれらのベースとなる堆積層が存在し、1トレンチ西半分で最終遺構面とした黒色土壌と同じと考えられる層も認められた。この黒色土壌は流路1の北側にまで連続を追うことができたため、この段階では第3の遺構面として認識し、第1面と第3面の間にある複数の遺構面（地表面）を第2面のそれぞれ枝番号で理解することとした。しかし第2面はいずれの面も調査区全体に広がるものではなく、2トレンチ南東側が厚く、北西側へ勾配をもち、層厚も減じるもので、果たして当時の地表面がそのまま残されているものでないことが推測された。

03-5-4トレンチの調査に際しては1・2トレンチの所見を元に、それまで確認調査時の層呼称を用いてきたことを改め、第1層から第3層の大きなまとまりと、第1面から第3面までの遺構面のまとまりを基準に層、ならびに遺構面呼称を抜本的に整理した。流路1より南側における第3層の重なりについて、2トレンチとの対応が十分なものとは言いがたかったが、砂に覆われる遺存状況の良好な水田面を確認し、第2面とした。4トレンチにおいても南北トレンチとした筋掘り（図8）から得られる情報が大きいものであったが、この水田土壌と考えられる層が比較的厚く、その下層の黒色粘土を第3の遺構面と捉えた。さらにそのベースに緑灰色粘土をもつ点が注意された。この層は確認調査において、T.P.±0mよりやや低いところでみられたもの（確認調査第XⅧ層）と同一と考えられ、2トレンチで検出した第3の遺構面が灰白シルトに覆われ、確認調査第XⅥ層と対応する点と齟齬をきたすこととなった。結果的には2トレンチの調査時に第3の遺構面と捉えた面も、4トレンチで良好に残存していた水田面も、それぞれ調査範囲全体に広がる面ではなく、部分的に残存する範囲をそれぞれのトレンチで面として認識したものと理解できるようになった。したがって、2トレンチ以降に第3面として調査した面に、第2-4面と第3面が混在しており、第2面の各面の対応と併せて、現地での調査終了後に改めて整理することとなった。結果、第2面は第2-1面～第2-4面の4面があり、第3層は遺構面の認識を元に呼称すると、第3-1層～第3-4層としてとらえられることとなった。しかしなお、第3-1層のように分布範囲の比較的狭い層については、離れた地点で確認されたものが同一の地表面として存在していたかどうかは不明瞭なままである。

03-5-5トレンチの調査以降は、今回の調査範囲の中では比較的安定して確認された第1面を軸に、それ以上を第1層、それ以下を第2層～第3層として整理し、調査を進めることとなったが、調査範囲東寄りの5～7トレンチにおいては再度大きく様相が異なることとなった。まず、4トレンチまでは機械掘削の対象とした第1層最上部の近世段階と想定した砂層が厚みを増し、その間に土壌が介在することが明らかとなった。これはさらに東側の03-4調査区においては調査の対象とされており、部分的ながらも面的な把握を行うこととした。機械掘削において現代の耕作土などを除去した段階で不整形ながら条里畦畔や島畑が認められたため、これ以下は人力掘削を行うこととした。さらに西寄り第1層として



一括していた泥層も、その細分の単位が明瞭になり、間に炭化物を含む層などが挟在する部分もみとめられ、層の細分が必要な状況が生じた。調査範囲西寄りで設定した基本層序の呼称を変更することは困難であったため、近世段階の砂層以上は層名を便宜的なもの（近世層1など）とし、砂層以下については第1層に枝番号（第1-1層～第1-5層）を付することで対応することとした。遺構面呼称については極めて変則的ではあるが、近世段階については近世面1などを、第1層に伴うものには第0-1面～第0-5面とする呼称を付することとした。なお7トレンチの調査段階で実施した地形環境分析において、第1層上部を中心に地震による変形構造のみられることが指摘された。これは1トレンチの調査段階から認識されていた、中世段階と推測される植物遺体を含む乱れた有機質層の形成原因でもあり、泥の中に堆積していた植物遺体などが地震動によって変形し、複雑に乱れた状況を形成したものと理解された。また第1-5層とした、一部で第2a層を攪拌する泥層については、7トレンチ以東においては青灰色を呈し、堆積層に近い様相をみせるが、以西では植物遺体を多く含む泥層へと漸移的に変化するようであった。やはり一部においては地震動による変形構造がみられるが、腐食の進んでいない蓮根の地下茎とおぼしき植物遺体が多量に遺存していた。この地震による変形は第1面の検出時にも障害となった。青灰色シルトの上面を検出する際、足跡状に第2a層、第1-5層が入り込み、遺構の輪郭などの確認が困難な状況が生じた。明瞭に把握するために波打つ層上面の底付近まで削り込むようにした部分では、そうでない部分より5cm程度深く掘り下げることとなった。

また6トレンチ、7トレンチでは調査深度の最下層付近にみられた第4層についても西寄りとは様相が異なる点が認められた。西寄りでは緑灰色粘土層の上位に位置する黒色粘土を第4層、厳密には第4a層としたが、6、7トレンチ東寄りではその上部にさらに複数の緑灰粘土と黒色粘土の組み合わせが認められた。この組み合わせについては、本来は複数のものが存在していたが、第3-3層による攪乱により西寄りの部分においては上部のものが失われたものと推測された。しかしこの点については層名、遺構面呼称ともに変更は加えていない。

8トレンチ、9トレンチにおいては近世洪水層が薄く、間に遺構面も見出せなかったため、第1層の途中までを機械掘削の対象とし、おおむね第1-5層以下を人力掘削の対象とした。第1面は比較的明瞭に把握できたが、第2b層とした青灰色シルトが薄く、その下部に細粒砂を主体とした砂層の堆積がみられた。層境が不明瞭であったため、一連の堆積としてとらえたが、2トレンチ、4トレンチにおいて流路1の南側に分布する第3層の一部とつながることも想定された。直接連続する土層断面を確認することができなかったため、位置付けについてあいまいな部分を残すこととなった。

06-2調査においては03-5調査における層序認識を前提として作業を進めた。06-2-2トレンチで確認した流路1より東側の微高地における第3層の細分については、他の範囲との対応が不明瞭であったが、便宜的に上部からの遺構面の順に対応を想定した。

以上のように、細部においてあいまいな部分を多く残す層序認識となったが、おおむね弥生時代前期、あるいはそれ以前の緑灰粘土と黒色粘土が互層をなす段階（第4層）から、弥生時代中期頃を中心に堆積物による微高地の形成（上部での土地利用：第3層）、古墳時代にかけての平坦化（第2b層）、古墳時代中期から奈良時代への安定期（微高地上での居住域の形成：第2a層）を経て、後背湿地の環境の中、古代から中世にかけて泥が堆積する環境（蓮根畑などの利用など：第1層）が継続したものと理解される。近世以降は讃良川からの堆積物で調査範囲北東寄りは地盤が上昇し、耕作域として利用されたものと推測される。

## 第2節 第1面の調査成果

### 第1項 第1面の概要（図15）

今回の調査においては第1面が最も良好に把握できた遺構面とすることができる。調査面積が広いため、個別の遺構などの詳細については、調査範囲全体を微地形ごとに細分し、それぞれのまとまりごとに調査成果を報告することとしたい。本項では個別の報告に先立ち、微地形区分と調査範囲全体における第1面の概要を記載する。

第1面では、本来の地表面に近いものと認識する土壌の上面である第1a面と、土壌を除去し、堆積層上の遺構検出面である第1b面の2面を認識する。作業上の順序としては第1-5面を除去することで検出される第1面（第1a面）では、第2a層が全域にわたってあらわれるのではなく、部分的に第2b層があらわれる範囲がみられるが、それぞれはほぼ第1面全体の地形を反映した形で分布する（図14）。調査範囲東よりの高まり部分（微高地1）と調査範囲中央北寄りの高まり（微高地2）付近では第2b層が分布し、それ以外の部分では第2a層が残存する。おおむね第1-5層が攪拌を伴う土壌であって、地形の高い部分では第2a層を削平しているものと考えられ、第2a層の遺存部分においても当時の地表面がそのまま堆積層に覆われた状況ではないと考えられる。第1a面では第1-5層の下面としての遺構（内部が第1-5層で充填される溝など）がいくつかみとめられた。断片的に分布するものであり詳細には記録していないが、東西、あるいは南北方向をとるもので、ある程度、条里型地割の影響を受けているものと考えられる。

第1面に帰属する遺構は、ほぼ全てを第2a層を除去して検出した第1b面において検出した。第1面では調査範囲のほぼ中央付近に流路1が流走するが、これが第1面の最大の遺構であり、かつ微地形区分にも大きい意味をもつ。調査範囲中央付近、北西方向から流れてきた流路は弧状に向きを変え、北東から南西の方向を取る。この方向変化の頂点付近に東側から直線的に流路2が延び、合流する。この合流点から南西側ではゆるやかな蛇行をみせながら調査範囲南西部にいたって、幅、深さとも大規模なものとなり、南寄りに大きく方向を変える。

流路1、流路2の北東部分は第1面で最も地形の高いところであり、微高地1とした。弥生時代中期段階と想定する第3-2b層の堆積によって形成された微高地で、幅50mの帯状を呈し、中でも北西側がより高く、南東側にはゆるやかに下る。微高地の中央稜線上に多数のピットが分布し、掘立柱建物、柵などが分布する。また井戸もみられ、居住域を形成していたと考えられる。微高地南西側の傾斜は比較的勾配がきついが、この部分では等高線に沿う方向で、土坑が列状に分布する。03-5-7トレンチにおいてまとまった分布を示すが、03-5-5トレンチでは同様の地形においてピットが列状に分布する。また微高地の北東辺と南西縁に土器埋納遺構が分布する。

微高地1と流路1の間を微低地1とし、流路2の南側の部分を微低地2とした。微高地1と微低地1の比高差はおおむね60cm程度を測り、比較的急な勾配をもつ。微低地1・2とも遺構分布は希薄であり、土器集積1とした、製塩土器や炭化物、赤色顔料などの集中する遺構がみられる程度である。

逆「C」字状に湾曲する流路1の西側、調査範囲中央付近の高まりを微高地2とする。やはり弥生時代の堆積層により形成されたと考えられる微高地であり、北が高く南に下がる勾配をもつ。東西方向の幅は約30mであって、微高地1よりやや低く、小規模である。この微高地上においても居住域を構成する各種遺構を検出した。掘立柱建物、井戸等であるが、ピットの分布は微高地1に比べ散漫である。微高地の東西に土器を埋納する遺構の分布をみるが、微高地1でみられたものとは時期が異なるものである。

また微低地3との高低差はそれほど顕著なものではない。

微高地2と流路1との間を微低地3とした。微高地2の縁辺に帯状にめぐる地形であり、東側と南側では幅約20m程度、西側には低い部分が広がっていく。微高地2の南側を中心に井戸や土坑といった遺構の散漫な分布が認められる。

流路1の南側の高まりを微高地3とした。検出範囲が狭く、微地形の全容を知ることは難しいが、微高地1、2よりはやや低い地形であり、調査範囲の南側に高くなっていく幅広い地形の可能性を推測する。微高地3の北東部分では微低地2へとなだらかに連続し、この部分に位置する土坑は埋土の様相に微低地3で確認されたものと類似するものが多い。一方、微高地3西縁は流路1の肩部へと距離をおかず連続し、微低地といった部分を見出しがたい。微高地3上では北から西縁にかけて、流路の輪郭に平行するように複数の溝が分布するほか、西側では流路の肩付近で土器を埋納する土坑などが複数分布し、比較的濃い遺構分布をみせる。

南へ大きく方向を変えた流路1の西側の高まりを微高地4とした。やはりベースには弥生時代の堆積と考えられる堆積層があり、安定した微高地と考えられるが、不整形な溝などの散漫な分布がみられるのみで、明確な遺構は認められない。これより西側は調査範囲外となるが、道路を挟んだ西側は讚良郡条里遺跡03-6として調査が実施されており、連続すると考えられる地表面も確認されている。

以上のように、第1面の調査範囲全体を微地形により、微高地1～4、微低地1～3に区分した。以下、この区分ごとに調査成果を記述していく。また流路については2条を検出したが、このうち流路1については大規模な遺構であり、単一の遺構名称で括ることが適切かどうかについては逡巡するところである。しかし流路そのものの形状や埋土の状況から明確に区分することは難しい。このため流路1については調査時のトレンチを基準に便宜的に4区域に分け、それぞれ流路1-1域～流路1-4域と認識することとした。主に遺物の報告に際してこの呼称を積極的に用いるが、遺構そのものの記述においても限定的に使用することとした。

## 第2項 微高地1

### 概要(図16・17)

調査範囲の北東部に位置する微高地1は、弥生時代中期の遺物を含む、大規模な洪水堆積物によって形成されたもので、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて周囲が埋没していった後、古墳時代以降においても微高地として残されていた地形である。周囲の調査成果からみると必ずしも高い地形とはいええず、特に北寄りの部分では調査中も湿潤な環境は変わらなかったが、それでも本書で報告する調査範囲のなかでは最も高い部分ということが出来る。最も高い微高地中央付近で標高T.P.+1.5m程度を測り、微高地上において相対的に低い03-5-5トレンチ南東部分で標高T.P.+1.3m程度を測る。古代以降、第1-5層の攪拌により上面を削られた範囲が多く、第0-5面検出段階において姿をみせていた遺構も多い。したがって、本来は検出状況よりもやや高い地形であったものと推測する。主観的な把握ではあるが、微高地上面の幅は40～50mを測り、その中央北寄りから南西斜面を中心に多数の遺構が分布する。

直接第1面にかかわる事象ではないが、微高地上面が軸方向に直行して幅4～6m程度の溝状に分断されている箇所が認められた。埋土が第1-5層と考えられるもので、第1面廃絶後の作用であるが、後述する微高地2においてもみられる現象であり、興味深い。

微高地1においては03-5-6トレンチを中心とする北寄りの範囲で多数のピットを検出し、そのうちの

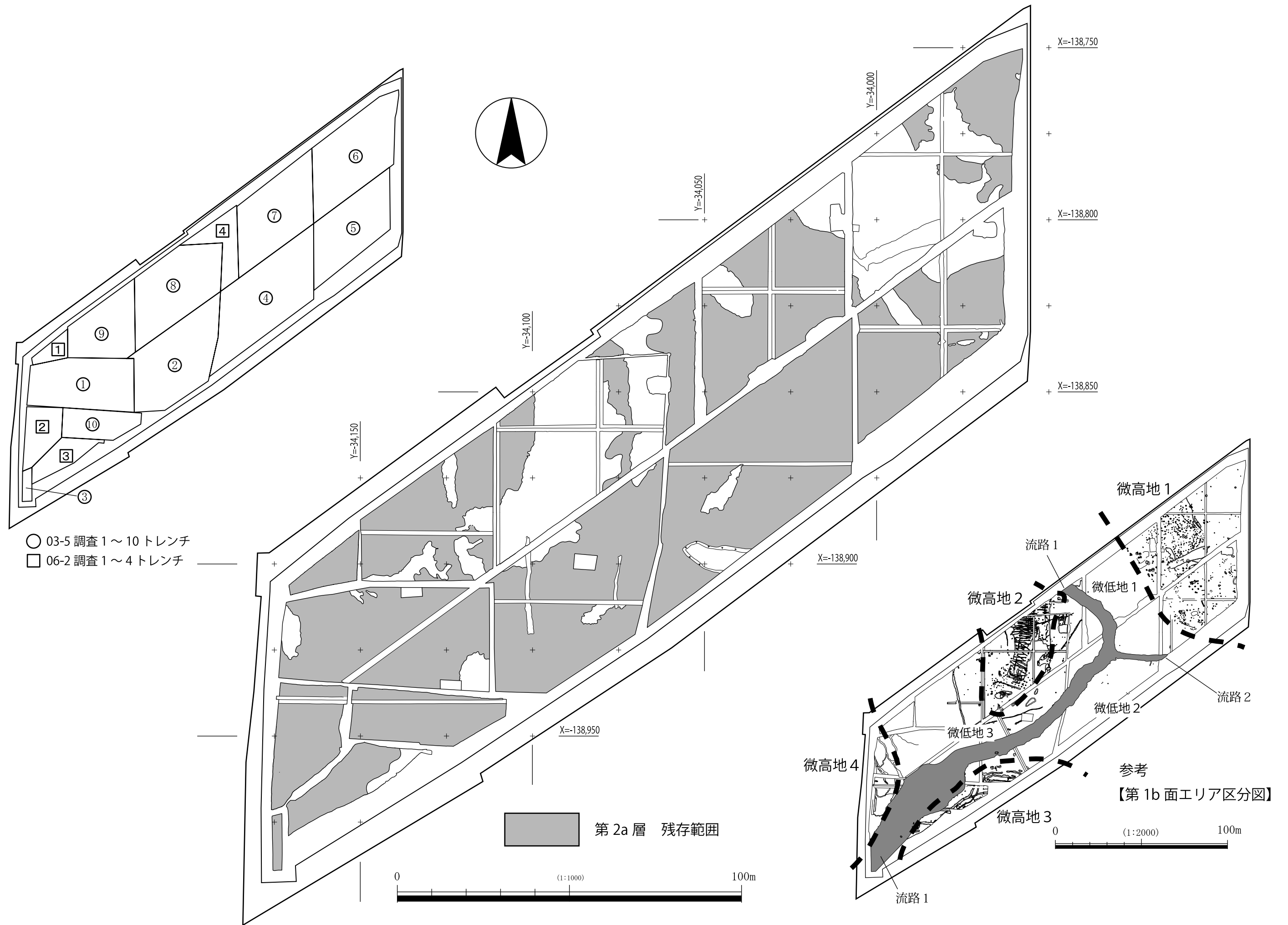


図14 第1面(第1a面) 第2a層分布図 (s=1/1000)

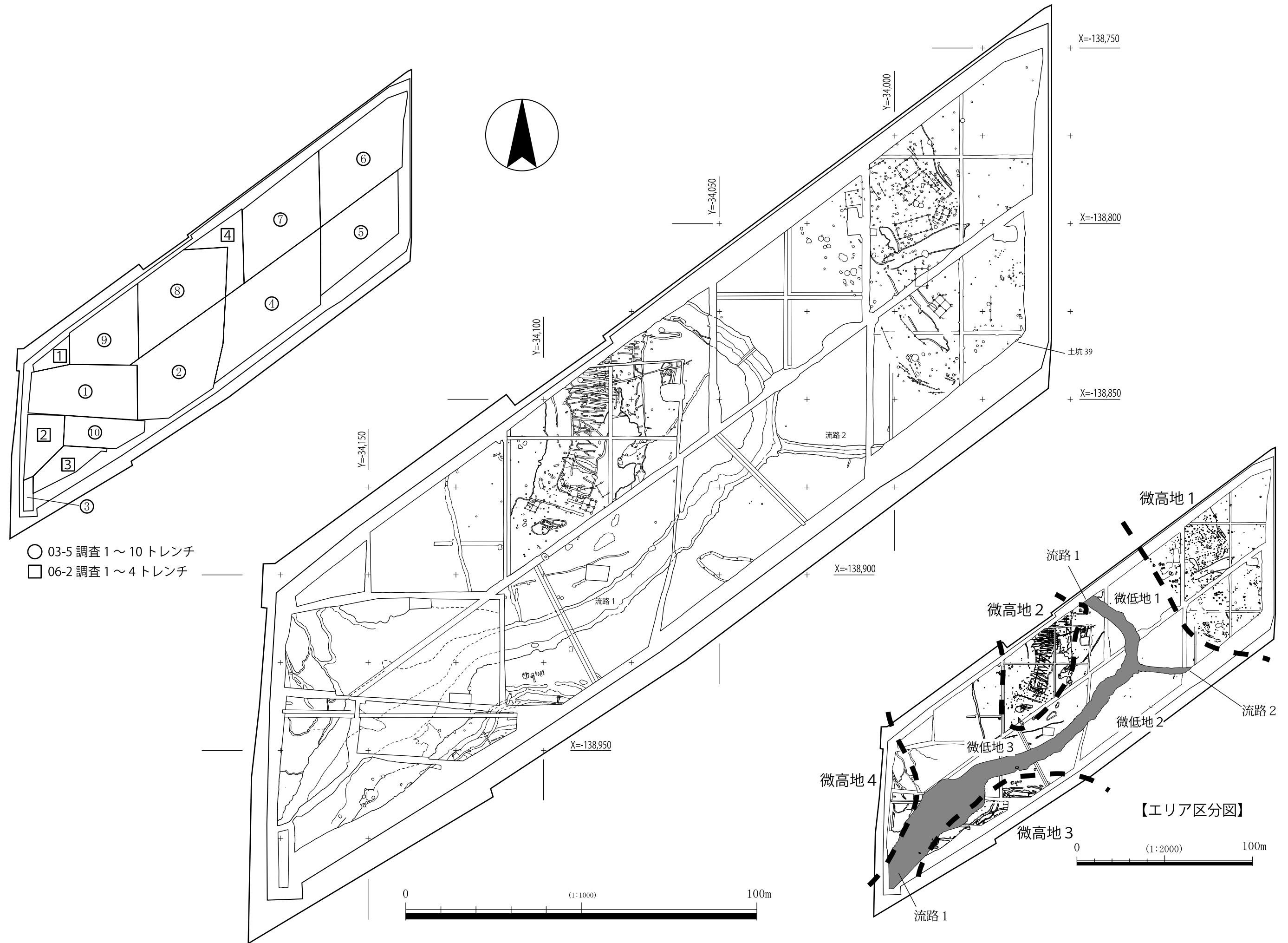


図15 第1面(第1b面) 遺構分布図 (s=1/1000) ・エリア区分図

いくつかについては掘立柱建物を構成するものと考えられる。微高地1においては建物1～6の6棟を想定した。また、建物を構成するにはいたらないが列状に並ぶものも複数認められる。また有意な組み合わせを見いだせないピットも多数あるが分布範囲が建物などの分布域に集中する傾向が認められるため、居住域を構成する遺構の一部であると推測される。建物以外の遺構には井戸があり、井戸側をもつという意味で確実なものとしては井戸1のみとなるが、土坑としたものなかで大型のものは素掘りの井戸であった可能性がある。個々の遺構間の切り合い関係は少なく、こと建物として認められるものには重複関係はみられない。同一場所において長期に営まれた居住域ではないと考えられる。なお、建物の軸に統一性がみられない状況が認められ、おもに微地形の方向を反映した軸をもつものが多いと思われるが、全体的に計画的な配置がなされた可能性については否定的な状況である。

須恵器、土師器の坏類を土坑あるいはピット内に埋置し、埋め戻したと想定する遺構を土器埋納遺構とするが、微高地1上に多数みられる土坑の中では4基がそれに相当すると考えられる。時期的に異なる遺構と考えられ、直線的に並ぶようにみえる配置も、微高地の地形を反映したものとしておくほうがよいと考えられる。

調査範囲北半の遺構が集中する部分の南西側傾斜面には、等高線に沿う形で土坑が列状に分布する。規模、深さともばらつきがあり一様ではないが、いずれも掘削直後に埋め戻されたようであり、掘削土のブロックを多く含む埋土が認められる。明確な土器類の出土が無く、時期、性格とも不明であるが、1基からはヒョウタンの仲間の種子がまとまって出土している点に注意される。

微高地1上面においても南寄りには遺構分布希薄となるが、ピット、土坑などが分布する。掘立柱建物もみられるが、周囲にピットの集中する傾向は認められない。微高地1南寄りでは南西側の傾斜面にピット列が複数認められた。やはり等高線に沿う方向のものが主体であり、柵列のような性格が想定される。またこれらに近接して、大型の土坑に須恵器大甕を倒立して埋納したものが1基確認された。

遺構出土遺物については個別に報告するが、微高地1全体の土地利用を間接的に示す、地表面付近で形成された土壤に含まれる遺物には、弥生時代から古代にかけてのものが認められる。総じて層出土遺物の少ない調査区内においては細片が主体ではあるが、比較的出土遺物の多い地域といえることができる。また古墳時代後期以降の遺物も相対的に多いようである。

以下、個別の遺構について報告する。

#### 建物1 (図18)

微高地1北寄りに位置する掘立柱建物である。重複する建物遺構はみられないが、北西方向に井戸の可能性を有する土坑1、土坑2がやや距離を置いて位置する。散漫な柱穴以外に重複する遺構はないが、四辺にやや距離を置いて軸を近しくするピットの列があり、あるいは関連する柵などの存在を想起させるが、厳密に軸をそろえるというものではなく、可能性を指摘するに留めたい。土層観察用の筋掘りにより、北角の柱穴1基を欠くが、梁間2間、桁行3間の柱配置をもつものである。柱間の寸法は均等ではなく、梁間は約2.0m、桁行側は中間の柱間が2.4mとやや広く、その両側は1.6mと狭い。北東側の梁間では確実ではないが、わずかではあるが棟持柱が外へ張出すようである。規模は芯々距離で、4.2m×5.4mを測り、面積は22.7㎡となる。方位は座標北より55°東に振れている。柱穴はおおむね一辺40cm程度の隅丸方形を呈するものであり、検出面からの深さは20cm～40cm程度を測る。柱穴埋土の詳細な観察はなし得なかったが、おおむね第2b層を構成するシルトのブロック土で埋め戻されていたようである。



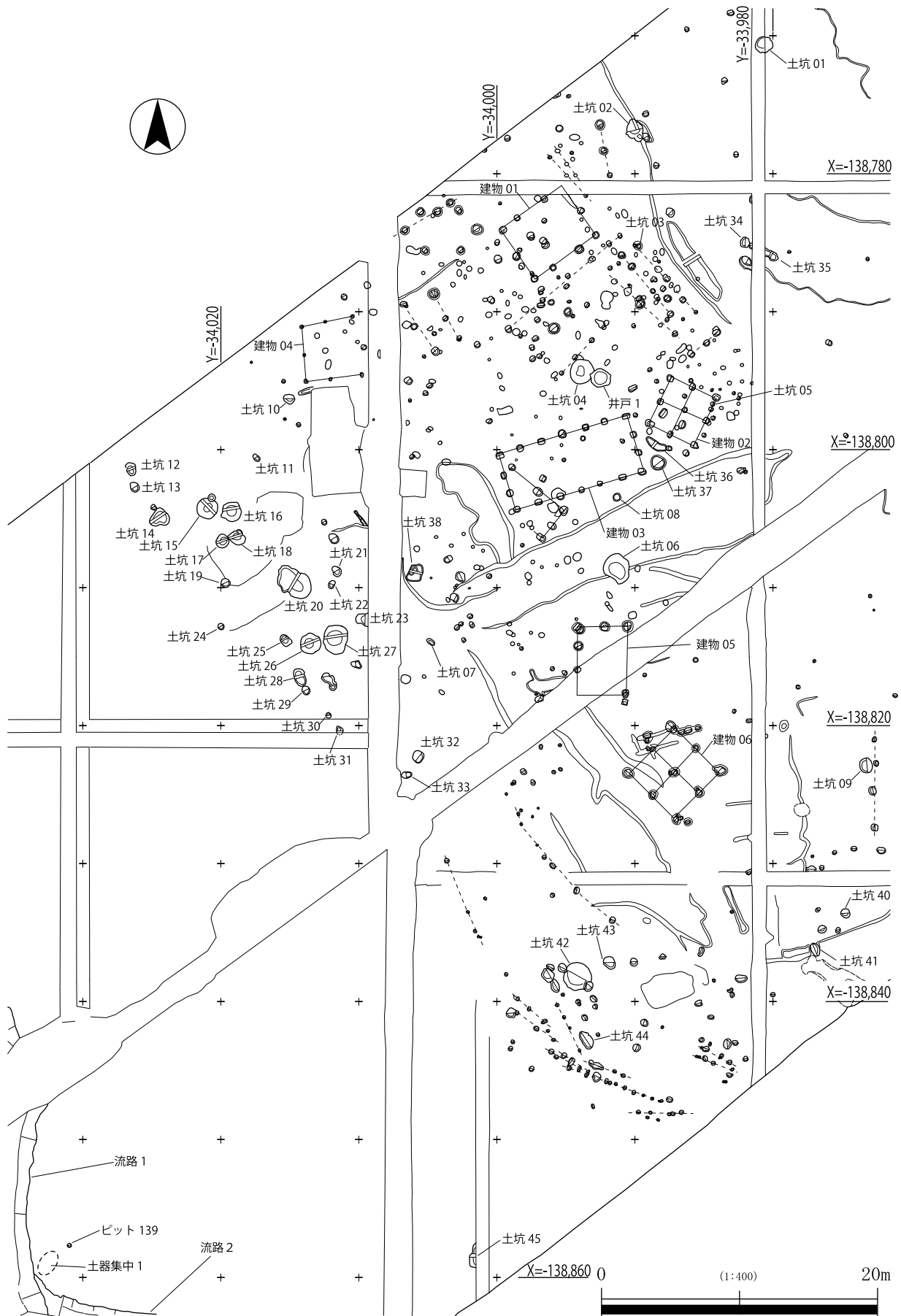


図16 第1面 微高地1・微低地1 遺構分布図 (s=1/400)

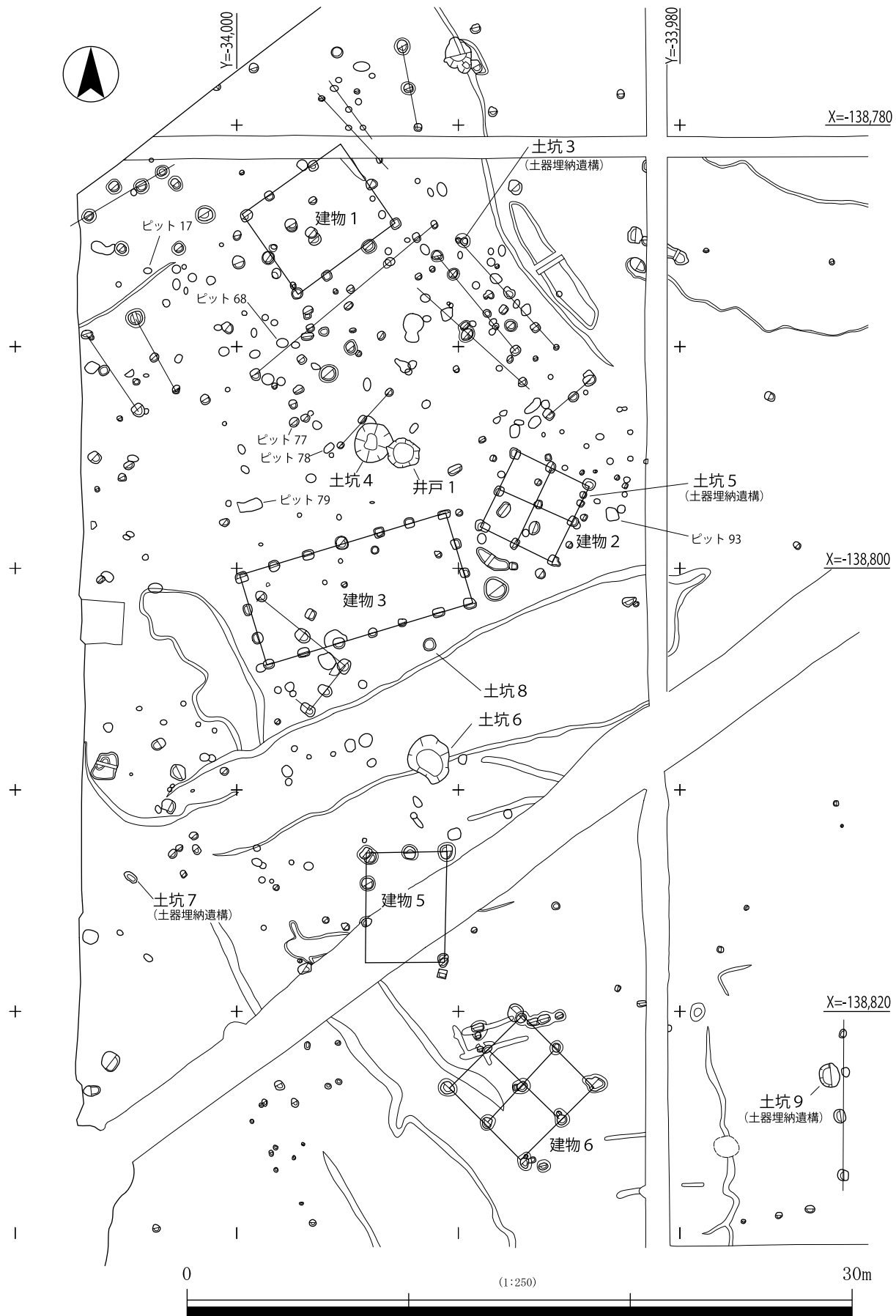


図17 第1面 微高地1建物群 分布図 (s=1/250)

柱穴のうち2基に柱根が遺存していたが、これ以外にも柱穴の底が一段下がるものが含まれており、礎板がみられなかったことと併せ、上屋の重量により、柱が沈下したことが推測される。遺存した柱根のうち、柱穴08から出土した1点は図25-2に示した。最大径18cm、残存長30cmを測り、樹種はコナラ属コナラ亜属コナラ節である。柱穴02から出土した1点は図示し得なかったが、樹種はクリであった。また柱の抜き取りは認められず、建て替えなどは行われなかったものと考えられる。柱穴内には意図的な埋納などの状況を想定させる遺物の出土は無く、出土遺物としては掘方埋土に含まれた土器細片のみとなる。土師器の細片が約60片、須恵器の細片が約10点出土したが、古墳時代の須恵器坏身細片を認めるものの、積極的な時期比定はなし得ない。微高地1の全体的な遺物の出土傾向からは、古墳時代中期～後期、古墳時代後期～飛鳥時代、奈良時代に帰属する可能性があるが、より微地形に即した主軸をもつという点において、古墳時代のいずれかに営まれた可能性により重きを置いておきたい。

### 建物2 (図19)

微高地1北寄りに位置する掘立柱建物である。建物の中央同士の間隔で、建物1の南南東16mに位置し、建物3の東、9mに位置する。実際に上屋構造を想定すると軒が接する距離とみることもできることから、建物2と建物3は同時期には存在しないと考えられる。また、井戸1、土坑4にも近い位置と

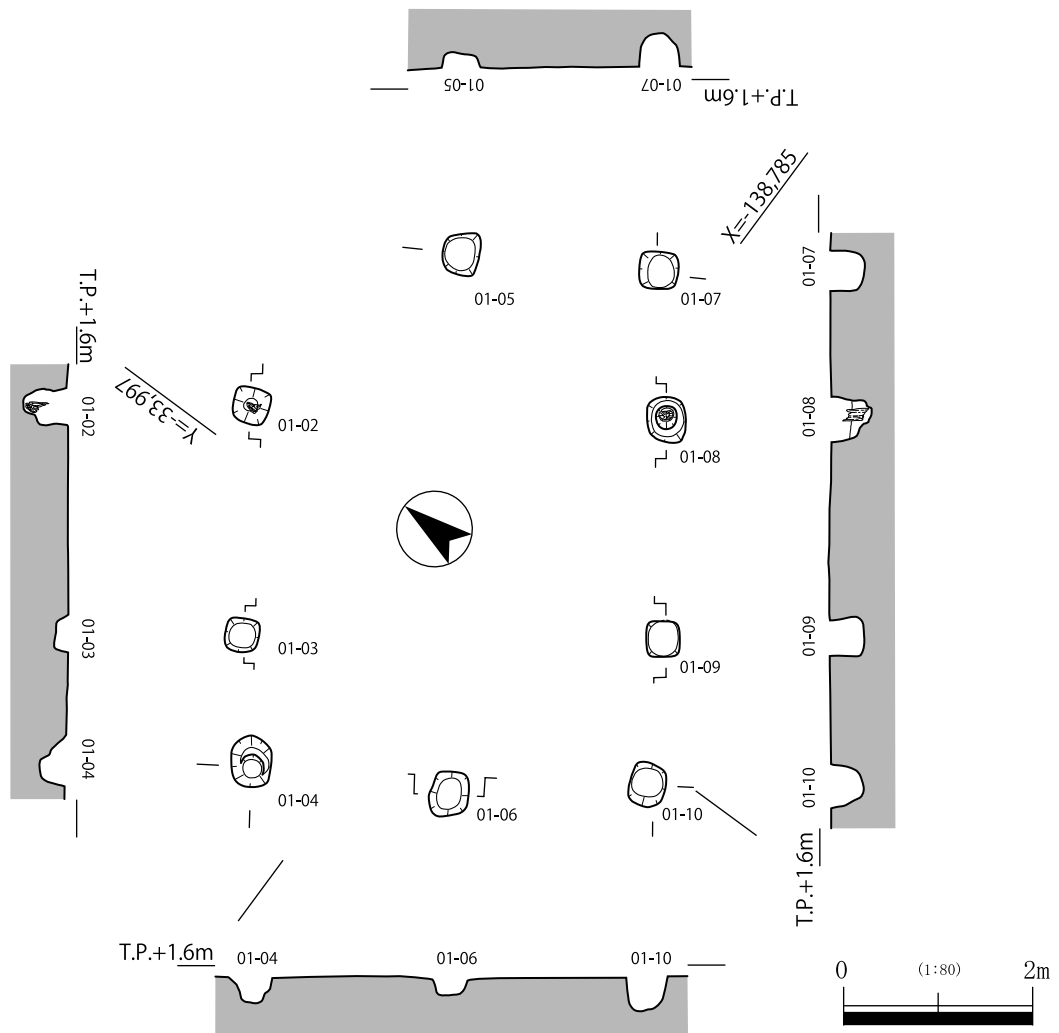


図18 建物1 平・断面図

なる。直接切り合う関係ではないが、土器埋納遺構と考える土坑5が重複する。建物の構造は、やや整然さを欠くが、束柱を有する2間×2間の柱配置をもち、ほぼ正方形のプランをもつ。柱間の寸法に大きなばらつきはみられず、おおむね1.8m～2.0mの数値を測る。規模は芯々距離で、4.5m×4.8mを測り、面積は21.6㎡となる。柱配置にばらつきがあり建物の軸を厳密には決しがたいが、方位は座標北よりおおむね25° 東に振れている。柱穴は一辺30～50cm程度の隅丸方形を呈するものを基本とするようであるが、不整形なものも含まれる。検出面からの深さは15cm～40cm程度を測るが、ばらつきが大きい。建物1同様、柱穴の底が一段下がるものが含まれており、礎板がみられなかったことと併せ、上屋の重量により、柱が沈下したことが推測される。柱穴埋土は、おおむね第2a層、第2b層を構成するシルトのブロック土で埋め戻されていたようである。残存する柱根は無かったが、断面の観察では柱痕跡の可能性のあるラインが認められた。平面で明瞭ではなかった点や柱痕跡と考えられる部分にもブロック土が認められる点など、否定的な要素もあり、廃絶時に柱が残されていたかどうかは判然としない。柱穴内には埋納などの状況を想定させる遺物の出土は無く、出土遺物としては掘方埋土に含まれた土器片のみとなる。比較的大きな破片としては図25-3に示した須恵器高坏の脚部がある。脚端部径16.5cm、残存高6.7cmを測る。長脚二段の透かしをもつ脚部と考えられ、TK43型式段階に属するものであろうか。6世紀後半～末のものと考えられる。柱穴04から出土した破片と、柱穴06から出土した破片が接合した。これ以外には柱穴出土物は細片も少なく、土師器、須恵器片8点を数えるのみである。建物の時期については、柱穴出土の高坏を建物築造以前のものとして積極的に認めるうえでは古墳時代中期～後期、5世紀後半から6世紀前半に帰属する可能性は低いと考えられる。微高地1において土地利用が推測される時期のうち、古墳時代後期～飛鳥時代、あるいは奈良時代が帰属時期の候補となるが、先に述べたように建物3との同時存在を否定的に捉え、なおかつ軸方向の層位などを根拠に築造時期に比較的大きな差をもつものとするならば、相互に異なる時期に営まれたものと想定することができる。

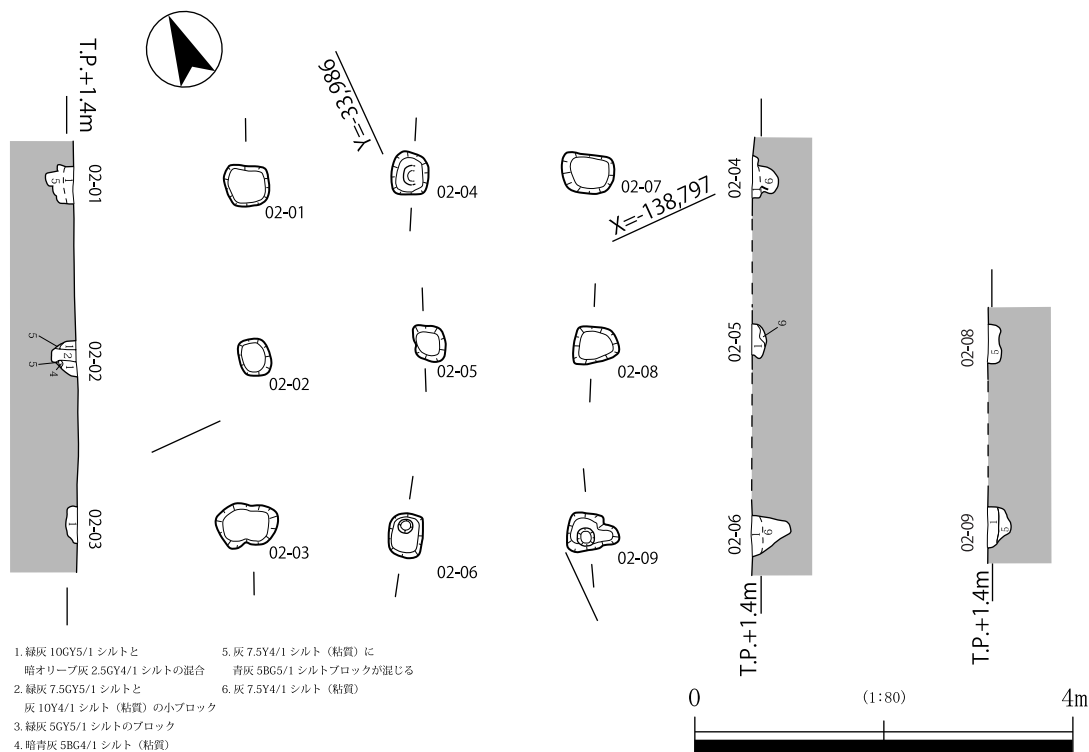


図19 建物2 平・断面図

### 建物3 (図21)

微高地1北寄りに位置する掘立柱建物である。先述の建物2とは近接しており、北側に井戸1、土坑4が位置する。直接切り合う遺構はないが、L字の柱配置を想定する柱列と重複する。しかしこれも積極的に建物や柵といった遺構とすることはできないので、明確な重複関係はないものとしておく。建物の構造は梁間3間、桁行6間の比較的整然とした柱配置をもち、長方形のプランを取る。桁行の柱間隔は約1.6mと整っているが、梁間の柱間隔は1.2m~1.5mとややばらつきがある。奇数の梁間をもつことから変則的な棟持柱の構造が推測されるが、柱間隔が桁行のものに比べて若干狭いことは、これを反映したものと推測する。規模は芯々距離で、4.2m×9.6mを測り、面積は40.3㎡となるが、本書報告範囲で検出した建物遺構では最も大型のものである。建物の方位は座標北より73°東に振れていて、比較的正方位に近い軸をもつものとしてとすることができる。個々の柱穴については、検出時に輪郭を把握しにくいものもあり、断ち割りをを行うことで確認できたものもある。このため検出面での正確な法量を記録できていないものも多いが、一辺35~60cm程度の隅丸方形を呈するものを基本とするようである。建物の軸方向に柱穴の軸方向を揃えるものが多く、整然とした印象を与える。検出面からの深さは25cm~60cm程度を測るが、底面の高さは比較的揃っているようである。柱穴掘方の壁面下部が崩落した状況のものも多く、掘削時の湧水による影響かと思われる。柱穴09、11、13の3基の柱穴に柱根が遺存していたが、それらを含め、柱穴の底が一段下がるものが含まれており、他の建物同様、上屋の重量により、柱が沈下したことが推測される。礎板は認められない。柱穴の埋土は第2b層のシルトブロック間に、第3層の砂

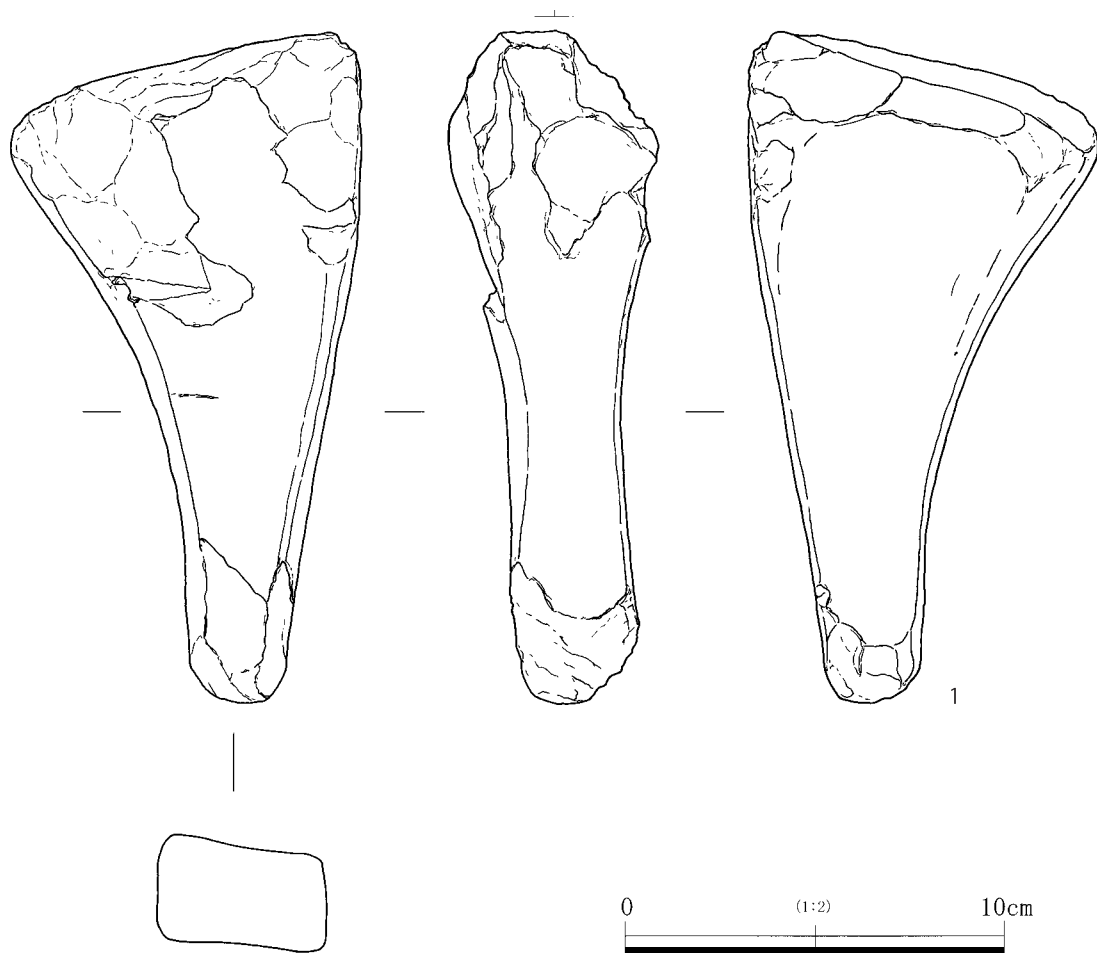
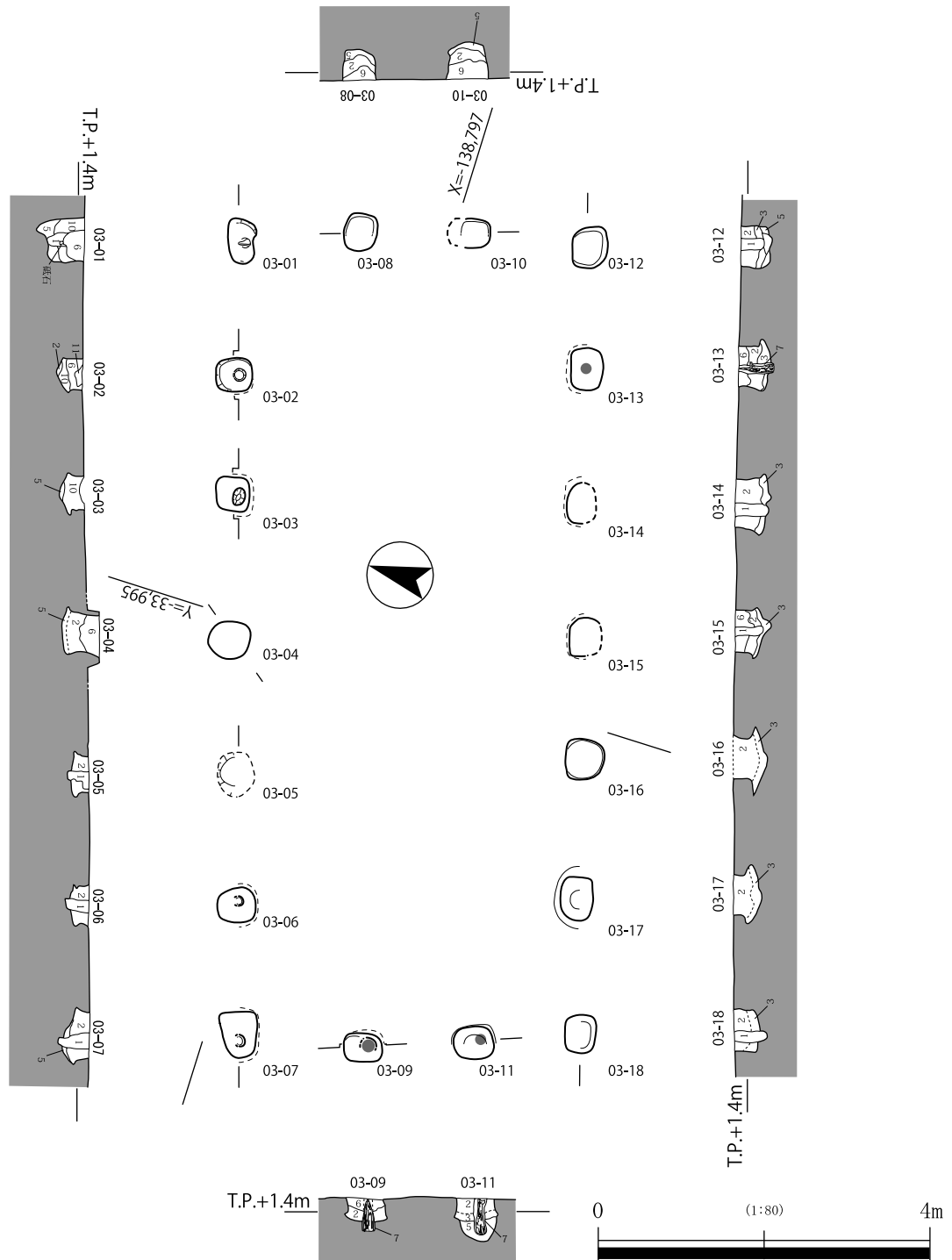


図20 微高地1 建物 出土遺物1



1. 緑灰 10GY5/1 シルトブロックと  
灰 10Y4/1 シルトブロックの混合 | 柱森
2. 灰 10Y4/1 シルトに  
緑灰 7.5GY5/1 シルトブロック混じる
3. オリーブ黒 5Y3/1 シルト (粘質)
4. 灰 5Y4/1 シルトに  
灰 10Y 5/1 シルトの小ブロック混じる

5. 灰オリーブ 5Y4/2 中粒砂に  
灰 10Y4/1 シルトブロックが混じる
6. 緑灰 5G5/1 シルト
7. 灰 10Y4/1 シルト (粘質)
8. 暗緑灰 5G4/1 シルトの小ブロックと  
灰オリーブ 5Y4/2 中粒砂～粗粒砂の混合

9. 暗緑灰 5G4/1 シルト小ブロックと  
オリーブ黄～オリーブ 5Y6/4 ~ 5/4 中粒砂の混合
10. 2 に同じ 炭化物層がラミネ状に入る
11. 青灰 5BG6/1 シルトと  
オリーブ灰 2.5GY6/1 シルトに  
黒 7.5Y2/1 シルト? (炭化物) 混じる

図21 建物3 平・断面図



が混ざるものが多く、柱痕跡とおぼしき部分にもブロック土が含まれている。柱材の残らない柱穴については、柱が抜き取られたものと考えられる。先述の柱3点は図25-4～6に示した。樹種については、柱穴09出土の4はコウヤマキ、11出土の5はスギまたはヒノキ、13出土の6はヒノキである。いずれも残存長40cm前後、残存最大径10～15cmを測る。柱根の遺存していない柱穴においても明確な柱の抜き取り痕跡は認められなかったが、柱穴01において出土した砥石（図20-1）は柱穴の底面から浮いた状態で、なおかつ砥石の下に柱痕跡がのこることから、柱抜き取り後に埋置されたものと考えられる。この前提に立てば、廃絶時に一部の柱は抜き取られたものと理解することができる。1の砥石は砂岩製で、長さ17.8cm、幅9.3cm、厚さ5.5cm、重さ650gを測り、四辺とも良く使い込まれている。これ以外には埋納などの状況を想定できる遺物はなく、他の建物同様、柱穴埋土から土器の細片が出土しているのみである。土師器細片を50点前後、須恵器細片を5点数え、いくらか器形を推測しうるものもあるが、詳細は不明である。したがって、出土遺物から建物の帰属時期を知ることは難しいが、奇数間の梁間構造を、高槻市新池遺跡の事例（森田1993）と類似するものとみれば、7世紀後半以降に下るものと考えられる。

#### 建物4（図22）

微高地1北寄りに位置する掘立柱建物である。他の建物が微高地1の中央付近に微高地の軸に沿って分布するのは異なり、やや西寄りの、遺構分布の比較的散漫な箇所位置する。他の遺構との切合いは無く、近接して建物関連の遺構もみられない。2間×2間の柱配置、正方形のプランをとるが、東側柱列の中間柱が認められず、南北の柱列も平行しないなど、極めて不整形なものといえる。柱間距離も1.7m～2.4mとばらつきが激しく、安定した構造のものではない。方位は座標北より西に4°程度振れた

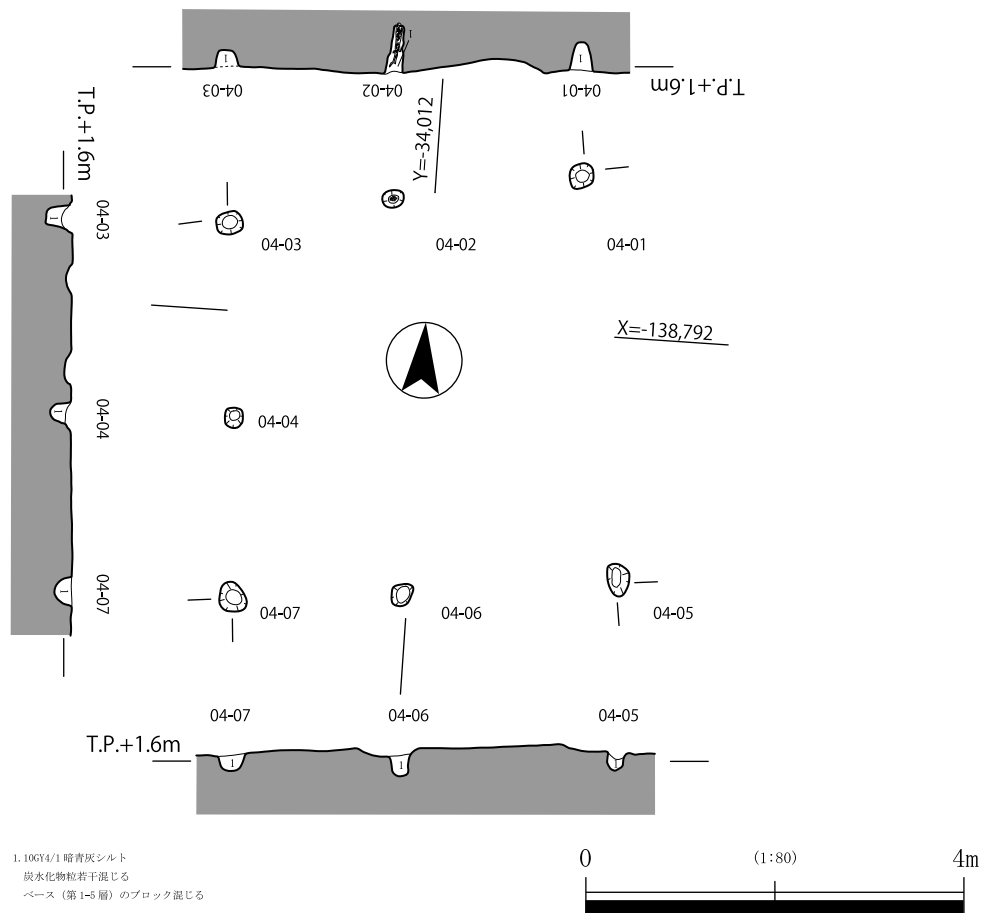


図22 建物4 平・断面図

もので、ほぼ正方位に近い建物軸をとる。個々の柱穴は長軸30cm未満の隅丸方形、あるいは不正円形であり、概して小規模である。柱穴02に柱根が遺存しており、これのみ深さ50cmを超えるが、他の柱穴は深さ30cm未満と浅い。柱穴埋土はベース土（第2b層）のブロックを含むシルト層であり、柱穴02を除き、柱痕跡は認められない。柱穴02に残存していた柱根（図25-7）は残存長49.4cm、残存径5cmを測るが、枝あるいは節が伸びた状態で残存している。樹種はモミ属である。各柱穴からの出土遺物は土師器、須恵器の細片がわずか4片みられたのみで、時期などを詳細には知り得ない。建物の方位が正方位に近いという点をもって、第1面の遺構の中では遅れた時期を想定するにとどめるが、構造や柱穴の様相など、他の掘立柱建物とは異なるところも多く、建物としての性格も作事小屋のようなものを想定しておきたい。

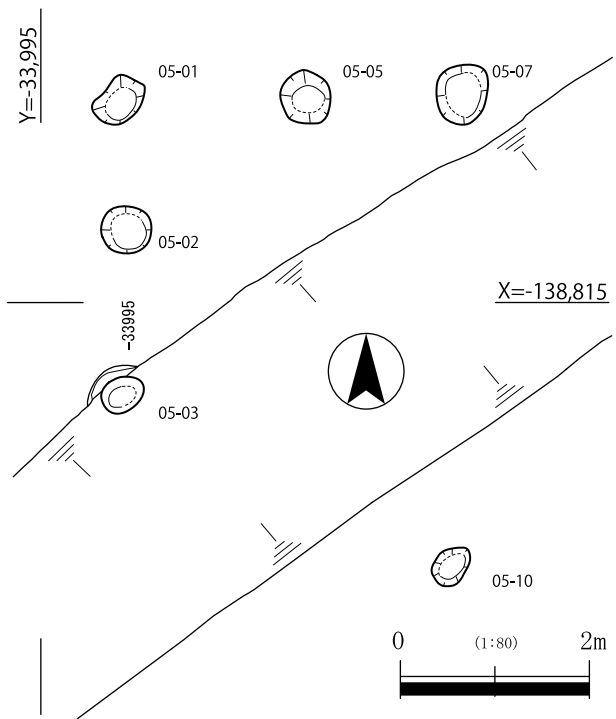


図23 建物5 平面図

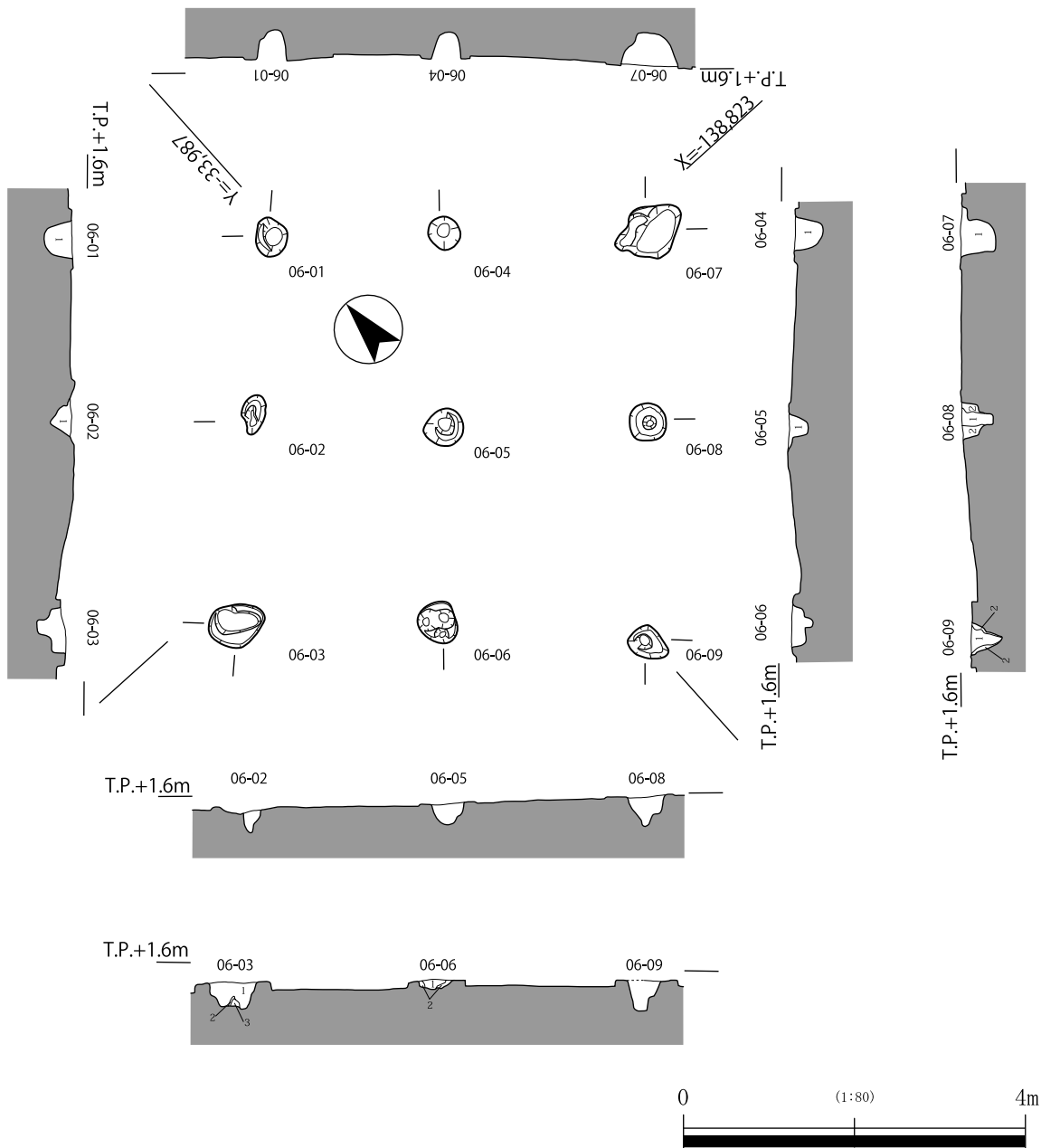
#### 建物5（図23）

微高地1中央付近に位置する掘立柱建物である。他の建物遺構との重複はない。北に14m離れて建物3があり、南に10m離れて建物6が位置する。03-5-5、03-5-6トレンチの境に位置するため、4基の柱穴を欠くが、2間×3間の柱配置をもつ構造と考えられる。柱穴は長軸50～60cm程度の円形の柱穴を主とし、深さは総じて20cm程度と浅く、柱間隔は1.3m～2.0mとばらつきがおおきい。建物の規模は3.7m×5.0mを測り、面積は18.5㎡となる。建物の軸方向は座標北から約2°東に振った方位をもっており、正方位に近い。個々の柱穴について建物以降であるとの認識が遅れたため、柱穴埋土に関する詳細な観察ができなかったが、平面、断面の確認においても柱痕跡は確認できず、柱根も遺存していない。出土遺物には意図的な埋納などを示すものは無く、土師器、須恵器の細片が出土したにとどまるが、柱穴01、02からは小石が若干出土しており、正確な出土状況は不明ではあるが、柱根石の可能性も指摘される。出土遺物から時期を知ることは難しい。建物軸の方位からは後出の要素も指摘できるが、柱穴が円形を主とする様相は時期的にさかのぼる要素とすることもできる。

#### 建物6（図24）

微高地1中央南寄りに位置する掘立柱建物である。散在するピットとの切合いはあるが、他の建物遺構との重複はない。今回の調査範囲では最も南端に位置する建物遺構ということができ、建物6より南側においては遺構分布も散漫となり、微地形的にもさらに南側への傾斜が始まる部分であり、比較的安定した地形としては南限ということもできるのかもしれない。直接の関連はわからないが、微高地縁辺にみられる柵列の方向も建物6の南側を大きく回るような方向をとっていることから、微高地の南縁としての意識が働いた立地であると考えられる。2間×2間の柱配置を取り、東柱をもつ。柱間隔にはばらつきがあり、最も広いところでは2.5m強、狭いところで2.1mを測る。建物規模は4.8m×4.8mを測り、面積は23㎡となる。厳密な方形の柱配置ではないため建物軸については不明瞭なところもある

が、座標北から約40° 東に振れている。個々の柱穴は不整形な形状のものが含まれるが、比較的整ったものでは、径ないしは長辺40cm程度を測る規模のものがあり、大きいものでは長軸70cmを測るものまでが含まれる。柱穴の深さにもばらつきがあるが、検出面からの深さは40cm弱のものが主体を占める。柱穴には柱根の残存するものはみられず、平面的な検出時にも柱痕跡を認めることは無かったが、埋土断面の観察においては柱痕跡の可能性のある土が認められ、さらに柱穴床面が一段下がるものも認められた。柱穴出土遺物には埋納などの状況をみせるものもとより、土器細片のみみられない。柱穴埋土はべ



- |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>06-1 1. 青灰 10BG6/1 極細粒砂<br/>(ベース砂層)に灰 N4/0 シルトの小ブロック混じる</p> <p>06-2 1. 青灰 10BG6/1 極細粒砂<br/>(ベース)に灰 N4/0 シルトの小ブロック混じる</p> <p>06-3 1. 緑灰 10GY6/1 シルト～極細粒砂に灰 N4/0 シルトブロック混じる<br/>2. 浅黄 5Y7/4 粗粒砂 (ベース砂の巻き上がり)<br/>3. 青灰 10BG6/1 粗粒砂と灰 N4/0 シルトの混合</p> <p>06-4 1. 緑灰 10GY6/1 シルト～極細粒砂に灰 N4/0 シルトブロック混じる<br/>粗粒砂非常に多く混じる</p> | <p>06-5 1. 緑灰 10GY6/1 シルト～極細粒砂に灰 N4/0 シルトブロック混じる</p> <p>06-6 1. 灰 N4/0 シルト粗粒砂多く混じる<br/>2. 青灰 5BG6/1 シルト～極細粒砂ベースに灰 N4/0 ブロック混じる<br/>粗粒砂多く混じる</p> <p>06-7 1. 緑灰 10GY6/1 シルトに灰 N4/0 シルトブロック混じる～極細粒砂</p> <p>06-8 1. 青灰 5B5/1 シルト 2の小ブロック入る<br/>2. 灰 5Y4/1 シルトベースに青灰シルトの小ブロック混じる</p> <p>06-9 1. 青灰 5B5/1 シルト～極細粒砂 2の小ブロック入る<br/>2. 灰 5Y4/1 シルト ベースに青灰シルトの小ブロック混じる</p> |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

図24 建物 6 平・断面図

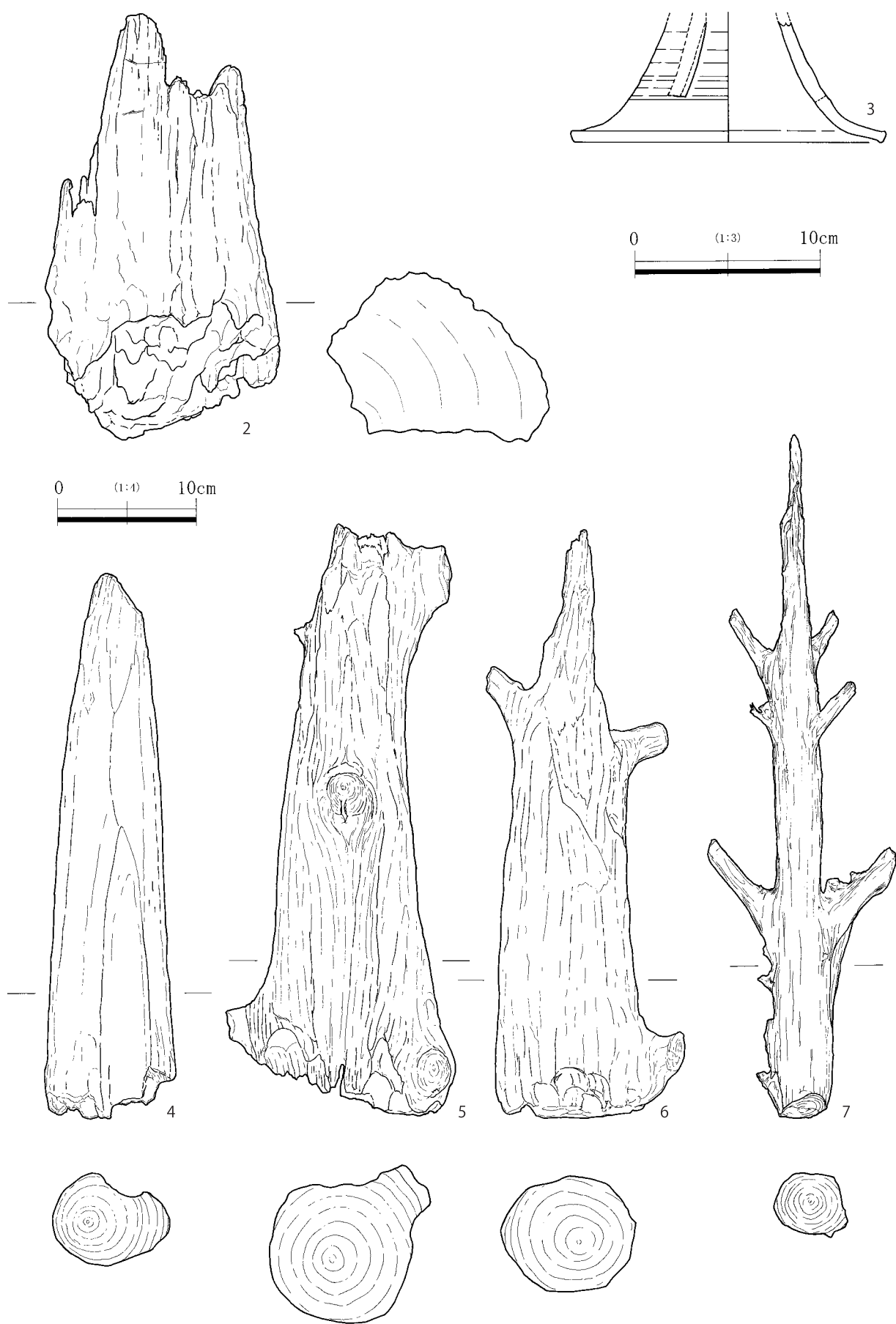


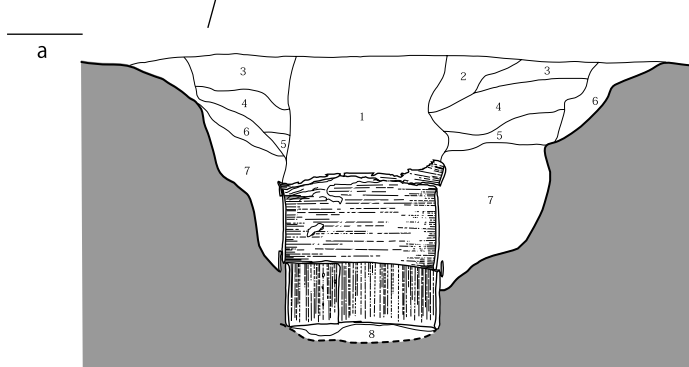
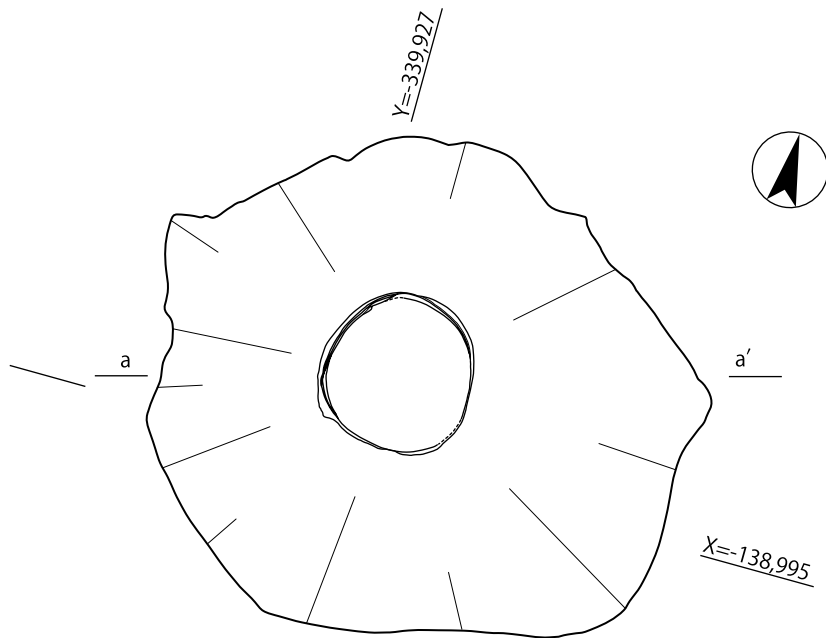
图25 微高地1 建物 出土遺物2

ースの砂層、あるいはシルト層のブロックを含むものであるので、廃絶に際して柱が抜き取られた可能性がある。また埋土に遺物細片を含まないということは、遺構掘削時の周辺土壤に遺物がそれほどなかった状況を示すとも考えられ、微高地1における土地利用の比較的初期の段階であることを推測させる。遺物から建物の帰属時期を知ることはできないが、建物の方位が比較的地形の影響を強く受けていると考えられる点もあわせて考えると、古墳時代にさかのぼる建物であることを推測する。

#### 井戸1 (図26)

微高地1北寄りに位置する井戸である。近接する建物との位置関係では、建物3の北辺柱列から2.5m、建物2の西辺柱列から3.8mの距離を置いて位置している。西側に位置する土坑4を切る関係で、一部が重複する。構造は曲物を井戸側に用いるものであるが、井戸側は最下部から曲物2段分が残存していたが、3段目については下部が残存していたのみであり、これより上部の井戸側は遺存していない。検出面での掘方は基本的には円形を志向しながらも不整形な形状で、長軸1.6m、短軸1.3m、深さは75cmを測る。掘方は鏟状の断面形状をもつが、掘方掘削時に崩落したと思われる箇所が壁面に認められる。また井戸側最下段部分の掘方は曲物の法量にあわせて掘削されており、掘方と井戸側が接している。おそらくこの段階で壁面の一部が崩落していた可能性があるが、井戸側2段目、3段目を設置した段階までに、3段目下部までの掘方を崩落土も用いて埋め戻し、曲物を固定したのち、さらに上部の井戸側の設置と掘方の埋め戻しを段階的に進めたものと考えられる。井戸側に用いられた曲物は径40cm、一段の高さ20cmのもので、箍は個別には巻かれず、各段の継ぎ目の外側に幅10cmのものが巻かれている。掘方は第3-2b層の砂層を貫通しており、これが主たる取水層であったと考えられる。廃絶時に最上部の井戸側が抜き取られたかどうかはわからないが、最終的には比較的均質な砂混じりシルトによって上部まで埋められたようである。

出土遺物には土師器、須恵器、瓦、石、木製品があり、細片を含めた総数は30点を超える。釣瓶などの機能もちうる土器については使用時の遺物であるのか、廃絶時の遺物であるのかは明確に区分できないが、比較的大型の個体は井戸側最下段の曲物内部に集中して残されており、廃棄の一括性を想起させる。いずれにしてもこれらの遺物ともども井戸廃絶時には埋め戻されたものと推測される。出土遺物のうち図化し得た遺物は図27に示した。土師器には坏(8・9)、皿(10)、甕(11)、ミニチュア甕(12)がある。8は内面に放射状暗文がみられ、9は外面口縁部直下に横方向のヘラミガキが認められる。いずれも精製胎土のものである。須恵器は甕体部片(13)のみ図示した。外面に等間隔に並ぶ破裂痕あるいは器壁の剥離痕跡がみられる。瓦は1点のみの出土であるが、半裁された平瓦(15)がある。長さ35.2cmを測る。木製品(14)も1点のみの出土であるが、杭の先端とおぼしきもので、残存長13.5cmを測る。樹種はモミ属である。これ以外に砂岩(図版292-1929)と緑色凝灰岩(図版295-2995)の石材ないしは自然石が出土している。近接地に存在しないものであり、意図的に井戸内にもち込まれたものと考えられる。これら遺物からみて奈良時代中頃に帰属する遺構かと思われるが、平瓦に関しては井戸1の周辺において瓦葺の建物の存在が認められていないことなど、それぞれの遺物の由来については調査範囲を超えた範囲が対象となろう。先述の建物群の中に井戸1と同時期のものも存在すると考えられ、整然とした配置をもつ建物2や建物3などが位置関係からも候補になりうるが、建物個々の造営時期についても明確でないことから、奈良時代段階の景観については、層出土遺物などの様相を加味し、小結において検討したい。



1. 暗青灰 5BC4/1 シルト 中粒砂～粗粒砂混じる
2. 暗オリーブ灰 5GY4/1 シルト 中粒砂含む
3. 暗オリーブ灰 5GY4/1 シルト
4. 灰 10Y4/1 シルト
5. 灰 7.5Y4/1 シルト 中粒砂含む
6. 暗緑灰 7.5GY 中粒砂  
緑灰 7.5GY5/1 シルトブロック含む
7. 灰黄 2.5Y7/2 中～粗粒砂にシルト～極細粒砂ブロック混じる  
ベース (第 3-2b 層) の崩落土、ラミナみられないが埋め戻し土ではない
8. 汚れた砂、滞水時の堆積か？

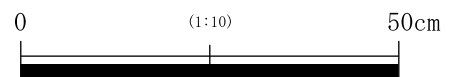
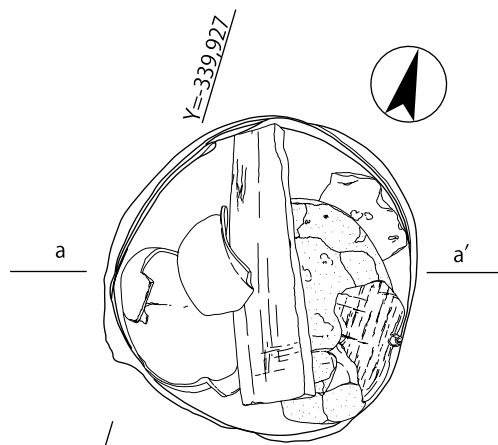
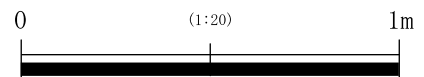


図26 井戸 1 平・断面図 遺物出土状況図



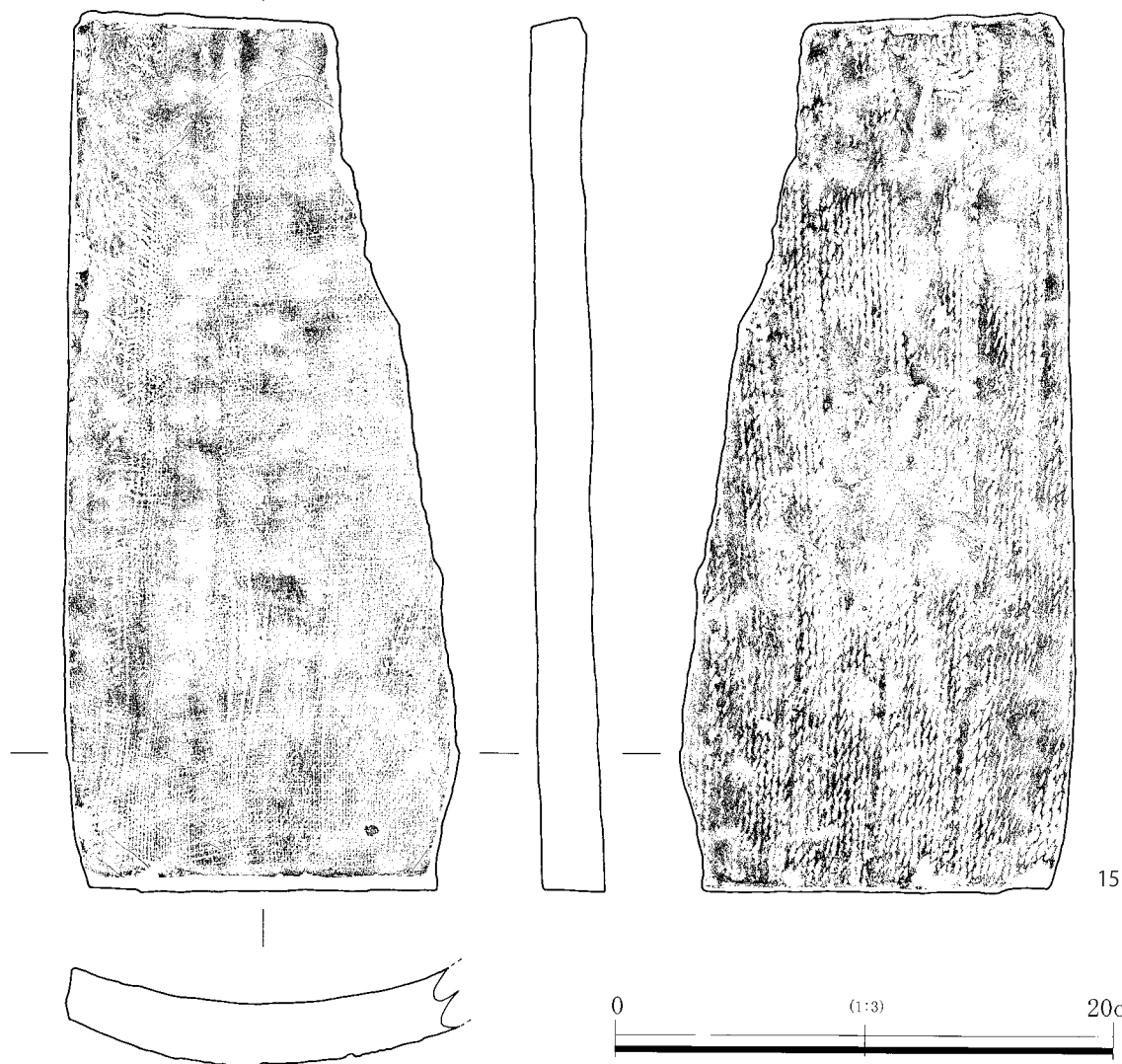
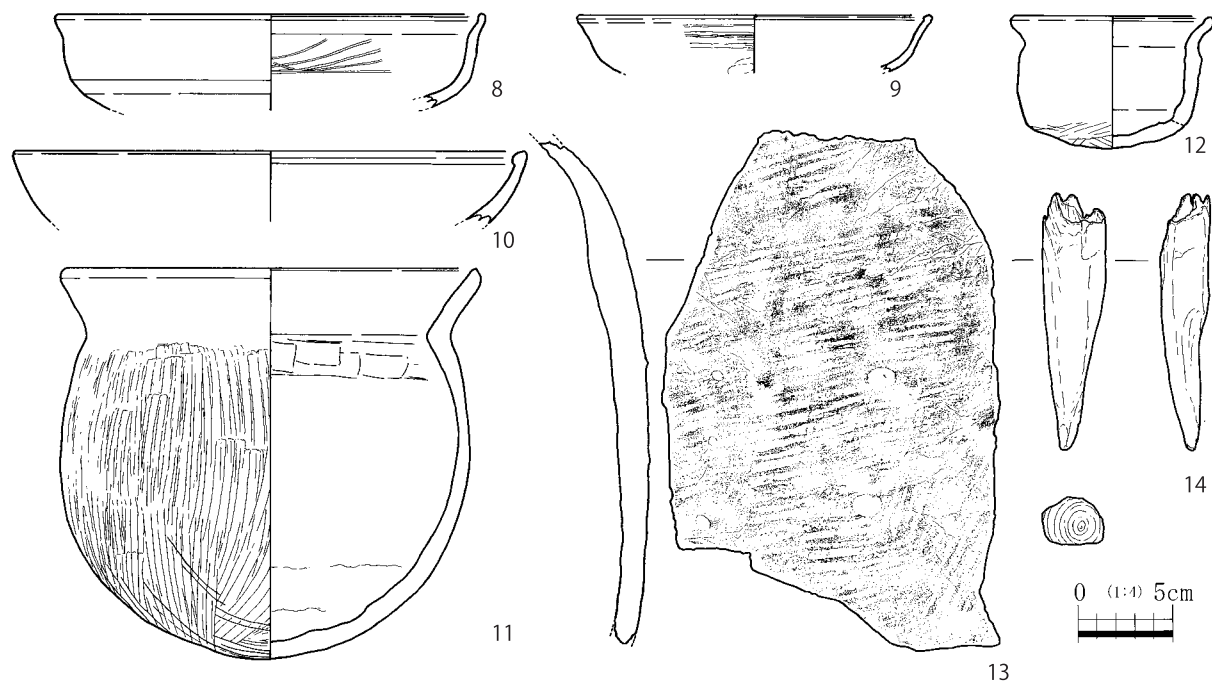


图27 微高地1 井戸1 出土遺物

#### 土坑 1 (図28)

微高地 1 の北寄りに位置する大型の土坑である。周辺の遺構分布は極めて希薄であり、位置的に有意な関連を想起させる他の遺構はみられない。径1.1m～1.2mを測る、やや不整形な変面形を示すが、円形を志向して掘削されたとみることができる。底部は平坦で、壁も一部に崩落によると思われる部分があるが、ほぼ垂直に掘削されている。深さは67cmを測る。埋土下半はシルトブロック間に砂が入るという状況を見せ、木片、炭化物などが多く混じっている。掘削後、短時間での埋め戻しを想起させる。中位より上層にはシルト～極細粒砂の堆積がみられ、さらにその上面の播鉢状にくぼんだところに炭化物の薄層が堆積する。これを植物遺体の炭化とみれば、滞水状況に植物遺体がよどんだ状況を推測することができる。さらに炭化物層の上部は粗粒砂、炭化物を多く含むシルトで覆われ埋没したようである。土坑内からの遺物の出土はわずかであり、土師器細片が2片出土したのみである。土坑と呼称するが、水溜あるいは井戸の機能を否定するものではない。

#### 土坑 2 (図28)

微高地 1 の北寄りに位置する大型の土坑である。建物を想定するにはいたらないが、柱穴の可能性のあるピットを切る。基本的に円形を志向した平面形を示すが、いささか不整形であり、南北1.4m、東西1.1mを測る。深さは84センチを測り、壁はほぼ垂直、底もほぼ平坦である。埋土は土坑 1 同様、下位が間に粗粒砂を含むシルトブロックで埋められ、上位がシルト～極細粒砂で埋没する。遺物には土師器細片 2、須恵器細片 1 があるが、図示し得るものではない。

#### 土坑 3 (図29)

微高地 1 の北寄りに位置する土器埋納土坑である。土坑 2 の南、約 8 m に位置する。周辺はピットや土坑が集中する部分であり、柵列を構成する可能性のあるピットと重複するが、切り合いは明確でない。平面形は楕円形で長軸0.4m、短軸0.35mを測る。垂直に近い壁からゆるやかな播鉢状の底面へつながるU字形の断面形状をもち、深さは27cmを測る。埋土は第2b層のシルトブロックを主体とし、人為的な埋め戻しが推測される。底よりやや浮いた位置に須恵器坏蓋片 (図35-16) がみられ、厳密には埋置を意図したものではないかもしれないが、土器埋納遺構として扱う。これ以外に土師器の細片 9 がみられたほか、須恵器ないしは陶質土器の細片 (図35-17) があり、外面には縄蓆紋・沈線がみられる。16はTK209型式段階に属するとみられ、6世紀後半～7世紀前半頃の年代が想定される。

#### 土坑 4 (図28)

微高地 1 の北寄りに位置する大型の土坑である。比較的遺構の分布密度が高い範囲に位置し、井戸 1 に切られる関係となる。平面形は円形で、径1.8mを測る。深さは40cmと直径に比して浅い。やや凹凸のある播鉢状の断面形状をもち、底部中央がさらに一段深くなっている。埋土は底から壁までが細～中粒砂、シルトブロックなどで埋め戻され、その後、中央上部が砂の多く混じるシルトで埋没している。遺物には土師器細片 2、須恵器甕細片 1 がみられたが、図示し得るものはない。

#### 土坑 5 (図29)

微高地 1 の北寄りに位置する小型の土器埋納土坑である。比較的遺構の分布密度が高い範囲に位置し、建物 2 の柱列と重複する位置にあるが、直接の切り合い関係はない。径0.3mの円形の平面形を示し、深さは10cmを測る。土坑の北西部に土師器壺 (図35-18) を正置する。埋土については記録ができなかったが、意図的に土器を埋納した遺構であると考えられる。18は径10.6cm、器高3.7cmを測る小型の壺で、外面は工具によるナデにユビオサエの痕跡が残る。時期は奈良時代中頃～後半と考える。

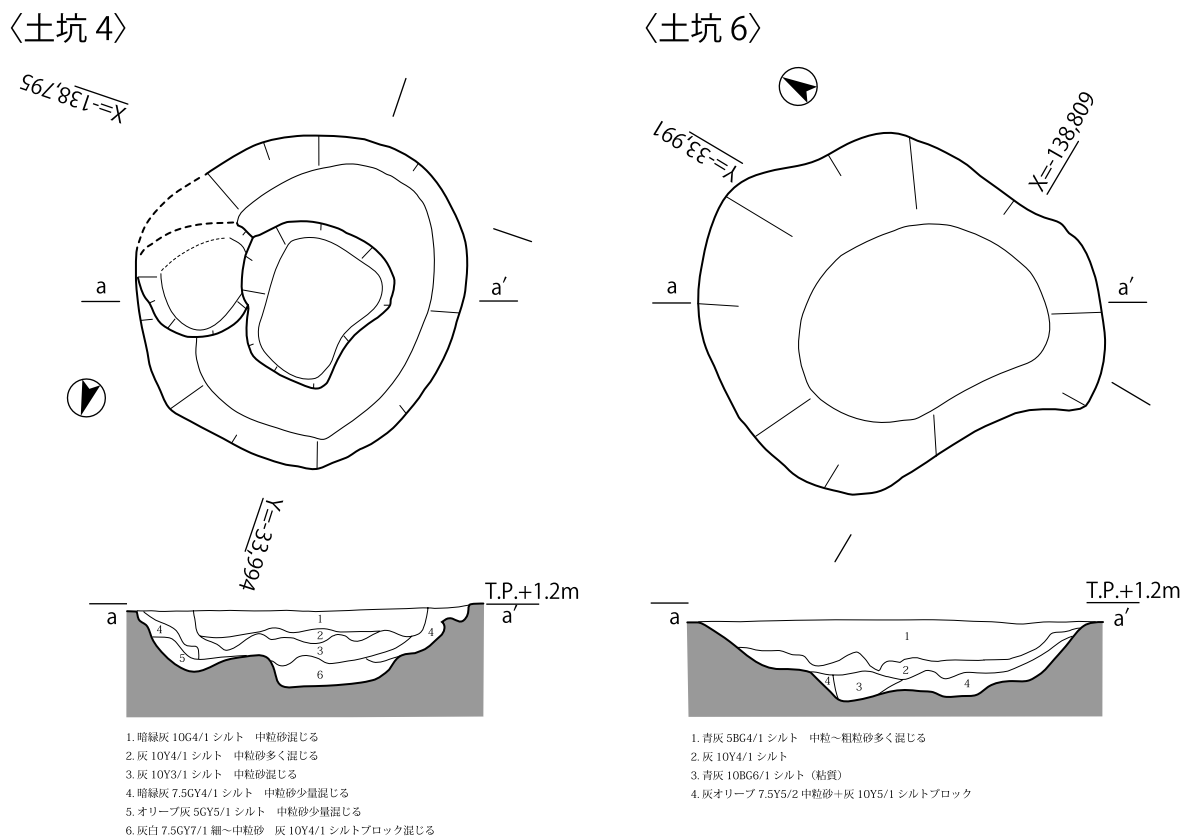
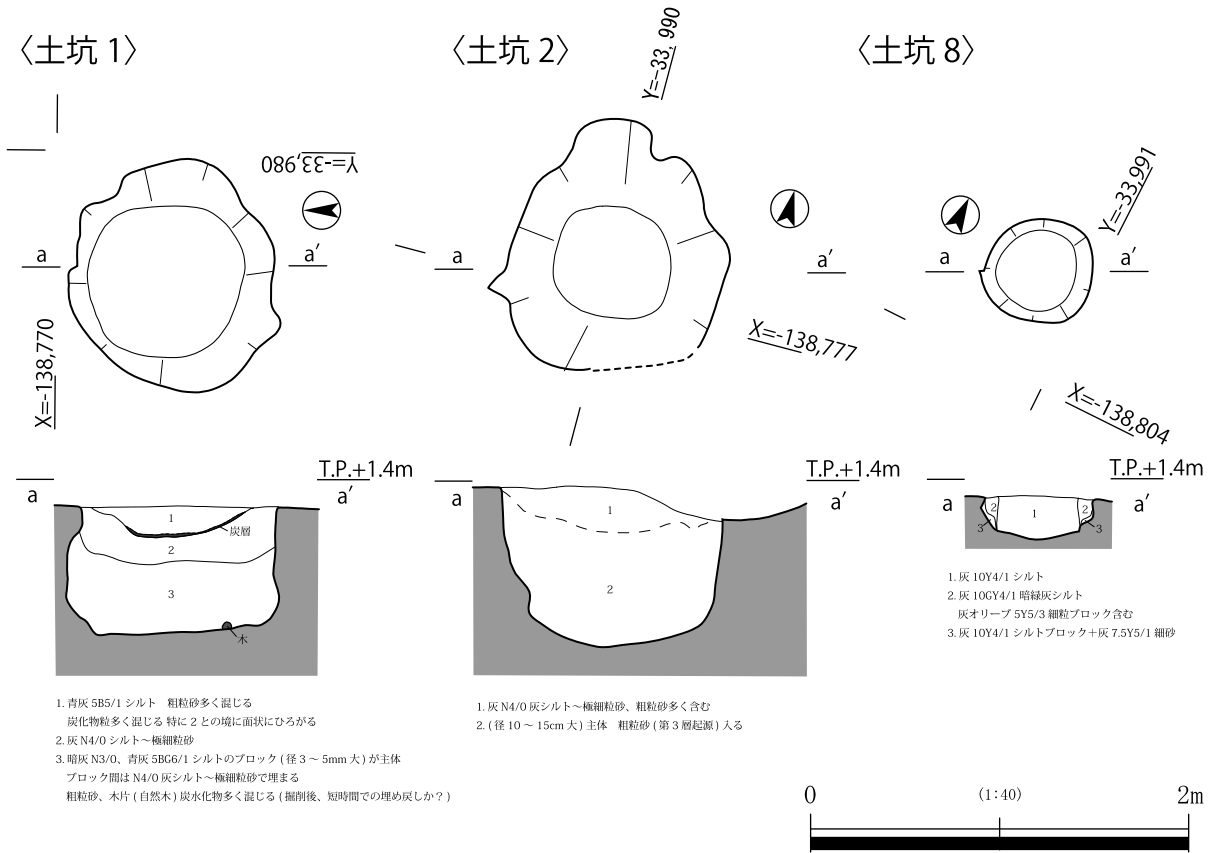


図28 土坑 1・2・4・6・8 平・断面図

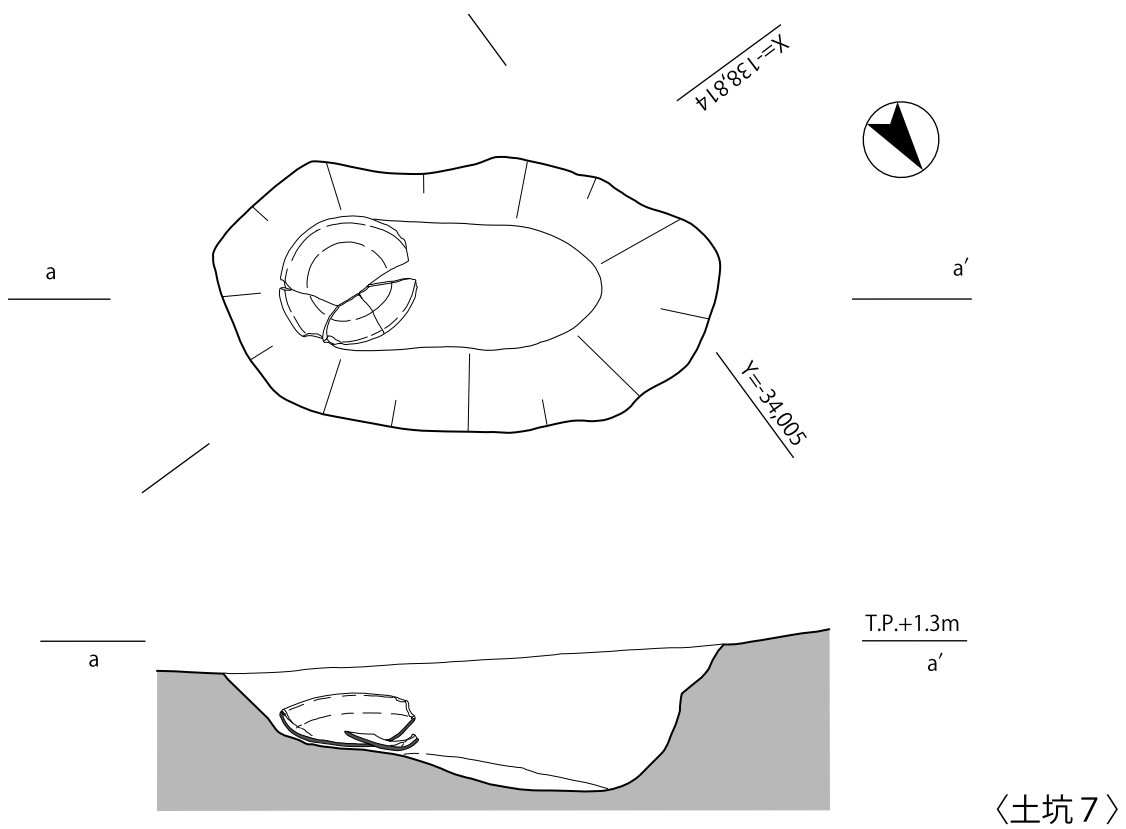
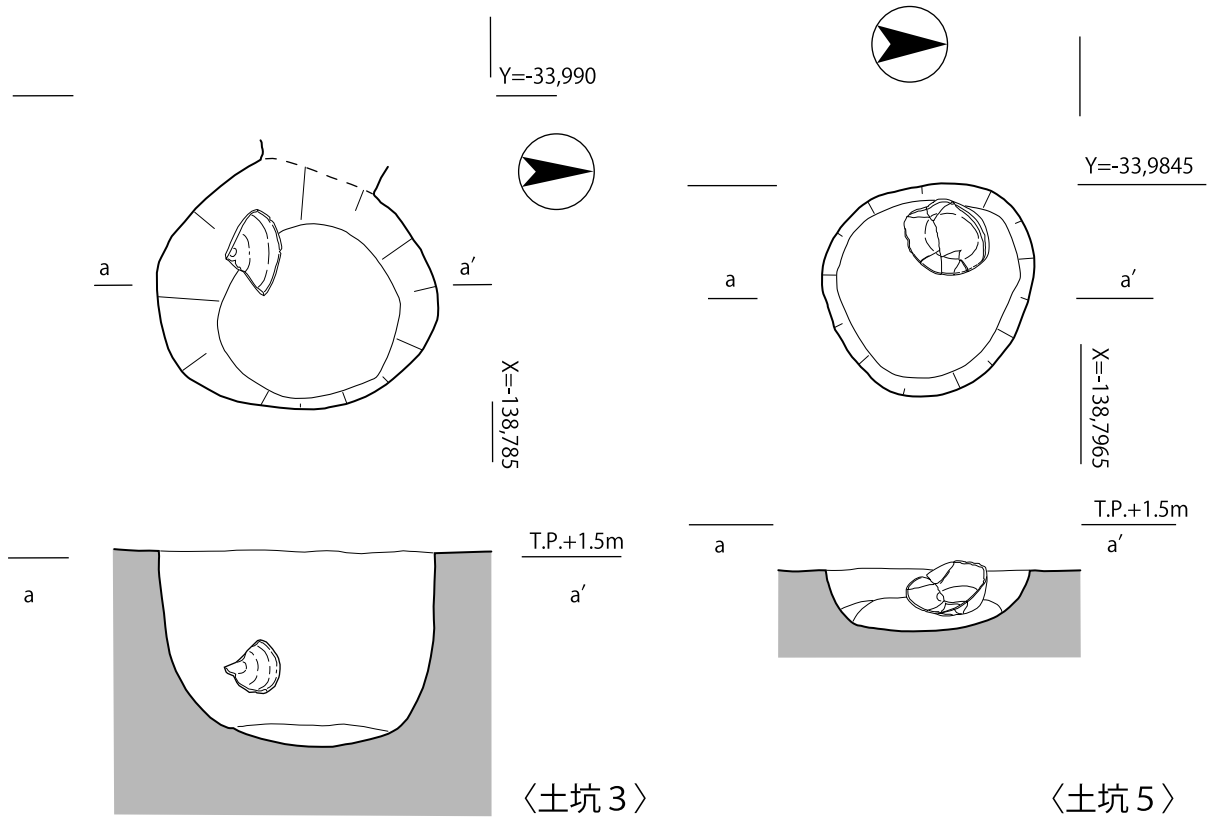


图29 土坑 3 · 5 · 7 平·立面图

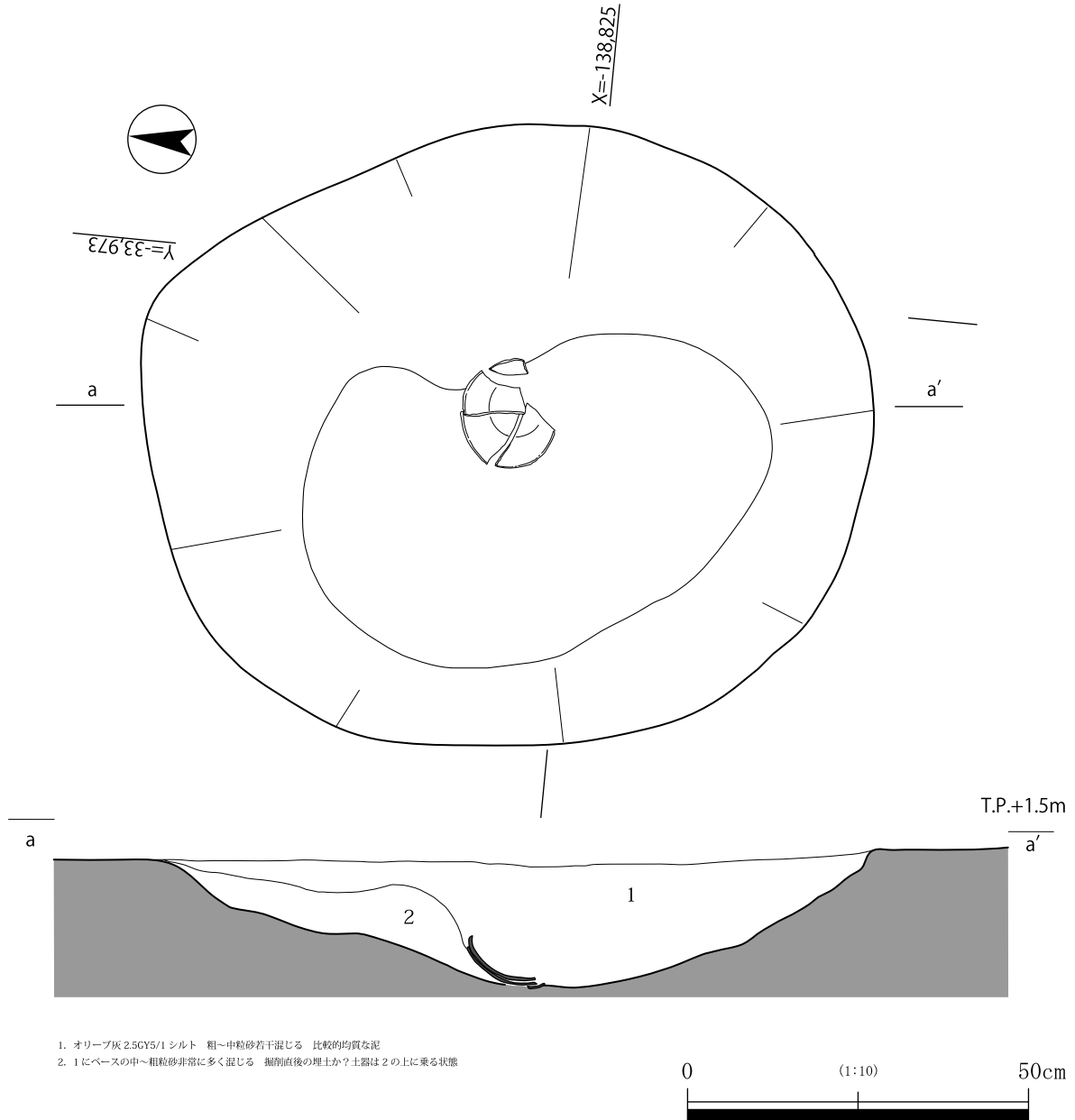


図30 土坑 9 平・断面図

#### 土坑 6 (図28)

微高地 1 の中央付近に位置する大型の土坑である。建物 3 と建物 5 の中間に位置し、周囲の遺構分布は希薄であり、他の遺構との切り合いはみられない。長軸2.0m、短軸1.8mの不正円形を呈し、深さは44cmと規模に比して浅く、土坑 4 に近い規模である。壁から底部の形状も凹凸のあるゆるやかなU字状を示す。埋土の最下にはシルトブロック間に砂の混じる、埋め戻しを想起させる層があり、上位にはレンズ状にシルトや砂混じりシルトの堆積がみられる。出土遺物は土器の細片に限られ、土師器片10、須恵器片 1 を数えるのみである。

#### 土坑 7 (図29)

微高地 1 中央付近西寄りに位置する土器埋納土坑で、これより西側は微高地 1 西縁の傾斜が始まる地点に位置している。周囲の遺構の分布は希薄であり、重複する遺構はみられない。長軸0.6m、短軸0.4mの長楕円形の平面形をもち、深さは18cmを測る。底面は北西部が深く、やや浅い南東端の底面に接して、

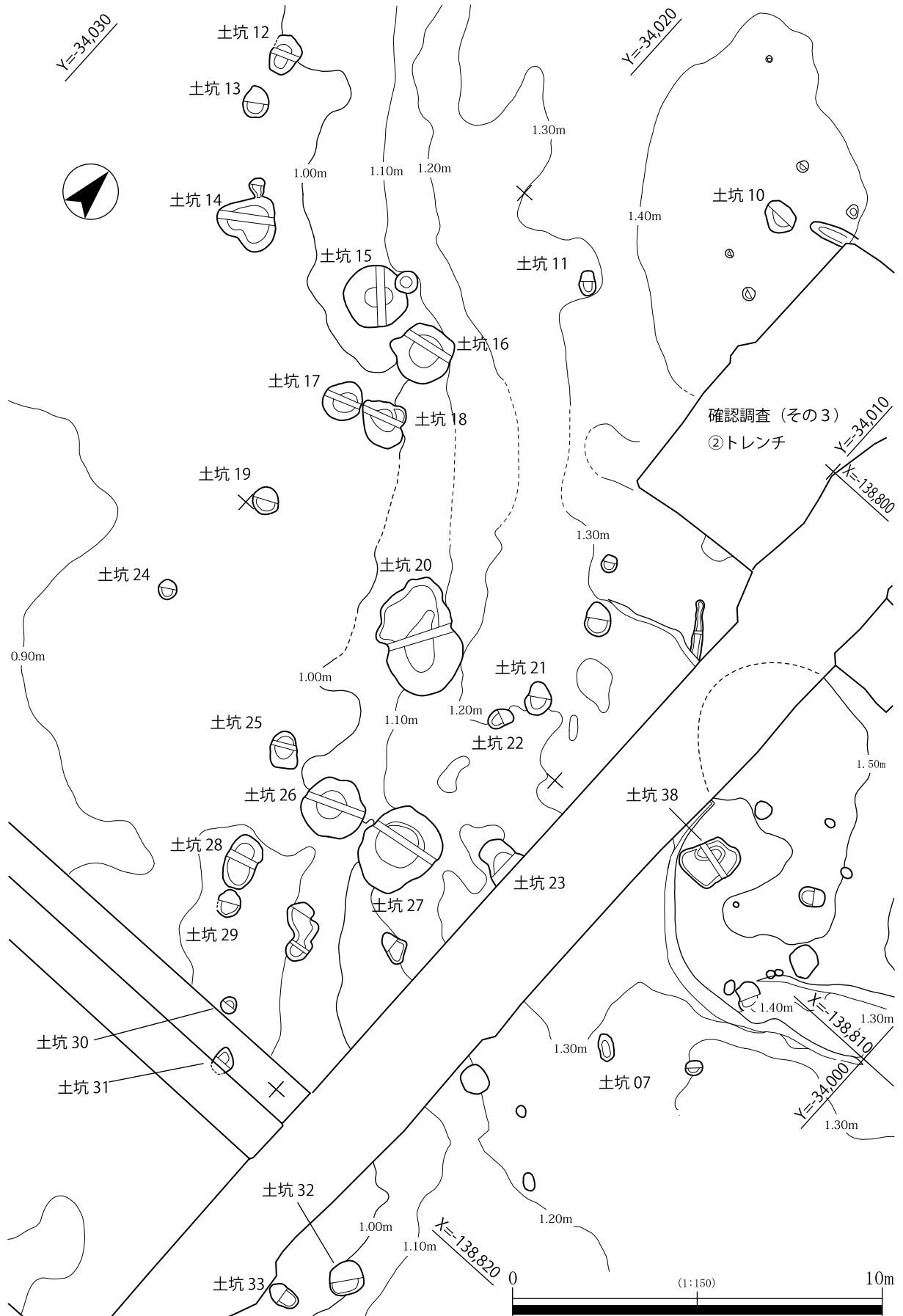


図31 第1面 微高地1西縁土坑群 分布図 (s=1/150)

土師器坏（図35-19）を正位置に置いている。埋土にはブロック土が認められ、土器を置いた後、埋め戻したものと考えられる。これ以外には遺物の出土はみられなかった。19は口径18.1cm、器高4.8cmを測るもので、外面口縁直下に工具痕を残すヨコナデを施している。口縁端部はややゆるやかに外反し丸く収めるもので、時期は平城V期、奈良時代後半としておく。

#### 土坑8（図28）

微高地1北寄りに位置する小型の土坑である。建物3の南側にあり、南側柱列からは1.2mの距離に位置する。径0.6mの円形の掘方をもち、深さは23cmと浅いが、径0.4mの曲物を据えていたと考えられる。曲物自体は腐蝕して遺存していないが、径40cm、高さ20cmという法量は井戸1に用いられたものと近似する数値であり、同様の曲物が用いられていたと考えられる。小規模な井戸、ないしは水溜のような性格が想定される。曲物内部に相当する埋土は比較的均質なシルト、曲物と掘方の間はシルトブロックと砂により埋め戻されている。遺物としては土師器の小片4点が出土しているが、図示し得るものではない。したがって出土遺物から時期を想定することはできないが、構造上の類似から、井戸1に近い時期を想定しておく。

#### 土坑9（図30）

微高地1南寄りの東縁に位置する大型の土器埋納土坑である。比較的遺構分布が希薄な地点に位置しているが、東側に接して南北に並ぶピット列がある。南北（長軸）1.1m、東西（短軸）0.9mの南北方向に主軸をもつ楕円形を呈する。深さは20cmであり、平面規模に比して浅い。断面の形状はゆるやかな挿鉢状で、中央付近がもっとも深くなっている。中央付近に一部を欠く土師器坏（図35-20）を埋置するが、土層からみて北寄りの一部を埋めたのち、土器を置いたようである。土器を置いた後の埋土は比較的均質なシルト層であり、埋め戻されたものであるかどうかは不明である。これ以外には土師器の甕体部細片が1点、須恵器甕体部細片1点が出土しているのみである。20は約三分の二程度が残存する個体であるが、復元口径16.1cm、器高4.2cmを測るものである。外面底部付近は工具によるナデ、ないしはケズリによる調整が施されている。このような外面調整や口縁端部の特徴から、平城V期、奈良時代でも後半のものと考えられる。

#### 土坑10

微高地1西斜面に列状に分布する土坑群の1基である。等高線に沿って列を成す他の土坑とはやや距離をおいてT.P.+1.4m付近の比較的高所に位置する。0.8×0.7mの長楕円形を呈し、深さは48cmを測る。埋土は第2a層と第2b層起源のシルトブロックの間に砂が入るもので、掘削後、極短時間のうちに埋め戻されたと考えられる。出土遺物には土師器甕、韓式系土器の細片があるが図示し得るものではない。

#### 土坑11（図32）

微高地1西斜面に列上に分布する土坑群の1基である。他の土坑と距離をおき、土坑10と土坑16の間付近に位置する。0.6×0.3mの楕円形を呈し、深さは16cmを測る。埋土は第2a層と第2b層起源のシルトブロックの間に砂が入るもので、掘削後、極短時間のうちに埋め戻されたと考えられる。遺物の出土はみられなかった。

#### 土坑12（図32）

微高地1西斜面に列上に分布する土坑群の1基である。土坑12～土坑33をもってT.P.+1.0m付近の等高線に沿って並ぶ一群を構成する。1.0×0.7mの楕円形を呈し、深さは48cmを測る。埋土については記録できなかった。土師器壺の細片が1点出土している。



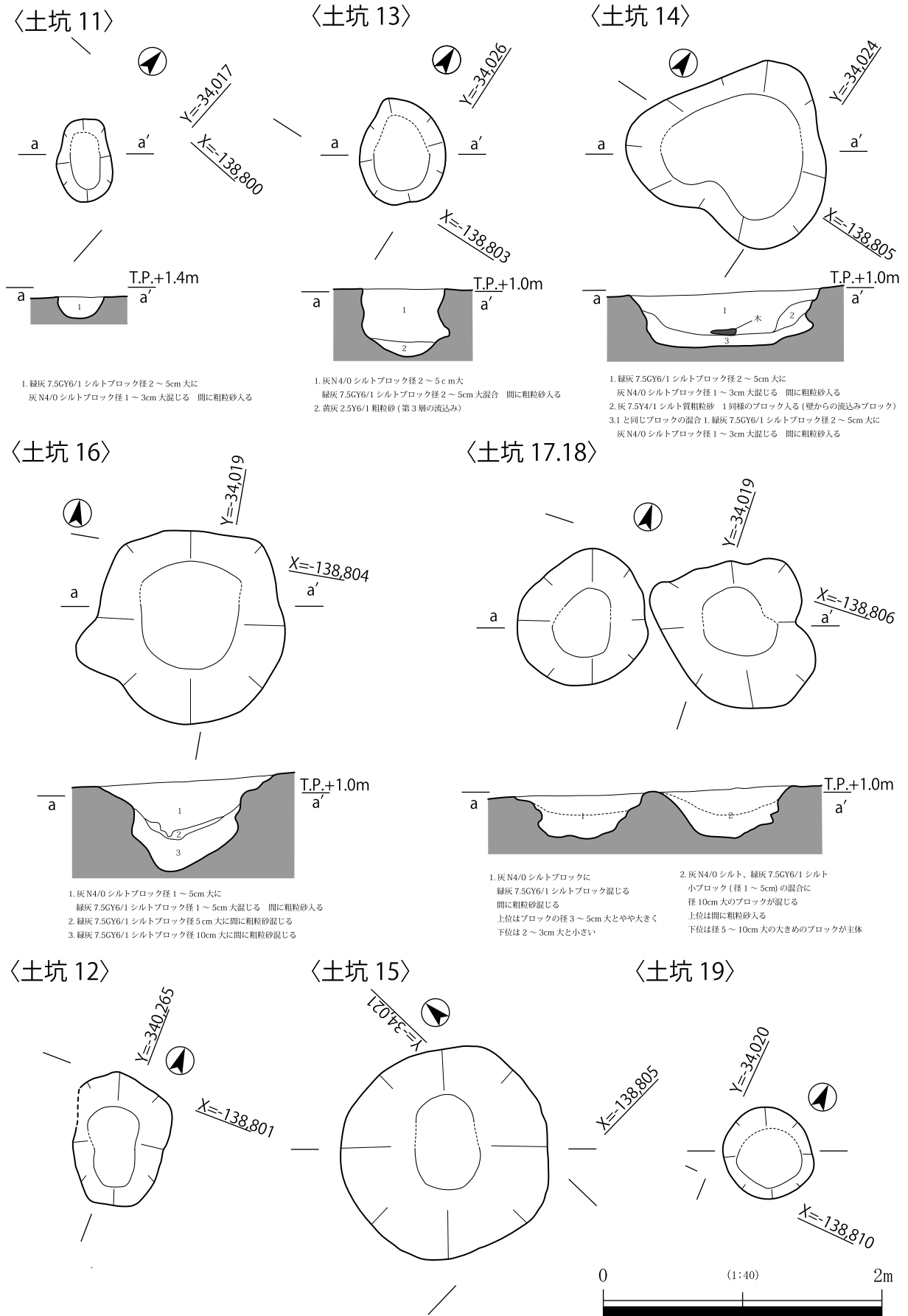


図32 土坑11～19 平・断面図

#### 土坑13 (図32)

径0.6mの円形を呈し、深さは50cmを測る。掘削時、最下層に第3層の砂が流入し、その上部は第2a層と第2b層起源のシルトブロック間に粗粒砂が入る埋土で埋め戻されている。出土遺物は無い。

#### 土坑14 (図32)

不整形な平面形を呈し、長軸1.2m、短軸1.0mを測る。深さは48cmを測る。埋土は第2a層と第2b層起源のシルトブロック間に粗粒砂が入るものであり、掘削後まもなくの埋め戻しが想定されるが、埋土は上下に分層が可能であり、埋め戻しの単位を示すものと考えられる。出土遺物には用途不明の木片がある。

#### 土坑15 (図32)

一群の中では大型の部類に入る。径1.5mの円形を呈し、深さは60cmを測る。埋土については記録できなかったが他の土坑同様、ベース土による埋め戻しが想定される。古墳時代の土師器甕片 (図35-21) が出土している。

#### 土坑16 (図32)

後述する土坑17・18の分布を参照すると、土坑15と有意な関係をもつ可能性がある。径1.6mの円形を呈し、深さは65cmを測る。他の土坑同様、掘削時に発生した土によって短時間に埋め戻されたと想定されるが、土坑16では埋土下半が径10cm大のブロック、上半は径5cm以下のブロックが主体となっており、埋め戻しの段階を一層具体的に推測することができる。遺物には外面に格子タタキのみられる韓式系土器の小片や土師器小片、木片があるが、いずれも図示し得るものではない。

#### 土坑17 (図32)

一連の土坑群の中で、土坑18と並んで分布し、形状、規模的にも近い様相を示す。径0.9mの円形を呈し、深さ32cmを測る。やはりブロック土による埋め戻しが想定されるが、埋土上位がややブロック径が大きい。遺物としては木片が出土しているのみである。

#### 土坑18 (図32)

土坑17の東側に並ぶ。径1.2mの不整な円形を呈し、深さ50cmを測る。埋土の様相からは掘削土による埋め戻しが想定されるが、こちらは埋土上位のほうがブロックの径は小さい。出土遺物には木片があげられるのみである。

#### 土坑19 (図32)

列を成す土坑群とはやや距離をおいて位置し、一連の土坑の中では中型の部類に属する。径0.6mの円形を呈し、深さ35cmを測る。埋土の記録はできなかった。遺物はみられない。

#### 土坑20 (図33)

一連の土坑の中では大型の部類に属し、主軸方向も他の土坑とはやや異なっている。長軸2.9m、短軸2.0mの長楕円形を呈し、深さは44cmを測る。地形的に低い南西側の底部に植物遺体を含む砂層が堆積し、その後、掘削時の発生土で埋め戻されたと考えられる点は、他の土坑と同じである。出土遺物には、外面に格子タタキを残す韓式系土器長胴甕の破片、土師器甕口縁片 (図35-22) がある。22と同一個体と思われる口縁片が第2a層からも出土している。

#### 土坑21・土坑22 (図33)

近接して並ぶ2基の土坑である。土坑21は長軸0.8m、短軸0.6mの楕円形を呈し、深さ22cmを測る。土坑22は長軸0.6m、短軸0.4mの楕円形を呈し、深さ24cmを測る。埋土の様相は他の土坑同様、掘削直後の埋め戻しが想定されるものである。いずれの土坑からも遺物は出土していない。

土坑23 (図34)

東側を調査区境の側溝により失い、全容は不明である。規模としては中型に属すると思われる。埋土の様相は他の土坑と類似している。遺物は出土していない。

土坑24 (図34)

土坑19同様、他の土坑とはやや距離をおいて位置する。径0.4mの円形を呈し、深さも40cmを測る。埋土の様相は他の土坑同様であり、遺物は出土していない。

土坑25 (図34)

長軸0.7m、短軸0.6mの楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。埋土の様相は他の土坑同様である。木片と土師器甕体部片が出土している。比較的大型の破片を含むが、図示し得るものではない。

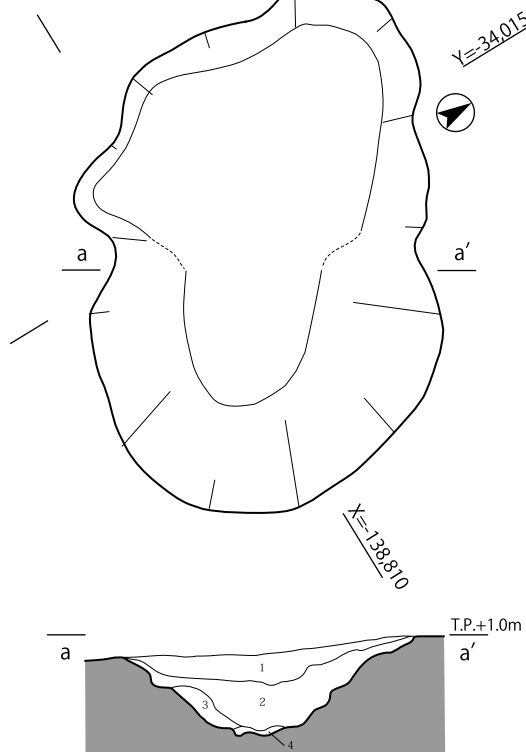
土坑26 (図34)

土坑27と並んで位置する比較的大型の土坑である。径1.4~1.5mの円形を呈し、深さ60cmの播鉢状の断面形状をもつ。他の土坑同様、掘削時の発土で埋め戻されたと考えられるが、下位に第2b層、上位に第2a層のシルトブロックをそれぞれ主体としている。遺物には韓式系土器甕 (図35-23)、土師器高坏脚 (図35-24) のほか、土師器甕細片などが出土している。

土坑27 (図34)

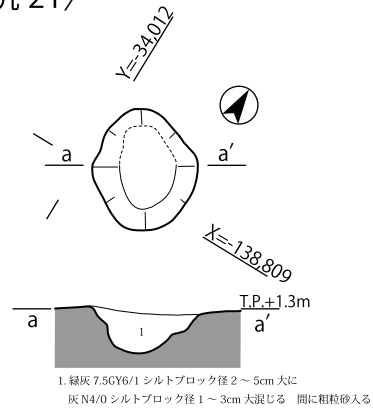
土坑26と並ぶ大型の土坑で、長軸1.8m、短軸1.4mの楕円形を呈する。深さは20cm未満と浅い。埋土は他の土坑と変わらない。遺物には古墳時代の土師器甕口縁の小片が出土している。

〈土坑 20〉



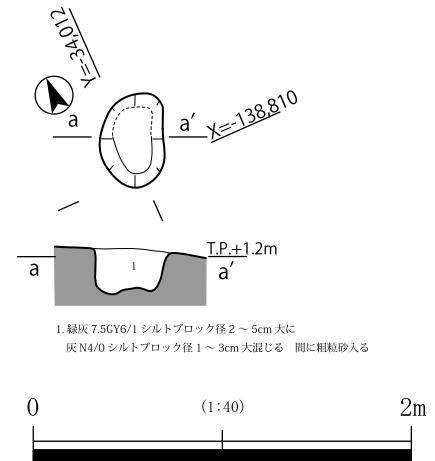
1. 暗灰 N310 シルト (炭化物含む 第2b層) ブロック径2~5cmと 灰 N4/0 シルト (第2a層) ブロック径2~5cm 大と 緑灰 GY6/1 シルト (第2a層) ブロック径1~5cm 大の混合 粗粒砂ブロック間に入る
2. 緑灰 7.5GY5/1 シルト (第2b層) ブロック主体で 第2a層のブロックと粗粒砂が混じる 木片混じる
3. 灰 5Y4/1 極細粒砂 植物遺体含む (第3層の流れ込み)
4. 緑灰 7.5GY6/1 シルト (第2b層) ブロックに、第2a層のブロック混じる

〈土坑 21〉



1. 緑灰 7.5GY6/1 シルトブロック径2~5cm 大に 灰 N4/0 シルトブロック径1~3cm 大混じる 間に粗粒砂入る

〈土坑 22〉



1. 緑灰 7.5GY6/1 シルトブロック径2~5cm 大に 灰 N4/0 シルトブロック径1~3cm 大混じる 間に粗粒砂入る

図33 土坑20~22 平・断面図

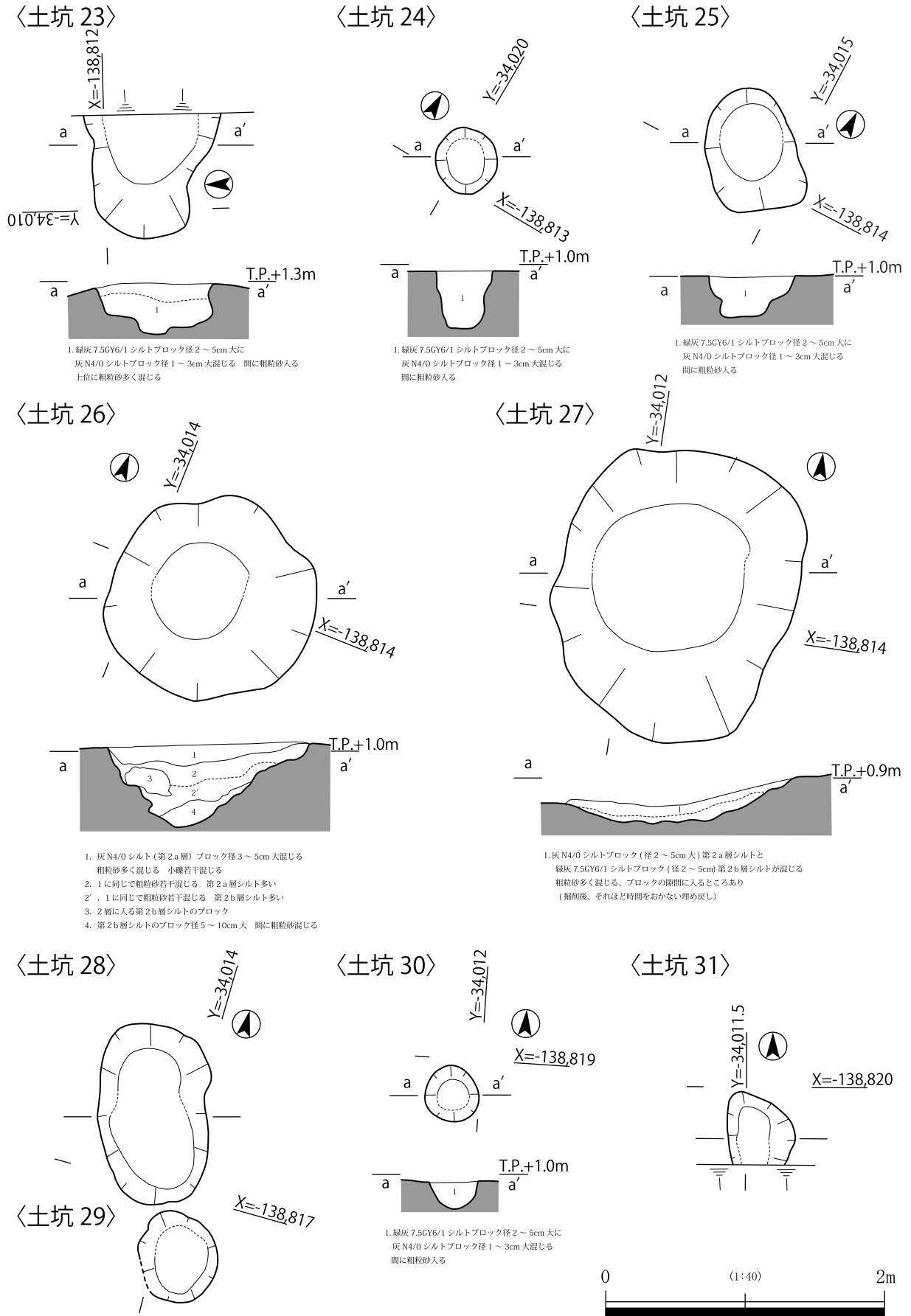


図34 土坑23～31 平・断面図



土坑28 (図34)

土坑29と軸方向に並ぶ中型の土坑である。楕円形の平面形を呈し、長軸1.3m、短軸0.9mを測る。深さは35cmを測るが、埋土の記録はできなかった。埋土掘削中に植物種子を確認したことから、残りの埋土を洗浄したところ、ヒョウタンの仲間の種子2500点余りを検出した。これ以外には遺物はみられない。

土坑29 (図34)

土坑28の南に接する小型円形の土坑である。径0.5m、深さ18cmを測る。埋土については記録をしていない。遺物は土師器細片が2点出土しているのみである。

土坑30 (図34)

土坑31に近接する小型円形の土坑である。径0.4m、深さ18cmを測る。埋土の様相からは掘削時の発生土により短期間で埋め戻されたと考えられる。遺物はみられない。

土坑31 (図34)

南側を土層観察用の筋掘りにより失い、全容は不明である。残存部分では幅0.5m、深さ13cmを測る。規模としては中型に属すると思われる。埋土の様相は他の土坑と類似している。遺物は出土していない。

土坑32・土坑33

T.P.+1.0m付近の等高線に沿って並ぶ一群の土坑では南端に位置する2基である。土坑32は径1.0m程度の円形、土坑33は長軸1.0mの楕円形を呈する。いずれの土坑からも遺物は出土していない。

土坑34～土坑41・土坑43～土坑44

微高地1上で検出された遺構のなかで、単体として一定の規模をもつものを土坑とし、遺物の出土しているものについては遺構番号を付した。このうち図示し得るものは土坑36出土の土師器把手(図35-26)、土坑39出土の須恵器壺頸部(図35-25)があるが、遺構の性格を推測させるものではない。

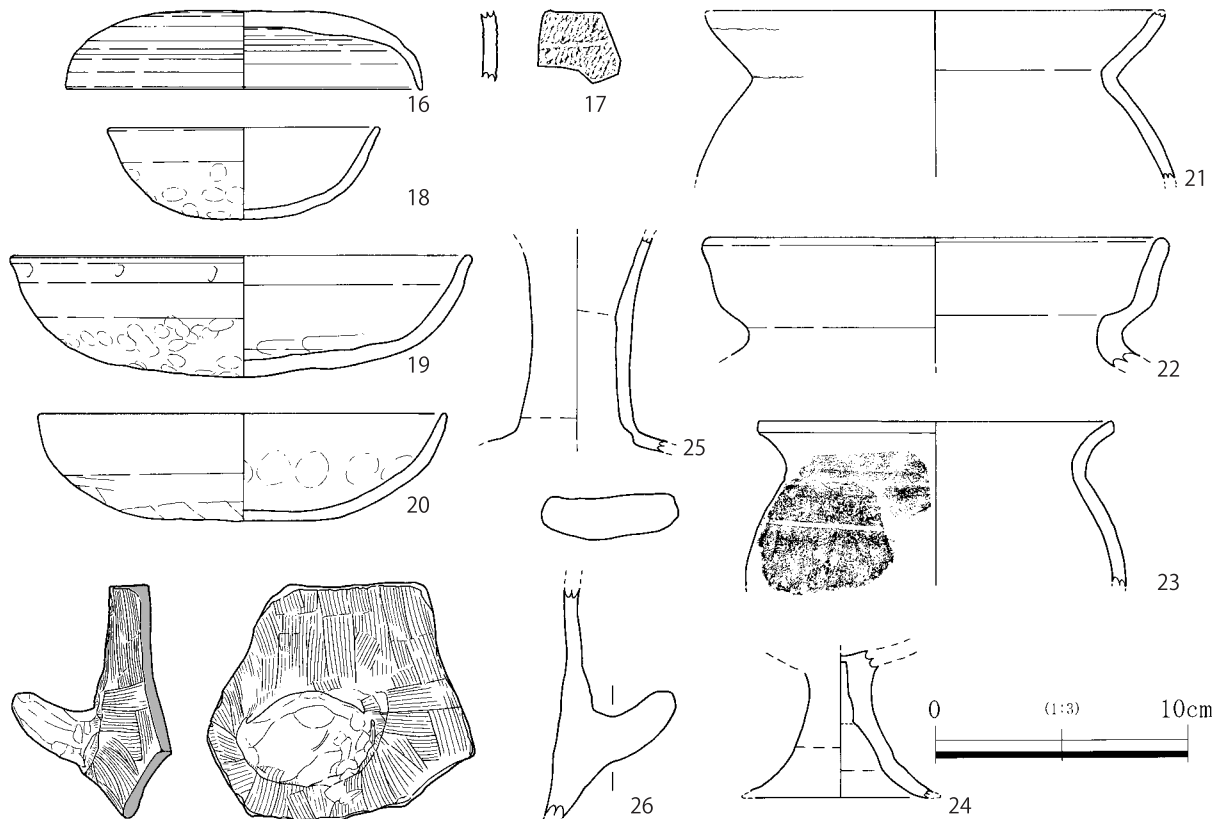
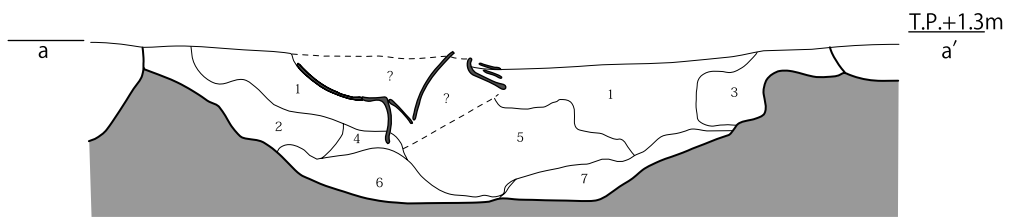
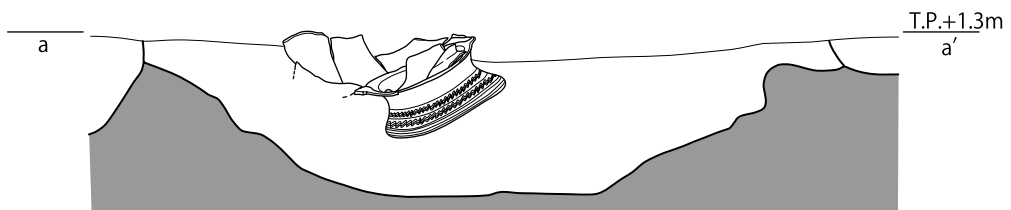
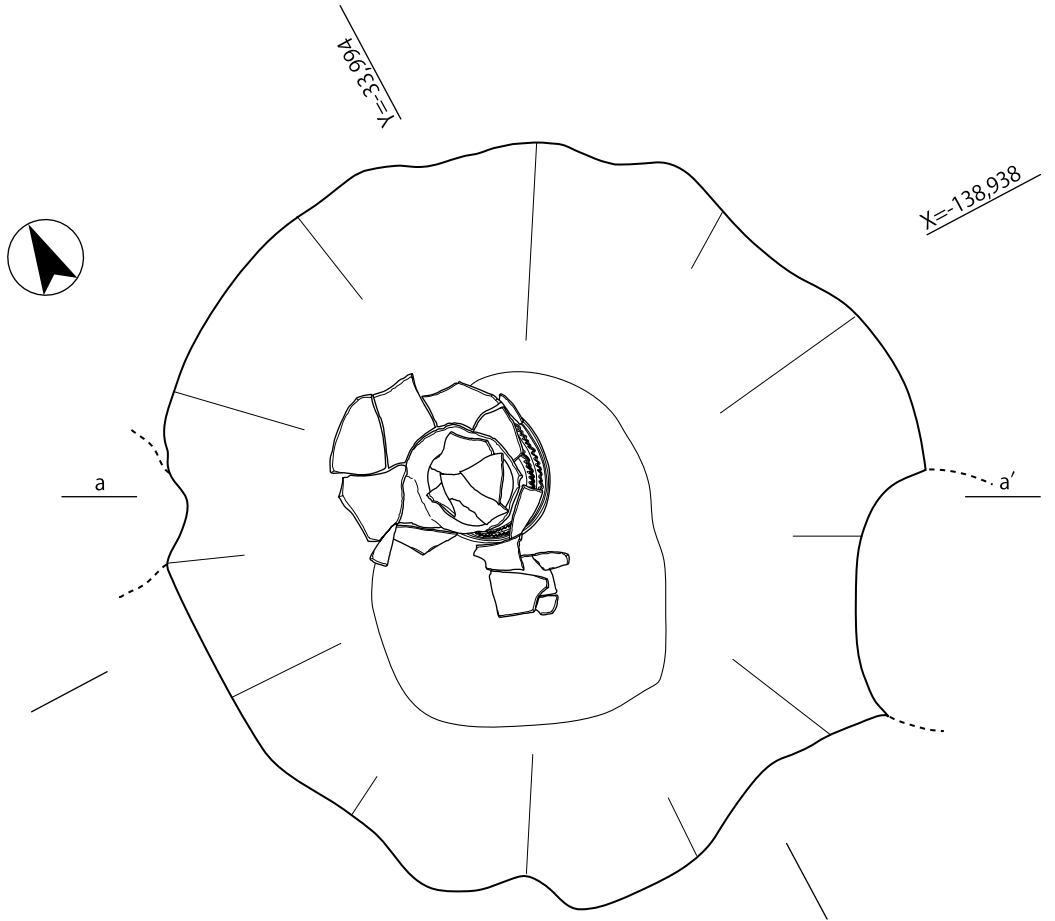


図35 微高地1 土坑 出土遺物1



1. 灰 7.5Y4/1 シルトブロック間に粗粒砂～中粒砂、非常に多く混じる
2. 灰 7.5Y5/1 シルト 炭化物粒多く混じる
3. シルトブロック？
4. 2 のシルトブロックに粗粒砂～中粒砂多く混じる
5. 灰 7.5Y4/1 シルト
6. 灰 N5/0 シルト 炭化物粒多く混じる
7. 灰 N6/0 シルトブロック間に粗粒砂～中粒砂入る

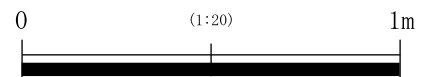


図36 土坑42 平・立・断面図

土坑42 (図36)

微高地 1 南西の傾斜変換点付近に位置する大型の土坑である。周囲にいくつかの土坑、ピットがま  
まらって分布し、さらに傾斜面では等高線に沿って柵とおぼしき柱列がみられる。平面形状は径2.0m前後  
の円形を呈するが等高線に沿う両肩を別のピットが切る。対称の位置にあり、有意の関連をもつと思わ  
れる。断面形状は浅い播鉢状であり、検出面からの深さは40cmを測る。須恵器の大型甕 (図37-27) が  
土坑内部に倒立していたが、ある程度土坑底部を埋め戻したのち、北西方向から甕を転倒させ、置いた  
状況が推測される。多くの破片が重なってみられ、体部から底部にかけての破片も部分的に残されてい  
た。当初完形で埋置されたものであるかどうかはよくわからない。土器設置後もシルトブロックを中心

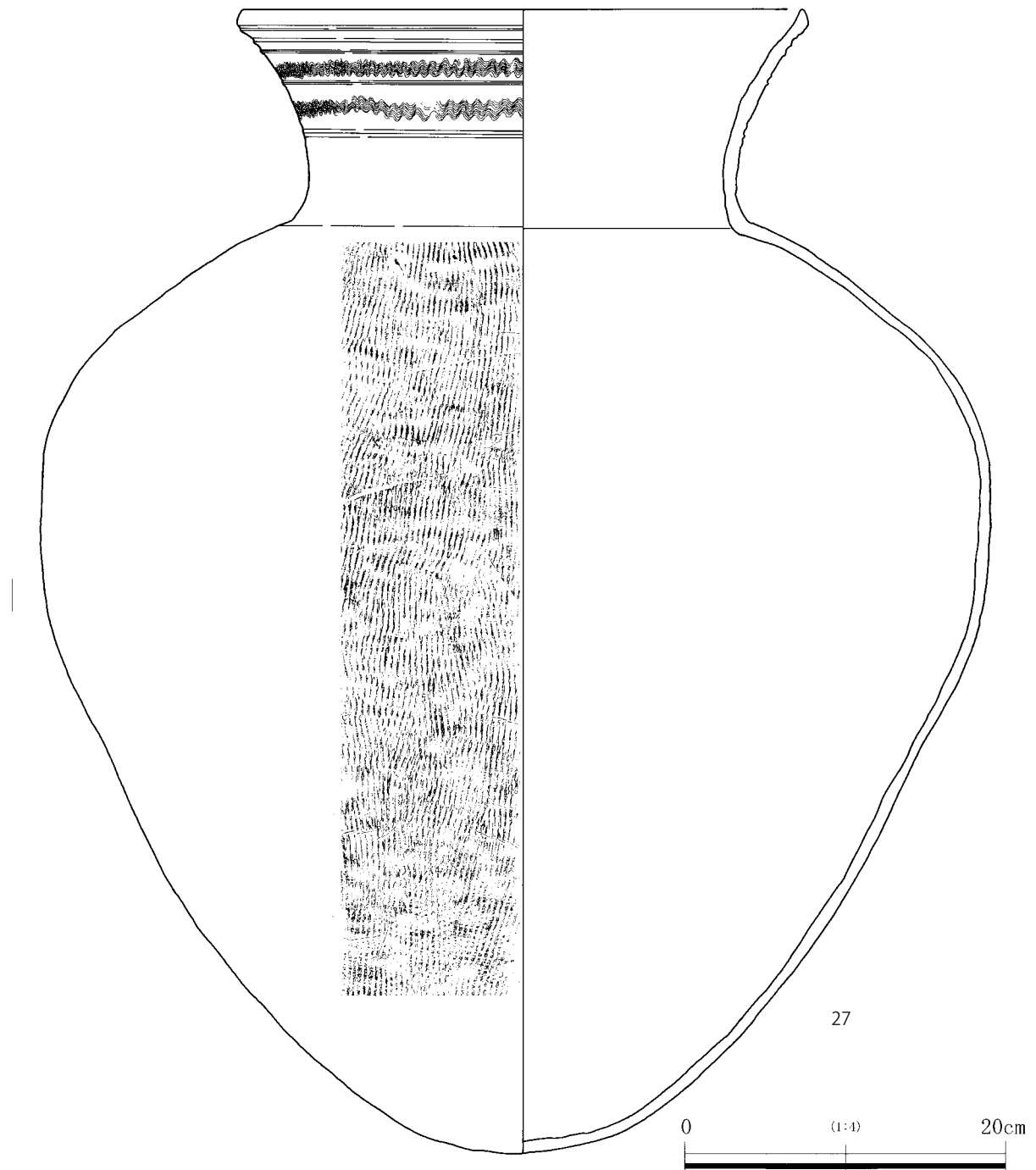


図37 微高地 1 土坑 出土遺物 2

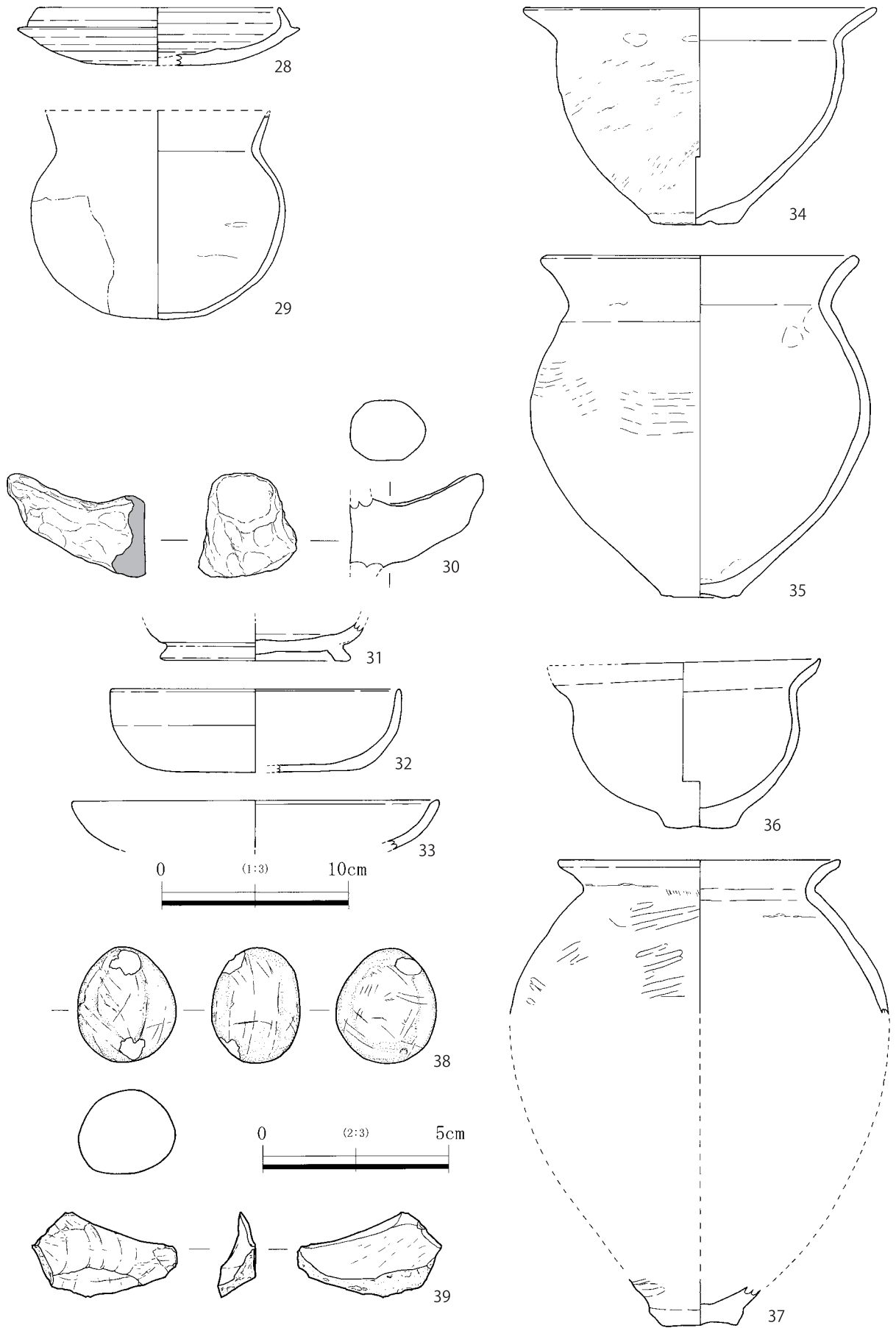


図38 微高地1 ピット 出土遺物



とする埋土で埋め戻されており、比較的短期間での埋め戻しが想定される。これ以外にも土師器小型甕の細片などが出土しているが、図示するに至らないものである。27は口径35cm、器高72cmを測る大型の甕で、口縁部外面に突帯をもって紋様帯を構成し、下位2段には波状紋が施される。体部外面には平行タタキを施すが、内面の当具痕跡はすり消されているようである。時期については限定しがたいが、TK23～47型式段階、古墳時代中期後半のものとする。

#### 柵・ピット

微高地1上で検出された多数のピットの中には列をなすものが含まれる。それら全てに柵としての性格を与えることは難しいが、地形や他の遺構との位置関係からその機能を推測できるものも認められる。調査時に現地で認識し、精査できたものは無く、遺構分布図の整理作業の過程で抽出したものがほとんどを占めるので、あえて遺構名を付すことは避けたが、図16、図17に点線、あるいは細線によって図示したものがそれである。微高地1北寄りの遺構が比較的密に分布する範囲では、建物1の軸方向に近い方向に並ぶものがいくつか認められる。その方向は微高地の微地形に即したものと考えられるので、必ずしも建物1と有意の関係を強く主張することはできないが、近接地にまとまり、かつ重複しないという点で、同時期に存在した可能性も意識しておきたい。

微高地1の南寄りでは南西側の傾斜面に臨む位置に柵列と推測する柱列が分布する。斜面の等高線に沿って分布することから、微高地の縁辺を画する柵列であると考えられる。微高地1北寄りに分布するピット列のものとは比べて、個々のピットは小規模なものが主体を占め、ピット間の距離も短い。同じ微高地1南西側斜面においても北寄りの土坑が列状に分布する範囲では、小規模なピットによる柵列は認められないことから、遺構としての分布域に比較的明瞭な区分が存在することになる。微高地1東側の様相は本書報告の調査範囲外となり比較することはできないが、南西側に設置された意味としては、微高地からみてより低湿な地域との境界を画するという位置に柵列が設置されたものと考えられる。

このような柵列を構成するピットからは時期や性格を考察するに足る遺物の出土は無かった。ピット122から弥生時代のサヌカイト剥片(図38-39)が出土したが、これは本来ベース層である第3-2b層に含まれていたものとする。

図38にはこれ以外のピットから出土した遺物を掲載した。時期的には奈良時代、古墳時代後期～飛鳥時代、古墳時代中期～後期、弥生時代～古墳時代初頭のものがある。

30はピット93出土の把手で、古墳時代中期～後期のものであろう。28はピット17出土の須恵器坏、29はピット68出土の土師器小型甕で、古墳時代後期～飛鳥時代に属すると考えられる。31はピット115出土の須恵器坏、32はピット116出土の須恵器坏、33はピット132出土の土師器皿で、これらの遺構は微高地1の南から東辺に偏在する。

34～38は弥生時代に属する遺物で、34・35はピット78出土の弥生土器甕、36はピット79出土の鉢、37は同じくピット79出土の甕である。38はピット77出土の石製品で、投弾ないしはリタッチャーと考えられるものである。土器類は弥生土器のなかでも最も新しい形態を示すもので、古墳時代初頭に帰属する可能性もあろう。ピット77～79は微高地1北寄りの遺構集中範囲に位置するピットで、古墳時代中期以降のピットとはやや様相が異なり、隅丸長方形を呈し規模もやや大型である。比較的まとまって分布することから、微高地1上における弥生時代～古墳時代初頭の土地利用の一端がこれら遺構の分布範囲にあるものと考えられる。

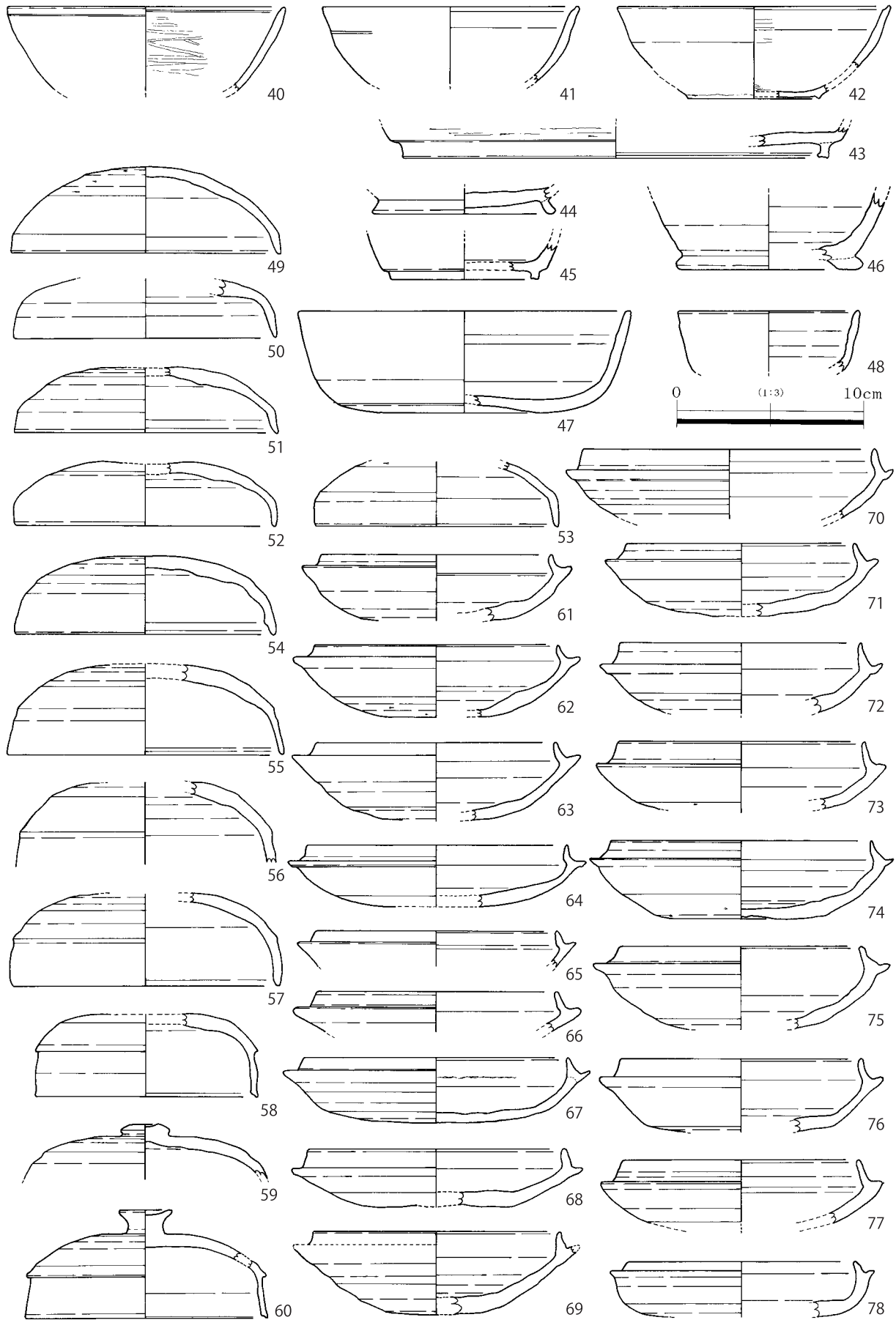


图39 微高地1 層 出土遺物1

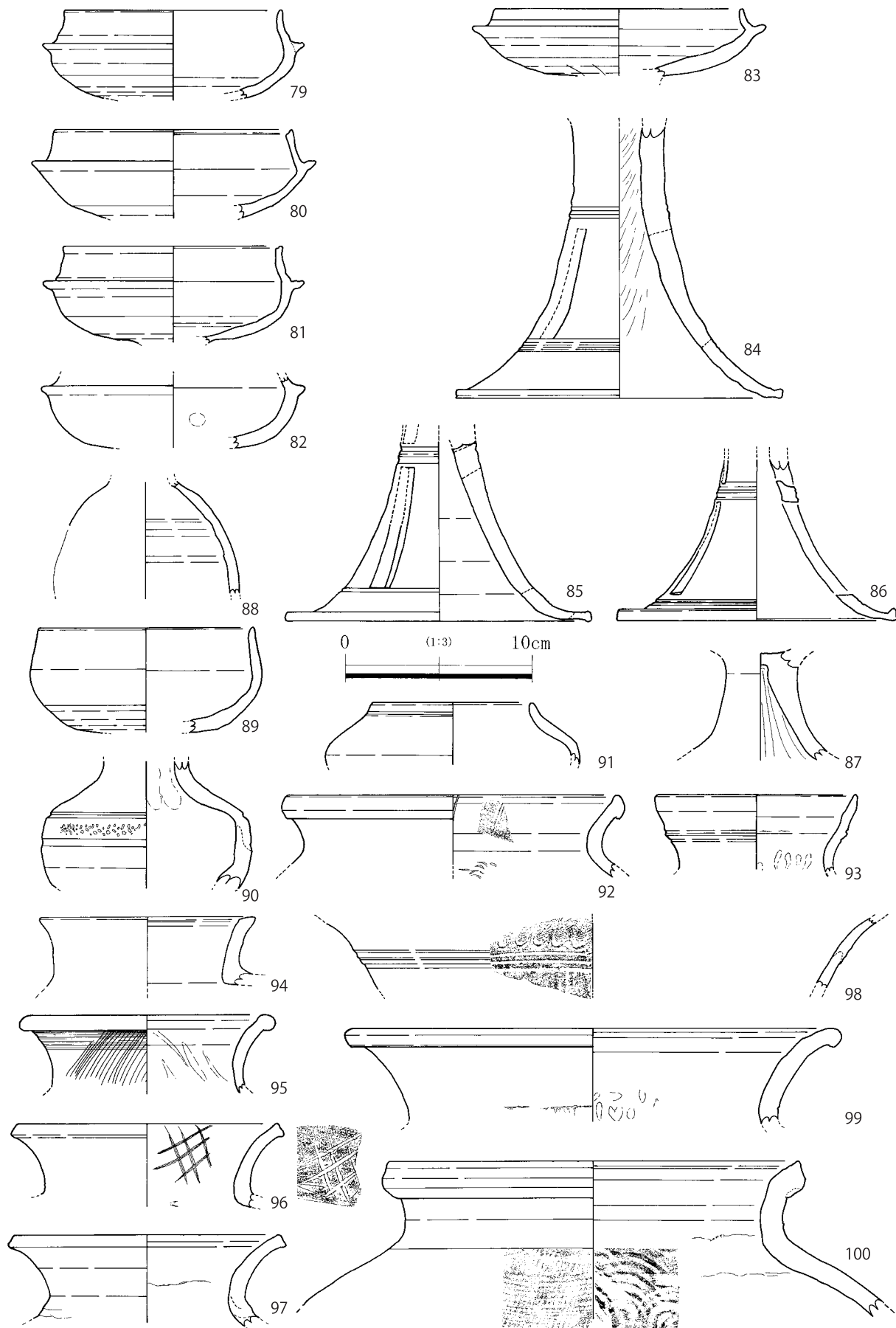


图40 微高地 1 層 出土遺物 2

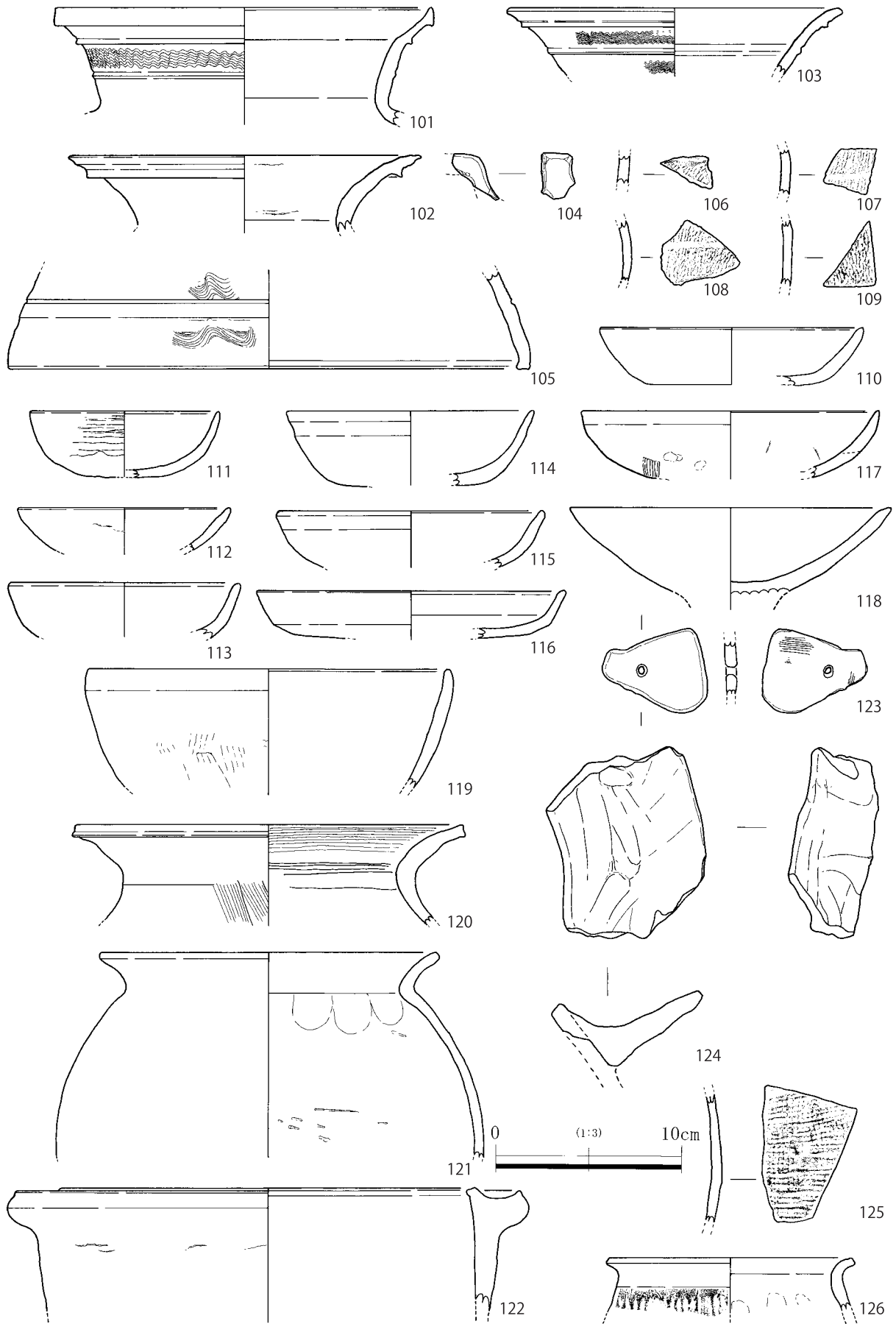


图41 微高地1层出土遗物3



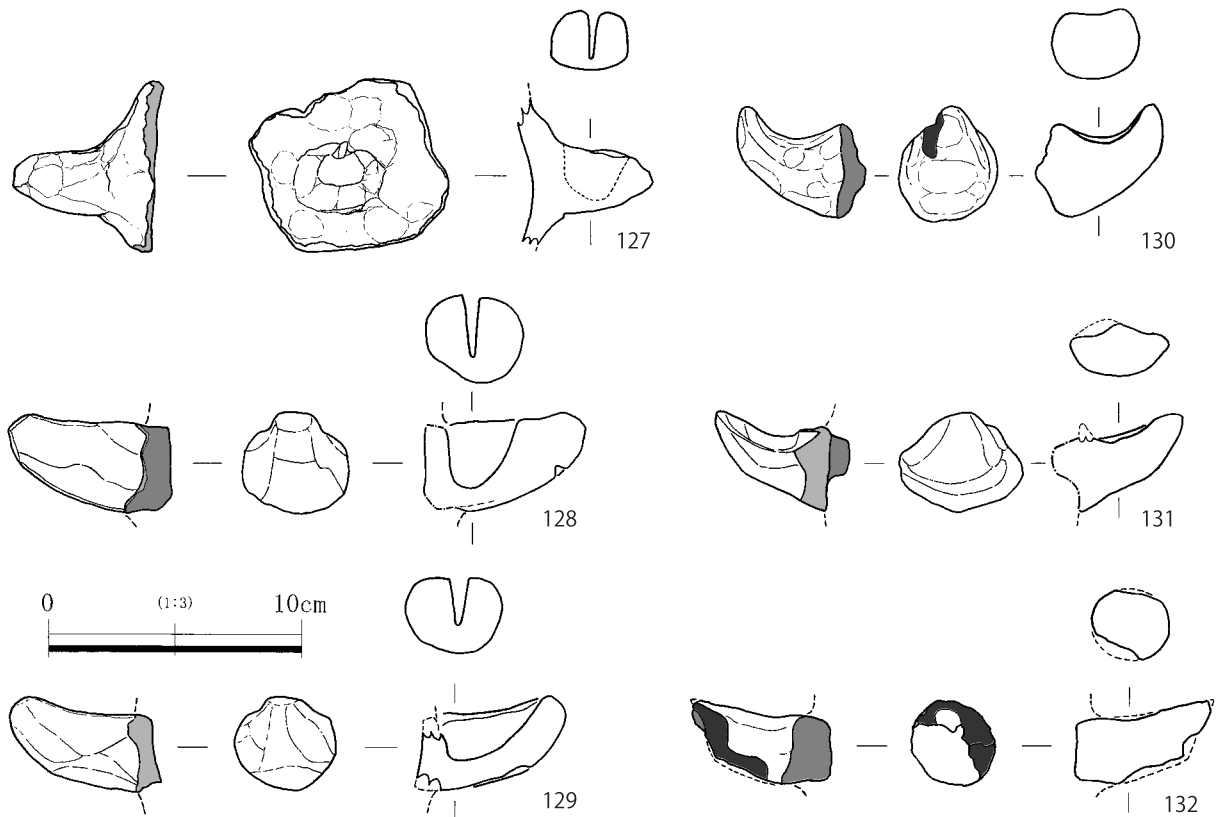


図42 微高地1層出土遺物4

微高地1層出土の遺物（図39～45）

微高地1は弥生時代中期に堆積した砂層の高まりによって形成されており、弥生時代後期から古代にいたるまでの遺構が重複する。したがって、その地表を構成する土壌も長期間にわたって形成されたものであり、それぞれの時期の遺物が含まれ複雑な様相を示す。現地での調査に際しても土層の分別が必ずしも容易に行えたわけではなく、認識の誤りも否定できない。したがって調査時に取り上げた層ごとの遺物の様相を分離して示しても、実態を正確に示すものではないと考えられるため、ここでは微高地1にかかると範囲の第1-5層、第2a層出土とした遺物、また遺構面検出時に遺構に伴わない形で出土したもの（厳密には遺構に伴わない以上、いずれかの層に帰属させるべき遺物と考えるが、調査時には「第1b面出土」として取り上げられているものが存在する）などを包括し、微高地1にかかわる層出土遺物として報告する。図では遺物の種類ごとに別けて掲出している。個々の遺物の法量、胎土、製作時の痕跡などは本書本文末掲載の「遺物観察表」に記載しているので、本文では特徴的な事項を中心に記述していきたい。

図39～40～42は黒色土器A類の椀である。残存率が悪く、断片的な資料である。あえて帰属時期を示すとすれば、9世紀後半代となろうか。

43～48は須恵器で、古代に属するものである。総数が全体的に少ない中で、高台をもつ食器類の割合が高い。49～60は須恵器坏蓋、高坏蓋で、58・60などはTK23・TK47型式段階、55・57などはMT15・TK10型式段階、49～53・59などはTK43・TK209型式段階に属すると考えられる。61～図40～87には須恵器坏、高坏を配した。蓋同様の型式区分に属するものがみられるが、高坏ではTK43・TK209型式段階のものが目立つ。建物2出土のものも併せて、長脚二段の高坏が特徴的であるが、無蓋高坏の坏部は認められず、有蓋高坏に限られる。88～図41～105には壺、甕、瓶類を配した。88は篠窯の器種分類で壺

Cに属する壺。頸部から体部へ釣鐘型に開く形状が特徴的である。図示した部位以外に体部下半の破片も残存する。89は坏。90は小型の細頸壺で、沈線によって区画された紋様帯に乱雑に刺突列点紋を施す。91は小型の短頸壺。94は傾きが認められ、平瓶の口縁部かと思われる。96の壺は口縁部内面にヘラ描きの格子を刻む。101・102は古手の壺口縁で、102はTK73型式段階に特徴的な口縁端部形状をもつ。104は平瓶の把手部分である。105は器台の脚端部と考える。復元径28cmを測る。

106～109には韓式系土器の細片を示した。非常に細かい破片ばかりではあるが、沈線や縄蓆紋タタキが認められる。

110～124には土師器を配した。110～116の坏、皿類は飛鳥時代～奈良時代に属するものか。119は鉢。120は長胴の甕かとする。122は羽釜で、鏝は太く短いものが巡り、口縁部はやや内傾気味に短く延びる。123は土器片を加工したもので、内外面から穿孔が施される。124は移動式竈の底部分で、焚口部分に貼り付けた部分で剥離している。

125～129には韓式系土器を示した。125は甕の破片で外面には細かい格子タタキがみられる。126は平底鉢の口縁部で、体部外面には平行タタキが認められる。127～129は把手で、上面からの切込みと、129には下面に刺突痕跡が残る。

130～132は土師器把手である。いずれも残り具合は悪い。

図43-133は平瓦の破片である。内外面とも摩滅が著しいが、内面には布目圧痕を認めることができる。黄灰色を呈し、焼成は不良である。

図44には弥生土器を配した。134・135は後期の甕、136・137は中期の甕であろうか、底部が薄い。138は小型の壺で、底部の厚さが目立ち、内外面とも成形、調整が雑である。139は鉢。体部の最下位にまでタタキ痕跡を残す。140も鉢であろうか。141は器形については甕かと考えられるが、受け口状の口縁部外面に刺突列点紋を施しており、近江系とされるものである。142・143は壺の口縁部、144は壺の底部であろうか。145は後期に特徴的な長頸壺で、体部下半1/3のところに分割成型の痕跡を残す。146も壺の体部～底部である。147は甕か鉢か。148壺の口縁～体部である。

図45には石製品を示す。149は砥石で、石材は流紋岩である。両端部を欠損するが、それ以外の面は研磨面として使われている。一面には比較的深い痕跡も目立つ。150は石錐で、石材はサヌカイトである。長さ4.2cm、重量1.9gを測る。

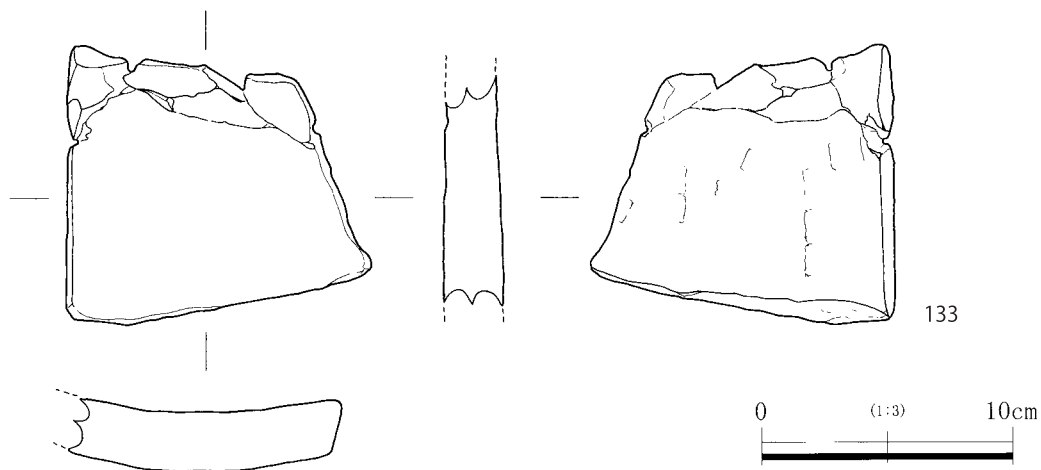


図43 微高地1層出土遺物5

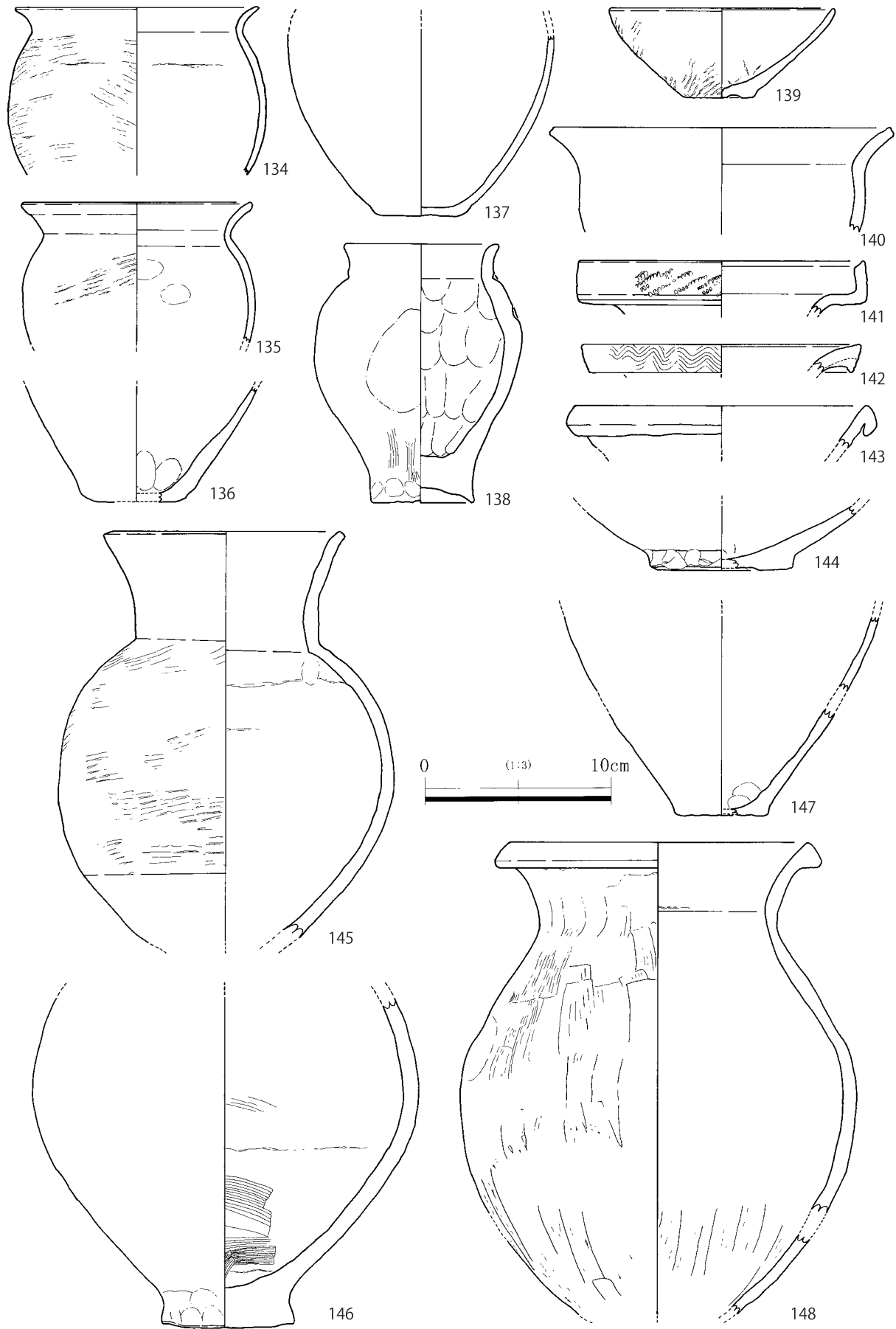


图44 微高地 1 層 出土遺物 6

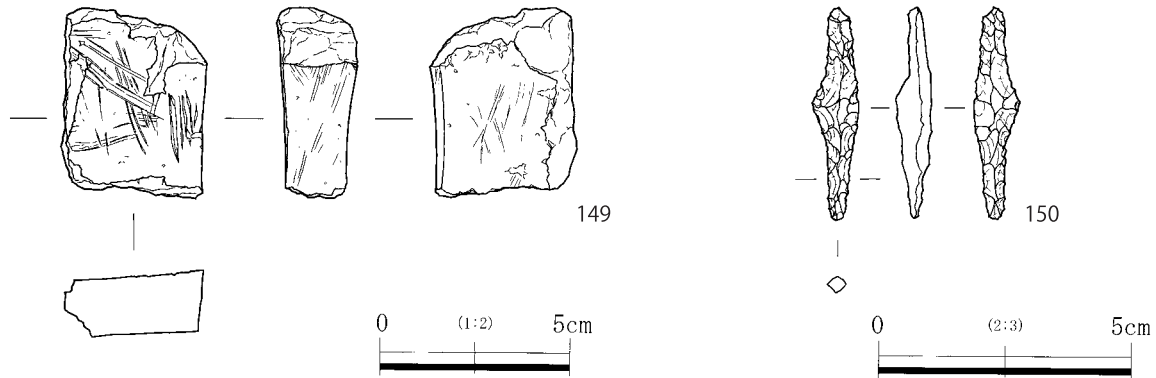


図45 微高地 1 層 出土遺物 7

### 微高地 1 小結

微高地 1 は本書報告範囲においては、相対的に遺構が多くみられた範囲であった。これは主に地形的な要因から長期にわたり安定した微高地であったことが反映していると考えられる。層出土の遺物をみると、弥生時代から古代にかけてのものがあり、弥生時代中期に微高地が形成されたと推定されることを考え合わせると、弥生時代後期～古墳時代初頭にまず何らかの土地利用があったものと考えられる。本書報告範囲全体では流路を中心に、古墳時代中期～後期に帰属する遺物の出土が最も多いわけであるが、微高地 1 においても同時期の遺構、遺物は認められ、古墳時代前期から中期の空白時期をはさんで、土地利用が再び行われたものと考えられる。その後、再び遺物のみられない時期を挟み、古墳時代後期～飛鳥時代、奈良時代にそれぞれ土地利用がなされたものと考えられる。次に土地利用の具体的な内容を遺構の性格とその時期を加味しつつ、検討してみたい。

掘立柱建物は 6 棟を確認したが、やや構造的にあいまいな建物 4 を除いても、5 棟が居住域を構成している。また井戸側の遺存する井戸 1 が居住域を構成する要素であることも確実であるが、これ以外にも大型の土坑については水溜的な性格をもつ可能性がある。このような居住域を構成する各遺構の帰属時期については、井戸 1 をのぞくと明確にしがたい。井戸 1 から出土した土師器坏は奈良文化財研究所による編年では平城Ⅲ～Ⅳ期のものと考えられるので、奈良時代中頃に居住域形成の一定点を置く事ができる。微高地 1 における土地利用の変遷を考えると、この時期以外に弥生時代後期～古墳時代初頭、古墳時代中期～後期、古墳時代後期～飛鳥時代の建物が存在する可能性があるが、長脚二段高坏の出土した建物 2 は古墳時代中期以前に遡ることはないと考えられ、建物 3 の柱配置が飛鳥時代以前に遡ることも考えがたい。建物 5 の軸はほぼ正方位をとり、地形に左右されていない。この点を後出の要素とみると、建物 1、建物 6 は微地形の方向に規制された方位をもつことから、時期的に遡るものとみることできる。このように確たる判断基準を示すにはいたらないが、5 棟の建物については建物 1、建物 6 に古墳時代中期～後期に遡る可能性を認め、建物 2、建物 3、建物 5 が飛鳥時代以降のものとする可能性を認めることとなる。これは井戸 1 との位置関係において、建物 2・3 が近接するという状況と調和的であり、両者のどちらか、あるいは両方が奈良時代に属する可能性を指摘しておきたい。

土器埋納遺構については、前提として地鎮といった祭祀的性格を想定するものである。古墳時代後期～飛鳥時代の土坑 3、奈良時代の土坑 5・7・9 があるが、前者についての性格はよくわからない。後者については居住域との先後関係が問題となるが、土坑出土の坏類が井戸 1 出土のものより後出すると考えられることから、居住域廃絶後の土地開発に先立つ地鎮とする見方を主に、微高地上に居住域を形

成するにあたっての地鎮とする見方を副としておきたい。

微高地縁辺部における土坑については土器を埋納した可能性の高い土坑42を含め、性格については良くわからない。北寄りの斜面地に列を成す土坑群については掘削直後に埋め戻されている点、比較的規模の近いものが2基1対になる可能性が高い点などを指摘することができる。掘削直後の埋め戻しという状況は、土坑下部の土壌の採取や、下部の地層の確認などが考えられるが、規模にばらつきがある点などは否定的な要素となる。多量の植物種子が出土した土坑もあるので、種子そのもの、あるいはそれらを内包する果実などの埋納や保存なども候補となるが、やはり全体的な性格をしるには至らない。時期も明確にしがたいが、韓式系土器などの破片を含むものもあり、古墳時代中期～後期の可能性を想定しておきたい。

微高地1は本書報告範囲においてはもっとも遺構分布の集中する部分であり、不明瞭な様相を残しながらも居住域としての性格を示すことができる。しかし建物や井戸が重ねて営まれるほど、活発な居住域形成がなされなかったことも事実であり、居住域利用の限界点に近い様相を示しているように思われる。

### 第3項 微低地1 (図16) ・微低地2

微高地1と流路1・流路2との間の低地域を微低地1とする。T.P.+1.0m前後の標高を測る。明瞭に遺構と認識できるものは無く、土器集中1とした土器の分布と、近接してピット139とした穴がみられたのみである。



図46 土器集中1 平面図



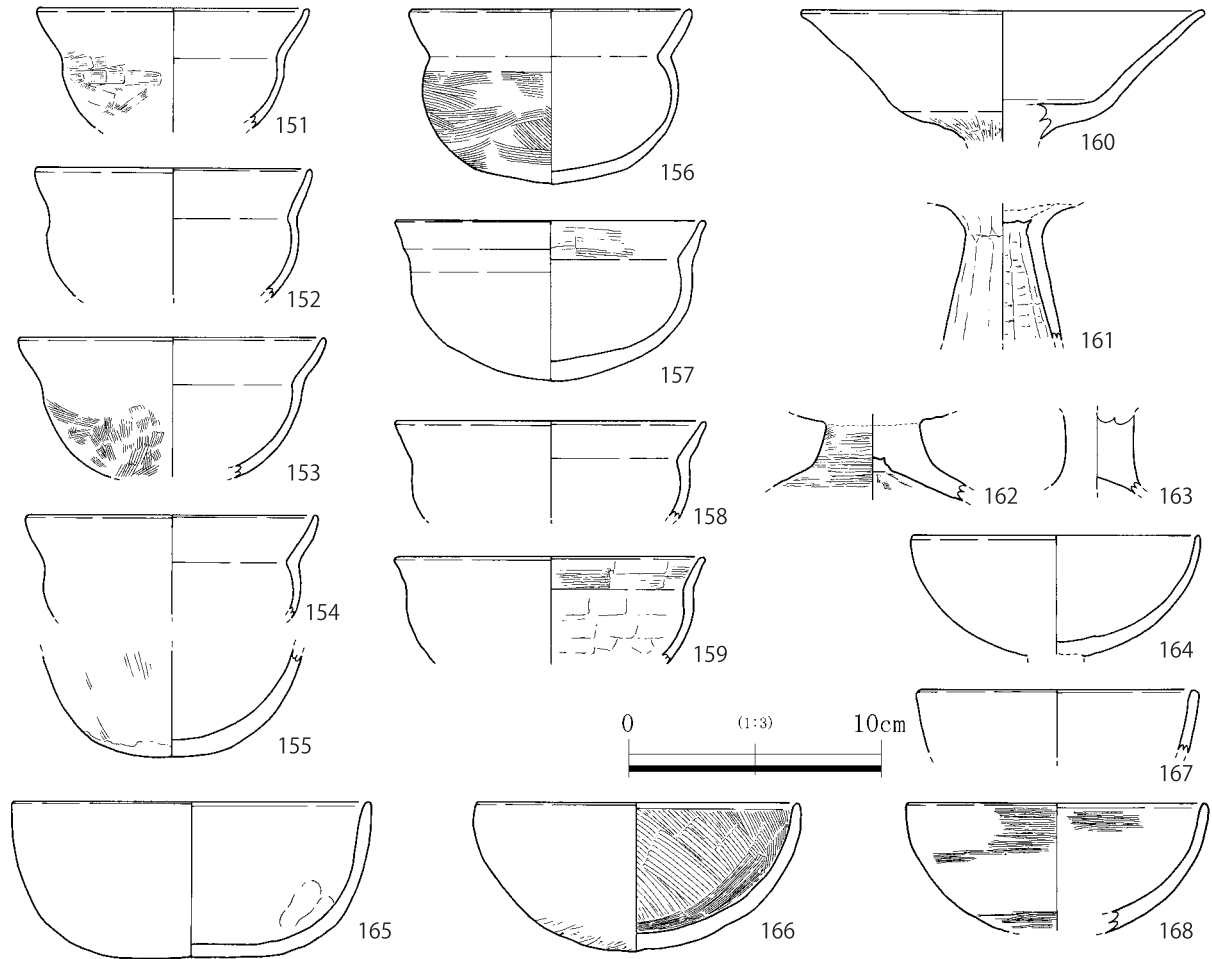


図47 微低地1 土器集中1 出土遺物

土器集中1 (図46)

第1b面検出作業中に土器片のまとまった分布を確認し、周辺から炭化物のまとまりと赤色顔料の分布をみた。土器などを取り上げた後も、土坑など痕跡は認められず、土器等のまとまりとして土器集中1とする呼称を付した。土器などの分布範囲は南北約2m、東西約1mであり、この範囲に図示し得たもので土師器18点、図示し得なかったもので須恵器細片1点、土師器細片数点がみられた。

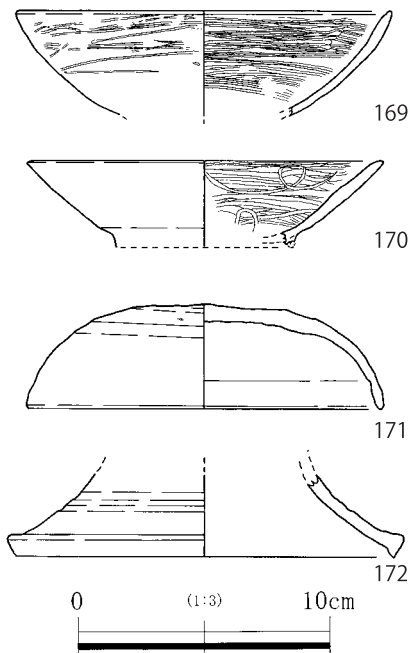


図48 微低地1 層 出土遺物

図47に土器集中1出土遺物を示した。全て土師器であり、高坏を含むものの小型の埴、壺類が主体を占める。図47-151~159は小型壺で、全体的に遺存状態は悪い。160~164は高坏で、埴形の坏部をもつものはその法量が他の小型器種に近い。165~168は小型の埴であるが、166の内面調整は貝殻条痕と考えられる。他の個体にも二次焼成を受けているものがあり、製塩土器が含まれているものと考えられる。

以上の土器の様相に炭化物がまとまって分布することとあわせ、この場で土器の加熱を伴う何らかの作業が行われたものと推測される。製塩土器が含まれているとの見立てが正鵠を射たものであ

れば、明確な炉とすることはできないまでも、製塩作業もその候補のひとつとなる。微低地 1 部分の層からは図48に示す遺物が出土した。171は内面に同心円圧痕を残すものである。

微低地 1 から流路 2 をはさんだ南側を微低地 2 としたが、微低地 1 同様の低湿な環境であり、記載すべき遺構、遺物はみられない。

#### 第 4 項 微高地 2 ・微低地 3

##### 概要 (図49・図50)

調査範囲の中央部に位置する微高地 2 では、微高地の母材となる堆積層に明瞭な時期を示す遺物が希薄であり、第2b層と第3-2b層の区分が不明瞭なことからも詳細については不明なところもあるが、おおむね微高地 1 同様の形成過程を経た地形であると考えられる。周囲の調査成果からみると必ずしも高い地形とはいえ、全体的に調査中も湿潤な環境は変わらなかったが、それでも本書で報告する調査範囲のなかでは比較的高い部分といえることができる。最も高い03-5-8トレンチ北西端付近で標高T.P.+1.3m程度を測り、微高地上において相対的に低い03-5-8トレンチ南東部分で標高T.P.+1.1m程度を測る。古代以降、第1-5層の攪拌により上面を削られた範囲が多く、第2a層が残存しない範囲も広い。また第1-5層すらも削られ、残っていなかった範囲もある。結果的に第0-5面に属する遺構と第 1 面に帰属する遺構を同一面で検出することとなり、それぞれの帰属についての認識は難しいものとなった。主観的な把握ではあるが、微高地上面の幅は30～40mを測り、その中央を中心に多数の遺構が分布する。

微高地 1 においても認められた現象であるが、微高地南端寄り付近の上面が軸方向に直行して幅 9 m 程度の溝状に分断されている箇所が認められた。埋土が第1-5層と考えられるものである。また微高地の東辺に幅 5 メートル前後の不整形な溝状に落ち込む部分がみられる点や、微高地上面の縁辺がゆるやかな勾配をもって傾斜するのではなく、はっきりとした段差をみせる点も、当初の地形に対して人為的に手が加えられた痕跡と考えられる。さらに06-2-4トレンチでは、第2b層を削りだす形で、微高地の東辺から畦状にのびる箇所も認められた。この部分を延長すると、本章第 5 節において記す、中世以降の坪境想定線に連なることから、第1-5層による第2b層の削平は条里型地割に規制されたものと考えられる。

微低地 3 は微高地 2 の縁辺にあり、流路 1 へ至る低湿な部分である。標高はT.P.+0.9～1.0m程度を測り、多くの部分では第2a層を除去することで、第1b面を検出した。

微高地 2 においては03-5-8トレンチの範囲で多数のピットを検出し、そのうちのいくつかについては掘立柱建物を構成するものと考えられる。微高地 2 においては建物 7～9 の 3 棟を想定した。また、建物を構成するにはいたらないが列状に並ぶものも若干認められる。微高地 1 と比べると、ピットなどの分布密度は低く、本来的に多くの建物が存在したものではないようである。建物以外の遺構には井戸があり、井戸側をもつもの 3 基 (井戸 2～4) を確認した。個々の遺構間の切合い関係は少なく、こと建物として認められるものには重複関係はみられない点は微高地 1 における状況と同じである。やはり同一場所において長期に営まれた居住域ではないと考えられる。同様に、建物の主軸に統一性がみられない状況が認められ、おもに微地形の方向を反映した軸をもつものが多いと思われるが、全体的に計画的な配置がなされた可能性については否定的な状況である。

ピットなどからの遺物の出土は皆無ではないが、微高地 1 において土器埋納遺構としたような、坏や皿類を単独で埋納する遺構はみられない。しかし、ピット148については遺構の輪郭を確認することはできなかったが、土師器甕 2 個体を意図的に埋納した遺構である可能性がある。またピット153についても

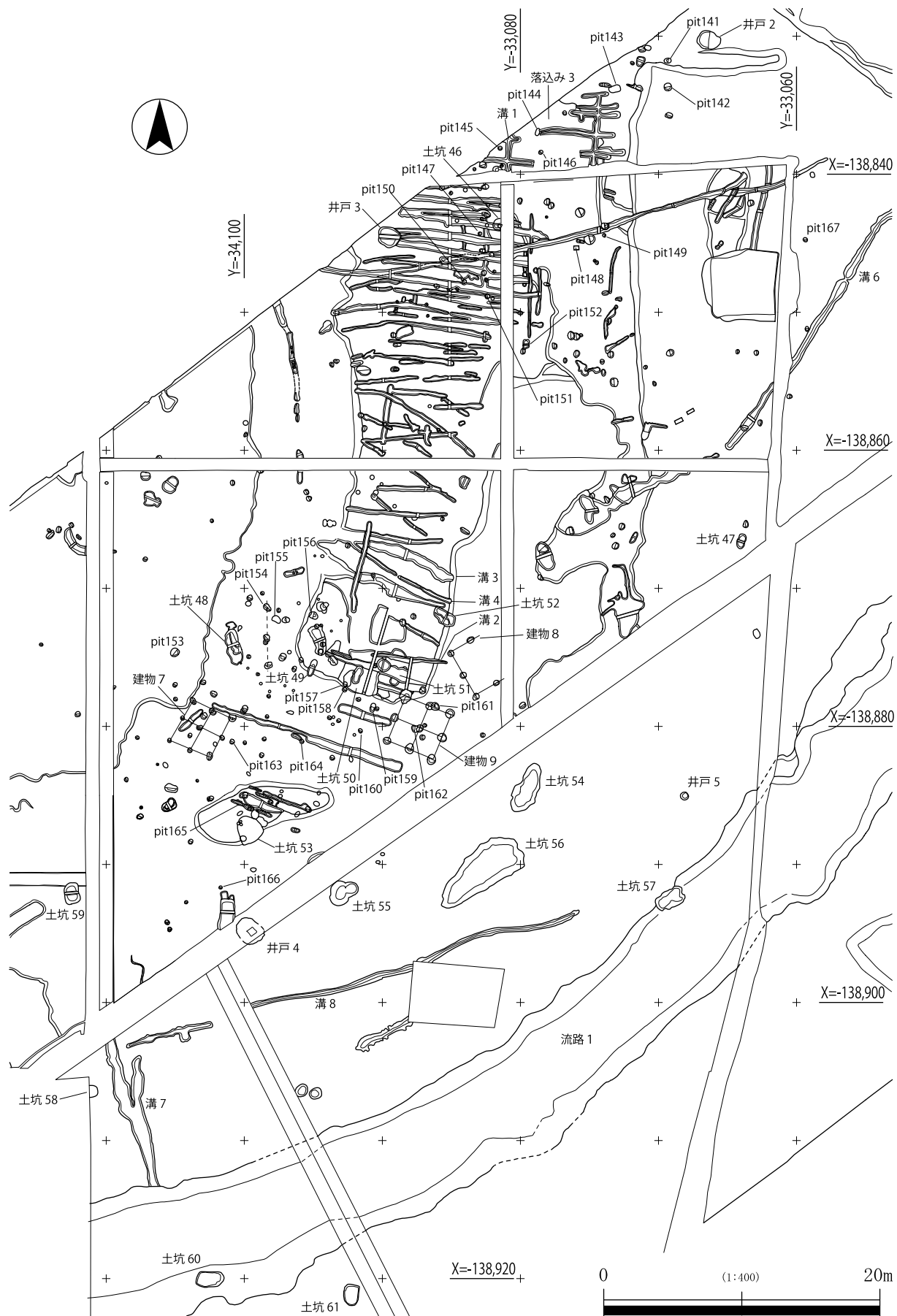


图49 第1面 微高地2・微低地3 遺構分布図 (s=1/400)

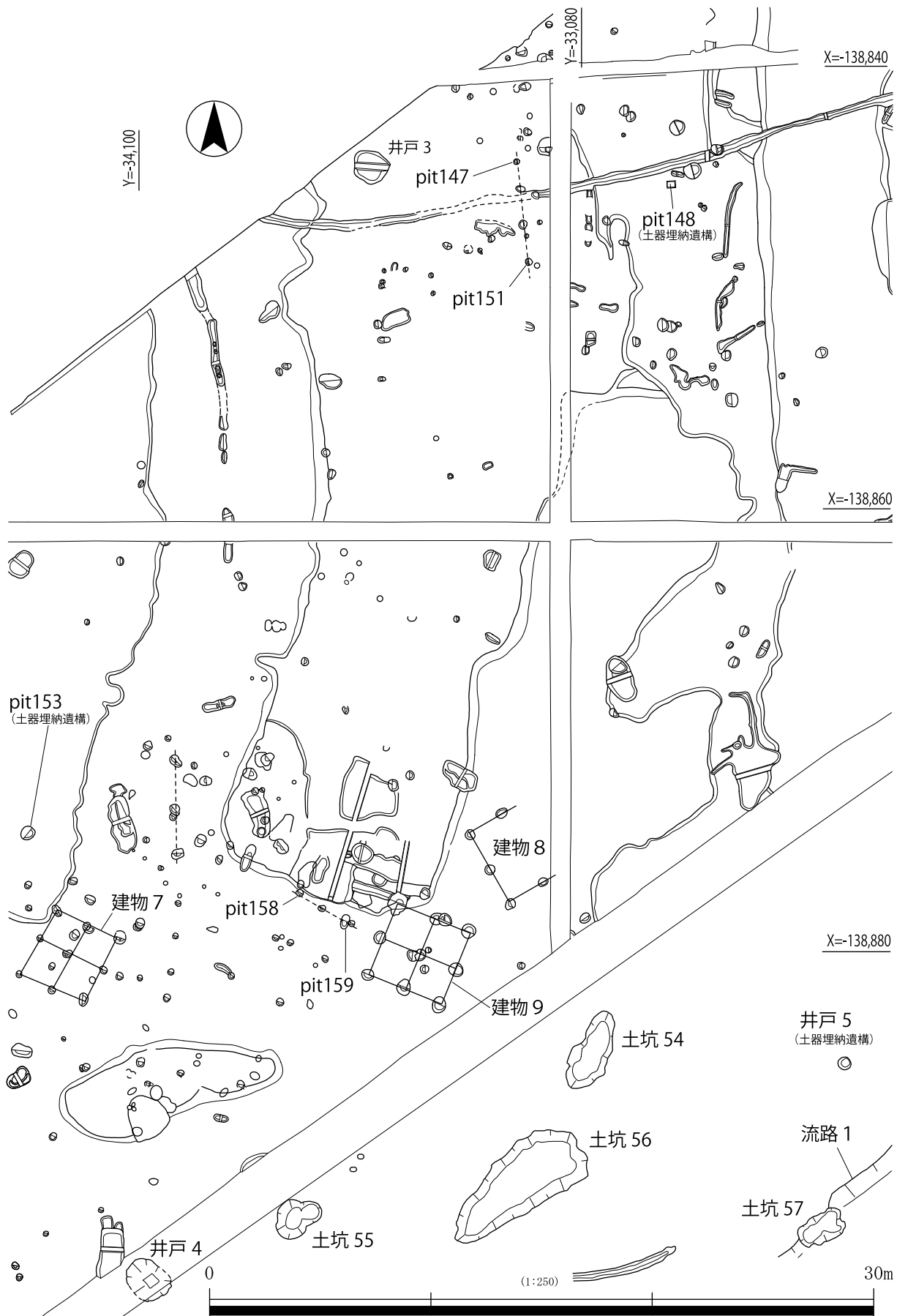


図50 第1面 微高地 2 建物群分布図 (s=1/250)

韓式系土器甑を意識的に埋納した土坑であると考えられる。

第0-5面に帰属する溝群と錯綜し把握が難しかったが、微高地北寄りを東西に横断する溝（溝5）を検出した。ゆるやかな弧状を描き延びるもので、調査範囲外へ延びるため全容は不明であるが、検出した範囲だけでも長さ35mを超える。

微低地3では微高地2の形に添うように、井戸、溝、土坑などが分布する。井戸は井戸側をもつものはないが、小径で深さをもつもの（井戸5）があり、韓式系土器の埋納がみられた。土坑は微高地1で確認されたものより大規模なものが多いが、同じように掘削直後に埋め戻されているようである。

以下、個別の遺構について報告する。

### 建物7（図51）

微高地2南西縁に位置する掘立柱建物である。柱穴のいくつかに切り合うピットがあるが、重複する建物遺構などは認められない。東15mに建物9が、南15mに井戸4が位置する関係をもつ。2間×2間の柱配置を取り、束柱をもつが、柱配置は極めて不整形であり、平行四辺形の平面プランをみせる。それでも規模は梁間3.1m、桁行3.4mを測り、面積は10.5㎡となる。柱間隔にもばらつきがあり、梁間の柱間隔は1.5m、1.6m程度の差であるが、桁行では最大2.1m、最小1.3mと大きい。建物主軸の方位は座標北から約28°東に振れている。個々の柱穴は不整形な形状のものが含まれ、規模にもばらつきがある。

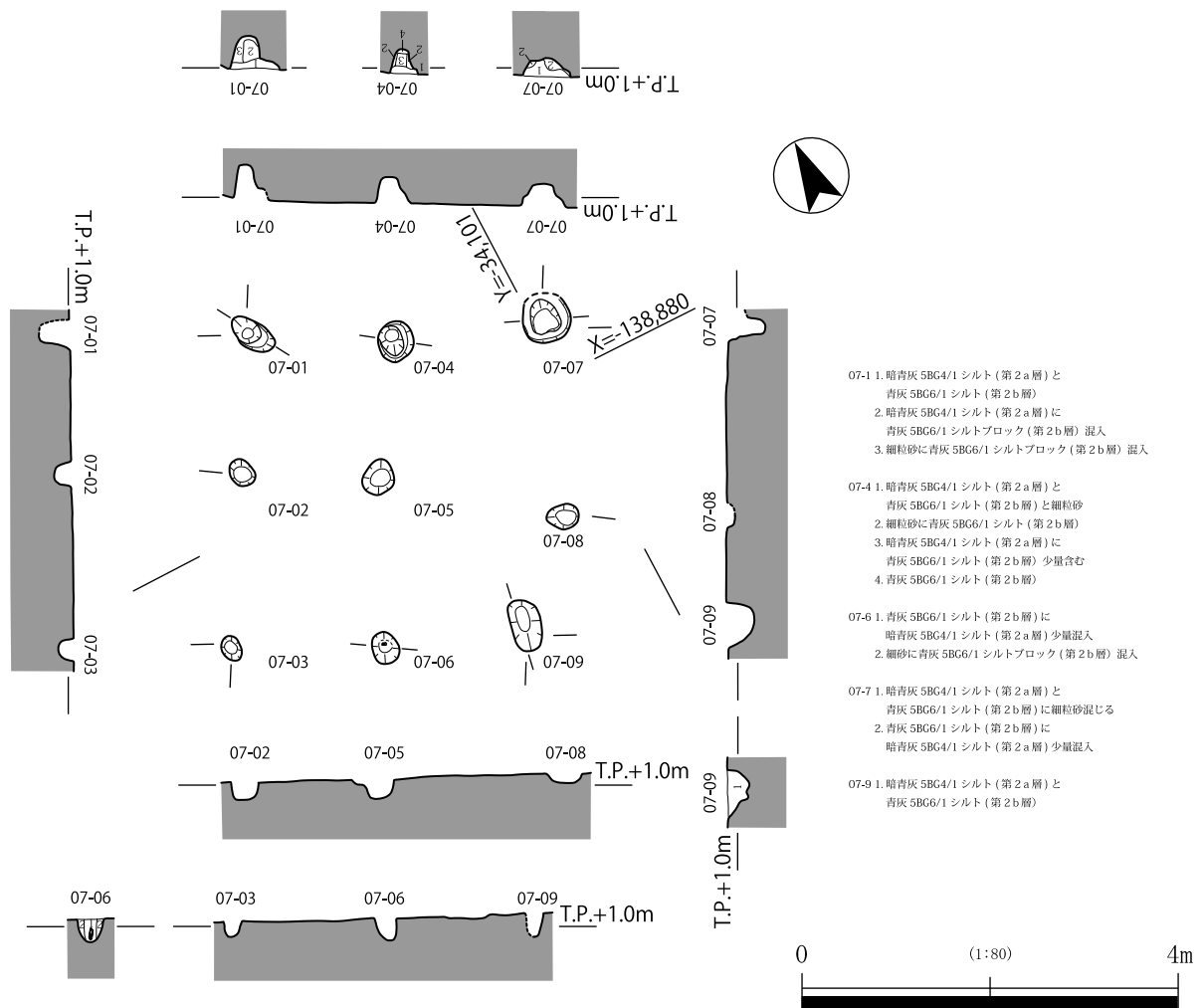


図51 建物7 平・断面図



小さいもので径30cm程度、大きいものでは径50cmを超えるが、おおむね円形を志向する形状をもつ。柱穴の深さにもばらつきがあるが、検出面からの深さは25~40cm程度のものが主体を占める。柱穴の埋土は第2a層、第2b層のシルトブロック間に、第3層の砂が混ざるものも多く、平面ではよくわからなかったが、断面では柱痕跡の認められるものもある。柱穴06では柱痕跡に柱材の木質が残存していた。出土遺物としては図示できるものではなかったが、樹種はヤナギ属であった。これ以外には遺物はまったく出土していない。したがって遺物の面から帰属時期を知ることはできないが、他の遺構の時期を参考とすると、古墳時代中期~後期に属するものと考えられる。

#### 建物 8 (図52)

微高地 2 の南東縁付近に位置する掘立柱建物である。比較的遺構分布が希薄な箇所があり、遺構の切合い、重複はみられない。建物 9 とは中心距離で 5 m 程度の距離となるが、上屋を想定すると軒が近接する関係となる。

確認した柱穴は 5 基であり、これのみで構造を示すと 1 間 × 2 間の構造となるが、建物とするには柱穴を欠く構造である。規模は 3.3m × 1.8m を測り、面積は 5.9m<sup>2</sup> となる。建物の軸方向は座標北から 30° 西に振ったものである。各柱穴は比較的整った楕円形を示すが、深さにはばらつきがみられる。深いものでは検出面からの深さは 30cm を超えるが、浅いものでは 10cm に満たない。柱穴埋土は掘削土を用いた埋め戻しが推測されるもので、第 2a 層、第 2b 層を母材とするシルトのブロック間に砂の混じるものである。5 基の柱穴のうち、4 基の底には礎板とみられる板材が残存していた。樹種はいずれもスギであり、複数の材を並べて使用している状況が看取された。礎板の遺存状況は比較的良好であったにもかかわらず、平面、断面とも柱痕跡を確認することはできなかった。このことからこの建物は建設途中において作業を中断し、柱穴を埋め戻したものである可能性が想起される。現状の柱配置によって建物を想定すると極めて小規模なものとなるが、北東側にさらに柱配置が展開する予定であったとすると、2 間 × 2 間の構造では面積が 11.8m<sup>2</sup> と、建物 7、建物 9 の面積に近い数値となる。建物ではない可能性をまったく否定することはできないが、建設途中の建物であるという案を主に、建物以外の構造物であったとする案を脇に置くこととしたい。柱穴からの出土遺物には、上記の礎板以外には、2 基の柱穴からそれぞれ土師器の極細片が出土したに過ぎず、それらの時期などは不明である。

#### 建物 9 (図53)

建物 8 の西南に位置する掘立柱建物で、切り合うピットなどはみられるが、重複する建物などの遺構

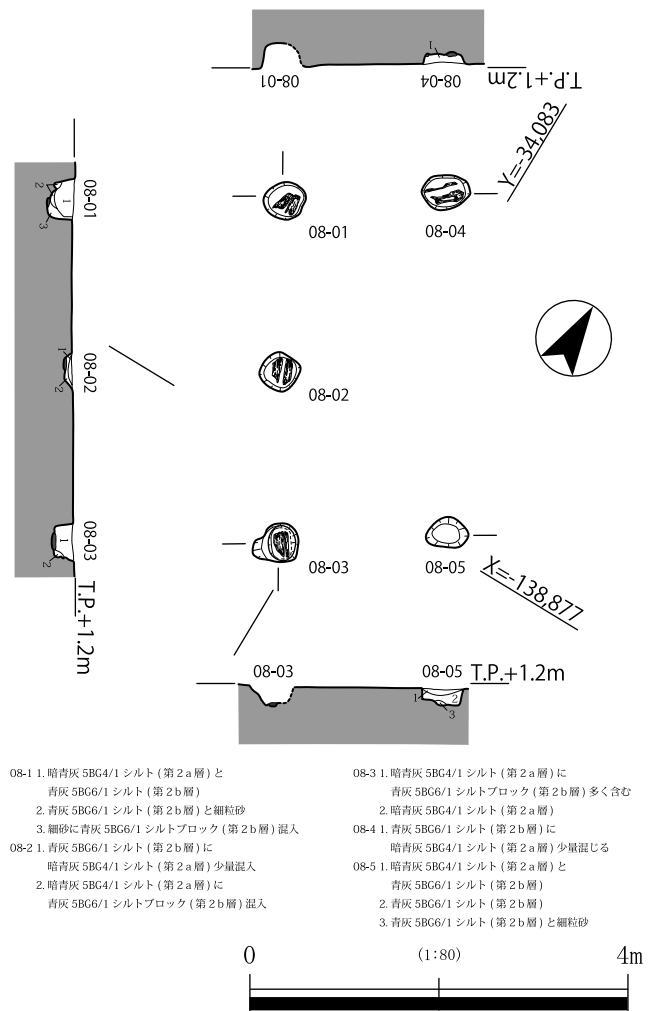


図52 建物 8 平・断面図

はない。柱配置は2間×2間のもので、束柱を有する。比較的整った平面形を示し、柱間寸法も1.8mに近い数値に揃うものである。建物規模は3.5m×3.6m、面積12.6㎡を測り、微高地2で確認された建物の中ではもっとも大きいものである。建物の方位は座標北から23°東に振ったもので、建物7に近い値であり、微地形の方向ともよく合致している。柱穴は径60cm程度の円形のものを中心となるが、柱穴01は径90cmを越える大型のものである。深さにもばらつきがあるが、深いものでは40cm前後、浅いものでは10cm前後となる。柱穴平面では柱痕跡は明瞭ではなかったが、埋土の観察では柱穴01において柱痕跡の可能性のある断面が認められた。一方、他の柱穴では水平に分層の可能な断面を示しており、柱の様相についてはよくわからない。礎板あるいはその可能性のある木質の残存する柱穴は6基あり、全体に遺存状態は不良であったが、柱穴09出土のものはアカガシ亜属であった。必ずしも柱穴の床に接しているものばかりではなく、柱穴掘削後、若干の埋め戻しをした後、材を設置したものと考えられる。柱穴から埋納などの状況を示す遺物はみられず、柱穴01、柱穴09の2基から土師器片が出土したのみである。唯一図示できたものは甕口縁部（図56-173）で、やや内湾気味に延び、端部内面をわずかに肥厚させる様相からは古墳時代中期頃のものと考える。

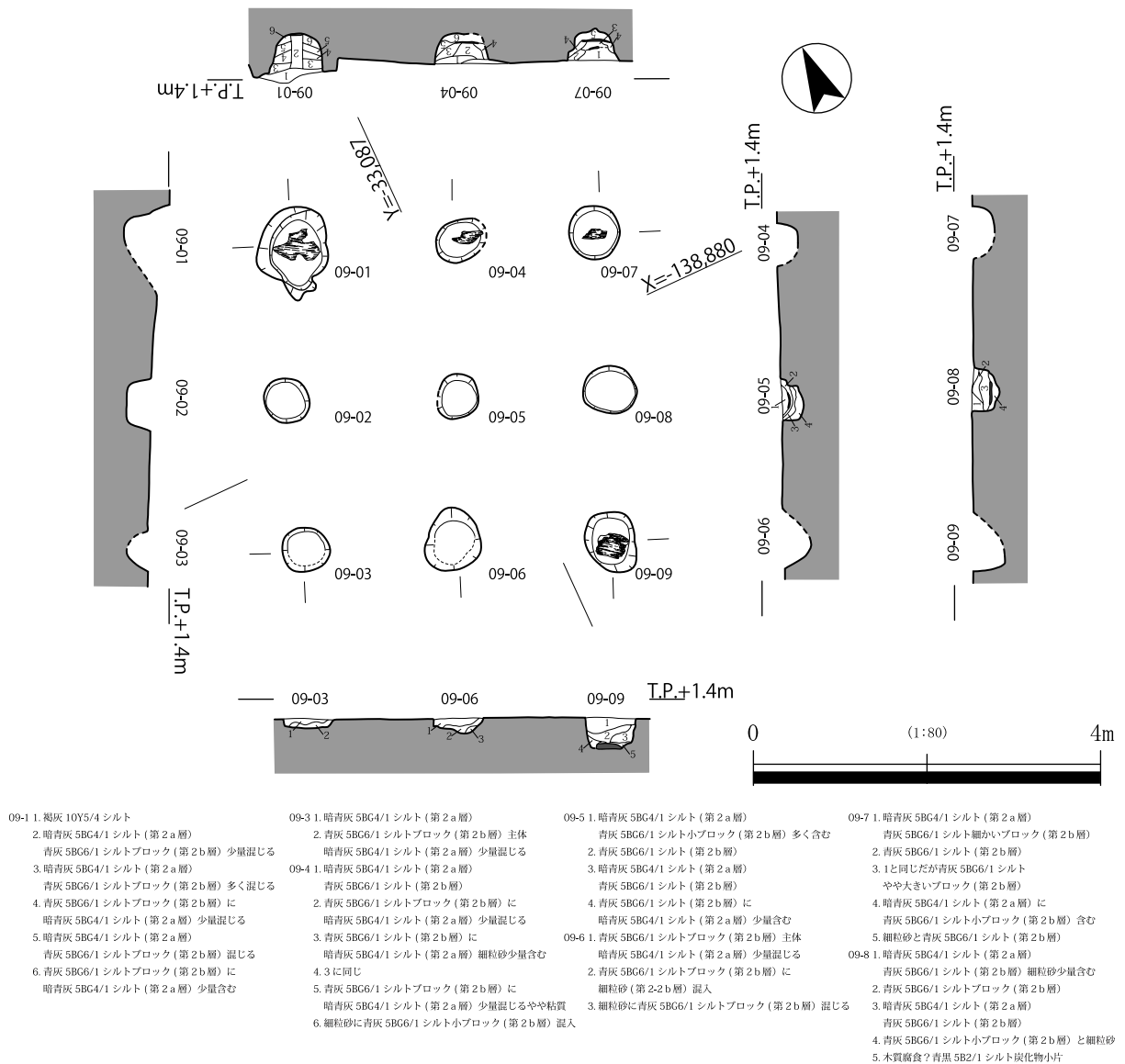


図53 建物9 平・断面図

井戸 2 (図54)

微高地 2 の北東縁に位置する井戸である。近接して建物遺構などはみられないが、西南には南北に並ぶ柱列があり、東西方向に延びる畦状の高まりの北に接する位置となる。井戸の構造は、板材を方形に組んで井戸側とするものである。検出面での掘方規模は東西1.6m、南北1.3mを測り、やや不整形な隅丸方形を呈する。井戸側は長方形の板を3段に積んだもので、平面プランはいびつな方形を呈し、おおむね正方位を指向する。規模は内法で南北70cm~75cm、東西75cm~85cmを測り、角の部分に組合せのための細工はみられない。最上段は高さ15cm、2段目、3段目は高さ20cm程度の材を用いている。2点について樹種を確認したが、ともにモミ属であり、他の材もすべて同じ樹種であったと思われる。井戸側は井戸最上部には達しておらず、廃絶時に一部が抜き取られた可能性がある。井戸 2 の位置したトレンチは第 1 面以下の調査は行なわなかったため、断ち割りは行なわなかった。したがって井戸側の内側のみ

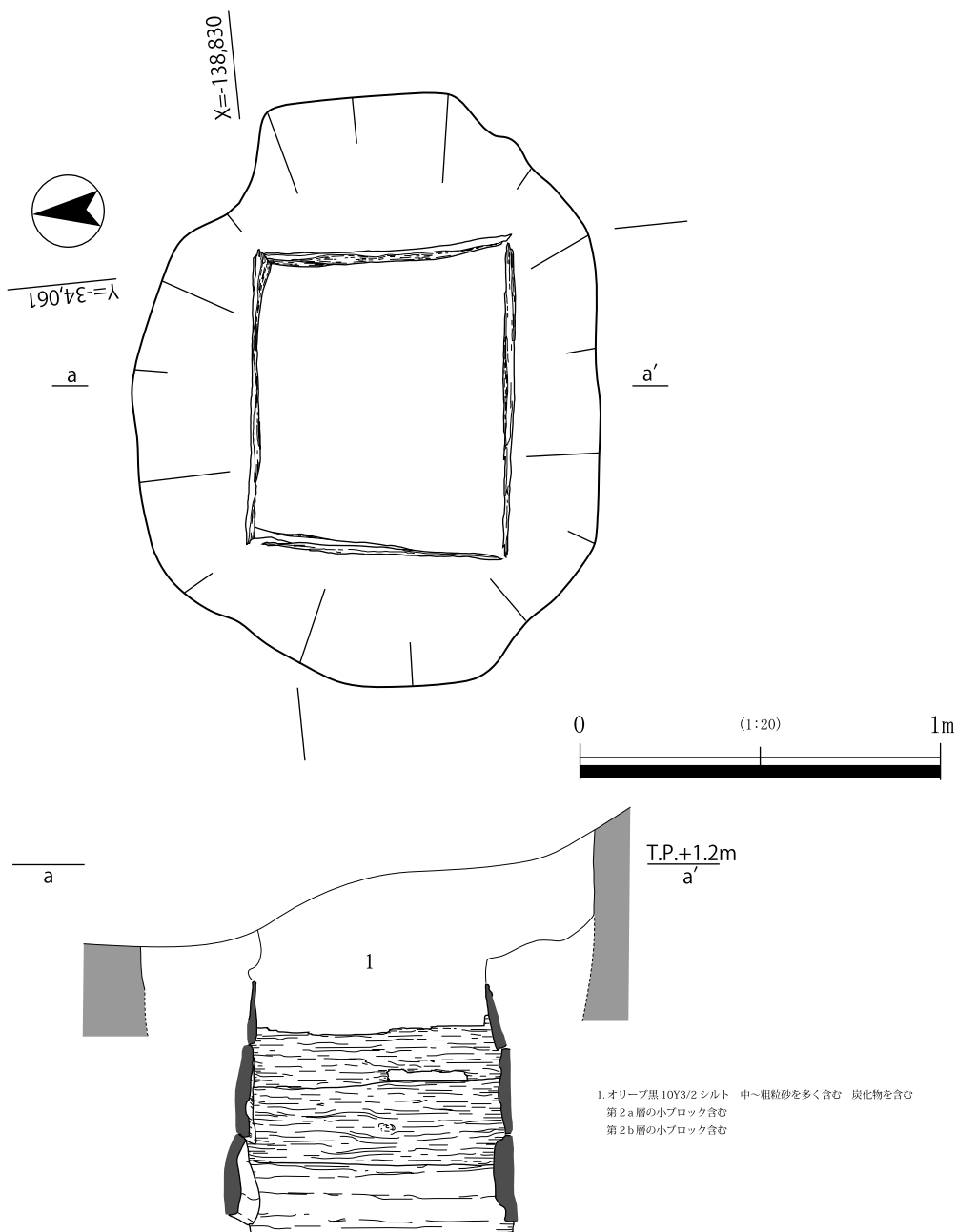


図54 井戸 2 平・立面図

を掘削したにとどまり、湧水も著しく、最下部の構造については十分な知見を得られなかった。図面等に記録はできなかったが、掘削時の所見では井戸側以下にも素掘りの部分が認められた。検出面から井戸側の最下段まで、深さ1.2m程度を測る。

出土遺物には須恵器細片が2点、土師器細片が14点、炭化物片が出土したのみで、土器類の投棄や埋納などの行為はなされなかったものと考えられる。したがって遺物から帰属時期を知るには至らないものであったが、微高地2における土地利用状況から推測して、古墳時代後期以降がその候補となる。位置関係からは、古墳時代に帰属すると考えられる他の建物遺構との有意な関連が想起されないため、積極的に古墳時代の居住域を形成するものとの評価を下しがたい。しかし次に述べる井戸3においても位置関係としては、建物遺構などから距離を置くものであり、可能性について否定できるものではない。

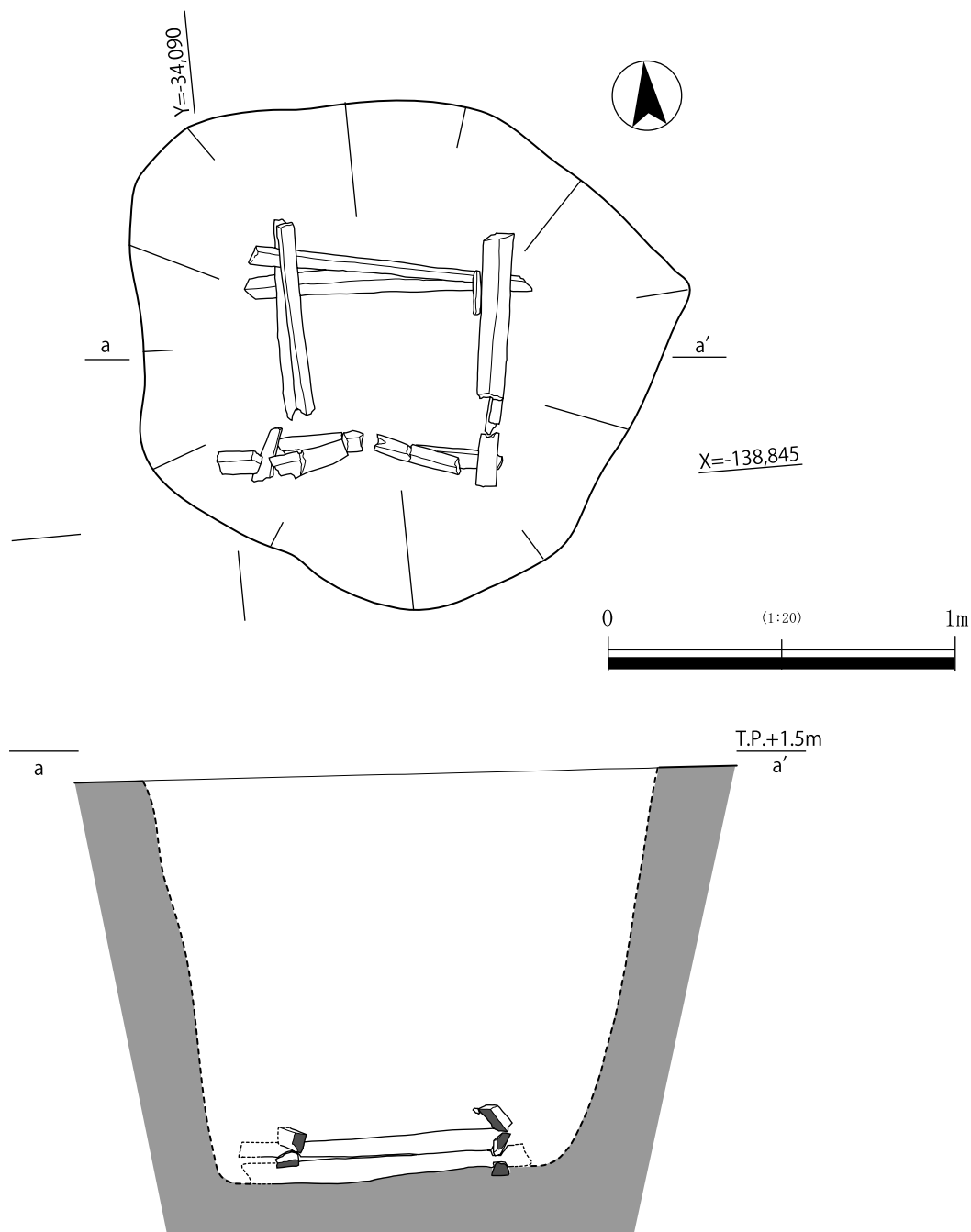


図55 井戸3 平・立面図

東西方向の畦状遺構との関係を重くみれば、古代以降の条里型地割を施行する開発段階に下る可能性も想定される。

#### 井戸 3 (図55)

微高地 2 の調査範囲北寄りに位置する井戸である。近接して建物遺構などはみられないが、東側にやや距離をおいてピット147・151を含む柱列が位置する。井戸の構造は板材を方形の井桁状に組んで井戸側とするものであるが、井戸側自体は最下段付近に一部が残存していたのみであった。検出面での掘方規模は東西1.6m、南北1.5mを測り、不整形な円形を呈する。調査時には井戸側がまったく確認できない状況で掘り下げたが、湧水が著しく掘削途中に掘方壁面の崩落があり、詳細に不明な部分が多い。掘方最下位付近に至り、ようやく井戸側が姿を現したわけであるが、これも本来の形状をとどめているものとは考えがたい。井戸の廃絶に際して井戸側の多くを抜き取り、埋め戻したものであるのか、井戸の掘削時、最下段の井桁のみ設置した段階で崩落、廃棄されたものかは不明である。残存する部分からの知見では井戸側は長さ70cm～80cm、高さ5cm、厚さ3～5cmの材を交互に組上げるもので、平面プランは正方形を志向し、規模は内法で50cm～55cmを測る。おおむね正方位をとる。角部分の細工は明瞭ではなく、結果的に井桁の材間に隙間が生じている。井戸側に用いられた材のうち3点について樹種を確認したが、スダジイ2点、ツブラジイ1点という結果であった。湧水も著しく、最下部の構造については十分な知見を得られなかったが、掘方の底に井桁が接する状態であったと考えられる。検出面から井戸側の最下段まで、深さ1.2m程度を測る。

遺物の出土状況としては、埋土上位にまとまる分布を示すが、調査時の壁面崩落の影響もあり、埋土中位以下の分布を記録できていない。それをふまえても、遺存状態の良好な遺物の出土は無く、井戸への意識的な遺物の埋納は想定しがたい。出土遺物の中で、図化し得たものを図56-174～181に掲出した。これら以外には土師器、須恵器、韓式系土器の細片が出土しているが、須恵器の割合が一割程度と目され、比較的少ない。174は須恵器、175・176・179は土師器、177・178・180・181は韓式系土器である。180は口縁端部直下にまで縄蓆紋のタタキ痕跡を残す。181は鍋かと考えられるが、体部にやや甘い沈線を施し、把手には上面からの切り込みと下面に刺突痕跡が残る。これらの遺物から詳細な時期を示すことは難しいが、おおむね古墳時代中期～後期の段階に帰属すると考えられ、微高地 2 上における古墳時代の中～後期の居住域利用に伴うものとみることができると考えられる。直近に建物遺構が存在しない点は、後章でも触れるが、集落における居住域形成の段階を示している可能性がある。

#### 井戸 4 (図57)

微高地 2 の南先端付近に位置する井戸である。直近に建物遺構は認められないが、北東10～20m離れて建物7～9が分布する。井戸の構造は扉の転用材を方形に立てて井戸側とするものであるが、上端部の遺存状態は悪いものであった。03-5-2トレンチと03-5-8トレンチの境界付近に位置しており、2トレンチ調査時の側溝の掘削段階に確認した。このため、掘方の平面での確認ができない部分があるが、検出面での掘方規模は2.0m×1.6mを測り、長楕円形の平面形をもつものと考えられる。井戸側の構造は、方形の四隅に柱を設置し、その間を転用材である扉板で埋めるもので、柱が掘方底に打設されており安定している。その外側に板材を立て、掘方埋土により埋め戻し、固定している。個々の材に組み合わせのための細工はみられない。柱材の上端は板材に比して残りが良く、おおむね当初の形状を保っていると考えられるが、掘方検出面から井戸側際上端まで、約50cmの深さがあり、この部分には当初から井戸側がなかったのか、あるいは腐蝕により失われたのかはよくわからない。後述するように、それぞれの扉



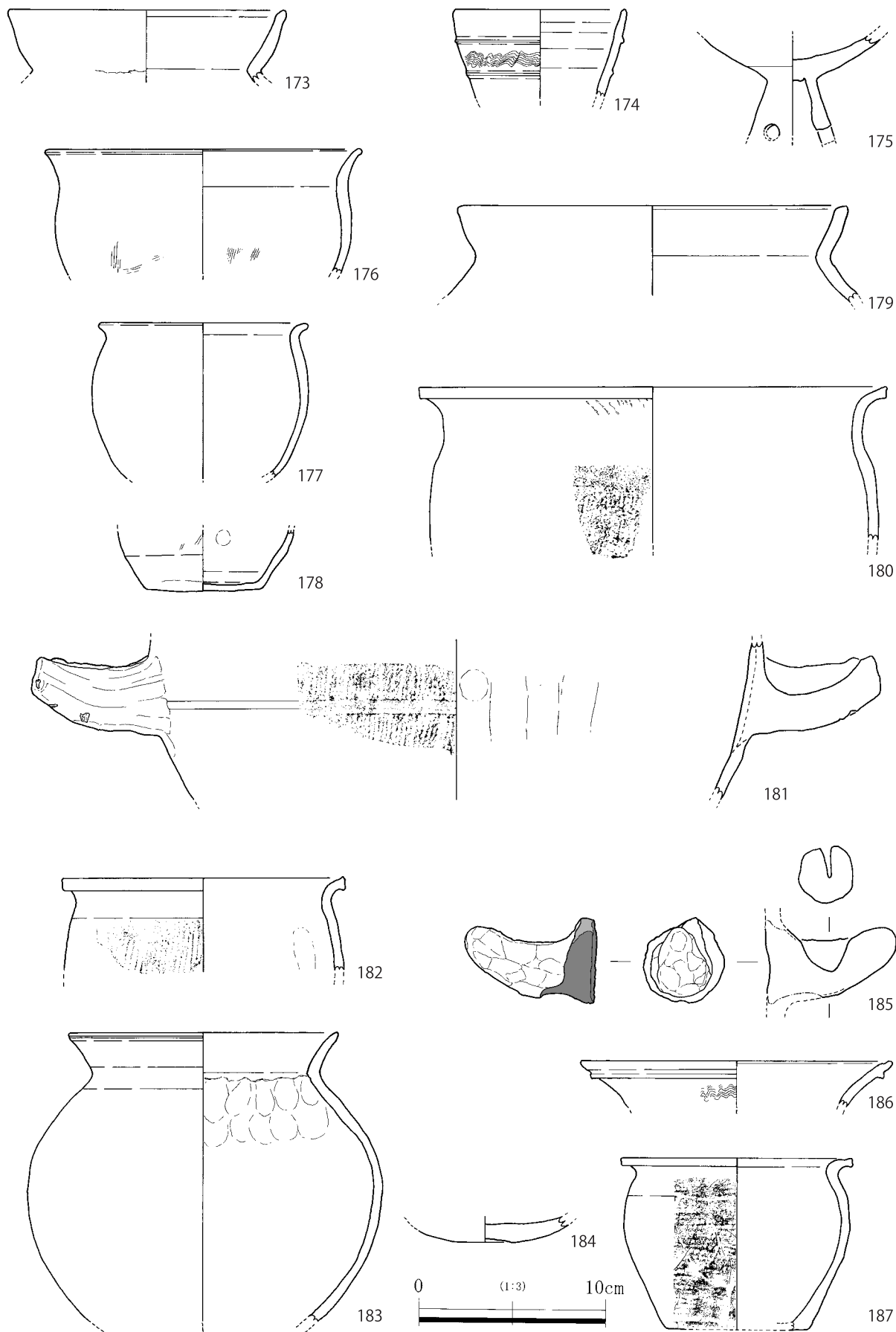


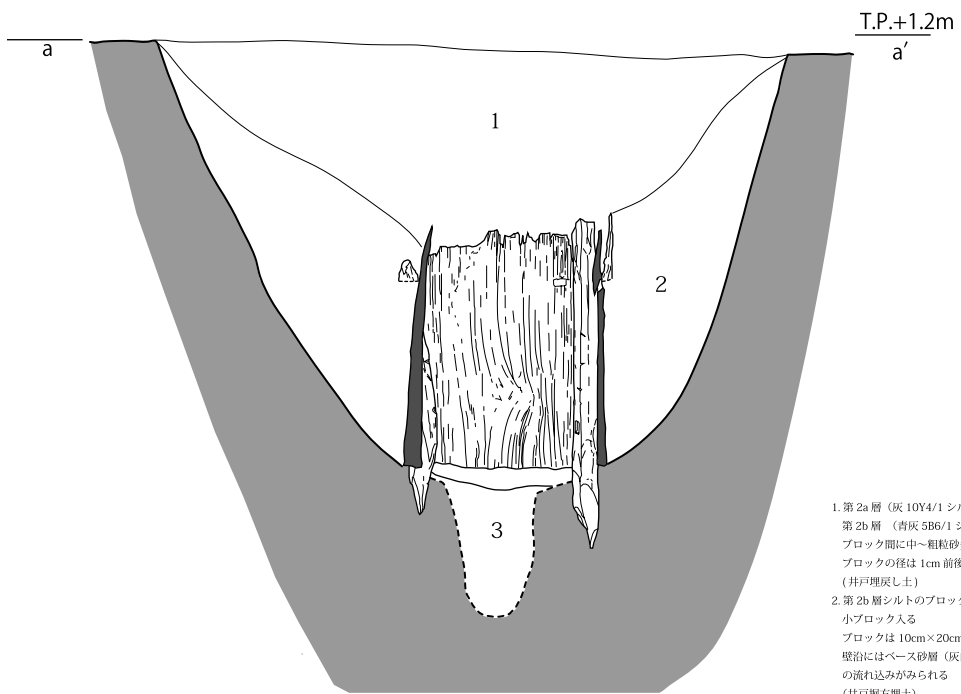
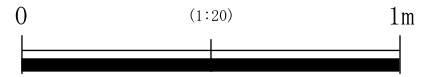
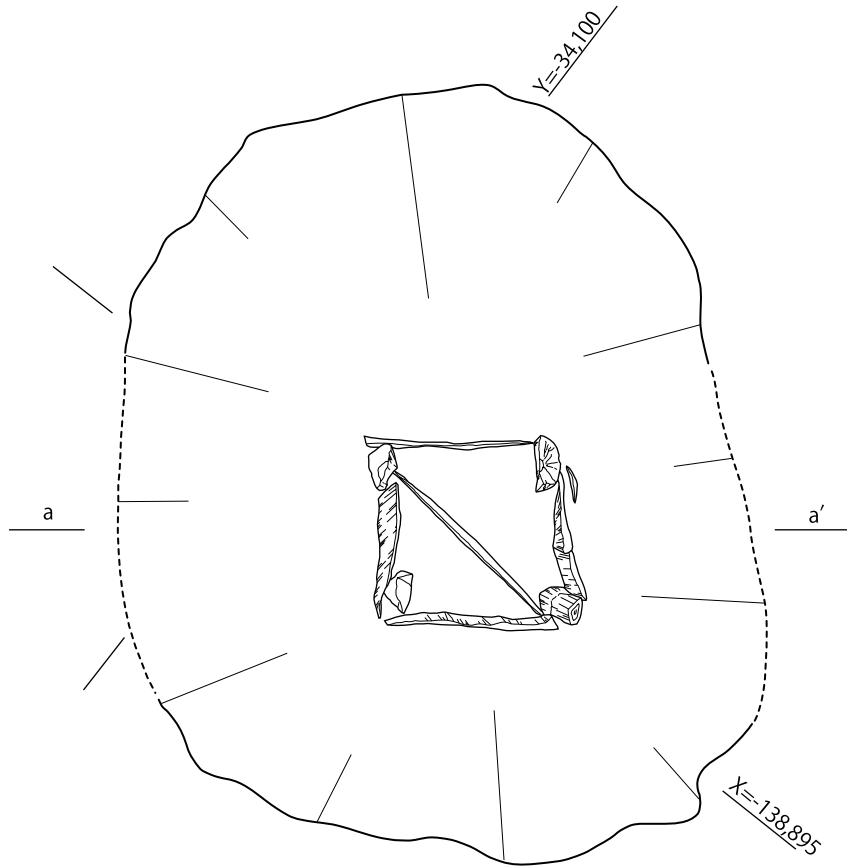
图56 微高地2 遺構 出土遺物1

材は個別の個体であり、当初の法量を復元すると検出面付近に達することから、本来、検出面付近まで井戸側が存在した可能性も考慮する必要があるが、そう考えると、廃棄の段階で井戸側上半部が打ち割られて撤去されたか、腐食により失われたかということとなるが、長期間の使用を認めがたい状況では前者の可能性がより高い。あるいは当初より2分割された扉材を用いていたのであれば、井戸側上端部が不整形な状態であったこととなるが、転用材の加工の面から考えれば頷きがたい。

井戸側に用いられている材については後述するが、組み上げられた井戸側は内法で40cm×45cm程度の正方形を指向する平面形をもち、深さは65cm程度を測る。平面形の軸方向は正方位からおよそ50°振れたもので、微高地の軸ないしは建物の軸方向に近い。井戸側に用いられた材については図58-188~195に示した。188は北東側に配された材で、かんぬき受けの残る側が外側になるように立てられていた。軸部分を含めた残存長67.9cm、幅33.3cm、厚さ3.9cmを測るが、本来の扉材を2分割したもので、かんぬき受け部分が扉の中央付近にあるという前提では、本来は110cm程度の高さが復元できる。かんぬき受けは基部が比較的広い形状をもち、樹種はツブラジイである。189は南東側に配されたもので、残存長66.9cm、幅47.6cm、厚さ4.7cmを測る。かんぬき受けあるいは軸などの痕跡はよくわからないため、扉材とは断定し難いが、幅は後述の191に近い数値であり、同種の部材と考えられる。190は南西側に配された材で、やはりかんぬき受け側を外にして設置されていた。残存長70.3cm、幅34cm、厚さ4.7cmを測る。188同様、本来の扉を2分割したものと考えられるが、復元すると130cm程度の高さとなる。外面のかんぬき受け部分は削り取られており、扉本体より一段高まった基部のみが残るが、やはり幅広のタイプである。191は北西側に配された材であるが、軸部分が西側になるように設置されていた。かんぬき受けの痕跡はよくわからないが、削られた可能性がある。残存長70.9cm、幅47.2cm、厚さ3.4cmを測る。189~191の樹種はいずれもモミ属である。法量的には188と190、189と191が近似するが、それぞれが同一個体ではない。したがって4枚の扉材が用いられたこととなる。先述のように、残存する部材は元の材を2分割したものと考えられるため、かんぬき受けを中心に復元すると、本来の扉、言い換えると用いられた倉庫の入口の高さは1.1mと1.3mという数値が得られるが、かんぬき受けの残らないものについてはそれ以上になる可能性もある。扉2枚により構成される幅については70cmと95cmの二種類の数値が得られる。四隅に打設された柱はやはり転用材と考えられるもので、法量はまちまちであるが、いずれも先端を杭上に加工している。図60-192はシャシャンボ、193・194はツブラジイ、195はスダジイが用いられており、井戸3の用材に近い。なお、井戸側が設置された掘方底面からさらに30cm程度の深さの素掘りの部分が認められた。井戸掘方の掘削直後に砂で埋没したようであるが、この部分まで含めると井戸の深さは1.5mを測るものとなる。

側溝掘削時に取り上げられた遺物の存在は否定できないが、遺構掘削時の遺物としては須恵器、土師器の細片が1点ずつ出土したのみである。また井戸側の一部として用いられていた可能性の高い木製品(図60-196)が1点、井戸側内部に立てかけられた、ないしは支柱的に配された棒材(図60-197)が1点みられた。ともに樹種はヒノキである。

井戸の位置、ならびに用いられた扉材の様相から、井戸4は古墳時代中期~後期にかけての微高地2における居住域利用に伴うものと判断される。しかしながら、埋土には、掘削直後に堆積したと考えられる最下部の素掘り部分に堆積した砂を除くと、井戸としての機能時の堆積物が不明瞭であり、ほぼ埋め戻しによると考えられるブロック土で満たされていた。井戸側上半部が撤去されたという想定と合わせて、井戸として完成後、それほど時間をおかずに廃棄、埋め戻されたものと推測しておく。



1. 第2a層 (灰 10Y4/1 シルト) と  
第2b層 (青灰 5B6/1 シルト～粘土) ブロックの混合  
ブロック間の中～粗粒砂多く入る  
ブロックの径は 1cm 前後～ 10cm 大までが中心  
(井戸埋戻し土)
2. 第2b層シルトのブロック主体、間に第2a層の  
小ブロック入る  
ブロックは 10cm×20cm 大の大きいもの含む  
盛治にはベース砂層 (灰白 5Y7/1 中粒砂～細粒砂)  
の流れ込みがみられる  
(井戸埋戻し土)
3. 灰白細粒砂 (掘削直後の埋戻)

図57 井戸4 平・立面図

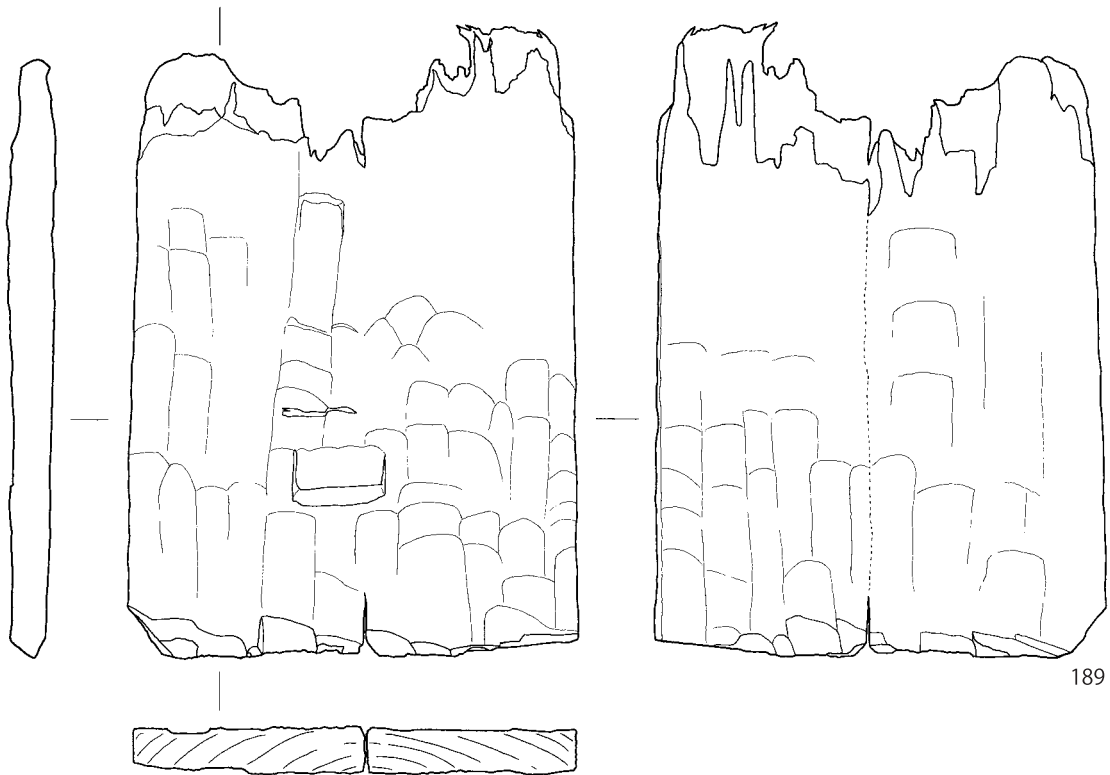
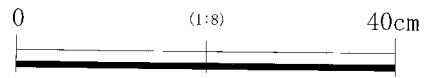
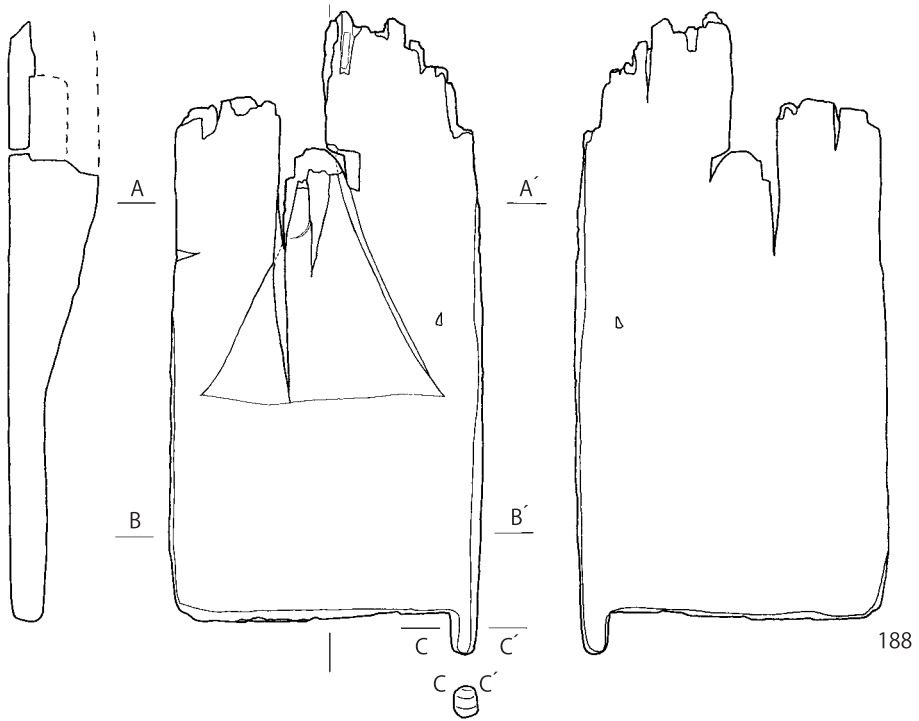


图58 微高地2 井戸4 出土遺物1

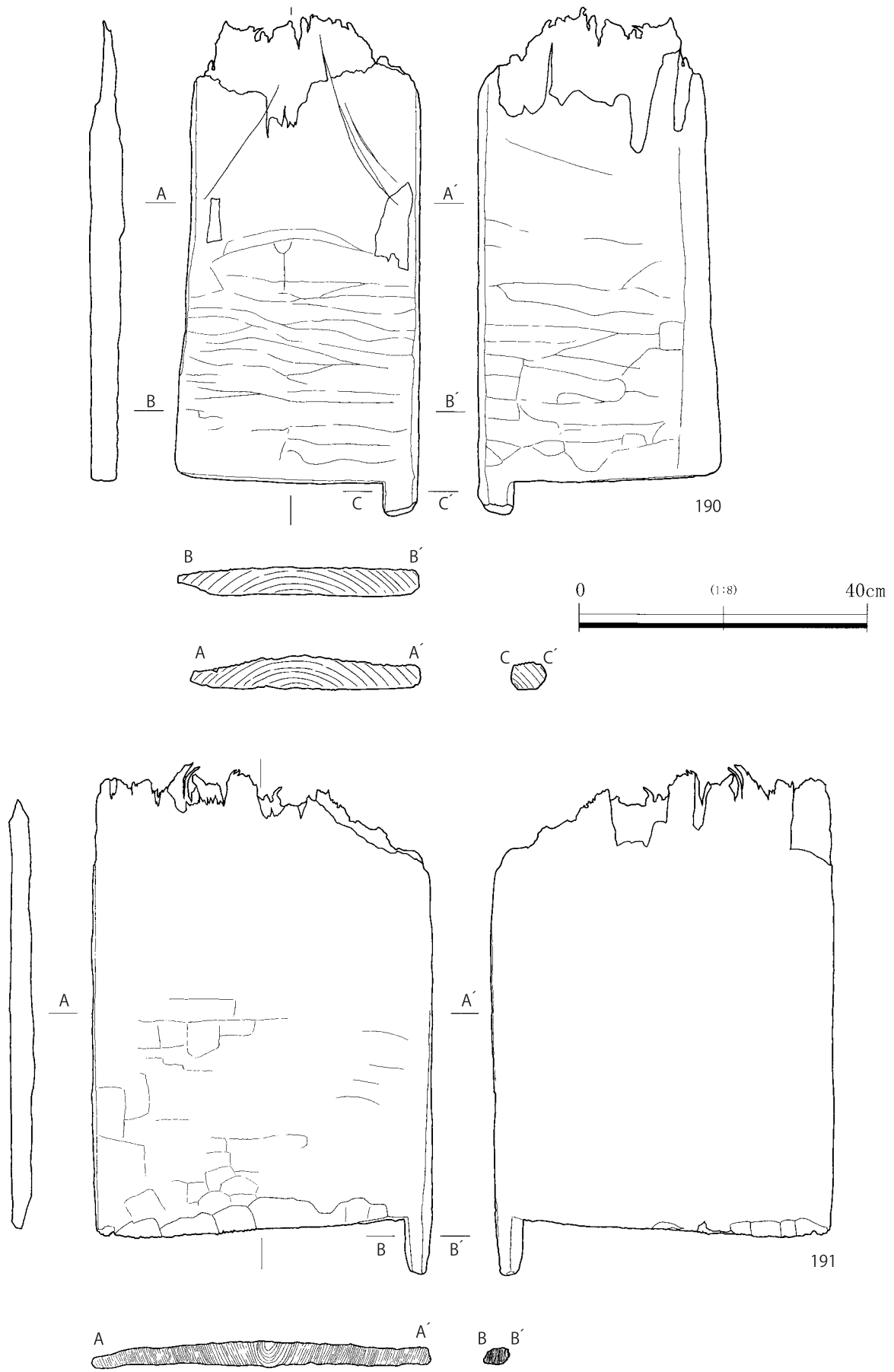


图59 微高地2 井戸4 出土遺物2



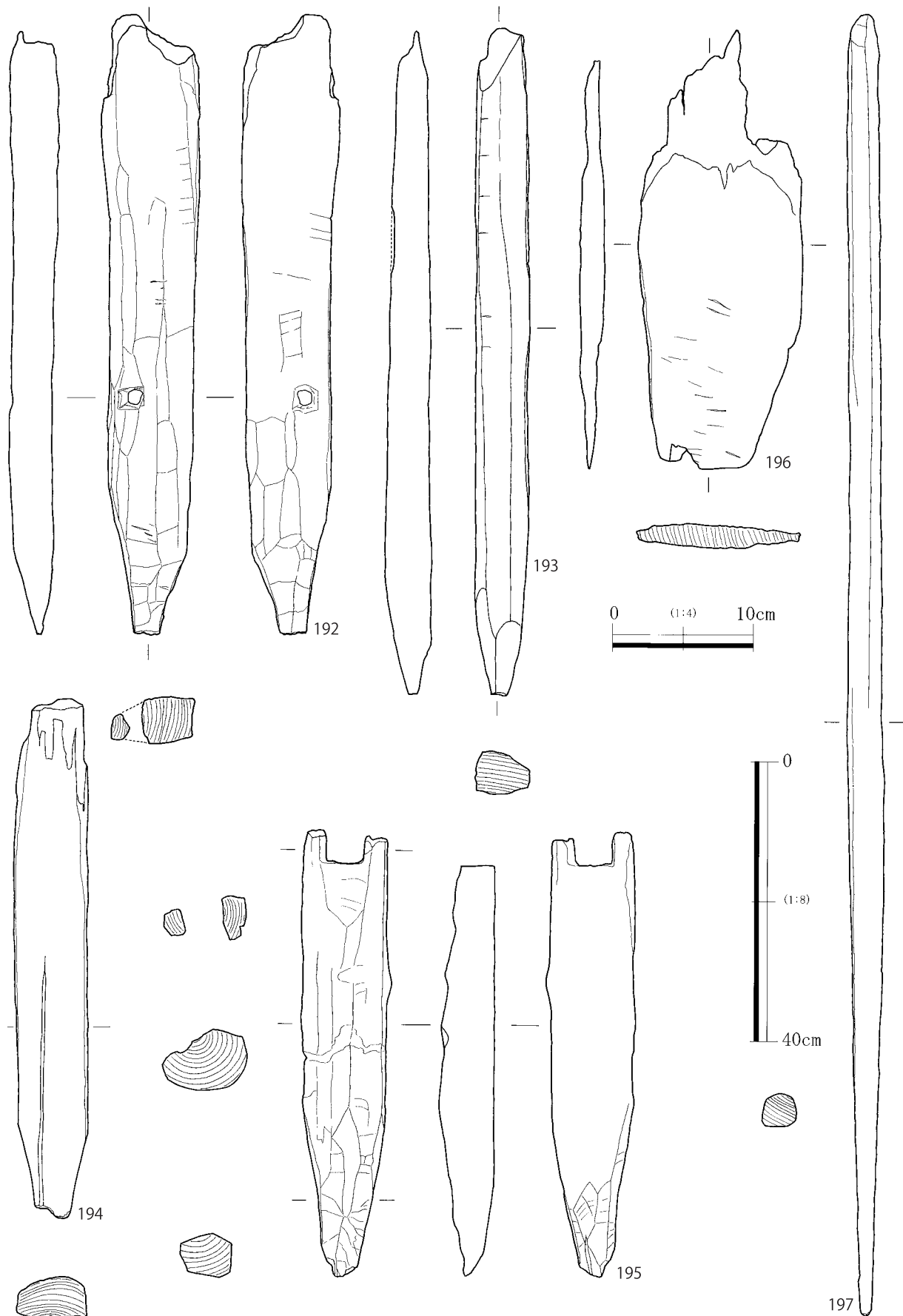


图60 微高地2 井戸4 出土遺物3

## 溝 1

溝 1 は微高地 2 北寄りで検出した小規模な溝で、東西、南北に交差する形状をもつが、06-2-4トレンチにおいて検出した範囲より南側については、03-5-8トレンチの断面観察用筋掘りと重なり、確認できなかった。また、溝 1 に切られる落ち込み 1 の埋土との識別も不明瞭で、全体の広がりは不明である。遺物には須恵器細片が 1 点、土師器細片が 3 点出土している。時期については落ち込み 1 の埋没後のものであり、古墳時代より遅れるものと考えられる。

## 溝 2

溝 2 は微高地 2 の南寄り、建物群に近い箇所に位置する小規模な溝である。ほぼ東西方向に延びるので、幅 30cm 程度の規模をもつ。微高地の縁からさらに延びていた可能性もあるが、第 1-5 層による攪拌により失われていると考えられ、延長は 5.5m 分を検出した。埋土は第 1-5 層の下部に近い、炭混じりシルトである。出土遺物には土師器甕、高坏、韓式系土器把手があり、このうち把手を図 56-185 に示した。上面に切り込みの施されたものである。

## 溝 3・4

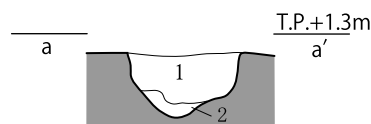
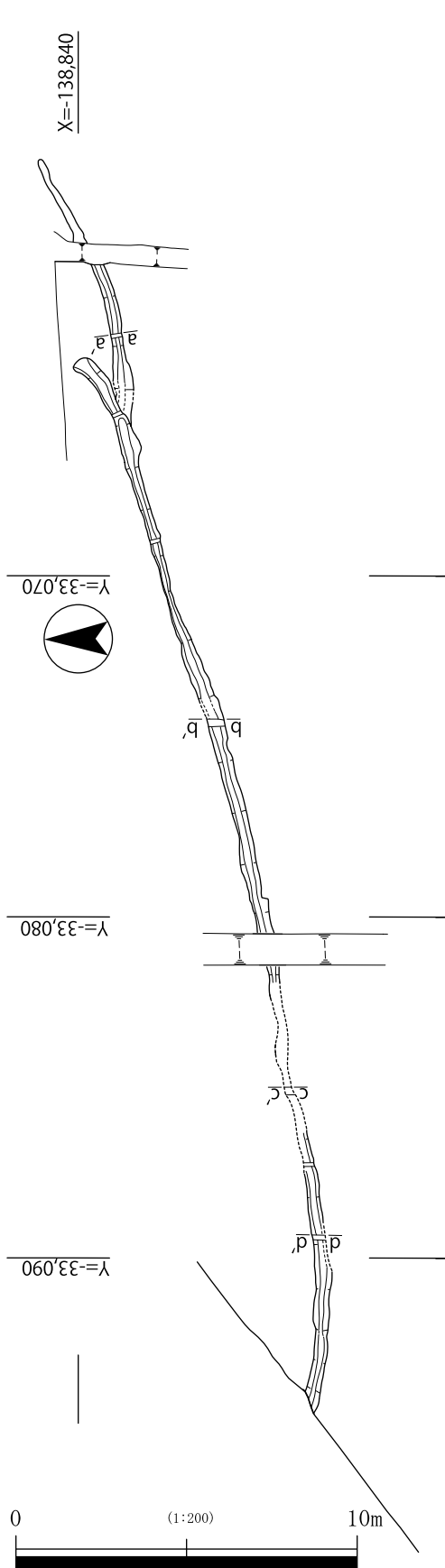
溝 3・4 は溝 2 の北、約 5 m に位置する小規模な溝で、やはり東西方向に延びる溝であるが、地形の軸に直交するように、西側がやや北に振る形状をもつ。微高地の縁からさらに延びていた可能性もあるが、第 1-5 層による攪拌により失われていると考えられ、溝 3 では一部途切れるが、ともに長さ 9 m 程度を確認した。溝 3 は幅 40cm、溝 4 は幅 40cm～110cm の規模をもつ。ともに埋土は第 2a 層と類似する土壤である。溝 3 からは土師器の細片が出土したのみであるが、溝 4 からは 30 片以上の土器片が出土し、内須恵器壺口縁（図 56-186）、韓式系土器平底鉢（図 56-187）を掲出した。186 はやや丸みを帯びた口縁端部をもち、端部内側に強いナデを施し、端部直下に突帯をもつ。187 は溝 4 出土土器片と第 1-5 層出土の土器片が接合した個体で、外面に格子タタキを施すものである。

## 溝 5（図 61）

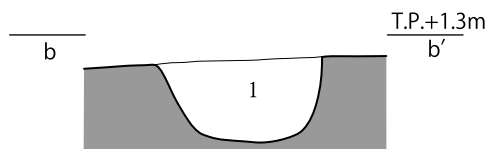
溝 5 は微高地 2 を横断する溝である。調査範囲の北寄りに位置する。東端は 06-2-4 トレンチにあり、微高地 2 と流路 1 の間にあたる。西端は調査範囲外へ延びる。東端から 8 m 付近で切り合う箇所があり、再掘削された可能性がある。また微高地 2 上では溝群と錯綜する関係にあり、把握が困難な箇所もあるが、おおむね連続する一条の溝であると考えられる。検出範囲での延長が 35m を超える長い溝であるが、幅、深さともに小規模で、幅は 30～50cm 程度、深さは浅いところで 15cm 程度、深いところでも 35cm 程度である。断面形状は逆台形を呈する箇所が多く、一部に垂直に近い壁をもつ箇所もある。底のレベルは西端付近で T.P.+1.1m、東端付近で T.P.+1.02m を測り、やや東側に下がる傾向があるが、延長距離を考えると高低差の無い溝であるといえる。埋土は総じて炭化物や腐蝕を多く含むシルトであり、西側の深さのある部分では下層を中心にシルトブロックを含む埋め戻し土が観察された。全体を確認できたものではないが、土層断面から観察するかぎり、上部に再掘削の痕跡を見出すことができる。

遺物の出土状況には特記すべきものは無く、出土遺物には土師器、須恵器、韓式系土器の細片が主体を占める。器形の判るものでは土師器では甕、高坏、須恵器には流路 1-2 域出土の大甕片と接合したものもある。およその割合では土師器が 9 割を占める。

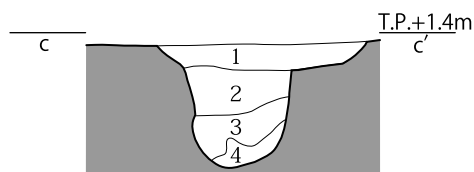
出土遺物の様相から古墳時代に帰属するものである可能性が高いが、性格については考察の材料を欠く。仮に微高地 2 上の区画を示すものであるならば、溝 5 のすぐ北に井戸 3 が位置することも有意な関係である可能性がある。



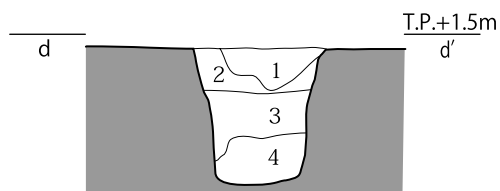
1. 暗灰 N3/シルト
2. 青灰 5BG6/1シルトに黒N2/シルトブロック (第2a層) をわずかに (10%程度) 含む



1. 暗灰 N3/シルト



1. 灰 N4/粘質土 細かい炭化物粒 (径0.2cm大) をわずかに (1%以下) 含む
2. 灰 5Y4/1シルトのブロック (第2a層・径1~2cm) に青灰 5BG6/1シルトブロック (第2b層・径1~2cm) がモヤモヤと混じる
3. 黒N2/シルトブロック (径1~8cm) と青灰 5BG6/1 (径1~8cm) が混じる 黒色ブロックの割合が多い 3層に比して、くっきりとしたブロックがはっきりと混じる 微細な炭化物粒 (径0.2cm以下) をわずかに (1%以下) 含む
4. 青灰 5BG6/1シルトに黒N2/シルトブロック (第2a層) をわずかに (10%程度) 含む



1. 灰 7.5Y4/1粘質土 細かい炭化物粒 (径0.2cm大) をわずかに (1%以下) 含む
2. 灰 N4/粘質土 細かい炭化物粒 (径0.2cm大) をわずかに (1%以下) 含む
3. 灰 5Y4/1シルトのブロック (第2a層・径1~2cm) に青灰 5BG6/1シルトブロック (第2b層・径1~2cm) がモヤモヤと混じる
4. 黒N2/シルトブロック (径1~8cm) と青灰 5BG6/1 (径1~8cm) とがほぼ同量混じる 3に比して、くっきりとしたブロックがはっきりと混じる 微細な炭化物粒 (径0.2cm以下) をわずかに (1%以下) 含む

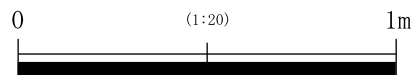


図61 溝5 平・断面図

微高地2では遺物が出土したピット141～166に遺構番号を付した。このうち、まとまった遺物の出土状況みせるピット148・153を報告する。

ピット148 (図62)

ピット148は微高地2北西寄り、溝5の南に接して位置するピットである。落ち込み1と重複し、検出時に遺構の輪郭を確認することはできなかったが、落ち込み1掘削時に土師器小型甕2個体が並置された状態で確認された。そのため厳密には独立したピットであるか、落ち込み1内に土器を置き並べたものかは検証できないが、土器の遺存状態が良好であることから土器を意識的に埋め戻した遺構であると考え、独立した土器埋納遺構であると判断した。このため、遺構としての規模、法量についてはまったく知ることができない。ピット内部に埋置されたと想定する土器は図63-198・199であり、198が西側、199が東側に置かれていた。いずれも口縁の一部を欠損するが、打ち欠きではないとおもわれる。一方、体部から底部にかけては良好に残存するが、199には焼成後穿孔が内面からなされている。法量はともに口径10cm強、器高12cm前後という近似値をもつ。このような小型甕の時期的な位置付けは難しいが、体部内面の調整が不明瞭ながらもナデ調整であることから、古墳時代中期～後期段階の居住域利用に伴うものと考えておく。

ピット153 (図62)

ピット153は微高地2の西縁部分に位置するやや大型のピットで、建物群に程近い位置にある。平面形はややいびつな円形を呈し、径55cm～65cmを測る。深さは40cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。検出面で確認した埋土は第1-5層の下部に近い、炭混じりシルトである。底部に接する形で甑 (図63-200)

〈ピット 148〉

〈ピット 153〉

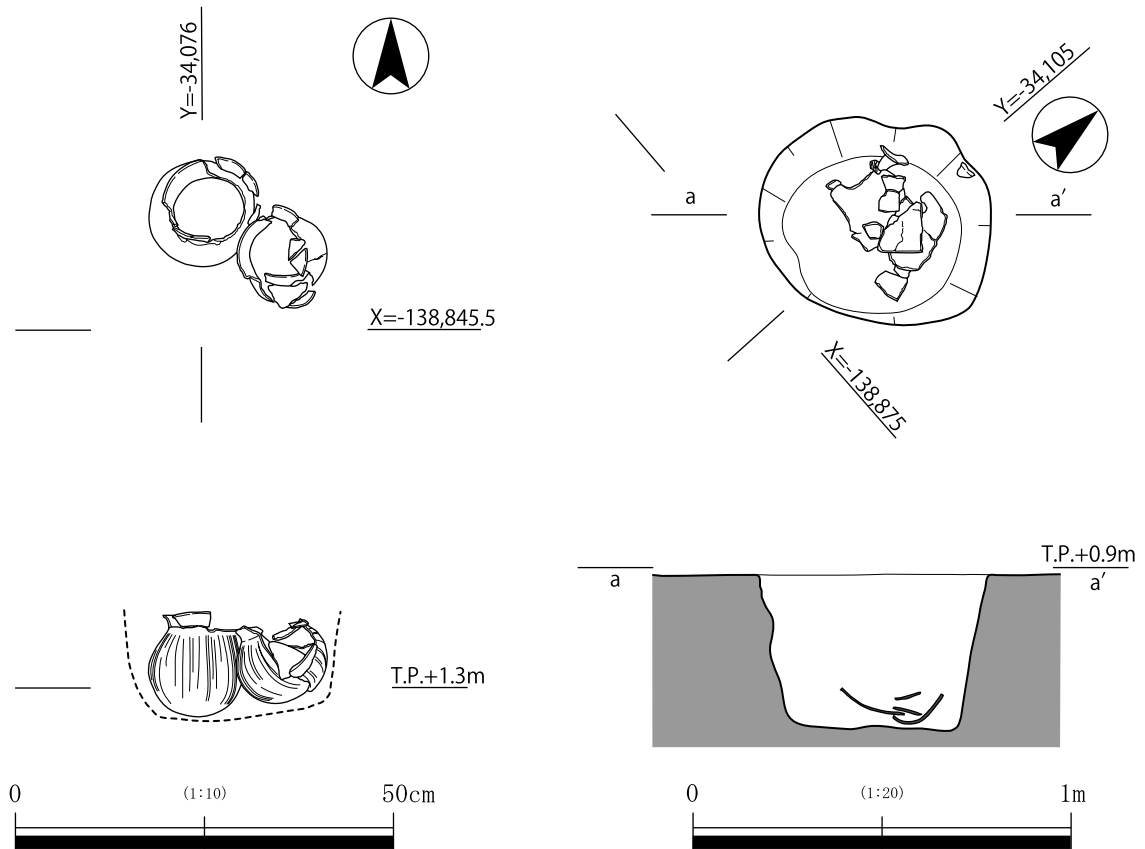


図62 ピット148・ピット153 平・立・断面図

の大型の破片が置かれていた。埋土上部にも同一個体の破片を含む土器片が含まれており、大型の破片の埋置後、他の破片などとともに埋め戻されたものと推測する。200は韓式系土器の甌で、復元口径21cm、器高24.1cmを測る。体部中位に沈線一条を雑に巡らし、線上に一对の把手を配置する。把手は断面円形で端部を裁断し面をもつ。底部は平坦で、1 + 6個の円形の蒸気孔が復元される。体部外面には格子タタキを施し、口縁付近、底部付近はナデ消している。胎土は非生駒西麓産である。これ以外の出土遺物には土師器の甕、高坏、鉢、200とは別個体の格子タタキを残す韓式系土器などがあり、図化し得たものを図63-201・202に掲出した。これら遺物の時期を厳密に知ることは難しいが、甌の諸特徴は初期須恵器段階に併行する時期の特徴を残すものと考えられ、古墳時代中期～後期段階の居住域利用に伴う土器埋納遺構と考えるものの、居住域の形成の初期段階、あるいは先行する時期においておきたい。

#### 落ち込み1

落ち込み1は微高地2の東縁に位置する広い落ち込みで、微高地東縁を落ち込みの東側の方に揃えており、地形を意識した遺構であると考えられる。東側の輪郭は比較的整っているが、西側は凹凸の多い不整形なものである。埋土は腐蝕を多く含む土壌であり、人為的な埋め戻しの痕跡は見いだせなかった。明瞭な出土状態を示す遺物の出土はみられなかったが、土器細片が出土しており、06-24トレンチの範囲で出土した図56-182・183の2点を図示することができた。182は韓式系土器平底鉢で、体部外面に平行タタキを残す。183は球形の体部をもつ土師器の中型甕で、内面にはナデ調整を施している。

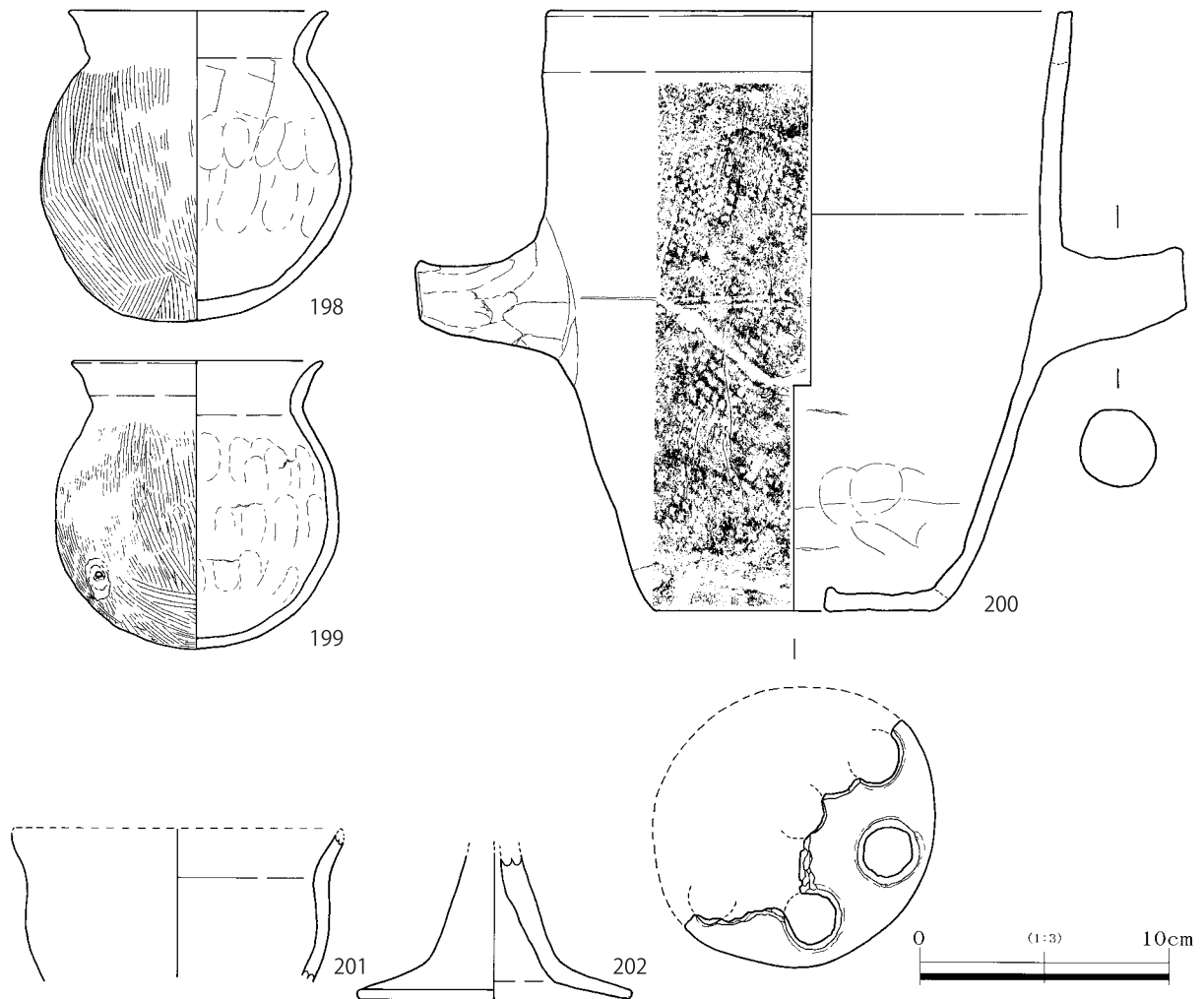


図63 微高地2 遺構 出土遺物2



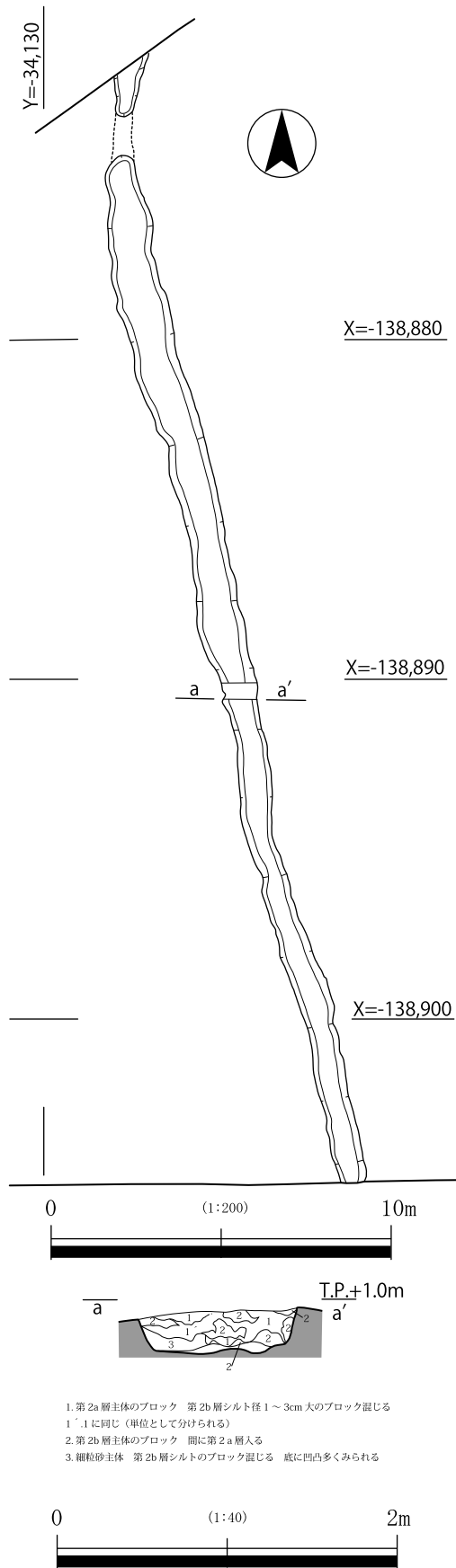


図64 溝9 平・断面図

### 土坑46～53

微高地2では、土坑46～53に遺構番号を付した。いずれも内部より遺物が出土したものである。土坑48～52は微高地2南端付近、建物群の北側にまとまって分布する。遺物は出土するものの、土師器、韓式系土器、弥生土器の細片に限られ、器種のわかるものでは甕、高坏などがあるが、極少数である。それぞれの土坑の具体的な性格はわからないが、分布の面では、微高地上の居住域使用にかかわるものと推測できる。

微低地3ではピット167、溝6～9、井戸5、土坑54～59に遺構番号を付した。以下、特徴的な遺構について報告する。

### 溝7

溝7は微高地2と流路1の間をつなぐように、南北方向を指向するもので、北、南とも端部の様相は分からない。内部より須恵器壺(図68-203)が出土している。203は流路1出土の破片と接合した。

### 溝8

溝8は微高地2南側に位置する溝で、東西方向を指向し、約50m北に位置する溝4と方向を同じくする。溝7に近いところまで、約35mの延長を測る。内部より、土師器高坏(図68-204)が出土している。

### 溝9(図64)

溝9は微高地2の西側に位置する溝で、南北方向を指向する。南北端の様相は不明であるが、検出部分で延長35mを測る。広い部分では幅1.5m程度を測るが、深さは20～25cm程度と浅い。遺物には土師器、韓式系土器の細片があるが、摩滅が著しい。

### 井戸5(図65)

井戸5は微低地3の南東寄りに位置する井戸で、周囲には他の遺構がみられず単独で立地している。しかし、他の土坑や溝との位置関係を考えると、溝8の北側に分布する土坑群の東端に位置するとみることもできる。第1b面の検出時に遺構の輪郭を確認したが、埋土の確認が不十分であり、底まで確認できていない状態で下層の調査に着手したため、全体的な構造の把握はできなかった。調査時には井戸側の存在は確認しなかったことから、素掘

りの井戸と考える。上位の埋土については詳細な観察はなしであったが、下層については比較的小径のシルトブロックを含むものであり、植物遺体も多く含む。掘削時の残土や滞水時の堆積に加え、人為的な埋め戻しが想起される。底より20cm程度離れた位置に、韓式系土器長胴甕の底部（図68-205）が斜位におかれていた。205は残存高194cm、残存部分の胴部最大径20cmを測るもので、外面に上位が細かく、下位にやや粗い2種類の格子タタキを残す。スス、コゲの付着が顕著である。これ以外には土器小片が出土したのみであり、機能時の土器の投棄などはみられない。井戸としての性格を第一義にみるが、土器埋納遺構の性格を強くもつものと考えられる。井戸掘削後、一定期間滞水状態であったことは考えられるが、井戸として長期にわたって使用されたものではなく、韓式系土器を埋納し、埋め戻されたものとする。井戸の埋め戻し時期については205の時期ということになるが、厳密には決しがたい。おおむね5世紀中頃とみておきたいが、ピット153同様、微高地2上における居住域利用の初期ないしは先行する段階に位置づけておきたい。

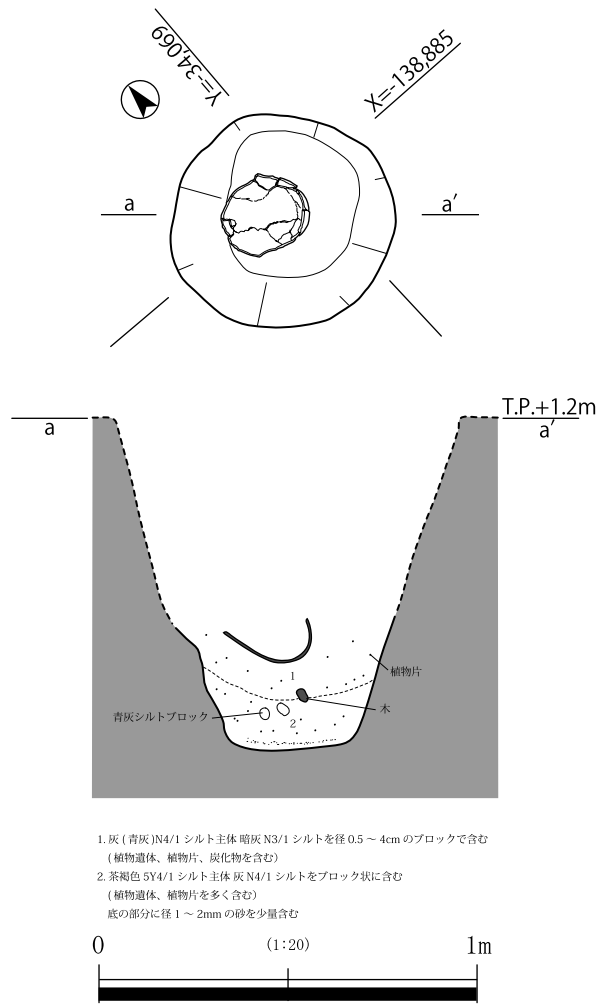


図65 井戸5 平・断面図

土坑54～59は溝8の北寄りを中心に、東西方向に分布する土坑群である。土坑58・59を西端に、土坑57、井戸5を東端とする、東西45m程度の範囲に適当に距離を置いて分布する。それぞれの規模はまちまちであるが、不整形な平面形を呈するものが多く、埋土の観察から掘削直後に埋め戻されたと推測される点で共通する。

#### 土坑54

一連の土坑群の中央付近に位置する土坑である。不整形な長楕円形を呈し、長さ3.8m、幅1.7m、深さ10cm前後を測る。遺物には土師器の小片が出土したのみである。

#### 土坑55 (図66)

一連の土坑群の中央付近に位置する土坑である。不整形な円形を呈し、長軸2.2m、短軸1.7m、深さ35cm程度を測る。壁面、底部とも整った形状とはいいがたい。埋土には第2a層起源のシルトブロックを主体に、第2b層起源のシルトブロック、砂を含む。比較的径の大きいブロックを含み、掘削後、程なく埋め戻されたことが推測される。特徴的な遺物の出土状況はみられず、土師器片6片、須恵器片1片が出土したのみである。土師器は甕の体部、須恵器は波状紋を施す壺口縁部と考えられる。

#### 土坑56

一連の土坑群の中央付近、土坑54の南側に位置する大型の土坑である。長軸7m、短軸3mを測るが、深さは20cm前後と浅い。平面形は不整形な長楕円形を呈する。細片が主体ではあるが、一連の土坑の中

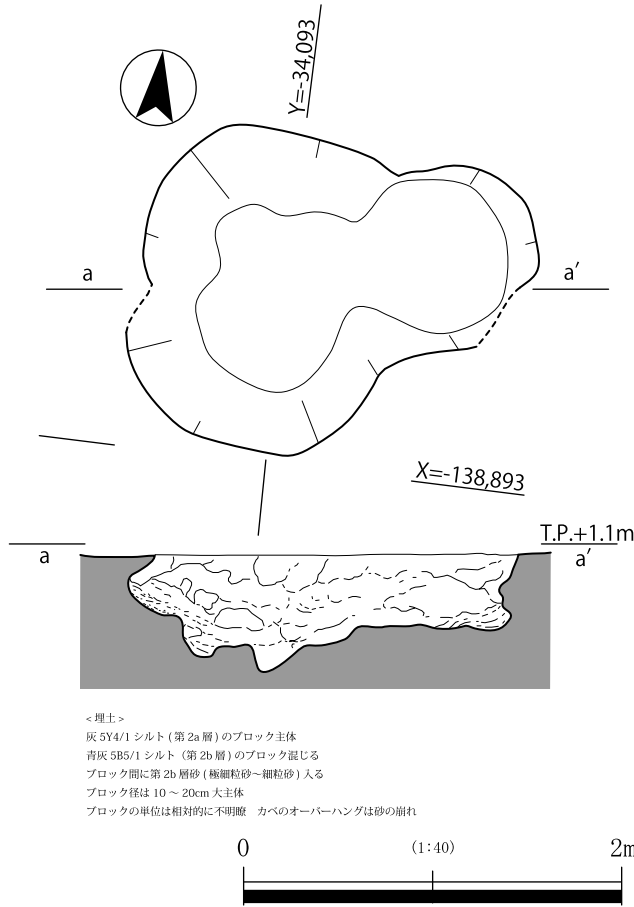
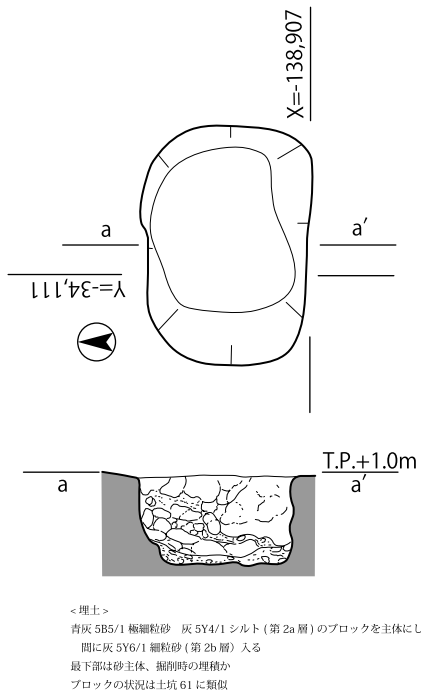


図66 土坑55 平・断面図

<土坑 58>



では比較的まとまった遺物の出土をみた。須恵器が少量で大半は土師器である。図化し得たものを図68-206~213・図69-214に掲出した。206は復元口径19.6cmを測る大型の高坏で、外面に放射状の暗文を施す。207・208は甌であるが、底部蒸気孔付近がわずかに残存する。いずれも円形の蒸気孔を周縁に配するものと考えられる。いずれも非生駒西麓産の胎土と考えられる。209は壺、210は甕、211は鉢あるいは鍋、212は小型の壺、213は高坏脚である。214は敲石あるいは磨石で、欠損する箇所については不明であるが、下面、側面、前面、背面のいずれの面にも敲打痕が残る。石材は砂岩である。遺物からみて詳細な時期決定は難しいが、微高地 2 における居住域使用の段階のものと考えられる。

土坑57

一連の土坑群の東寄り、流路 1 の肩口付近に位置する土坑である。井戸 5 のほぼ南、8 m 付近に位置する関係となる。流路 1 との切り合いは明確ではなかったが、流路 1 が土坑57を切っ

<土坑 59>

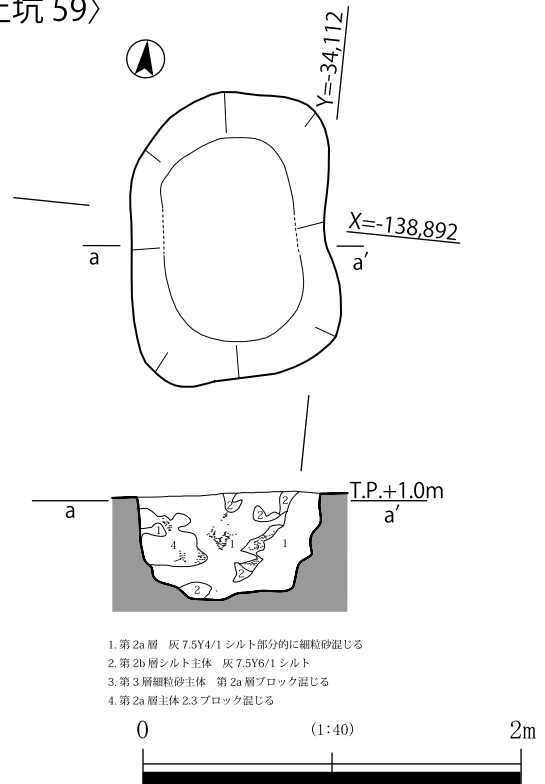


図67 土坑58・59 平・断面図

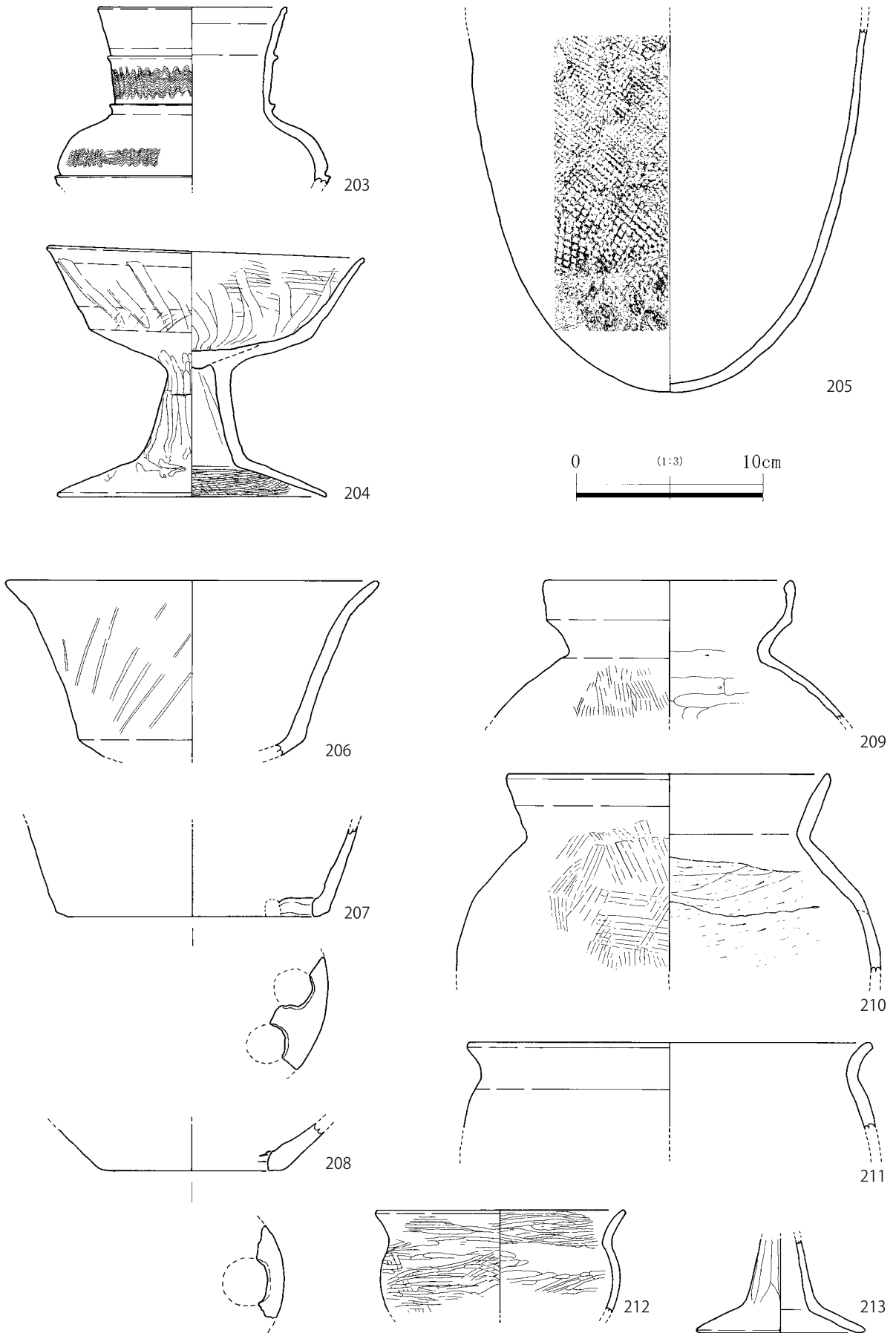


图68 微低地 3 遺構 出土遺物 1

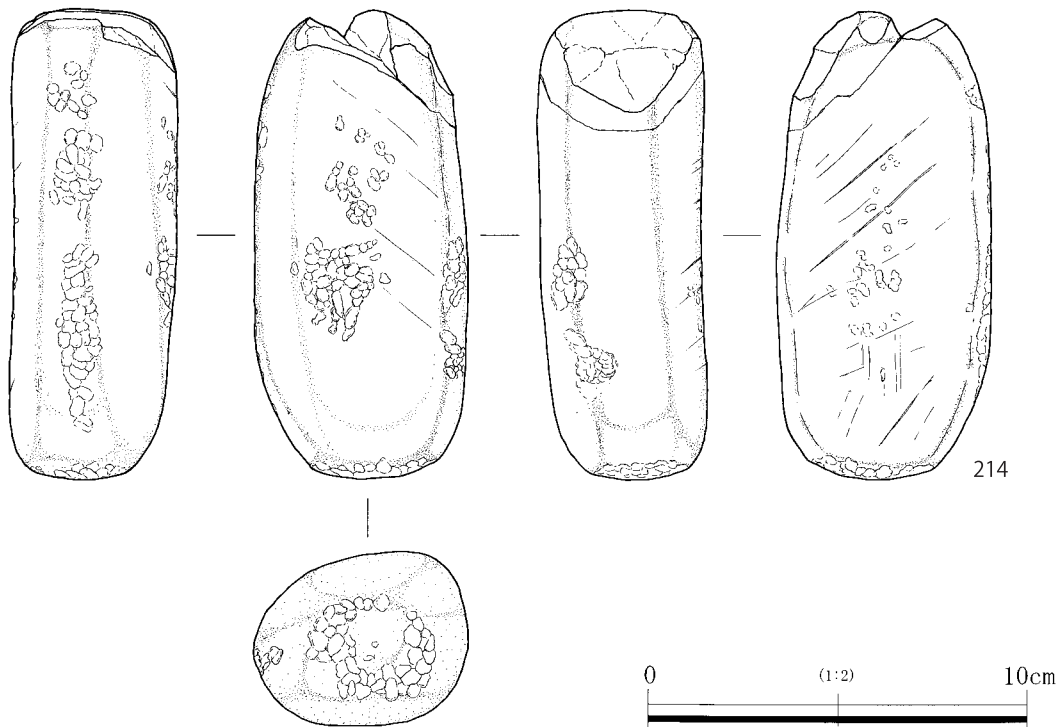


図69 微低地3 遺構 出土遺物2

ているようである。長さ2.2m、幅1.3mの不整楕円形を呈し、深さは18cmと浅い。遺物は極少量が出土したが、土師器甕片、韓式系土器片が出土している。

#### 土坑58 (図67)

一連の土坑群の西端、溝8よりもやや南側に位置する土坑である。長さ1.25m、幅0.9mの隅丸長方形を呈し、深さ45cmを測る。断面形状は比較的整った形状を示す。埋土は第2b層起源のシルトブロックと第2a層起源のシルトブロックが混じり、その間に砂が入るというもので、第2a層の土壌が形成されて後に掘削され、時間をおかずに埋め戻されたものと推測する。遺物には土師器小片が3点あり、甕の一部と考えられる。

#### 土坑59 (図67)

一連の土坑群の西端、土坑58の北約13m付近に位置する土坑である。隅丸長方形の平面形を呈し、規模は長さ1.6m、幅1.1m、深さ55cmを測り、比較的整った断面形状を示す。埋土は第2a層起源のシルトブロックを主体に、第2b層系のシルトブロック、第3層起源と考えられる砂が塊状に混じる。遺物はまったく出土せず、遺物からの時期推定はできない。

これら土坑群は分布のまとまりや埋土の共通性から、同様の性格をもつものと類推するが、掘削の目的については良くわからない。掘削直後の埋め戻しが想定される点が、推測の大きな材料となるが、発生土をそのまま埋め戻していると考えられることから、下層土壌の採取という目的は否定される。あるいは地表下における土層の確認という目的も想起されるが、定かではない。類似する土坑は流路1の南側にも分布することから、微高地2上の居住域にかかわる遺構と見立てたとしても、その近接地にのみ分布するものでもない。同様の分布を示す井戸5については土器埋納行為がみられた点は先述のとおりである。時期についても詳細を知ることはできないが、おおむね古墳時代中～後期に帰属すると考えられ、その時間幅の中でも初期に位置するか、先行する可能性を指摘しておきたい。



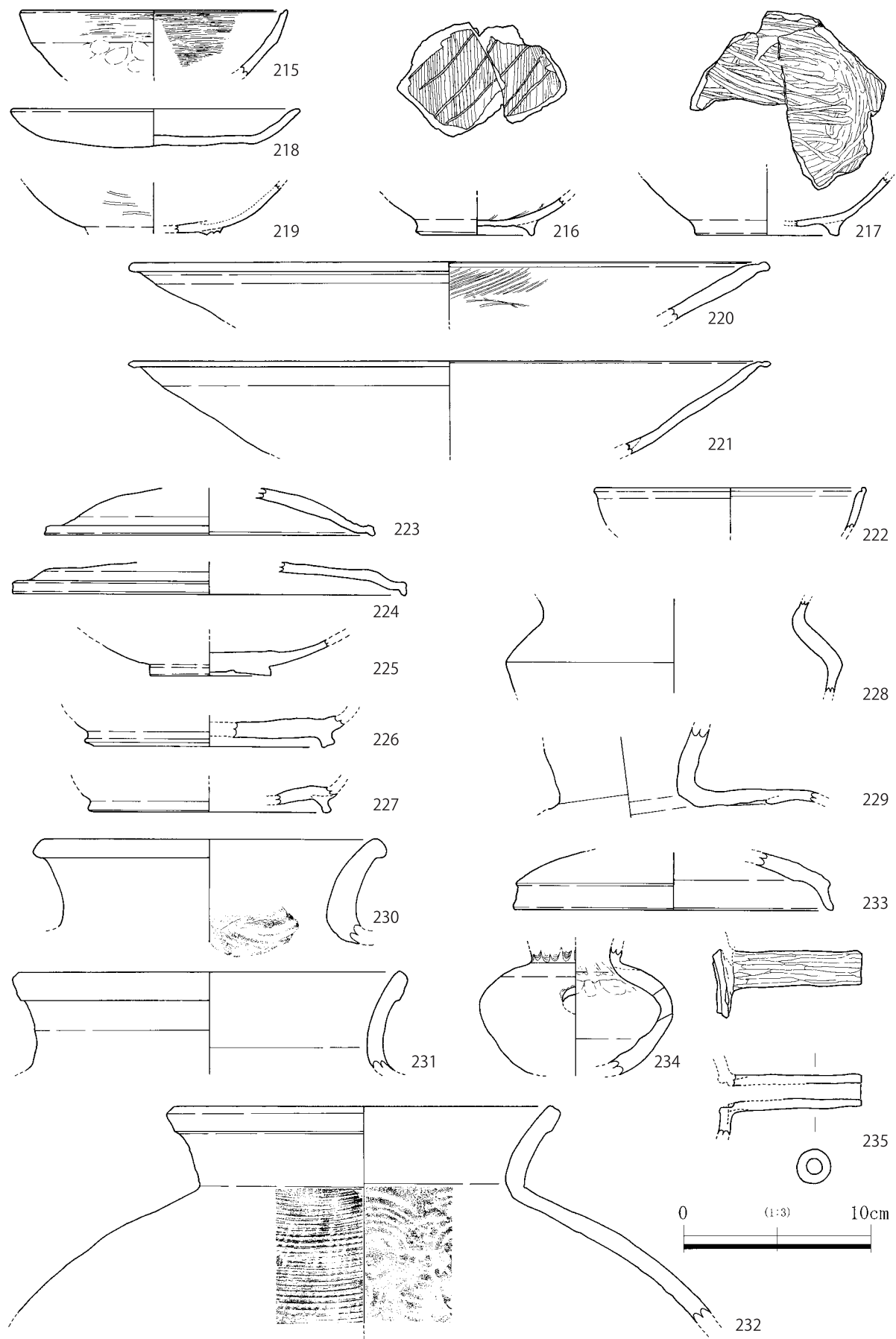


图70 微高地2·微低地3 層 出土遺物1

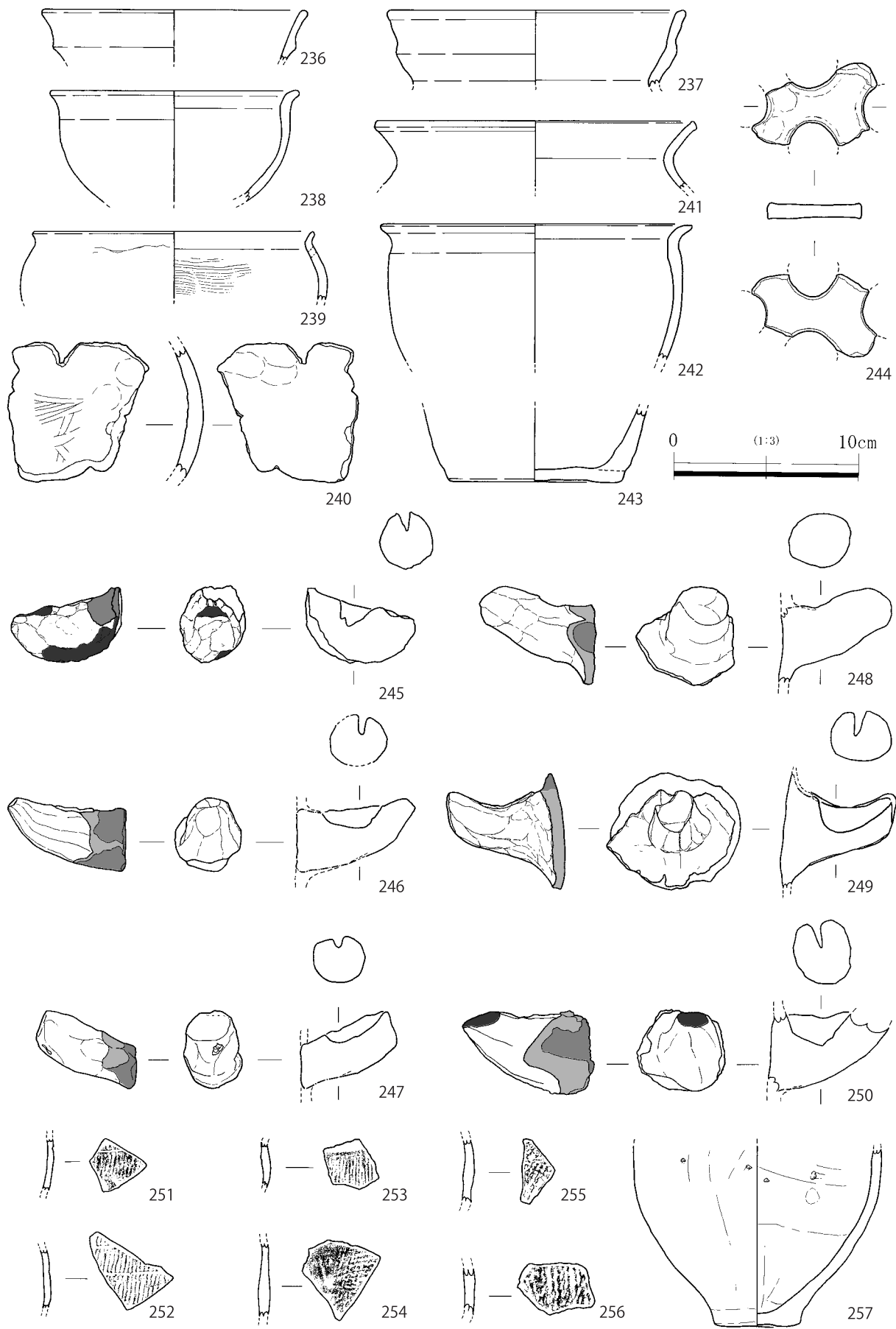


图71 微高地2·微低地3層出土遺物2

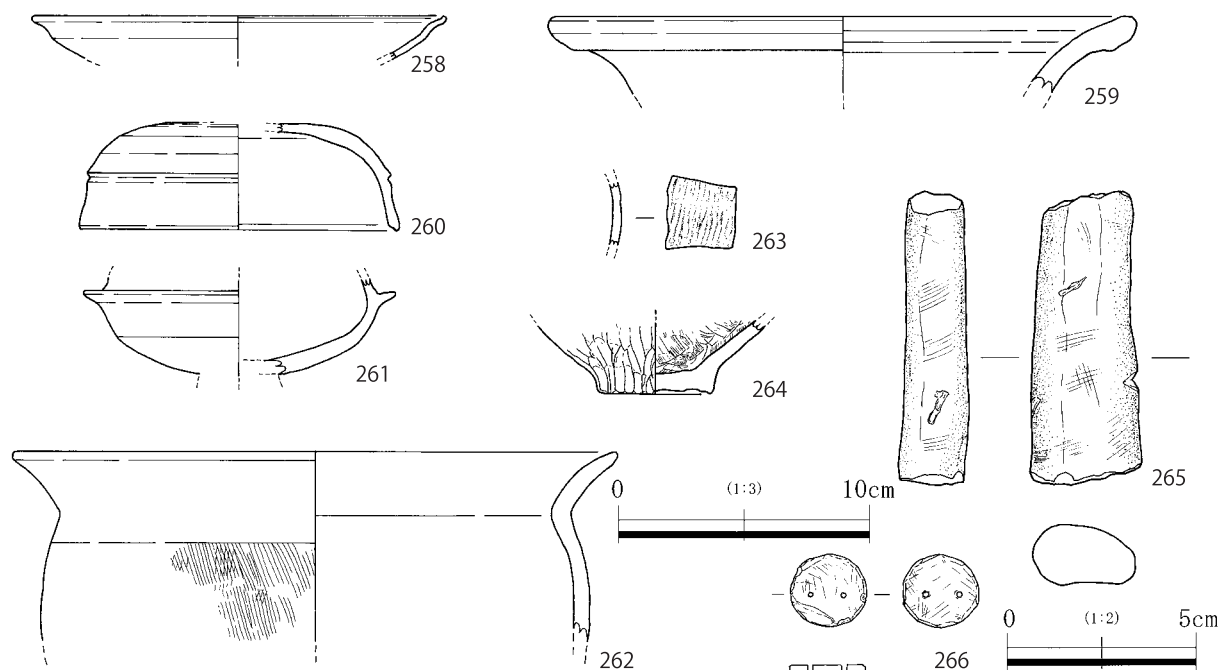


図72 微高地2・微低地3層出土遺物3

微高地2・微低地3層出土遺物（図70～74）

微高地2・微低地3に相当する範囲の第1層～第2a層出土遺物について報告する。微高地2はおおむね03-5-8トレンチ・06-2-4トレンチの調査範囲に相当するが、両トレンチとも、第1層の細分を行わずに掘削したため、ほぼ第1-3層～第1-5層に相当する層準から出土した遺物を、第1層出土遺物として認識している。また遺構検出面である第1b面は第2a層を除去することで検出した。一方、微低地3に相当する03-5-9トレンチでは、第1層としては第1-5層のみを人力掘削の対象とした。このような作業過程に従い、図70・71には03-5-8トレンチ・06-2-4トレンチ第1層出土遺物を、図72には03-5-9トレンチ第1-5層出土遺物を、図73・74にはそれぞれの第2a層出土遺物を原則的に配置した。

微高地2では明確に時期をおさえることのできる古代の遺構は確認できていないが、第1層からは古代以降、中世にかけての遺物も出土する。215・216は瓦器碗、217は黒色土器碗の高台付近である。内外面とも黒色処理を施したものである。218は土師器皿、219は土師器碗で、わずかに高台の痕跡を残す。220・221は土師器の盤で、いずれも復元口径30cmを超えるものである。222は土師器坏で、残存状態は極めて悪く、内外面の調整も観察できない。223・224は須恵器の蓋で、口縁端部を下に折り曲げる。225は緑釉陶器の底部で、削出し高台をもつ。227は須恵器の高台である。228は須恵器壺Hの、229は平瓶の頸部である。230～232は須恵器甕の口縁部から体部であるが、極めて部分的な残存である。233は須恵器高坏の蓋と考えられるが、初期須恵器段階に位置づけられる。234は須恵器罍で、口縁部の波状紋がわずかに確認できる。235は須恵器樽形罍の注口かと思われるもので、やはり初期須恵器段階のものであろう。表面は細かいヘラミガキで平滑に仕上げられている。236・237は土師器甕で古墳時代前期のものか。238は鉢、239は短頸の壺で、240は製塩土器かと考えられる個体である。241は遺存状況が極めて悪いが、韓式系土器の長胴甕頸部、242・243は平底鉢である。245は甑の底部で、円形の蒸気孔が配される。245～250はいずれも把手であり、248を除くといずれも上面に切込みがみられ、韓式系土器の範疇に含まれる。251～255は須恵器あるいは陶質土器の表面にタタキ痕跡を残すもので、251～253は平行タタキ、254は縄蓆紋タタキ、255には格子タタキが残され、251・252には螺旋状沈線も認められる。256は韓式系土

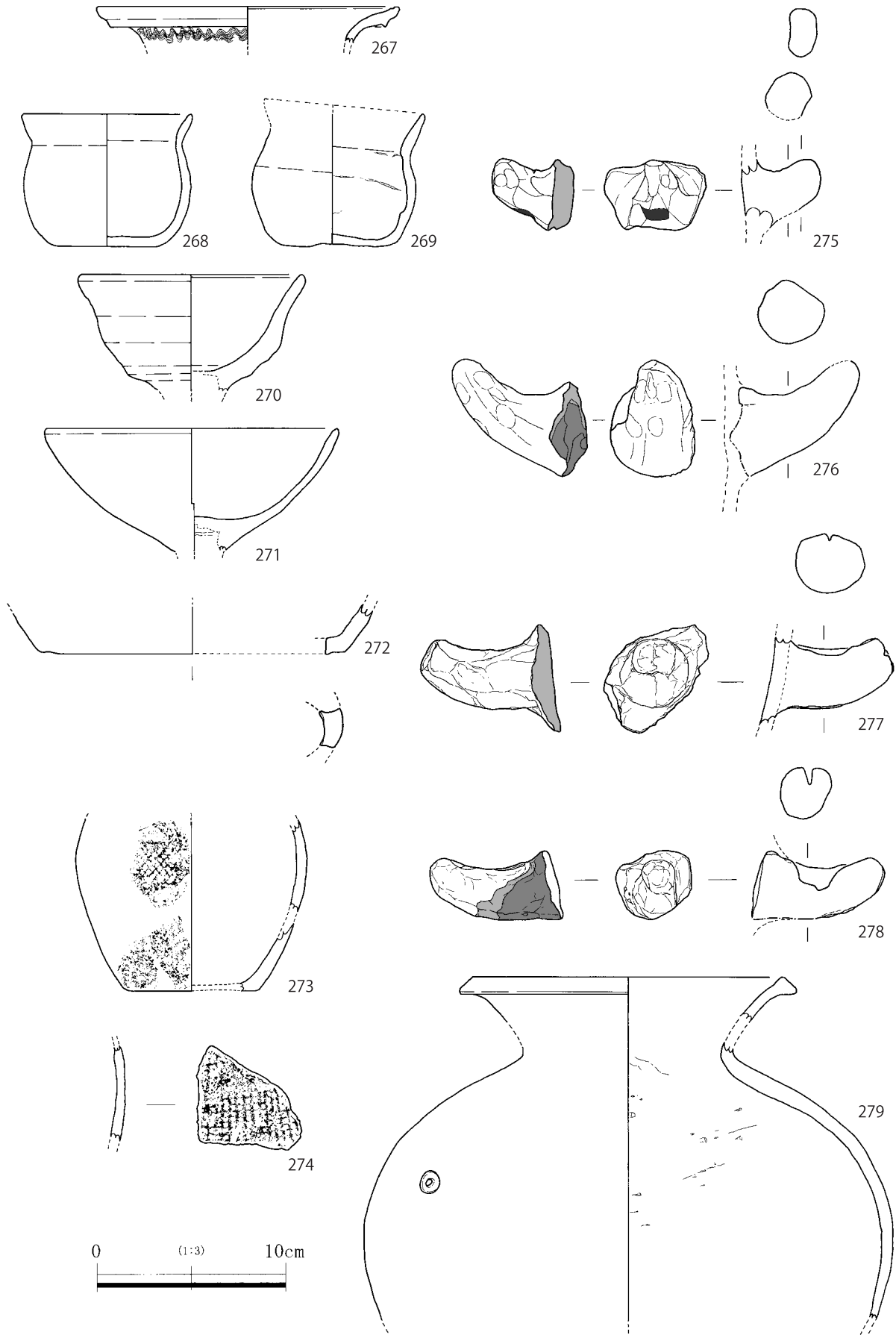


图73 微高地2·微低地3 層 出土遺物4

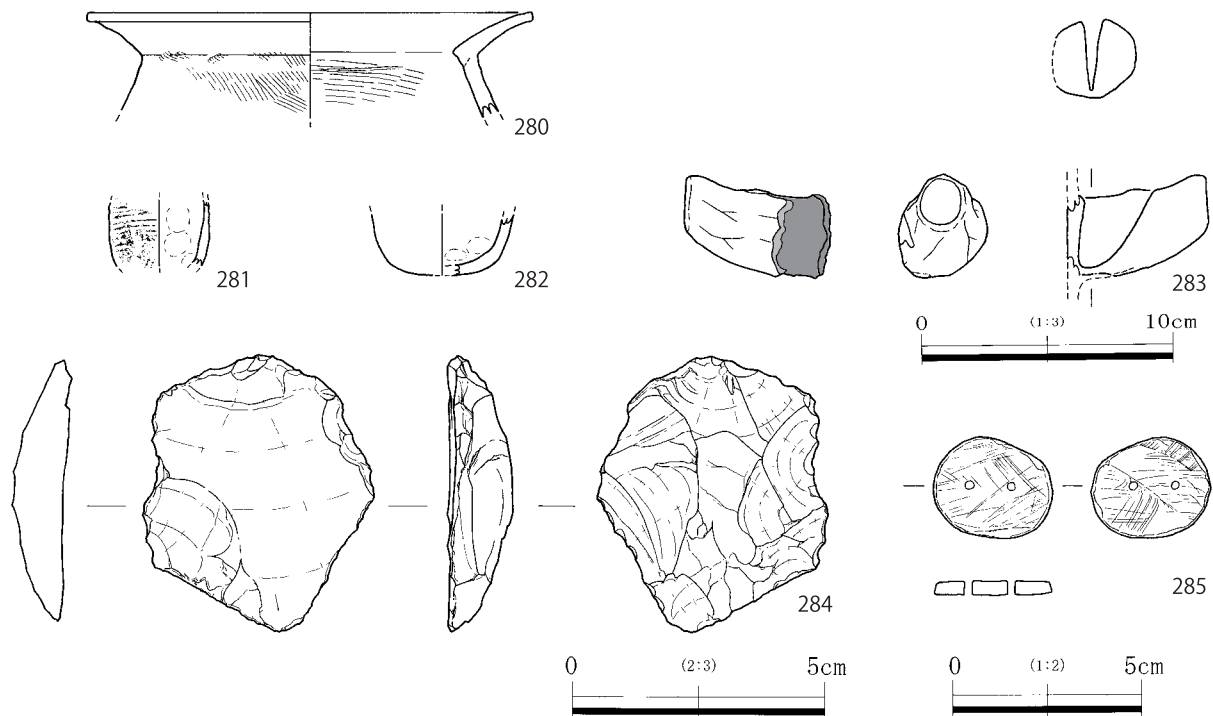


図74 微高地2・微低地3層出土遺物5

器の細片で、外面に縄縞紋を残す。257は弥生土器の体部から底部にかけての個体である。

03-5-9トレンチ第1-5層出土遺物は少なく、図示し得たものもわずかである。図72-258は土師器皿、259は須恵器壺口縁、260は須恵器蓋、261は有蓋高坏と考えられる。形態的に流路1-1域出土の図105-418に類似している。262は土師器甕、263は須恵器の外面に平行タタキと沈線が認められるもので、261とともに初期須恵器の範疇に含まれよう。264は弥生土器の壺底部と考えられる。265は微低地3にかかる03-5-2トレンチの第2a層出土のもので、砂岩製の石杵残欠かと考えられる。266は03-5-8トレンチ第1層出土の滑石製双孔円板で、比較的整った形状を示す。法量は長さ2.0cm、幅1.9cm、厚さ0.25cmを測り、重量は1.8gである。

図73には第2a層出土遺物を掲出する。267は須恵器壺で口縁直下に突帯を巡らし、頸部には波状紋を巡らす。268・269は土師器の小型の壺で、平底を呈する特異な形態をもつ。つくりは総じて粗い。270・271は土師器高坏で、271は接合部の坏部底面に刺突痕が施される。272は土師器甕の底部である。極一部の残存であるが、円形の蒸気孔が認められる。273は韓式系土器平底鉢で、体部外面には格子タタキを残す。274も韓式系土器片で、やはり外面に格子タタキを残す。275~278は把手で、278は上面からの切り込みがあり、韓式系土器の範疇に属する。279は弥生土器ないしは土師器の壺で、残存状況は悪いが、外面に竹管紋が認められ、内面にはヘラケズリないしは板ナデによる砂礫の移動が認められる。

図74-280は土師器甕、281・282はコップ形の製塩土器、283は韓式系土器把手である。いずれも第3層掘削時に採取された遺物であるが、本来は微高地2・微低地3に帰属する資料と目される。280は頸部内面に比較的鋭い稜をつくりだすもので、口縁端部に面をもたせる。281は外面にタタキ痕跡を残すが、282はナデ調整である。283は先端を垂直に裁断し、上面から深い切込みが施される。284・285は微低地3にかかる03-5-2トレンチの第1層出土のもので、284はサヌカイトの剥片である。長さ5.5cm、幅4.6cm、厚さ1.3cmを測る比較的大型の剥片であり、重量は27.6gである。285は滑石製双孔円板で、266と比べるとやや大振りの個体である。



第0-5面の遺構と遺物 (図75・76)

第1面の遺構面が相対的に低いところでは第1-5層と第2a層はそれぞれ層厚をもち、第0-5面、第1面に帰属する遺構の分別も可能と考えられるが、実際には第0-5面に帰属すると考えられる遺構のほとんどは、微高地1、微高地2の範囲で検出され、遺構の多くが地形とのかかわりで営まれたものであることが想起されるとともに、第1面帰属遺構との分別は難しいものとなってしまった。とりわけ遺物には第0-5面の遺構出土のものにおいても、第1面との関連を想起させるものが多く、ここでは微高地1・2上で検出した第0-5面に帰属すると考えられる遺構と遺物を報告する。

溝群1

微高地1の北半分、03-5-6～03-5-7トレンチにかけて分布する溝群である。北西側は微高地ともども調査範囲外へ延びるので、全容は把握できない。微高地の幅が約30mの箇所、溝群の分布幅は約25mと、微高地の縁辺を除き、まんべんなく覆っている。原則的に微高地の軸方向に延びる縦溝と、微高地を横断する方向の横溝とが交差する形で構成される。個別の溝の輪郭は不明瞭な部分が多く、縦横の溝が交差する箇所においても切り合い関係を明確に捉えることはできない。同様に横溝同士が斜めに交わる箇所もみられるが、それらが溝の分岐であるのか、切り合い関係をもつのかは判らない。また後述する溝群3において、溝4が単独で抽出されたように、本来溝群1とは異なる性格のものが錯綜している可能性も否定できない。それぞれの間隔を比較では、縦溝間の方が横溝間より間隔が広い。個々の溝は幅20～30cm、深さ5～10cm程度の小規模なものである。埋土は灰色シルトが主体であり、ベースとなる第2b層シルト層との境界が不明瞭であった。出土遺物には細片が多いが、図化し得たものを図75・図77に示した。286～288は須恵器坏身で、6世紀末～7世紀のものか。289は須恵器高坏脚で、長脚2段のもの

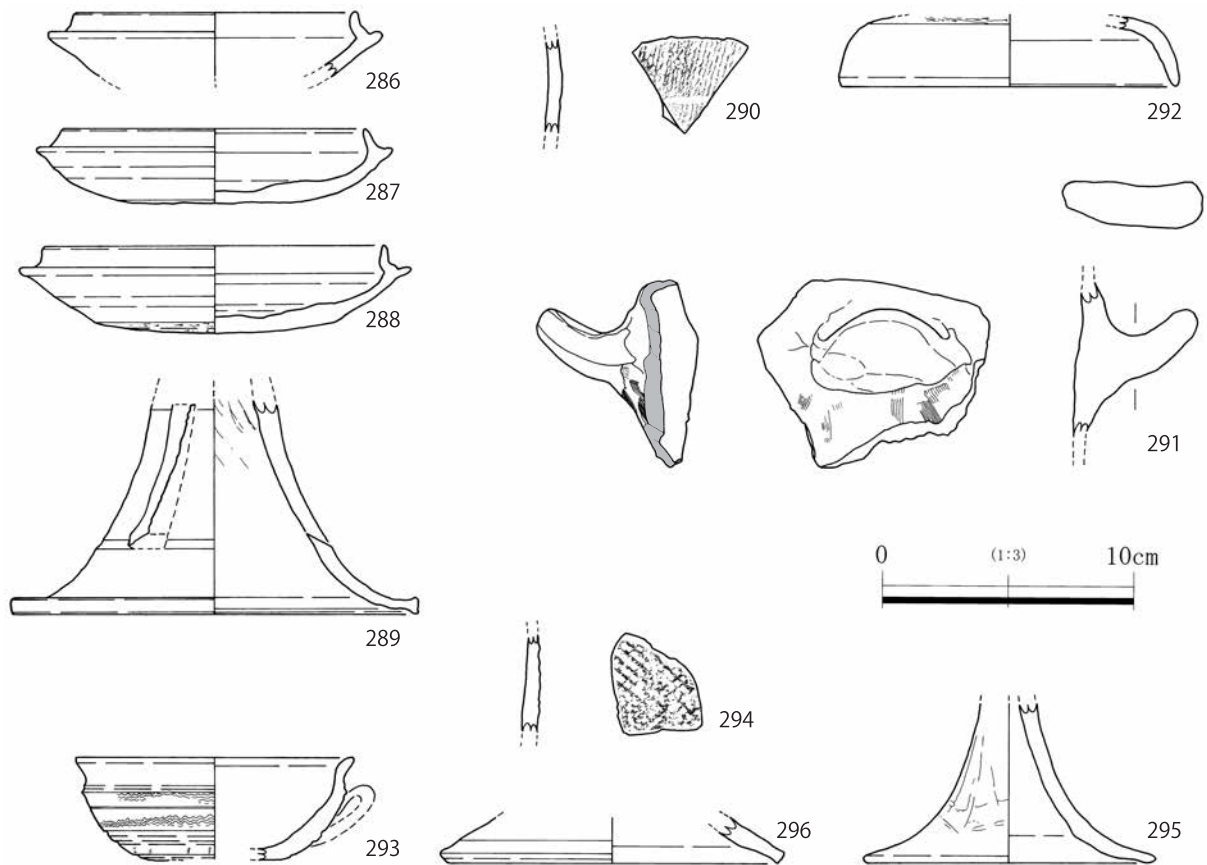


図75 第0-5面 遺構 出土遺物 1

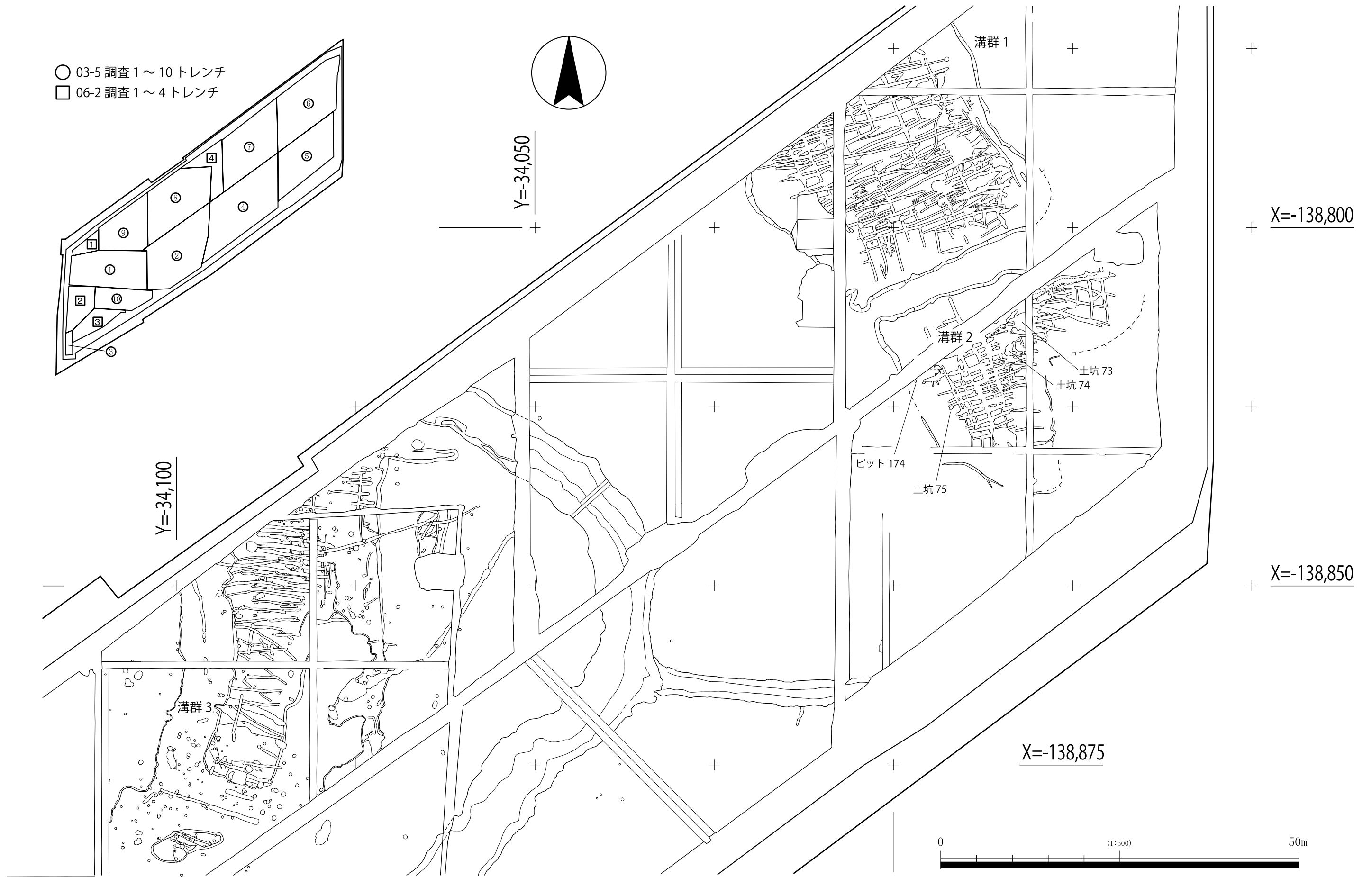


図76 第0-5面・第1面 溝群分布図 (s=1/500)



図77 第0-5面 遺構 出土遺物 2

考えられる。290は須恵器あるいは陶質土器の破片で、外面に縄蓆紋タタキの上に沈線を巡らす。291は土師器の把手で、扁平な部類に属する。図77-297はサヌカイトの剥片で、重量は27.1gを測る。

### 溝群 2

微高地 1 の南側、03-5-5～03-5-6トレンチにかけて分布する溝群である。おおむね調査範囲内に全体が収まっている。微高地が東側に張出す部分にも溝群は延びており、縁辺部を除く全域をまんべんなく覆っている。溝群 1 同様、原則的に微高地の軸方向に延びる縦溝と、微高地を横断する方向の横溝とが交差する形で構成される。西側の範囲では比較的縦横の関係が良好に把握できるが、東側の張り出し部では縦横の方向、交差の角度などもやや整然さを欠く。個別の溝の輪郭が不明瞭であることや、交差部分において切り合いが不明瞭であることも、溝群 1 に同様である。溝の間隔は縦溝のほうが横溝より相対的に広い点も同様であるが、個々の溝のスパンが狭いことと、溝そのものに幅の広い部分が多いことで、溝群 1 より溝の占める面積が広い状況をみせる。言い換えると溝に囲まれた範囲の狭さが目立つ。個々の溝は幅20～30cm、深さ 5～10cm程度の小規模なものである。埋土は灰色シルトが主体であり、ベースとなる第2b層シルト層との境界が不明瞭である点も溝群 1 と同じである。出土遺物には細片が多く、図示し得たものは図75-292に示した須恵器坏蓋のみである。溝群 1 出土の須恵器と同時期のものと考えられる。

### 溝群 3

微高地 2 上、03-5-8トレンチ、06-2-4トレンチにかけて分布する溝群である。北側は調査範囲外へ延びるため全容は不明である。溝群 1・2 同様、微高地上をまんべんなく覆うが、落ち込み 1 の範囲では埋土の識別が難しく確認できなかった。また、微高地縁辺にまで溝が達している箇所が多いが、特に南よりの部分では微高地縁辺部分における第1-5層の削平により失われている部分も多いものと思われる。06-2-4トレンチの範囲では縦溝と横溝の交差が確認できたが、03-5-8トレンチ部分では横溝が顕著であり、縦溝が希薄である。横溝の間隔は粗密があり、北寄りでは狭く、南寄りでは広い。

このような溝群 1・2 との差異を溝群掘削の施工段階の差に起因すると考えると、溝群は数度にわたる掘削により形成されたもので、溝群 3 においては溝群 1・2 ほどの施工がなされなかったとみることができる。さらに微高地 1 に比べ、微高地 3 において第1-5層による削平が顕著に認められる点も、両者とも微高地上の地形改変過程を示すものと考えれば興味深く、溝群の掘削による改変が進んだ微高地 1 と、溝群の掘削を途中で終わり、第1-5層による削平が広く行われた微高地 2 との差異とみることができ。その差が微地形環境に起因することも、微高地 2 がより低湿な環境であることから指摘し得る。

### 土坑73～75・ピット174

いずれも第0-5面調査時に確認した遺構の中で、遺物の出土がみられたものに遺構番号を付したもので

ある。調査時は第0-5面検出時に確認した遺構であるが、後に第0-5面、第1b面両面の遺構が錯綜する形で同一面において確認されるとの認識が進むにつれ、帰属面の厳密性は低下した。原則的に埋土の特徴から帰属面を判断したわけであるが、第1b面に属するものである可能性は否定できない。土坑73・74は微高地1南寄りに位置する大型の土坑、土坑75は小型の土坑であるが、いずれも浅く、特徴的な遺物の出土状況を示すものではない。ピット174は微高地1西縁付近に位置する小ピットである。これら遺構からの出土遺物のうち、図化し得たものは図75-293~295(土坑74)、296(土坑75)で、293は須恵器把手付鉢、294は外面に格子タタキの残る韓式系土器、295は土師器高坏、296は須恵器高坏の脚である。

溝群の性格については上述のとおり、第1面廃絶後の土地改変に伴うものと考えられるが、微高地1については少なくとも奈良時代まで居住域として利用されており、古代以降の土地に対する働きかけと考えられる。この点で各遺構出土遺物の年代観との齟齬が生じるわけであるが、第0-5面遺構出土遺物については、すでにその地に存在した遺物を巻き込んだものと理解しておきたい。

## 第5項 微高地3・微高地4

### 概要(図78)

調査範囲中央を流走する流路1の南岸に位置する微高地を微高地3、南寄りに流れを変える流路1の西側に位置する微高地を微高地4とする。両微高地とも今回の調査範囲にかかる部分は極めて限られたものであるが、やはり他の微高地同様、弥生時代の堆積層をベースとする微高地である。微高地3は北東から南西への細長い範囲を検出したが、北東部分で標高T.P.+1.3m、南西部分で標高T.P.+1.0mを測り、微高地1、微高地2と比較して必ずしも標高が高いわけではないが、母材の影響か、比較的安定した微高地である。微高地4は南北に伸びる範囲を検出したが、南端で標高T.P.+0.95m、北端で標高T.P.+0.9mを測り、南に高く、北に低い地形である。

微高地3ではほとんどの範囲に第2a層が遺存しており、これを除去することで第1b面を検出した。したがって現代の攪乱を除くと上層からの遺構との錯綜は無く、おおむね面への帰属が理解しやすい検出状況であった。検出範囲が限られているため、全体的な遺構分布については不明であるが、微高地の縁辺部分を地形に即して巡る複数の溝(溝12~18)、検出範囲北東部で、溝群よりさらに流路に近い位置、ないしは流路に重複する位置にある土坑(土坑60~63)、検出範囲南西部で、流路の肩付近に比較的まとまって分布する土坑群(土坑64~72)など、といった遺構の分布状況を認めることができる。相対的にいずれの遺構からも遺物の出土はまとまってみられたが、建物や井戸といった居住に直接かかわる遺構は認められない。北東部に位置する土坑60~63は、微高地3において検出されたものと同様の土坑であり、掘削直後に埋め戻された痕跡を残す。微高地3検出の土坑と比べて、整った形状をみせる。溝12~18については部分的な切り合いもみられ、数度にわたり掘削されたもので、微高地縁辺を画する位置にあることは事実であろうが、調査範囲南側の土地利用が定かではないので、性格についてもあいまいである。比較的まとまって土器の出土がみられた遺構であり、また、次項で述べる流路1-4域への遺物の投棄を行なった主体として、調査範囲南東側の微高地上に居住域などの存在が想定される。土坑64~72については、径1m未満の土坑がまとまって分布するもので、それぞれに土器の出土が顕著な点が特徴的である。意識的な埋納が主体を占めると思われる。また土坑70は大型の土坑であるが、炭化物の集中と製塩土器のまとまった出土が特筆される。土坑71からは完形の須恵器、土師器がまとまって出土した。

微高地4では北寄りの部分に溝(溝21~23)が、南寄りの部分には浅い落ち込み(落ち込み2)が分

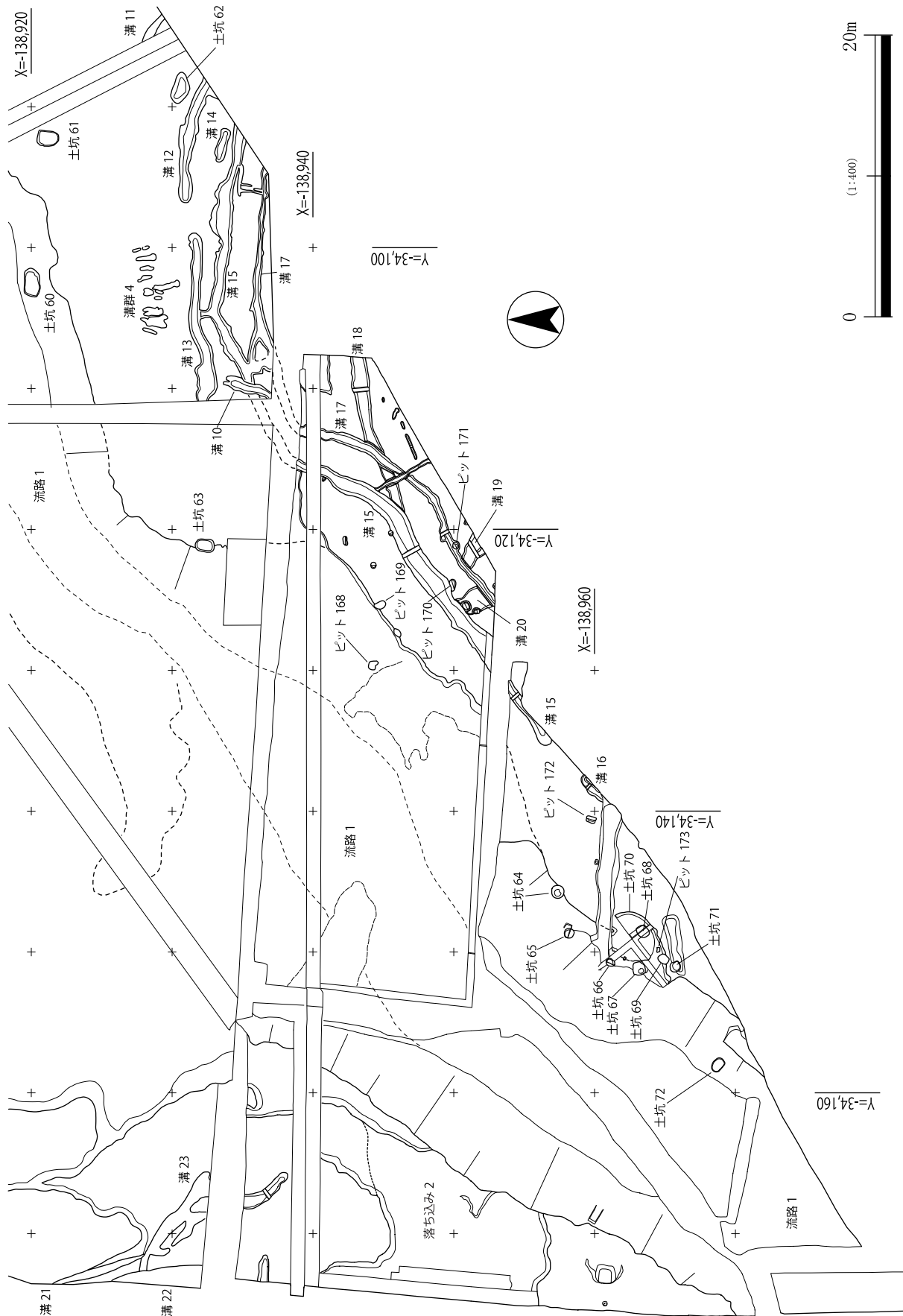


図78 第1面 微高地3・微高地4 遺構分布図 (s=1/400)



布する。目立った遺物の出土も無く、いずれも性格を考える材料に欠ける。なお、落ち込み2の埋土を中心に地震による変形構造が顕著に認められた。遺構の埋土に対して変形作用が強く働いたものか、変形によって遺構状を呈するようになったものかは判断できなかった。

以下、微高地3・4にかかわる遺構・遺物を個別に報告する。

### 土坑60 (図79)

土坑60は微高地3の調査範囲北東部、流路1と重複する形で位置する。西側に約10m離れて土坑61が、南西側に約22m離れて土坑63が位置する。平面形状は長さ1.85m、幅1.05mの隅丸長方形を呈し、東西方向に長軸を置く。深さは50cmを測り、断面形状は比較的整ったU字形を呈するが、西寄りの底部が一段深くなる形状をもつ。埋土は第2a層～流路埋土、第2b層を起源とするシルトブロック間に砂の混じるもので、ブロック土の角が良く残っていることから、掘削後、時間を置かずに埋め戻されたものと考えられる。内部から土師器、須恵器が出土したが、出土状況に特記する点は無い。割合としては土師器が須恵器よりやや多い。図化し得たものを図85-298に示した。小型の土師器壺で、口縁、体部の一部を欠く。

### 土坑61 (図79)

土坑61は微高地3の調査範囲北東部縁辺、土坑60の西に位置する土坑である。平面形状は長さ1.5m、幅1.1mの隅丸長方形を呈し、南北方向に長軸を置く。短軸方向の断面形状は比較的整ったU字形を呈し、深さは60cmを測る。埋土は第2a層～流路埋土、第2b層を起源とするシルトブロック間に砂の混じるもので、ブロック土の角が良く残っていることから、掘削後、時間を置かずに埋め戻されたものと考えられ

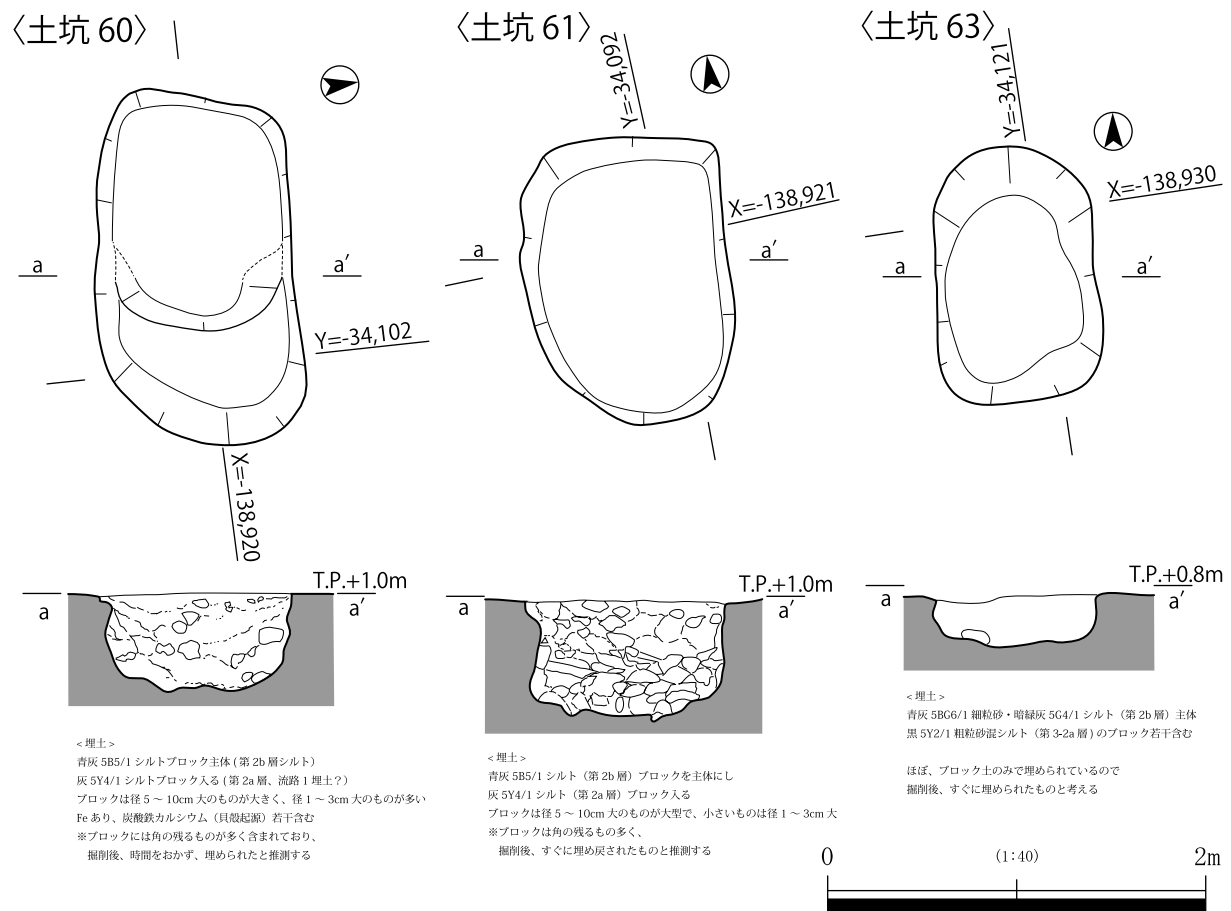


図79 土坑60・61・63 平・断面図

る。内部から土師器、須恵器の細片が少量出土したが、図示し得るものは無い。

#### 土坑62

微高地3における調査範囲の東寄りに位置し、溝群に近い位置にある。長さ2.2m、幅1.2mの不整な長楕円形の平面形をもち、深さは10cmと浅い。遺物には土師器の小片が1点出土したのみである。形状から土坑としたが、溝群と一連の遺構である可能性が高い。

#### 土坑63 (図79)

土坑63は微高地3の調査範囲北東部縁辺、土坑60の西に位置する土坑であり、流路1の肩部に位置する。流路1との関係は、流路1の肩部が一定埋没した後に、土坑の掘削が行われたようである。平面形状は長さ1.35m、幅0.85mの隅丸長方形を呈し、南北方向に長軸を置く。断面形状は比較的整ったU字形を呈するが、底にやや凹凸が見られる。深さは25cmを測る。埋土は第2b層、第3-2a層を起源とするシルトブロック間に砂の混じるもので、土坑61・62同様、掘削後、時間を置かずに埋め戻されたものと考えられる。遺物は土師器細片が1点出土したのみである。

#### 土坑64 (図80)

土坑64は微高地3調査範囲の南寄りに群集する土坑群の1基であり、群の中では北端に位置する。流路1の肩部より内側に位置するが、流路埋没との先後関係については不明である。直径がほぼ0.9mの円形の平面形をもち、深さは50cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、底は比較的平坦である。埋土はほぼ水平に分層ができるもので、最下部には掘削時に堆積した可能性のある砂があり、これより上位は砂粒を多く含むシルト層で満たされる。明確なブロック土はみられないが、人為的な埋め戻しによるものと考えられる。遺物は比較的多く出土しているが、輝石安山岩製の砥石(図93-376)が北東側の壁に接して出土した点が注目される。それ以外の土器類については埋め戻しの際に投棄されたものと考えられる。土師器、須恵器の破片が主体で、完形に復元できるものはない。図化し得たものを図85-299~305に掲出した。299は須恵器坏蓋で、口縁部を欠く。内部の土壌を洗浄したところ、植物の微細遺体が認められたが、詳細は不明である。300は須恵器坏蓋、301・302は須恵器坏身である。303・304は須恵器壺の口縁部であり、305は土師器甕である。なお299・300には天井部外面にヘラ記号が認められる。土器類以外では桃核1点が出土している。遺構の時期は須恵器の形態からMT15型式段階のものかと推測する。

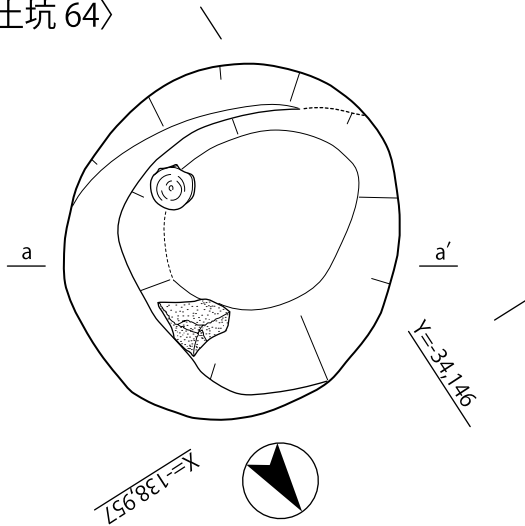
#### 土坑65 (図80)

土坑65は土坑64の西に約3mの距離をおいて位置する土坑で、同様に流路1の肩部分にかかる位置にある。流路肩付近の流路内堆積物を除去後、土坑の輪郭を検出したことから、流路の最終埋没以前に掘削、埋没した土坑かと考えられ、土坑埋土の削平の様子も、土坑の埋没後に流路肩が形成された様相を示唆する。平面形状は径0.7~0.8mの円形を呈し、深さは40cmを測る。断面形状は逆台形であり、壁ならびに底面は整っている。埋土は基本的に水平方向の分層が可能な様相をみせ、最下位にはしまりの悪いシルト~極細粒砂の堆積があり、その上位に植物遺体層の堆積がみられる。これ以上は植物遺体や炭化物を含む砂で埋没しており、人為的な埋め戻しと考えられる。遺物の出土状況は特徴的なもので、最下位の砂層とその直上の植物遺体の堆積後、土坑の中央付近に完形の須恵器高坏蓋(図85-307)と、口縁の一部のみを欠く土師器小型壺(図85-308)を意図的に配置したようである。これらの土器以外には須恵器高坏蓋片(図85-306)、須恵器片、土師器片が少量みられた。また製塩土器の細片が一定量出土し、重量93gを測る。土器以外の出土遺物としては桃核4点以上、ヒョウタンの仲間の果皮片などが出土した。高坏蓋307はTK47型式段階と考えられ、土坑65は該期の埋め戻しが想定される。

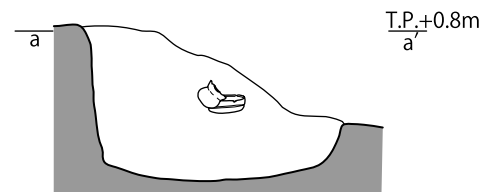
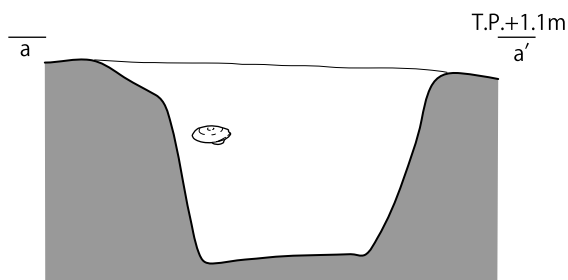
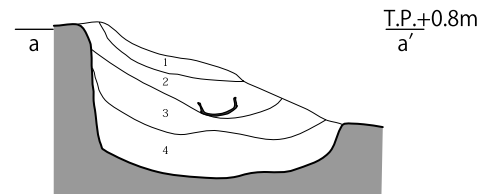
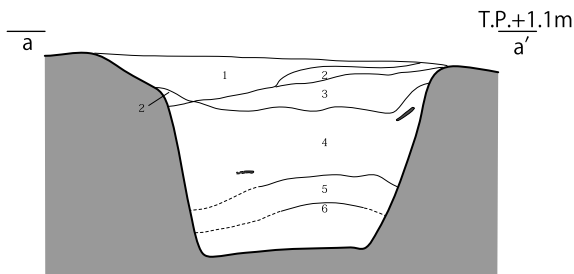
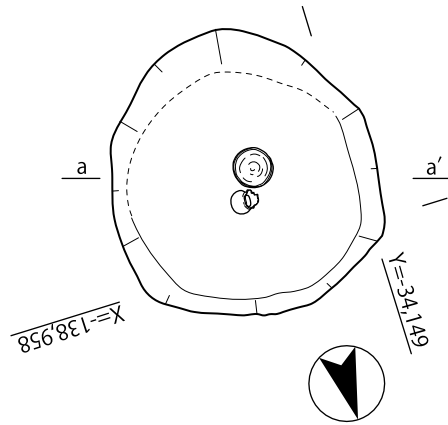
土坑66 (図81・82)

土坑66～68は土坑70の埋没後に埋土上面から掘削された土坑である。土坑66はその北寄り、流路の肩付近くに位置する。平面形は径0.6mの円形を呈し、深さは40cmを測る。埋土は水平の堆積をみせ、シルト、あるいは砂混じりシルトで埋没する。人為的な埋め戻しがなされたとは想定するが不明瞭である。土器の出土は土師器、製塩土器の細片のみであるが、図93-383に示した石器が埋土最上層から出土した。383は砂岩製の敲石で、四辺の敲打痕とともに、前面、背面のくぼみも顕著であり、多様な機能を有したものと考えられる。重量1.2kgを測る。土坑66は古墳時代の遺構であると考えられるが、383は下層の弥生時代の遺物が混入した可能性がある。

〈土坑 64〉



〈土坑 65〉



1. 暗オリーブ灰 2.5GY4/1 シルト中粒砂多く含む
2. オリーブ灰 2.5GY6/1 細～中粒砂
3. オリーブ灰 2.5GY5/1 シルト細粒砂
4. 暗オリーブ灰 2.5GY3/1 シルト細粒砂少量含む
5. 暗オリーブ灰 2.5GY3/1 シルト細粒砂多く含む
6. 暗オリーブ 2.5GY4/1 細～中粒砂

1. 黒 N2/O 炭化物・植物遺体腐 灰混じる
2. 灰 10Y4/1 シルト細粒砂若干含む 植物遺体わずかに含む
3. 灰 N4/O シルト～極細粒砂ラミナわずかに見られる 植物遺体わずかに含む
4. 暗緑灰 7.5GY4/1 シルト～極細粒砂しまりが悪い

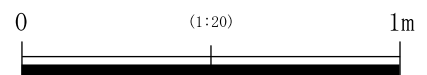


図80 土坑64・65 平・断・立面図

### 土坑67 (図81)

土坑67は土坑66の南に約2mの距離をおいて位置する土坑である。土坑70の埋土を切る関係にあるが、遺構の輪郭は不明瞭であり、あるいは土坑70の埋土の一部である可能性も残される。不整形な円形を呈し、直径約1mを測る。埋土は土坑70との峻別が難しいもので、炭化物、砂礫を多く含むシルトを主体とする。特徴的な遺物の出土状況はみられず、図85-309・310に示した須恵器坏身、高坏脚のほか、須恵器壺口縁 (図86-331)、須恵器細片、土師器細片が出土している。310は脚外面にカキメを施すが、透し穴を有しない。331の須恵器壺は土坑70出土の個体と接合したことから、両遺構の同時性を示唆する。

### 土坑68 (図81・82)

土坑68は土坑67の東に位置し、土坑70と重複する。平面的に遺構の輪郭を確認した際には土坑70との関係が不明瞭であったが、土坑70の埋土を切り込んで掘削されたこと、土坑68の埋没後、さらに土坑70の埋没が進んだことが確認された。この点からは、一連の時間幅の中で両遺構が営まれたものと考えられる。平面形は隅丸方形を呈し、長さ0.9m、幅0.75mを測る。深さは土坑70の底からは50cm、土坑70の上面からは80cmを測る。壁面に顕著なオーバーハングがみられ、調査時の所見からも、掘削時の滞水により壁面が崩落したものと考えられる。埋土もこの想定を支持するもので、砂とシルトの小ブロックにより構成される単位がほぼ水平に堆積する。このような埋没過程によるものか、内部から遺物の出土はみられなかった。

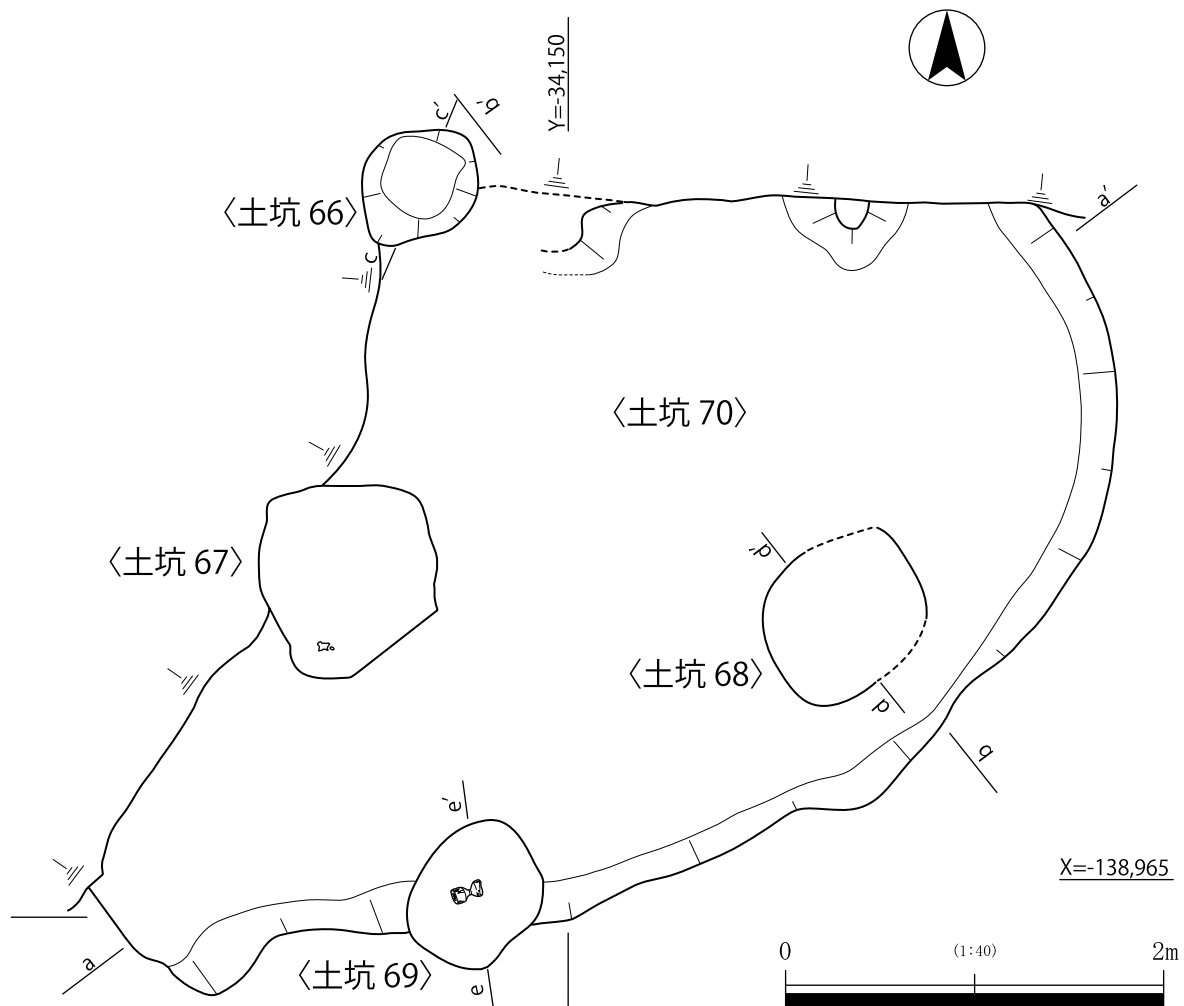
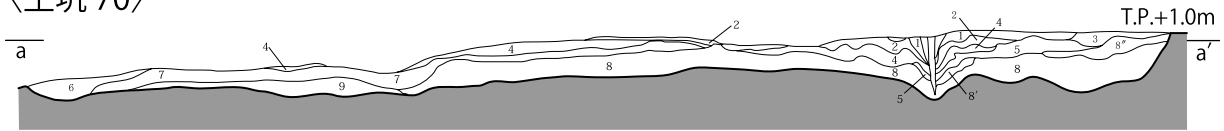
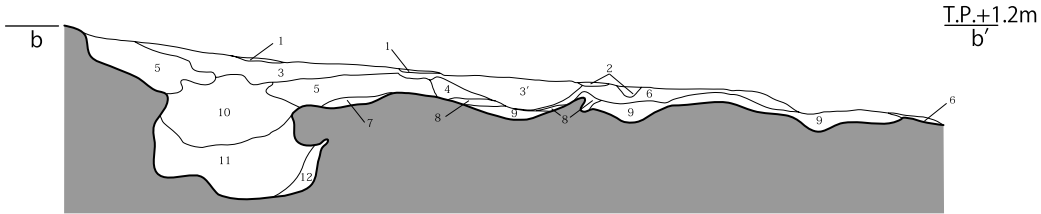


図81 土坑66～70 平面図

## 〈土坑 70〉

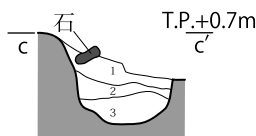


- |                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |                                                                                                                                                                                                                                                                   |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 黒褐 10YR3/1 極細粒砂 粗粒砂混じる 炭化物、焼土、灰混じる</li> <li>2. 黒 N2/01 炭～灰 N5/0 灰・層、焼土混じる</li> <li>3. 黄灰 2.5Y4/1 極細粒砂 中～粗粒砂多く混じる 焼土混じる</li> <li>4. 灰 10Y5/1 細～極細粒砂 シルトブロック混じる 黒褐 10YR3/1 細粒砂ブロックで入る</li> <li>5. 灰 10Y5/1 極細粒砂 粗粒砂～小礫わずかに混じる</li> <li>6. 灰 10Y5/1 粗粒砂</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>7. 暗青灰 5PB3/1 シルト質 細粒砂 中～粗粒砂多く混じる (第 3-2a 層起源の埋土)</li> <li>8. 灰 10Y4/1 粗粒砂 径 2～3cm 大の極細粒砂ブロック混じる</li> <li>8' 暗青灰 5B3/1 細粒砂 (8 と第 3-2a 層の混じり)</li> <li>8'' 灰 7.5Y4/1 粗粒砂</li> <li>9. 灰白 10Y7/1 中粒砂 細粒砂のブロック多く混じる</li> </ol> |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|



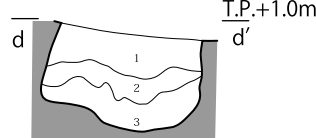
- |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |                                                                                                                                                                                                                                                    |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 炭 灰層</li> <li>2. 黒褐 10YR3/1 極細粒砂 粗粒砂混じる 炭化物、焼土、灰混じる</li> <li>3. 灰 10Y5/1 細～極細粒砂 シルトブロック混じる 黒褐 10YR3/1 細粒砂ブロックで入るから 灰 7.5Y4/1 シルト 中～粗粒砂多く混じるに変化</li> <li>3' 灰 10Y5/1 細～極細粒砂 シルトブロック混じる 黒褐 10YR3/1 細粒砂ブロックで入る</li> <li>4. 灰 5Y4/1 シルト質中粒砂 粗粒砂多く混じる</li> <li>5. 灰 10Y4/1 粗粒砂 径 2～3cm 大の極細粒砂ブロック混じる</li> <li>6. 黒 N2/01 炭～灰 N5/0 灰層、焼土混じる</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>7. 灰 10Y4/1 細粒砂</li> <li>8. 灰 5Y5/1 細粒砂</li> <li>9. 灰 5Y5/1 シルト質細粒砂、粗粒砂ブロック状に入る</li> <li>10. 暗青灰 5B4/1 シルト 青黒 5B2/1 粗粒砂混じるブロック土</li> <li>11. 暗青灰 5B4/1 粗粒砂にシルトブロック混じる</li> <li>12. 暗青灰 5B4/1 細粒砂</li> </ol> |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

## 〈土坑 66〉



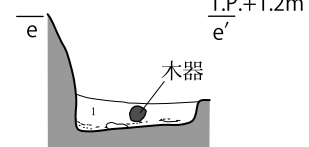
1. 灰 7.5Y5/1 シルト 細粒砂や砂含む
2. オリーブ黒 7.5Y3/1 シルト + 細粒砂
3. オリーブ黒 5Y3/2 シルト

## 〈土坑 68〉



1. 暗青灰 5B4/1 シルト 青黒 5B2/1 粗粒砂混じるブロック土
2. 暗青灰 5B4/1 粗粒砂にシルトブロック混じる
3. 灰 N5/0 中～粗粒砂 極細粒のブロック混じる (水たまりの中の埋め戻し)

## 〈土坑 69〉



1. 青灰 5B5/1 シルトブロックの間に細粒砂～中粒砂入る 暗灰 N3/0 シルトブロック入る (水たまりの中の埋め戻し)

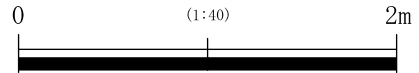


図82 土坑66・68・69・70 断面図

## 土坑69 (図81・82)

土坑69は土坑66、67の南に位置し、土坑70と重複する。土坑70を平面的に検出した際には輪郭が把握できなかったが、土坑70を掘り下げる過程において土坑69の輪郭を確認した。土坑68において確認したように、土坑70の埋没は、土坑68、69の掘削と埋没を間に挟みながら進行したものと考えられ、最終的に炭層で覆われるまでは土坑68、69は埋まっていたものと考えられる。土坑69はいびつな円形の平面形を呈し、径0.3～0.4mを測る。深さについては60cmを測り、土坑70の底からは10cm程度を測る。土坑70を掘り下げた段階で土坑69を確認したことから、土層断面も土坑70の底面以下についてのみ、記録することができた。土坑掘削時に発生したシルトブロックと砂が混ざるもので、土坑68に類似する。土坑の掘削からそれほど時間をおかずに、水に溜まった中で埋没が進んだものと考えられる。土坑上位の出土遺物については土坑70のものと同様に区別できないが、下層からは木製の錘 (図85-311) が1点出土したのみである。確たる根拠を示すことはできないが、出土位置と、ただ1点のみの出土であることから、意図的に納められたものと推測する。土坑のほぼ中央、底からはやや浮いた位置で出土しており、土坑の掘削後、間もない段階で納められたものと考えられる。311はコナラ属アカガシ垂属を用いた錘で、中央が明瞭にくびれる典型的な形態を示す。長さ16cm、最大径8.6cmを測る。



土坑70 (図81・82)

土坑70は土坑66～69と重複する大型の土坑である。第1b面における遺構検出作業では当初、炭や灰の顕著な広がりが見られたため、炭化物の堆積としての認識をもって調査にあたったが、調査を進めた結果、一定の深さをもつ大型の土坑であることが判明した。しかしこれまでも記載したように、土坑68・69との切り合い関係は複雑である。土坑70がある程度埋められた段階で、その埋土上面から土坑68・69が掘削され、両土坑が埋没した後に、その埋土を覆う形で土坑70は最終的に埋没する。最終的な埋め戻しには炭や灰が多く投入され、当初認識した炭層を形成する。流路1との関係には不明瞭な部分が多いが、土層断面からは流路1により北側が侵食されている様相をみることができ、流路1の最終的な埋没以前には土坑70は埋没していると考えられる。このため検出した土坑70の形状は流路側の一部を欠いたものと考えられるが、残存部分では長さ6m、幅4mを測る。壁面の立ち上がりは比較的整ったものであるが、底面には凹凸が顕著な部分が多い。深さは深いところでも20cm前後であり、広くて浅い土坑である。埋土は汚れた砂を主体に砂混じりシルトなどが混じるもので、比較的しっかりした土壌も介在するが、層相から人為的な埋め戻しがなされたものと推測する。遺物の出土状況に特徴的なものは無いが、須恵器、土師器、韓式系土器、製塩土器などの破片が多数出土した。図化し得たものを図86～312～図87～345に掲出した。特徴的な遺物としては341～343のU字形板状土製品、344の韓式系土器平底鉢などがあげられる。また337の土師器羽釜は鏝の全容は不明であるが、その取り付け位置が頸部でも上寄りにあり、古相を呈する資料である。また製塩土器は細片と化したものが多く、図版320～3014にその一部を掲載するにとどめるが、重量では約700gを測る。石製品には滑石製白玉(図93～379)、有孔板

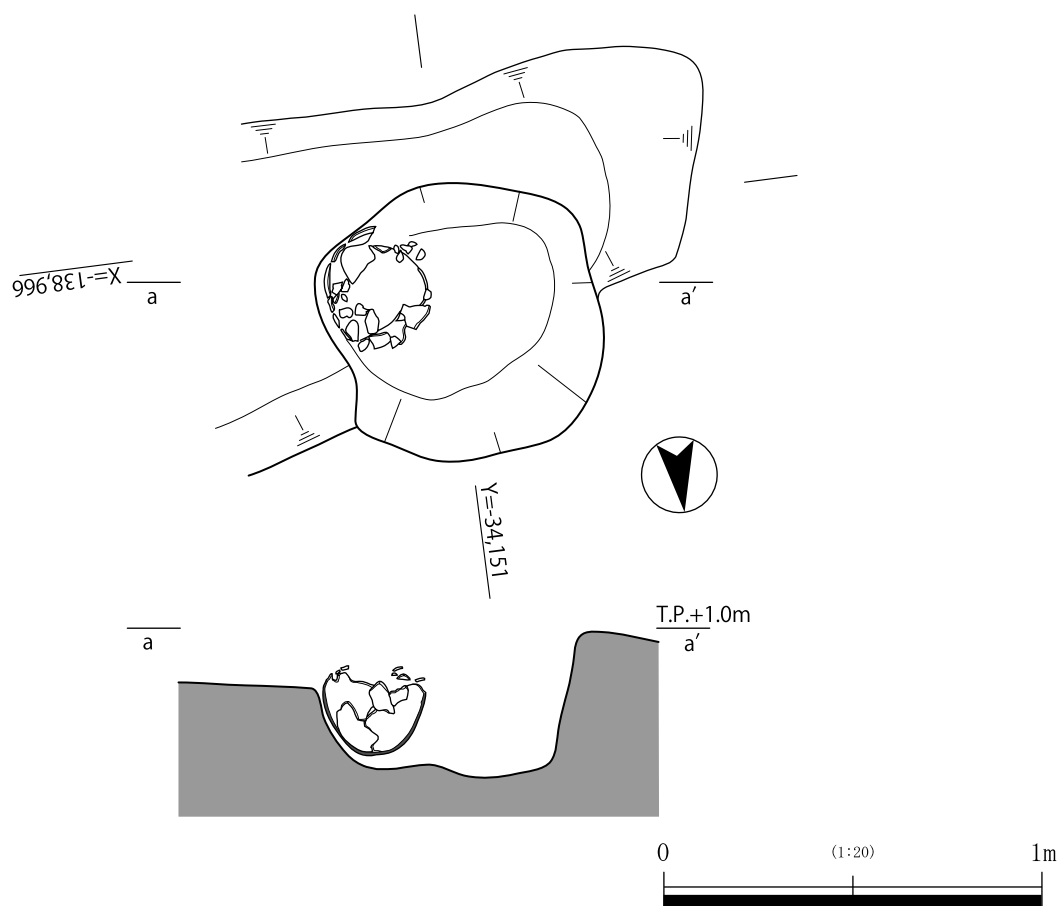


図83 土坑71 平・断面図

(381)、砂岩製石杵の一部(382)、弥生時代の遺物と考えられる石鏃(図94-384)、楔形石器(385)、剥片(386)がある。植物遺体としては桃核50点以上、スモモ核3点が出土している。遺物の時期は須恵器がTK47型式段階に比定され、この時期の遺物を主体とするが、遺物の出土量が多いものの、完形のものが含まれていないことから、製塩土器や植物遺体、炭なども含めた廃棄土坑と考えられる。

#### 土坑71(図83)

土坑70の南に接する位置にある土坑で、現代の攪乱により上部を失っている。不整形な円形を呈し、径0.7m、深さ40cmを測る。東端に土師器長胴甕(図88-346)が正位置で据えられており、意図的に埋納されたものと考えられる。埋置段階で既に底の一部を欠いていたと考えられる。これ以外には須恵器、土師器の細片がみられた。346は器高39cmを測るもので、内外面ともハケ調整が施され、ケズリはみられない。5世紀後半以降のものと考えられる。

#### 土坑72(図84)

土坑72は土坑70からは南西に約6m離れた位置にある土坑で、流路1と重複する。調査段階では流路1の埋土を掘り下げている段階で、遺物の出土を確認したが、最終的には流路の斜面を検出した段階で平面形状を確認した。遺物の出土位置などから勘案して、流路1が一定程度埋没した段階で掘削されたものと考えられるが、土坑の底はT.P.-0.9mを測り、流路上面よりは2m程度の深さとなることから、土坑の掘削は流路の最終埋没以前の段階であったと考えられる。平面形は隅丸方形を呈し、長さ1.0m、幅0.7mを測る。北寄りの底が一段深くなっており、検出面(流路斜面)からの深さは60cm程度である。埋土は腐食の強い泥質のシルトが主体で、植物遺体も多く含むことから、滞水環境の中での埋没、あるいは埋め戻しが推測される。上位から下位までまとまりをもって完形の土器類が出土しており、段階的に意識的な埋置がなされたと推測される。最下位には須恵器高坏(図88-350)、土師器甕(354)があ

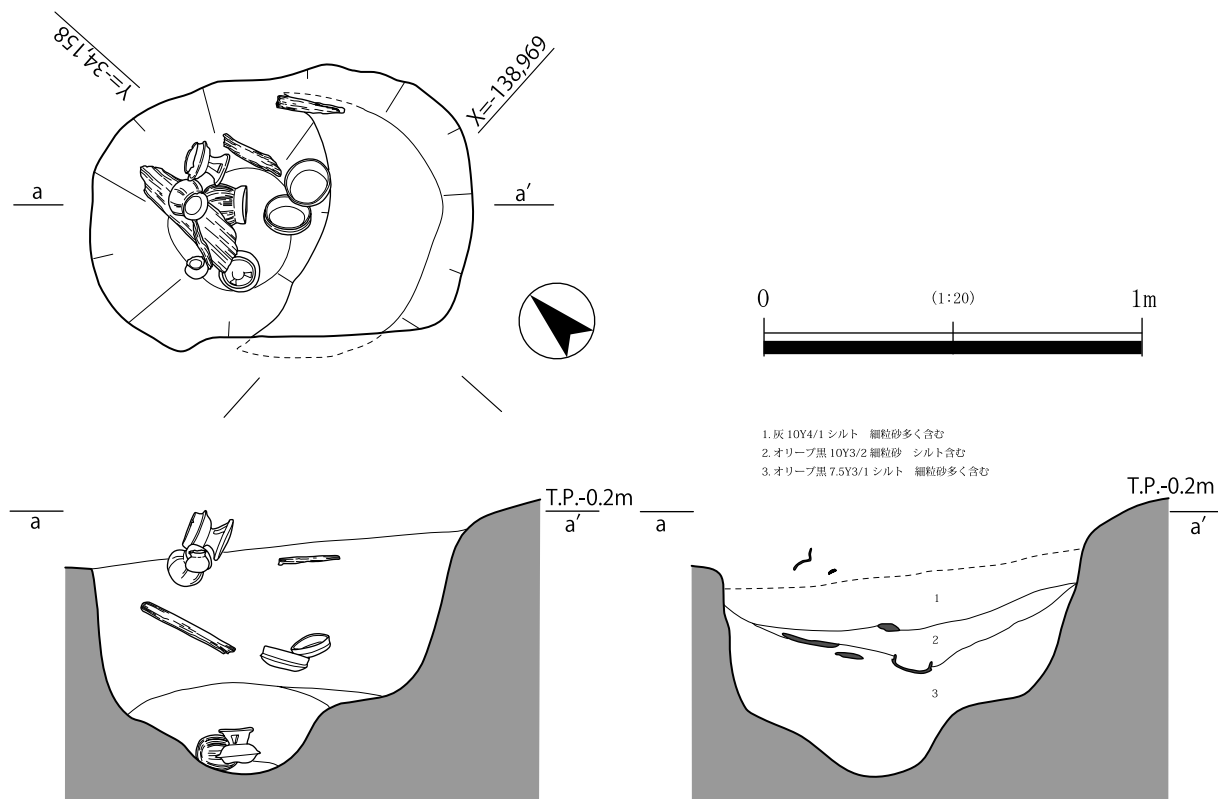


図84 土坑72 平・断・立面図

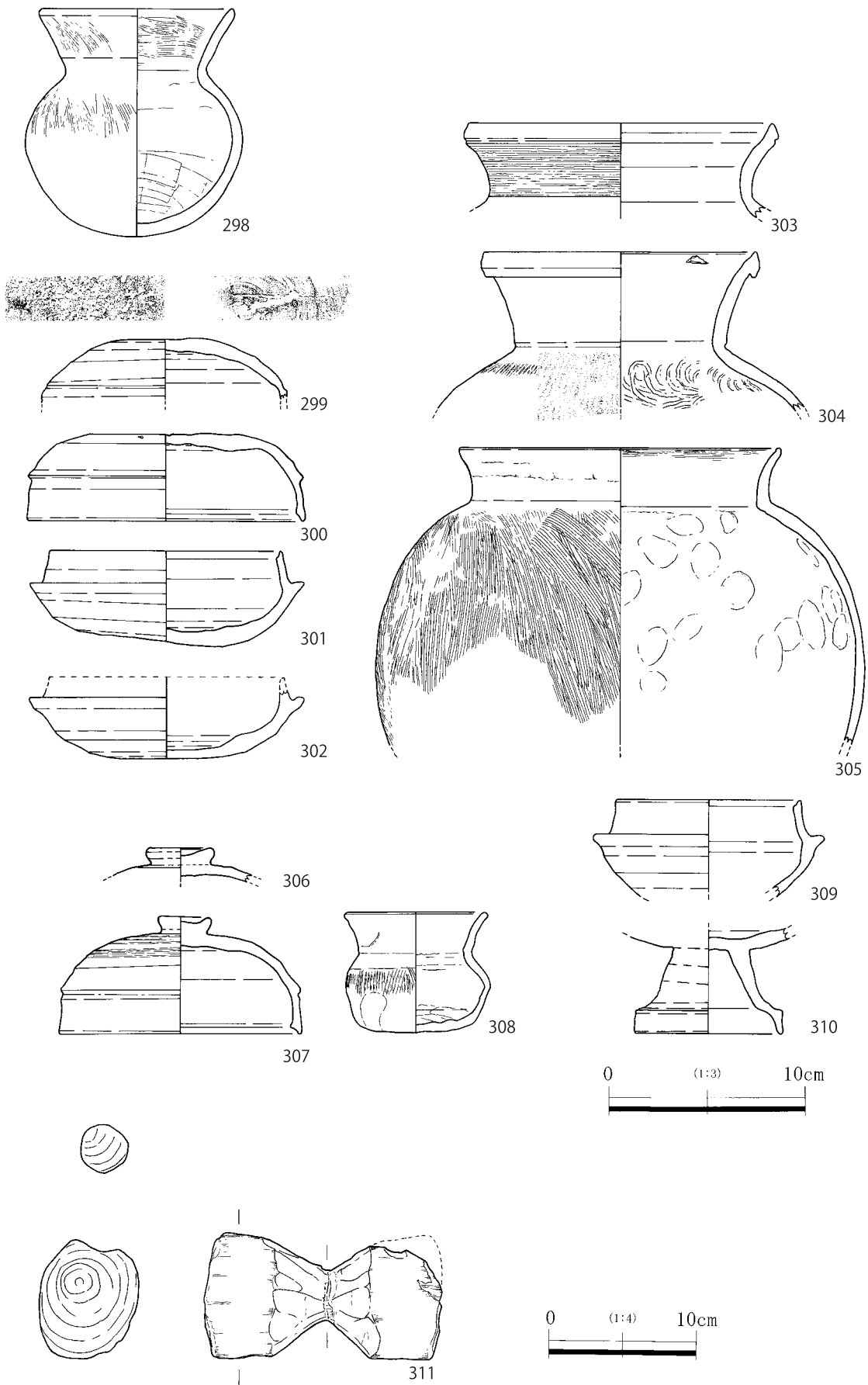


图85 微高地3 遺構 出土遺物1

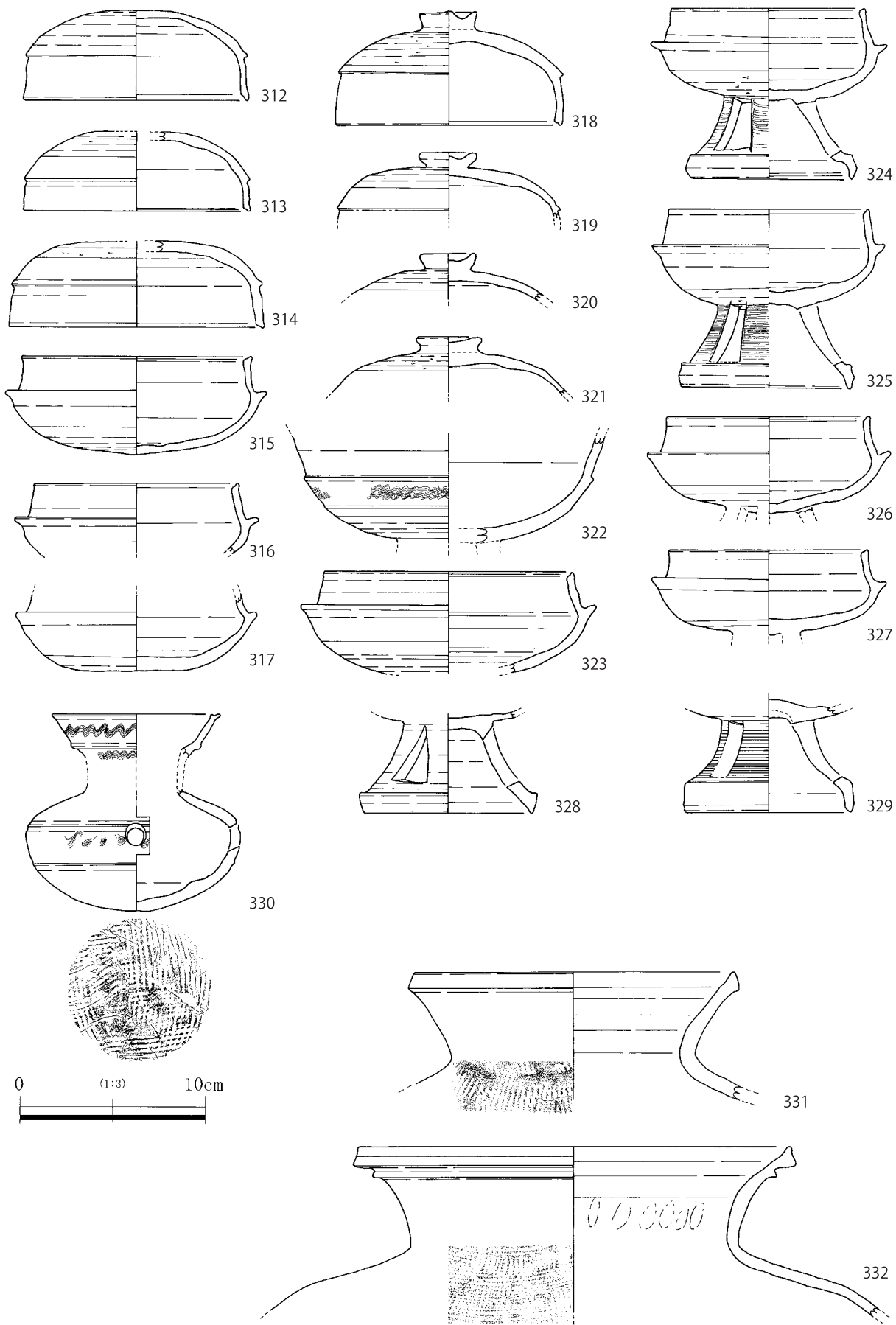


图86 微高地3 遺構 出土遺物2

り、中位には須恵器坏蓋 (347・348)、上位には須恵器高坏 (351)、土師器壺 (353) 小型壺 (352) がみられた。この点から3度にわたる埋め戻しと土器埋納が繰り返されたものと推測するが、全体としては短時間の行為であろう。図示し得たもの以外には、土坑最上位に伏せられていた須恵器中型甕の体部片や壺口縁、土師器、須恵器の細片、製塩土器片 (6 g) などが出土した。植物遺体としては桃核38点や、スモモ核2点が出土しており、さらに、遺存状態は極めて悪いものであるが、植物質の籠 (図版318-2997・2998) が出土したことは特記される。六つ目の底部が確認できる。須恵器高坏2個体は脚端部の形状など、類似する特徴をもつものであり、TK47型式段階に比定される。土坑64~72はまとまった分布をみせるものであるが、形成された時期もほぼ同時期と考えられ、遺物の出土が多い点、製塩土器や桃核といった特徴的な遺物の出土傾向にも共通点が多い。しかしながら性格については不明である。

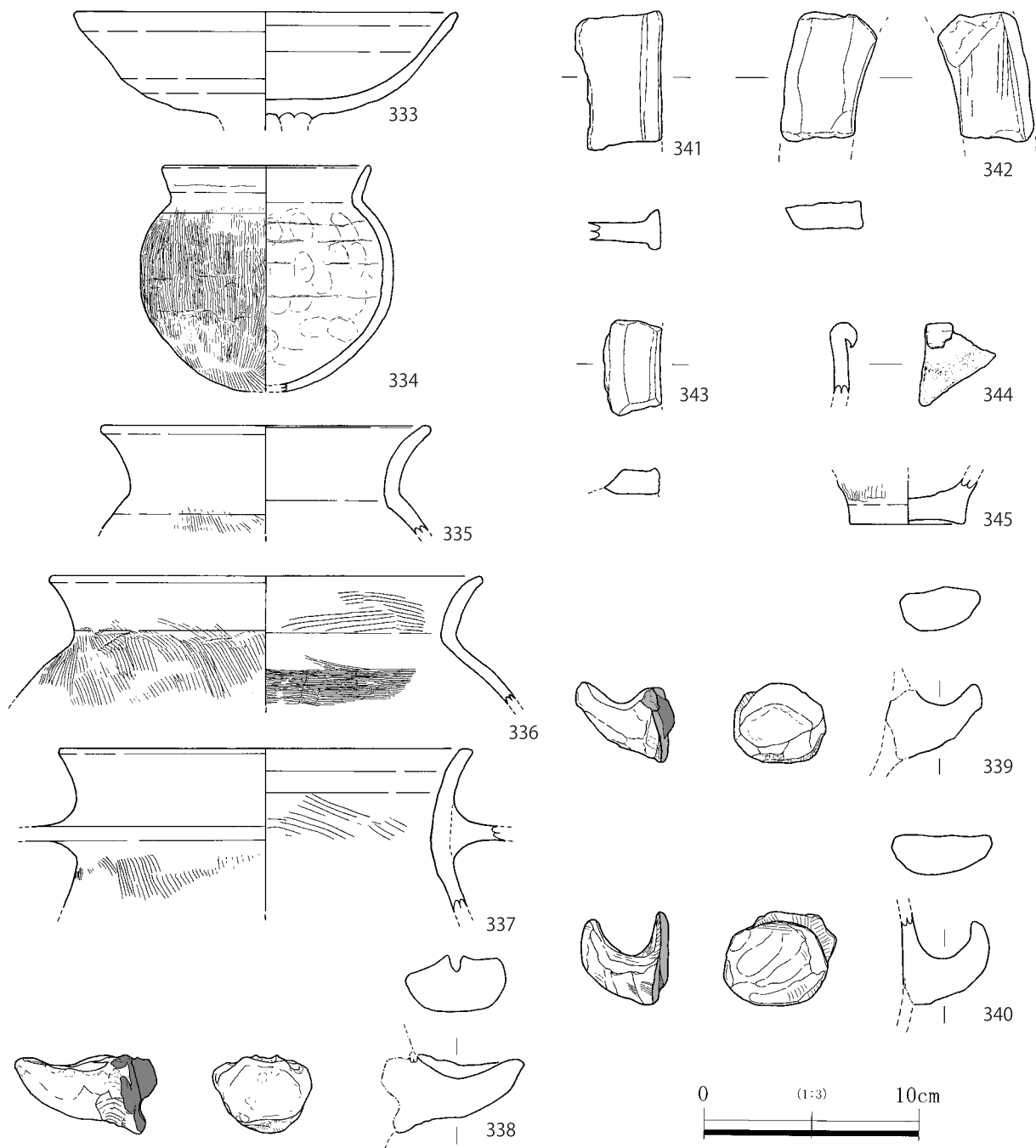


図87 微高地3 遺構 出土遺物3



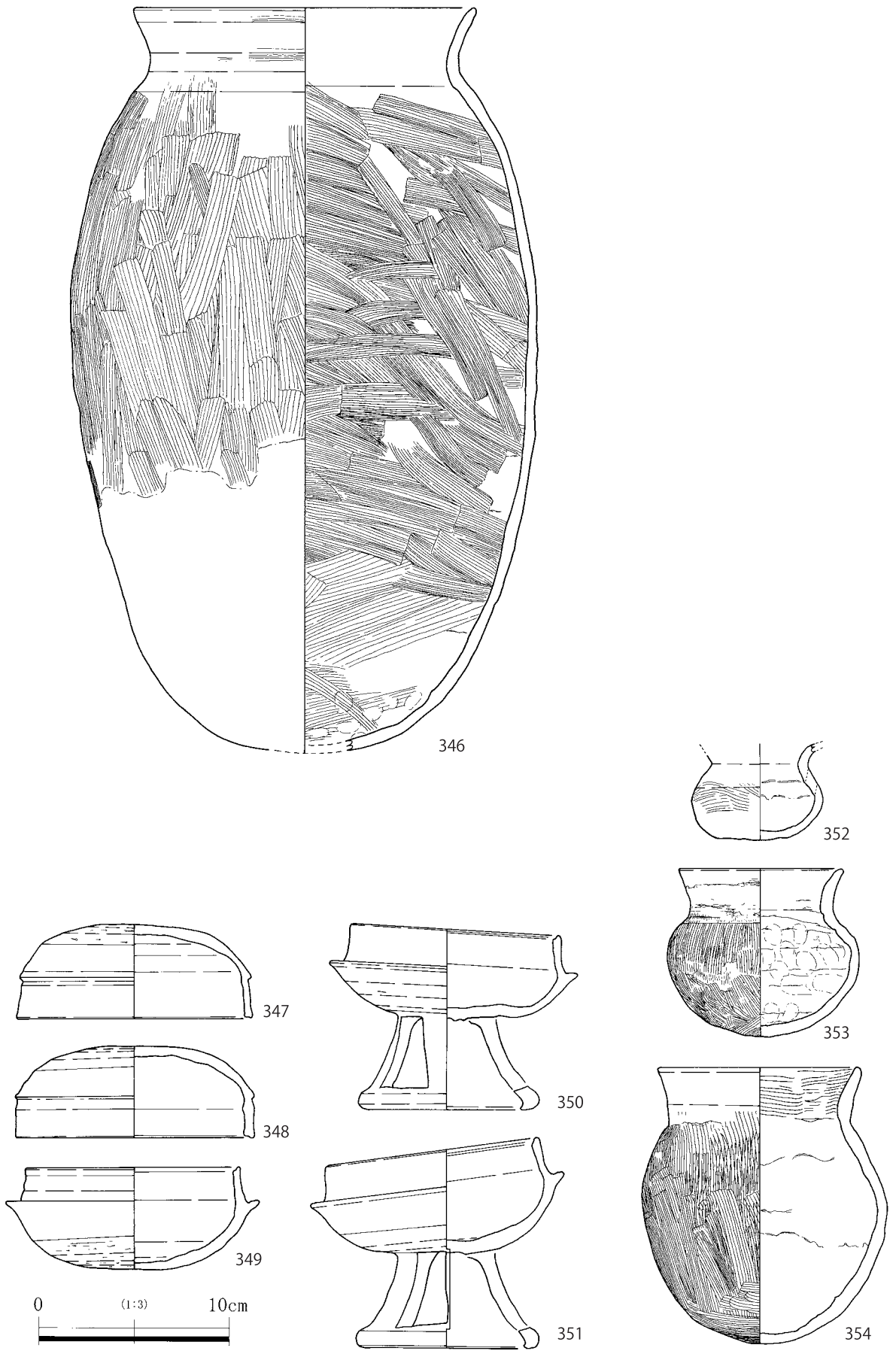


图88 微高地3 遺構 出土遺物4

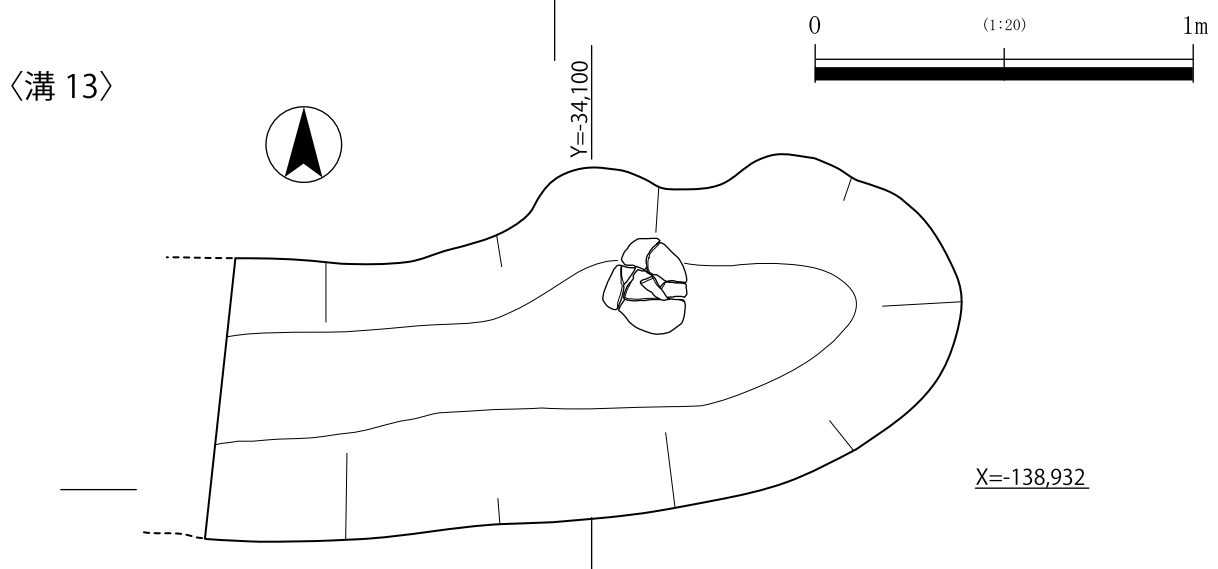
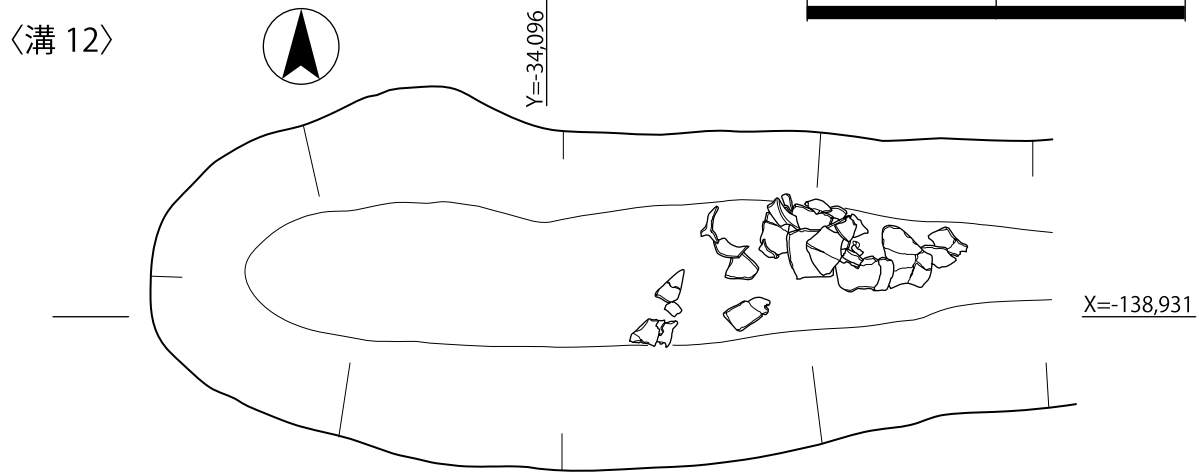
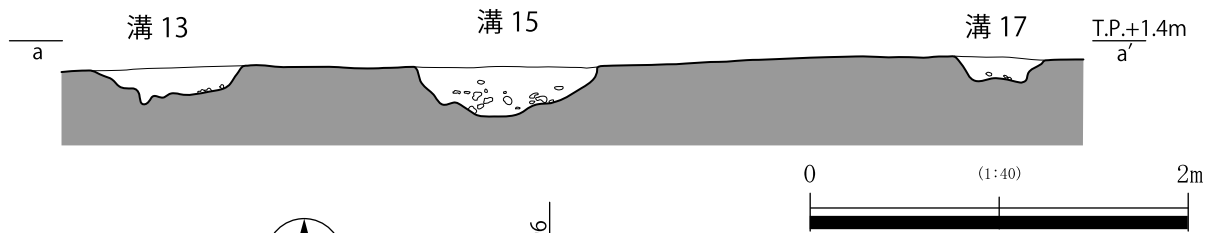
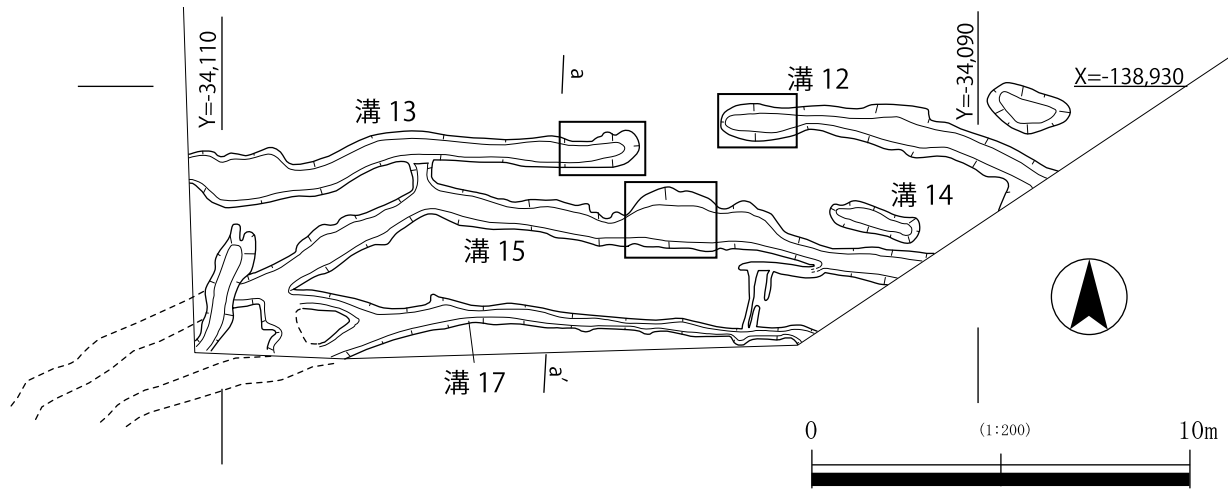


図89 溝12~15・17 平・断面図 溝12・13遺物出土状況図



図90 溝15 遺物出土状況

#### 溝群 4

溝群 4 としたものは、微高地 3 の北縁部、流路 1 の南岸付近に位置する小規模な溝の集まりで、その南に位置する溝13～18などとの関連が想起される。特に、東端が後述する溝13の東端部と合致しており、計画的な配置が想起される。幅0.2m程度の溝が、一部を連結し10条程度並ぶものであり、遺物の出土はみられない。小規模な畠遺構とされるものに類似するが、性格は不明である。

#### 溝10

溝10は微高地 3 の北寄り、03-5-2トレンチの南西隅において確認した溝で、溝15・17を切る関係にある。幅0.8m、深さ約10cmの規模で、トレンチの境にかかることから南端の様相は不明ながら、南北方向の小規模な溝であると考えられる。遺物には土師器細片が2点出土したのみである。

#### 溝11

溝11は調査範囲内における微高地 3 の北端に位置する溝で、幅0.5m前後、深さ15cm程度を測る。部分的な検出にとどまったが、溝12などと同じ方向をもち、一連の遺構群の可能性はある。遺物には土師器細片が1点出土したのみである。

#### 溝12 (図89)

溝12は微高地 3 北縁付近に平行して流走する溝群のひとつで、ゆるやかな弧状を描く溝である。約 2 mの間隔をあけて溝13に連なるものと考えられ、両者で溝群の北縁を構成する。幅0.6～0.9m、深さ15cmを測り、比較的まとまった遺物の出土をみた。遺物検出状況の一部を図89、図版32に示すが、土師器甕、坏、須恵器臑、坏身、坏蓋、滑石製白玉などが出土した。完形のものではなく廃棄されたものと考えられる。図化し得たものを図91-355～360、図93-377・378に掲出した。土師器坏360は赤褐色の特徴的な胎土・焼成をみせるものである。須恵器の年代はMT15型式段階に比定される。

溝13 (図89)

溝13は溝12と一連のものと考えられるもので、西端がトレンチ境にかかるが、長さ約15m、幅0.8m前後、深さ10cm程度の溝である。溝15と連結する部分があるが、切り合いの有無は確認できなかった。図89に示したように東端部において須恵器甕の体部片がまとまって出土したほか、竈、坏、土師器甕の破片が出土した。須恵器が7割程度を占める。図示し得たものは須恵器竈の口縁部 (図91-361) のみである。溝12と同時期の遺構と考える。

溝14 (図89)

溝14は溝12と溝15の間に位置する小規模な溝で、長さ2.5m、幅0.7m、深さ10cmを測る。遺物は土師器細片が出土したのみである。

溝15 (図89・90)

溝15は溝12・13の一行南側に位置する溝で、さらに南側に位置する溝17とは一部で連結し、平行する形状をもちながら流走する。3つのトレンチにまたがり確認したが、検出総長は50mを超える。幅や深さは一様ではないが、広いところで幅1.3m、深さ20cmを測る。図90に出土遺物を示した以外にもまとまった遺物の出土をみせるが、完形のものはいずれもみられない。須恵器壺、甕、坏、高坏、土師器壺、甕などがあり、土師器が6~7割を占めるようである。図化し得たものを図92・図93に示した。366は須恵器坏蓋、367~370は坏身、371は土師器壺口縁、372は高坏である。373は中型甕、374・375はそれぞれ形態の異なる複合口縁の壺である。須恵器の年代はMT15型式段階に比定され、溝12・13と同様である。図93-380は滑石製有孔板の一部で、破断面に穿孔が認められる。

溝16

溝16は溝15の南西側に、約3mの間隔をあけて連なるもので、さらに南西方向、調査範囲外へ延びる

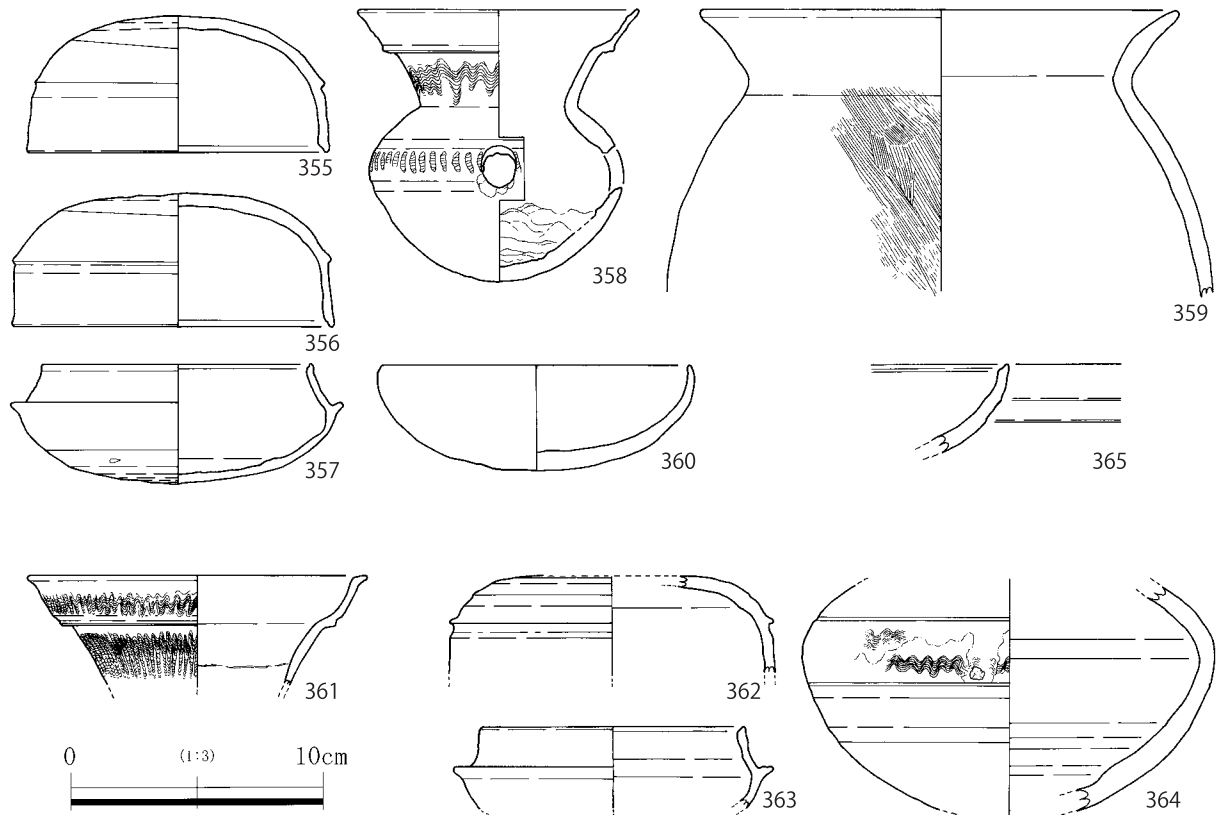


図91 微高地3 遺構 出土遺物5

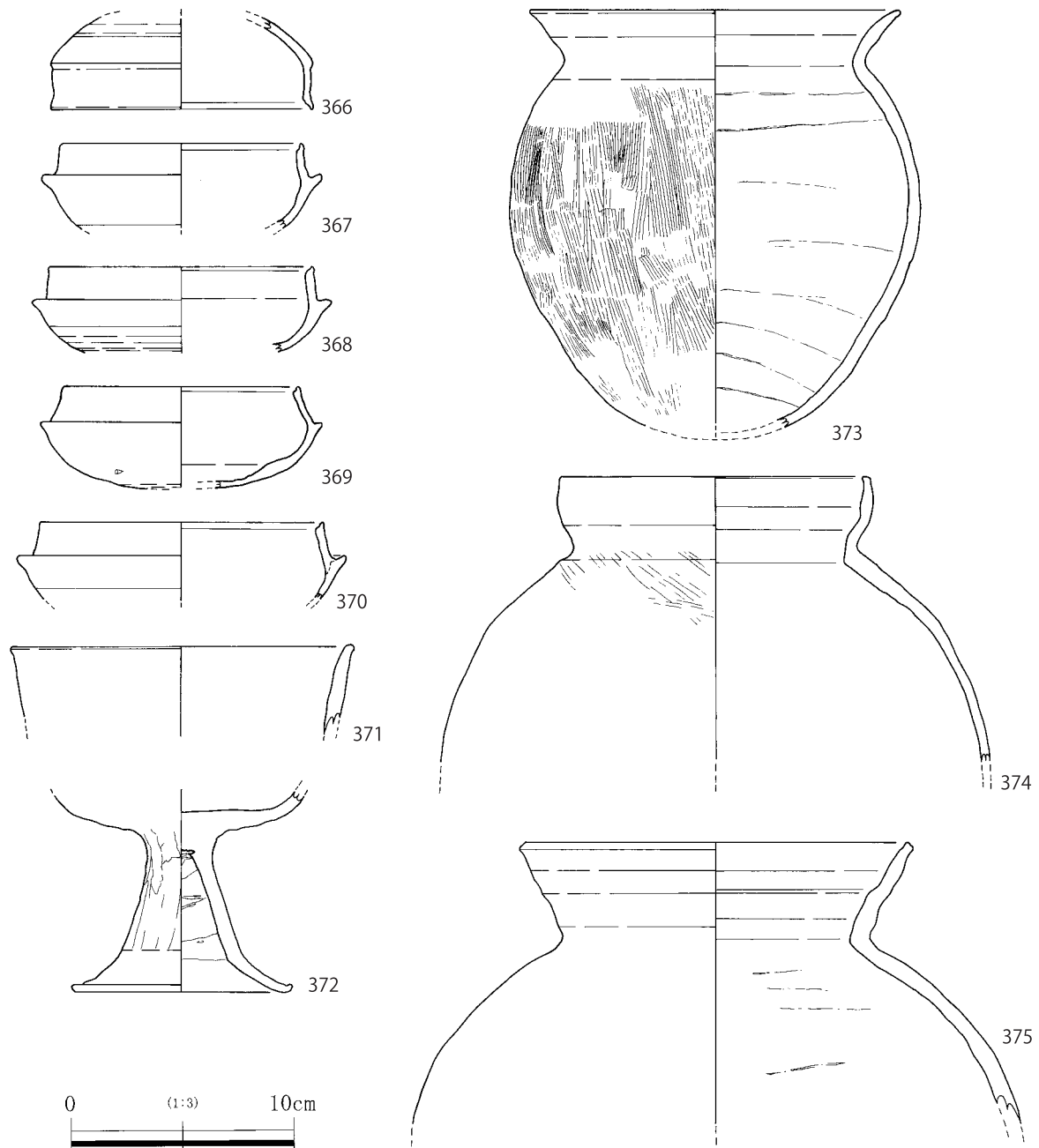


図92 微高地3 遺構 出土遺物6

ものと考えられる。須恵器、土師器の細片が出土しているが、図示できるものはない。

#### 溝17

溝17は溝15の南側に平行して位置する溝で、屈曲の形状など溝15とほぼ同じ形状をもつ、相関度の高いものと考えられる。調査範囲外へ延びるものであるが、検出部分においても総延長40mを超える。幅0.5m、深さ10cmを測り、規模はやや小さい。03-5-10トレンチにおいて検出した範囲では比較的まとまった遺物の出土をみた。土師器坏、甕、須恵器坏、壺、甕などの破片が主となるが、そのうち図化し得たものを図91-362~364に示した。362は須恵器坏蓋、363は坏身、364は壺の体部である。他の溝と同様の時期と考える。

#### 溝18

溝18は溝15から分岐するの、あるいは切り合うかは詳細に確認できなかったが、溝17には切られる



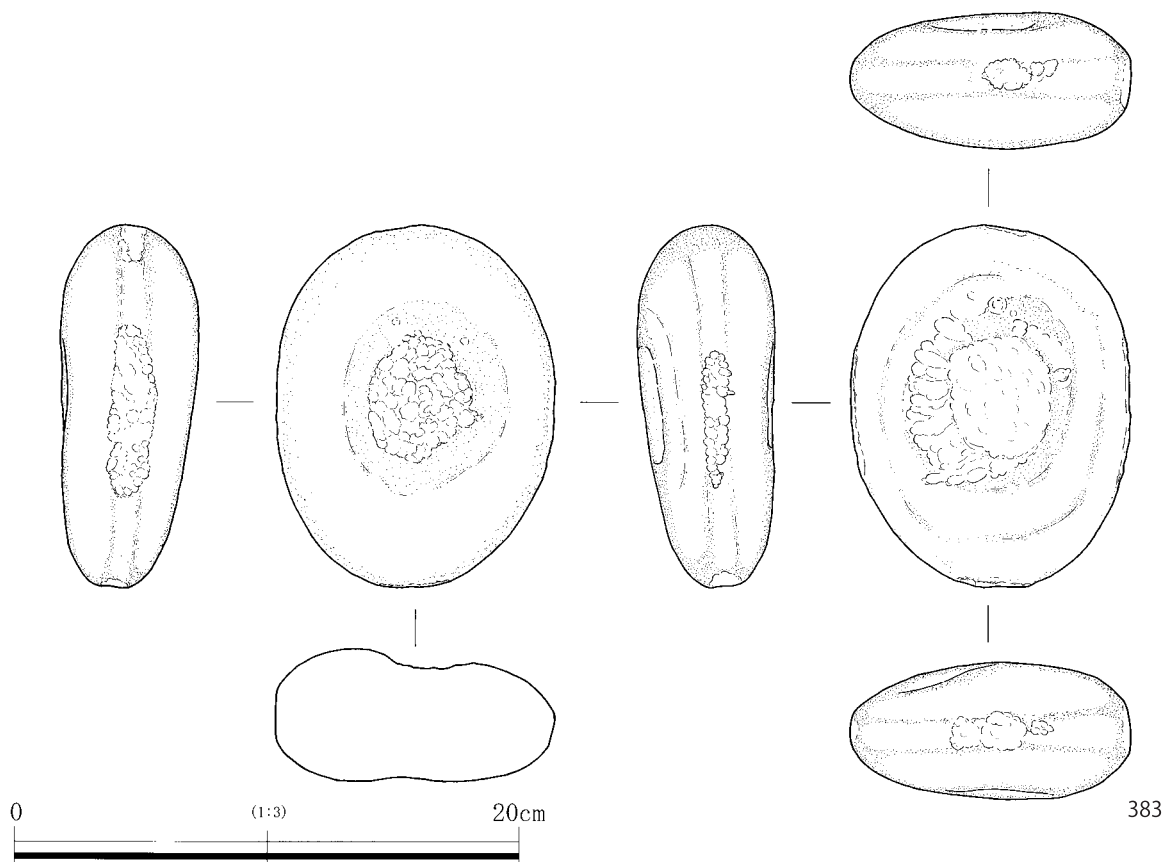
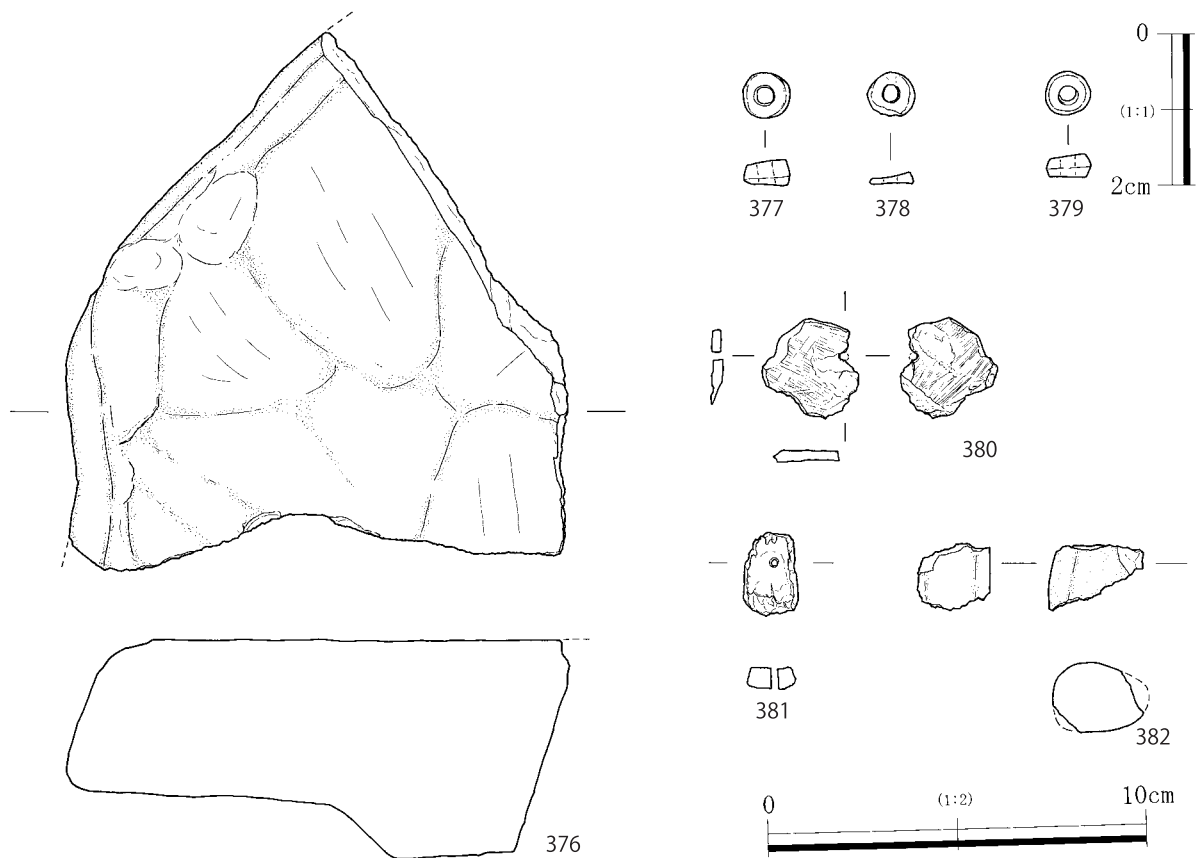


图93 微高地3 遺構 出土遺物7

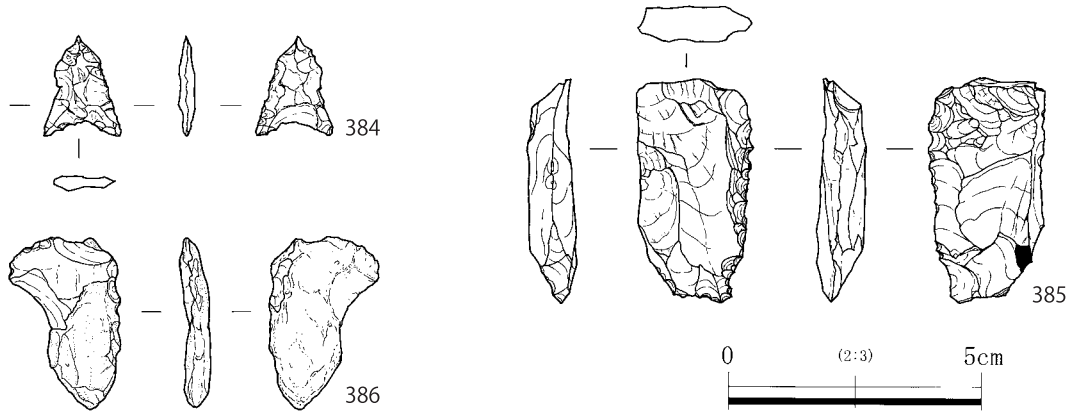


図94 微高地3 遺構 出土遺物 8

関係になる溝である。他の溝と基本的に平行する関係にあり、溝15が溝17とともに再掘削されたと仮定すると、その前身の溝であった可能性がある。規模は幅1.1m、深さ20cmを測る。遺物には土師器、須恵器の細片があるが、図示し得るものはない。

#### 溝19

溝19は微高地3北縁の中央付近に位置する溝で、溝15などに直交する方向をとる。北端で溝17に切られており、南側は調査範囲外へ延びると思われる。幅は1m前後、深さは15cmを測る。遺物は土師器の細片が1点出土したのみである。

#### 溝20

溝19の西側に近い方向をもって位置する溝である。北側を溝15に、南側を溝17に切られており、長さは2mを超える程度の規模であったと推測する。幅1.8m、深さ10cmを測る。出土遺物もわずかであり、須恵器、土師器の細片がそれぞれ1点出土したのみである。

#### ピット168～173

微高地3ではピットは散漫な分布を示し、有意の組み合わせは想定されない。流路1や溝17と重複するものもある。ここの遺構として特徴的なものは認められず、遺物が出土したものについて遺構番号を付した。ピット168からは図91-365に示した土師器坏ないしは高坏の口縁部が出土しているほか、土師器甕、須恵器甕の細片が出土している。ピット169からは土師器細片が1点、ピット170からは土師器甕の細片が5点、ピット171からは土師器坏の細片、ピット172からは土師器、須恵器の細片が17点、ピット173からは土師器、須恵器の細片が7点出土しているのみである。

微高地4の中心は今回の調査範囲より西側、03-6調査範囲にあるものとおもわれ、極一部を検出したにとどまるとおもわれるが、検出範囲においては顕著な遺構の分布はみられず、北寄りに溝数条、南寄りに浅い落ち込みを確認したのみである。遺構の性格については不明な部分が多いが、遺物の出土をみた溝21～23、落ち込み2に遺構番号を付した。

#### 溝21

溝21は調査範囲西端において検出した南北方向の溝で、幅0.2～0.8mを測る。遺物には須恵器坏身、甕、土師器甕、壺などの細片が出土した。

#### 溝22

溝22はやはり調査範囲西端において検出した南北方向の溝で、西側の肩が側溝にかかり、幅1mを測

るものと推測する。遺物には須恵器壺の体部片が出土した。

### 溝23

溝23は南東から北西へ延びる溝であり、溝21を切るが、溝22に切られる。複数の溝が重なり合う可能性があるが良くわからない。検出長12mを測るが、部分的な規模はまちまちである。遺物には須恵器坏、甕、土師器壺などの細片がある。

### 落ち込み2

落ち込み2は微高地3南寄りにおいて検出した浅い落ち込みで、平面形は東西方向に流れる流路状を呈していたため、当初、流路1に流れ込む小規模な流路かと推測したが、土層断面などの確認により、浅い落ち込みであることが判明した。南北幅11mを測るが、深さ10cm前後と浅い。埋土と第2a層との区別も不明瞭である。遺物には大型の砥石（図192-1561）のほか、土師器、須恵器の細片が出土したのみである。1561は流紋岩製の砥石で、長さ29.9cm、幅10.8cm、厚さ7.7cmを測る。重量は3.45kgである。落ち込み2は遺構として認識するものの、概要において先述したように、形成要因に地震の影響を考慮する必要がある。砥石についても落ち込み2との関係は消極的にとらえるほうが良いとおもわれる。

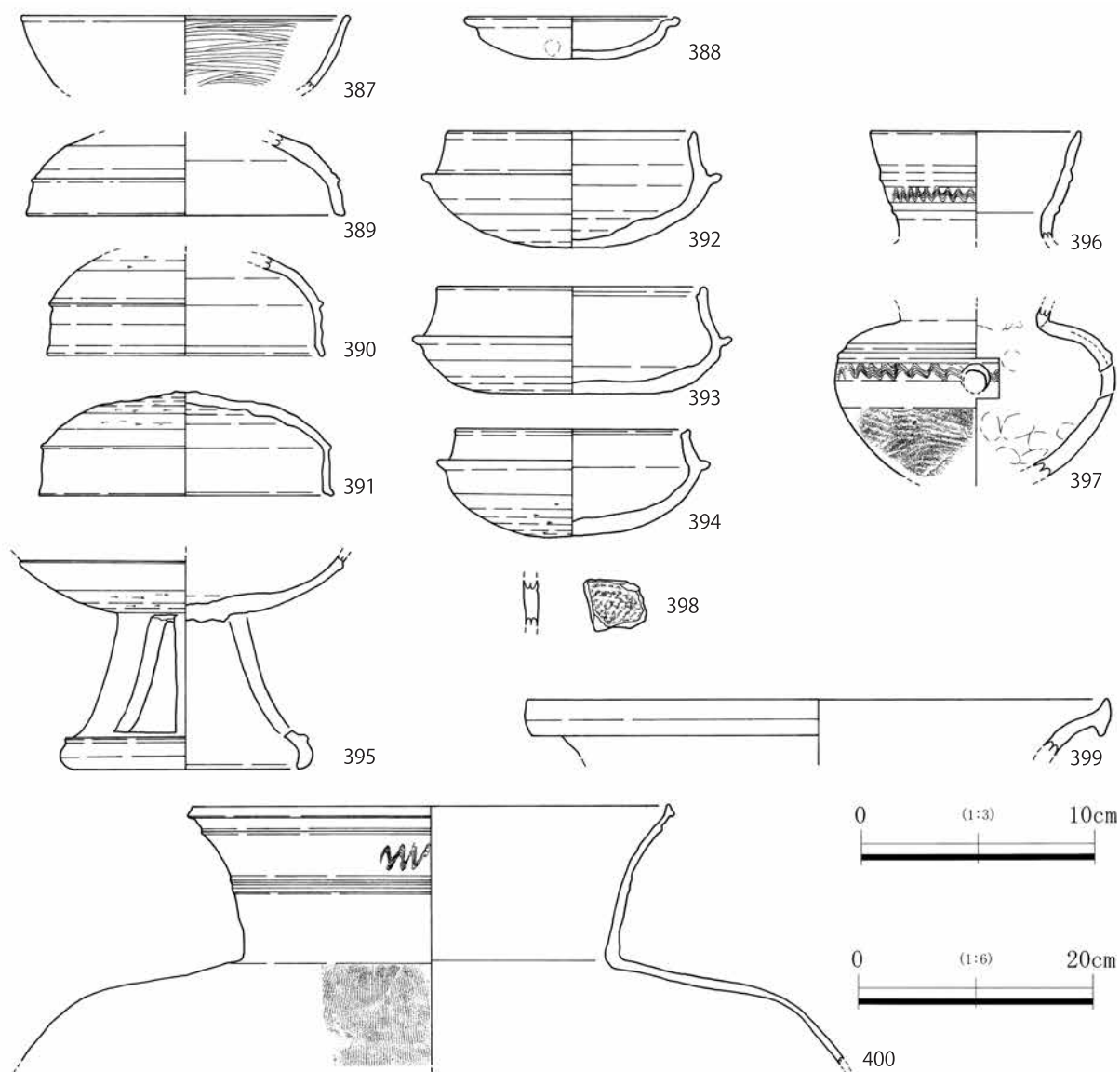


図95 微高地3層出土遺物1

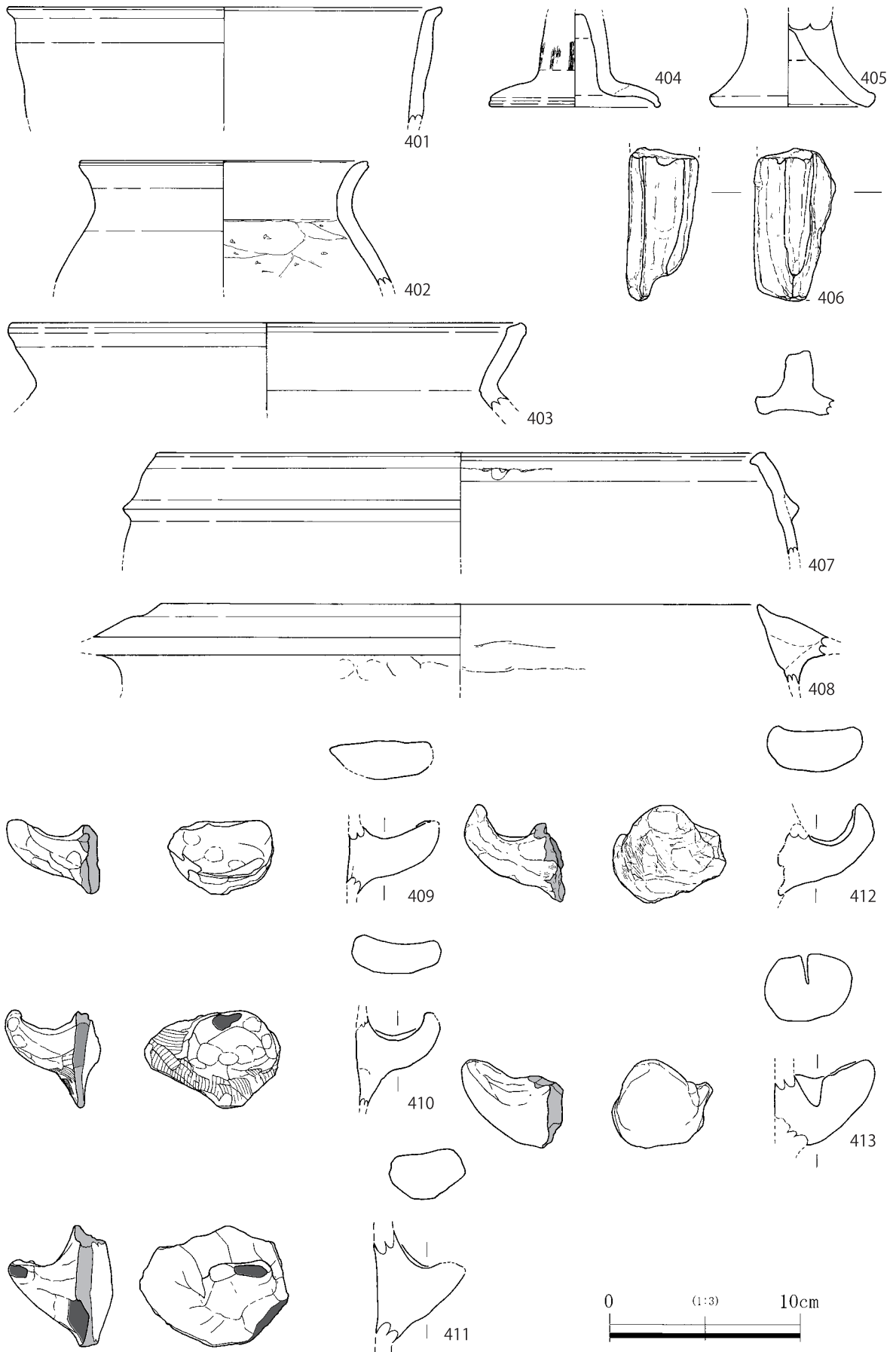


图96 微高地3层出土遗物2

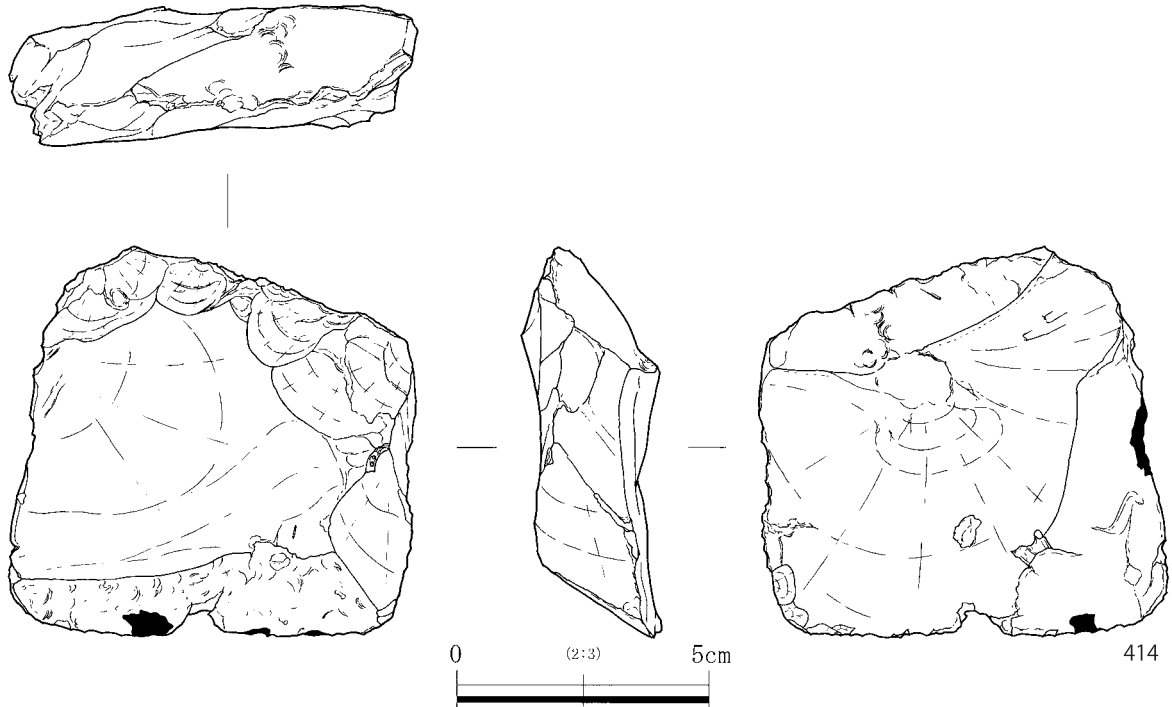


図97 微高地 3 層 出土遺物 3

#### 微高地 3・4 層出土遺物 (図95~97)

微高地 3・4 に相当する範囲の第 1 層~第 2a 層出土遺物について報告する。微高地 3・4 が位置する調査範囲は 03-5-2 (南半)・03-5-10・06-2-2・06-2-3 トレンチに相当するが、それぞれの調査範囲において流路 1 の占める割合が高く、厳密に微高地 3 上層の遺物と流路 1 上層の遺物を区別することはできない。したがって、微高地 3・4 の層出土遺物として、03-5-2 (南半)・03-5-10 トレンチにおいて、流路 1 からやや距離をおいた範囲から出土したものを掲出する。

図 95-387 は瓦器椀、388 は「て」の字状口縁をもつ土師器皿である。389~391 は須恵器坏蓋、392~394 は須恵器坏身、395 は無蓋高坏である。方形の透かしを 3 方向に配置する。396 は須恵器壺、ないしは隙の口縁部で、397 は須恵器隙の体部である。5 世紀後半から 6 世紀前半の時期が主体となる。398 は須恵器甕の体部片と考えられるが、外面に格子タタキを施すものである。399・400 は須恵器甕で、400 は比較的大型の個体である。なお 392 には底部外面にヘラ記号が認められる。

図 96-401 は土師器甑の口縁部で、端部を短く外側に開く。402 は土師器の甕であるが、内面にヘラケズリを施すが、器壁は厚い。403 も土師器の甕で、残存率が低いため口径の復元には不安があるが、口縁端部に内傾する面をもち、内面の肥厚がわずかに認められる。404・405 は土師器高坏脚である。406 は移動式竈の付け庇の基部と考えられる。ごく一部の残存であり摩滅も著しいが、竈底面より下方へ突出する形状のものと考えられる。407・408 も極めて残存率の低い個体であるが、特異な形態を示す土師器の羽釜と考えられ、掲出する。407 は内傾する口縁部外面に、鏝としての機能を有さない極めて短い鏝を貼付けるもので、口縁端部内面は内側に肥厚する。408 は短く摘み上げた口縁からつながる鏝の下部に体部を接合し、その隙間に粘土を充填しているようである。口縁部自体は内傾する。409~412 は土師器把手、413 は韓式系土器の把手である。

図 97-414 はサヌカイトの剥片である。長さ 7.8cm、幅 8.1cm、厚さ 2.7cm を測る大型の剥片で、重量は 187.5g を測る。背面、腹面とも大きな剥離痕が残り、背面からはさらに小型の剥片を取ったようである。



## 第6項 流路1

### 概要 (図99)

調査範囲中央を流走する流路1は、今回の調査において規模の面でも出土遺物の量からも、最大の遺構である。調査範囲中央北寄りの03-6-4トレンチから調査範囲内に入り、03-5-7トレンチ、03-5-4トレンチ、03-5-2トレンチ、03-5-1トレンチ、03-5-10トレンチ、06-2-2・3トレンチ、を流走し、調査範囲南西端の03-5-3トレンチから調査範囲外へ抜ける。調査範囲外北側の様相はまったくの推測となるが、微高地2との関係を考えると蛇行する形状が想定される。一方、調査範囲南側については、やや距離をおいた地点での調査になるが、葦屋北遺跡の西側において南北に軸をおく流路が確認されているおり、これにつながる可能性が高いものと推測される。人為的な加工が加わっているものの、基本的には自然に形成された流路であると考えられ、調査範囲内では微高地間の低地域を縫うように流走する。弥生時代以来の微地形形成の過程において生み出された流路であると考えられる。

調査の工程上、流路1は複数のトレンチに分割して調査したこととなったが、調査当初の層位認識の混乱により、流路の把握に問題が残された箇所がある。今回の調査において最初に着手した03-5-1トレンチでは流路1の本来の検出面である第1b面（調査時には第11層上面と呼称）において流路1の南東肩を確認したものの、北側の輪郭を押さえることができなかつたため、第11層として流路の堆積物と北側の第2b層を同時に掘り下げでしまった。その掘削作業の過程で比較的まとまった遺物の出土と、流路状の遺構輪郭を断片的に確認したことから、続く03-5-2トレンチの調査に際しては第1b面における流路の確認に注意を注いだところ、調査環境の改善の効果もあり、比較的容易に流路の輪郭を平面的にも断面においても確認することができた。そして03-5-1トレンチにおける調査成果を振り返ると、平面的な確認はできなかったわけであるが、センターラインの土層断面図などの記録から、流路の存在を確認することができ、第11層として取り上げた遺物の帰属についてもある程度、復元することが可能となった。

このような経緯があり、流路1について、特に03-5-1トレンチに位置する部分については推定を含む復元により、その範囲を図示することとしたが、把握が難しい状況も残された。一つは規模の問題である。03-5-2トレンチにおいて検出した部分では流路幅は約10m、深さ1mの規模であるが、03-5-1トレンチにおいて復元される流路は幅約25m、深さも1.4mと相当に大規模なものとなる。また03-5-1トレンチにおけるセンターライン土層断面に流路の北岸がかかかっておらず、センターラインの北側に肩があるとすると、03-5-2トレンチにおいて検出した北岸の輪郭とスムーズに連続しない。第二に流路内堆積物の様相も大きく異なっている。後述するように03-5-2トレンチより上流側の土層断面においては流路の再掘削とも言うべき状況が認められるが、03-5-1トレンチ以南においてはそれがみられず、逆に流路内堆積物の細分が明確になる状況が認められた。第三に遺物の出土量が大きく異なっていて、後述するように03-5-1トレンチ以南では、それ以外の箇所と比べて圧倒的に多種多様な遺物の出土をみる。これは流路自体の様相というよりは、直近の土地利用とのかかわりが反映した可能性が高いが、これら観点を総合すると、流路1については03-5-2トレンチより上流側と、03-5-1トレンチ以南との不整合を認めざるを得ない。位置関係として一連の流路であるとはおもわれるが、両者には切り合い関係をもつ可能性も推測しておきたい。しかしながらこのような評価を客観的に検証することのできる記録を作成できていないことは事実であり、悔やまれる結果となったことは反省しなければならない。

流路1は今回の調査範囲内では検出長235mを測り、上記の箇所以外にも、各所において様相も異なっている。以後の記述においては流路1を4つの部分に分割し、それぞれを流路1-1域～流路1-4域

と呼称することとする。それぞれの部分の規模については、最上流側となる1-1域で幅7m~8m、1-2域で幅7m~10m、1-3域で幅7m~10mを測り、徐々に幅が広がる傾向をみることができる。先述のように1-4域にはいると幅は飛躍的に大きくなるが、最南端付近では幅20メートルを超える部分もあるようである。深さについては1-1域で検出面から85cm程度、1-3域においても90cm程度と大きくは変わらない。流路底の標高も断面図作成部分の数値となるが、1-1域でT.P.+0.12m、1-2域でT.P.+0.11m、1-3域でT.P.+0.18mとほとんど勾配をもたないが、1-4域では深いものとなる。

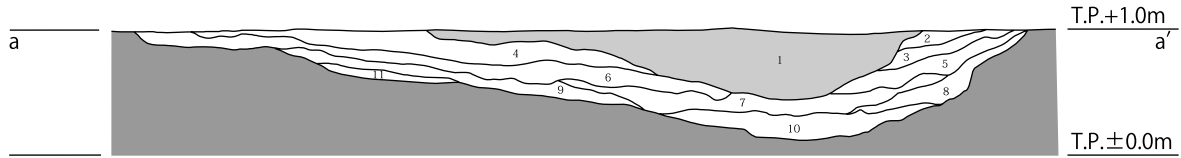
#### 流路内堆積物（図98）

流路1-1域~流路1-3域において記録した、流路1の横断方向の土層断面を図98に掲出する。堆積物の詳細については個々の図面、注記を参照されたい。流路1-1域~流路1-3域においては平面で検出した際にも確認できたが、流路の埋没と再掘削、さらに最終的な埋没という状況が認められる。図に網掛けで表示した部分が再掘削部分と考えるが、一瞥してわかるように、それらは流路の蛇行の外側に位置しており、下流側にいくほど深く、大規模になっている。再掘削以前の流路内堆積物には比較的砂を多く含んでおり、ある程度流水による堆積が推測されるが、再掘削部分の堆積物は水成堆積と考えられる粘土~シルトであり、比較的よどんだ環境で泥が堆積したものと考えられる。最終的な流路充填堆積物は埋没時の環境を示すものであり、必ずしも掘削時の様相を示すものではないことから、再掘削が人為的なものであるのか自然作用であったのかについては判断できない。自然作用による流路の再掘削という状況は、下流側の低い地形の存在が前提となるとおもわれるが、先述のように流路1-3域と流路1-4域の不整合についての理解ができていないため、不明瞭である。なお、出土遺物の面から当初の堆積時期と再掘削部分の堆積時期を限定することはできない。詳細については後述するが、流路からは5世紀中ごろから6世紀にかけての比較的時期幅のある遺物が出土する。しかし再掘削部分にも相対的に古い時期の遺物も入り、当初の堆積物に古い時期の遺物が集中するという傾向も認められない。

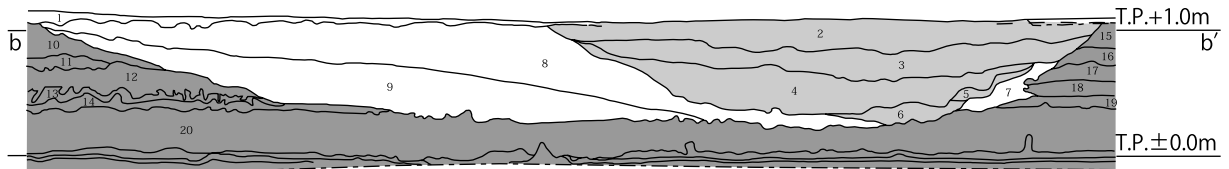
#### 流路内の遺物の出土状況（図100）

流路1からは非常に多くの遺物が出土した。実際の調査作業においては流路内堆積物を掘り下げる過程において、土器類を中心とする遺物の出土をみるわけであるが、特定の箇所にとまって分布するという出土状況を示すものはほとんどみられなかった。流路内堆積物の上層から下層まで満遍なく分布していたが、やや下層において遺物量が多い傾向が認められた。とはいうものの破片の大きい固体が下層に集中するというものでもなく、上層のシルト層にも大型の破片や完形に近い遺存状況を示す個体が含まれている。また流路内堆積物を分層した際の層理面にまとまるという状況もみられない。印象的な表現になるが、流路底付近に沈んでいるものと、泥の中に浮いているものといった状況を示すものが主体を占めている。流路内への土器、木器などの投棄という状況を推測しておきたい。図100には流路底付近においてみられた、比較的まとまった出土状況を示す。03-5-2トレンチから03-5-4トレンチに分布するものであるが、これ以外のものを含む出土状況については、図版35~図版45に写真を掲出した。

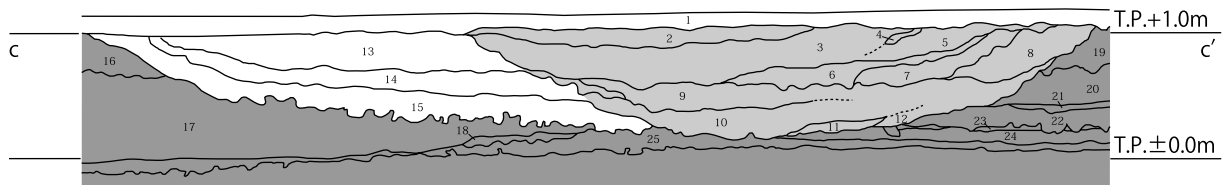
全体的な遺物出土状況の傾向とは別に、流路1-4域においてみられた土馬の出土状況は特徴的なものであった。土馬（図165-1184）は流路1の最上層に分布し、体部を横たえて出土したことから投棄されたというよりは据え置かれたものと考えられる。また正確な範囲は不明であるが、土馬の周辺、およそ10m四方に滑石製の白玉の分布がみられた。垂直分布を厳密に検討したわけではないが、流路内堆積



- |                                                                                                                                                                                                                                                     |                                                                                                                                                                                                                                                                                  |                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. 灰 N4/0 シルト 炭化物粒混じる<br/>黄灰 2.5Y4/1 シルト 炭多く混じる<br/>暗黄灰 2.5Y4/2 シルト 極細粒砂含む 植物遺体を多く含む<br/>黒褐 2.5Y3/2 シルト 極細粒砂～細粒砂含む<br/>植物遺体・炭酸鉄多く含む<br/>が混ざる</p> <p>2. 青灰 10BG5/1 シルト 極細粒砂含む 灰 N4/0 シルト含む</p> <p>3. 暗灰 N3/0 シルト 炭化物粒少し含む</p> <p>4. 2 と 3 の混合</p> | <p>5. 灰 N5/0 ～灰 N4/0 シルトブロック 径 0.5 ～ 1.5cm</p> <p>6. 灰 N5/0 ～灰 N4/0 シルトブロック 径 0.5 ～ 2cm<br/>細粒砂含む 植物遺体・炭酸鉄含む</p> <p>7. 黒褐 2.5Y3/2 細粒砂～中粒砂と<br/>青灰 10BG5/1 シルトブロック 径 1cm の混合<br/>植物遺体・炭酸鉄を多く含む</p> <p>8. 灰 N5/0 シルトブロック<br/>灰 N4/0 シルトブロック<br/>灰 N4/0 細粒砂ブロック 径 0.5 ～ 3cm の混合</p> | <p>9. 黒褐 10YR3/1 極細粒砂<br/>褐灰 10YR5/1 中粒砂～粗粒砂<br/>6 の細かいブロック<br/>オリーブ黒 5Y3/1 シルト 炭含む の混合</p> <p>10. 黒褐 10YR3/2 粗粒砂<br/>褐灰 10YR5/2 極細粒砂～粗粒砂<br/>青灰 10BG5/1 シルトブロック (径 1cm) の混合<br/>植物遺体・炭化物を多く含む</p> <p>11. 黒褐 2.5Y3/1 細粒砂～中粒砂<br/>暗黄灰 2.5Y5/2 中粒砂<br/>黄灰 2.5Y4/1 中粒砂 の混合</p> |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|



- |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. 黄灰 12.5Y4/1 シルト 粗粒砂わずかに含む<br/>極細粒砂多く混じる [第 2a 層]</p> <p>2. 灰 5Y4/1 シルト～粘土 炭化物粒多く含む<br/>3 との境界不明瞭 炭化物がラミナ状に入る<br/>ところあり Fe 多く含む</p> <p>3. 灰 5Y4/1 シルト 植物遺体 炭化物多く含む<br/>2 との境界不明瞭</p> <p>4. 灰 5Y4/1 極細粒砂～シルト 細粒砂多く含む<br/>貝殻起源の炭酸鉄多く含む 植物遺体多く含む<br/>[1 ～ 4 は一連の堆積か]</p> <p>5. 灰 5Y4/1 シルト 極細粒砂多く含む<br/>青灰色シルトブロック (第 2b 層)、植物遺体多く含む</p> <p>6. 灰黄褐 10YR4/2 粗粒砂主体 径 1 ～ 2cm 大の<br/>青灰色シルトブロック多く含む しまりよい</p> <p>7. 灰 7.5YR4/1 シルトブロック主体 灰 5Y4/1 シルトブロック<br/>植物遺体多く混じる</p> | <p>8. 黄灰 2.5Y4/1 シルト 灰白 5Y7/2 細粒砂 灰白 5Y7/1 中粒砂の互層<br/>上位の極細粒砂中にシルトブロック多く混じり、下位の砂層に<br/>ラミナみられる</p> <p>9. 上位 灰白 5Y7/2 細粒砂～中粒砂 ラミナ顕著<br/>下位 灰 5Y5/1 細粒砂～極細粒砂の乱れた堆積</p> <p>10. 灰黄 2.5Y6/2 細粒砂～極細粒砂 一部にラミナみられるが、全体的に<br/>ゆるやかな土壌化を受ける</p> <p>11. 灰 5Y5/1 シルト～極細粒砂 植物遺体含む<br/>下位に灰黄褐 10YR5/2 を呈する部分あり</p> <p>12. 黄灰 2.5Y4/1 シルト質極細粒砂と灰白 2.5Y7/1 中粒砂の互層<br/>一部にラミナみられる 下位に黄灰 2.5Y4/1 シルト部分的にあり</p> <p>13. 灰 5Y4/1 シルト質粗粒砂～中粒砂 下面に凹凸顕著</p> <p>14. 灰白 2.5Y7/1 中粒砂～粗粒砂 ラミナはみられない</p> <p>15. 灰白 5Y7/2 極細粒砂 ラミナ顕著</p> | <p>16. 灰 7.5Y4/1 シルト 灰 10Y4/1 シルトブロック混じるが単位は明瞭ではない<br/>炭化物粒多く含む</p> <p>17. 灰 10Y4/1 シルト</p> <p>18. 灰 5Y4/1 シルト 炭化物粒・植物遺体多く含む<br/>特に 19 との境界付近に炭化物が薄い層を成して堆積する</p> <p>19. 灰白 5Y7/2 粗粒砂 ラミナはみられないが、流水堆積か</p> <p>20. 黒褐 2.5Y3/1 シルト 植物遺体を若干含む 下面に凹凸多くみられ、<br/>下半には暗灰 N3/0 シルトブロックを巻き上げる</p> |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|



- |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. 灰 10Y4/1 シルト 中粒砂若干含む [第 2a 層]</p> <p>2. 黄灰 2.5Y4/1 シルト～極細粒砂 ラミナはみられず、<br/>極細粒砂がブロック状にはいる</p> <p>3. 灰 5Y4/1 シルト 炭化物粒若干含む</p> <p>4. 極細粒砂のブロック</p> <p>5. 灰 5Y4/1 シルト 炭化物粒若干含む</p> <p>6. 黄灰 2.5Y5/1 砂質シルトブロック (径 3 ～ 5cm 大) と<br/>黄灰 2.5Y7/2 極細粒砂ブロック (径 3 ～ 5cm 大) との混合</p> <p>7. 黄灰 2.5Y4/1 シルト 極細粒砂ブロック若干混じる</p> <p>8. 黄灰 2.5Y5/1 極細粒砂主体 シルトブロック若干混じる</p> <p>9. 黄灰 2.5Y4/1 シルト質極細粒砂 炭化物・植物遺体・貝遺骸 (貝殻) 多く含む</p> | <p>10. 黄灰 2.5Y4/1 シルト</p> <p>11. 黄灰 2.5Y4/1 シルト質粗粒砂～小礫 植物遺体多く混じる<br/>しまりよい</p> <p>12. 黄灰 2.5Y4/1 シルト</p> <p>13. 黄灰 2.5Y4/1 シルト～極細粒砂 粒状構造みられる</p> <p>14. 黄灰 2.5Y4/1 シルト</p> <p>15. 黄灰 2.5Y7/2 ～灰白 2.5Y7/1 中粒砂～粗粒砂と黄灰 2.5Y4/1 極細粒砂<br/>部分的に乱れたラミナがみられるが、多くは湿潤層 下面に凹凸顕著</p> <p>16. 青灰 5B5/1 砂質シルト～極細粒砂 ラミナ顕著</p> <p>17. 黄灰 2.5Y4/1 シルト 炭化物・植物遺体多く含む</p> | <p>18. 黄灰 2.5Y4/1 シルト質細粒砂 小礫若干混じる</p> <p>19. 青灰 5B5/1 砂質シルト～極細粒砂 ラミナ顕著</p> <p>20. 黄灰 2.5Y4/1 シルト 炭化物・植物遺体多く含む</p> <p>21. 黄灰 2.5Y4/1 シルト 炭化物・植物遺体ラミナ状に多くはいる</p> <p>22. 灰白 2.5Y7/1 粗粒砂～小礫 しまりよい ラミナみえず</p> <p>23. 褐灰 10YR4/1 極細粒砂～シルト 細かいラミナ顕著</p> <p>24. 褐灰 10YR4/1 シルト 粗粒砂～中粒砂多く混じる<br/>シルトブロックわずかに混じる</p> <p>25. 灰 5Y5/1 シルト～粘土 炭化物が薄くラミナ状に入ると</p> |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|



図98 流路 1 断面図

流路1 底の高さ (地点番号は平面図と対応)

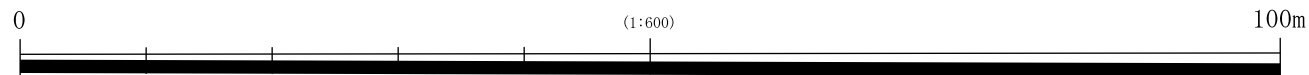
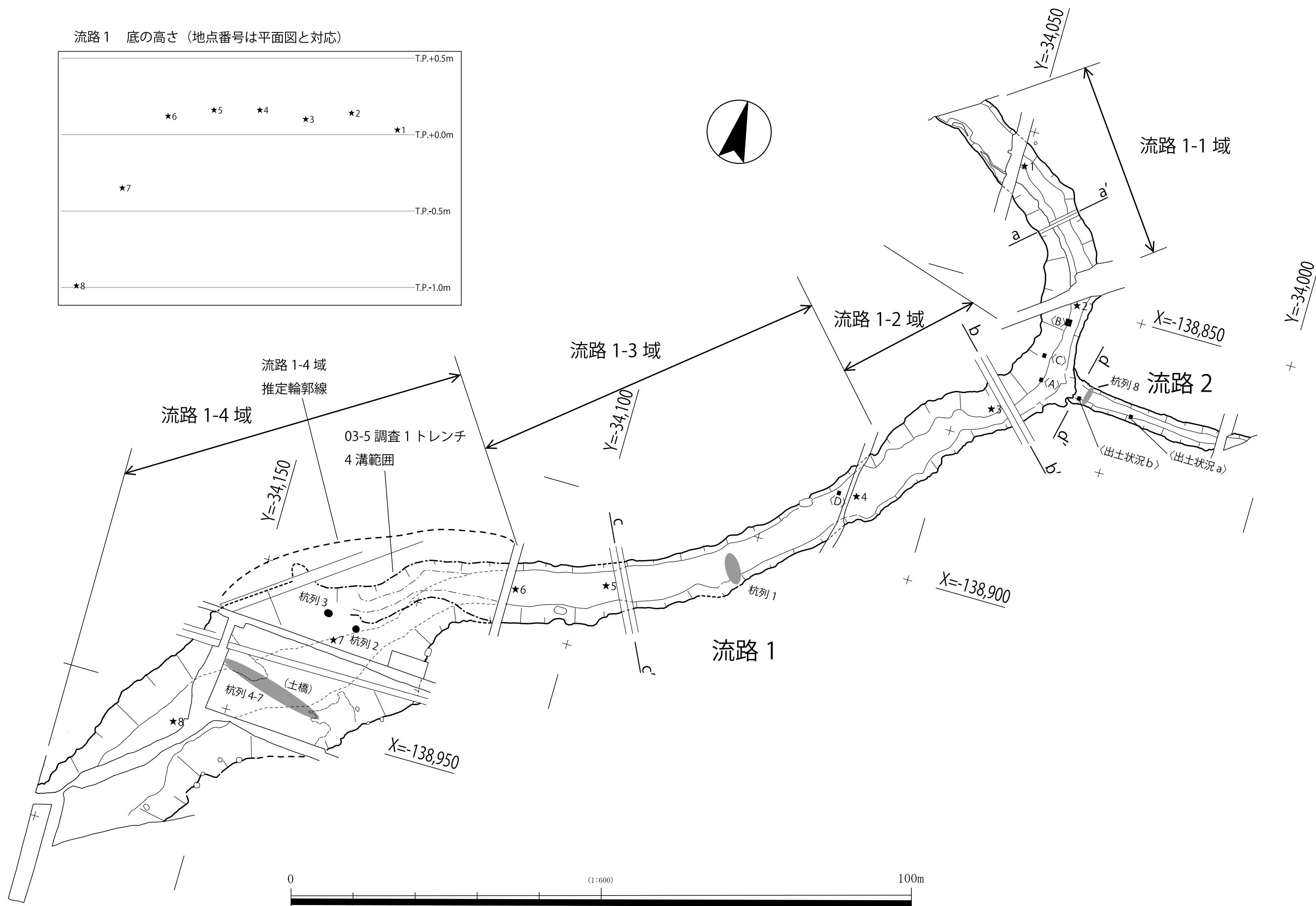
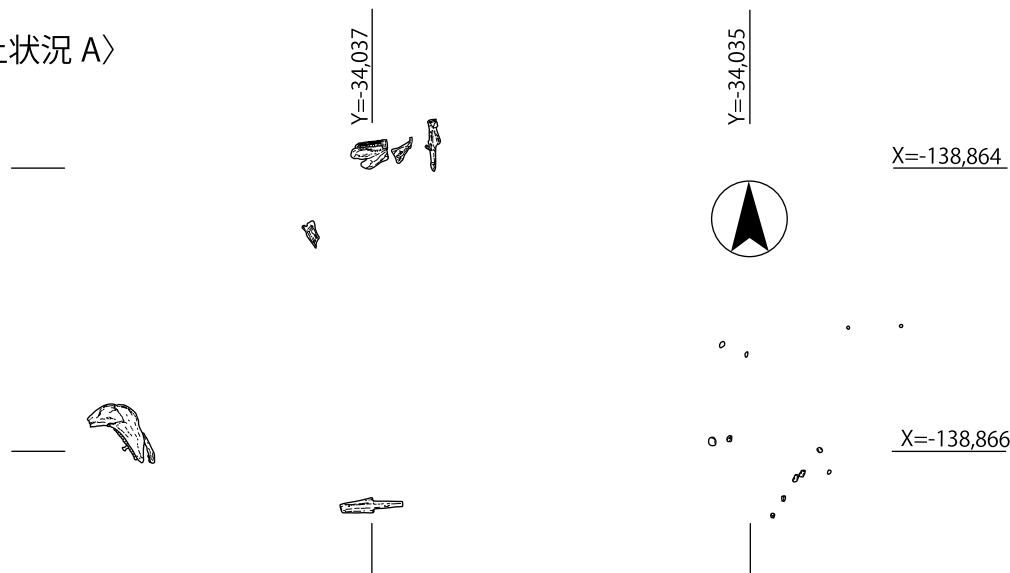
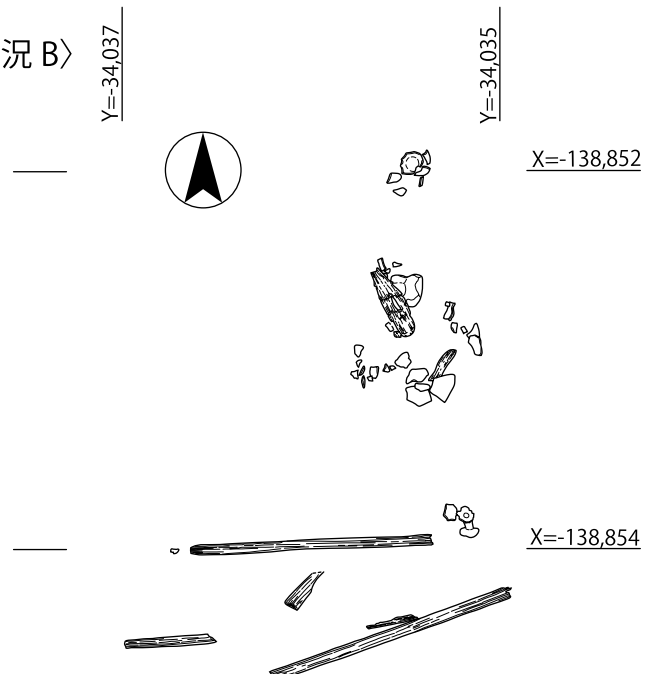


図99 流路1・流路2 平面図 (s=1/600)

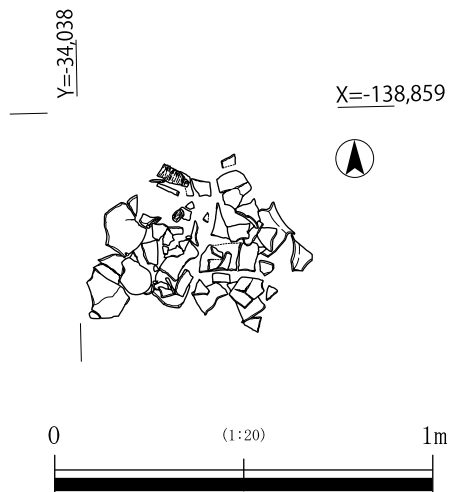
〈出土状況 A〉



〈出土状況 B〉



〈出土状況 C〉



〈出土状況 D〉

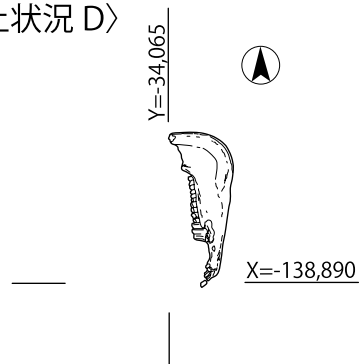


図100 流路1 遺物出土状況図



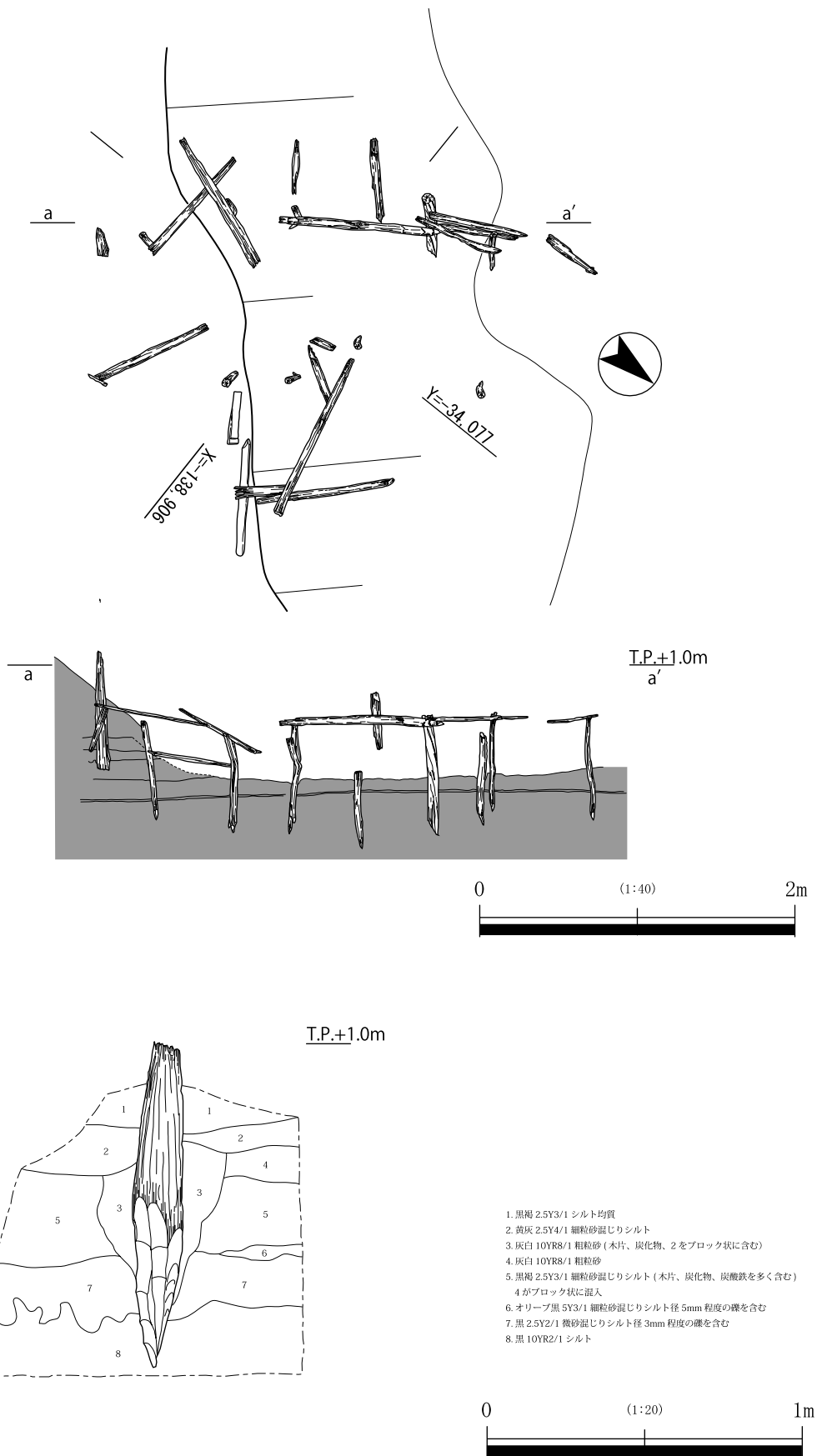


図101 流路1内杭列1・2 平・立面図

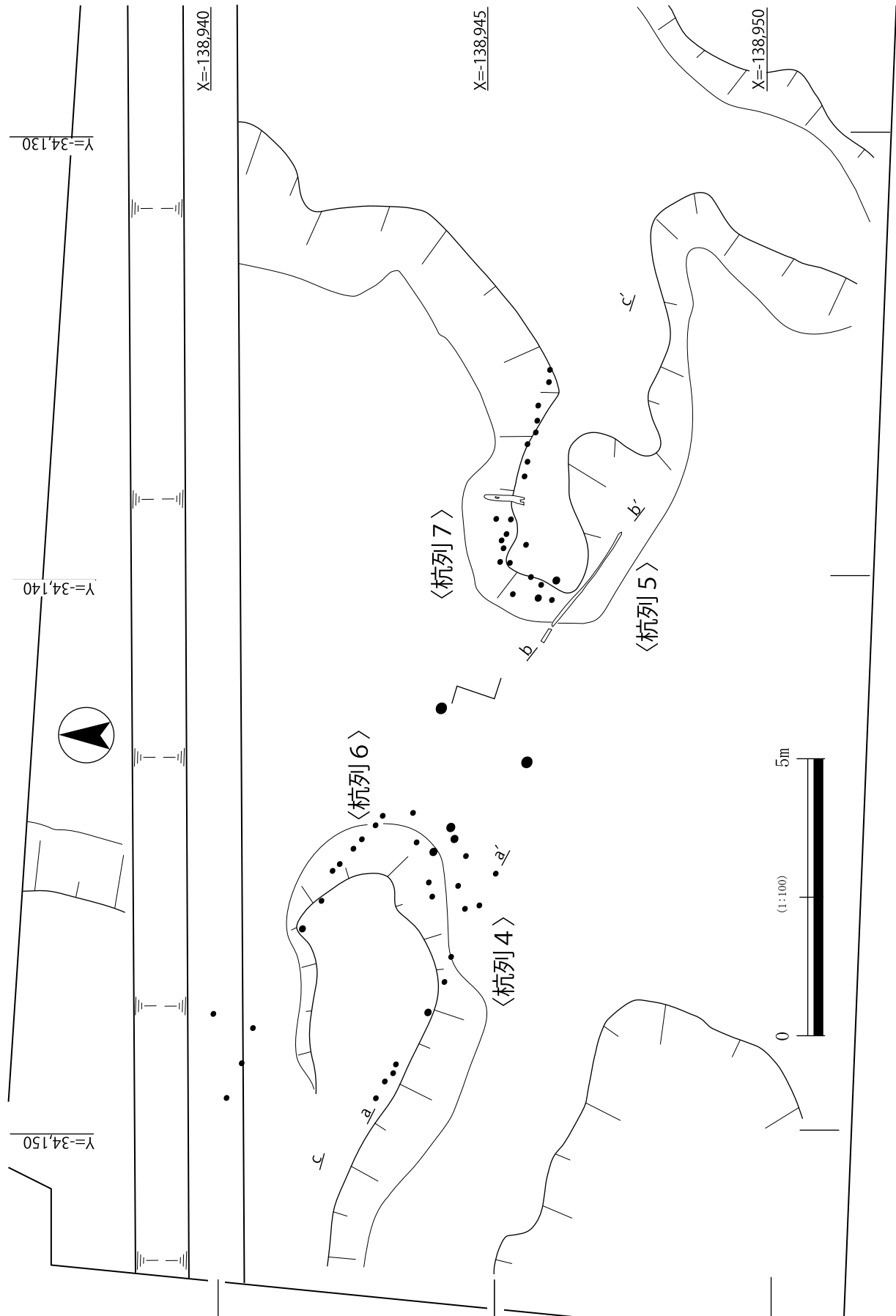
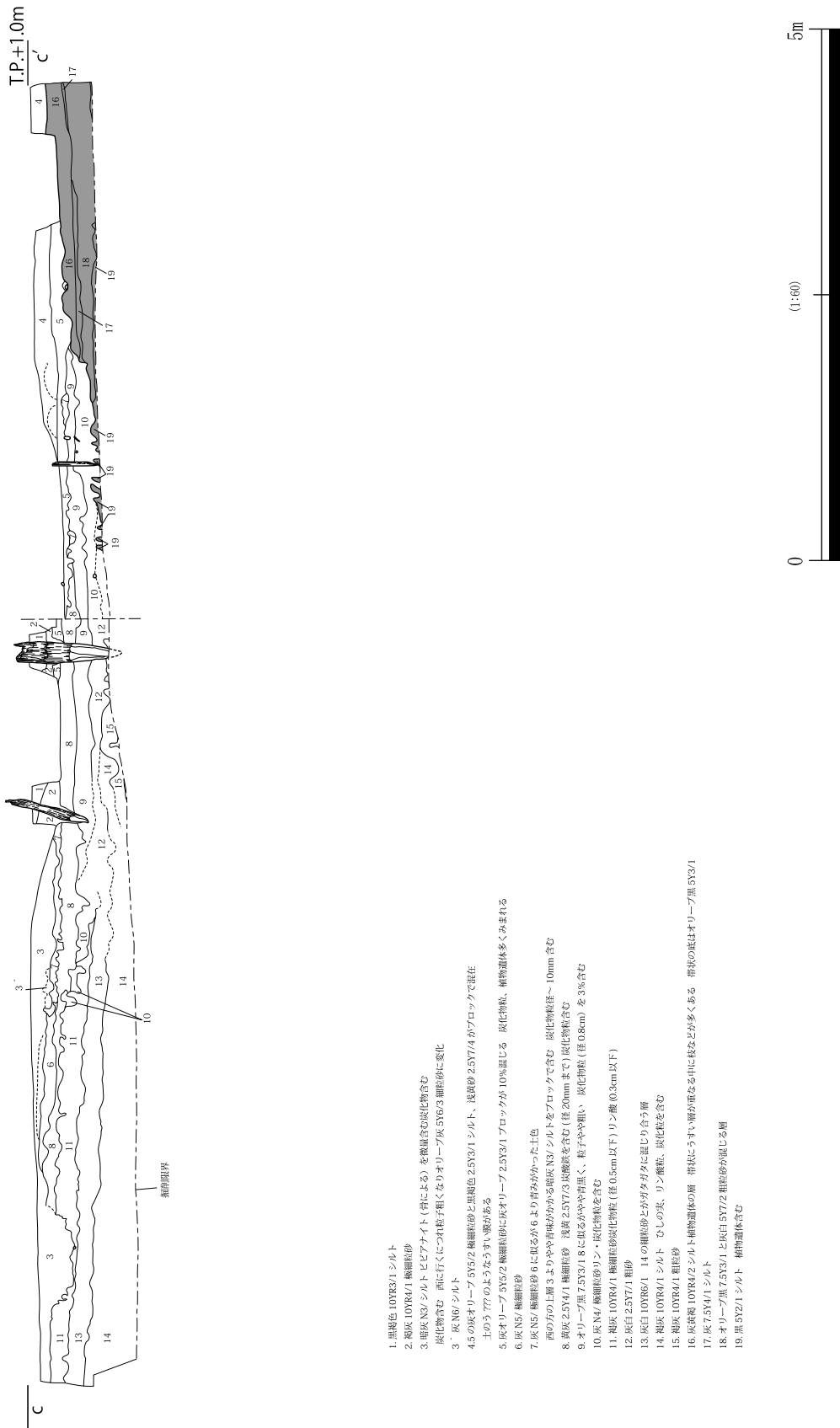


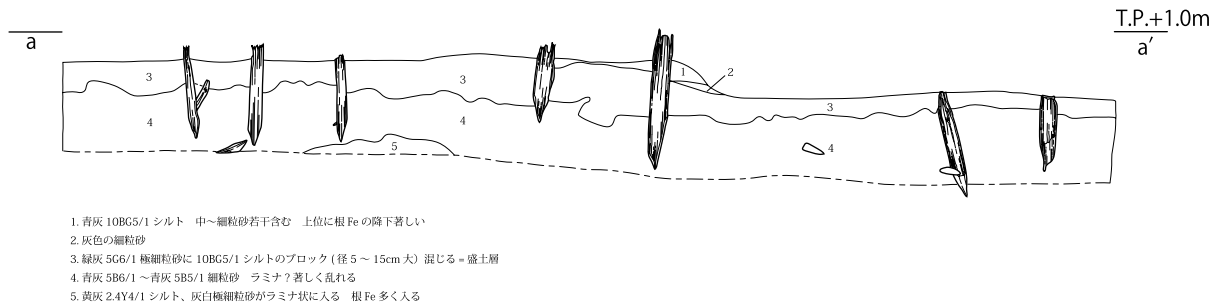
图102 流路1 杭列4~7 平面图



1. 黒褐色 10YR3/1 シルト
2. 灰灰 10YR4/1 極細砂
3. 暗灰 N3/ シルト ヒモアナイト (特による) を微量含む炭化物を含む炭化物を含む 西に行くにつれ粒子粗くなりオリーブ灰 S16/3 極細砂に変化
- 3' 灰 N6/ シルト
- 4.5 の灰オリーブ S15/2 極細砂と黒褐色 2.5Y3/1 シルト、浅黄砂 2.5Y7/4 がプロックで混在土のう 77% のまじり合い層がある
5. 灰オリーブ S15/2 極細砂に灰オリーブ 2.5Y3/1 プロックが 10% 混じる 炭化物、植物遺体多くみられる
6. 灰 N5/ 極細砂
7. 灰 N5/ 極細砂 6 に依るが 6 より厚みがあった土色
8. 西の方の上層 3 よりやや青味がかる暗灰 N3/ シルトをプロックで含む 炭化物層厚～10mm 含む
8. 原灰 2.5Y4/1 極細砂 浅黄 2.5Y7/3 炭化物を含む (径 20mm まで) 炭化物を含む
9. オリーブ黒 7.5Y3/1 8 に依るかやや青黒く、粒子や空堀い、炭化物 (径 0.8cm) を 3% 含む
10. 灰 N4/ 極細砂リン・炭化物を含む
11. 暗灰 10YR4/1 極細砂炭化物 (径 0.5cm 以下) リン酸 (0.3cm 以下)
12. 灰白 2.5Y7/1 粗砂
13. 灰白 10YR6/1 14 の細砂とかがたがたに混じり合う層
14. 暗灰 10YR4/1 シルト ひしの求、リン酸、炭化物を含む
15. 暗灰 10YR4/1 粗細砂
16. 灰黄 10YR4/2 シルト 植物遺体の層 帯状にうすい層が重なる中に較ぶる層 帯の底はオリーブ黒 5Y3/1
17. 灰 7.5Y4/1 シルト
18. オリーブ黒 7.5Y3/1 と灰白 5Y7/2 粗砂が混じる層
19. 黒 5Y2/1 シルト 植物遺体を含む

図103 杭列6・7 断・立面図

### 〈杭列4〉



### 〈杭列5〉

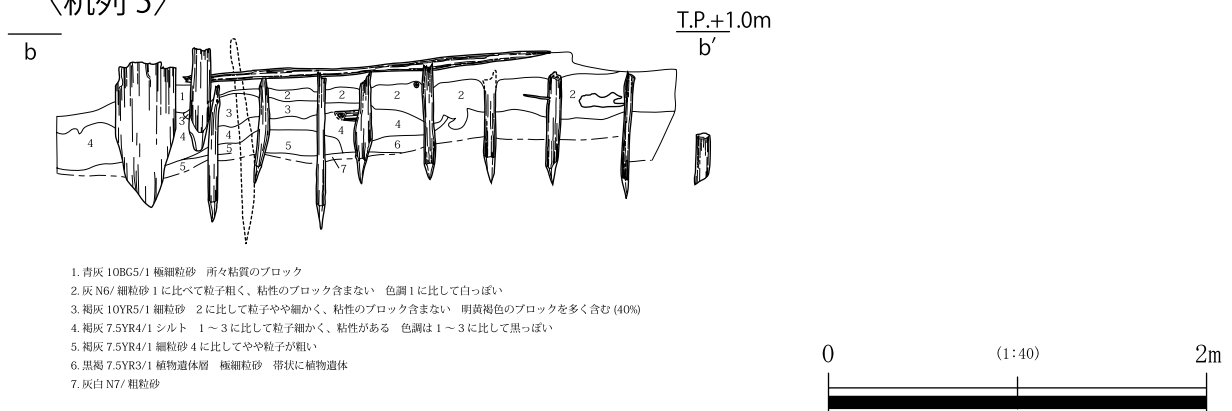


図104 杭列4・5 立・断面図

物掘削時の所見では、ほぼ水平方向に広がる分布を示すようである。このような状況から、流路の埋積の最終段階近くに、堆積物の上面に土馬を安置し、その周辺に滑石製白玉を散布するという行為があったことが推測される。なお、白玉の分布域については可能な範囲で土壌を採取し、土嚢袋およそ700袋に及ぶ試料の水洗を行った結果、滑石製白玉779点以上、管玉1点、有孔板2点、赤玉質流紋岩製白玉1点、ガラス製小玉1点などを検出した。ちなみに流路1-1域の流路内堆積物についても土壌洗浄を試みた。正確な試料数は記録していないものの、相当量の土壌を洗浄したが、滑石製白玉4点、ガラス製小玉1点の検出にとどまった。流路1-4域における土馬周辺の玉類の在り方と対照的である。

#### 流路内に設置された遺構 (図101～104)

流路1内には流路に伴う各種の構築物が確認された。特定の意図をもたずに流路内に投棄された木材の集積と考えられるものもあるが、杭列や土橋のようなものも営まれている。杭列1 (図101上段) は流路1-3域の中央付近、南岸に接して設置されたもので、流路の横断方向に岸から10本程度の縦杭を打設し、その上部に横木を渡すものである。縦杭のスパンは30～50cmであり、まばらな印象を受ける。本来、検出部分より北側に続いていたかどうかはわからないが、残存部分では岸から約3m程度を測る。このような構築物については堰の可能性が想起されるが、取水口がみられないことから流路からの取水を目的とするものとは考えられない。漁撈関連、あるいは流路1における船の使用を仮定すると、船の接舷にかかわる施設の可能性を想定しておく。杭列2 (図101下段) は流路1-4域の中央付近に打設されたもので、杭列としたが単独の杭である。流路の埋積がある程度進んだ段階に、堆積物の上面から打

設されている。使用されている材はヒノキで、残存長1m、最大径15cmを測る大型の杭である。柱などの転用材ではないかと考えられ、先端を加工し、杭として用いている。用途については推測の域を出るものではないが、流路1における船の使用を前提とすれば、船の係留用の杭の可能性も指摘できる。杭列3は杭列2の西に約5mはなれて設置されたもので、同様に、ある程度流路の埋積が進んだ段階で打ち込まれた、大型の杭2本と小型の杭3本で構成される。南北方向の列を意識して打設されているようであるが、機能については杭列1、2同様、明確にしがたい。

杭列4～7（土橋）は流路1～4域に位置する施設で、流路の東西両岸からそれぞれ延びる2列の杭列と、それを取り込む形で造成された盛土による遺構である（図102）。杭列のまともには厳密には把握しがたいところもあるが、盛土の南側の列のうち、西岸に取り付くものを杭列4、東岸に取り付くものを杭列5とし、盛土北側の列についても同様に杭列6、杭列7とした。いずれの杭も流路底部にある程度の堆積が進んだ上から打設されているが、後述する盛土との先後関係は明瞭ではない。想定する杭列の機能からは、杭列を先行して打設し、それを取り込む形で盛土を施したと推測しておく。杭列4、5は杭のスパンを比較的広く取り、中型の杭材を用いており、杭列5では縦杭の上に横木を渡している。杭列6、7は比較的小型の杭材を間隔おらずに打設している。さらに両杭列の間をピークに杭列を取り込む形で盛土を施し、流路両岸から延びる土橋状の構造物を造成している。盛土を構成する土壌はブロック土を含むものがあり、さらにわずかな痕跡ではあったが、土嚢状の単位を想起させる有機質の薄い膜のようなものも認められた。盛土は流路堆積土との区別が難しい土質であったため、明瞭に把握できたものではないが、流路中央付近には盛土の及ばない部分があり、流路を完全に分断する形ではなかったようである。その盛土の間隙部、杭列中央部には大型の杭が単独で打設されているが、あるいは橋が架構されていたのかもしれない。杭列に用いられる材は小型のものは杭材、中型、大型のものには転用材が含まれていると考えられる。唯一図示した杭列5の流路中央よりの材（図205-1610）は、残存長80cm、幅33cm、厚さ7.6cmを測る大型の材で、湾曲する形状から船材の可能性を想定しておきたい。樹種はスギである。これ以外の杭材については杭列4から10点、杭列5から9点、杭列6から16点、杭列7から18点、杭列間の大型の材から3点の計66点について樹種同定を行った。詳細については別掲（第5章第2節）するが、ツブラジイやスダジイなどの用材が特徴的である。

#### 流路1出土遺物

流路1からの出土遺物は直上の層出土遺物も含め、図示したものに限っても1254点を数える膨大なもので、それらを一括して記載することは難しい。したがって先に示した便宜的な流路の区分にしたがって、分割して記載することとしたい。また流路1の区間的な特徴や遺物の出土状況についても、適宜補足する。

#### 流路1-1域出土遺物（図105～図114）

流路1-1域は03-5-7トレンチ、06-2-4トレンチの範囲で検出した部分で、おおむね検出長30mを測る。流路1の検出部分では最も規模が小さい上流側ということになる。図版36下段に出土状況の写真を示したが、底付近に大型の木材などとともに土器類が散在する状況が見てとれた。相対的に遺物の出土量は少ないといえる。図化し得た遺物については土器類、木製品類、石器、ガラス製小玉を掲出したが、写真のみ掲載したのとして滑石製白玉4点（図版264-2117～2120）、樹種同定のみ行った木材6点がある。木材の樹種については別掲する（表1）。また動物遺存体7点が出土している（一覧表参照）。

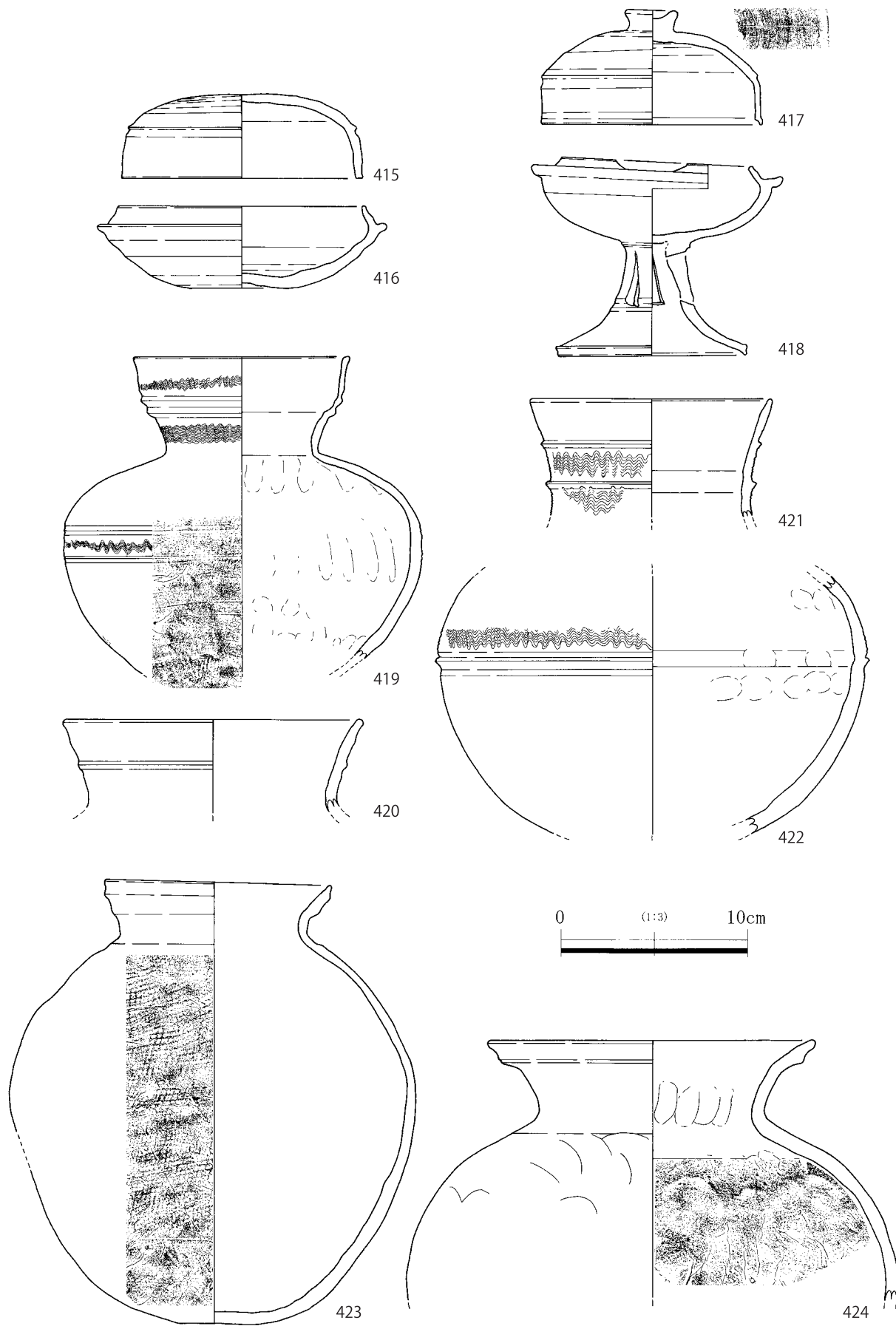


图105 流路1-1域 出土遺物 1



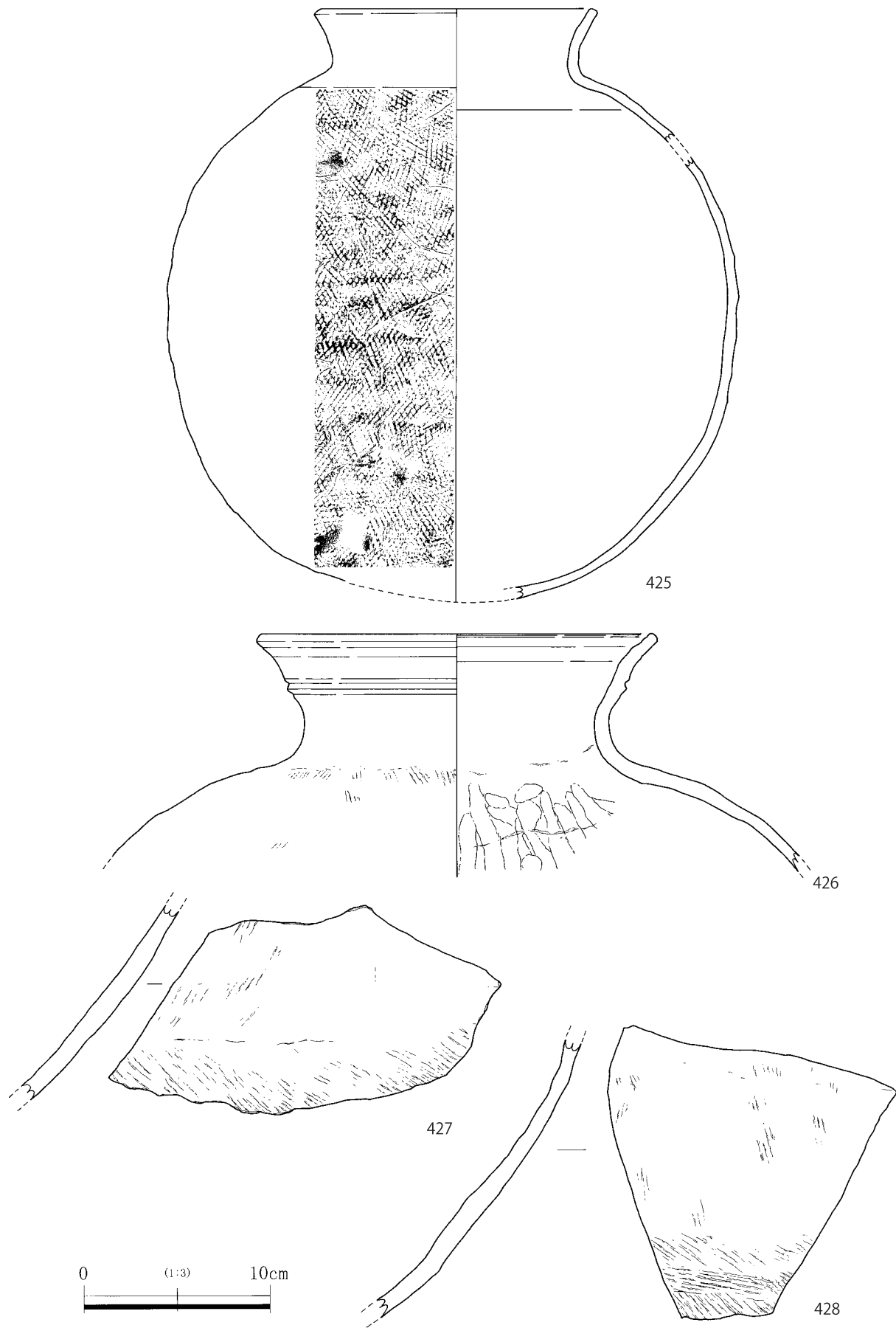


图106 流路1-1域 出土遺物 2

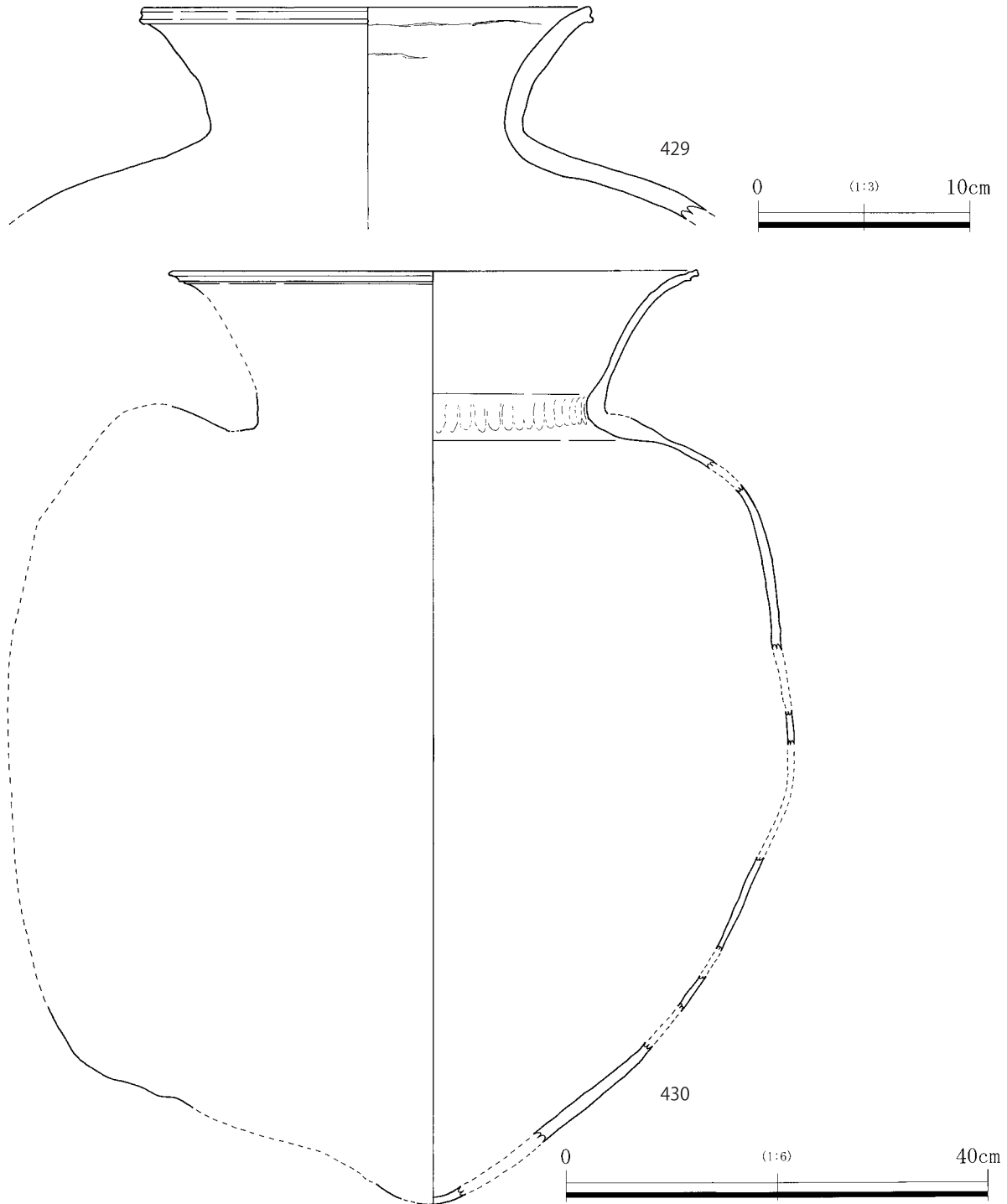


図107 流路1-1域 出土遺物 3

図105～107には須恵器を示す。415は須恵器坏蓋、416は坏身、417はヘラ記号のみられる高坏蓋であるが、416は流路出土遺物の中では相対的に新しい時期に帰属する。418の須恵器有蓋高坏は口縁の一部を欠くものの、遺存状態のよい個体であり、土釜状の坏部にラッパ上に広がる脚をもつ。坏部と脚部の接合部分に1条、脚の中位に2条の突帯を配し、その間に三角形透かしを3方向に配置する。坏部はともかく脚部に伽耶地域の土器の形態を強く残すもので、流路1出土遺物の中でも最古相を呈するものである。419～425は壺類で、421と422は同一個体の可能性が高い。423は外面に格子タタキをのこすもので、土師器的な口縁の形態からみても韓式系土器を須恵器窯において焼成したものと考えられる。424は内面

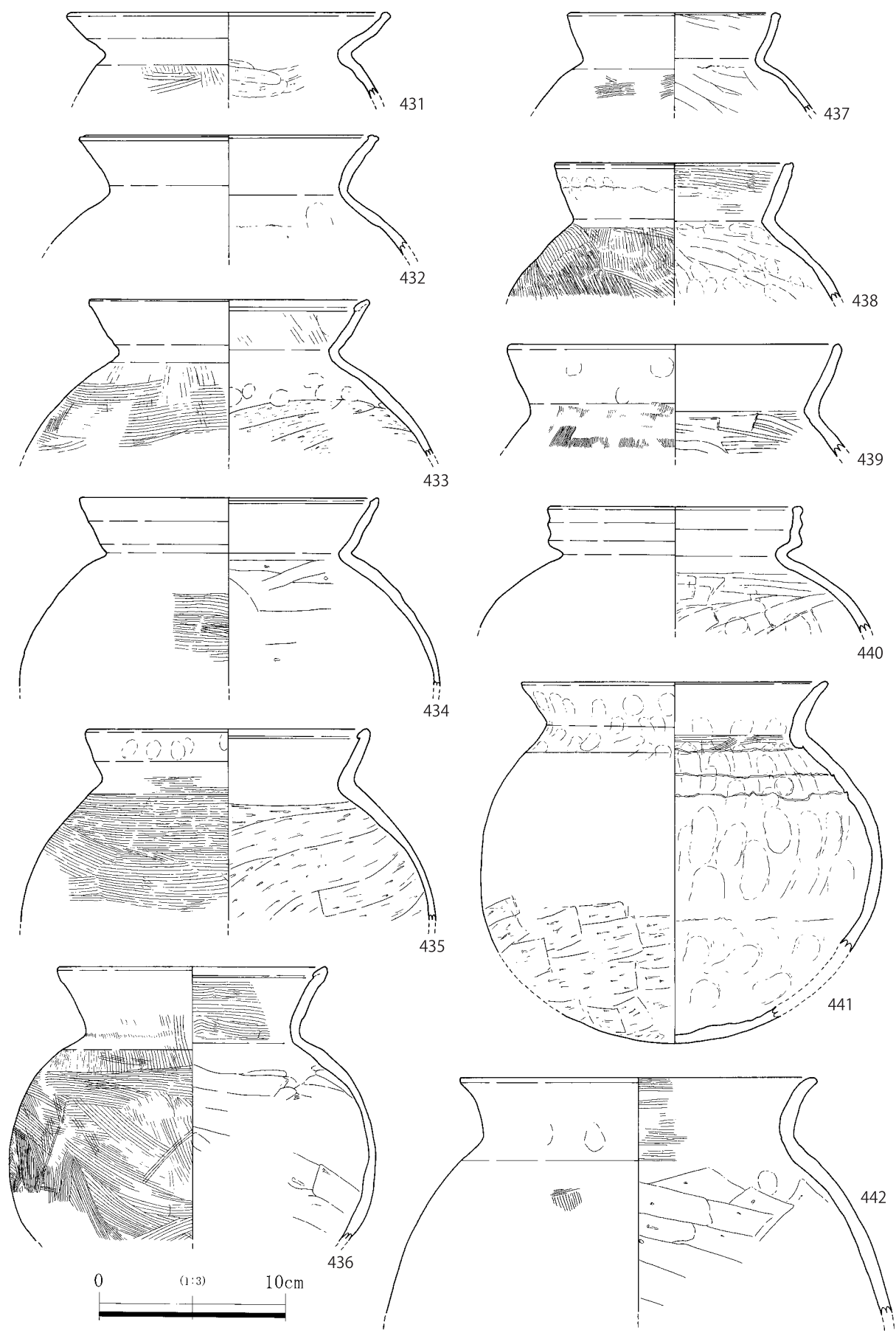


图108 流路1-1域 出土遺物 4

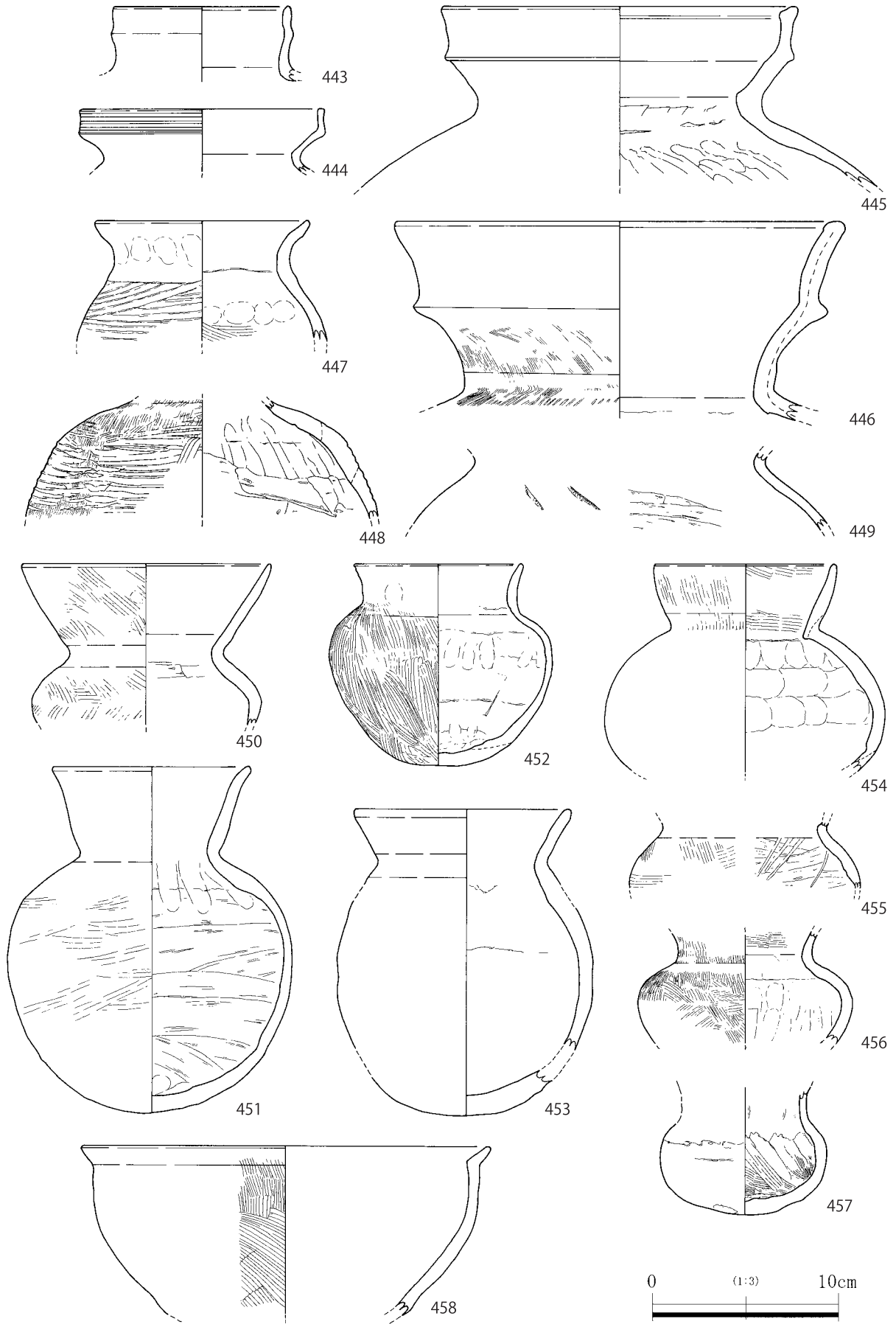


图109 流路1-1域 出土遺物 5

に無紋当て具の痕跡を良く残している。425は球形の体部外面に格子タタキを施すもので、陶質土器に近い形態を残す須恵器であろう。426～430は甕で、426～428は同一個体である。体部外面には平行タタキの後、スリケシを施している。褐灰～浅黄色を呈し、焼成はあまい。430は復元口径50cm、復元高90cmを測る大甕で、大きく開く口縁端部には面をもち、直下に突帯を1条配する。体部は焼けひずみの大きいもので、外面の最終調整にスリケシを施すが、部分的に格子タタキの痕跡が認められる。体部は薄く、焼成は堅緻である。底付近の外面には焼き台に使用されたと考えられる別固体の体部片が溶着する。

図108～110には土師器を配した。431～442は甕類である。口縁部分の残るものを中心に図化可能なものを抽出したが、図示し得たものも多くは残存率の低い個体である。口縁部形態では端部内面を肥厚させるもの(431～436)、内湾気味に延びた口縁端部に面をもつもの(437～439)、複合口縁風のもの(440)、外反するもの(441・442)がある。内面調整にはケズリのみられるものが多いが、441は内面をユビオサエで調整し、体部外面下半にケズリ調整を施しており、体部の形態とも特徴的である。442は長胴甕と考えられるが、外面はハケ、内面はケズリ調整を施す。おおむね、布留型甕の特徴を残す個体と、韓式系土器の影響を受けたと考えられる個体が混在するようである。448～457は壺類であるが、器種を分類しがたい個体も含んでいる。中型の個体では口縁形態には多様なものがあり、444、446などは他地域の土器の影響を想起させる。447、448は体部外面に弥生土器第V様式に特徴的な粗いタタキを残す個体である。弥生土器であるのか土師器であるのかも判然としないが、器種についても特定しがたい。449は肩部外面に刺突を巡らすもので、古式土師器に散見される装飾かと考えられる。残存率が極めて低く、復元径も定かではない。450は口縁部の長い小型壺、452は口縁部の短い小型壺である。451は長頸壺につながる器形かと考える。453は全体的に厚ぼったい作りで、内外面の調整も粗い。図128-739に示した製塩土器に近いものかもしれない。458は小型の鉢である。459～471は高坏で、坏部の形状が碗形を呈するもの(459～466)、坏部の口縁部と底部の境に稜をもつもの(467～471)に大別できる。細部の形状や内外面の調整は多様で、脚部の残らない個体も多いことから、細別区分は難しい。個体としての残存率は低いが、破片としての遺存状況は良好なものが多く、坏部と脚部の接合方法を確認することのできるものも多い。462は脚接合部の坏部外面に刺突の残るものである。

図111-472～483は韓式系土器である。472は中型の甕で、外反する口縁端部には面をもち、体部外面には格子タタキ、内面にはナデを施し、底付近の内面は丁寧なスリケシを施している。473～475は平底鉢であるが、473は逆砲弾形の形態、厚く径の小さい底、外面の粗いハケメ調整、ゆるやかに外反する口縁部など、韓式系土器の特徴をそれほど残さない個体である。474は残存率の低い個体であるが、外面の格子タタキ、底付近のケズリ、ハケ、口縁部のナデ調整などの特徴をよく残し、底外面にはいわゆるゲタの痕跡を残す。底部拓影は図291に別掲する。476～483は韓式系土器の特徴を残す細片である。476は外面に縄蓆紋と沈線をナデに置き換えた痕跡の残るもので、体部の湾曲から甑などの把手付近の部位と考えられる。477は平行タタキに沈線を施す個体、479～483は格子タタキを施すもので、479は外面にコゲの付着が認められる。いずれも酸化炎焼成されたものであるが、480や483は非常に硬質に焼成されており、登り窯で焼成された可能性がある。

図111-484はガラス製の小玉で、径4～4.5mm、厚さ2.5mmを測る。色調は薄い青色を呈する。流路内堆積物の土壌洗浄により検出した固体であり、同じ作業で出土したものに、滑石製白玉4点(図版264-2117～2120)がある。2117～2119は外形径が近似値であるが、孔径は2118～2120が2mmで同じである。2117の孔径は1.5mmと、白玉全体の中でも最も小さい数値を示す。485は砂岩製の敲石で、全体に平滑な

表面をもち、側面に平坦面や敲打痕が認められる。重量は336.5gを測る。

図112～114には木製品を示した。流路1-1域からは用途のわからない材や、自然木などとともに木製品が出土している。製品として認識が可能なものが特定の出土状況を示すのではなく、他の材などと同じ状況で出土していることから、遺存状態は個体ごとに異なるものの、破損品ないしは余剰の部位などが投棄されたものと考えられる。

486は耳杯である。残存長13.2cm、残存幅6.9cm、残存高4.7cmを測るが、復元すると長さ16cm、幅11cm

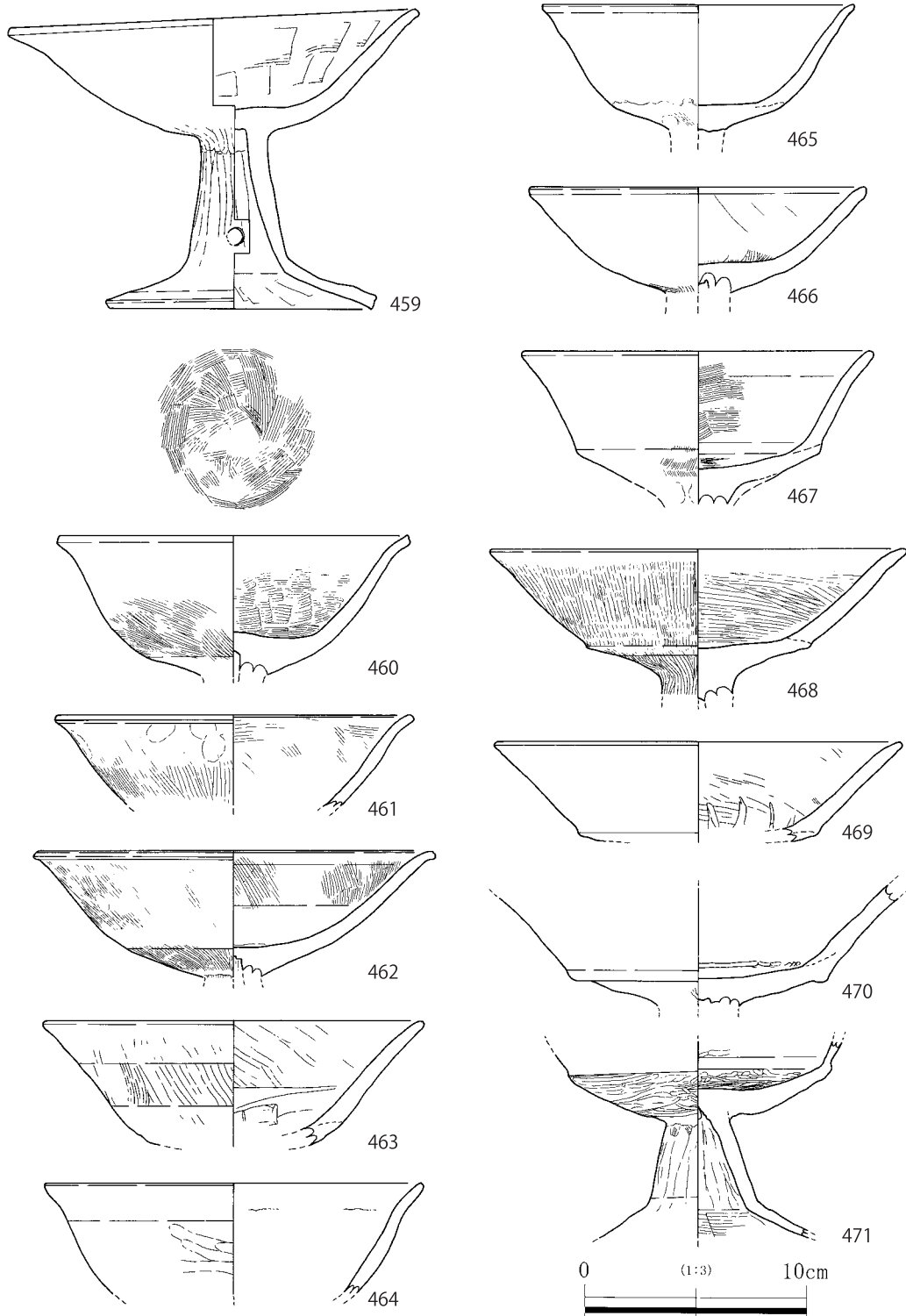


図110 流路1-1域 出土遺物 6



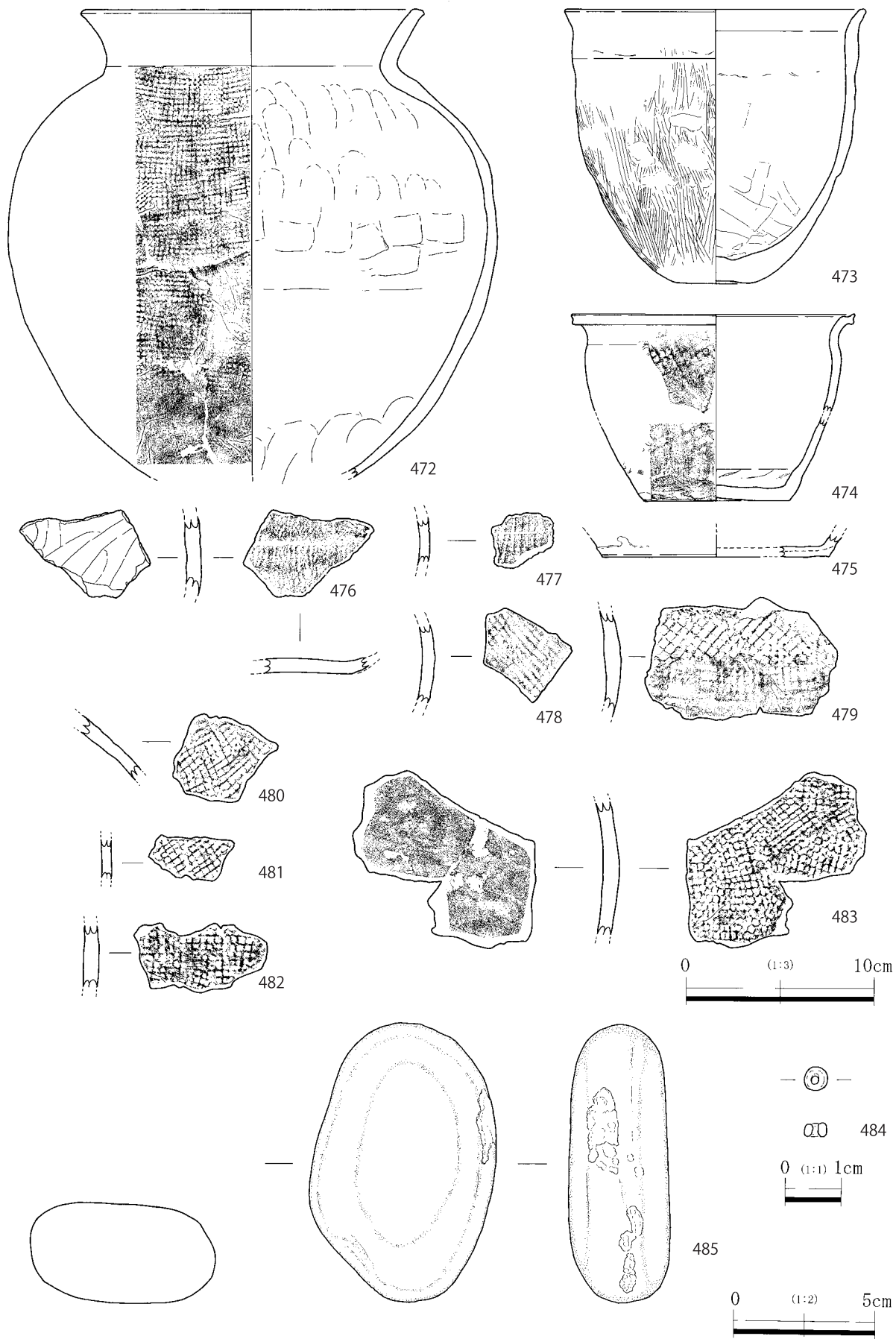


图111 流路1-1域 出土遺物 7

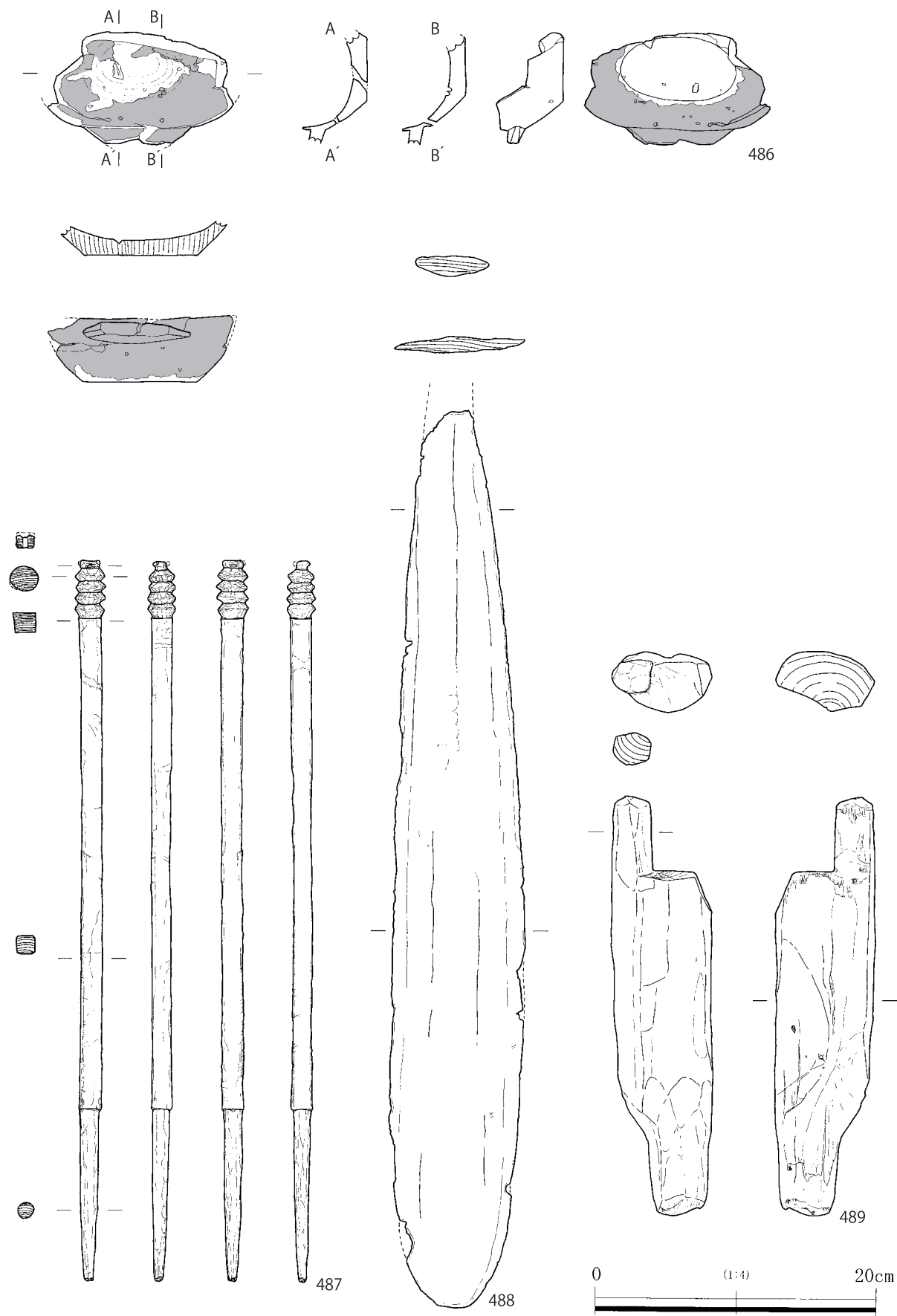


图112 流路1-1域 出土遺物 8

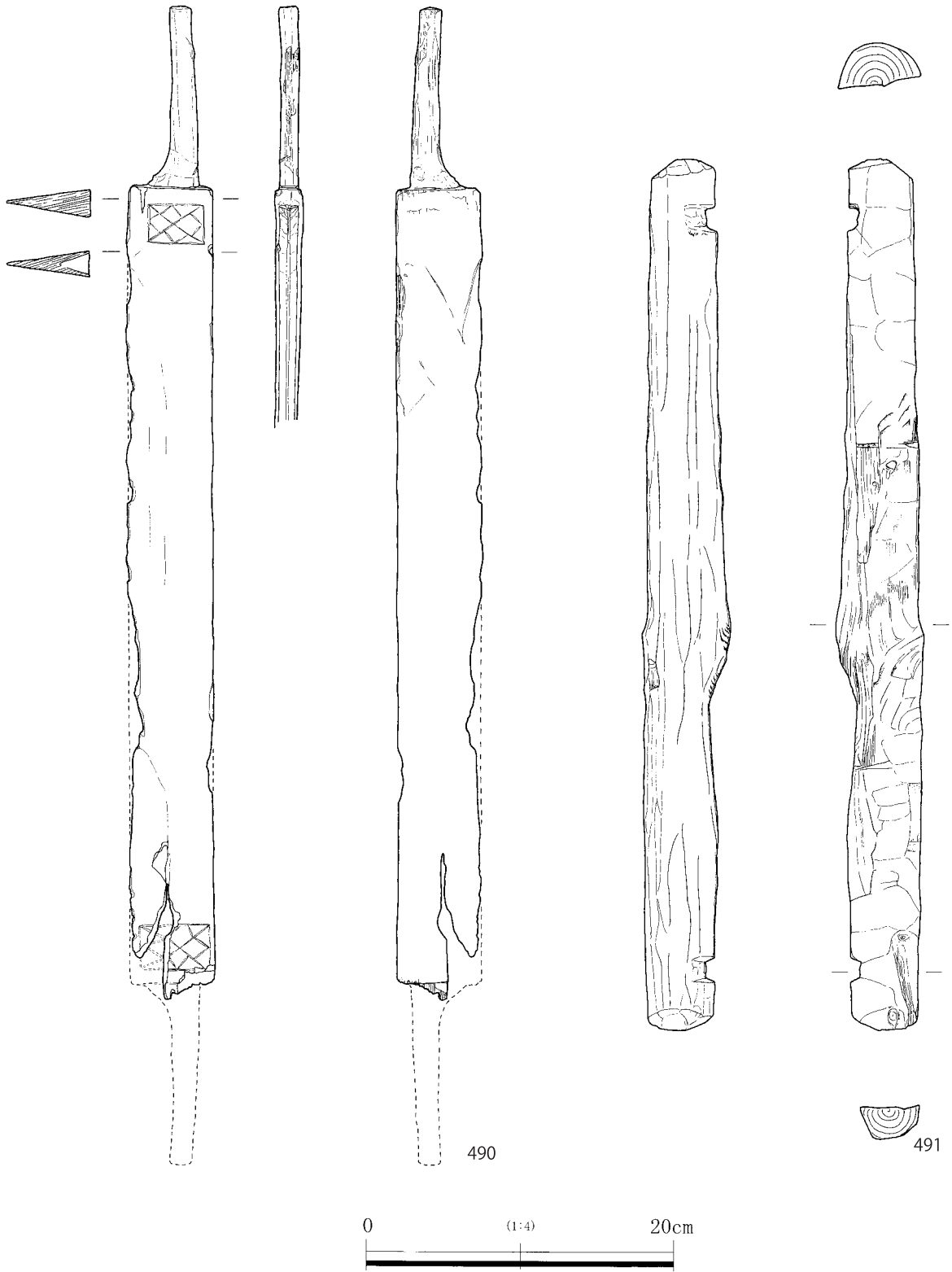


图113 流路1-1域 出土遺物 9

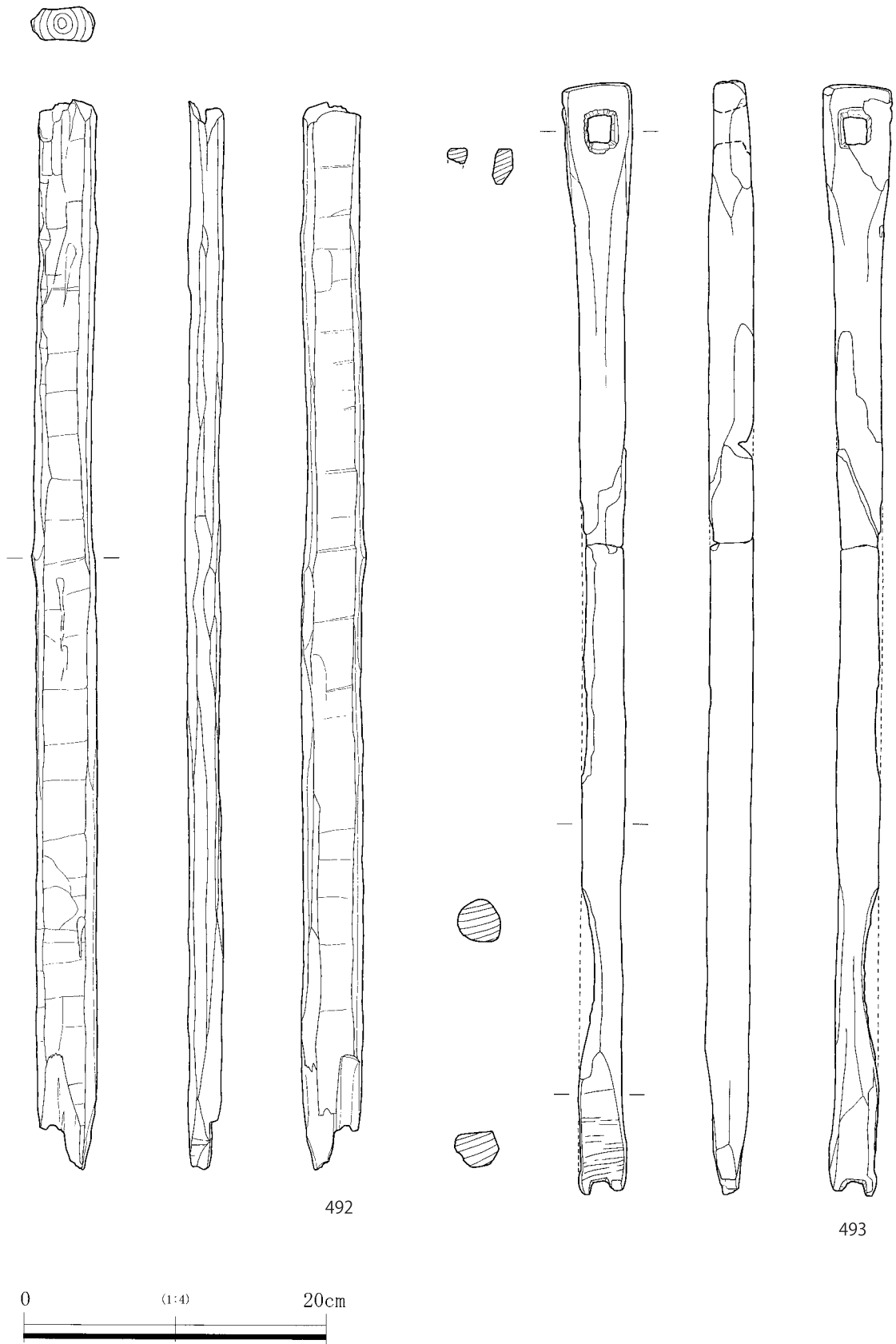


图114 流路1-1域 出土遺物10

程度の法量を有するとおもわれる。欠損する部分が多いが、楕円形の坏部長辺に台形の耳のついた平面形をもち、側面観は縦横とも逆台形を呈する。サクラ属の一木の刳物であり、底は平坦で厚く、全体的に表面は平滑に仕上げられている。数ヶ所に孔が認められるが、植物の侵食などによるものと考えられ、当初からのものではない。底部を除く内外面に黒色塗布物（黒漆？）の残存がみられる箇所があり、本来は黒色を呈するものであったと考えられる。かかる耳杯については類例を知らないが、形態は異なるものの初期須恵器にみられる器形であり、韓国風納土城からの出土品などの存在を考慮しても、古墳時代中期段階の百済地域とかかわりのある容器と推測しておきたい。

487は仮に儀仗と呼称するが、具体的な用途のわからない棒状の木製品である。断面正方形の棒部分を主体にし、一方の端を断面円形に細く削り出して整え、反対側の端には算盤玉形の造形を4段重ね、さらに先端には貫通孔のある頭部を削りだす。法量は方形の棒部分が長さ35cm、厚さ、幅ともは1.5cm程度、断面円形の削りだし部分は長さ12cm、先端付近の径0.6cm程度を測る。装飾豊かに加工された部分は長さ4.0cm、算盤玉部分は径2cm程度を測り、全体の長さは51cm強となる。頭部の貫通孔部分に紐擦れとおぼしき痕跡がみとめられ、方形棒状部の端部付近にも細かな傷が確認できる。これらをふまえても具体的な用途は不明であるが、円形棒状に加工した部分を別の部材に差し込むことで、立飾りの用いられた可能性を指摘しておきたい。用材はヒノキである。

488は船の櫂と考えられるもので、残存長63.9cm、最大幅9.4cmを測る。全体に薄く、レンズ状の断面形態をもつが、基部に近い部分ではわずかに稜を作り出している。用材はコナラ属アカガシ亜属で、硬い樹種を用いている。

489も用途不明の木製品で、片方の端部に軸を削りだし、他の部分を平滑に仕上げている。扉などの大型の部材の軸部分を残して再加工されたものかとも考えたが、木取りからはその可能性は低いと考えられる。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

490は機織具の構成材である組合せ式経送具の一部と考えられる部材である（東村2008）。遺存状態もさることながら残存率が低く、全形は復元によらざるを得ないが、復元長75cmの部材で、幅5.5cm、厚さ1.8cmを測る。断面形を三角形に作り出した本体部分の長さは52cmを測り、その背面にやはり断面三角形の溝を掘り、組み合わせ部としている。本体からは両側に断面円形の把手状の突起がのびるが、残存する部分では長さ12cmを測る。本体部の両端付近に方形の紋様枠を配し、その内部は直線を組み合わせた紋様でうめられる。樹種はサカキである。

491は用途不明の材である。半裁した棒状を呈し、表面は非常に円滑に整えられているものの、中央付近に材の節に起因する段差があり、いささか不整形な形状を示す。両端部付近に幅1cm弱、深さ0.5cm程度の切込みを同じ方向に配置する、さらに内側寄りに傷のような痕跡が対称的に認められる。切込み間の距離は約50cm、傷間の距離は約21cmを測り、50cmという数値は490の本体部分の法量に近い。断定はできないが、経（布）巻具など、紡織に関する部材の可能性を指摘しておきたい。樹種はマキ属である。

492は断面長方形の棒材で、用途は不明である。幅4cm、厚さ2cm、残存長70cm程度を測り、表面には工具による調整痕跡をよく残すが、平滑である。両端を欠損する。樹種はマキ属である。

493は用途不明の棒状の材である。中央部分の断面系はほぼ円形を呈するが、両端部は平坦に加工し、方形の孔を穿つ。一方の端部は欠損するが、残存部から推測し、対称形をもつものと推測する。残存長73.7cmを測り、穿孔部の芯々距離は約70cmとなる。穿孔部は一辺2cm程度の方形であり、別の材との組合せを想起させる。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。なお図206-1615については別記する。

### 流路1 - 2域出土遺物（図115～図136）

流路1 - 2域は03-5-4トレンチの範囲で検出した部分で、検出長はおおむね40mを測る。先述のように、流路1については一旦、埋没した後の再掘削が認められるが、流路1 - 4域では平面での検出段階に流路1の重なりが認められた。また、東側から流走する流路2を切る関係にあるが、流路1の再掘削時の肩が流路2を切っており、流路1の当初段階に流路1と流路2が連結していた可能性が高い。遺物の出土状況は、図化したものを図100に示したほか、図版39に写真を掲出した。図、写真による記録は底付近のものが主となるが、堆積物の中位、上位からも遺物の出土をみる。土器類のみならず、木製品、木材、獣骨など錯綜して分布しており、何らかの目的をもった配置は見出せない。また完形に復元できる資料もないことから、破損品などの投棄という状況を想定しておきたい。図化し得た遺物については土器類、木製品類、石器、鉄器を掲出し、石製遺物4点は写真のみ掲載した。さらに動物遺存体16点、樹種同定のみ行った木材23点がある。動物遺存体の同定結果については巻末一覧表に、報告書に掲載していない木材の樹種については第5章第2節、表1に掲載する。なお堆積物の洗浄は行っていないため、微細遺物の有無については不明である。

流路1では2段階に別けられる流路内堆積物を分離して掘削したが、流路1 - 2域ではそれぞれに一定量の遺物があったことから、土器については分離して図示することとした。図115～119に最終埋没時における堆積物からの出土遺物を、図120～130に当初の埋没時における堆積物からの出土遺物を配した。遺物の量は当初の埋没に伴う堆積層出土のものが多い。

図115 - 494～505には須恵器を示す。494～497は須恵器坏蓋、498は高坏蓋、499は坏身、500は有蓋高坏、501は無蓋高坏である。494は時期的には6世紀後半のものと考えられ、流路1の最終埋没時期を示す可能性がある。逆に497や498は比較的古相を呈するもので、初期須恵器の範疇に含まれるかと考えられる。502～505は壺類で、504は平底の小さい体部から、複合口縁状に上方へのびる口縁部をもつ。

図115 - 506～図116 - 527には土師器の甕類を示す。法量、口縁形状とも多様である。506は大径の口縁部で、頸部内面に強い稜が削りだされる。509は体部内面にヘラケズリを施すが、器壁はそれほど薄くなっていない。512～516は布留型甕の口縁形状をもつものである。512、513、516は端部を折り曲げて内面を肥厚させるが、514は口縁端部上面に面をもたせる形で内面に肥厚させ、515はわずかに内面に肥厚する程度である。517、518は「く」の字に外反する口縁部をもつもので、518は端部を欠くが、517は端部をやや上方へつまみあげるようである。520は小ぶりの体部に比して、大型の口縁部をもつ個体で、頸～肩部分が分厚く、不整合な印象を受ける。524は逆に口縁部が体部に比して小さめであり、ヘラケズリを施しているにもかかわらず、分厚い体部を呈する。胎土の様相も他の土器とは異質である。525は分厚い口縁端部をもつものであり、甕かどうかは判然としない。526は複合口縁をもち、全体に薄いつくりである。527は小型の甕であるが、頸部のくびれはみられず、内外面をハケで調整する。

図117 - 528～538は土師器壺類を示す。528、529は近い法量をもつ長頸壺である。口頸部外面には縦方向の細かいミガキを施し、体部外面には横方向のミガキを施す。胎土、焼成も類似する。531～538は小型の壺で、口縁と体部のバランスは多様である。531は体部上半の内面にヘラケズリを施す点で、特徴的である。537、538は厚い体部を呈するもので、手づくねに近いものかもしれない。特に538は指頭の圧痕を多くのこし、底はやや突出気味の平底を呈する。539は小型の長頸壺で、薄い仕上がりであるが、焼成後穿孔が認められる。540、541は小型の鉢である。542は復元径から極小型の壺かと考えられるが、口縁部の形態は541に類似する。



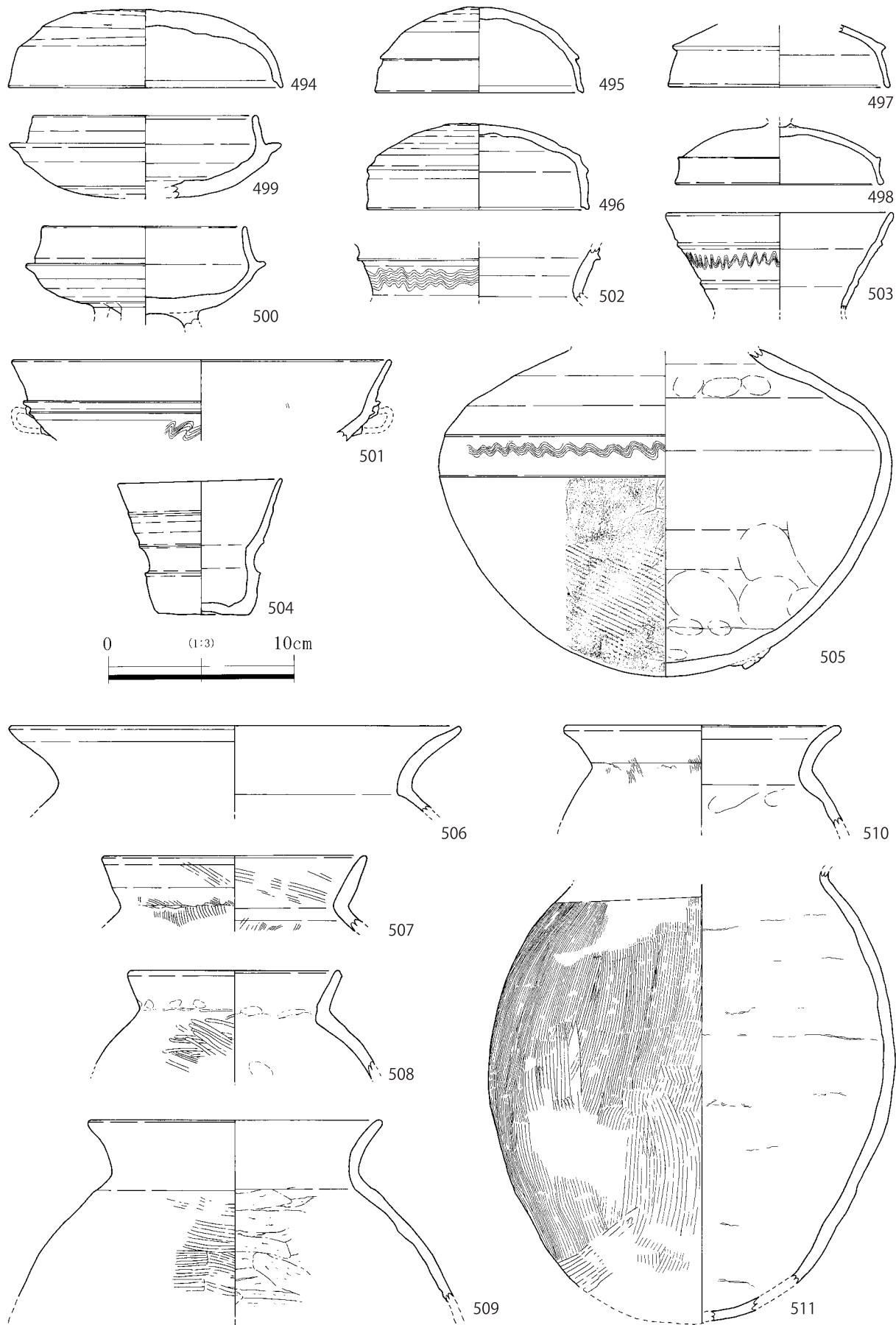


图115 流路1-2域 出土遺物 1

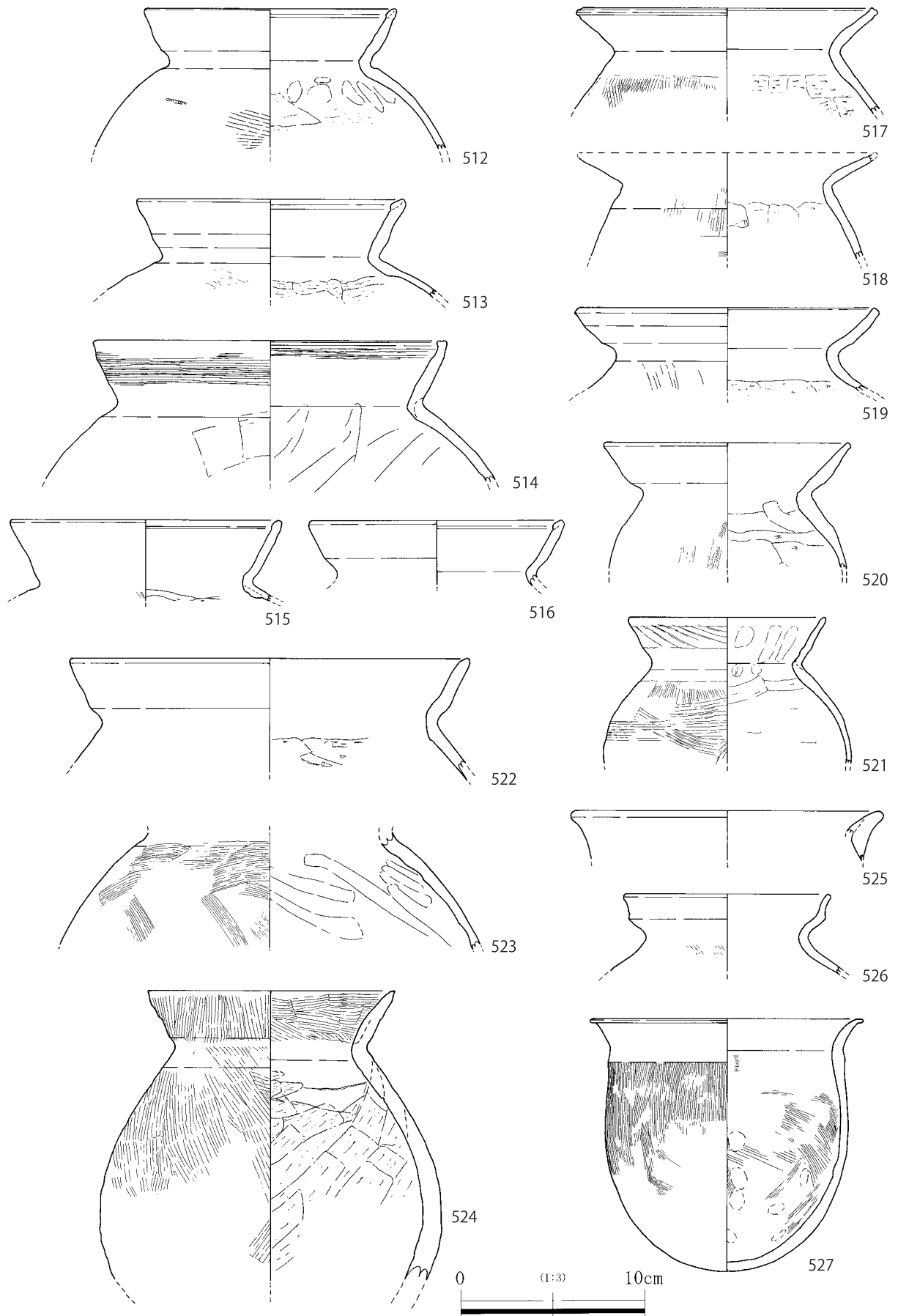


图116 流路1-2域 出土遺物 2

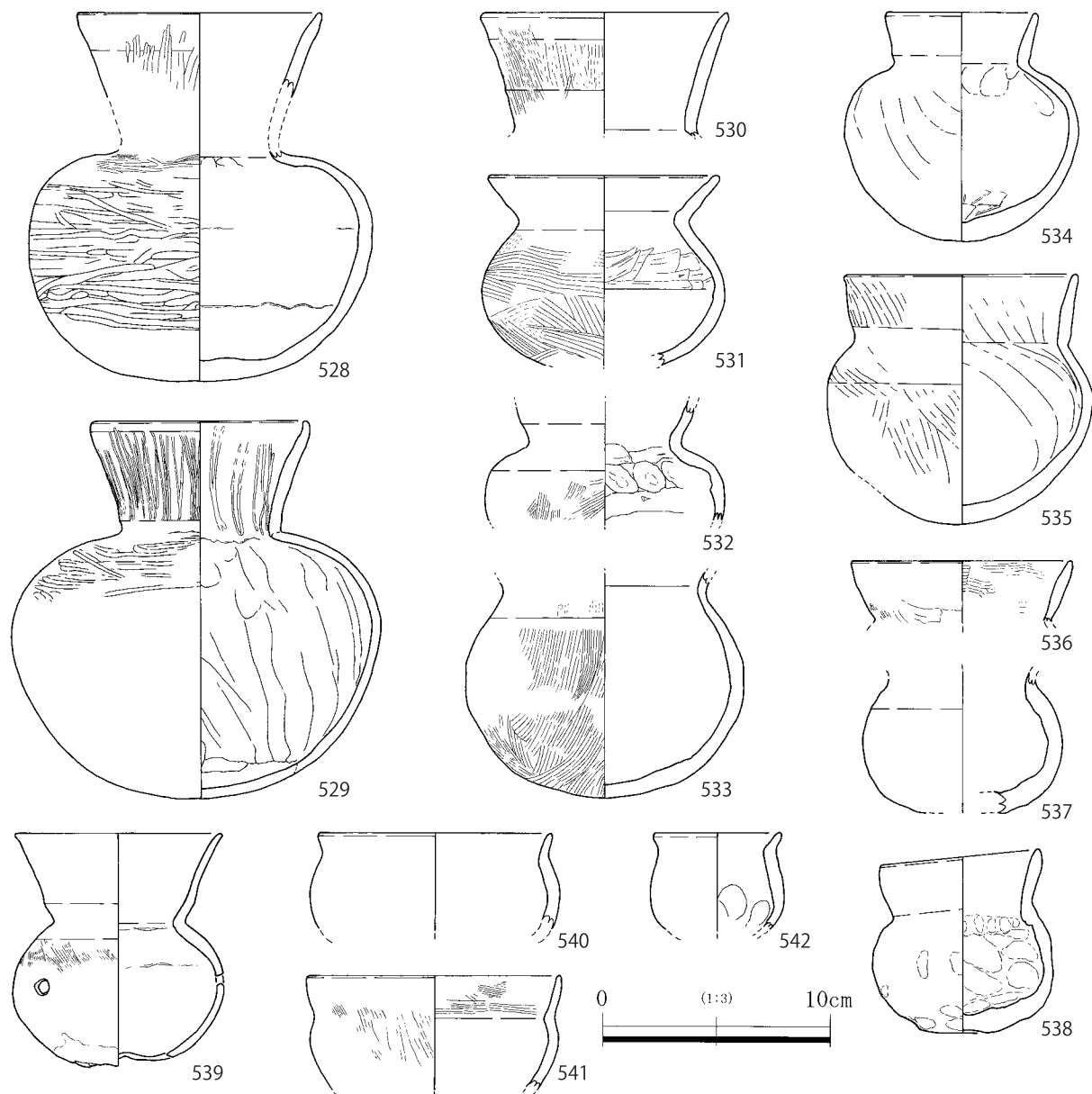


図117 流路1-2域 出土遺物 3

図118-543～図119-573には高坏を示す。坏部から脚部までの形を知ることができる例は稀であり、残存率は低い、残された部位の遺存状態は良い。坏部については546～548が碗形のものと考えられるが、ほかは底部と口縁部の境に稜をもち、比較的屈曲のきついものが多い。口径と坏部高さの比率は多様である。555、556は明瞭な接合箇所はないが、おそらくは同一個体と考えられる。外傾する口縁端面に沈線を1条巡らし、厚い体部をもつ。脚部との接合部は径が大きく、脚部の剥離部分には沈線が認められる（図版120）。脚部は短く、坏部との剥離面にはやはり圈線を巡らす（図版123）。流路1-2域の当初に埋没した堆積物に含まれる、図127-704、705ともども特徴的な器形を示す。脚部の形態も多様である。ゆるやかに広がる558は接合部に近い中空部分に、脚側から粘土を充填し、中実化をはたしている。564も接合部は中実のつくりであるが、同様に脚側からの粘土充填の可能性もある。外面にカキメのような調整痕跡を残す。565は脚柱部と脚端部の接合痕跡の調整が不十分で、内面に脚端部が大きく突出する。569は中実の接合部をみせるが、中央に穿孔があり、坏部に刺突痕跡の残る例と関連する痕跡であると考えられる。総じて透かしの確認できる例は少ないが、571では一ヶ所に円形のものが認められる。

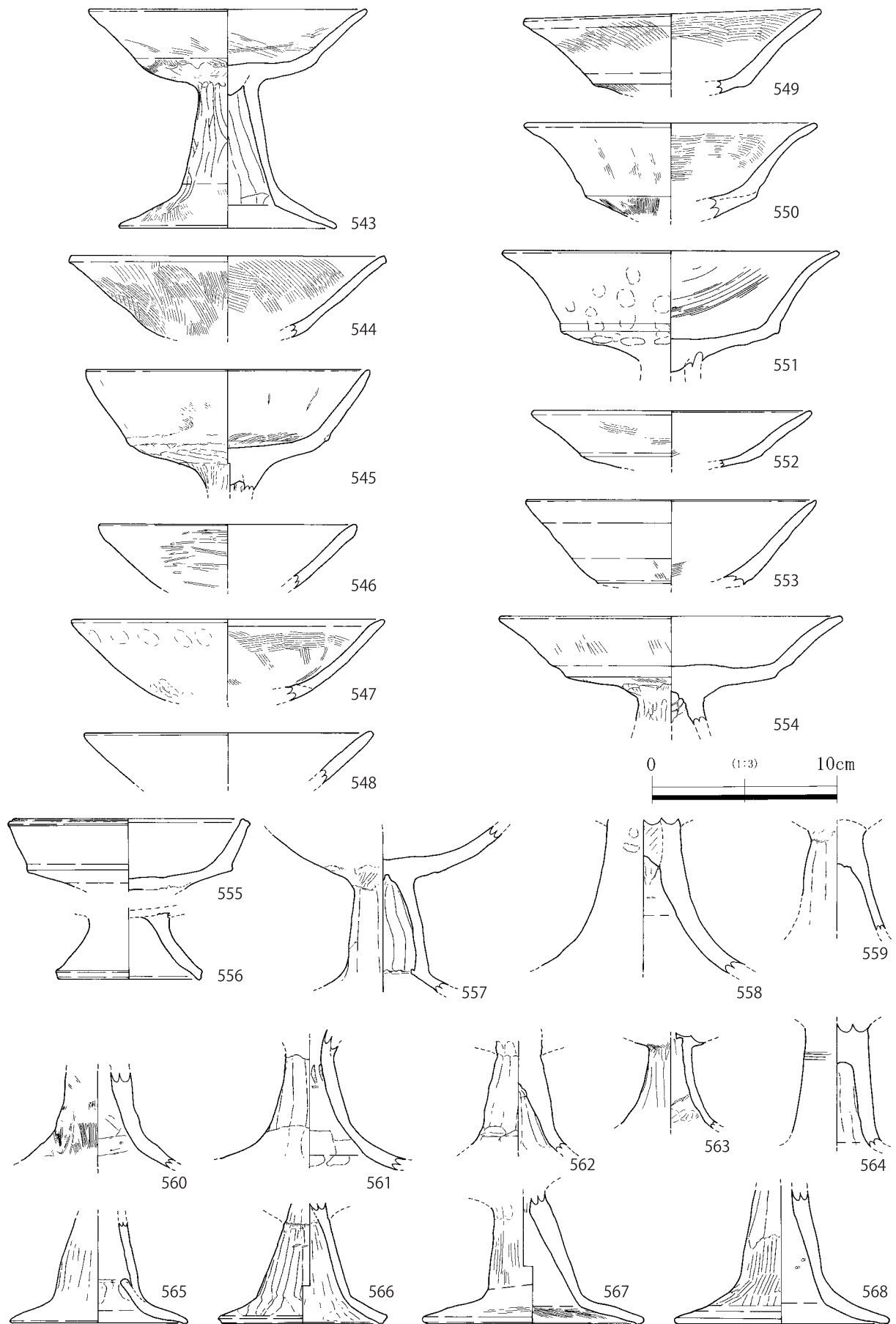


图118 流路1-2域 出土遺物 4

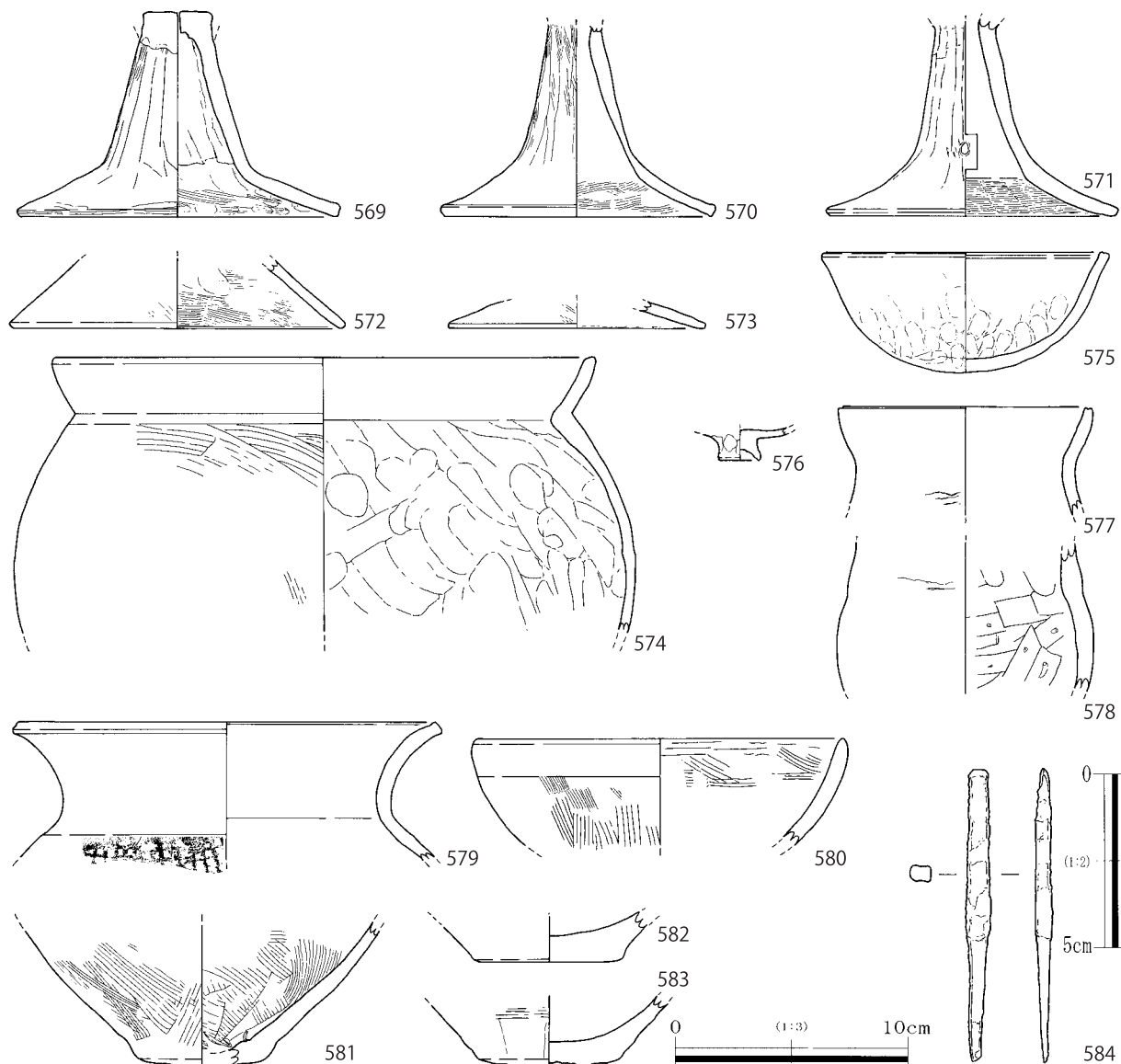


図119 流路1-2域 出土遺物 5

脚柱部の内面調整にも各種認められるが、シボリ痕跡を残すものもあれば、ケズリ、あるいは工具によるナデを施したものが認められる。

図119-574は大型の甕あるいは鍋、575~578は製塩土器と考えられる。576は小型の脚台のみが残る例、575は小型の碗形を呈するもので、口縁端部に丁寧な造形をみせる。図47に示した土器集中1出土例との類似から製塩土器である可能性を想定するが、一部に橙色の変色が認められる。577、578は壺形の製塩土器で、粗雑な形態、調整を残す。やはり外面に橙色の変色が認められ、製塩行為による変色かと推測する。579は韓式系土器の長胴甕で、外反し、端部に面をもつ口縁部から肩付近の部位が残存する。体部外面には格子タタキを残す。580は土師器の碗、あるいは高坏の坏部で、口縁端部を丸く収める。581~583は平底の底で、弥生土器かとおもわれるが、583は輪台状を呈する。

図119-584は鉄鏃で、長頸鏃に分類されるかとおもわれるが、いわゆる方頭を呈し、鏃身部の側面は直線で先端に横一文字の刃部をもつ。長さ8.4cm、幅0.7cm、厚さ0.5cmを測り、計測時の重量は6.2gであった。流路1-4域において出土した鉄製品と比較するとやや、全体に錆化がみられるが、それでも遺存状態は良好といえる。

図120～130に当初の埋没における堆積物からの出土遺物を配した。図120-585～587は須恵器である。585は有蓋高坏の坏部で、図105-418に類似する形態をもつ。外面調整は残存部分までヨコナデで、ケズリの痕跡は確認できない。底近くに透かしを施す際の傷が残る。586は中型の壺で、体部中位と頸部に突帯一条を巡らす。それぞれ突帯の上位に波状紋を施している。587は大型の壺で、球形の体部に直立する口縁部をもつ。口縁部にゆるやかな突帯を2条巡らし、頸部ならびに突帯と頸部間に、米粒状の痕跡を接続する波状紋を施す。体部の外面には平行タタキを施す。

図121、図122に土師器甕類を示した。全体的に残存率は低い、残された部位については遺存状態の良好なものがある。口縁部分の残るものを主体に図化し得たものを掲出した。

図121-588～601は古式土師器の特徴をもつものである。590は外反する口縁端部を上方に丸く肥厚させるもので、庄内型甕の影響を残すものと考えられる。これ以外は布留型甕の特徴を見せる。口縁形態は多様で、内湾気味にのびるものが多いが、端部については内面に丸く肥厚させるもの、内傾する面をもつもの、端部に水平な面、あるいは外傾する面をもつものなどがある。頸部の形状では外面をナデにより丸く成形するものと、やや尖り気味に成形するものがあり、内面には強い稜を残すものと、やや幅をもった面を形成するものがある。体部の外面調整はハケメを残すものがほとんどで、肩～頸部付近より上位をナデにより整える。体部内面にはケズリの痕跡を残すものが主体であるが、頸部付近に達するもの、あるいは頸部との間にやや幅を残して納めるものがある。ケズリの効果とも関連するとおもわれるが、598、599などは器壁は厚い。

図122-602～604は外反する口縁の端部を尖り気味に丸く収めるものである。605は分厚く肩の張った肩部にやはり分厚い口縁部をもつものである。606は複合口縁をもつもので、肩の張った体部をもち、頸

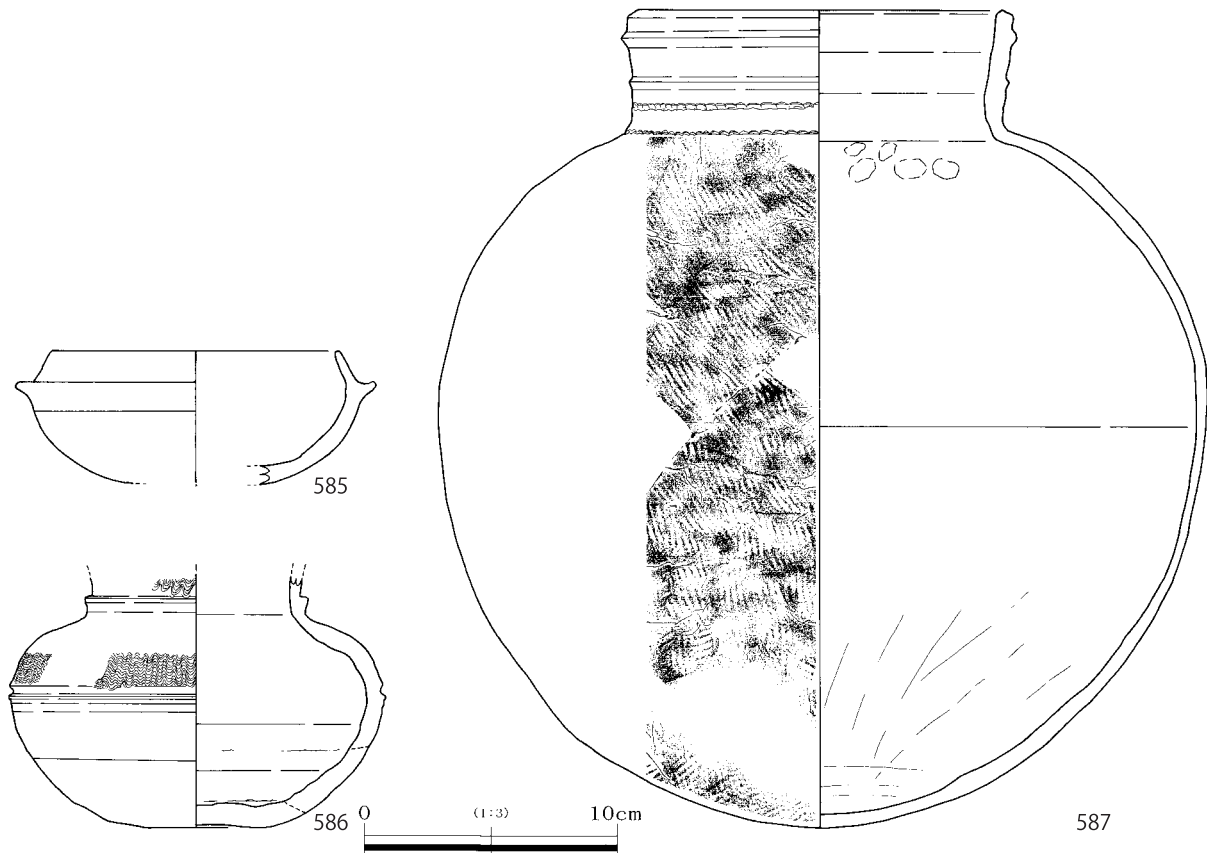


図120 流路1-2域 出土遺物 6



部の内外面を丸く成形する。体部内面にはヘラケズリを施すが、肩部の内面は縦方向のユビオサエが顕著に認められる。607は外反する口縁端部の外面に面をもつもので、頸部内面には強い稜を示す。608は頸部内面に接合痕を残すが、体部内面のケズリは体部下半に留めている。609は頸部内面を丸く、外面を段上に成形するもので、比較的上位にまで、体部内面のケズリを施す。611は複合口縁をもつもので、口縁部上位は短く直立する。614は口縁端部を上方へつまみ上げ、外面に面をもつもので、体部外面にはハケ、内面は押圧による成形、調整を施す。617は肩部に穿孔があるが、孔の周囲にハケなどの工具痕跡が残り、焼成前に施されたものと考えられる。

図123、124は土師器壺、鉢類を配した。甕同様、残存率の低い個体が多く、完形のものはないが、小型のものでは比較的全容を知ることができる。

図123-621はラップ状に広がる口縁部をもつ甕と考えられる。頸から肩部にタタキの痕跡を残すが、縦方向にナデ消している。内面下位にはケズリの痕跡が残り、外面にススの付着も認められ、煮沸に用いられたものと考えられる。622は体部に比して小さい口縁部をもつもので、621同様、撫肩の体部をもつ。体部内面にはケズリを施すが、上位には粘土紐の接合痕跡をそのままに残す。624、625は複合口縁をもつ、比較的大型のものであるが、624は外面に段差を残す程度のものである。630、631は小型の鉢である。636、637は卵形の体部をもつ小型の壺で、体部外面には縦方向のハケ、内面は板状工具によるナデが施される。

図124-639は形態の上では土師器の長頸壺であるが、須恵器として焼成されたものである。全体をナデ調整により仕上げるが、肩部には別個体の調整痕が転写された可能性のある痕跡や、体部下半にはナデ調整の静止痕跡などがあり、全体的にいびつである。また焼台の融着痕跡も残る。640は639と同じ形態をもつ土師器の長頸壺である。641は体部がやや扁平であり、底も平底を呈する。642-644も同様の小型壺であろう。645、647は体部外面の下半にケズリを施すもので、頸部を比較強いナデにより成形、調整し、体部内面には粘土紐の接合痕を残しながら、ナデにより調整する。648-665は小型壺である。体部より口縁部が大きく広がる656は比較的古相を呈するものと考え、全体的に多様な形態、調整技法により仕上げられている。655は底付近の体部内面に明瞭な粘土紐接合痕を残すとともに、底部分にはシボリメが残され、成形技法の一端を知ることができる。また665は小型壺の形態をもつが、残存する胴部にわずかながら焼成前に施された円孔の痕跡を認めることができ、須恵器における隙に近い形態をもつものと考えられる。残存部位からの復元ではやや上向きの円孔である。

図125-図128には土師器高坏、鉢、製塩土器などを配する。

図125-666-図126-693には、口縁部と底部の境が明瞭であるものを示す。比較的高坏の出土量が多い流路1-2域においても、完形のものがないことはもとより、坏部から脚部までの様相がわかる資料も限られている。坏部形態の類型化により同じ類型に属するものにおいても、さらに法量による細分も可能なようであり、おおむね口径が20cmを超える大型のもの、15-17cm程度を主体とする中型のもの、10-12cm程度の小型のものに分けられるようである。ただし口径と坏部高の比は必ずしも同じではない。坏部と脚部の接合方法には上方から粘土を充填したもの(675、678など)、坏部外面に中空の脚を貼り付けたもの(666など)、中実の脚を貼り付けたもの(668、669など)などがあり、接合後に脚内部側から刺突を施すもの(672、677、682など)もみとめられる。内外面の調整はハケあるいはナデ調整が主体を占めるが、ミガキを施すものもあり、隙間なく緻密に施すものや、放射線状に施すものがある。

図127-694-697は口縁部と底部の境が不明瞭で、口縁部がまっすぐのびるものを示す。やはり完形の

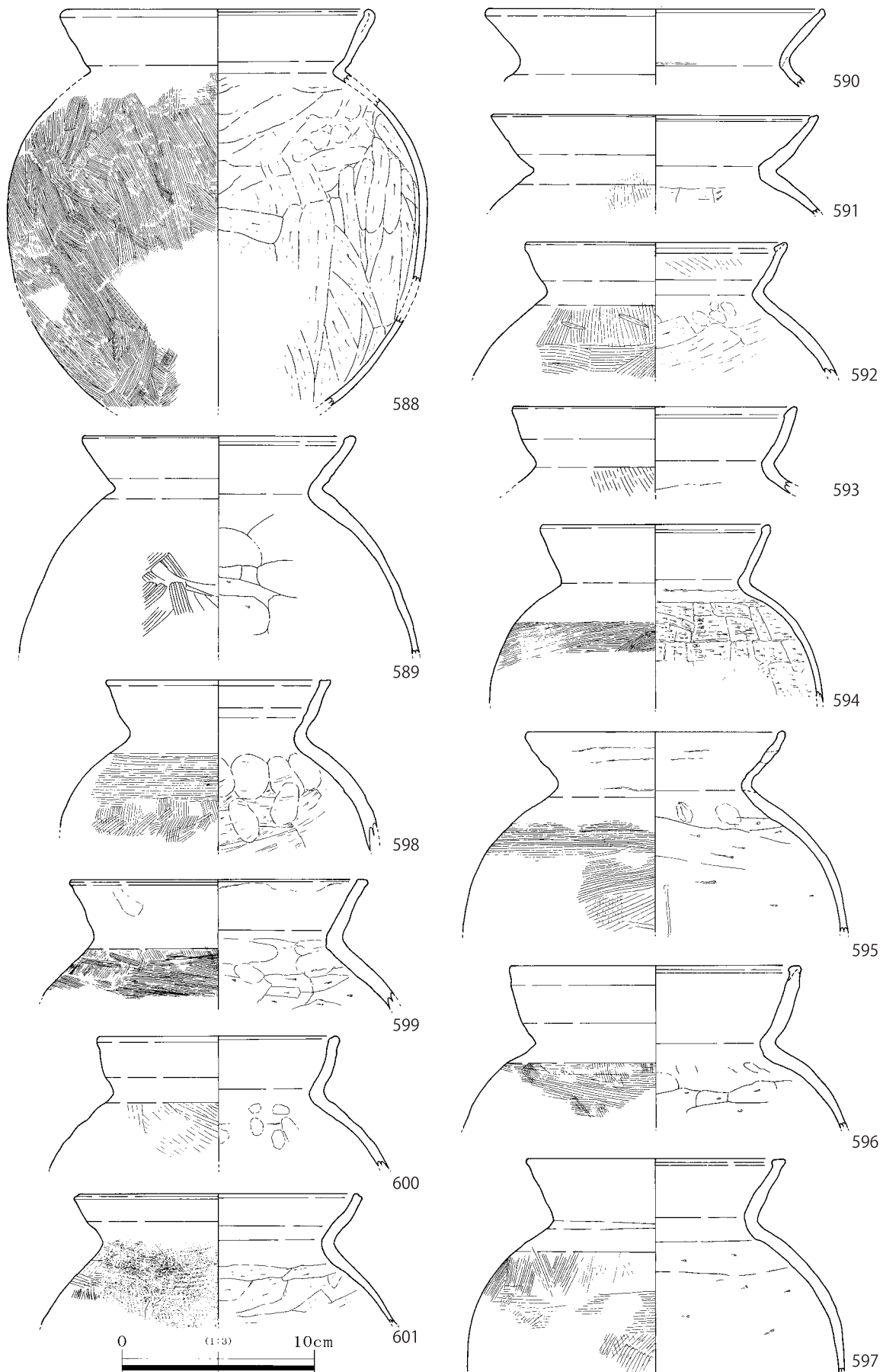


图121 流路1-2域 出土遺物 7

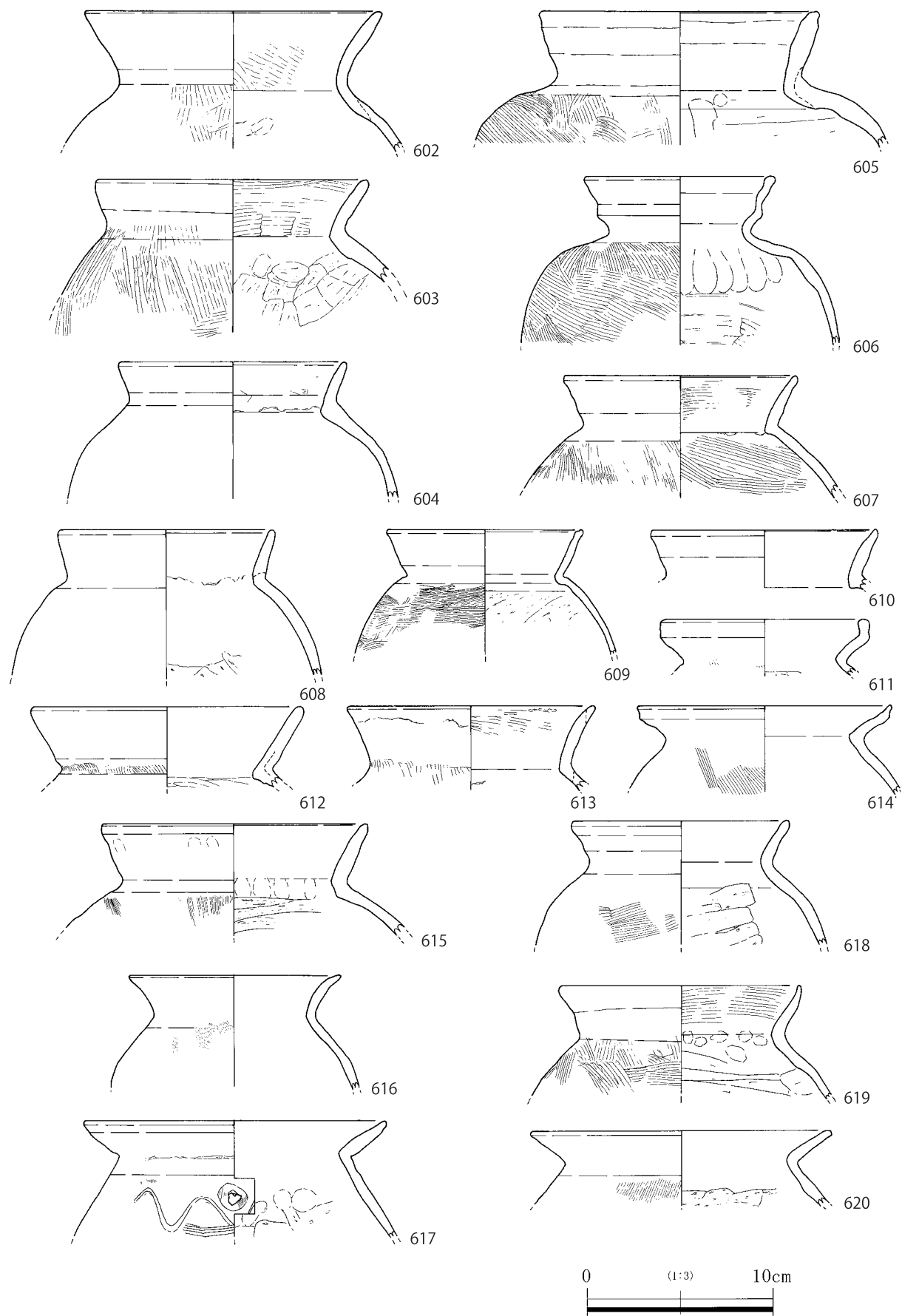


图122 流路1-2域 出土遺物 8

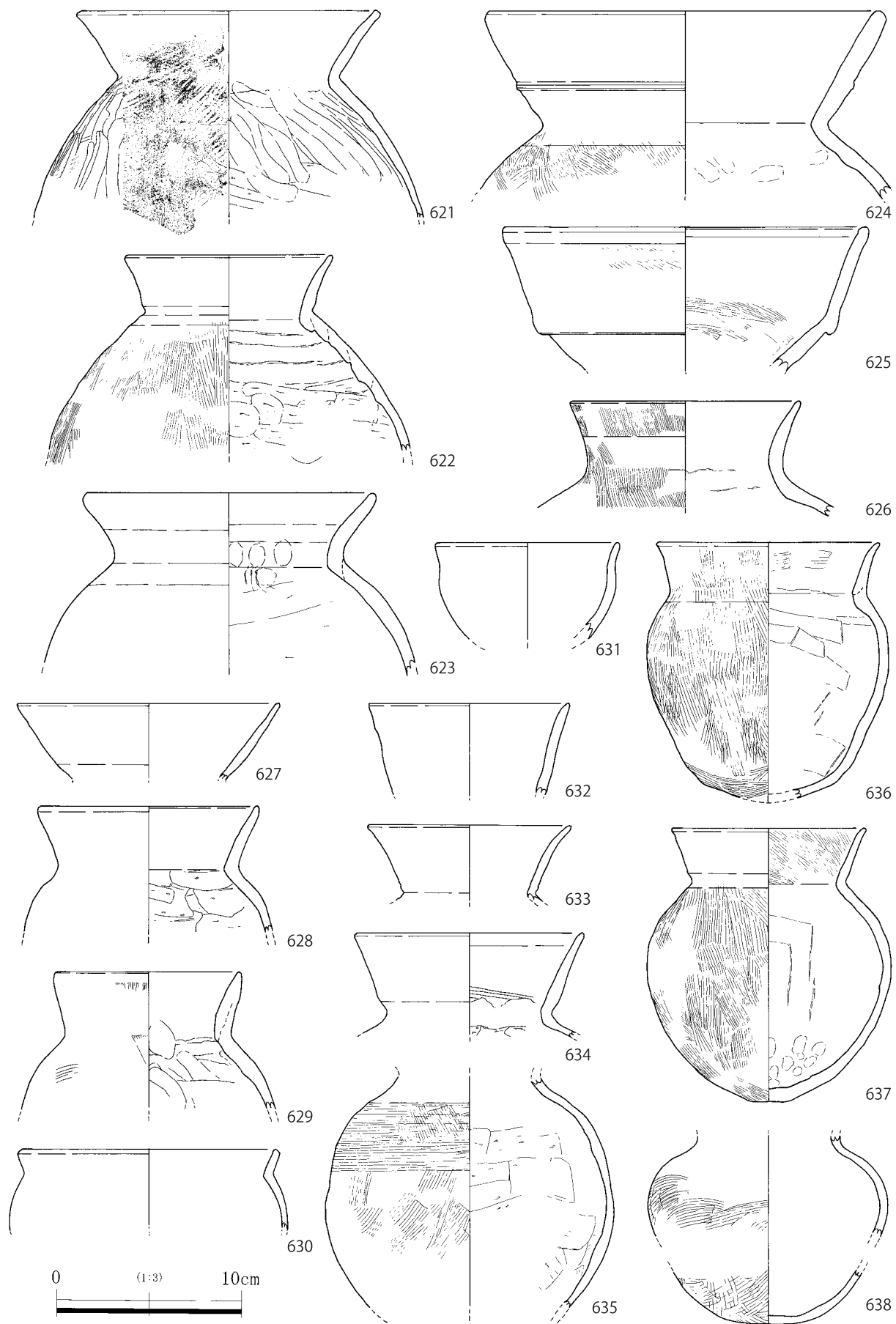


图123 流路1-2域 出土遺物 9

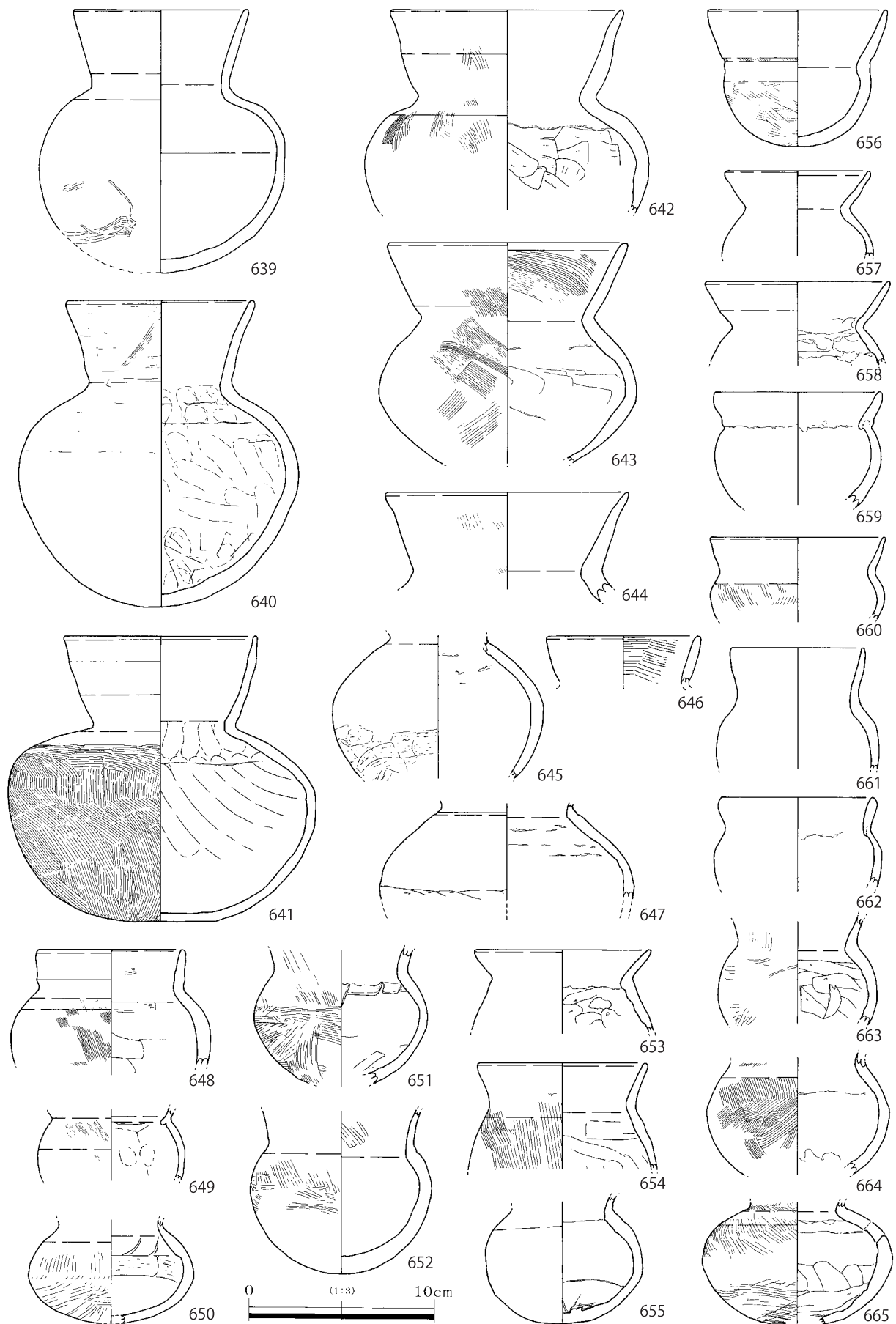


图124 流路1-2域 出土遺物10



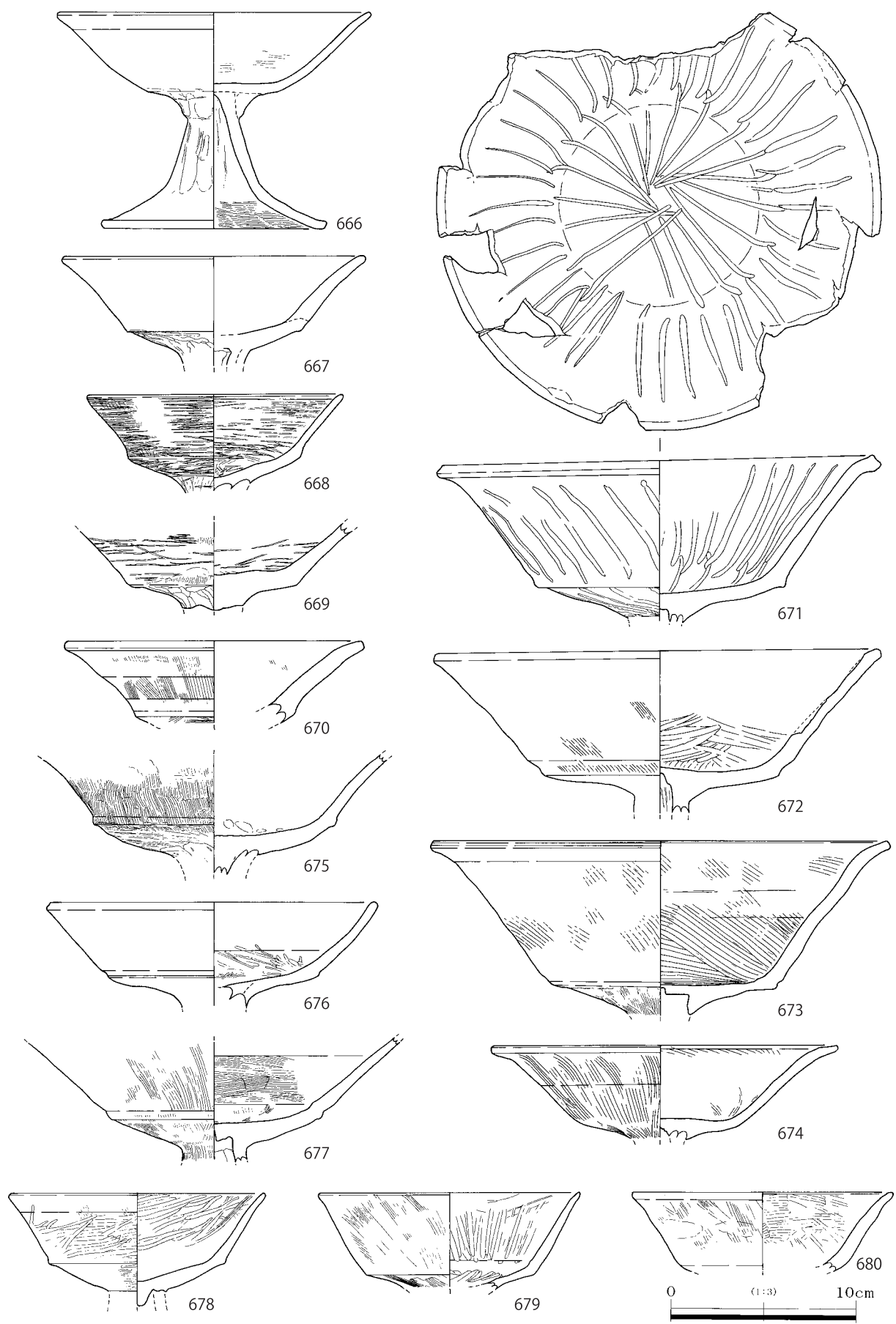


图125 流路1-2域 出土遺物11



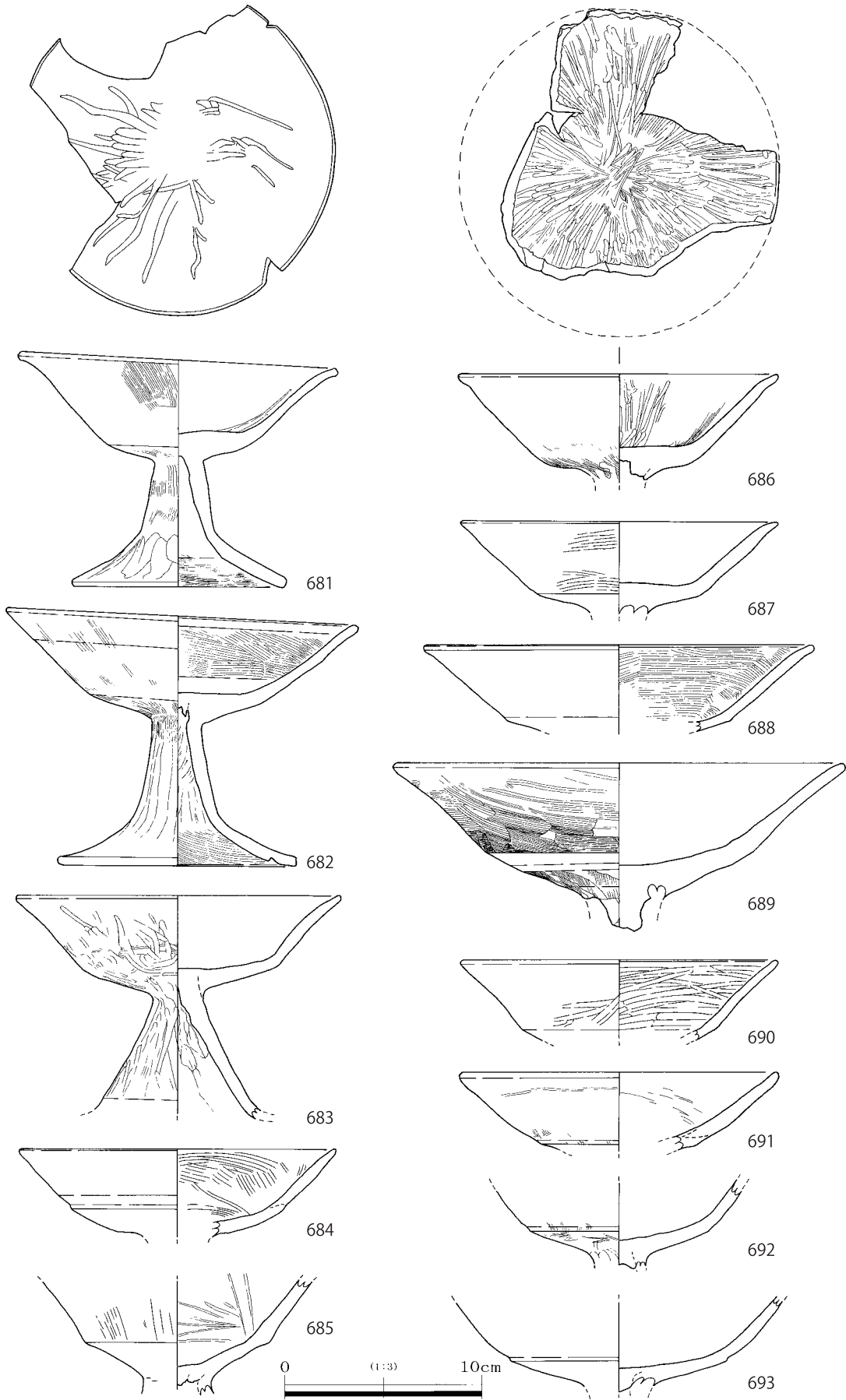


图126 流路1-2域 出土遺物12

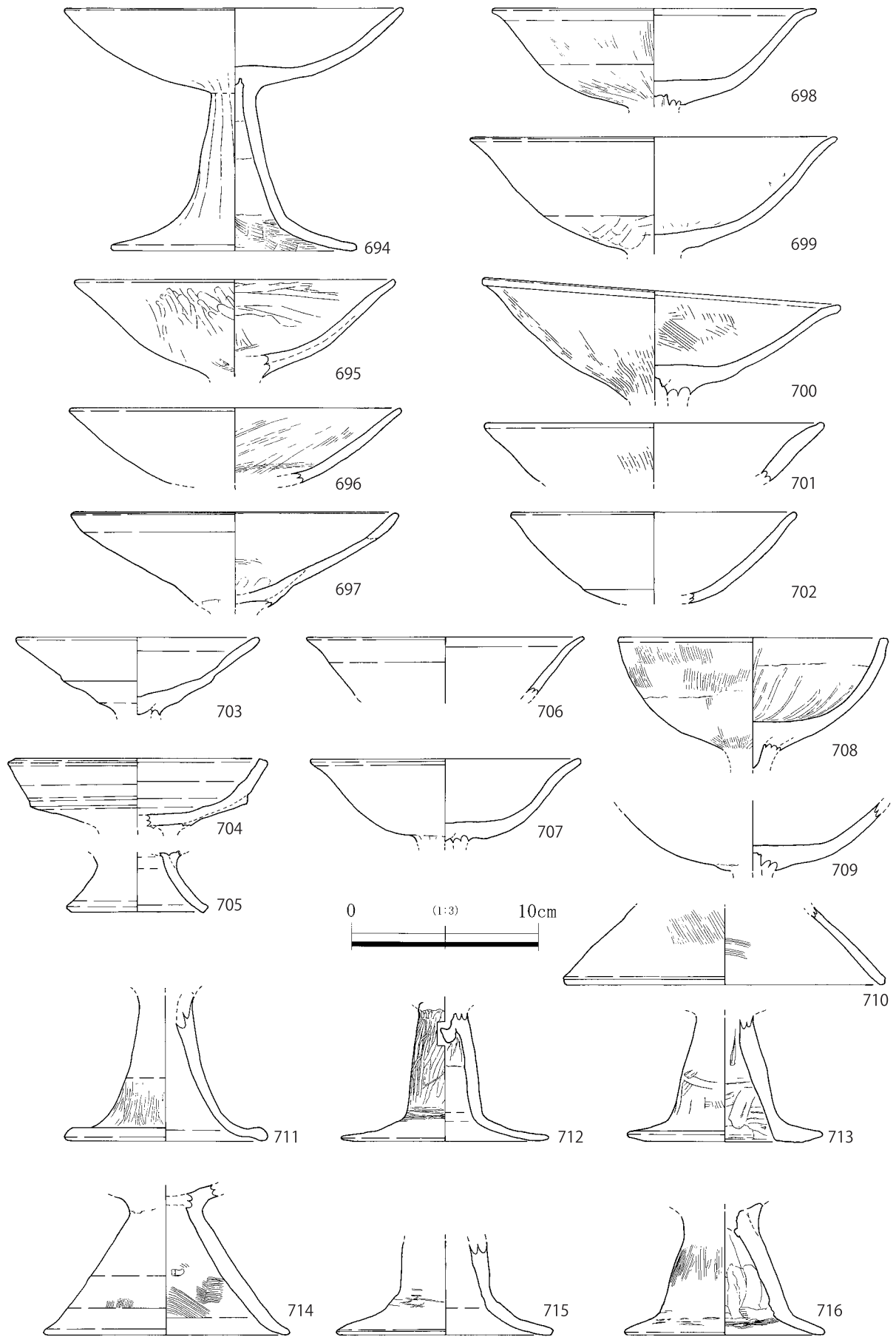


图127 流路1—2域 出土遺物13

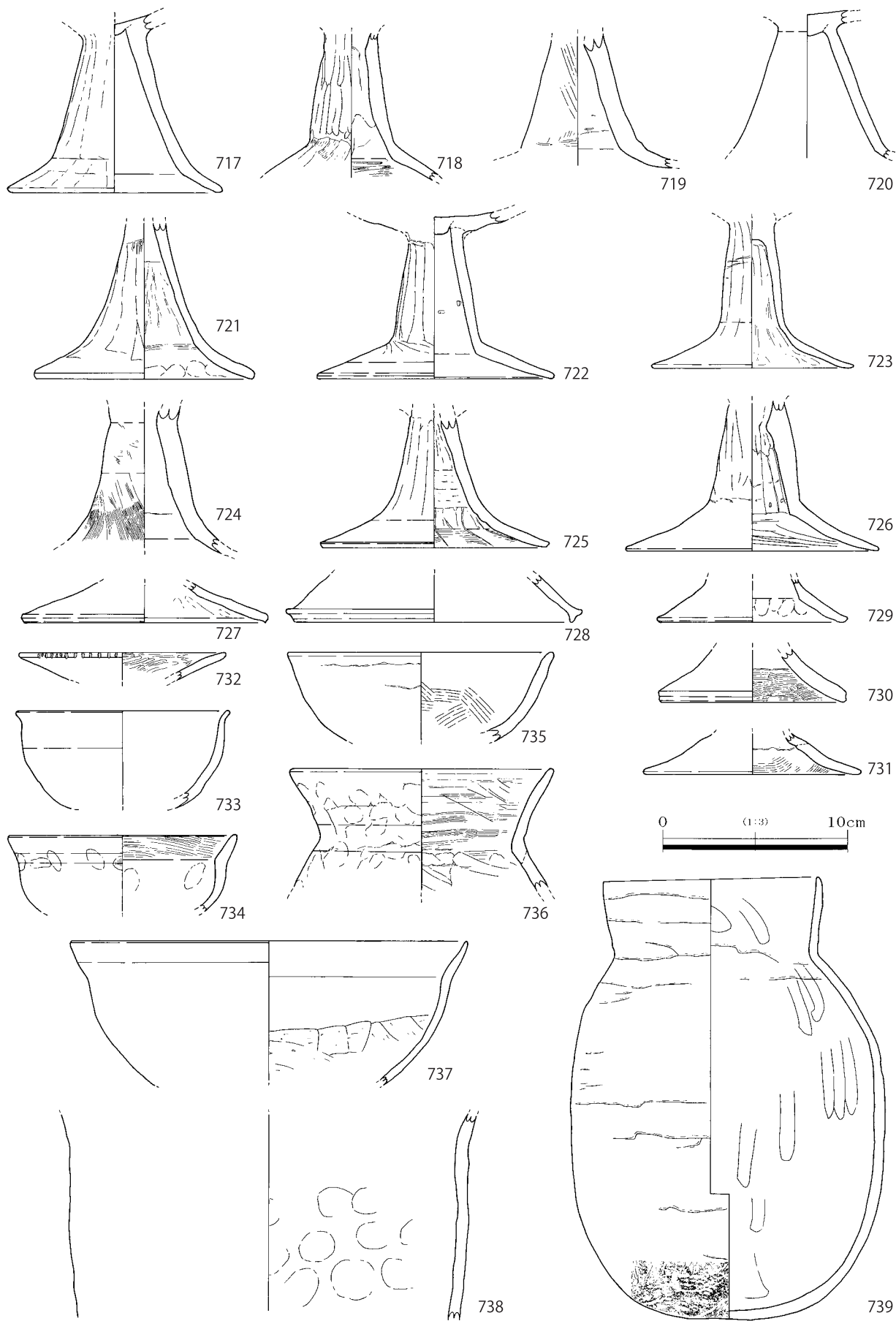


图128 流路1-2域 出土遺物14

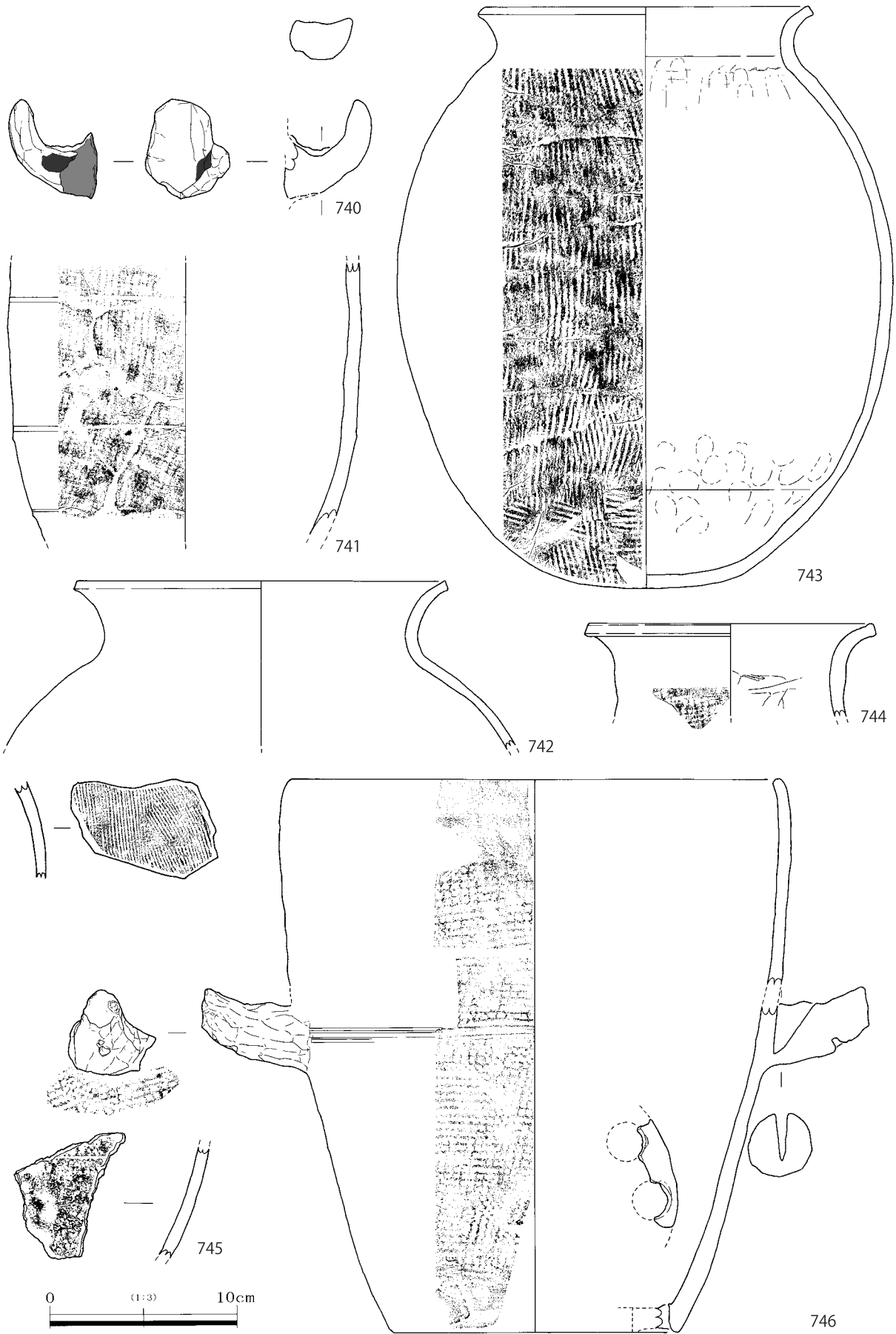


图129 流路1-2域 出土遺物15

ものはない。法量的には中型のものが多  
い。

697～702、706、707には口縁部と底部の  
境界が不明瞭で、口縁部が外反するものを  
示す。中型～小型のものがみられる。

703は坏部外面に段をもつものであるが、  
段は内面における口縁部と底部の境に対応  
しており、明瞭な境をもつものといえる。  
704、705は同一個体の可能性の高いもので  
ある。704坏部の底と口縁部の境は明瞭に  
屈曲し、短い口縁端部には面をもち、沈線

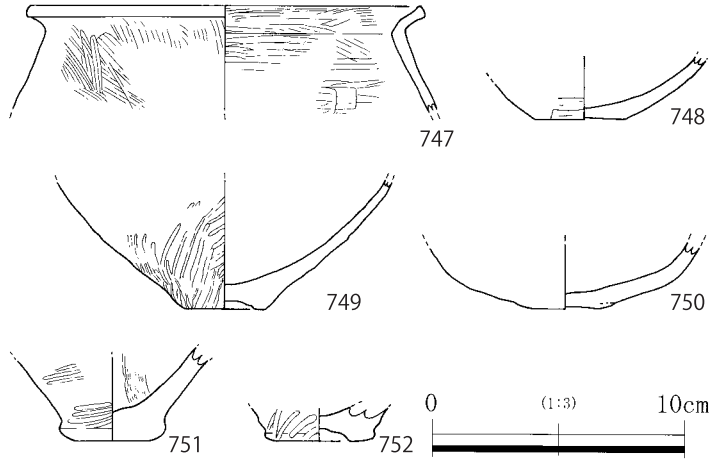


図130 流路1-2域 出土遺物16

を巡らす。短い脚との接合部分には圈線を施している。705は短い脚部であり、坏部との接合箇所の外側に貼り付けた補強粘土の痕跡を良く残す。707は碗形の坏部をもつものである。

図127-710～図128-731には土師器高坏の脚部を示した。形態的に類別が可能であるが、主体をなすものは「ハ」字状に広がった後、端部付近で屈曲し、大きく開く中空の脚である。脚の長さには長短があり、短脚のものに釣鐘型の脚柱をもつものがある。ゆるやかに湾曲し、屈曲が明瞭でない711や、接合部からまっすぐ開く714などは少数である。

図128-732は大きく開く口縁端部にキザミを施すもので、小型の器台かと考える。733、734は小型の鉢、735は小型の碗である。736はやや長胴の甕かと思われるが、煮沸に供された痕跡をもつ。にぶい黄橙色を示すが、変色によるものであるかは判別できない。737は鍋で、体部内面の下半にはヘラケズリを施す。煤の付着が認められる。738は甑かと考えられるが、遺存状態が悪く判然としない。特に外面には発泡かとも思われる痕跡をみせる。739は長胴の甕形土器であるが、製塩土器と考えられる。内外面とも非常に粗雑な作りであり、外面においても粘土紐の接合痕跡も消されない部分が多い。また底付近にタタキの痕跡を残す。色調は白色や橙色を呈し、製塩作業に伴う加熱による変色かと考えられる。

図129-740は土師器把手である。単独で抽出した。断面形状はやや扁平な部類に属する。741は韓式系土器長胴甕の体部で、口縁、底とも欠損するが、体部外面には格子タタキを施し、間隔のまばらな沈線を巡らす。残存部位は限られているが螺旋状ではないと考えられる。742は須恵器あるいは陶質土器の壺で、外反し、端部に面をもつ口縁部が特徴である。同一個体の体部と考えられる742'外面には縄席紋がみられ、内面に当て具痕は残さない。このような口縁形態をもつものは基本的に初期須恵器窯における器種には含まれていないと考えられることから、陶質土器の可能性が高いと考えておく。743は韓式系土器の長胴甕で、一部を欠損するがほぼ完形に復元することができた。外部外面の調整には平行タタキを施し、螺旋状沈線を巡らす。スス、コゲの付着が顕著な資料であり、遺存状態も良好である。744は韓式系土器の平底鉢かと考えられるもので、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。体部外面には格子タタキを施し、内面には当て具痕跡を一部に残す。745は韓式系土器甑の体部で、把手の接合部に近い部位かと考えられる。体部と把手の接合部分の被覆粘土を一部に残し、不鮮明ながら格子タタキと沈線が確認できる。746も韓式系土器の甑で、残存部位が限られているものの、ほぼ全容をしることができた。逆裁頭砲弾形の体部に平坦な底をもち、円形の蒸気孔を多数配置するものと考えられる。円柱上の把手には上面から切り込みをいれ、下面には刺突痕を残す。体部外面には格子タタキを残し、把手の位置に雑な沈線

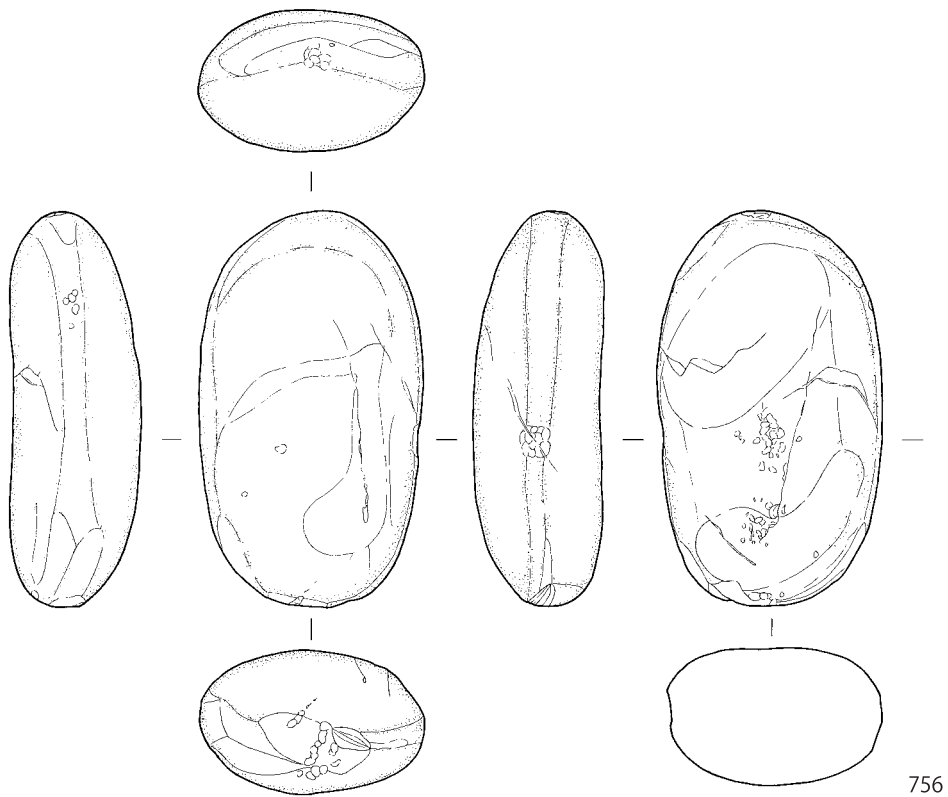
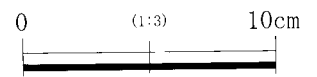
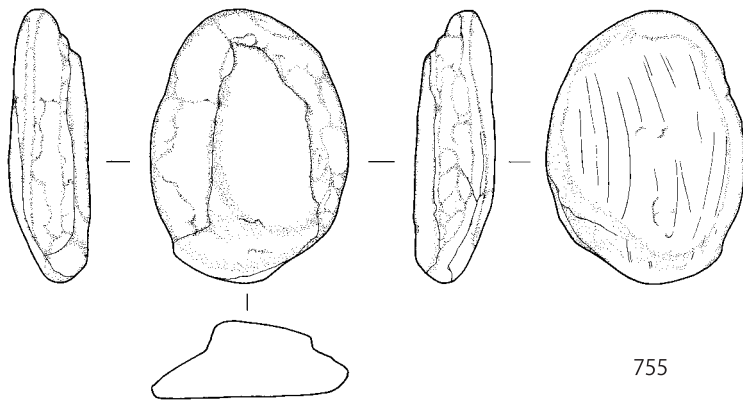
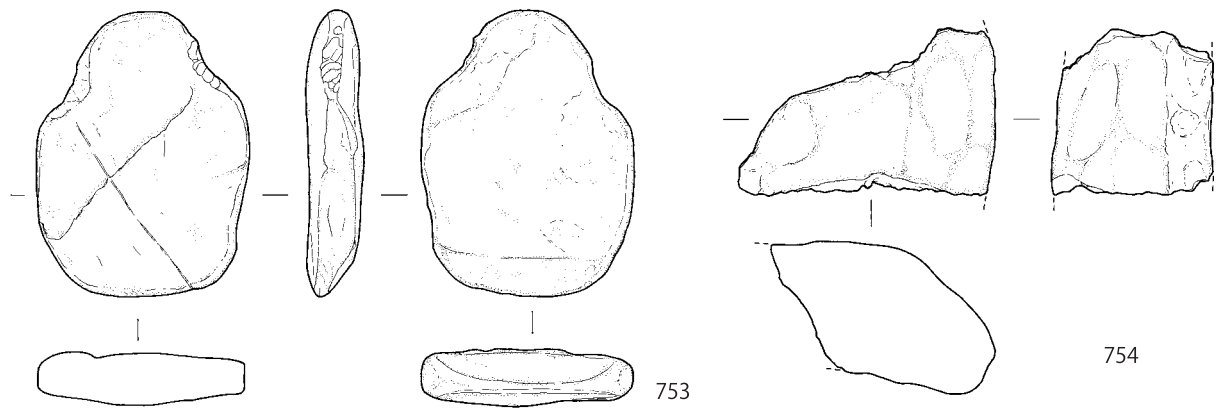


图131 流路1-2域 出土遺物17



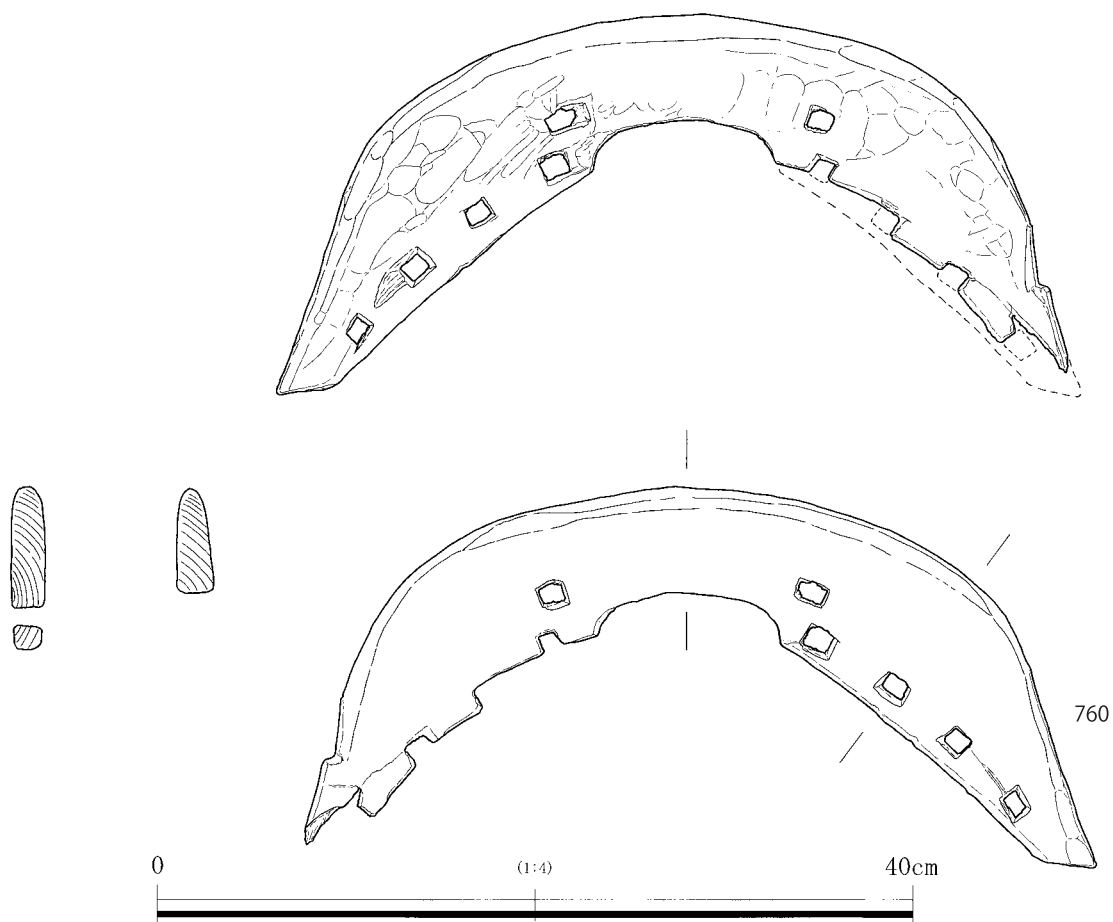
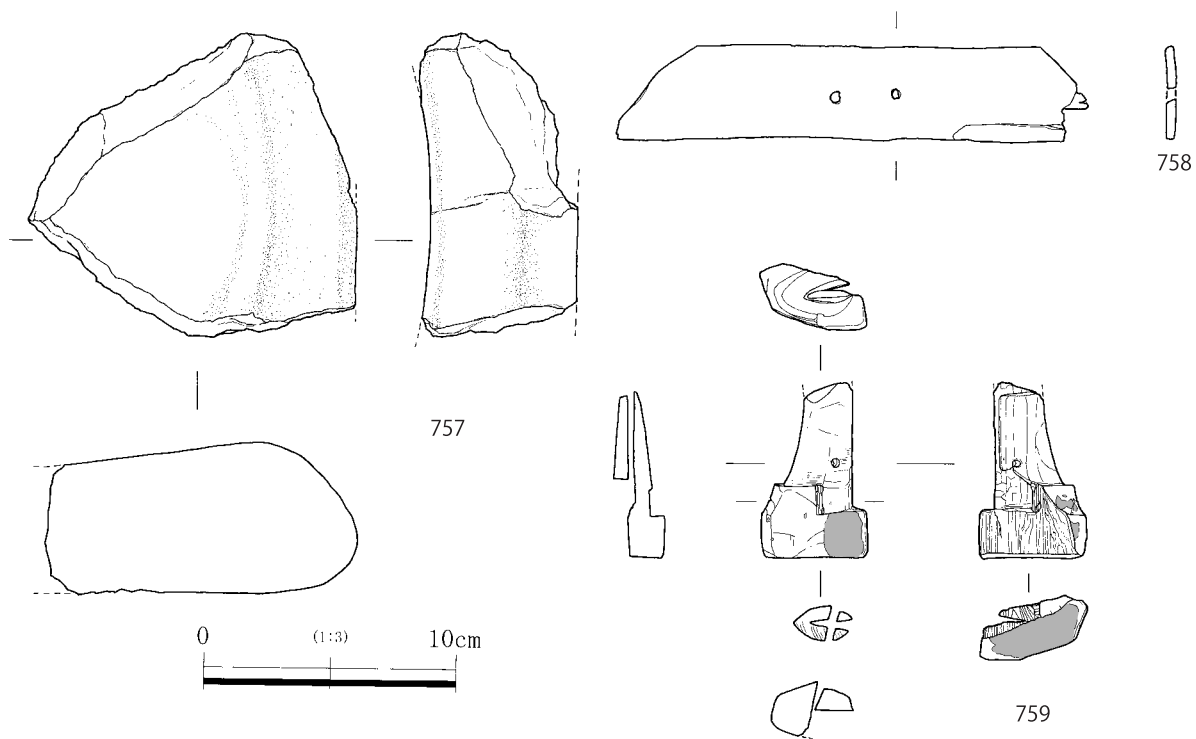


图132 流路1—2域 出土遺物18

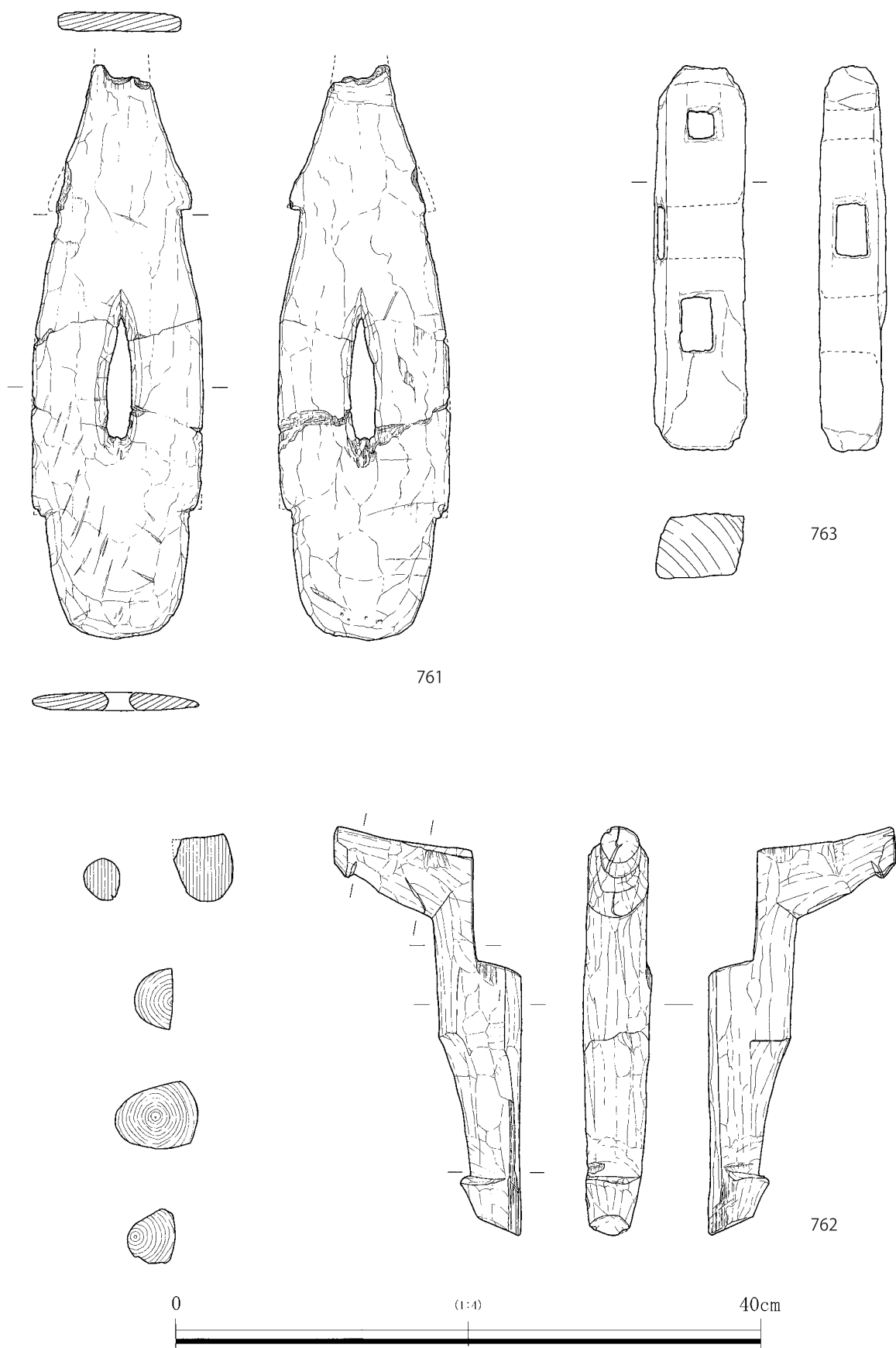


图133 流路1—2域 出土遺物19

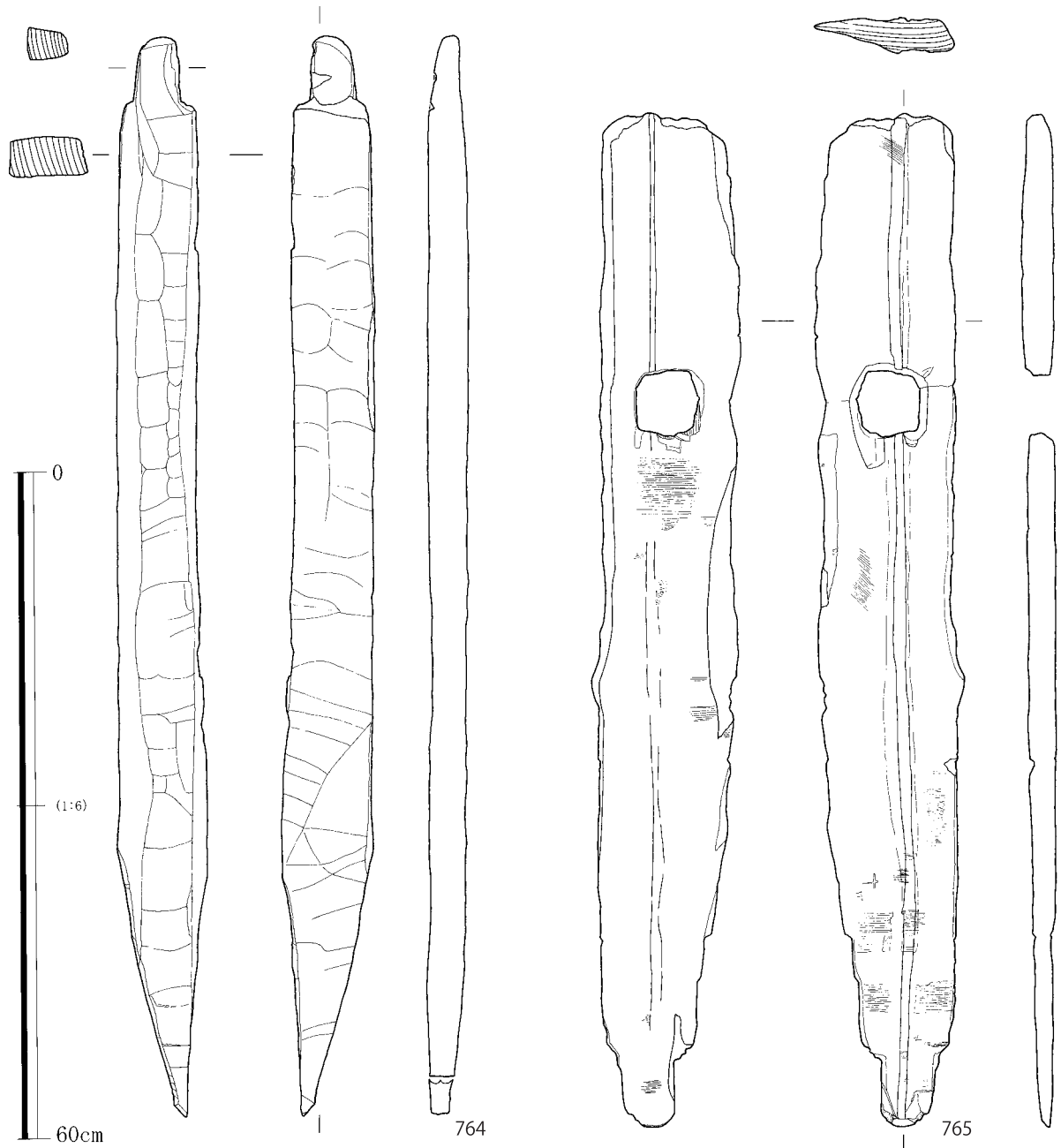


図134 流路1-2域 出土遺物20

を施す。底付近はケズリにより成形した後、ナデにより調整を施している。

図130には弥生土器かと考えられるものを示す。残存率は極めて低い。

図131～図134には石製品、木製品を示す。図131-753は敲石あるいは磨石、754は砥石あるいは台石、755は磨石か考えるが、先端に黒色物の付着が認められる。756は敲石で側面と前面に敲打痕が認められる。図132-757は砥石と考えられる。石材は754が角閃石花崗閃緑岩である以外はすべて砂岩である。

図132-758は薄い板状の材で、中央に2ヶ所の穿孔がある。樹種はヒノキである。759は刀装具のひとつである把頭で、一部に赤色顔料（赤漆？）が残る。樹種はクルミ科である。760は鞍橋で、ウマの背にあたる部分の角度から後輪と考えられる。一部を欠損し、紐を通す穴にバリが残り、使用された痕跡が無いことから、穿孔工程中の破損により投棄されたものと推測する。樹種はヒノキである。図133-761はナスビ形鋤で、U字形鋤先の装着されるものである。中央にスリットが設けられる。樹種はアカガシ

亜属である。762は背負子の部材と考えられる。樹種はヒノキである。763は柱状の材にほぞ穴を穿ったもので、用途は不明である。樹種はモミ属である。図134-764は杭であるが、頭部にはほぞ状の加工があり、建築材などの再利用かと考えられる。樹種はモミ属である。765は用途不明の材であるが、戸口装置の一部、けなしの可能性を推測する。樹種はアカガシ亜属である。

図135、図136には流路1-2域の上層に当たる第1-5層、第2a層出土の遺物を配した。直接流路の掘削に伴い出土した遺物ではないが、流路の遺物を含む可能性が高いことから、ここに示すこととした。基本層序としては流路堆積物の直上層は第2a層となるが、第2a層が第1-5層により削平を受けている部分も

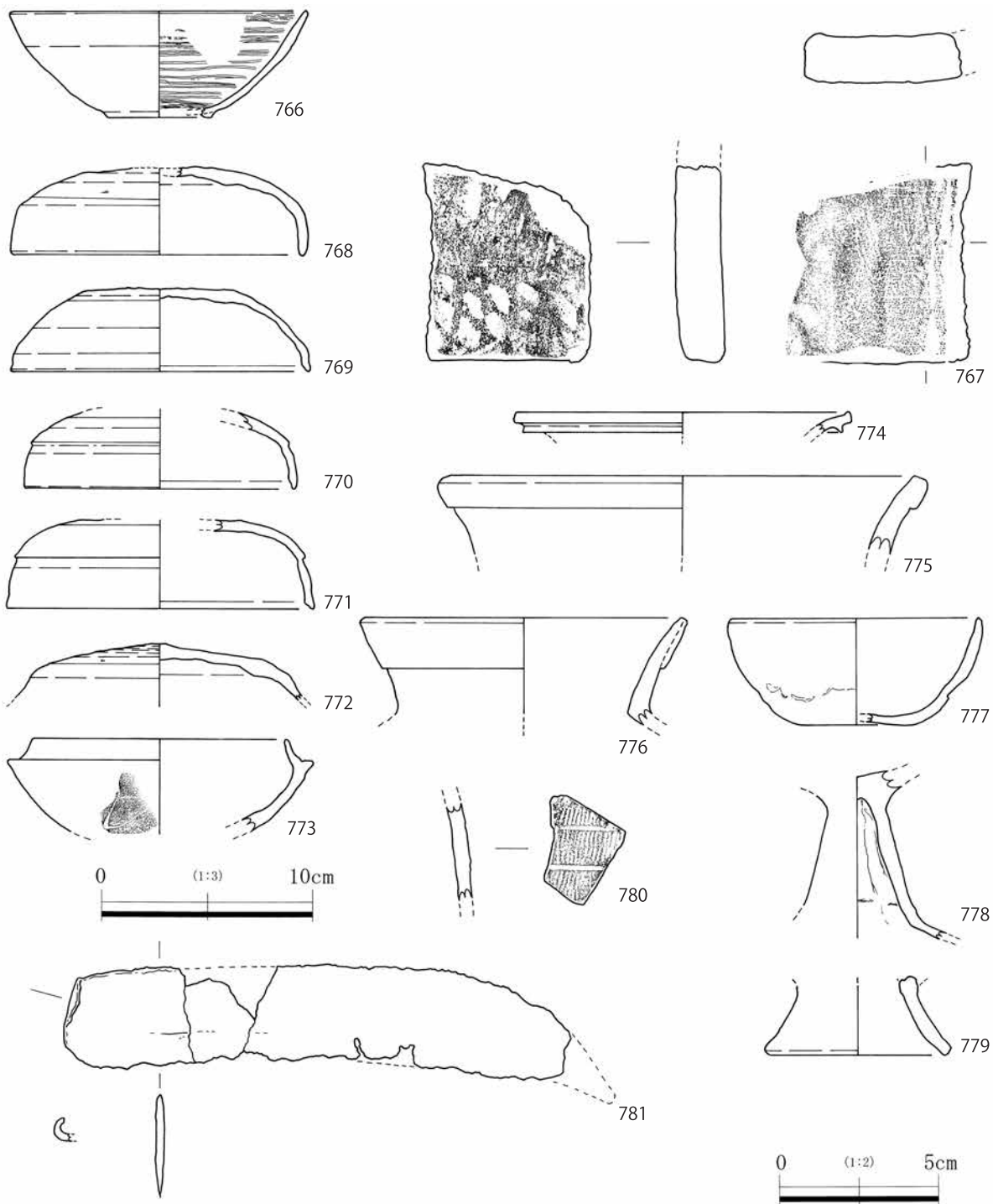


図135 流路1-2域 上層出土遺物 1

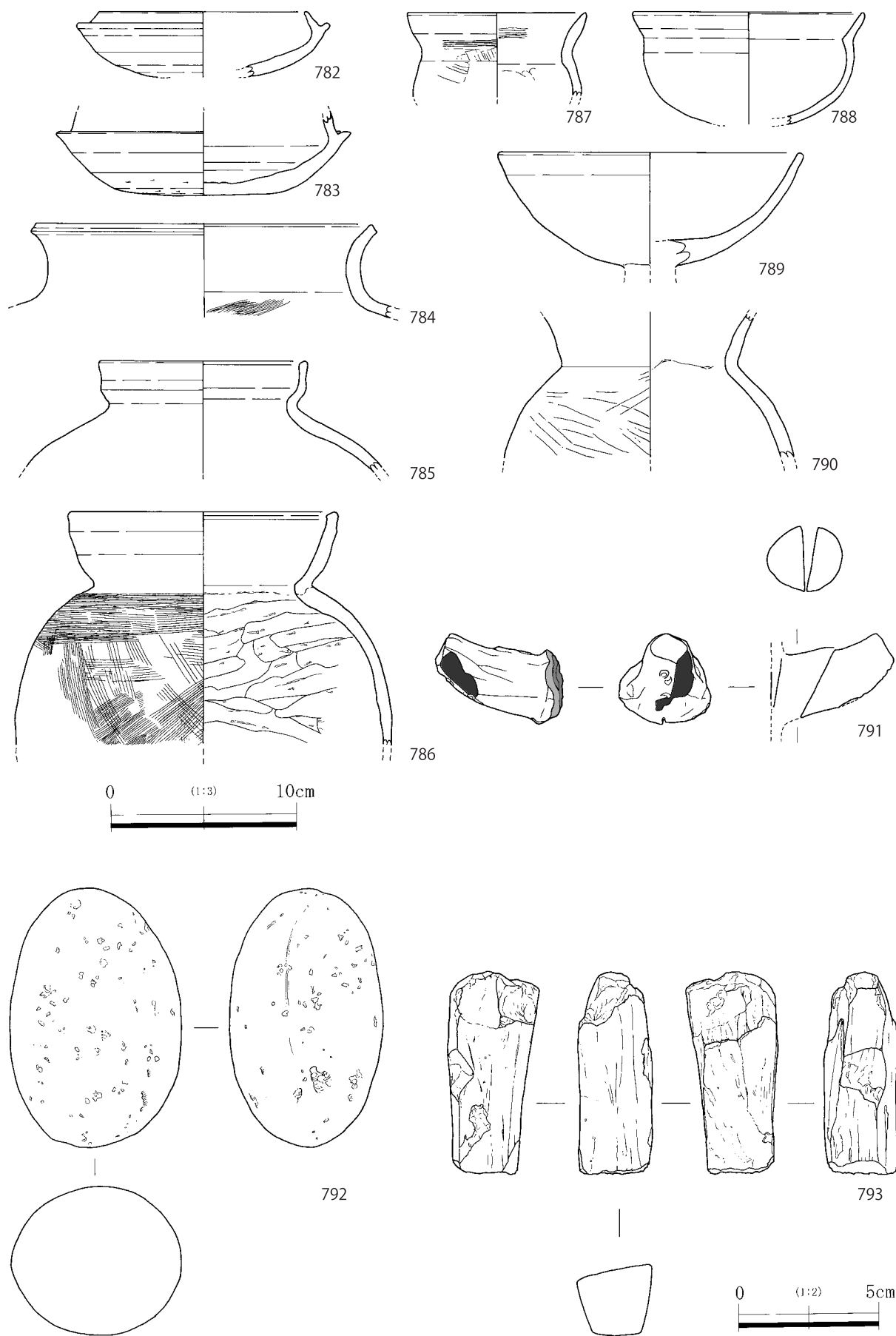


图136 流路1-2域 上層出土遺物 2

あることから、併せて掲出する。図135-766は瓦器椀、767は平瓦であり流路に伴うものではない。768~773は須恵器坏類、774は須恵器壺、775は須恵器甕である。773にはヘラ記号が認められる。776は土師器壺、777は土師器の椀である。778・779は土師器高坏の脚で、779は556、705に類似する。780は須恵器あるいは陶質土器の細片で、外面に縄蓆紋タタキと沈線が認められる。781は鉄製曲刃鎌で、遺存状態は極めて悪いが、基部の上方角を折り曲げている状況を確認できる。

図136は第2a層の遺物を配した。782、783は須恵器坏身、784は須恵器あるいは陶質土器の壺で、742に類似する形態をもつ。785、786は土師器甕、787は小型壺、788は小型鉢、789は高坏の坏部である。790は739同様の製塩土器かと考えられ、灰白色を呈する。791は韓式系土器の把手で、上面からの切り込み、下面の刺突が認められる。792は輝石安山岩製の敲石あるいは磨石である。表面は非常に円滑に整えられ、細かい敲打痕が認められる。793は流紋岩製の砥石である。

#### 流路1-3域出土遺物（図137~図146）

流路1-3域は03-5-2トレンチの範囲で検出した部分で、検出長はおおむね55mを測る。ウマの下顎骨が流路底から出土したが、出土状況を図100に示し、図版41に写真を掲出した。遺物の出土量は相対的に少なく、全体的な出土状況も他の区域より散漫な印象があるが、やはり堆積物の中位、上位からも遺物の出土をみる。土器類のみならず、木製品、木材、獣骨など錯綜して分布しており、何らかの目的をもった配置は見いだせない。また完形に復元できる資料もないことから、破損品などの投棄という状況を想定しておきたい。図化し得た遺物については土器類、木製品類、石器、鉄器を掲出したが、ほかに動物遺存体8点、樹種同定のみ行った木材6点がある。動物遺存体の同定結果については巻末一覧表に、報告書に掲載していない木材の樹種については第5章表1に掲載する。なお堆積物の洗浄は行っていないため、微細遺物の有無については不明である。

図137~図138には須恵器を示す。794は須恵器坏、795、796は高坏の蓋である。797は有蓋高坏かと考えられる。体部外面に波状紋を施す。798、799は罎で、口縁部を欠くが、体部の残存状態は良好である。いずれも頸部が比較的細く、無紋で、ヘラ記号をもつ共通点がある。798は平底に近い底部をもち、器壁は薄い。800は把手坏鉢である口縁部直下に2条の突帯を巡らし、体部下半にも1条の突帯を巡らす。底部付近は静止ヘラケズリを施し、平底である。801、802は壺の頸部、口縁部の細片で、突帯、波状紋が確認できる。803は直口壺で、比較的径の大きい頸部からやや外上方へ口縁部がのび、突帯と波状紋で飾る。804は外へ開く壺口縁、805は比較的肩の張る体部から外反する頸部をもつもので、口縁端部を欠く。突帯を巡らす、無紋である。806、807は比較的類似する形態の口縁をもつ壺であるが、806は無紋である。808、809は陶質土器かと考える体部片で、別個体と考えるが、外面には同じように縄蓆紋と沈線が認められる。810は壺で、口縁部にひずみが著しいが、比較的体部の復元がかなったものである。球形の体部に複合口縁をもつもので、器形は土師器の壺に類似する。底部内面にはユビオサエの痕跡を残し、土師器の成形技法を用いた可能性がある。体部の成形には平行タタキを施すが、ナデ消して調整し、無紋に仕上げている。

図139~図142には土師器を示す。811~825は高坏で、坏部形態からは椀形の坏部をもつもの、口縁部と底部の境に稜をもつものに大きく類別でき、稜をもつものの中ではゆるやかに外反する口縁部をもつものが多いが、817は内湾させた後に口縁端部付近のみ、外反させる。脚部の形態からは、比較的ゆるやかに外反するもの（825）と内面に稜を作る形で明瞭に屈曲し、端部にいたる二者があり、後者が多い。



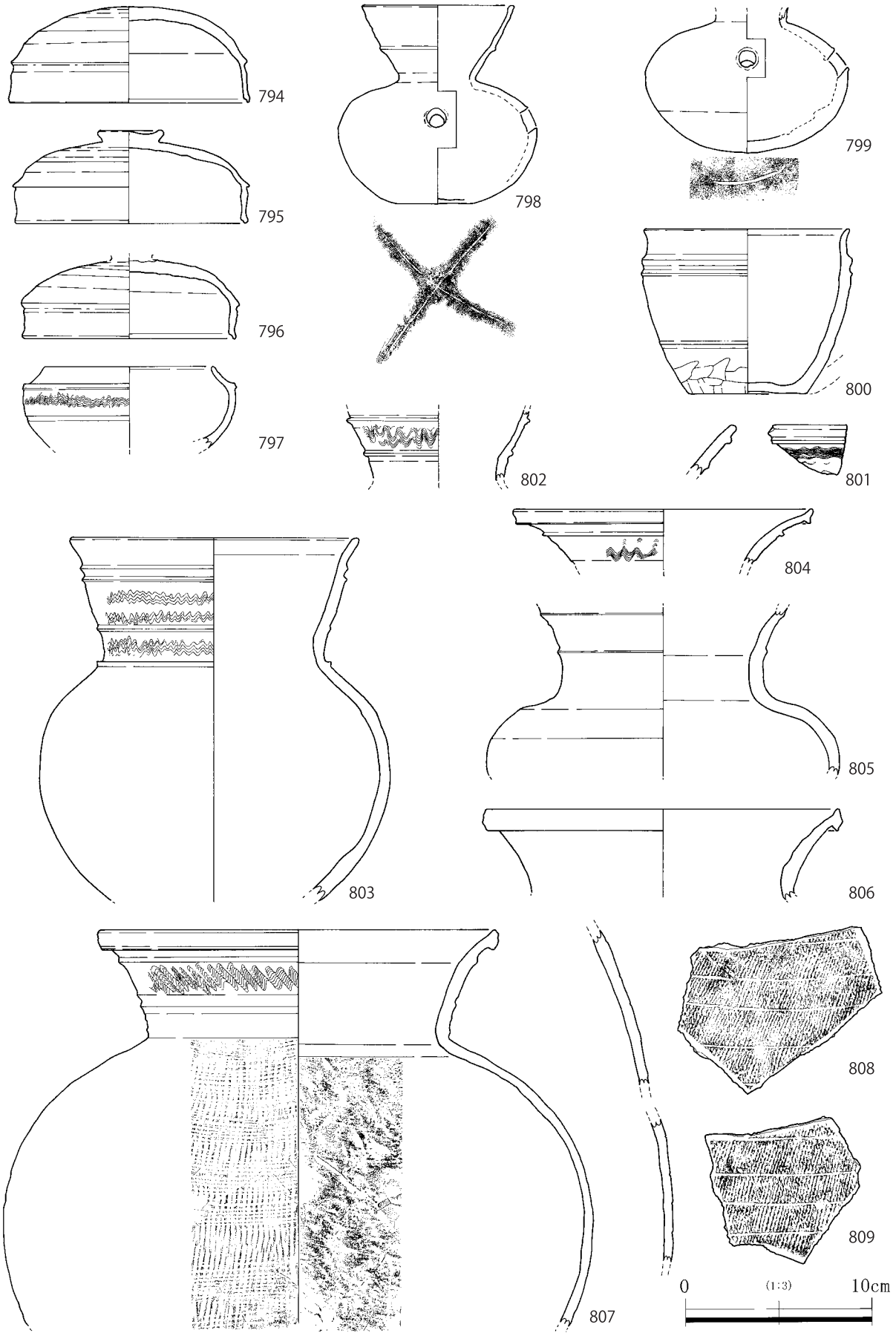


图137 流路1-3域 出土遺物 1

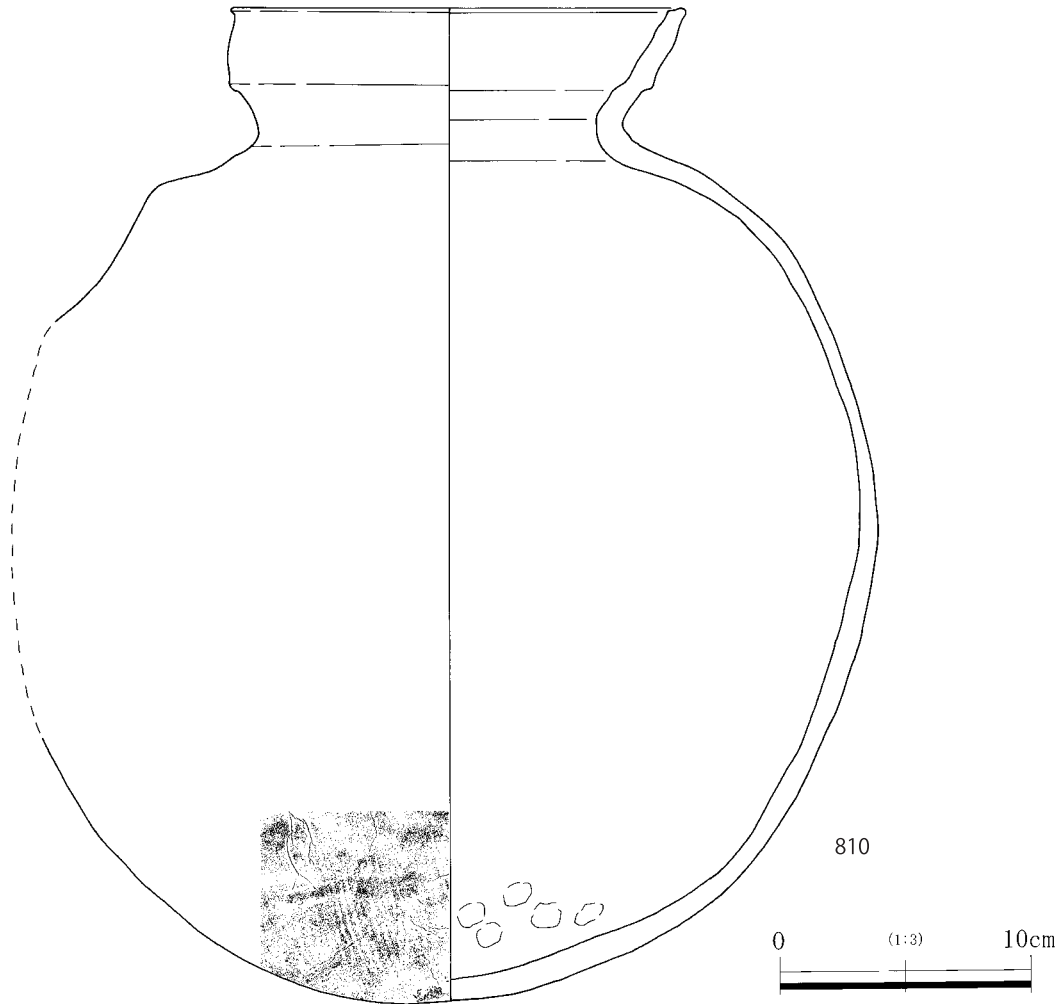


図138 流路1-3域 出土遺物 2

図139-826は丸底の製塩土器で、残存率は低いが、外面にタタキが見てとれる。827は把手で、ほぼ円形の断面形状をもつ。

図140-828~836は土師器壺で、小型のものに限られるが、形態は多様である。837は小型の鉢である。838は土師器甕で、口縁端部を内側に折り曲げて肥厚させる布留型の特徴をもつが、内面にヘラケズリを行わず、ユビオサエによる成形、調整である。839は撫肩の体部に小ぶりの口縁部をもつ甕で、形態は622に近いが、839は頸部付近にまで内面のヘラケズリが及ぶ。840は径の大きい頸部から短く外反する口縁部をもつ甕である。841、842は坏で、841は内面に放射状のミガキが施される。流路1-4域出土の図147-905~907の坏部も同様の形態をもつが、胎土、色調が赤褐色を呈する特徴的なものである。842は高坏になる可能性がある。

図141-843、844は長胴の甕である。843は端部をゆるく上方へつまむ口縁をもち、体部外面にはハケ調整を、内面にはナデ調整を施すが、内面には粘土紐の接合痕跡を多く残し、調整は雑といえる。844は口縁端部の形態を除くと843に類似する形態をもつが、体部の内面調整は横位のケズリである。845~847は布留型甕の特徴を残す甕で、845は体部内面にケズリを丁寧に行すが、846、847はユビオサエによる成形、調整を行っている。848~850も土師器甕である。

図142-851は大型の甕で、平底風の底部から最大径を上位におく体部に至り、頸部から直線的に開く口縁部をもつ。外面の調整は基本的にハケを基調とするが、底部付近にはハケの後、ケズリが施される

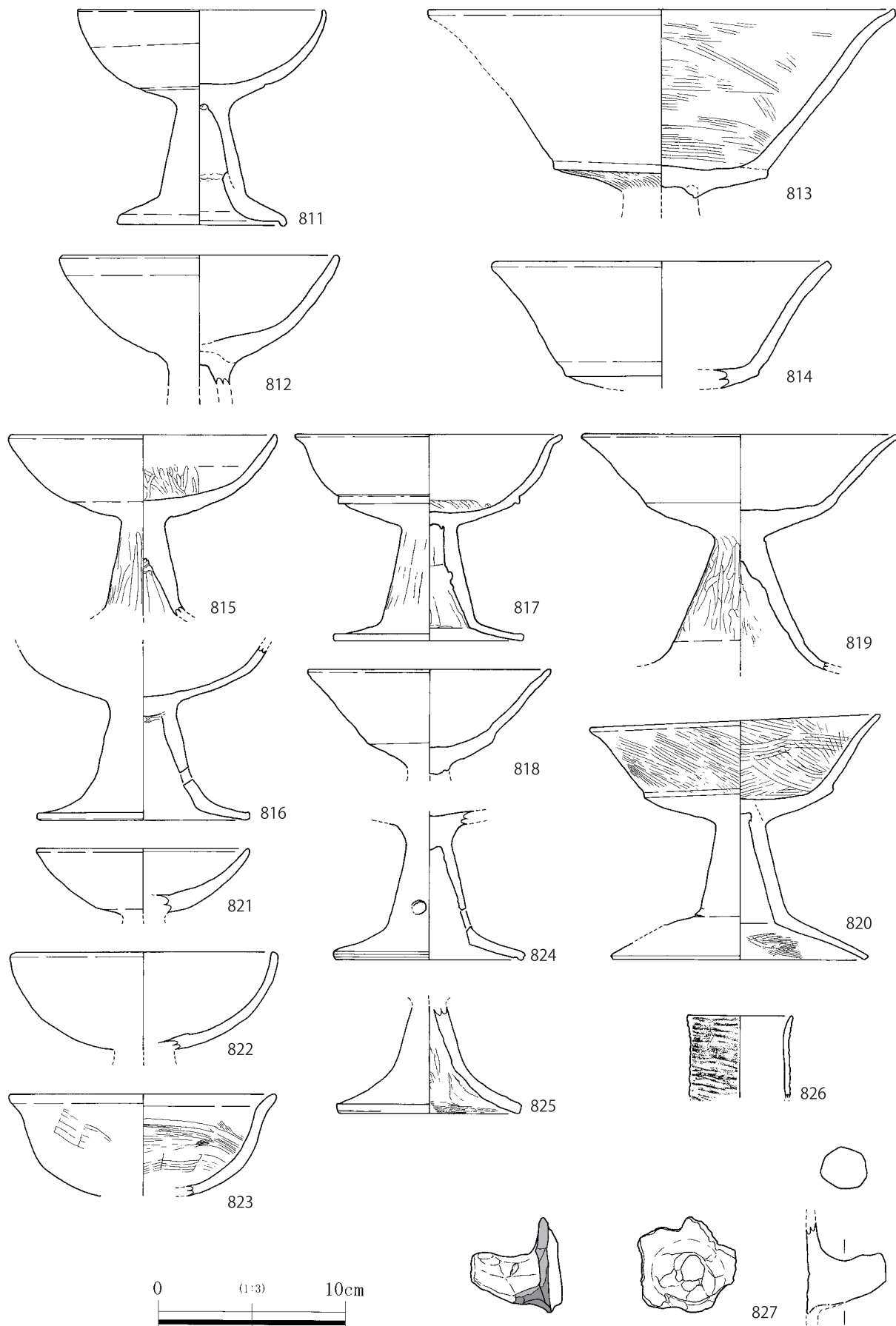


图139 流路1-3域 出土遺物 3

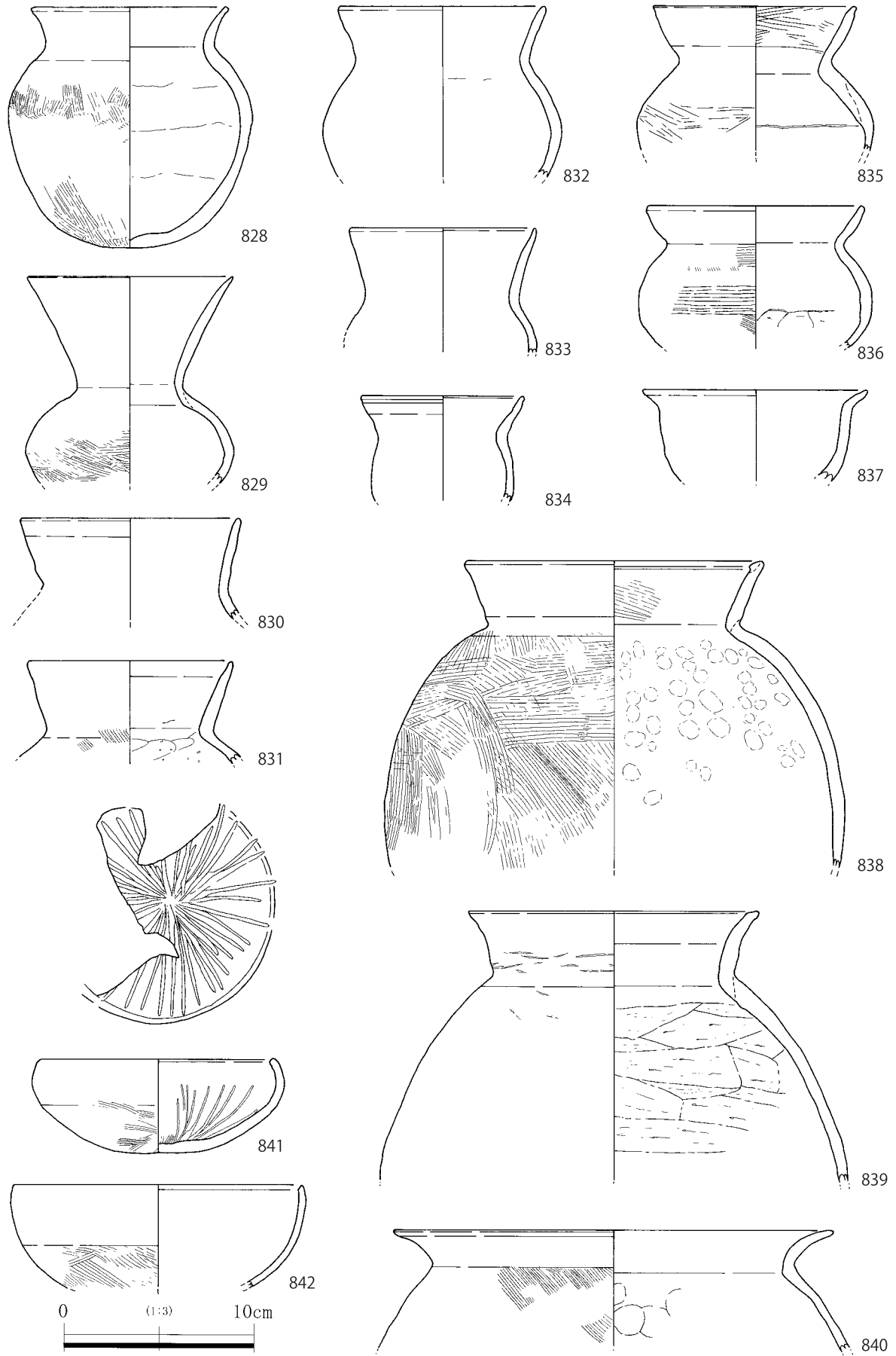


图140 流路1-3域 出土遺物 4



图141 流路1-3域 出土遺物 5

箇所があり、底部については明瞭な調整痕跡を残さない。内面調整はハケである。大型の個体ではあるが、外面にススの付着がみとめられ、煮沸に供されたものと考えられる。

図143には韓式系土器を配した。852～854は把手で、852は上面の切込み、853はタタキと沈線の残る体部、854は先端下面の刺突によりそれと判断した。855～861は平底鉢である。855は小型のものでハケ調整である。口縁部の残る856、858は格子タタキ、857は縄蓆紋タタキをそれぞれ体部外面に施している。底の残る859、861はナデ調整であるが、860は格子タタキが残される。859の底外面にはゲタ痕跡を残すが、拓影を図291に掲出した。862～864は韓式系土器の甕で、863は長胴の体部をもつものと推測する。862、864は平行タタキ、863は格子タタキをそれぞれ体部外面に残す。865は円筒形の体部をもつ甕もしくは壺で、残存率は低く、口縁部、底部については不明である。体部成形、調整は外面に格子タタキを施した後、沈線を巡らし、内面は最終的に板状工具によるナデで調整するが、同心円圧痕を残す。形態からの機能推定は難しいが、外面にススが付着することから煮沸に供された可能性がある。

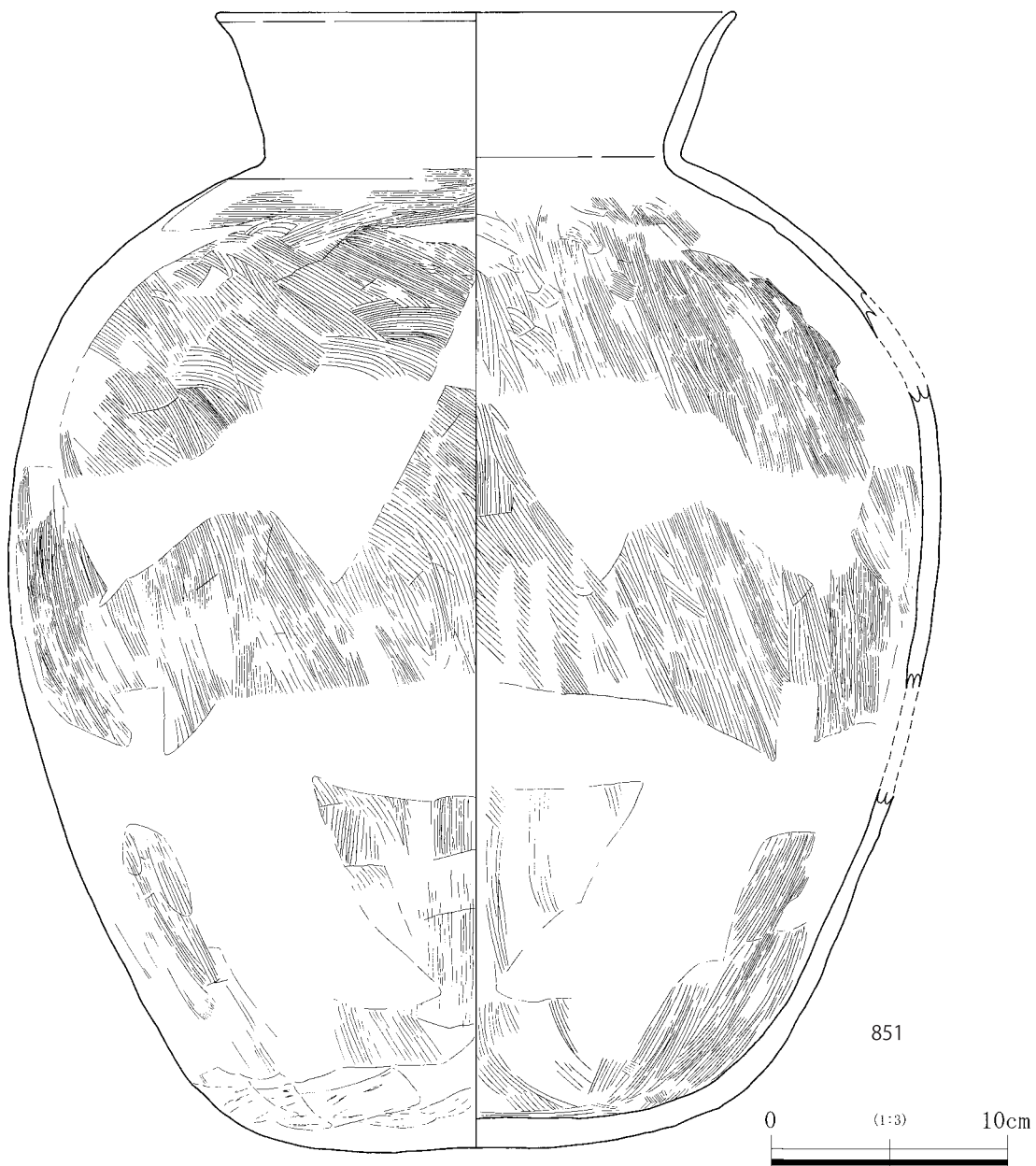


図142 流路1-3域 出土遺物 6



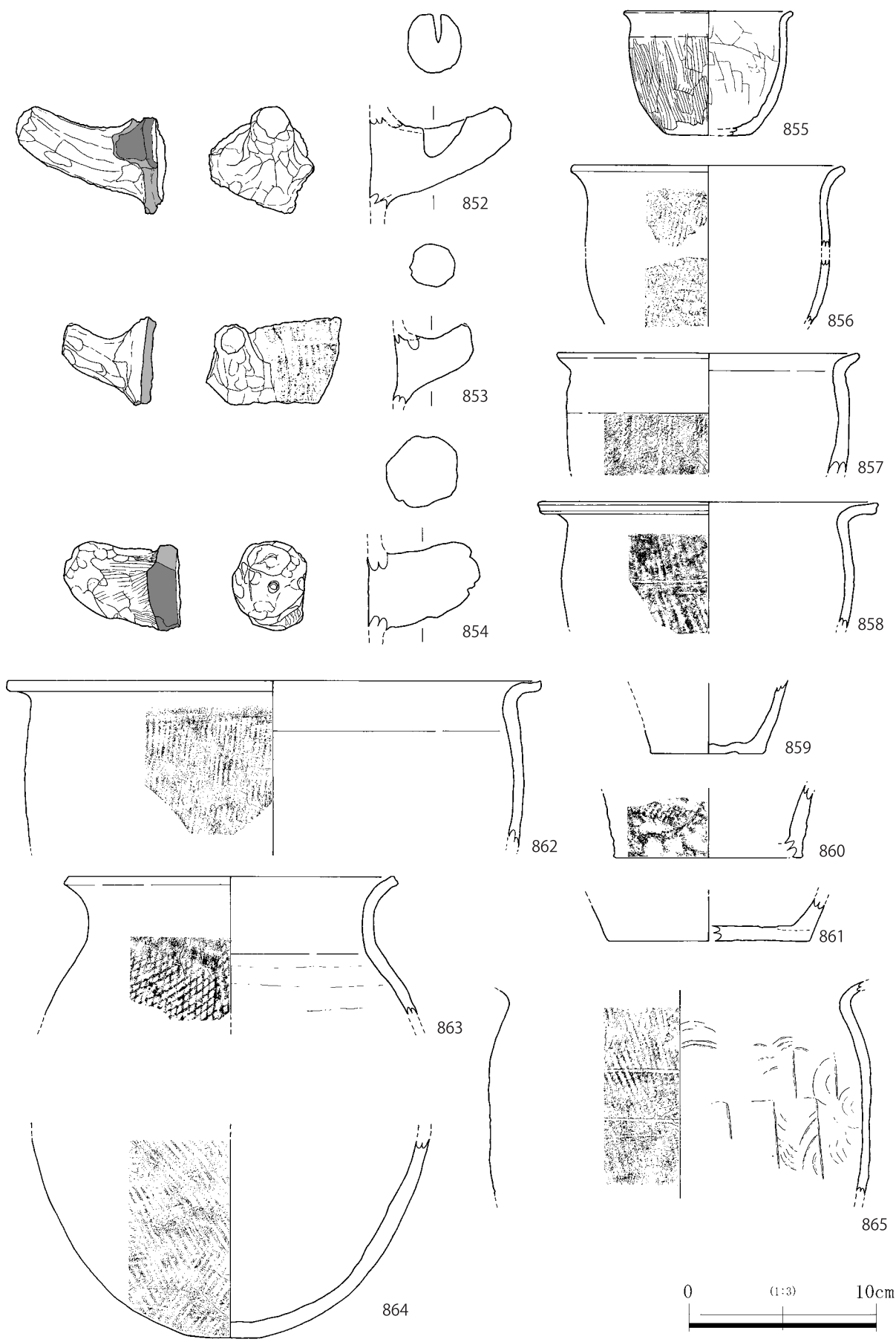


图143 流路1-3域 出土遺物 7

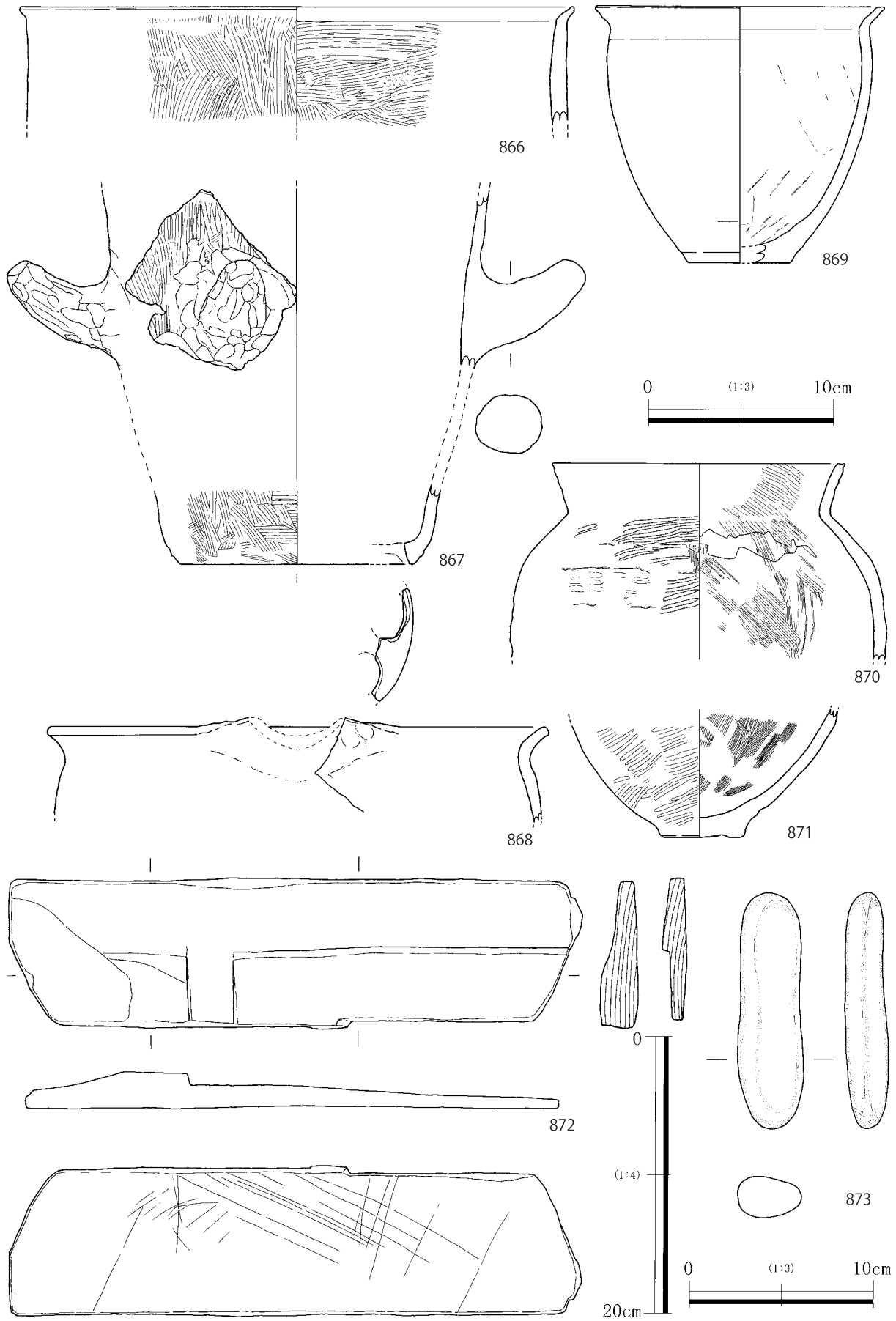


图144 流路1-3域 出土遺物 8

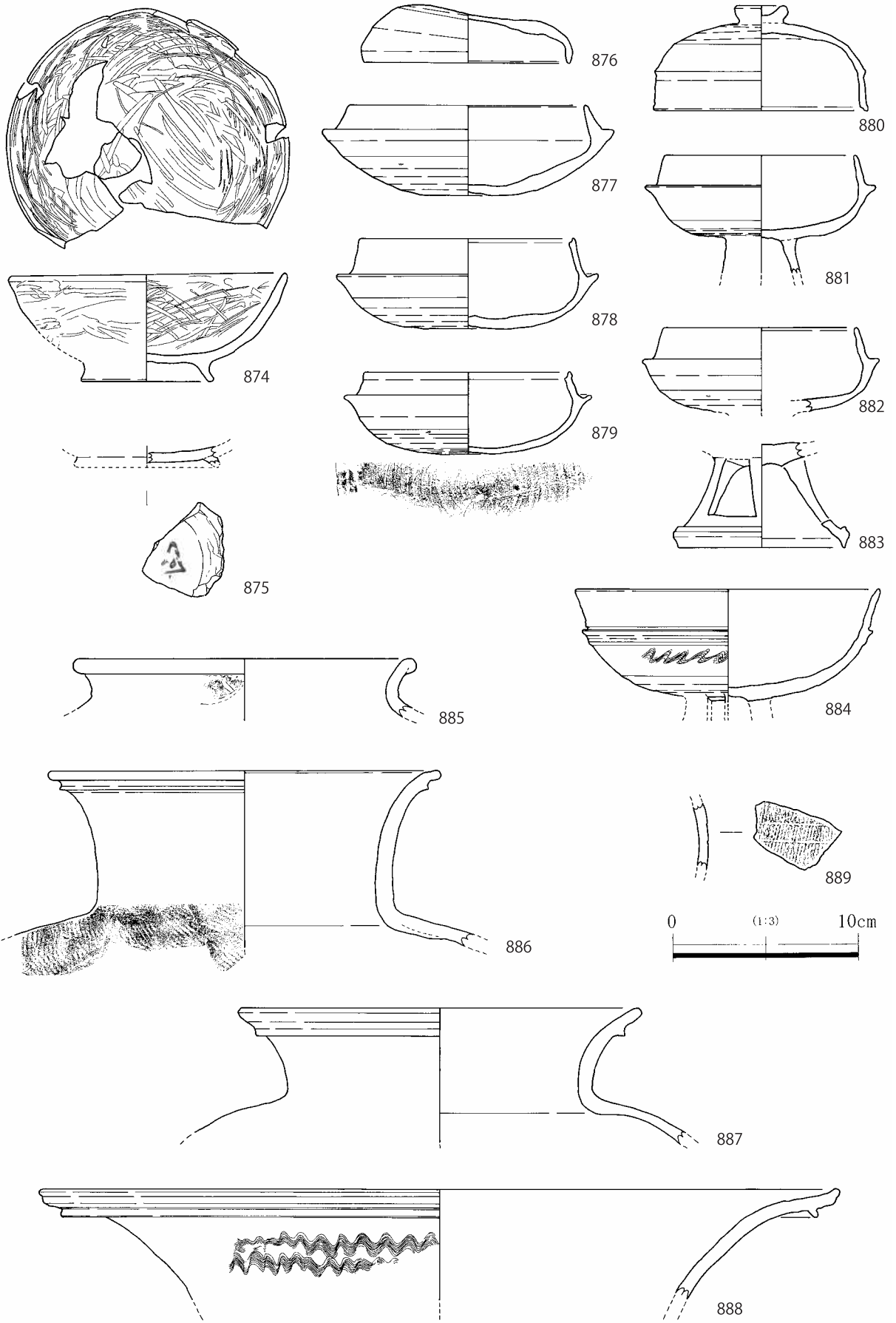


图145 流路1-3域 上層出土遺物 1

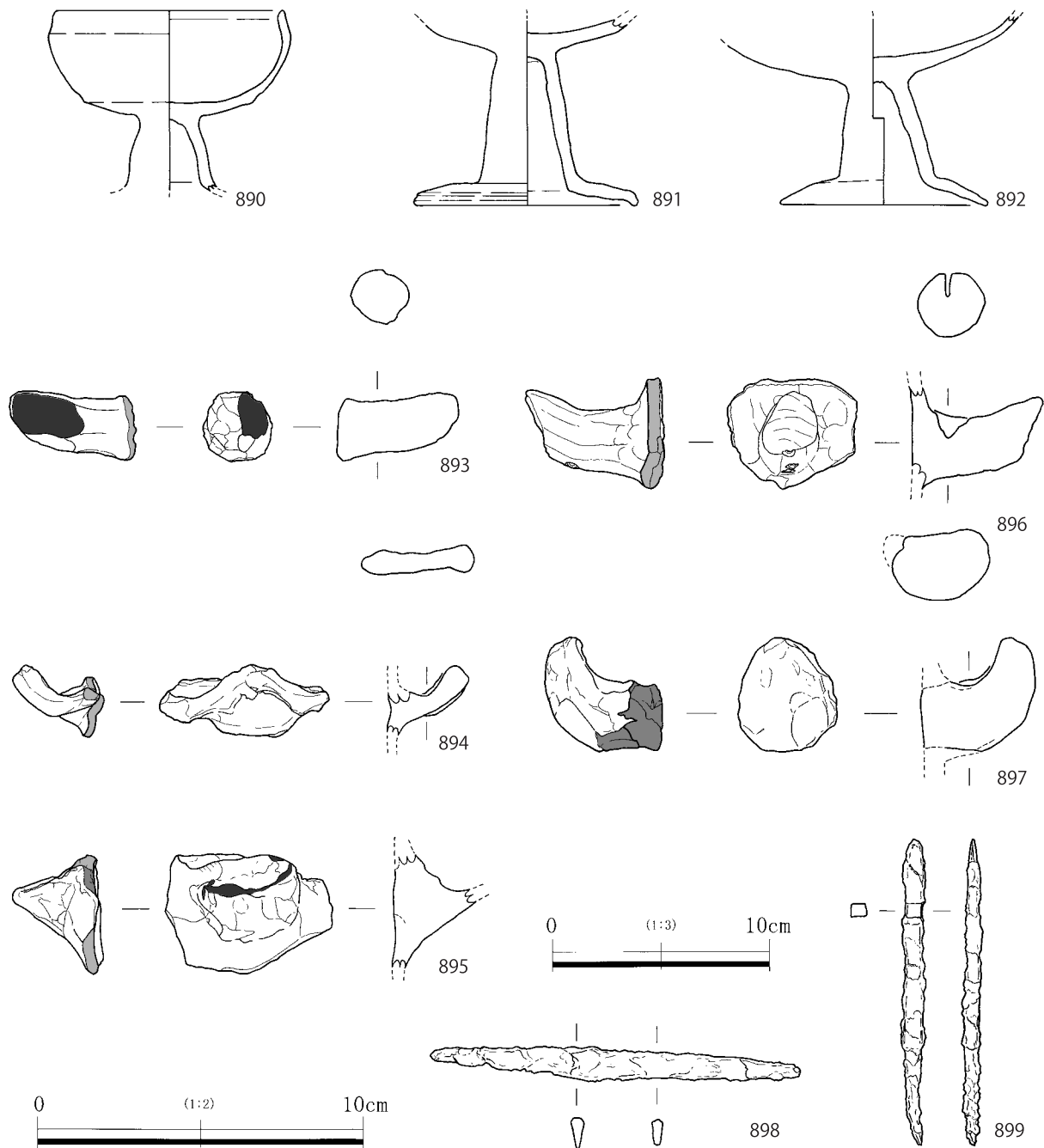


図146 流路1-3域 上層出土遺物 2

図144-866は土師器甑の口縁部かと考えられる。867は甑の底部と把手付近の部位である。868は土師器の鉢で、わずかな部位からの推測ではあるが、片口になる可能性がある。869は平底をもつ甕で、韓式系土器平底鉢の影響を受けた土師器であるのか、弥生土器の形態を残すものであるのかについては判断に迷う。870、871は外面にタタキを残す甕で、弥生土器である。

872は板状の木製品で、用途は不明である。片面は平坦であるが、一方の面に複雑な段差を削りだす。端面などに二次的な加工がなされた可能性があり、何らかの建築材などの転用材かと考えられる。樹種はヒノキ科である。

873は石製品で、用途は不明である。自然石の可能性もあるが、基本的に自然石が流路堆積物中に混ざる可能性は低いと考えられ、自然遺物ではないと考える。石材は砂岩である。

図145、図146には流路1-3域の上層に当たる第1-5層、第2a層出土の遺物を配した。

図145-874は黒色土器A類の椀で、比較的残存率が高い。875は土師器椀の高台部分と考えられ、底部外面に墨書がみられるが、判読できない。874・875は流路に伴う遺物ではないと考えられる。876-879は須恵器坏で、5世紀後半から7世紀のものを含む。876の蓋は口径11cm程度のもので、流路埋没後のものである可能性が高い。879は底部外面にヘラ記号がみられる。880-883は須恵器有蓋高坏で、881は脚接合部の径が小さい特徴をみせる。884は須恵器無蓋高坏である。885は須恵器甕で、短く外反する頸部外面にヘラ記号がみられる。886-888は中～大型の須恵器甕で、口縁端部には初期須恵器の特徴を残す。889は須恵器あるいは陶質土器の細片で、外面に縄蓆紋タタキと沈線が認められる。

図146-890-892は土師器高坏である。893-897は把手で、896は韓式系土器、ほかは土師器である。

898は鉄製の刀子で、残存長11.4cm、幅1.0cm、厚さ0.45cmを測る。全体的に錆化が著しく、残存率も低いと考えられる。899は鉄鏃で、やはり錆化が著しく詳細は観察しがたいが、柳葉の鏃身をもつ長頸鏃と考えられる。全長は9.4cm、幅0.7cm、厚さ0.4cmを測る。鏃身長は5.5cmで、側面は直線を呈する。

#### 流路1-4域出土遺物（図115～図136）

流路1-3域は03-5-1、03-5-3、03-5-10、06-2-2、06-2-3トレンチの範囲で検出した部分で、検出長はおおむね95mを測る。流路1の細分は調査単位を基準にした機械的なものであるが、結果的に流路1-4域は最も広い範囲を含むこととなった。また冒頭に記したように、この区間の様相は流路1-1～1-4域と比較し、規模等において大きく異なるものである。また遺物の出土量も多く、直上層出土のものも含め、794点の遺物を図示することとなった。図示し得た流路1全体の出土遺物数における割合では6割を超えるものであり、検出長と流路幅が大規模であるとはいえ、一区間における出土量としては多いものとなる。実際の出土状況も非常に多くの遺物が出土するものであり、逐一の記録が及ぶものではなかった。したがって出土状況の記録についても、図示し得るものはなく、特記すべきものについては写真を図版45に掲出した。冒頭に記した土馬と滑石製白玉の分布は特徴的であり、祭祀行為の痕跡であると推測するが、他の遺物については祭祀にかかわるものが含まれていたとしても、流路内への投棄という状況を想定するととどまるものである。流路のほかの区域同様、完形土器の出土はみられず、破損した遺物がほぼ全体を占める。図化し得た遺物については土器類、木製品類、石器、鉄器を掲出したが、ほかに写真のみ掲載した石製遺物が46点、滑石製白玉781点がある。さらに種を同定した動物遺存体46点、樹種同定のみ行った木材66点があり、動物遺存体の同定結果については巻末一覧表に、報告書に掲載していない木材の樹種については第5章第2節表1に掲載する。

図147-153には03-5-1、03-5-3トレンチの範囲に属する土器を示す。

図147には03-5-1トレンチにおいて流路1-4域において堆積物の掘削中に確認した溝（流路）出土の遺物を配する。流路1-4域の堆積物を切る形で埋積する流路であり、最終的には流路1の再掘削にかかわる遺構であり、一連のものとして理解するが、遺物については分離が可能であることから別掲する。900は須恵器の把手付鉢であるが、把手を欠失する。体部外面中位を突帯と波状紋で飾る。901は須恵器あるいは陶質土器の壺で、外反し、端面をもつ口縁部を有する。頸部に装飾はみられない。902は須恵器の壺で、頸部外面には突帯と波状紋により加飾する。903、904は土師器甕口縁部で、古式土師器の特徴を残すものである。905は小型の土師器鉢である。906-909は土師器高坏で、905も併せて比較的類似する、赤褐色の色調をみせる。椀形の坏部の内面には精緻な放射状のミガキを施しており、丁寧なつくりとい

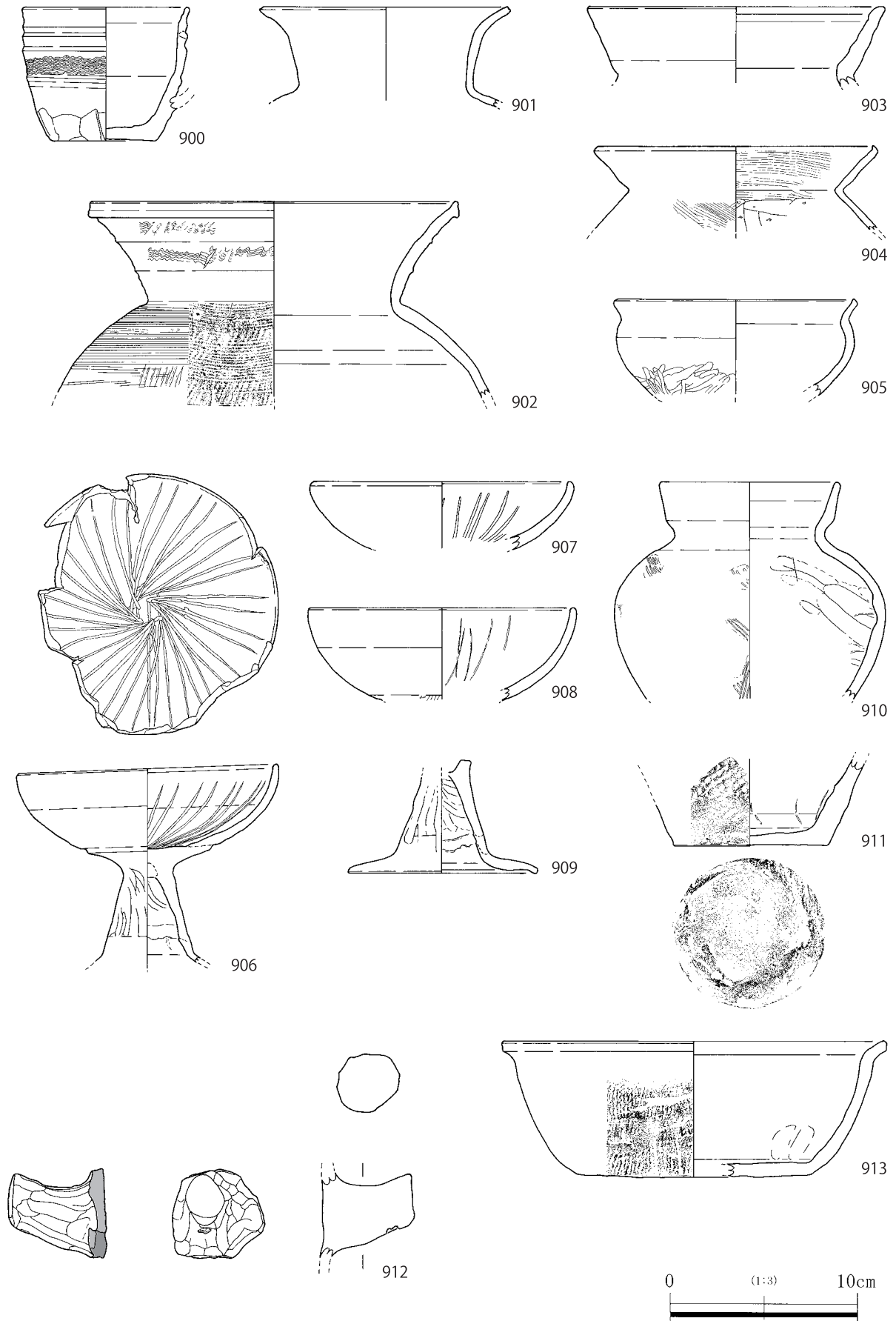


图147 流路1—4域 出土遺物 1



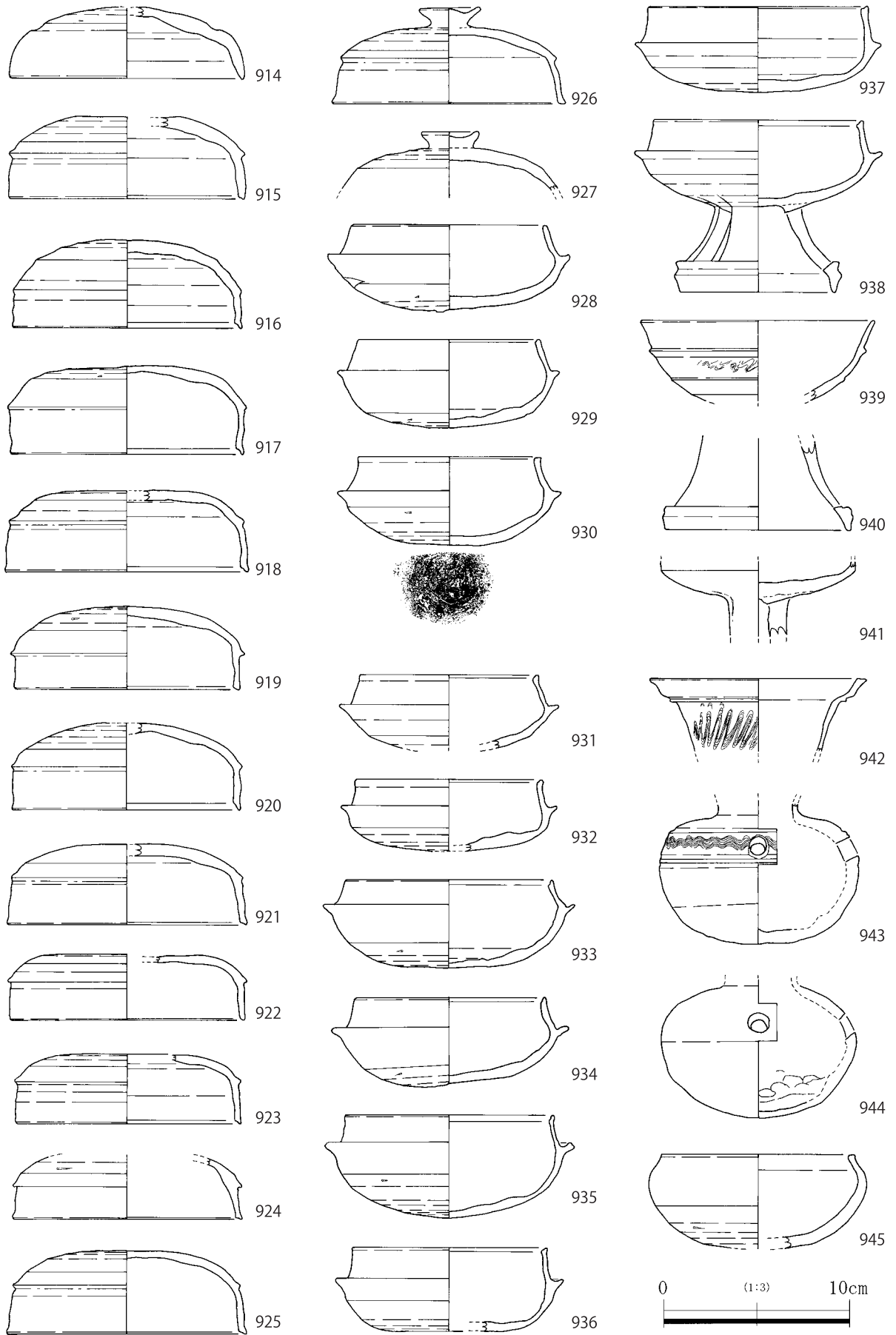


图148 流路1-4域 出土遺物 2

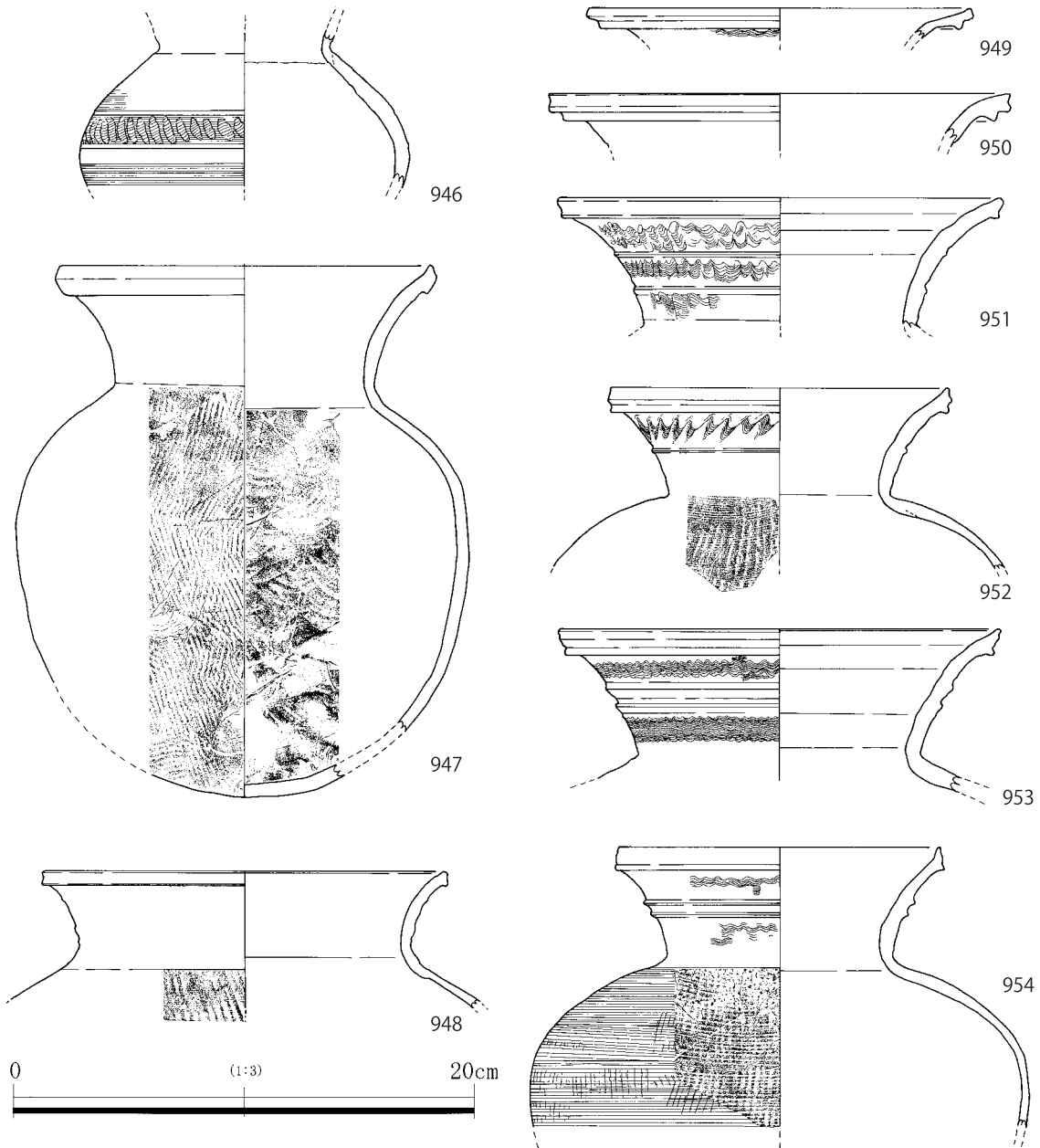


図149 流路1-4域 出土遺物 3

える。910は土師器壺で、複合口縁状に直立する口縁をもつ。911は韓式系土器平底鉢で、底部付近のみの残存であるが、体部外面に格子タタキを施し、底部外面にゲタの痕跡を残す。912は韓式系土器の把手で、断面形は円形を呈し、下面に刺突痕跡を残す。913は韓式系土器の浅鉢で、器高に比して、口径が広い形態をもつ。体部外面には縄蓆紋タタキを施し、底部外面には不明瞭な台の痕跡を残す。底部の拓影については図291に掲出する。

図148～図149には須恵器を示す。914～925は坏蓋、926・927は有蓋高坏の蓋である。918の天井部内面には同心円当て具の圧痕が残されており、拓影を図292に掲出する。929～937は坏身で、930の底部外面には針状の繊細な工具による線刻がみられる。938は有蓋高坏、939は無蓋高坏であり、把手の痕跡が認められる。940、941は高坏の脚である。941は長脚のものと推測され、スリット状の退化した透かしが3方向に施される。942～944は須恵器縁で、943は底部内面に同心円当て具の圧痕がみられ、944には底部内面に突き出しの痕跡が認められる。945は須恵器の鉢で、片口かと考えられるが、残存率が低いためや

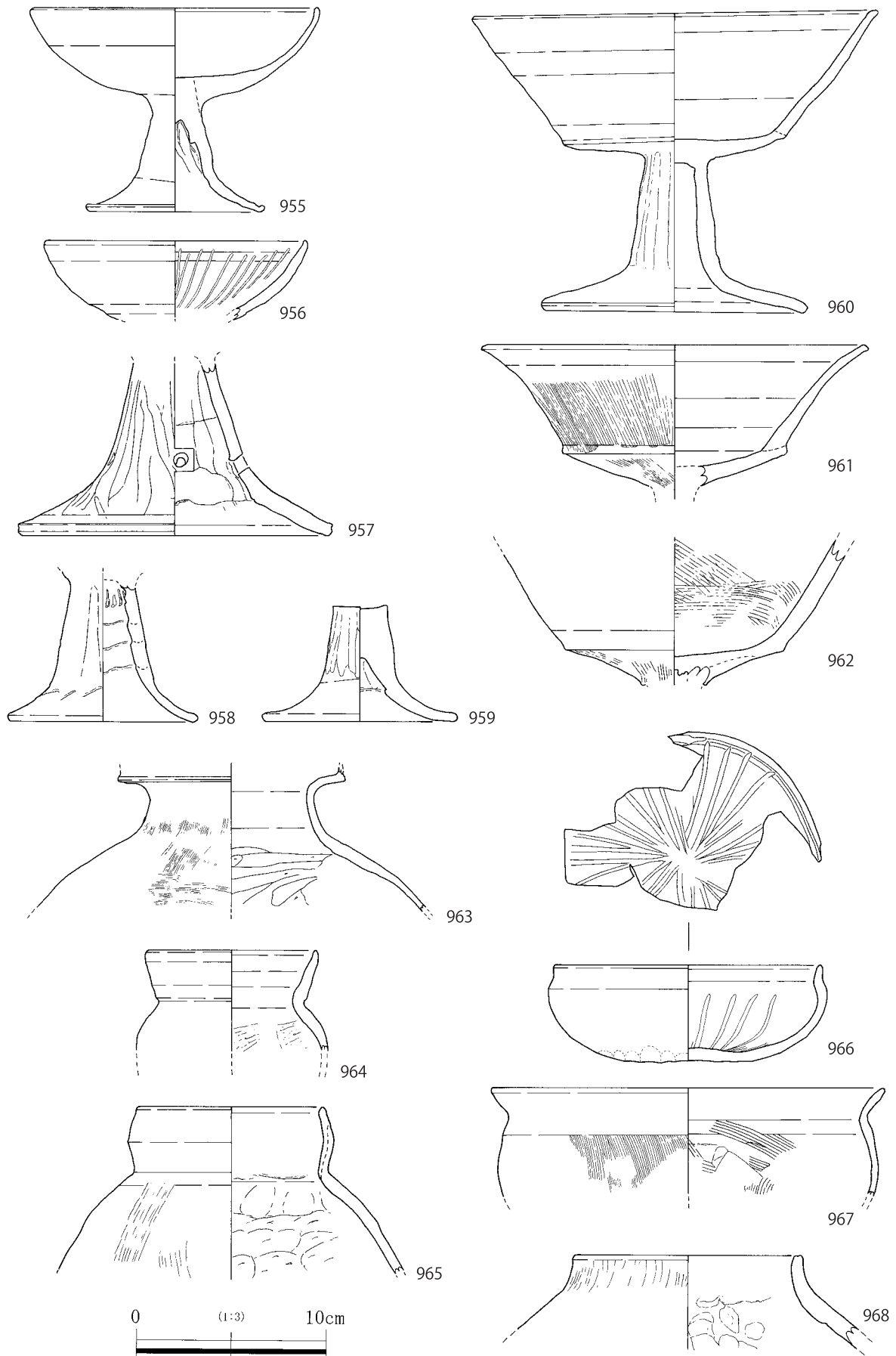


图150 流路1—4域 出土遺物 4

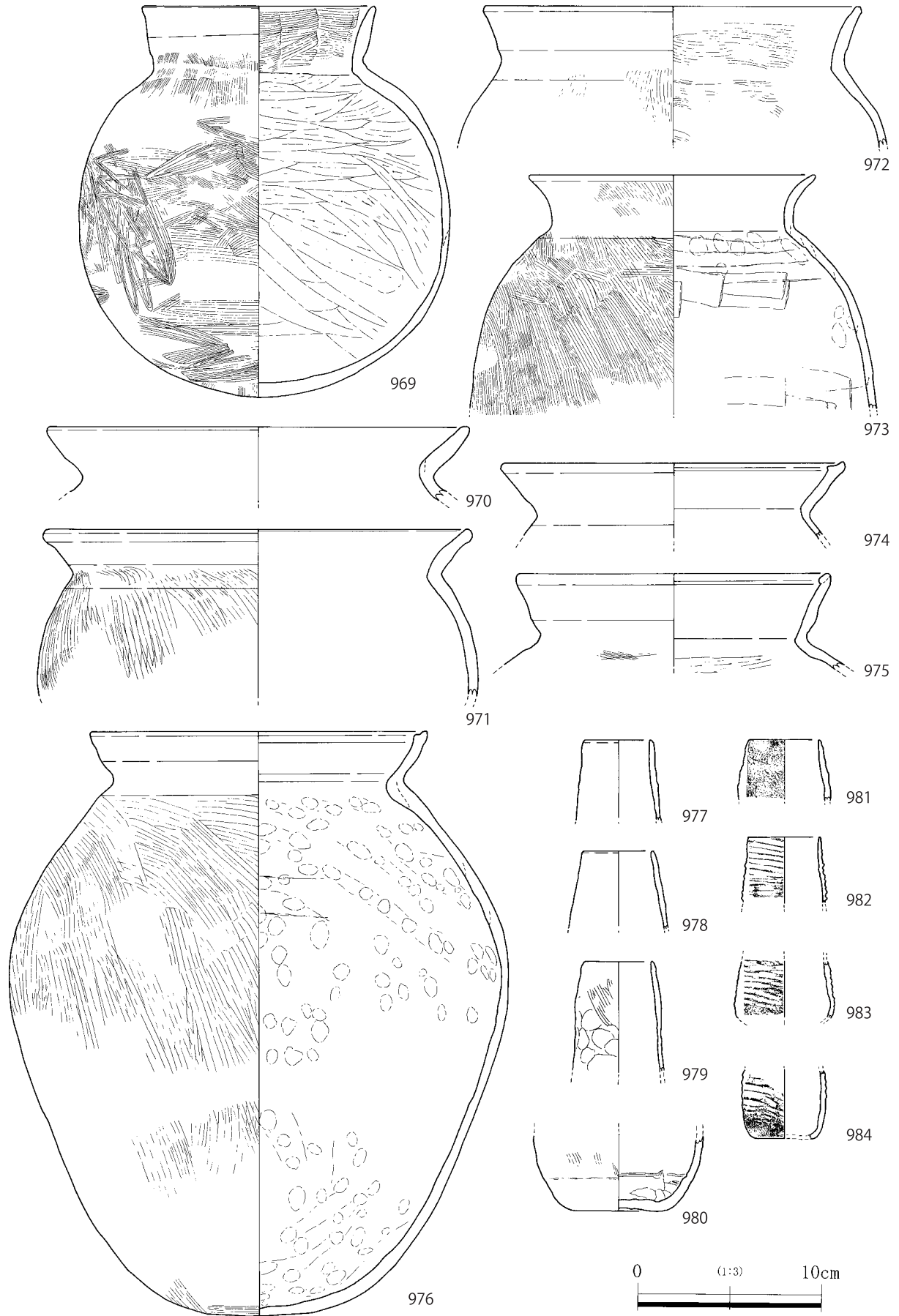


图151 流路1-4域 出土遺物 5

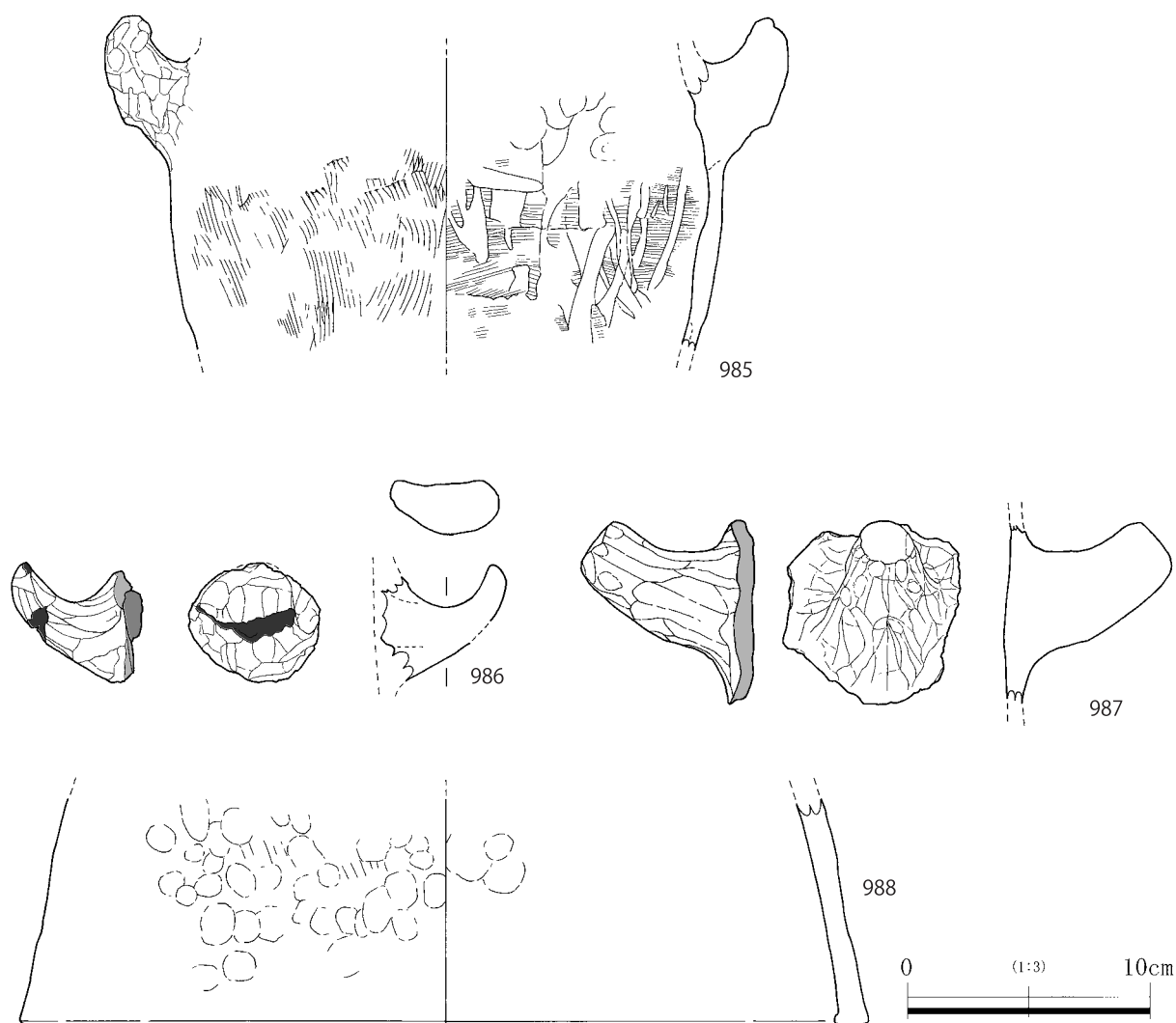


図152 流路1-4域 出土遺物 6

けひずみの可能性も残る。図149-946は須恵器壺の体部片で、2条の沈線によって画される紋様帯に刺突列点紋を施す。947も須恵器壺で比較的良好に復元することができた。体部外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕を残す。948-954は須恵器壺で、口縁部付近の残存するものである。948・949は比較的薄手で精緻な作りである。

図150-図152には土師器を示す。955・956は塊形の坏部をもつ高坏で、956の内面には放射状のミガキが認められ、906などと同じ類型に属する。957-959は高坏の脚部である。957は大型の高坏脚で、円形の透かしを4方向に配する。脚端部内面に布圧痕がみられ、製作時の痕跡かと考えられる。959は脚柱部上位が中実である。960は口縁の一部を欠くが、比較的全容がわかる形で復元ができたものである。961・962とも高坏の坏部であるが、961は外面の、962は内面のハケメが目立つ。964は小型の壺で、965は残存率の低い個体であるが、ゆるやかに屈曲する口縁部をもつ壺である。内面にヘラケズリを施す。966は坏で、底部の調整には一方向へのヘラケズリを施している。内面に放射状のヘラミガキが施されるが、胎土や色調は同じように放射状ミガキを施す907などとは異なっている。967は中型の鉢であるが、煮沸に供された可能性がある。968は無頸壺で、特異な形態である。

図151-969は中型の甕で、まっすぐにのびる口縁部をもち、体部内面は頸部付近にまでケズリを施し、外面はハケで調整する。ススコゲの付着が顕著かつ、その残存状態の良好な個体である。970-972は比

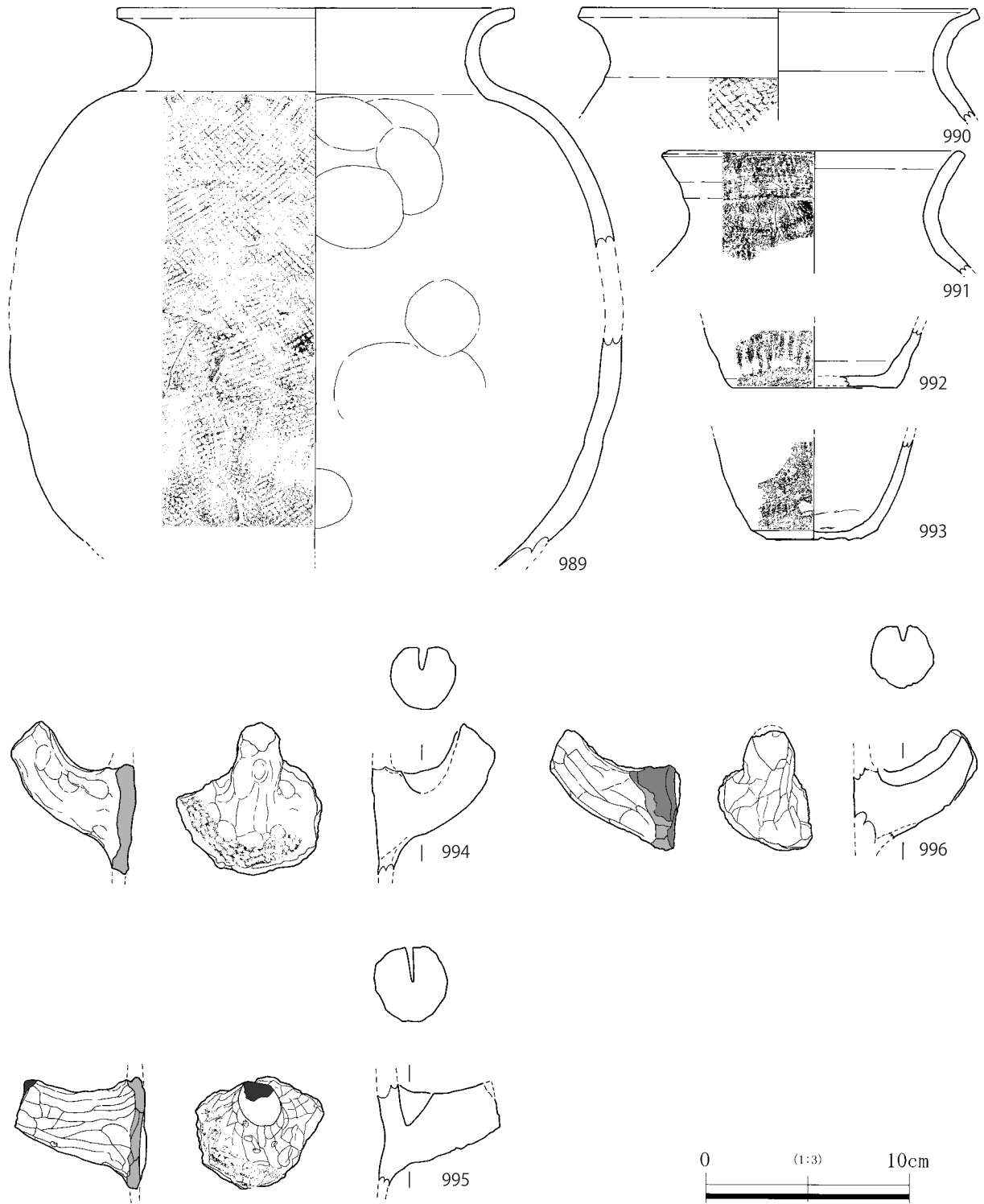


図153 流路1-4域 出土遺物 7

較的口径の大きい甕で、口縁部付近の残存である。973は長胴甕の体部から口縁部で、外面には密にハケを施し、内面には板状工具によるナデの痕跡がみられるが、肩部付近では接合痕跡もよく残る。974・975は古式土師器の特徴を残す口縁部をもつ甕で、口縁端部内面の肥厚が認められる。976は長胴甕と布留型甕の折衷形態ともいえる甕である。全形は復元によるため正確さを欠く可能性があるが、比較的長胴ではありながら、体部最大径をその上半におき、やや尻すぼみの形態をもつ。口縁部は内湾気味ののび、端部内面を肥厚させる。体部の外面はハケで調整し、内面には指頭圧痕を残し、ケズリによる調整



はみられない。977～979・981～984は製塩土器で、977～979・981は外面をナデにより調整する丸底のもの、982～984は外面にタタキ調整を施す丸底のものと考えられる。980は平底を呈するが器種は良くわからない。外面にハケ、内面に板状工具によるナデを施すが、つくりは総じて粗い。

図152～985は把手付の鍋かと考えられる。内外面ともハケ調整を基調とする。968・969は土師器把手で、986は体部との接合関係を良好にすることができる資料である。988は移動式竈の裾部と考えられる。

図153には韓式系土器を配する。989～991は甕で、体部の外面には989・990には格子タタキを、991には縄蓆紋タタキを施す。992・993は平底鉢で、両者とも外面には平行タタキによる成形・調整が施され、993はさらにそれをナデ消しているようである。994～996は把手で、994は上面からの切込みがあり、下面に刺突は無いが、何らかの工具が当たったような圧痕がみられる。995にも上面からの切込みと下面に刺突痕跡が複数認められる。

図154～図167には03-5-10トレンチの範囲から出土した土器を示す。

図154～図159には須恵器を示す。997～1020は坏蓋で、997～1000がほかのものとやや断絶して相対的に新しい時期のものである。999の天井部外面には「井」字状のヘラ記号が施される。拓影は図292に掲出する。1021～1027は有蓋高坏の蓋で、大きな時期差はみられない。つまみの形状は1021のものは中央が盛り上がる形をとるが、ほかのものは周囲が盛り上がる形をとる。1028～1044は坏身で、坏蓋同様、1028のみがやや隔絶した新しい時期を示す。1030・1033・1035・1036の底外面にはヘラ記号が認められる。図154・図155に示していない拓影も含め図292に掲出する。1045～1066には高坏を示す。比較的まとまった時期に属するものが主体となるが、1064は陶質土器に近い形態をもつ初期須恵器かと考えられ、時期的にさかのぼると考えられる。1060・1061は直線的に延びる短い脚部をもつもので、特徴的である。1065・1066は須恵器として掲出するが、焼成は酸化炎焼成であり、土師器同様の色調を示す。焼成のみならず、1065は脚端部形状もやや特異である。1067～1086は壺、あるいは甕で、規模・形態ともバリエーションに富む。頸部外面にヘラ記号を施すものに1075・1082があり、頸部内面にヘラ記号を施すものに1084がある。1087・1089は把手付鉢で、分量に違いがあるが基本的なプロポーションは共通する。樽形の体部の中位付近にゆるやかな突帯をもって紋様帯を巡らし、この内外部に波状紋を巡らし、加飾する。把手付鉢、有蓋高坏とも把手自体の遺存する例に欠けるが、1088はこれらに付くべき把手であろう。細かな面取りにより表面を調整する。1090は小型の壺で、残存部位が少ないため口径の復元も難しいが、短く外反する口縁と体部外面を飾る波状紋が特徴的である。1091は鉢で、体部から一連に内湾する口縁端部を丸く収める。形状は945に近いが端部の形態は異なるものである。1092～1096は罎で、小型のものと大型のものがある。穿孔部付近の装飾には波状紋を施すものと、列点紋を施すものがある。1093は底部外面にヘラ記号がみられ、1095の体部肩付近には別個体片の溶着がみられる。1097～1099は短頸壺で、1099は比較的甘い焼成で、底部外面にタタキの痕跡を、内面に当て具の痕跡を残す。1100は樽形罎で、比較的残存部位が多く、口縁部を除く全容をすることができる。体部の閉塞は片側の小口面をふさぐことで行い、わずかな接点のみで接合している。口縁部直下の体部内面に自然釉の付着がみられ、口縁を上にした形で焼成したものと考えられる。外面の加飾は沈線を4条巡らすことにより体部を5分割し、中央寄りの3条に波状紋を巡らし紋様帯としている。1100の破片の多くは流路1～4域からの出土であるが、接合する小口の破片が03-5-5トレンチの第1-3層から出土しており、およそ200m離れた場所からの出土となる。1101は鉢かと考えられるもので、口縁端部に内傾する面をもち、やや内側に肥厚する。残存率が極めて低いもので詳細は不明であるが、口縁部内面には粘土紐の接合痕跡を残す。1102も小片

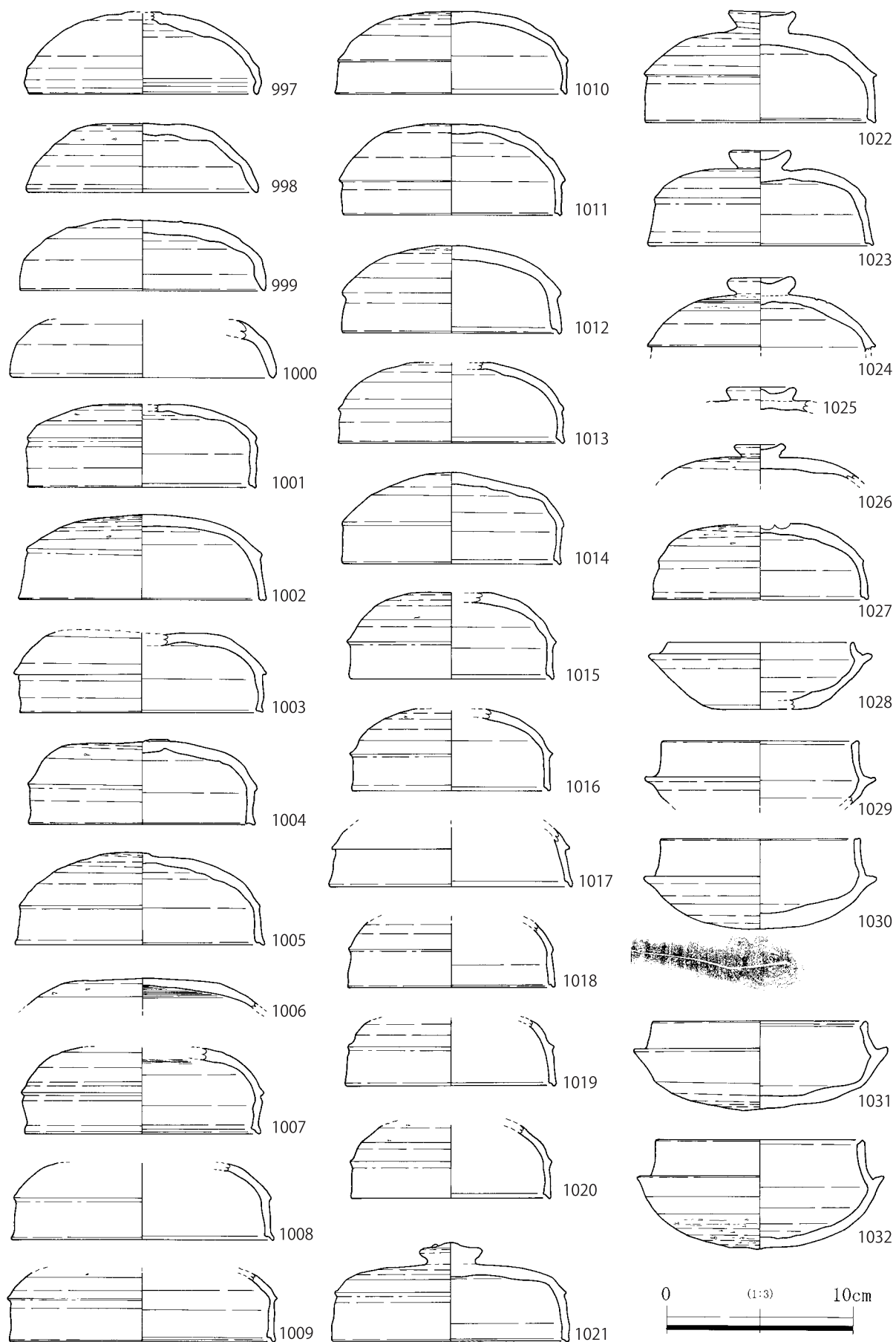


图154 流路1—4域 出土遺物 8

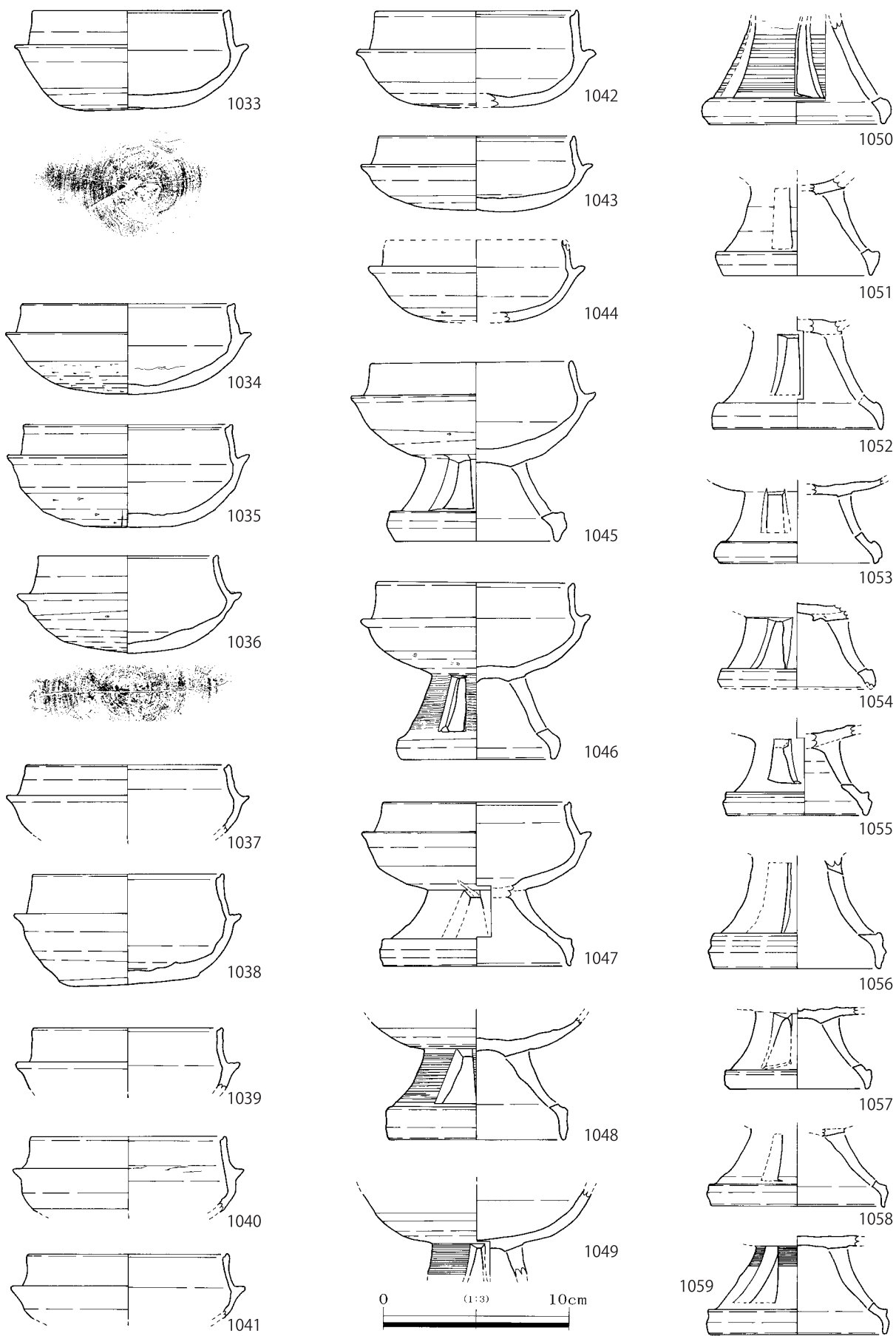


图155 流路1-4域 出土遺物 9

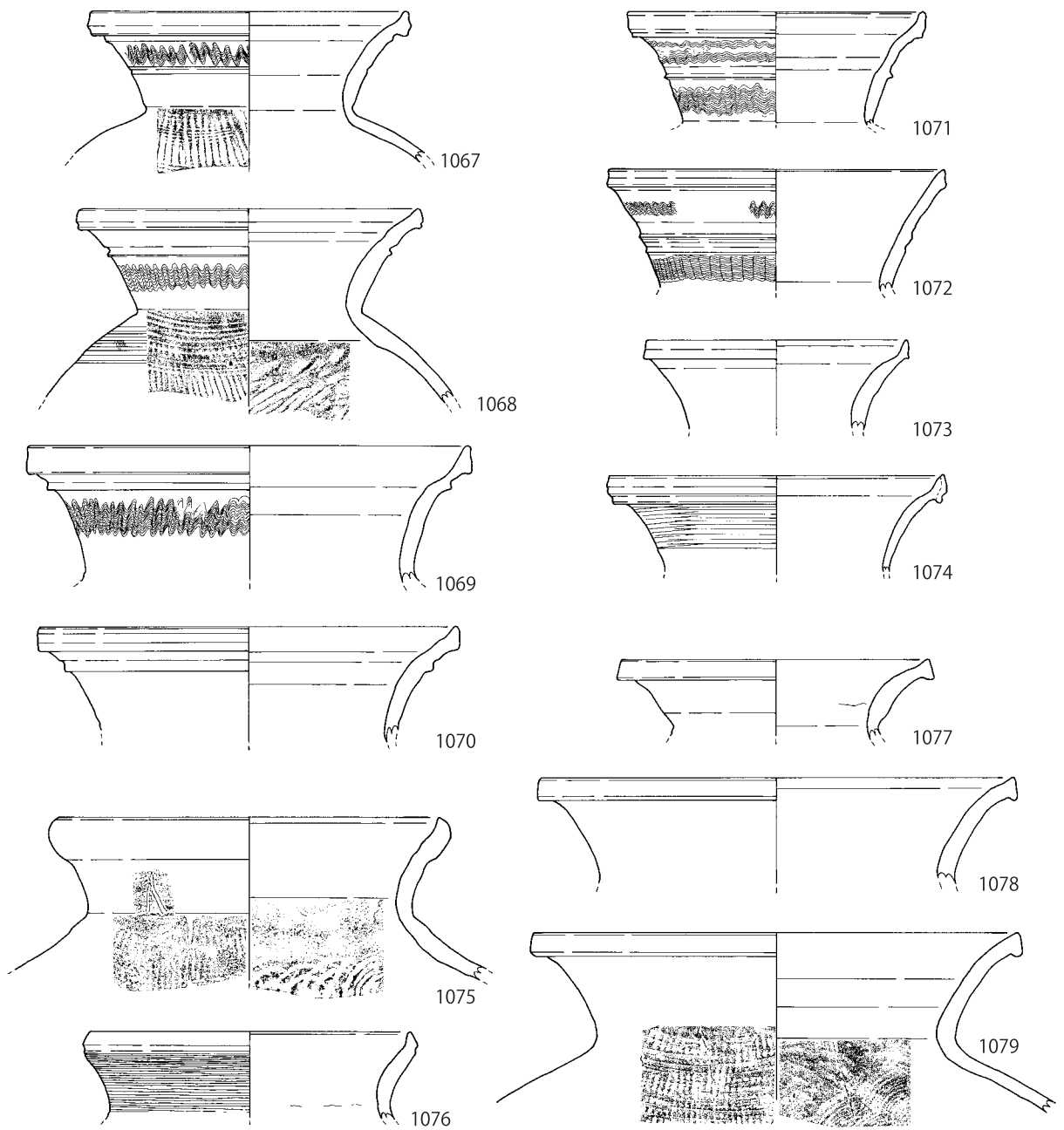
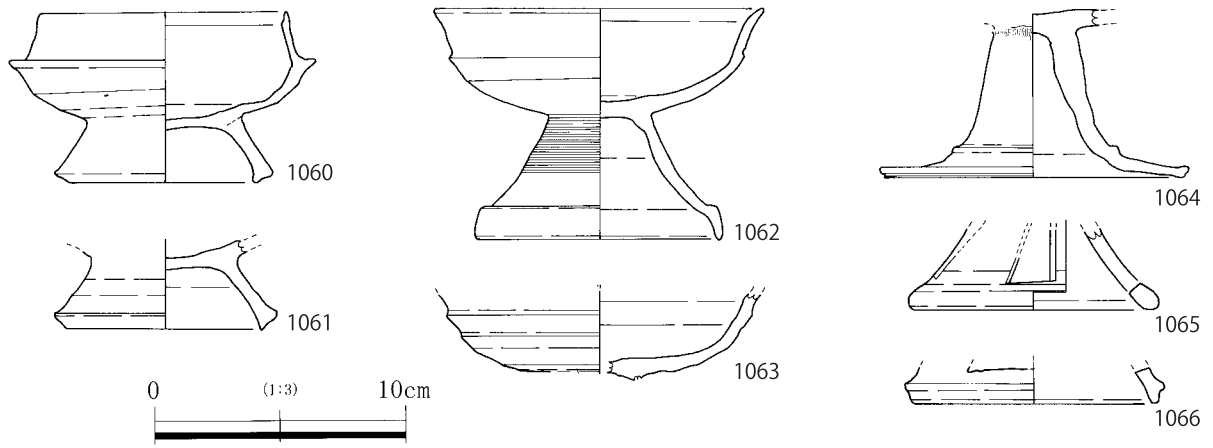


图156 流路1—4域 出土遺物10

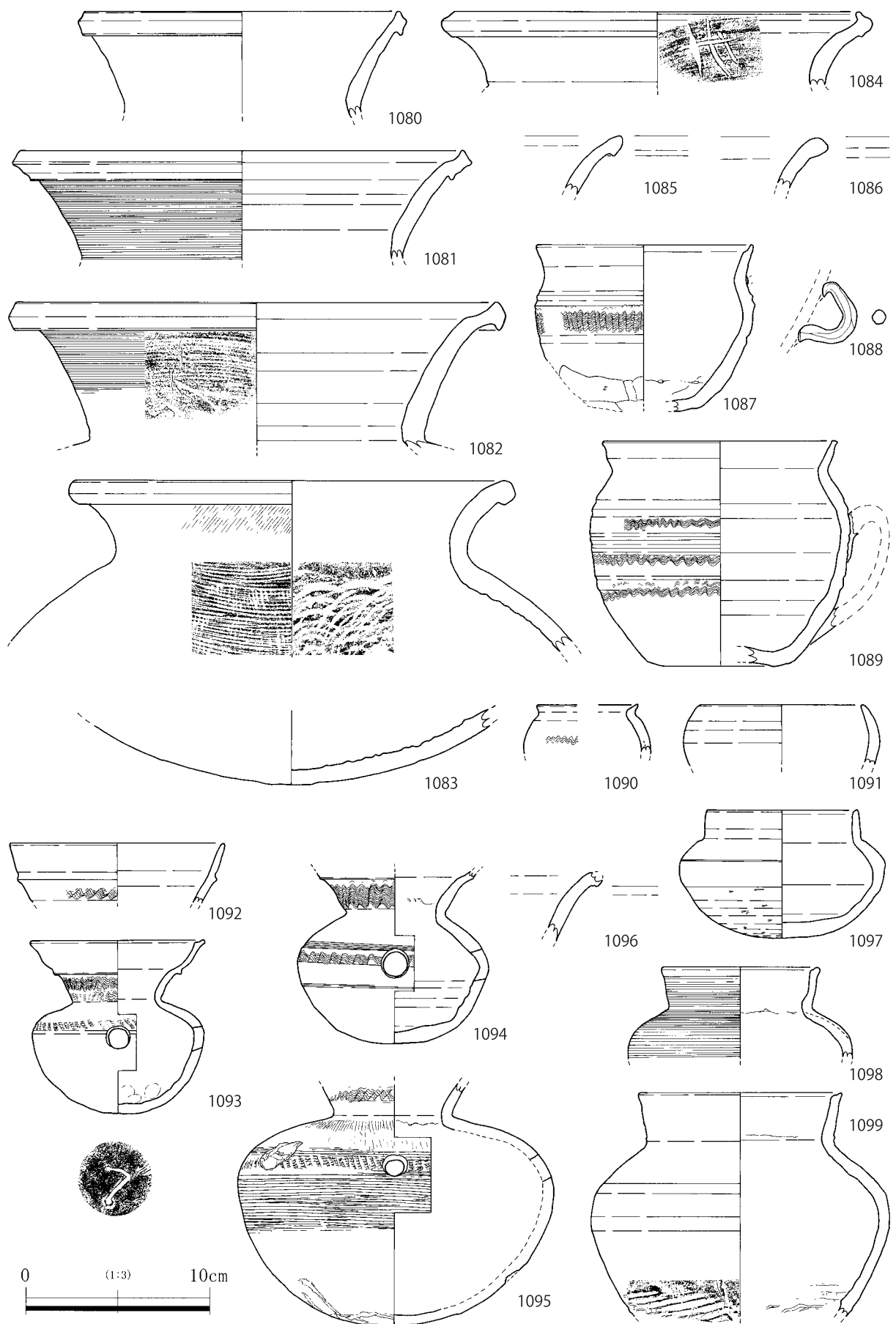


图157 流路1-4域 出土遺物11

のみ確認できる個体で、やや外反する体部外面に突帯を巡らし、その間に波状紋を巡らし紋様帯とする。高坏形器台の坏部かと考えられる。1103はやはり高坏形器台の坏部と脚部の接合部分で、脚部側には三角形の透かしが認められ、接合部突帯にはキザミメを施し装飾とする。今回の調査範囲では須恵器器台の出土は極めて少数であり、注目される。1104・1105は大甕で、残存部位に限られることから全容は不明であるが、体部最大径は45cmを超えるものである。体部調整はいずれも外面にはタタキ痕跡を残すが、内面の当て具痕について、1104は良く残るが、1105は半スリケシ程度のナデを施している。

図160～図165には土師器を示す。1106～1123は高坏である。法量や形態がバラエティーに富む。1106は坏部の底部と口縁部を画するように沈線を施すが、本来は境界に施していた稜の痕跡であろう。脚部も接合部が広めで、寸胴な印象がある。1110・1111は壙形の坏部で、同一個体の可能性もある。口縁端部に面をもち、端部内側は内面に小さく肥厚する。1113は大型の高坏で、残存率が低い部分的特長の可能性もあるが、口縁端部が受け口状に開く。脚との接合部には放射状のキザミを施していることが、脚部の剥離部分に観察される。1116は小型の高坏であるが、壙形の坏部に短く開く脚部をもつ。やや雑な作りである。1119・1120は接合部付近の脚部が中実のものである。1121は脚端部を欠くが、909などと同じ形状かと考えられる。1124は鉢かと考えられるが、赤褐色の胎土・焼成をみせるもので、906～907などと類似する。

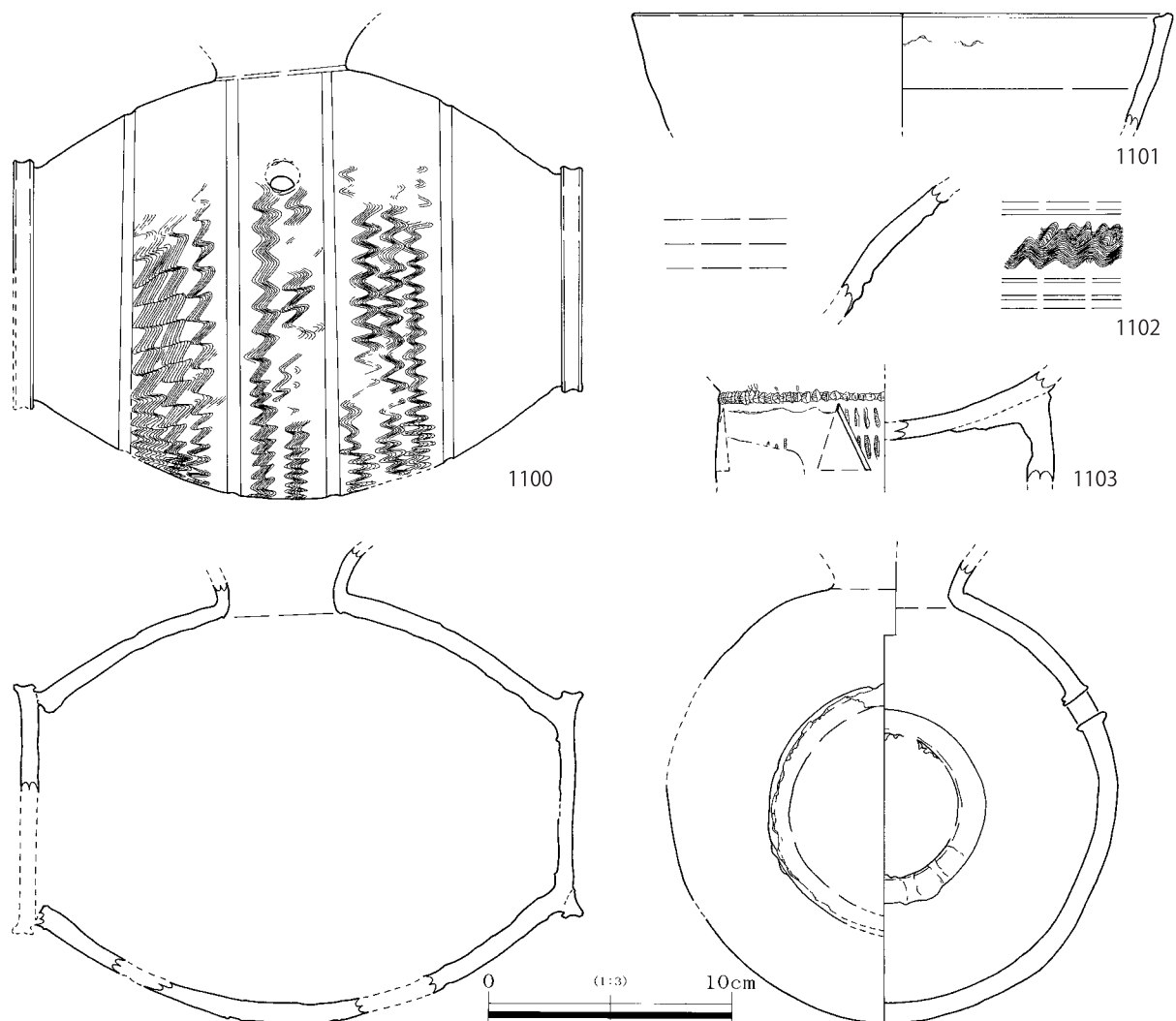


図158 流路1-4域 出土遺物12



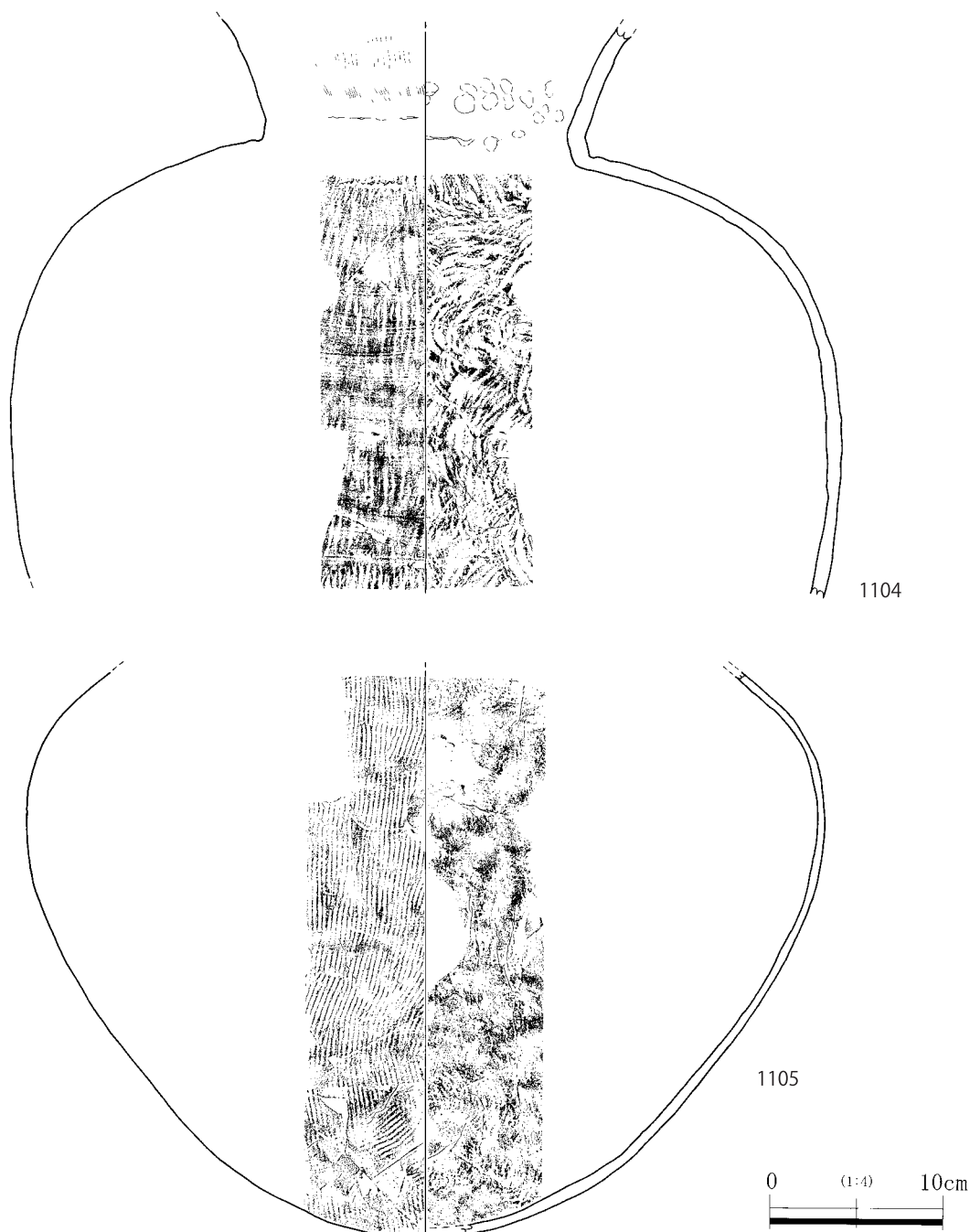


図159 流路1-4域 出土遺物13

図161-1125~1141には甕類を配した。1125は球形の肩部から短く外反する口縁部をもつもので、頸部内側に明確な稜を成形している。1126・1127も同様の頸部を示す。1131はやや外反した後、内湾し、端部を上方に丸く収めるもので、体部内面にヘラケズリを施しながらも器壁は厚く、古式土師器の影響を残す新しい時期の甕であろう。1132は口縁端部を上方へつまみ、体部内面に縦方向のヘラケズリが施される。1133は短く開く口縁部の内面に粗いハケを施し、平底に近い下膨れの底部をもつもので、高さは良くわからないが、流路の土器群の中では後出するものかと考えられる。1138は頸部から肩部にかけての破片で、内面にはヘラケズリを施し、外面にはハケメがみられるが、刺突痕跡のようなものが限られて破片においても2ヶ所、認められる。1141は外反する口縁端部に比較的しっかりとした面をもつものである。

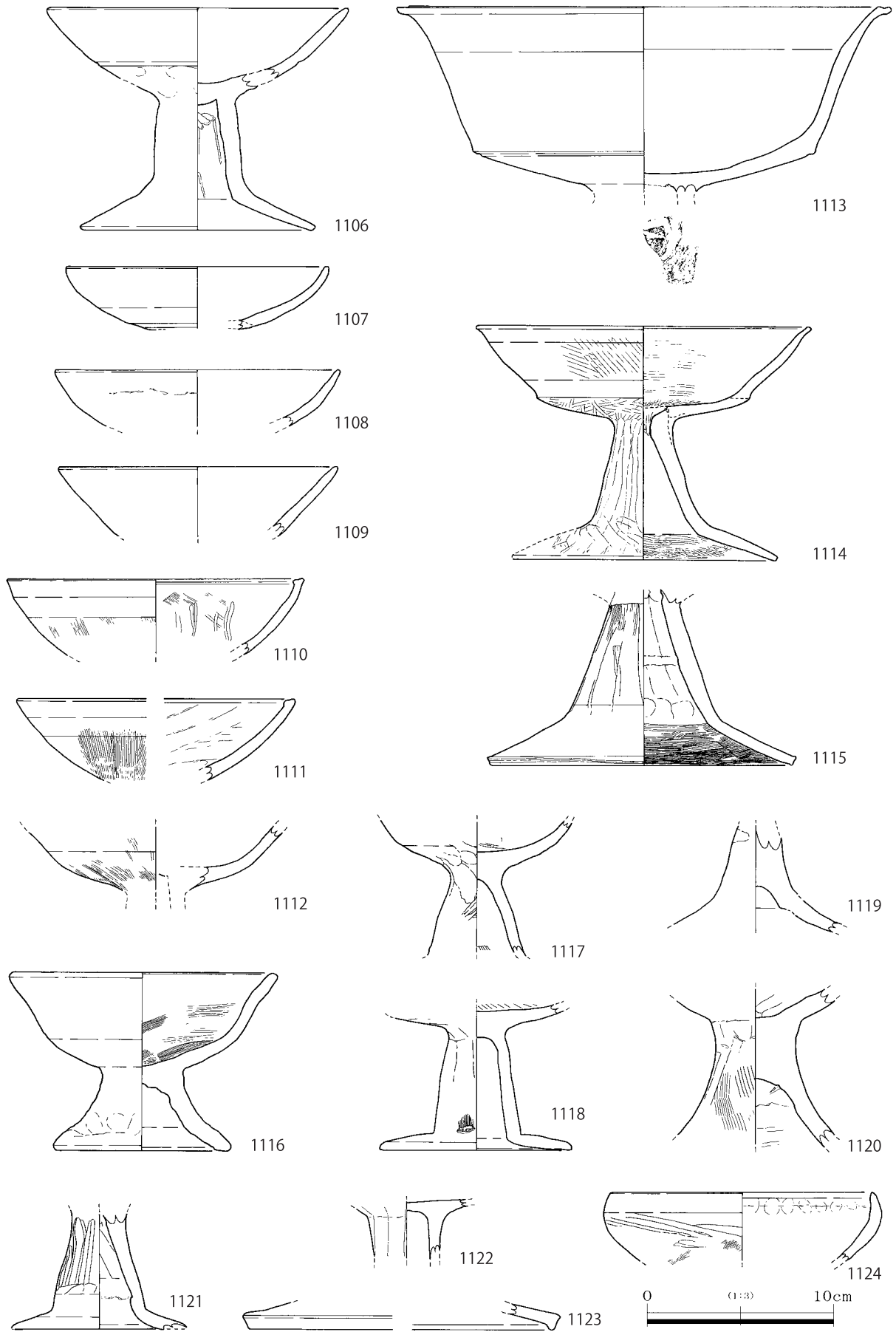


图160 流路1—4域 出土遺物14

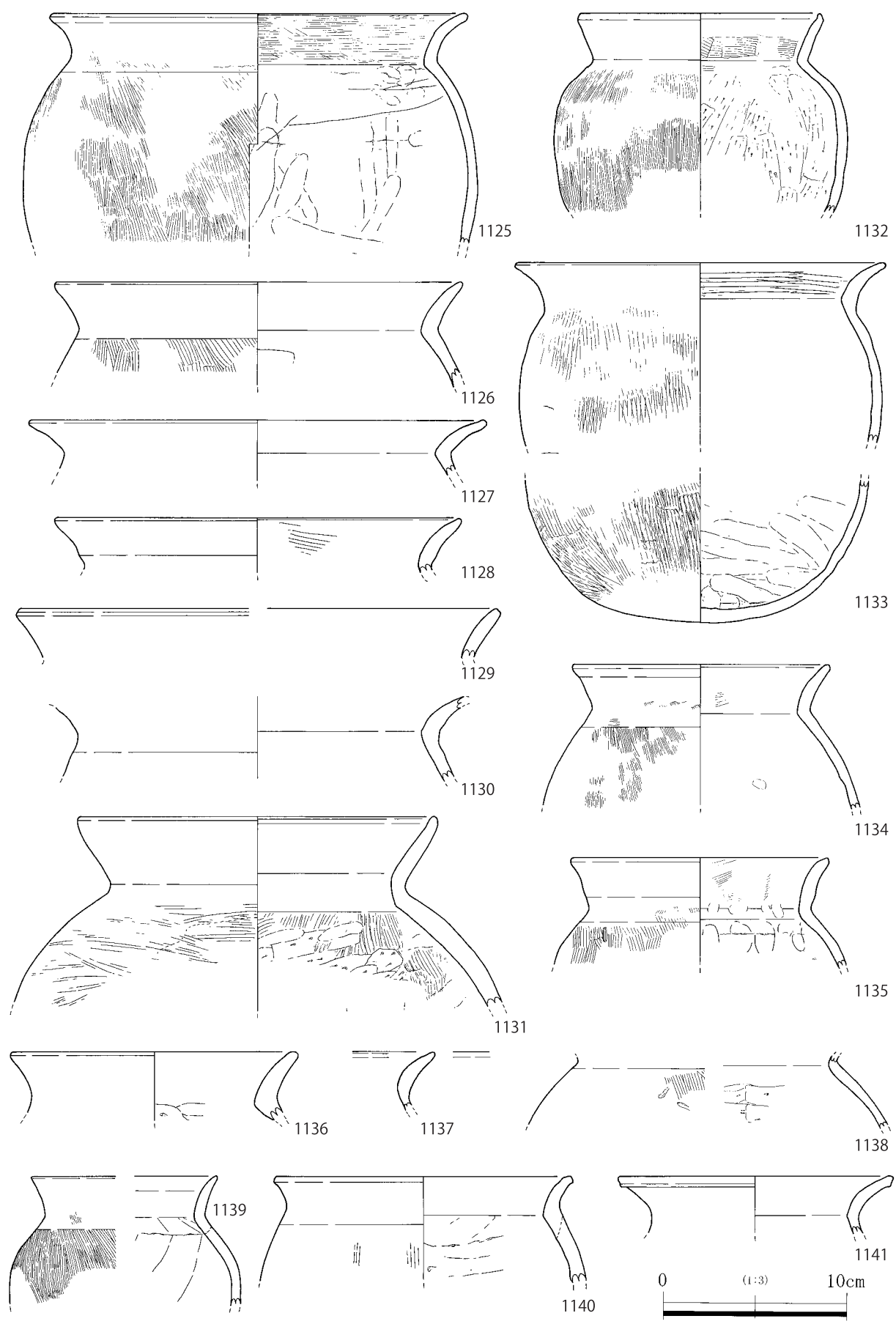


图161 流路1-4域 出土遺物15

図162-1142~1157には土師器の壺類を配した。壺類には体部まで遺存するものが少なく、口縁部の破片が中心となる。甕あるいは壺の分別が難しい個体も多い。1142は真っ直ぐのびる口縁部で、外面には縦方向のハケメを密に施し、中位付近に工具によるナデが施される。1143は上外方にのびる口縁端部に面をもち、沈線を巡らす。中型のものではゆるやかに外反するものと、直口のものがあるなかで、1147は厚い器壁をもち、短く外反する口縁をもつ特徴的なものである。小型のものでは1154~1157は手捏ね風ではあるが、粘土紐の接合痕跡を残し、簡便な作りである。1158・1159は甕で、1158は残存率の低さから口径は不明である。1159の蒸気孔は中央に円、四方に楕円を配するものである。1160・1161は坏で、1160は内面に工具によるナデ痕跡が残り、1161は外面に稜をもつ特徴をもつ。

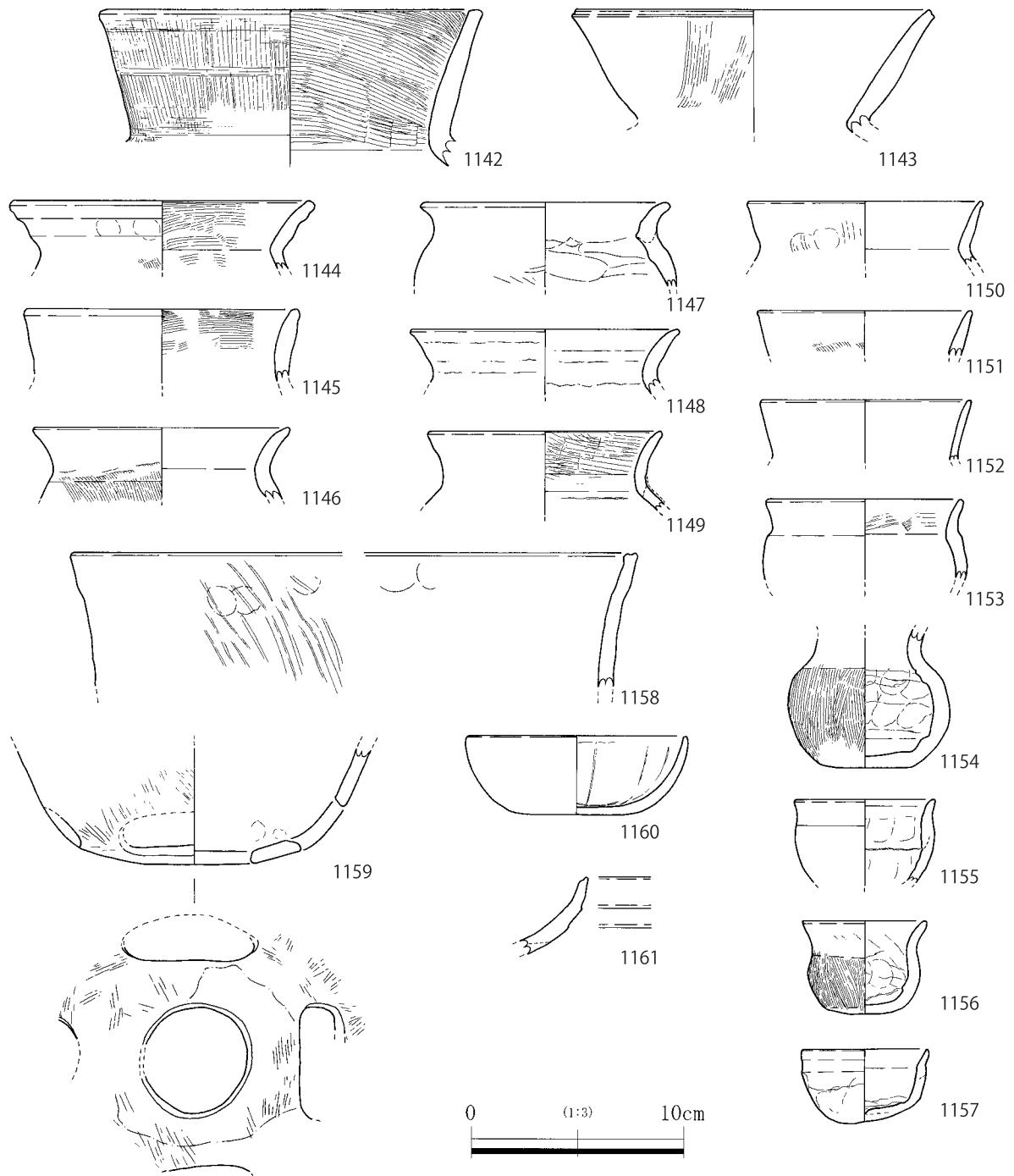


図162 流路1-4域 出土遺物16

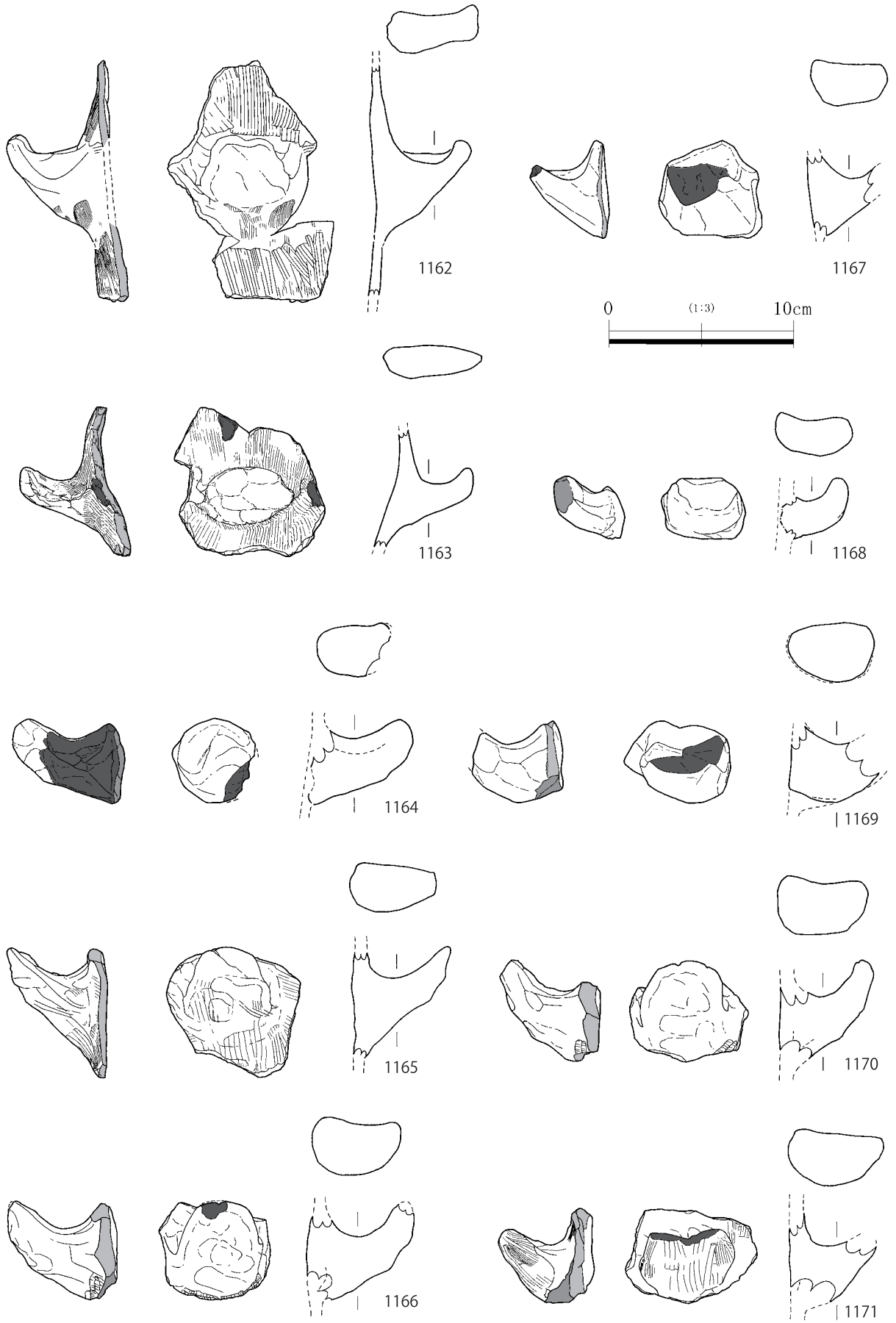


图163 流路1—4域 出土遺物17

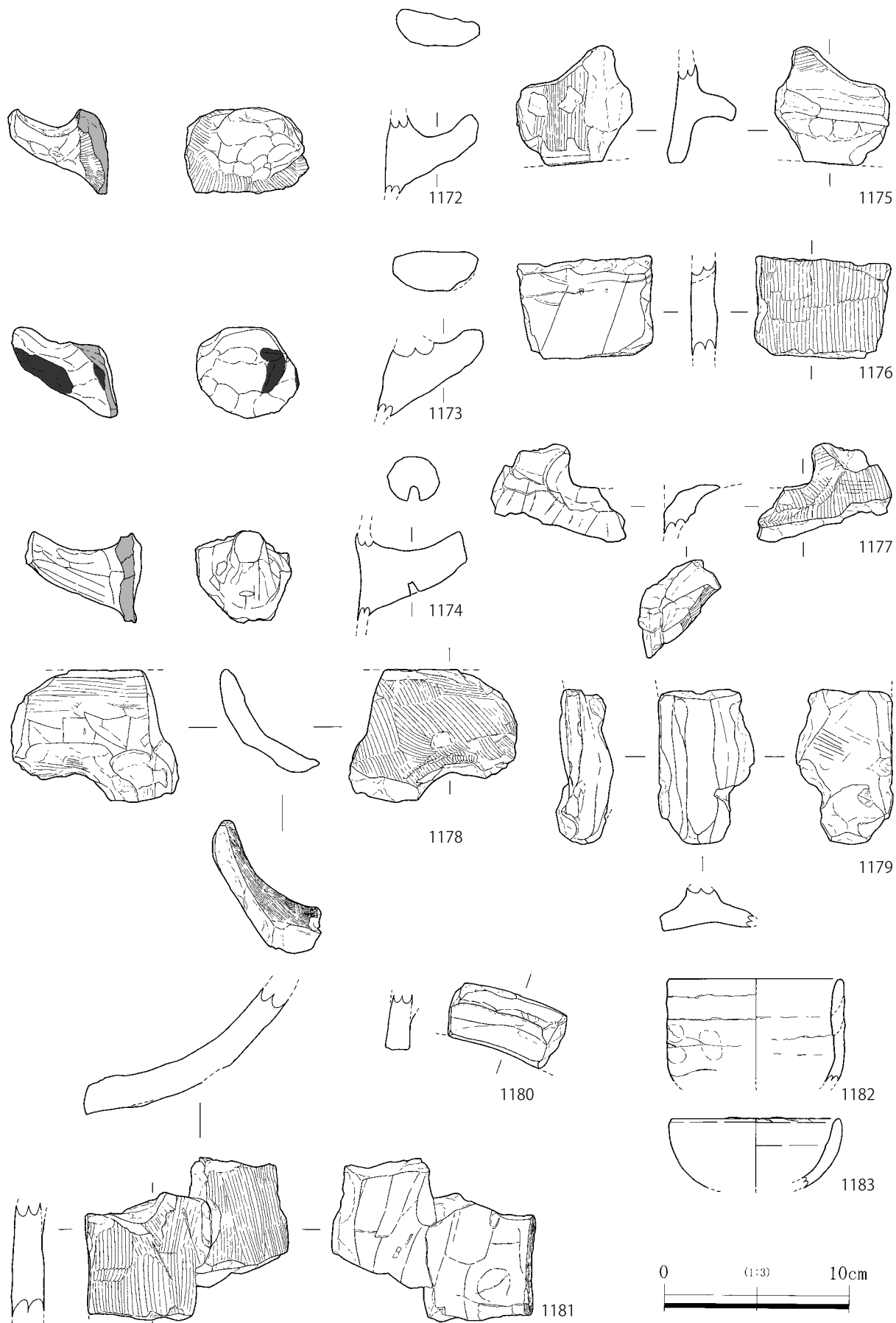


图164 流路1—4域 出土遺物18



図163-1162～図164-1173には土師器把手を示した。断面形状では扁平なものから、やや厚みをもつものまでみられる。1174は下面に刺突がみられ、韓式系土器か。1175～1179・1181は移動式竈である。一般的な竈の規模から考えるとごく一部のみ遺存したものばかりであるが、庇、突帯、焚口などがあり、1177は把手の接合部が剥離したとすると剥離面が整っており、断定はできないが、煙出し孔の可能性も指摘しておきたい。1180はU字形板状土製品の一部か。1182・1183は製塩土器かと考えられる。

図165-1184は飾り馬の土馬である。体部は中空で、頭部、四肢、尾、馬具の一部を欠くが、馬具には手綱、鞍、下鞍、力革、鐙の基部、尻繫などが見てとれる。腹に2ヶ所と尻に円孔がある。脚の破断面には深さ3mm程度の貫通しない穴がみられ、古い穴が新しい穴に押しつぶされたように見えるものもある。焼成前に施されたものであり、成形時に脚の補強を行った痕かと考えられる。1185は1184と直接接

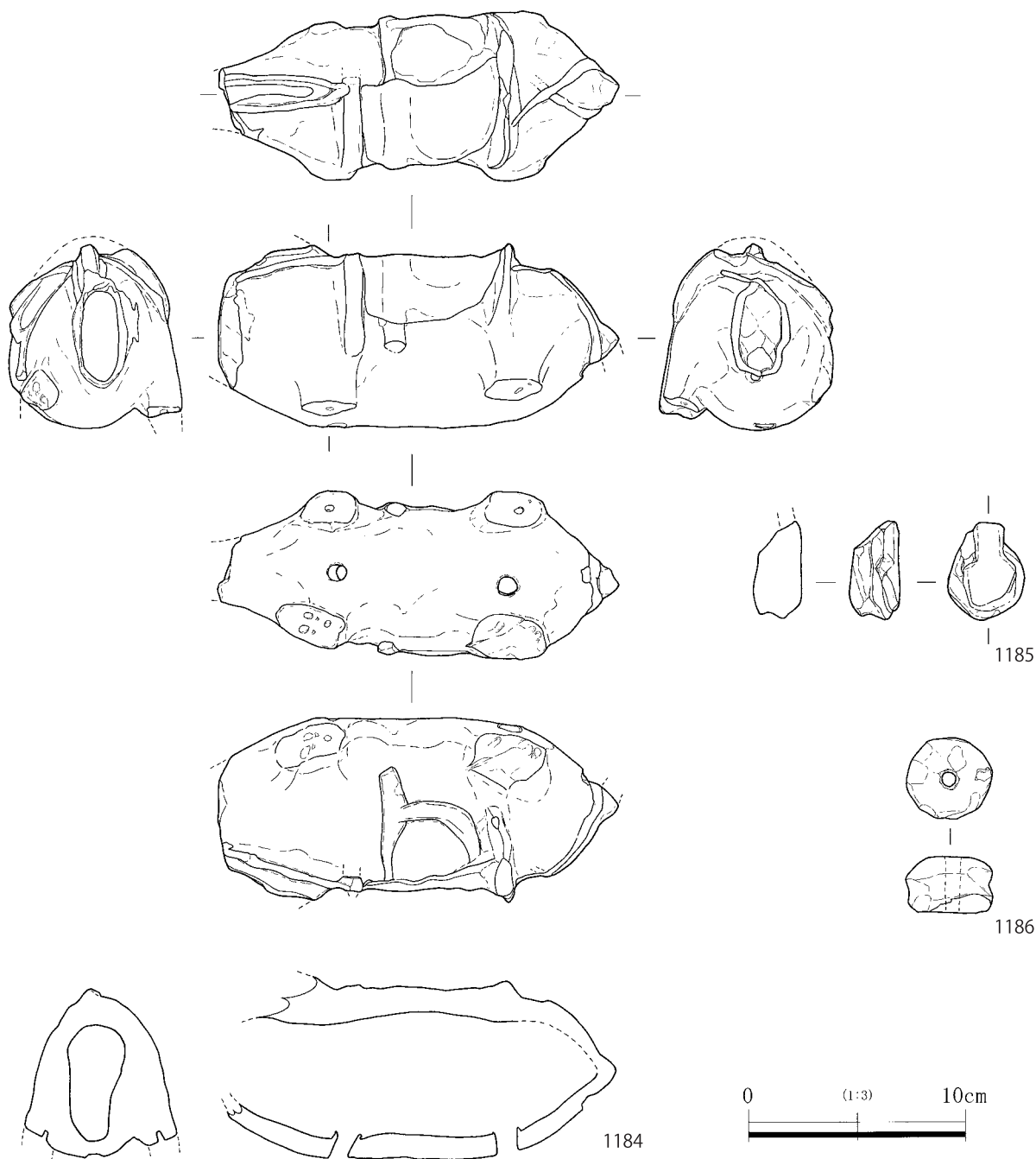


図165 流路1-4域 出土遺物19

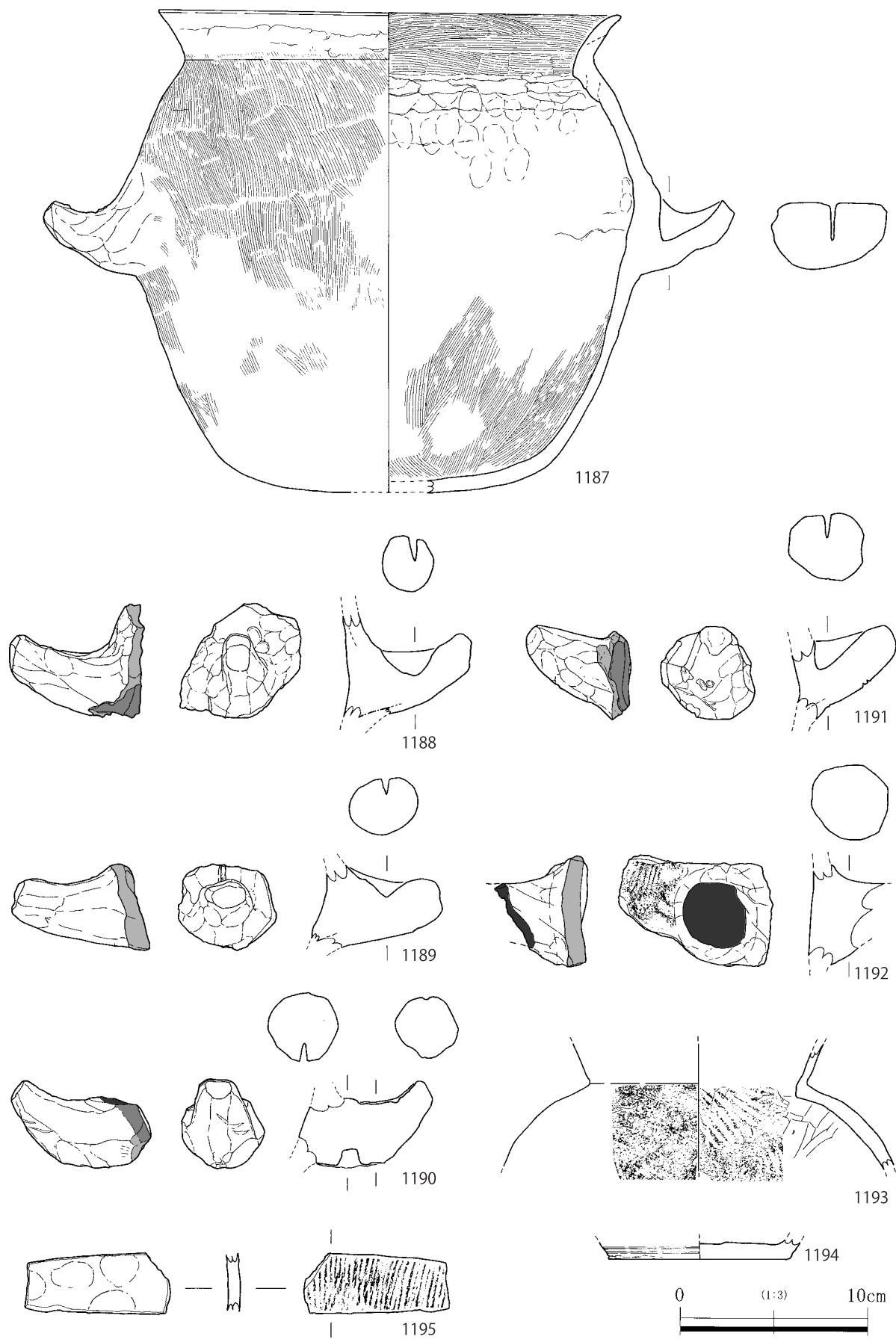


图166 流路1—4域 出土遺物20

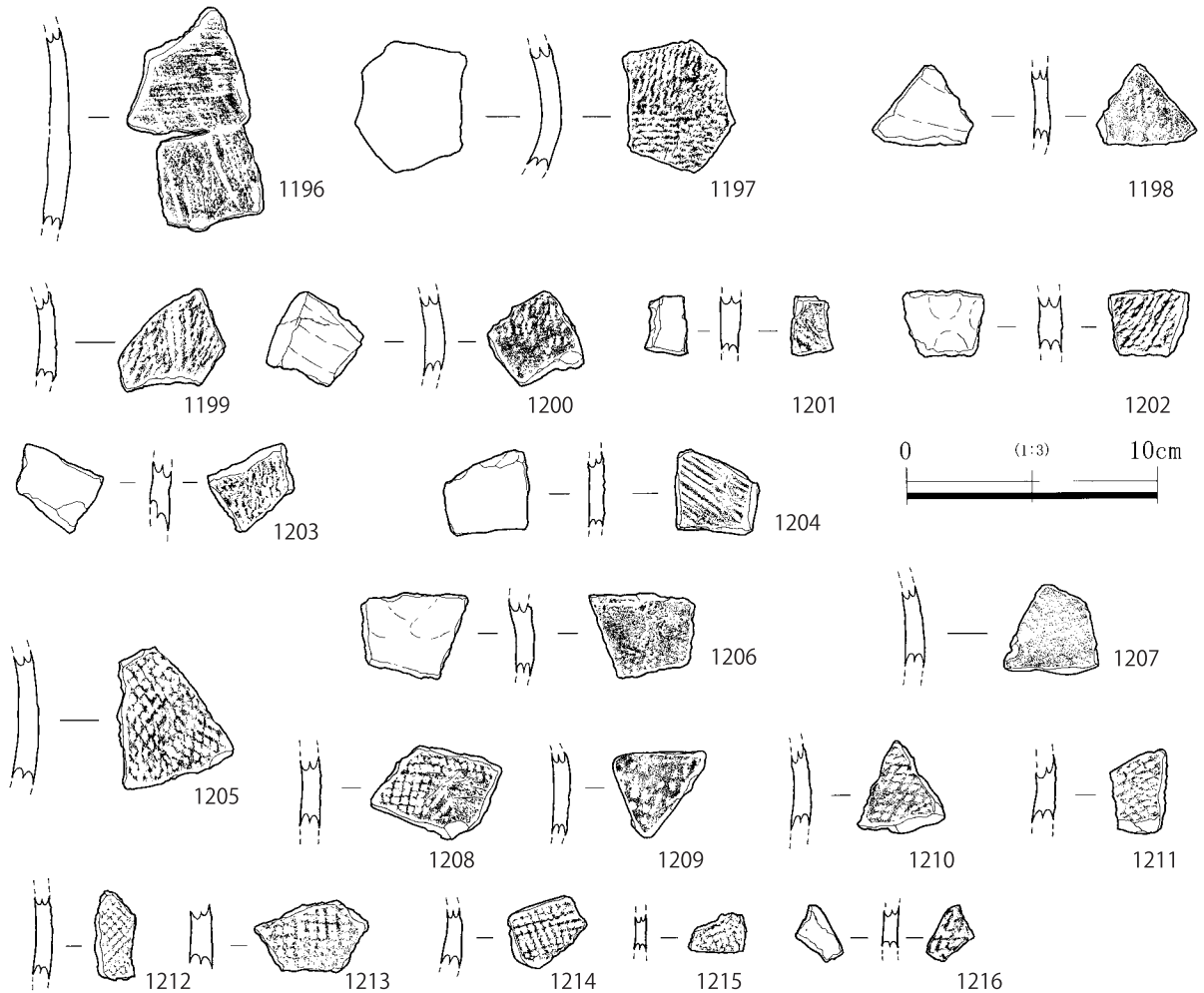


図167 流路1-4域 出土遺物21

合はしないが、鐙の部分かと考えられる。1186は土錘で、流路1からは1点のみの出土である。

図166-1187~1194には韓式系土器を示す。1187は把手付の鍋であるが、断面形状が半円形の把手上面から切込みが施される。把手は片側のみの遺存である。肩部には内外面とも粘土紐の痕跡をよく残す。1188~1192は把手で、切込みのあるもの、刺突のみられるもの、体部にタタキ痕跡の残るものがある。1193は壺かと考えられ、体部内面には当て具痕が残ることから成形にはタタキが用いられ、すり消されたものと考えられる。灰白色を呈し、焼成・色調とも異質である。1194は平底鉢の底部で、底部外面の痕跡は不明瞭である。1195は陶質土器あるいは須恵器の体部片で、外面には縄蓆紋タタキを施す。図167-1196~1216は極細片ばかりであるが、韓式系土器の体部片である。外面には縄蓆紋、平行、格子のタタキを施し、内面に当て具痕の残るものもある。

図168~図186には06-2-2トレンチ、06-2-3トレンチの範囲で出土した土器を掲出する。図168~図174は須恵器である。1217~1233は坏蓋で、1217はほかのものと隔絶して新しい時期を示す。1234~1246は有蓋高坏の蓋で、こちらには大きな時期差はみられない。1239は天井部に列点紋を施している。また1244の内部を充填していた流路堆積物から滑石製白玉1点(図版195-1245)が出土した。当初より土器内に納められていたものではないと考えるが、遺物番号は連番とした。図169-1247~1277は坏身で、坏蓋同様、やや時期をあけて新しいもの(1247~1250)が若干含まれる。1277は特異な形態をもつもので、位置付けは難しい。1258・1259・1269・1270には底部外面にヘラ記号がみられ、ここに図示したもの以外

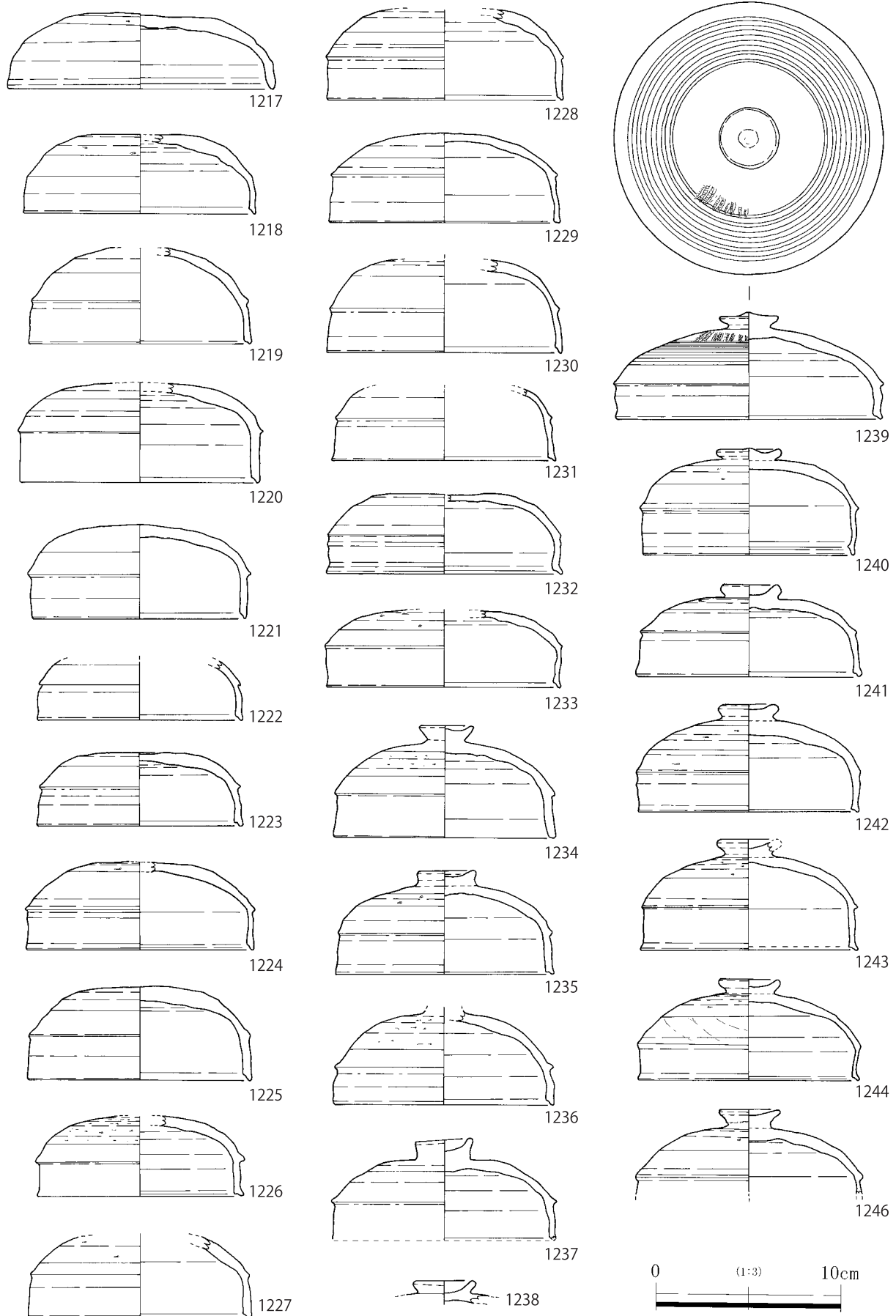


图168 流路1-4域 出土遺物22

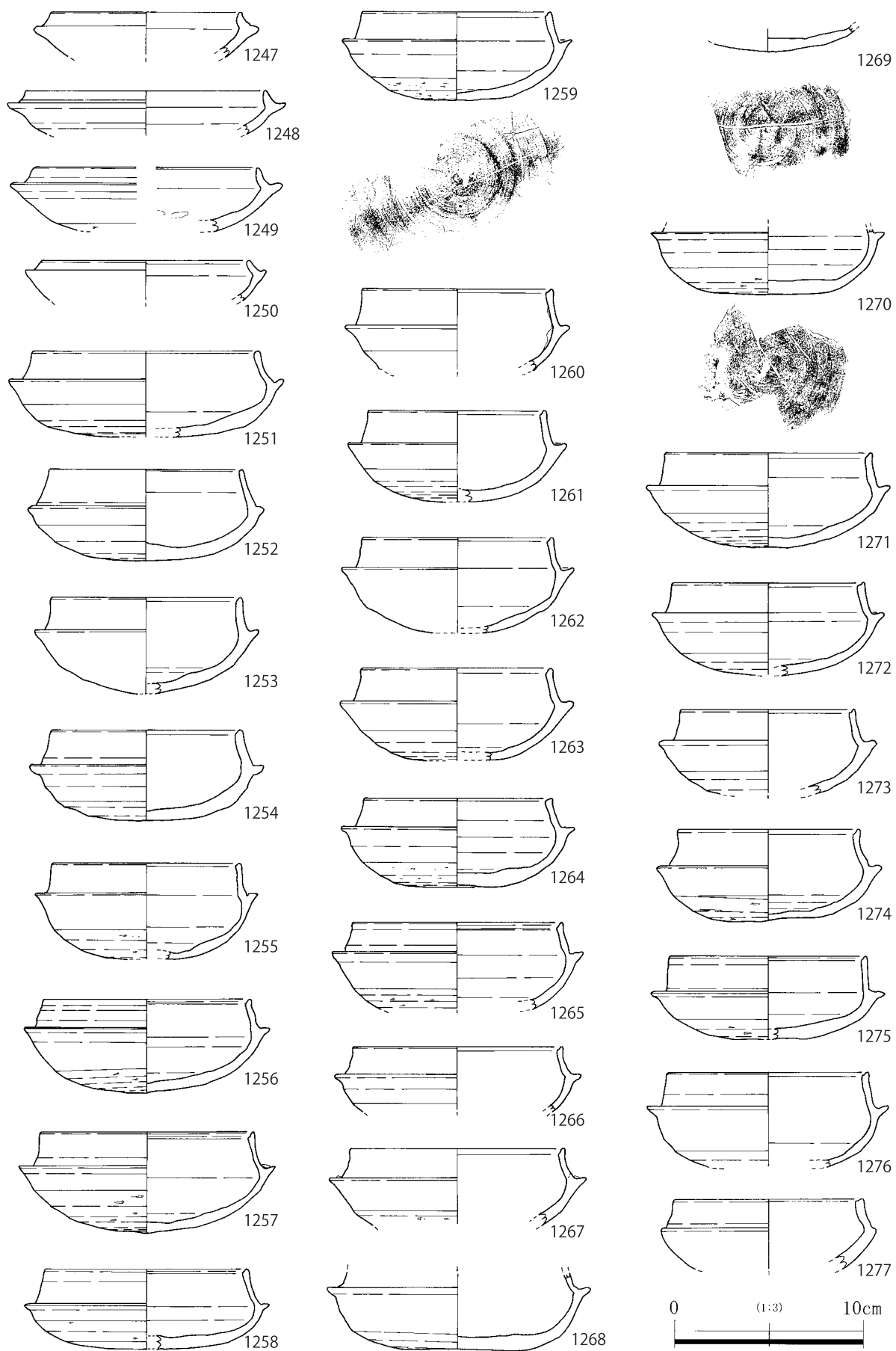


图169 流路1—4域 出土遺物23

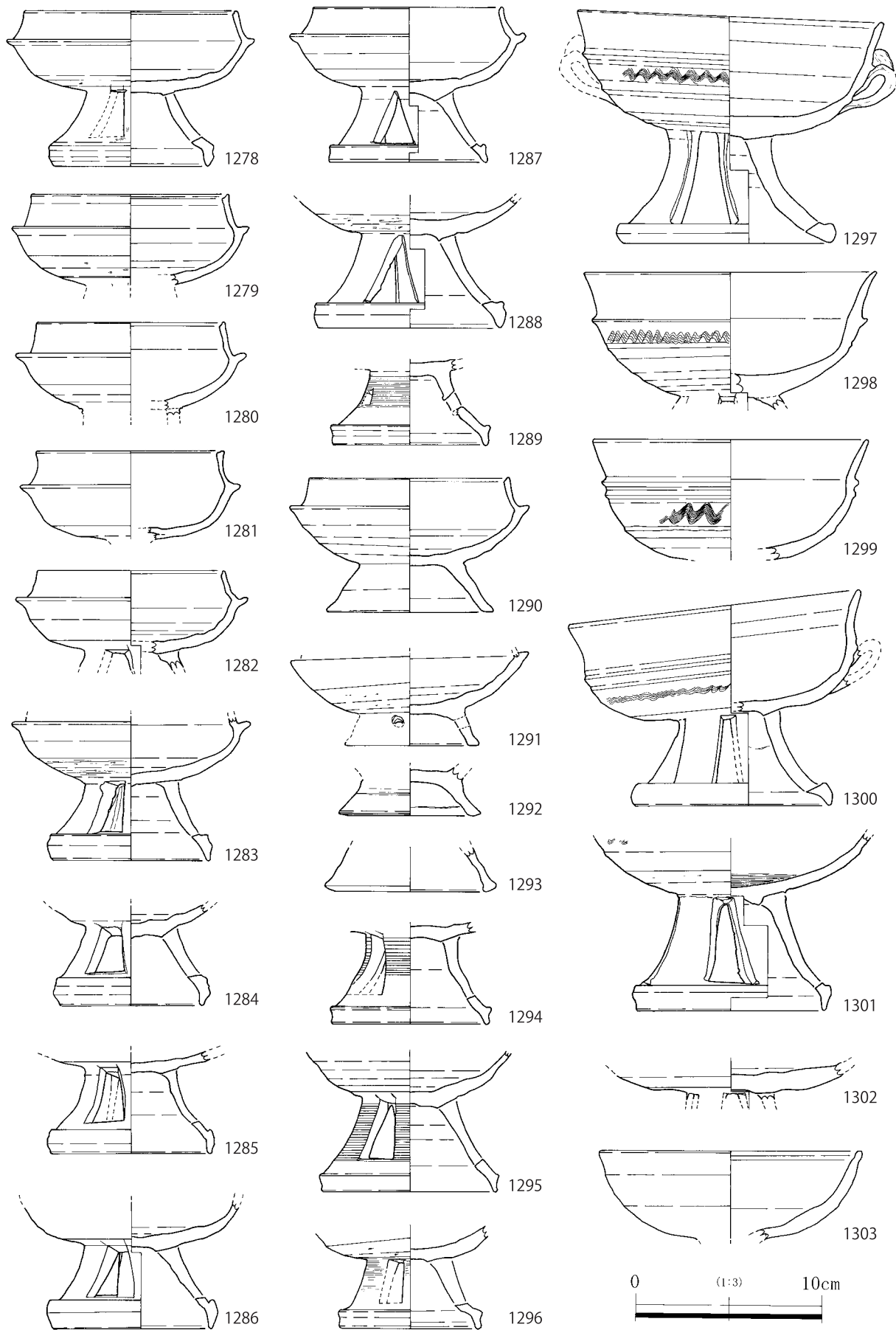


图170 流路1—4域 出土遺物24



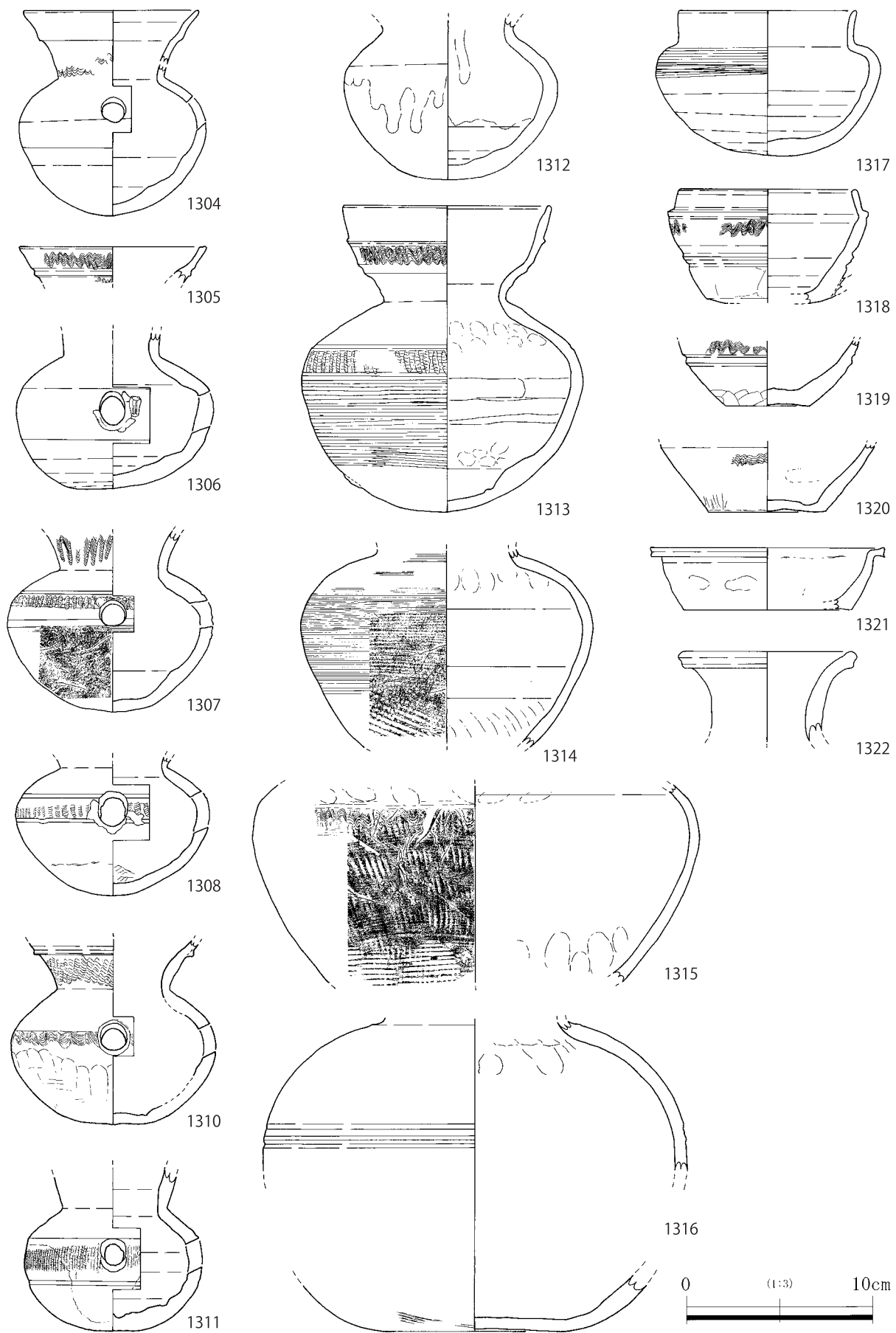


图171 流路1-4域 出土遺物25

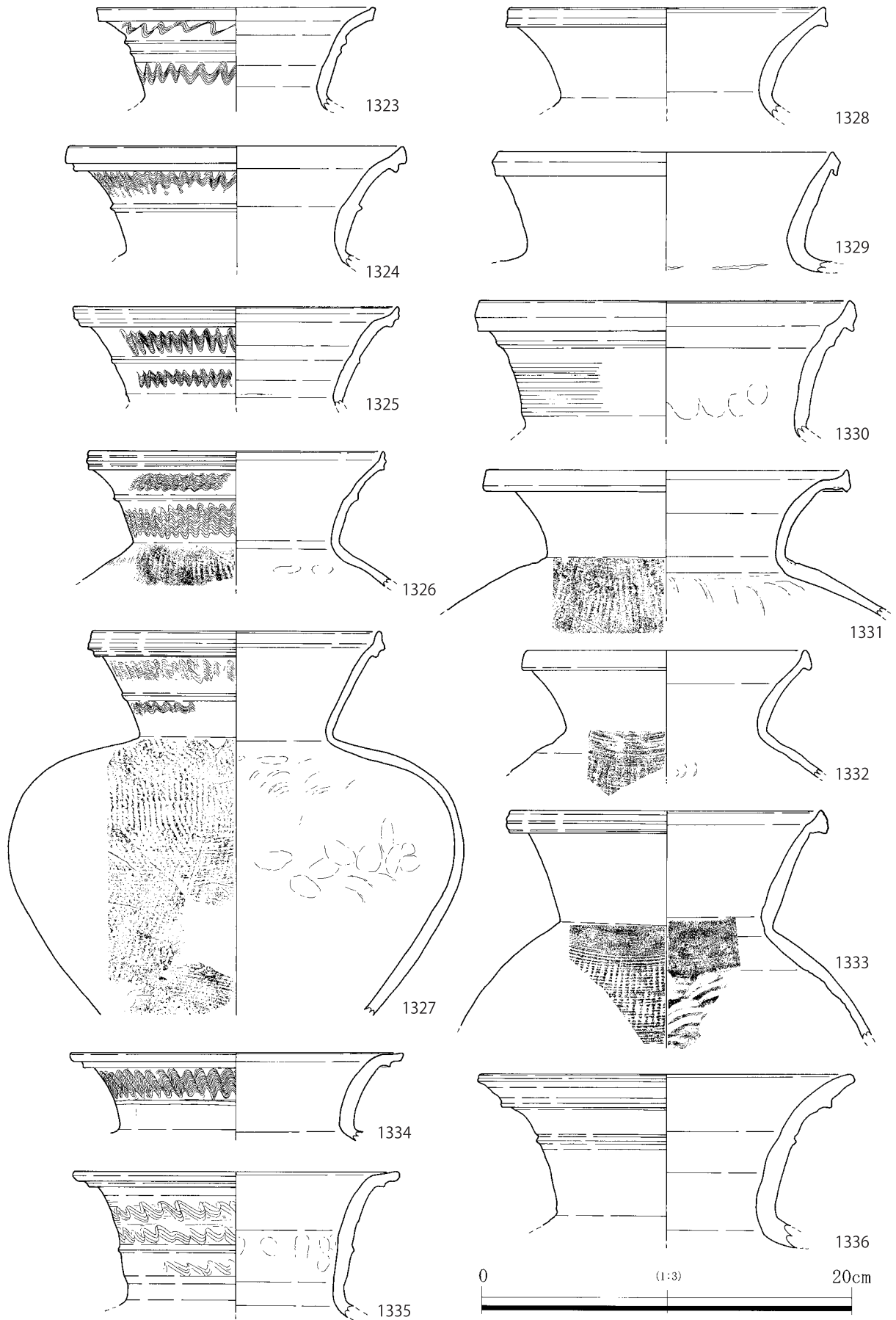


图172 流路1—4域 出土遺物26

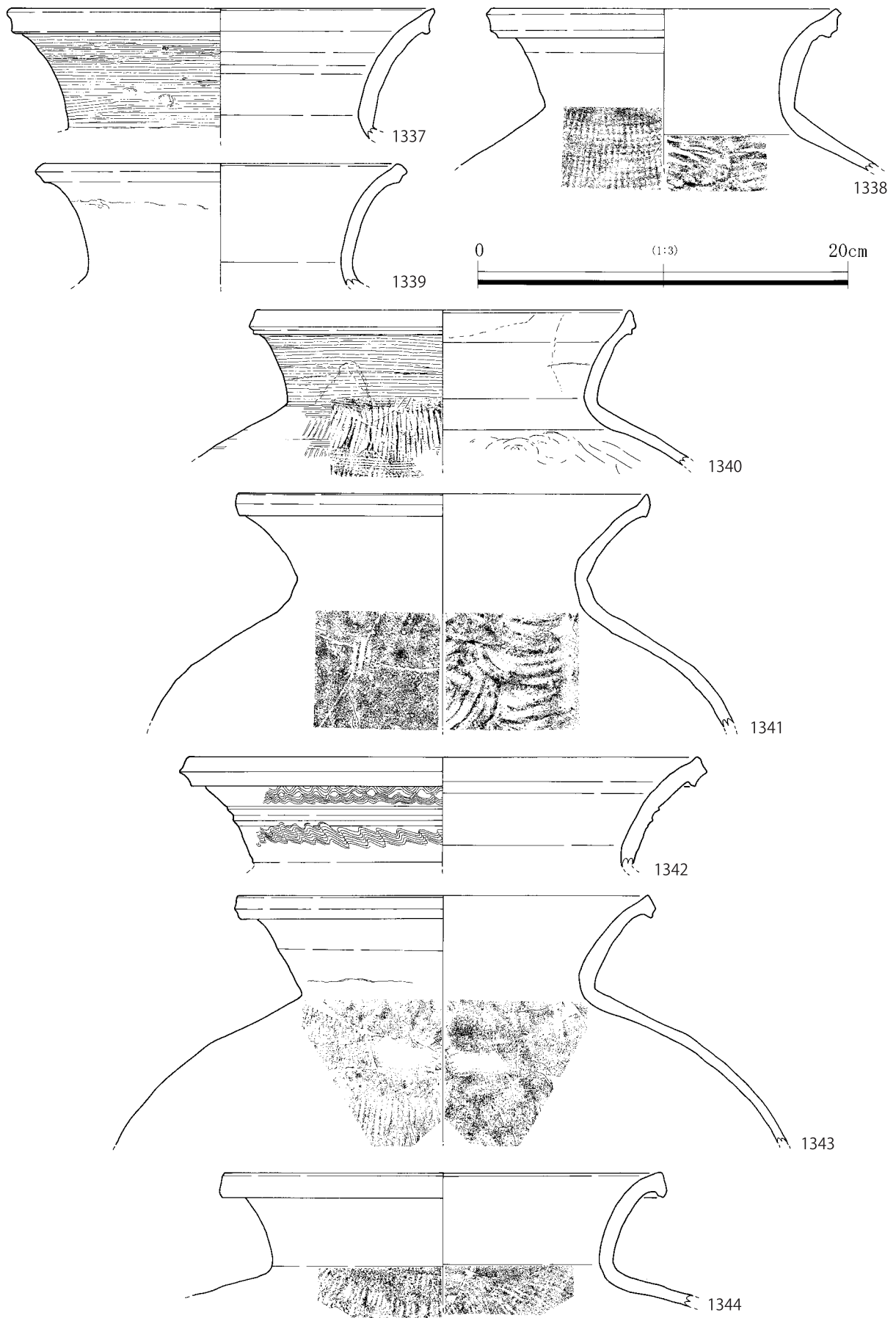


图173 流路1-4域 出土遺物27

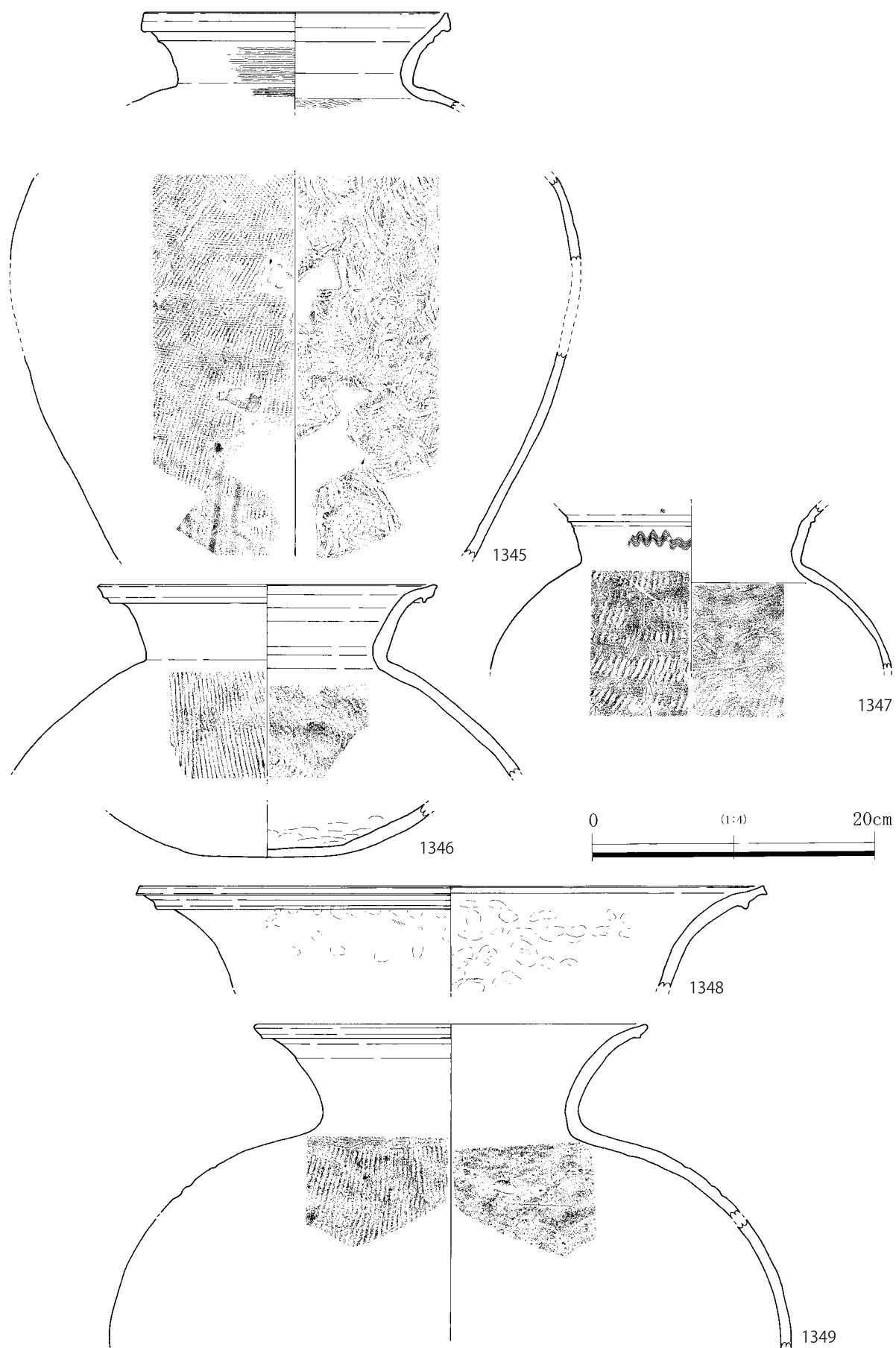


图174 流路1—4域 出土遺物28

も併せ、図292に掲出する。図170-1278~1296は高坏である。それほど時期差をもたない。脚部の透かしは長方形のものが多く、1287・1288は三角形のものを、1289は小さい方形のものを配している。1290~1292は低脚の特徴的なもので、1060・1061などと同じ形状をもつ。1291には円形の透かしの痕跡が認められる。1297~1301には無蓋高坏を配した。いずれも波状紋で外面を飾る。また1297には片方だけではあるが、把手が遺存する。1302は坏部の形態は不明であるが、方形の透かしを5方向に配しており、初期須恵器に属する可能性がある。1303は無蓋高坏ではあるが、坏蓋を逆転させたような坏部をもつ特徴的な個体である。図171-1304~1311には隙を示す。頸部外面と円孔の周囲に波状紋や列点紋を施すものと、円孔の部分には装飾を施さないものがある。1304には底部外面にヘラ記号がみられた。拓影は図292に示す。また1309の内部を充填していた流路堆積物から滑石製白玉1点(図版201-1309)が出土した。当初より土器内に納められていたものではないと考えるが、遺物番号は連番とした。1312~1315は壺としておくが、1313・1315は残存部位も少なく、隙の可能性もある。1312は体部が完存する壺で、外面にかかる自然釉が美しい。1313は残存率が1/2以下であるが、口縁から底までの復元が可能である。1316は壺と考えるが、平底をもち、体部上位にゆるやかな沈線、あるいは突帯を巡らすもので、陶質土器、あるいはその特徴を残す須恵器かと考えられる。1317は短く直立する口縁部をもつ直口壺で、口縁の一部を欠く以外は遺存状態がよい。1318~1320は須恵器の把手付鉢で、外面を突帯、波状紋により加飾する。底付近の外面は静止ヘラケズリにより調整する。1321は須恵器あるいは陶質土器浅鉢で、各部位の造形は精緻である。韓国全羅道地域に起源をもつ(寺井2002)。1322は提瓶の口縁部と考えられるものであるが、提瓶・平瓶とも流路からの出土数は極めて少ない。図172-1323~1336は壺で、口縁部の遺存するものが主体である。口縁端部の大雑把な分類では、上方に尖り気味に拡張するもの(1323~1327)、上下に尖り気味に拡張するもの(1328~1333)、水平に開いた端部直下に突帯を巡らすもの(1334・1335)、端部は方形に収め、直下に突帯を巡らすもの(1336)に類別ができ、頸部における波状紋による加飾との対応関係をみることができる。図173-1337~図174-1347は壺あるいは甕で、中型から大型のものである。1348・1349は大甕で、1348は大きく開いた口縁端部に面をもたせて収め、直下に突帯を配置するもの、1349は尖り気味に収めた端部直下に突帯を配するものである。

図175~図183には土師器を示す。06-2-2トレンチ、06-2-3トレンチの範囲における須恵器の出土量に比して土師器の高坏、甕、壺類の出土点数は少量である。逆に移動式竈や甑、それらに付帯する把手などの出土点数が多い。1350~1356は高坏で、口縁部と底部の境に稜をもつもの(1350)、碗形のもの(1351・1352)という坏部がある。脚部は4個体それぞれに異なる形態をみせる。1357~1368は甕で、口縁部付近が遺存するものである。口縁部の形態はそれぞれに特徴をもつが、古式土師器の影響を残す1360には体部内面のヘラケズリが確認できる。1363は複合口縁をもつもので、直立し、上端に水平の面をもつ口縁端部形状をもつ。1364は壺で、比較的整った形状と外面には丁寧なハケ調整がみられる。1365は長頸壺で、口縁端部にやや細かな造作を施すが、頸部と胴部の接合部分はほぼ未調整のままである。1366・1367は小型の壺口縁で、それぞれに異なる特徴を示す。1368は赤褐色を呈する大型の口縁部で、内外面ともハケ調整の後、縦方向のヘラミガキをやや間隔をあけて施している。形状から高坏の坏部口縁の可能性も考慮したが、径と器高の関係、器壁の厚さなどから大型壺の口縁部と考える。

図176-1369は小型の壺で、口縁の一部を欠くが残存率は高い。1370~1373は小型の壺で、内外面、特に内面に粘土紐の接合痕を残す。1373は平底であり、法量は異なるが1154に類似する形態をもつ。1374は小型の鉢で、口縁端部を尖らし、内側やや下がったところに明瞭な稜を作り出す点が特徴的である。

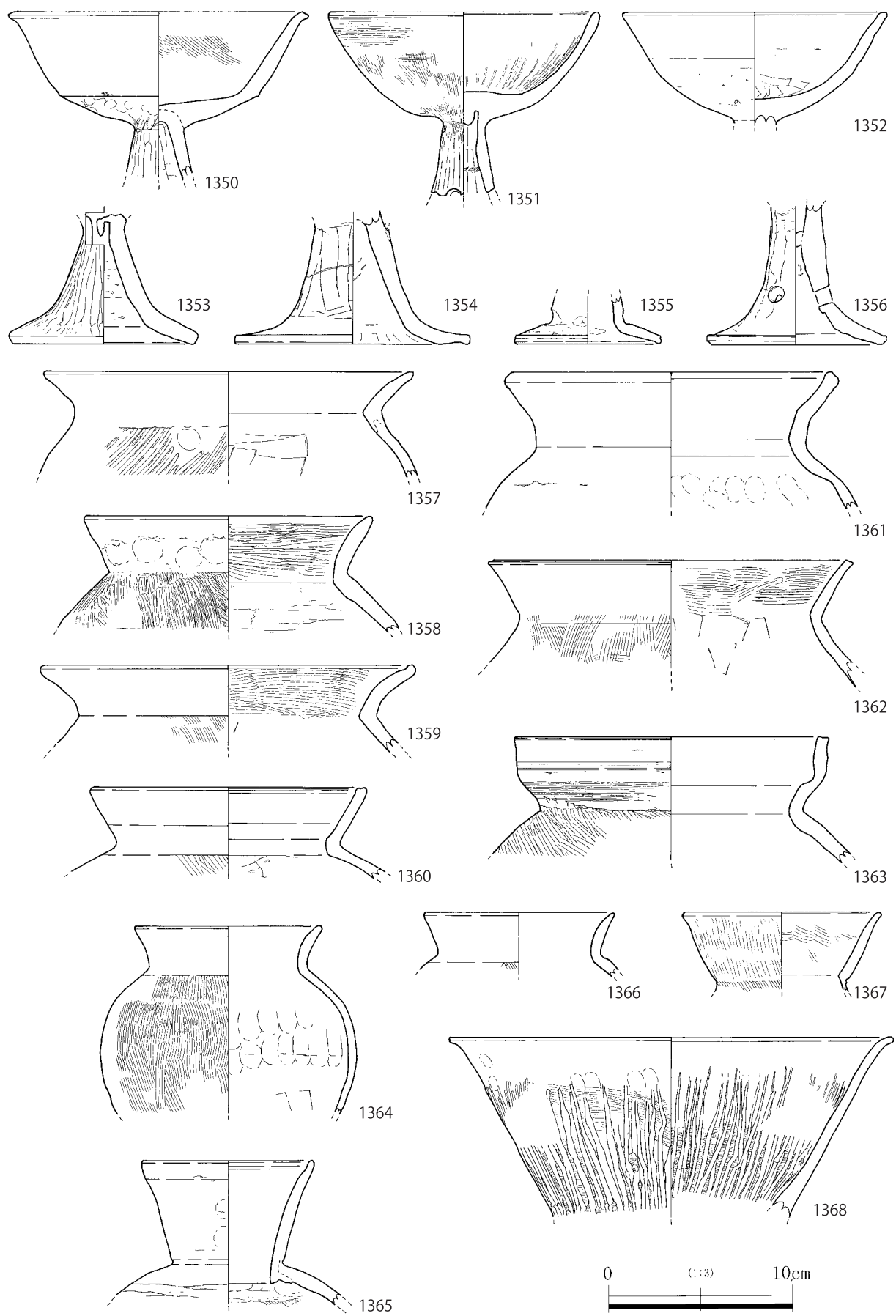


图175 流路1-4域 出土遺物29



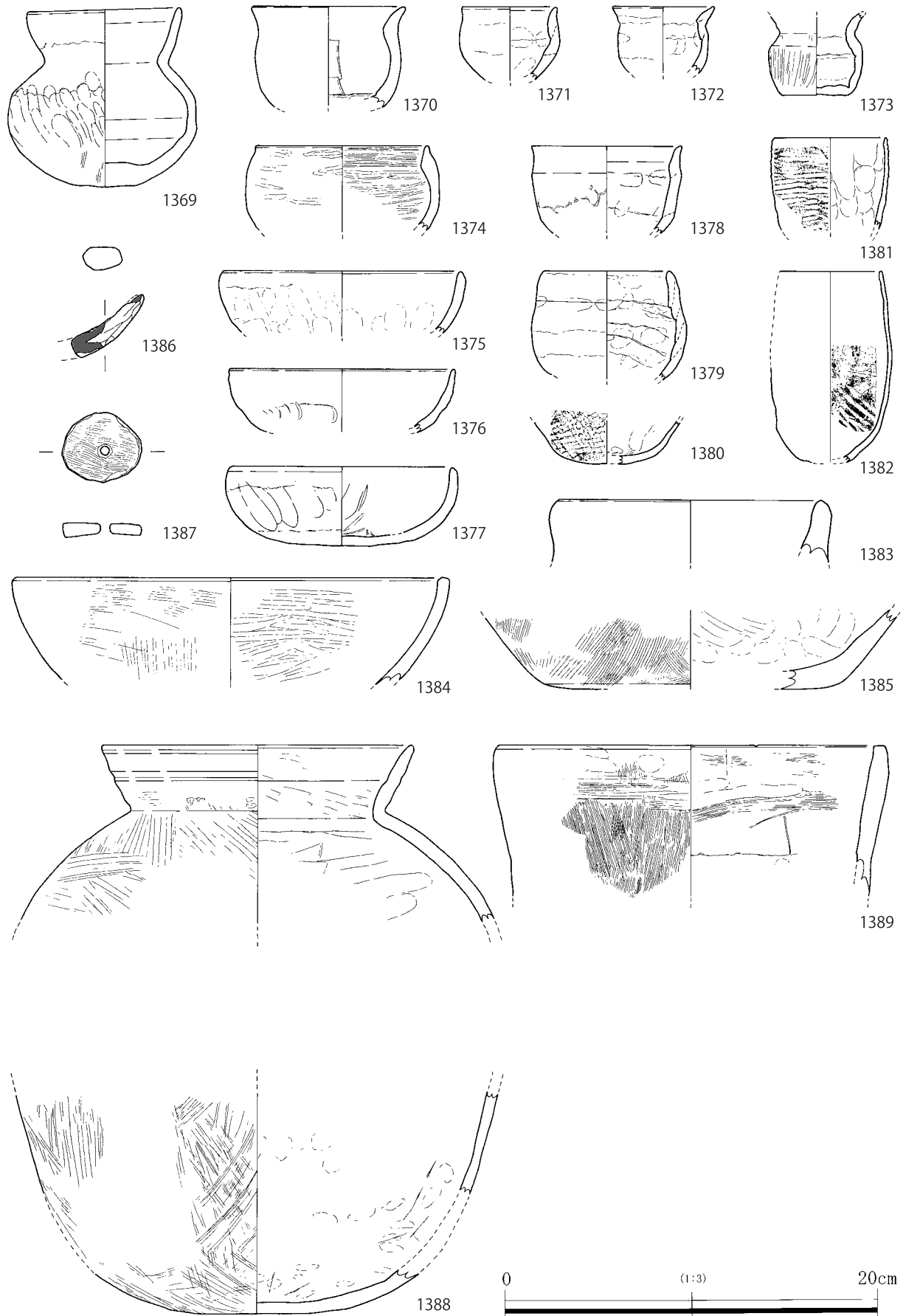


图176 流路1-4域 出土遺物30

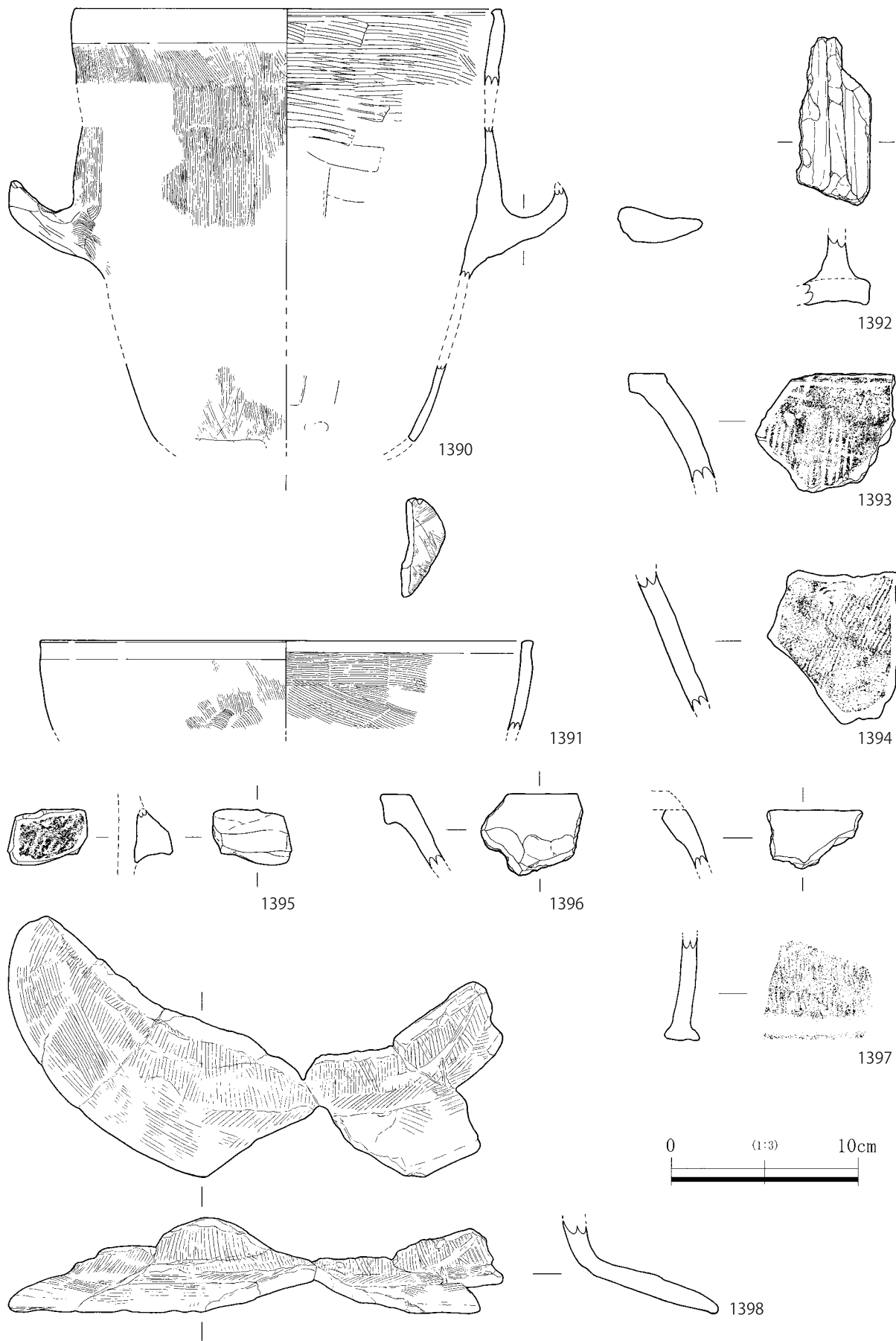


图177 流路1—4域 出土遺物31

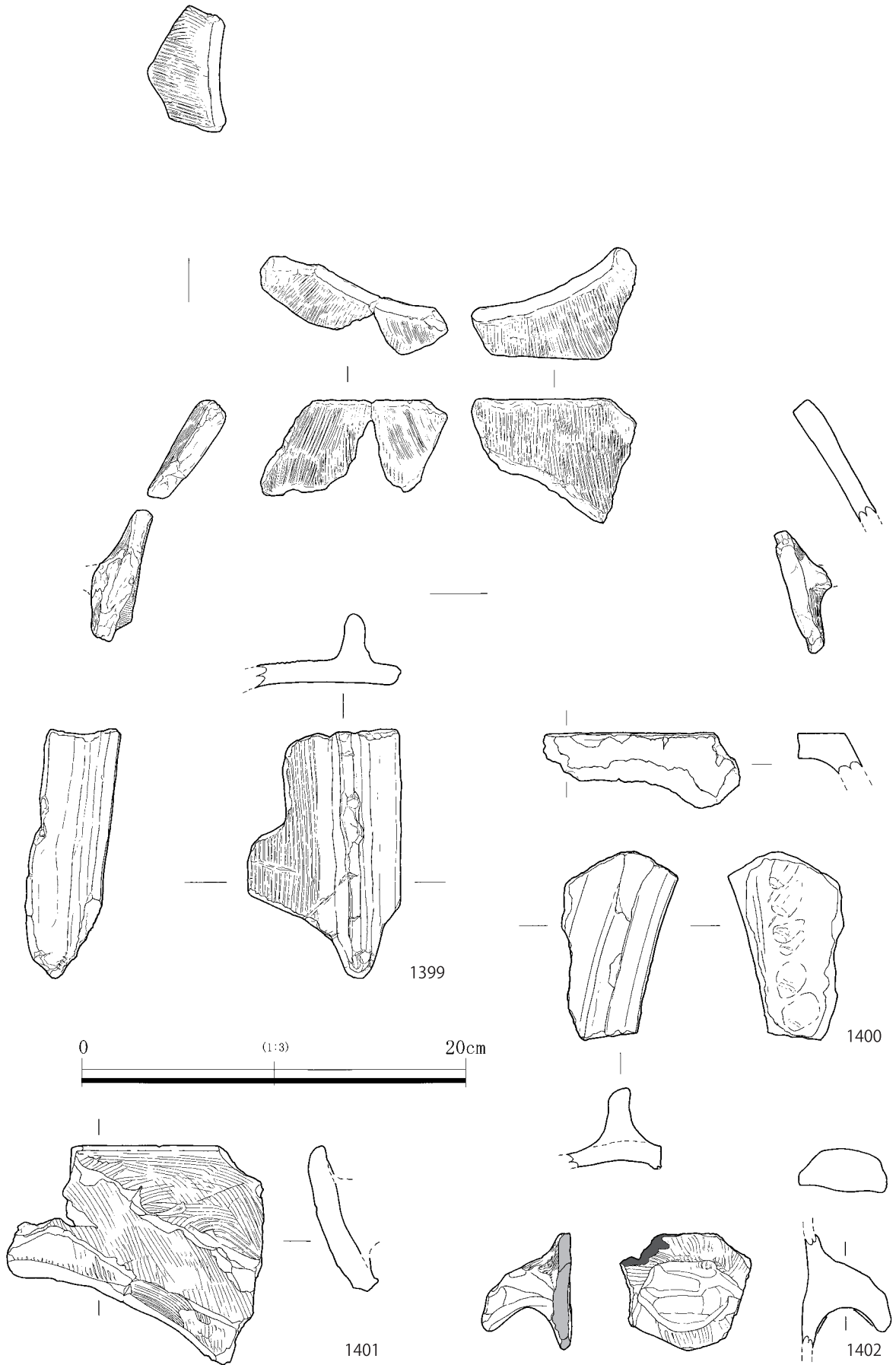


图178 流路1-4域 出土遺物32

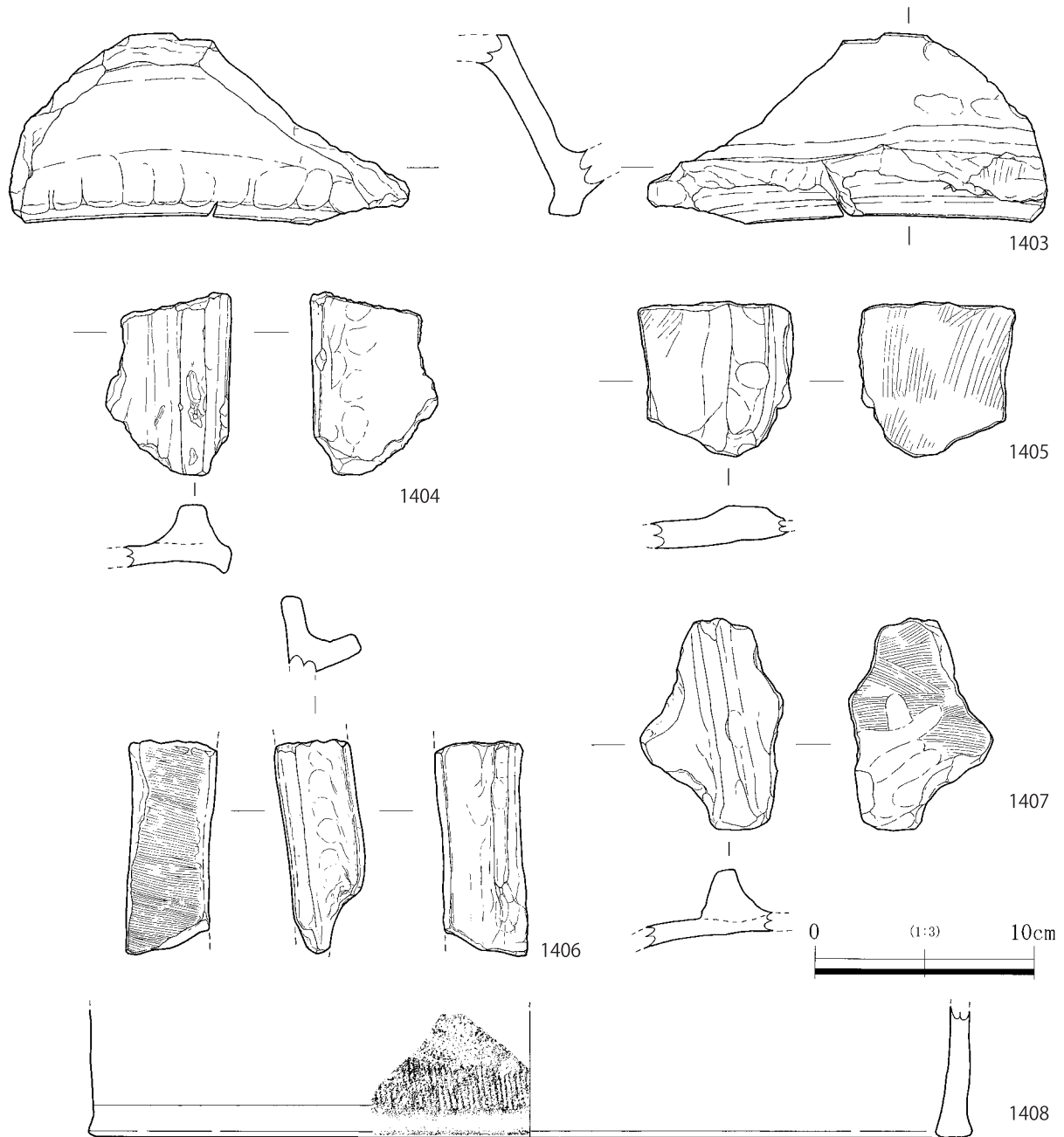


図179 流路1-4域 出土遺物33

内外面には丁寧なミガキが施される。1375～1377は坏で、1377を除き残存率は低い。1378～1383は製塩土器かと考えるものである。1378・1379は碗形を呈するもので、1380～1382は丸底のコップ形、1383は器壁の厚い甕形を想定する。1379は凹凸の著しい成形がなされ、調整も粗い。コップ形の中では1380はやや大型の部類に属するもので、外面には格子タタキが残る。1384は大型の鉢、1385も鉢かと考えるが、平底風の大型壺の底部の可能性もある。1389は甕の口縁部で、外面にはハケ調整ののち、板状工具によるナデを横方向に施し、内面にも同様の調整を施すが、粘土紐の接合痕も残る。1386は把手付碗の把手部分、1387は体部片を再加工した有孔円板と考えられる。1388は平底風の底をもつ甕で、口縁部には突帯ともいえないゆるやかな段をもち、体部の外面調整には傷のようなハケメの痕跡を残す。図177-1390・1391は土師器甕で、1390は丸底で、4方向に楕円形の蒸気孔を配置するものと考えられる。1392～1398は移動式竈の小片である。破片個々が同一個体の部位であるかどうかは判然としない。1393・1394・1397

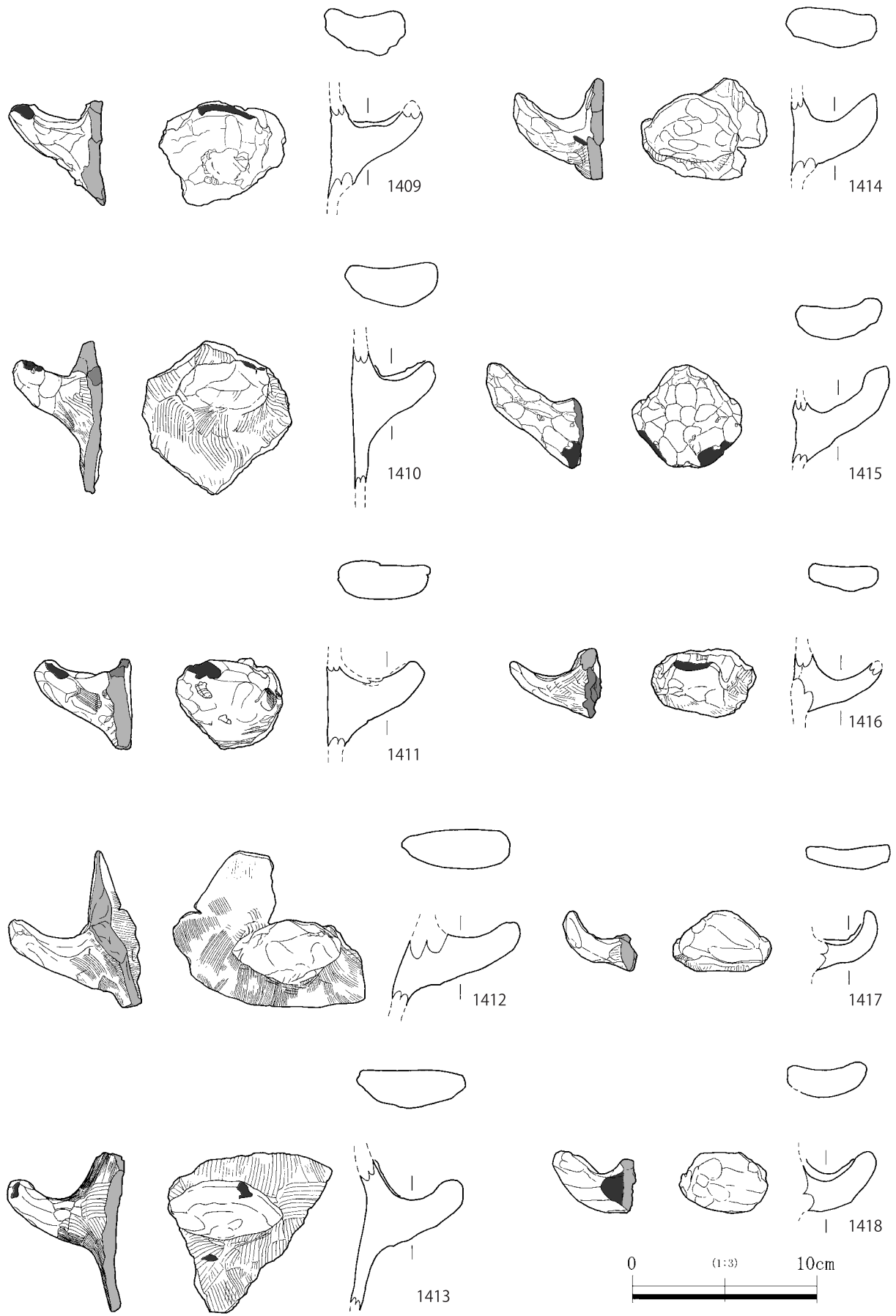


图180 流路1—4域 出土遺物34

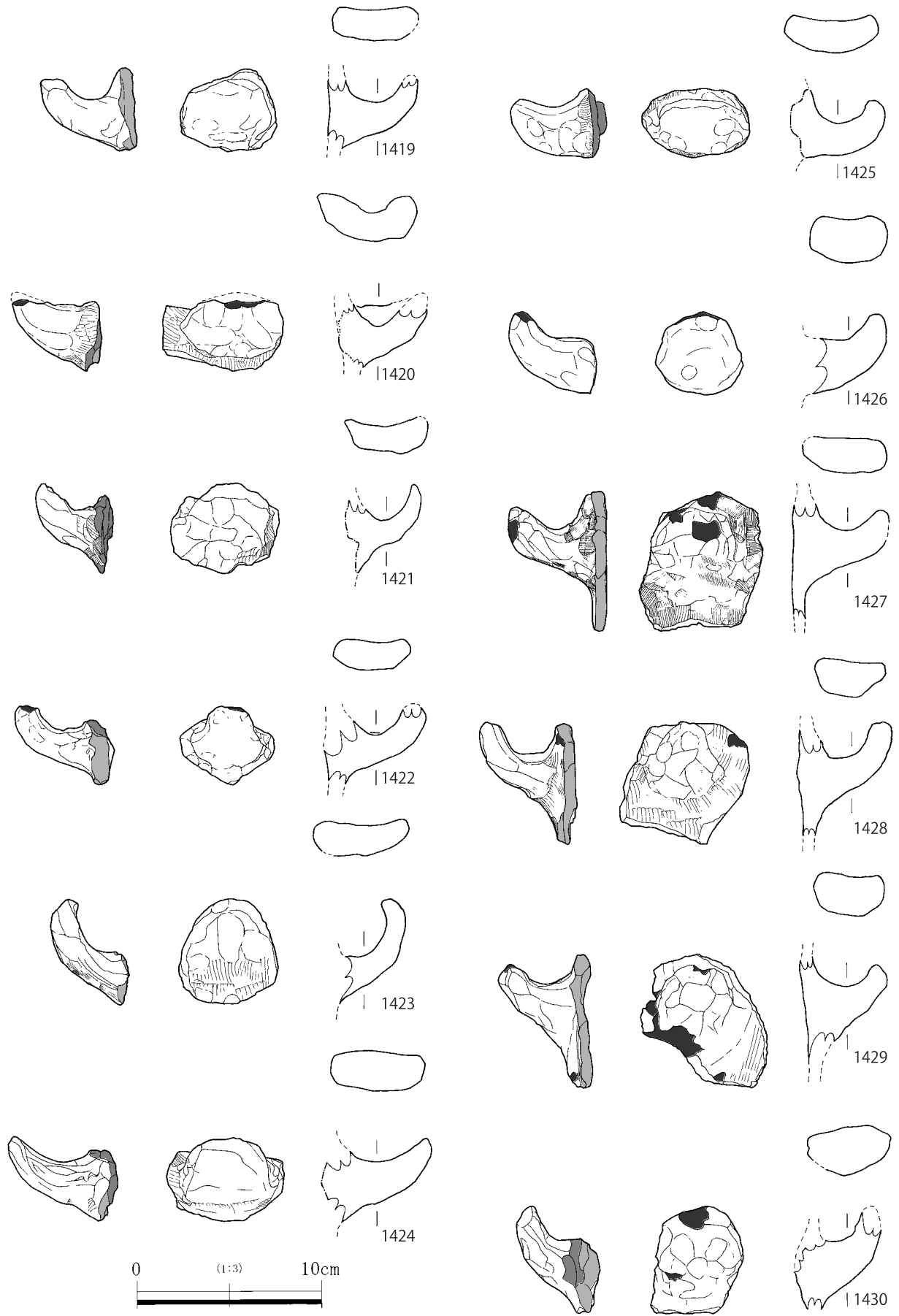


图181 流路1—4域 出土遺物35



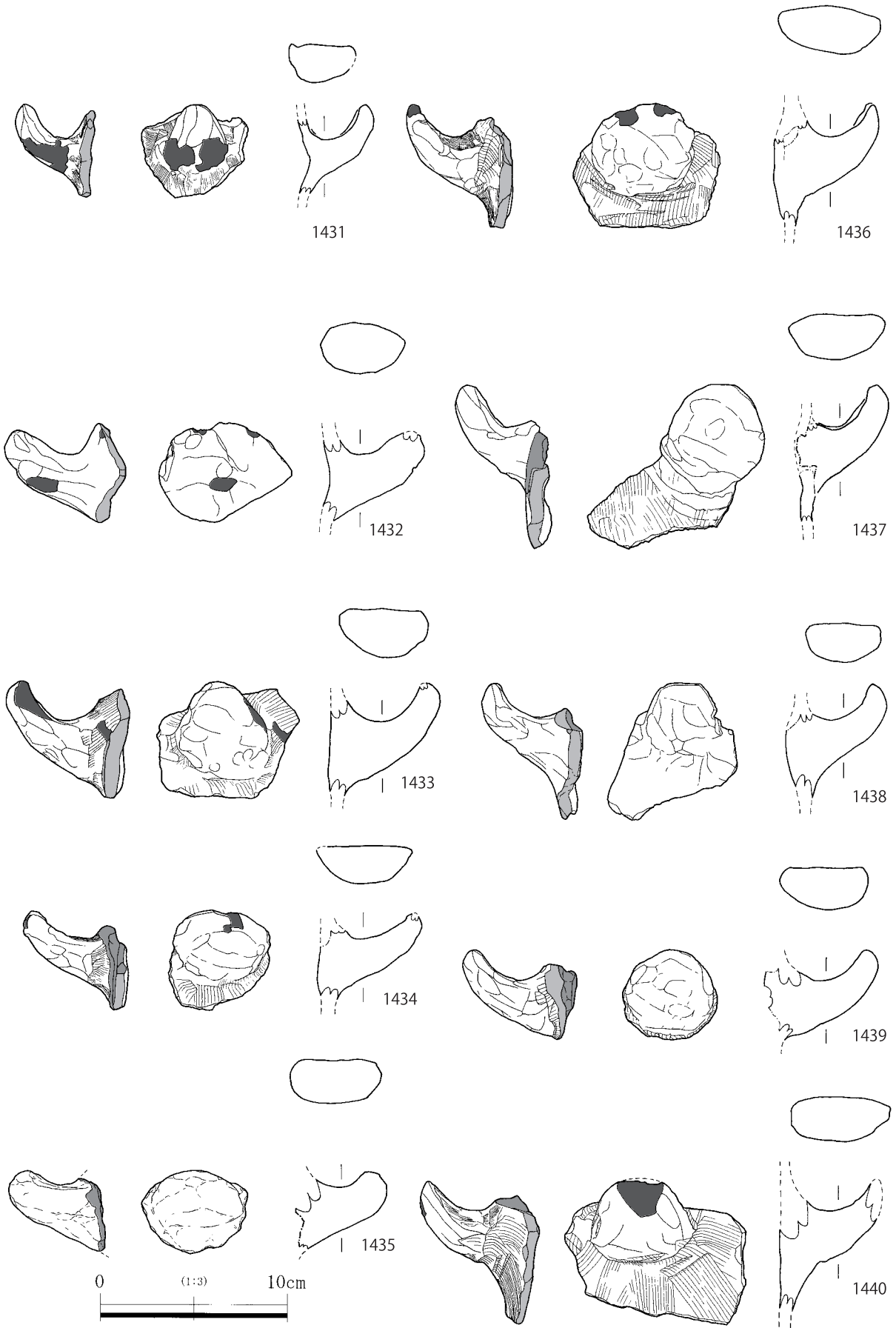


图182 流路1—4域 出土遺物36

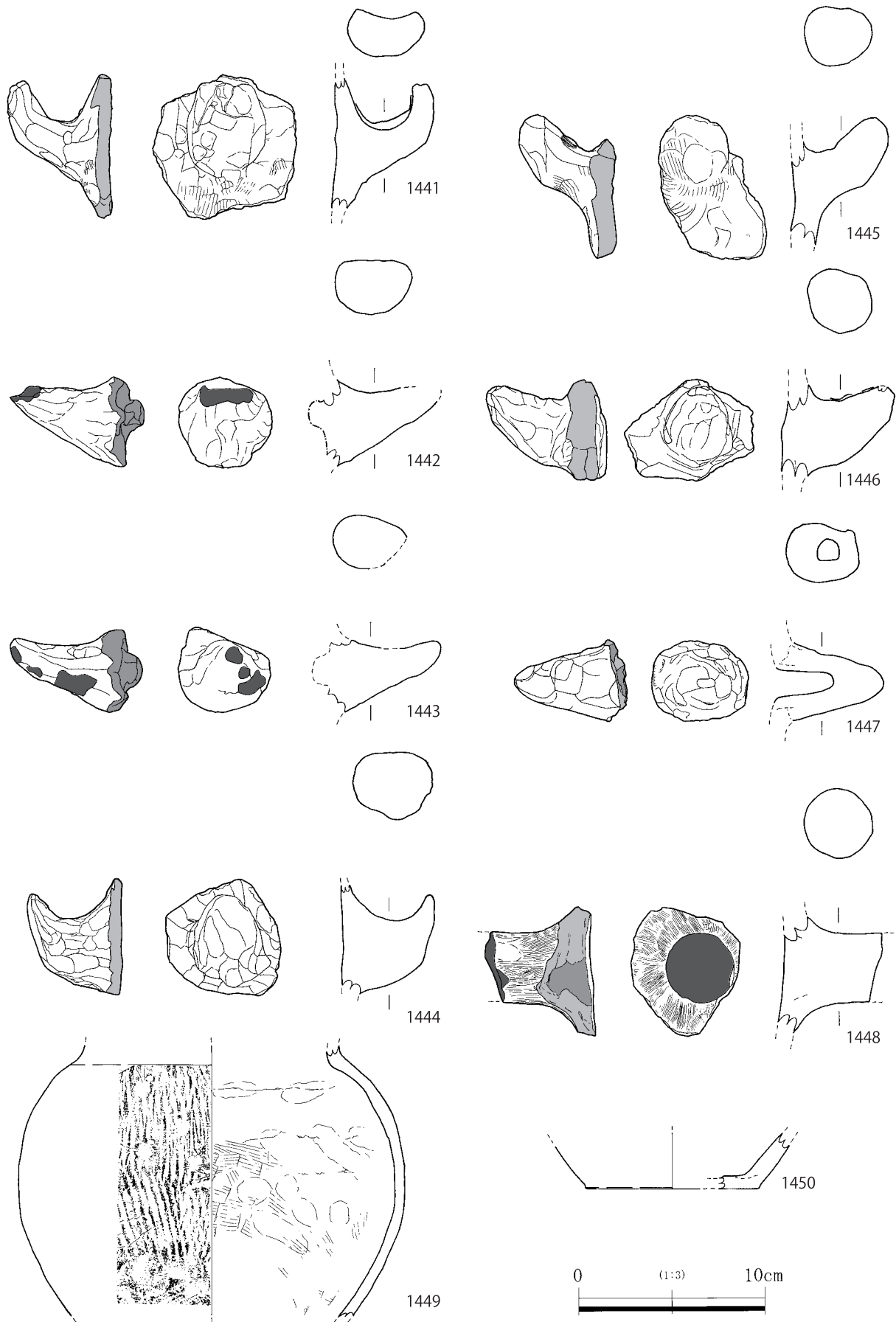


图183 流路1—4域 出土遺物37

は外面調整に平行タタキが用いられており、韓式系土器に分類すべきものである。遺存する部位は焚口、突帯、釜孔、庇の部位があるが、1393・1396・1397の釜孔部は体部より内側にやや水平の部分をもつもので、1392は付け庇、1398は曲げ庇である。図178・図179-1403~1408にも移動式竈を示す。1399の釜孔部は体部の上端部に内傾する面をもつもので、庇は付け庇がつく。1401は付け庇の剥離部分が残るもので、庇を付ける以前の外面調整であるハケメが剥離部分に観察される。1402は1401と同一個体の可能性がある把手である。1403も付け庇の基部付近であるが、1401とは調整や焼成の雰囲気異なり、硬質である。図版213-3017は当初、鑄造などにかかわる土製品の可能性を考慮していたものであるが、具体的な用途が不明であり、移動式竈の庇基部の可能性も指摘されたことから、図版のみ竈とともに掲出する。図180-1409~図183-1448には把手を示す。断面形状からは扁平なもの、やや厚みをもつもの、円形(棒状)のものに類別できる可能性があるが、それぞれの中間形態を示すものもある。側面観では上方に湾曲するものがほとんどである。1447・1448は他のものとまったく異なる形態をもつ。1447は尖頭状の形態をもち、内部が中空である。1448は断面が正円に近く、中実である。いずれも明確に把手とする根拠は少ない。

図183-1449~図186-1472には韓式系土器を示す。1449は甕と考えられるが、口縁、底部を欠き、全形はうかがい知れない。頸部に強いナデを施し、内面でも頸部と体部との境は明瞭である。外面には平行タタキの痕跡が残るが、内面には粘土紐の接合痕を残す。外面にはスコゲが厚く付着する。1450は平底鉢で、わずかな残存であるが、精緻な成形が認められる。図184-1451は卵形の体部をもつ甕で、比較的分厚い器壁をもつ。外面には格子タタキに沈線が巡る。1452は甕の口縁部であるが、外面には平行タタキが残る。1453は甕の底部付近かと考えられるもので、外面には格子タタキが施され、コゲの付着が認められる。1454は鉢かと考えられる低い器形のもので、外面には格子タタキが施される。1456は瓦質の焼成がなされた小型の壺で、肩部には細い沈線と波状紋により紋様帯を構成する。1457も瓦質の焼成がなされた壺で、外面の加飾も1456に類似する。1458は韓式系土器の甕で、体部は土師器と同様の調整を施すが、比較的扁平な把手に上面からの浅い切込みが施される。1459も甕であるが、外面には平行タタキが認められる。1460は直接接合する箇所はないが、1459と同一個体の可能性が高い。また甕の蒸器高に近い部位である1461も1459と同一個体の可能性がある。1462・1463は体部片であり、いずれも外面に縄蓆紋タタキが認められ、内面には当て具痕が確認できる。1464~1472は把手で、上部からの切込みや、下面の刺突痕跡がみられるものである。1466・1467は上面からの切込みが下面にまで達しているもので、1467については切込みにより二分された状態で出土した。切込み内面の観察ができたため、写真図版(図版219)にも内面をみせる形で示した。

図186-1473~1477はU字形板状土製品の細片である。特定できるものは突帯あるいは突帯の付属する部位に限られる。出土個体数は復元できないが、流路1においては1-4域において特徴的に出土する。

図187-1487~1486に示した土器は、03-5-10トレンチにおける調査で、弥生時代の層を掘削中に出土したものである。厳密に出土位置の再検証はできていないが、層位的には流路1の堆積土の残存を誤認して掘削した可能性が高く、ここに示すこととした。1478は須恵器坏蓋、1479は須恵器坏身片で外面にヘラ記号がみられる。1480・1481は土師器甕、1482は頸部にまでタタキの痕跡を残す甕である。1483は土師器甕、1484は韓式系土器の甕である。1485・1486は韓式系土器の把手で、1485は上面からの深い切込みがみられ、1486は体部に平行タタキが認められる。

図187-1487~図189-1539には流路1-4域から出土した弥生土器を示す。後節で報告するように、

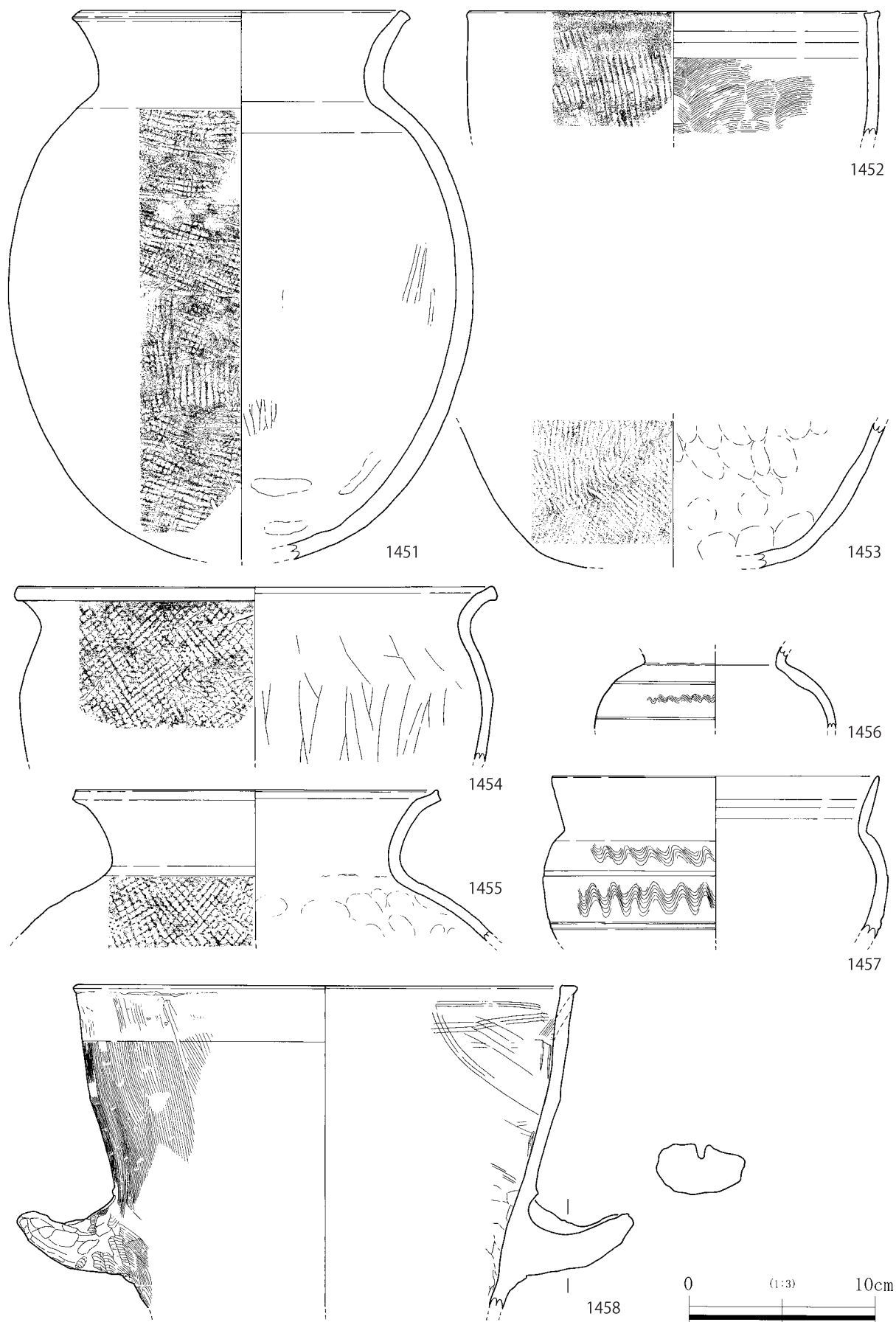


图184 流路1-4域 出土遺物38

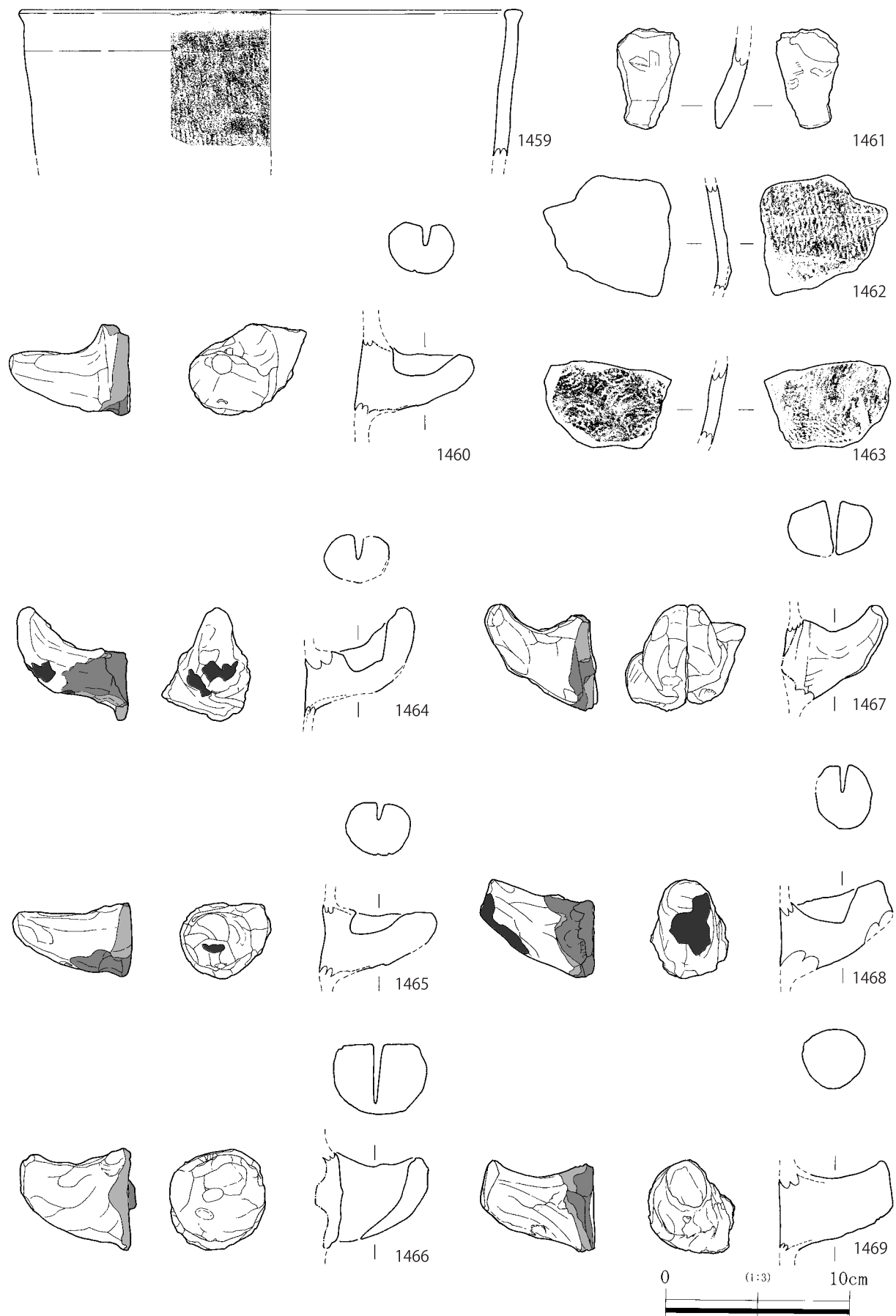


图185 流路1—4域 出土遺物39

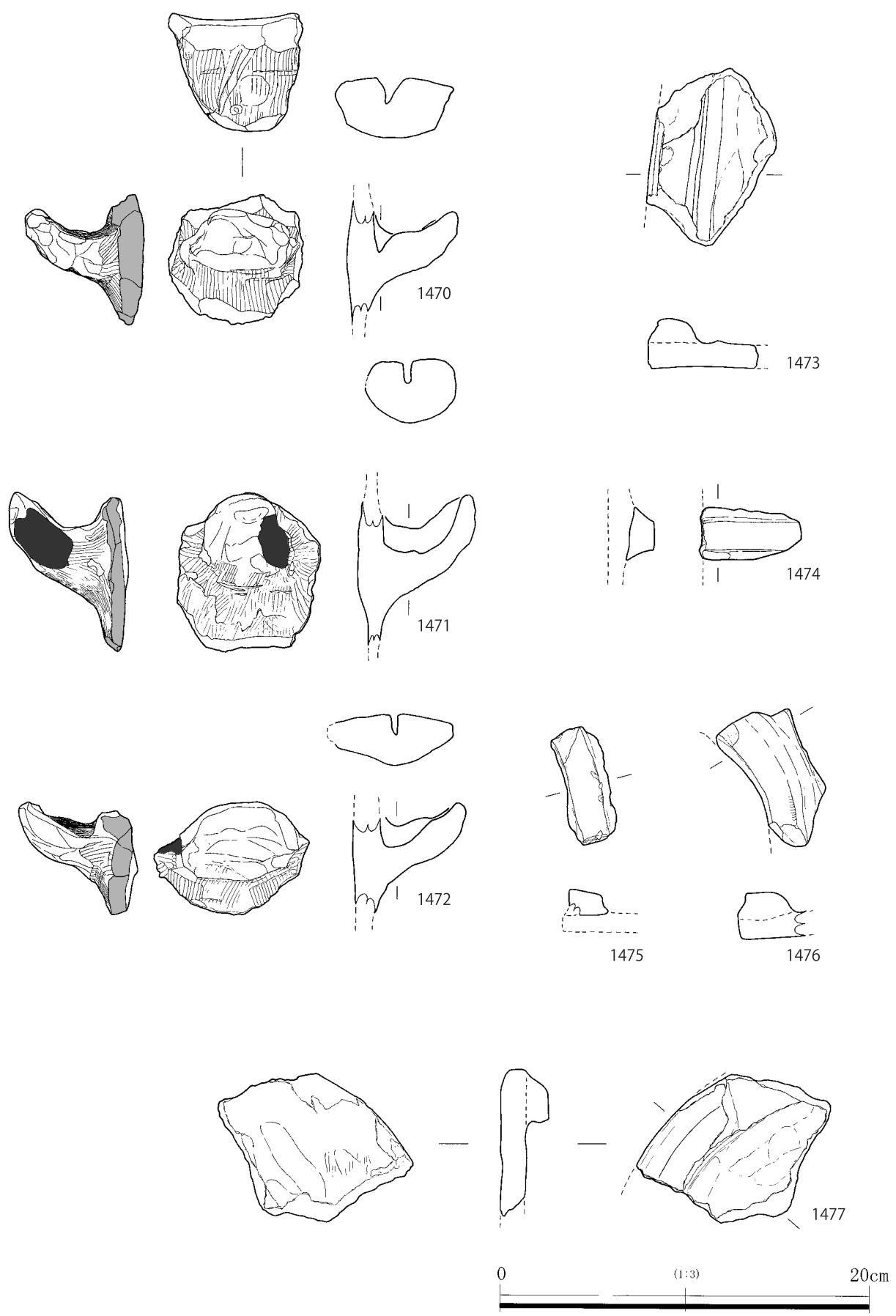


图186 流路1—4域 出土遺物40



流路1 - 4域南岸の下層には弥生時代中期の遺構面があり、遺構内や地表面に伴う土壌からは多くの弥生土器が出土している。ここに掲出する弥生土器は、流路1の侵食により流路内堆積物に含まれることになった弥生土器であると考えられるものである。いずれの個体も残存率は非常に低い。図187 - 1488 ~ 図188 - 1503は甕で、口縁部ならびに底部付近の遺存する個体を図示し得た。短く外反する口縁部をもつものが多い。1487・1488は弥生時代後期の甕で、後期の土器は極少数である。1489は口縁部の接合痕が良く残るもので、口縁端部には工具によるナデの痕跡が残る。外面にススの付着が顕著である。1492はややおおぶりのもので、口縁端部外面にキザミを施す。1495・1497は口縁端部を上方につまみあげる形態をもつ。1496は短い口縁部をもつものであるが、頸部内外面を工具によるナデにより調整するが、粘土紐の接合痕を消す工程であり、結果外面には接合痕は残らないものの工具痕跡を多く残し、内面には接合痕が多く残されたままとっている。1498は部分的な残存であるが、口縁部、底部が同一個体と考えられる。底部外面には葉脈痕が残される。1499も同じように極部分的な残存部位から口縁部、底部を認識した。肩部外面には器壁の剥離が多くみられる。1501は受け口状の口縁をもつものと考えられる。1504 ~ 図189 - 1516は壺で、1504・1505・1506は後期のものかと考えられる。1509は無頸壺で、口縁端部付近に穿孔がみられるが、残存率が低く、個数はわからない。1510は体部の破片で、外面の上位に櫛描直線紋、波状紋による加飾を行い、下半には丁寧なヘラミガキを施す。1512・1513は長頸に広口壺頸部の破片で、外面には櫛描直線紋が施される。1514も壺の頸部と考えられるが、外面には櫛描直線紋、簾状紋が認められる。1515も細片であるが、わずかに櫛描紋が認められる。1516も極細片ではあるが、算盤玉形の体部をもつものかと考えられ、屈曲部の外面には突帯を巡らし、突帯上に右下がりのキザミを、突帯下端の対応する位置に右上りの刺突を施し、合わせて綾杉紋風の装飾としている。1517 ~ 1533は底部のみ残存する個体である。1519・1520は後期のものであろう。1523は上げ底のもので、底自体の厚さは薄い。1518・1532も底部径に比して薄い底をもつ。1527・1528は輪台風の底をもち、外面には葉脈と思われる痕跡を残す。上げ底の部分にも痕跡が残る点は製作工程を考える上で興味深い。1534 ~ 1536は高坏の坏部かと考えられるもので、1543は口縁部の端面外側にわずかにキザミを巡らし、1536とも外面を丁寧なヘラミガキで調整する。1357は椀で、外面はタタキ調整を残す。後期のものか考える。1538・1539は高坏の脚部で、それぞれ短脚、長脚のものである。

図190には流路1 - 4域で出土した鉄器を示す。流路内出土の鉄器には錆化の進んでいないものが多く、酸素から遮断された埋没環境であったものと推測する。1540は釣り針である。長さ7.6cm、幅2.4cmを測り、軸部の厚さは0.3cm、腰曲げ部、先曲げ部の厚さは0.2cmを測る。腰曲げ部から先曲げ部にかけてわずかなねじりがみられる。軸部の下半から湾曲部にかけての断面形状について、湾曲の内側が隅丸方形状を呈し、外側が方形であり、湾曲に適した形状をもっているのではないか、という指摘を村上恭通氏よりいただいたが、微細な形態であり、図面において表現はできなかった。表面に薄く錆が覆うが、比較的残存状態の良好なものである。1541は小型の鉾と考えられるもので、刃部をほぼ直角に折り曲げている。復元される残存長は11.6cm、刃部の幅は1.4cm、袋部の幅は1.5cmを測る。流路出土のものとしては比較的錆が進行している。1542は刀子で、出土時には鹿角の柄に装着された状態で出土したが、鹿角については劣化が急速に進み、一部を写真において示すのみである（図版262）。鉄器部分の残存長8.8cmを測る。刃部は茎部に比べ残存部位が少ないようで、劣化の進行が進んだものと推測する。茎部は糸を格子状に巻いた痕跡が残り、柄との接合を強化する工夫と考えられる。刃部は上から見て右方向に曲げられており、1541・1543ともに祭祀的な行為を想起させる。1543は短剣と考えるものであるが、鎗との区

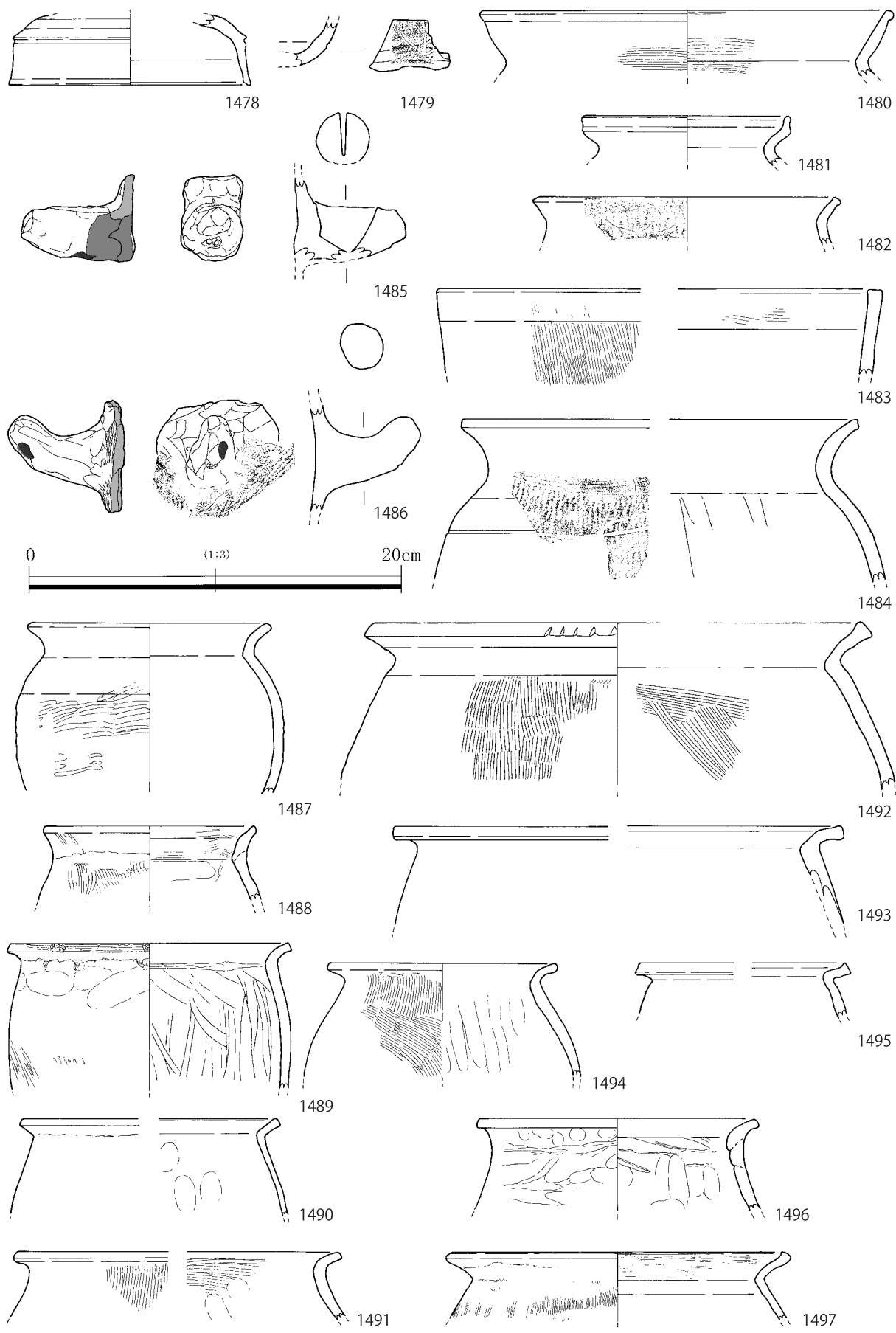


图187 流路1—4域 出土遺物41

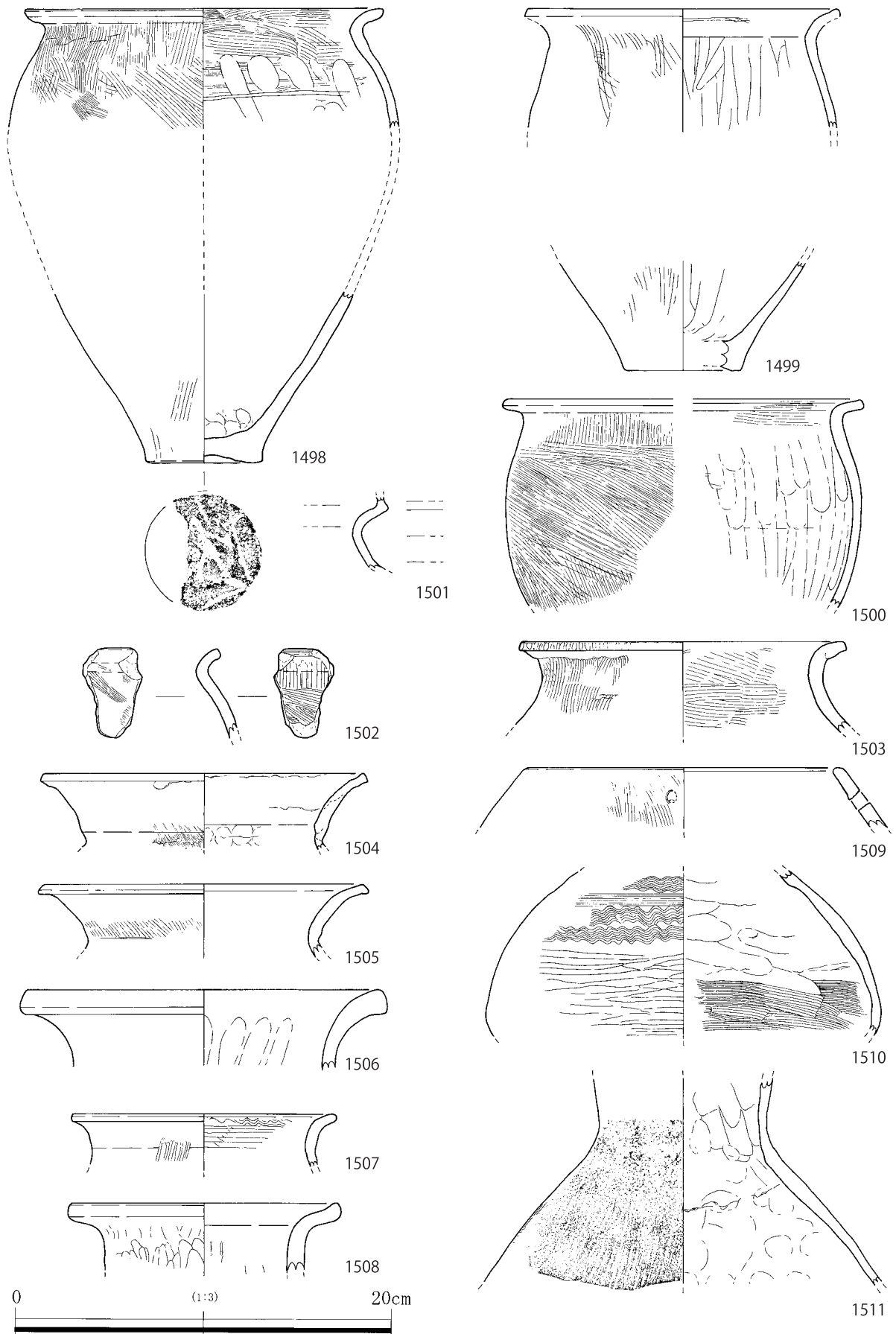


图188 流路1—4域 出土遺物42

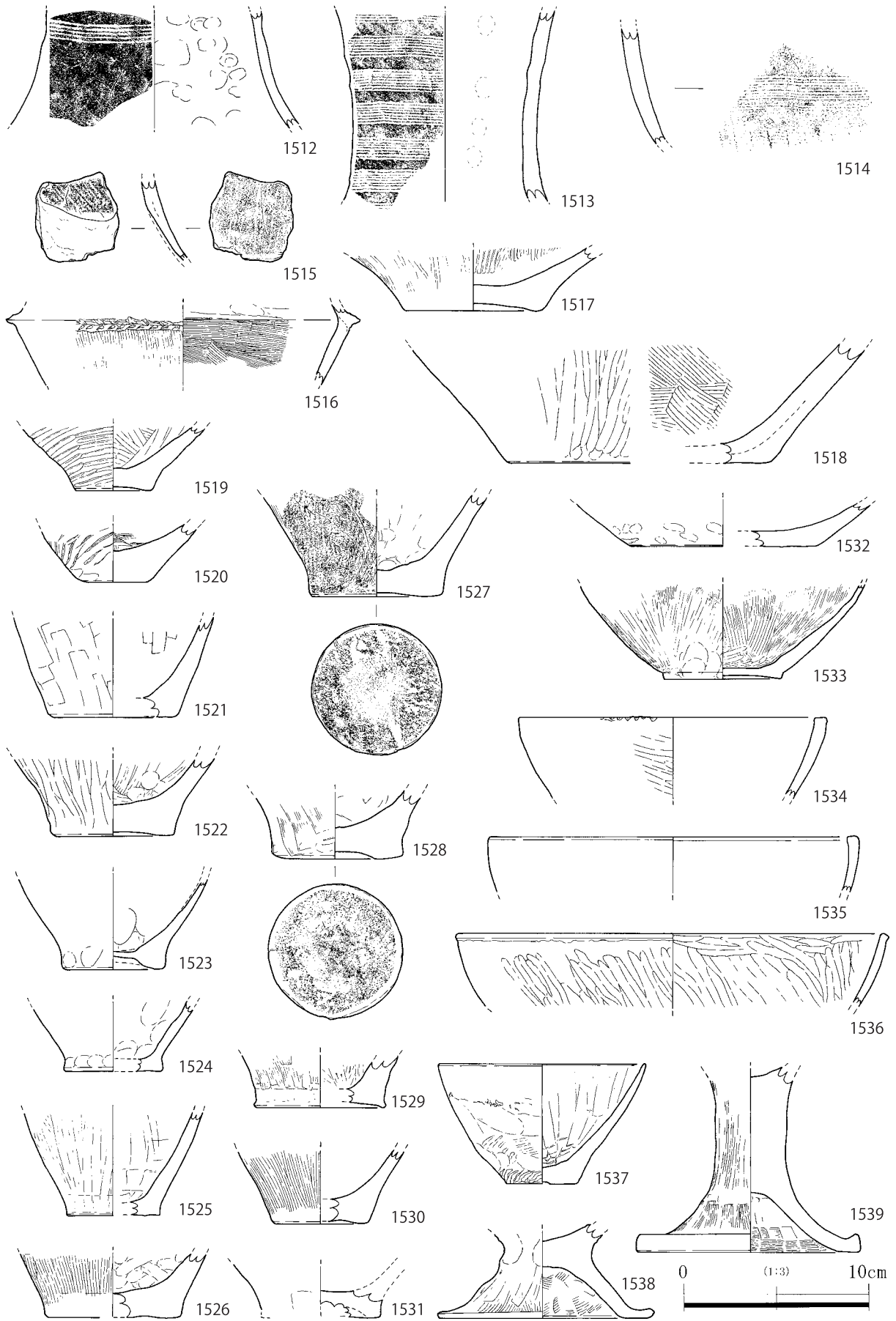


图189 流路1—4域 出土遺物43

分は難しい。残存長26.7cm、最大幅3.4cm、刃部の厚さ0.5cmを測る。茎は長さ2.8cm、幅1.7cmで、レントゲン撮影によると先端から1.1cmの部分に径3mmほどの目釘孔が確認できる。口巻きに使用された糸が残存しており、この保存処理、付着土のクリーニングが未実施のため、残存の有無も含め、把の構造について詳細な観察はできていない。刃先から16cm付近で約20度、曲げられているが、全体にほぼ錆化のみられない遺存状態をみせる。1544は長頸鎌で、残存長7.6cm、鎌身部の幅1.2cm、厚さ0.3cmを測る。茎が短く折損した可能性があるが、全体的に遺存状態は良好で、錆化はほとんどみられない。刃部は両側に刃をもつが、上からみて左側の刃には研ぎ出された痕跡があるが、右側の刃はやや膨らんだ刃面の断面をみせ、研ぎが明瞭ではない。関部には鍛造時にたたいた際のバリが段差として残されていることが確

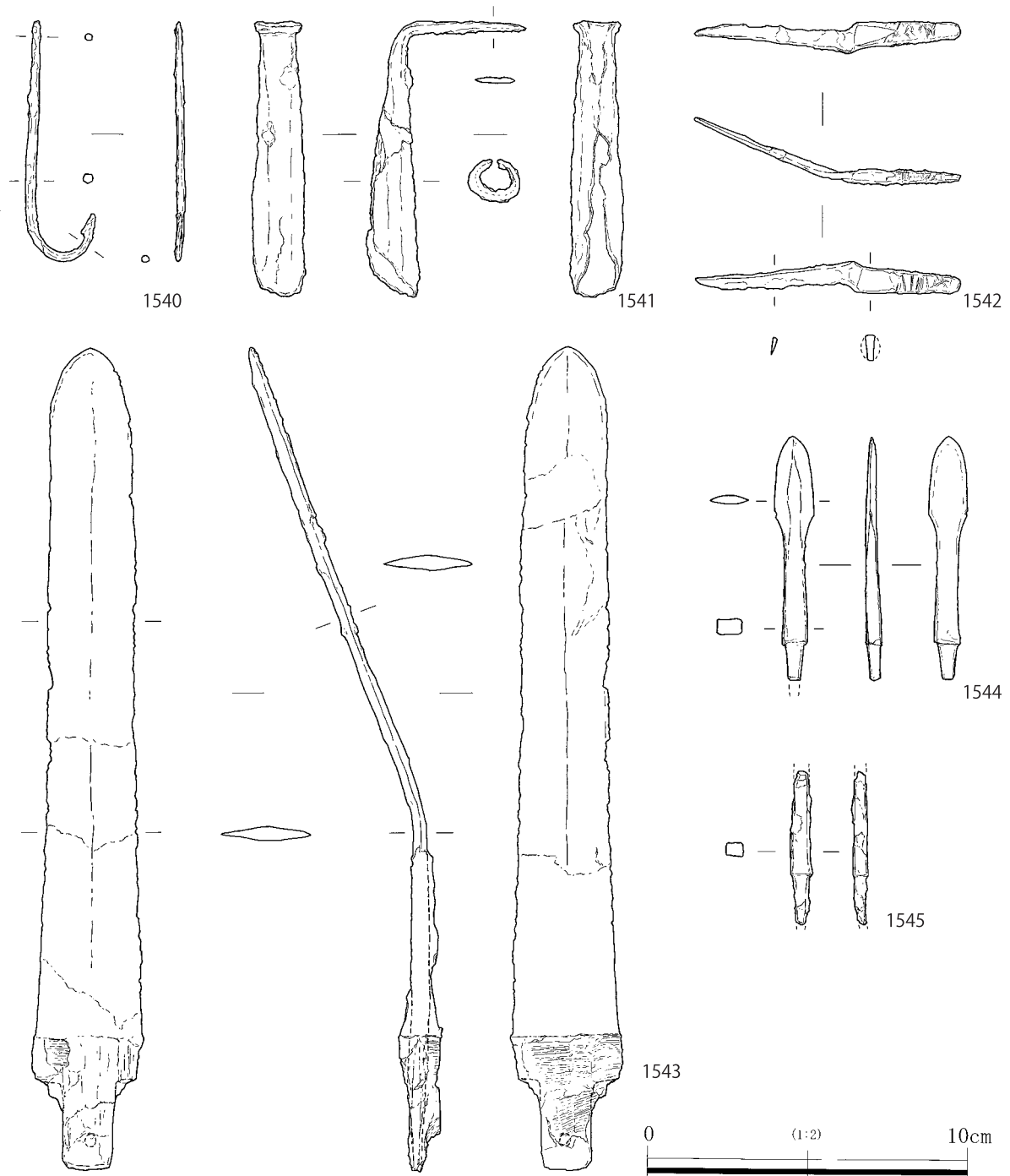


図190 流路1-4域 出土遺物44

認できる。1545も長頸鏃と考えられるが、鏃身部を欠く。残存長4.8cm、幅0.65cmを測る。やや錆化の進んだものである。

図191～図199には流路1 - 4域で出土した石器、石製品類を示す。古墳時代のものを中心とするが、土器類同様、下層の弥生時代のものが流路の侵食により堆積土に混入したと考えられるものがある。また流路堆積層の洗浄により検出した玉類については、多くを写真のみの掲載としたが、滑石製管玉、ガラス小玉、赤玉質流紋岩製の白玉については図示した。

図191 - 1546・1547は滑石製紡輪で、いずれも線刻により装飾を加えるものである。1546は、上面は無紋で、側面の斜部分に圈線と鋸歯紋を配置するが、線も細く、鋸歯紋の上下端が圈線を越える箇所があるなど、粗雑な施紋である。1547は上面に圈線と星形紋のモチーフを見て取ることは可能ではあるが、本来の意匠を残しているとは言いがたい。側面の斜部分には鋸歯紋を配するが、断片的であり、ほぼ形骸化しているといえる。また1547には線刻に赤色顔料の残存がみられる箇所がある。1548は滑石製子持勾玉の下端部と考えられ、側面の「子」が一部残存する。1549～1551は滑石製有孔板で、やや不整形なものである。1552は滑石製の模造品かと考えるが、候補となる器物は斧かとも推測するがよくわからない。1553～1555は滑石製の管玉で、1554は白玉などとともに土壤洗浄で検出した。1556は青色をみせるガラス製小玉で、外径、厚さともに4mmを測る。同じ色調をみせる流路1 - 1域出土のガラス製小玉(図111 - 485)と比べると、外径にはほとんど差は無いが、厚さは1556が厚い。1557は赤玉質流紋岩製白玉で、700点を超える滑石製白玉の中に1点のみ含まれていた。1556・1557ともに土壤洗浄により検出したものである。同時に検出した滑石製白玉については写真のみの掲載としたが、色調の分類、法量、形状の分類については別表にまとめた。石材の詳細な分析は行わなかったが、複数の材が認められ、それに対応した法量の分布を示す可能性がある。形状や製作技法については材に対応した特徴的な分布を示すことはないと考えられるが、複数の製作地において生産されたものが混在している可能性は高いと考えられる。また破片と化した白玉も60点ほど検出している。この破損が、白玉の使用時にそうであったものか、調査時、あるいは土壤洗浄時に破損したものであるのかについては判断できないが、白玉が連の形で使用されたのではなく、散布行為におもきがあったのであれば、破片のものであっても十分その役割を果たしたものと推測する。同様の理由で、不定形有孔板と呼ぶべき滑石製品(図版264 - 2121～2123)もわずかではあるが、混ざっているものとする。

1558・1559は流紋岩製の砥石で、1559は極一部が使用された段階で投棄されたものと考えられる。1560は砂岩製の砥石である。図192 - 1562は砂岩製の敲石、1563は砂岩製の砥石で、線刻状の使用痕を残す。図193 - 1564～図196 - 1571も砥石と考えられる石材で、1564・1569はざくろ石黒雲母流紋岩、1565・1568・1570・1571は砂岩、1566は輝緑岩、1567は頁岩である。1565は玉砥石か、太い線状の使用痕が残る。1570・1571は砥石として使用されたと考えられる研磨面と敲打痕の残る部分とがあり、多様な用途に使用されたものと考えられる。1572は砂岩製で、明瞭な使用痕は確認できないが、磨石として使用されたものと考えられる。1573は砂岩製敲石で、敲打痕が認められる。図197 - 1574～1578は円礫の形状をもち、わずかな敲打痕、擦痕が縁辺にみとめられる。敲石あるいは磨石かと考えられるが、自然礫を含む可能性も否定できない。石材は1557が黒雲母流紋岩である以外は砂岩である。1579も砂岩製で、大型の材の破片であるが、一部に赤色顔料?が残る。1580は頁岩製のもので、錘状の形態をもつ。一方の端部に剥離、破損痕跡があり、使用痕の可能性はある。磨石として用いられたものかと考えられる。図198 - 1581は台形状の整った形態をもつもので、下端面は滑らかな曲面をみせる。玄武岩製で、磨石と考



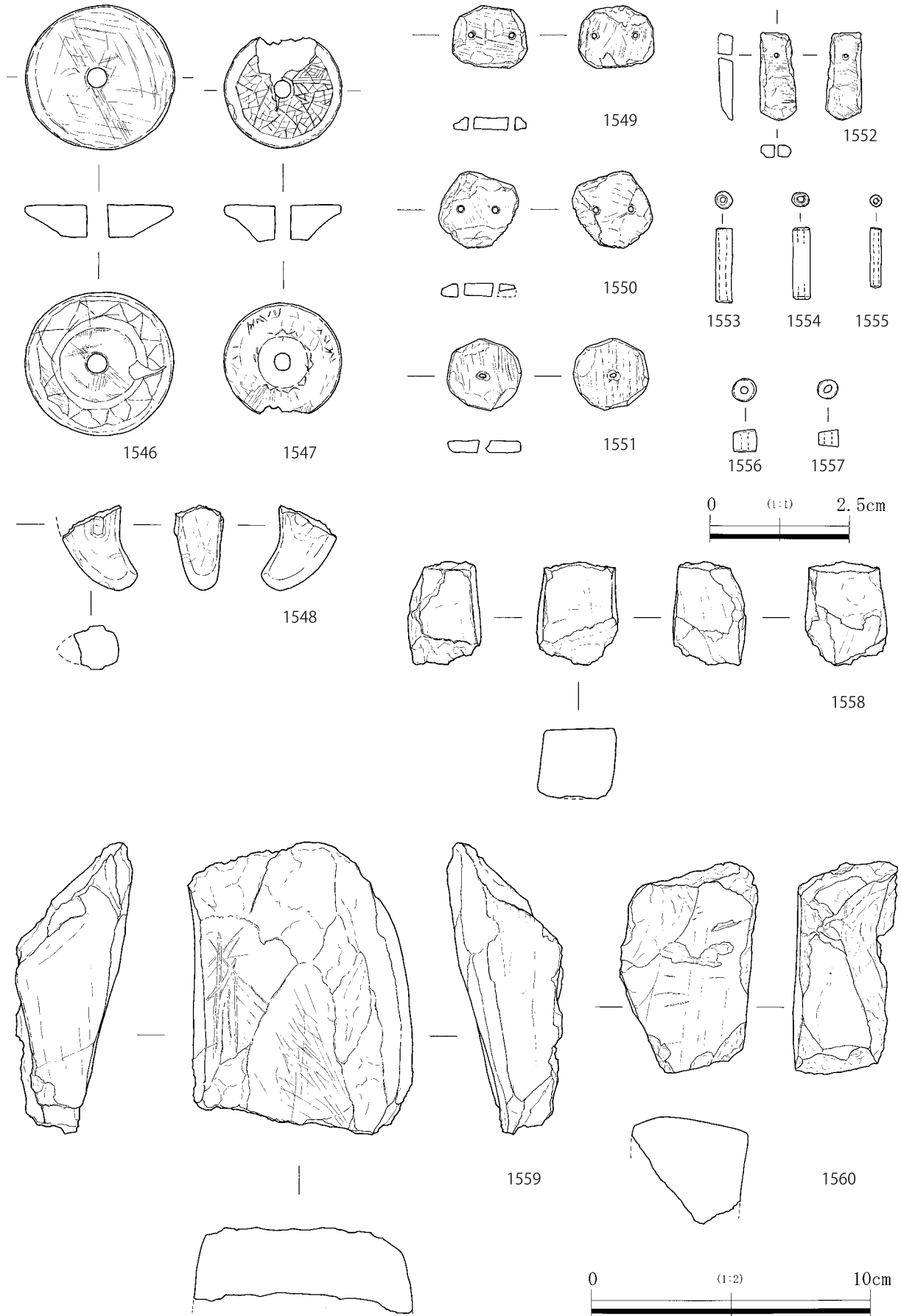
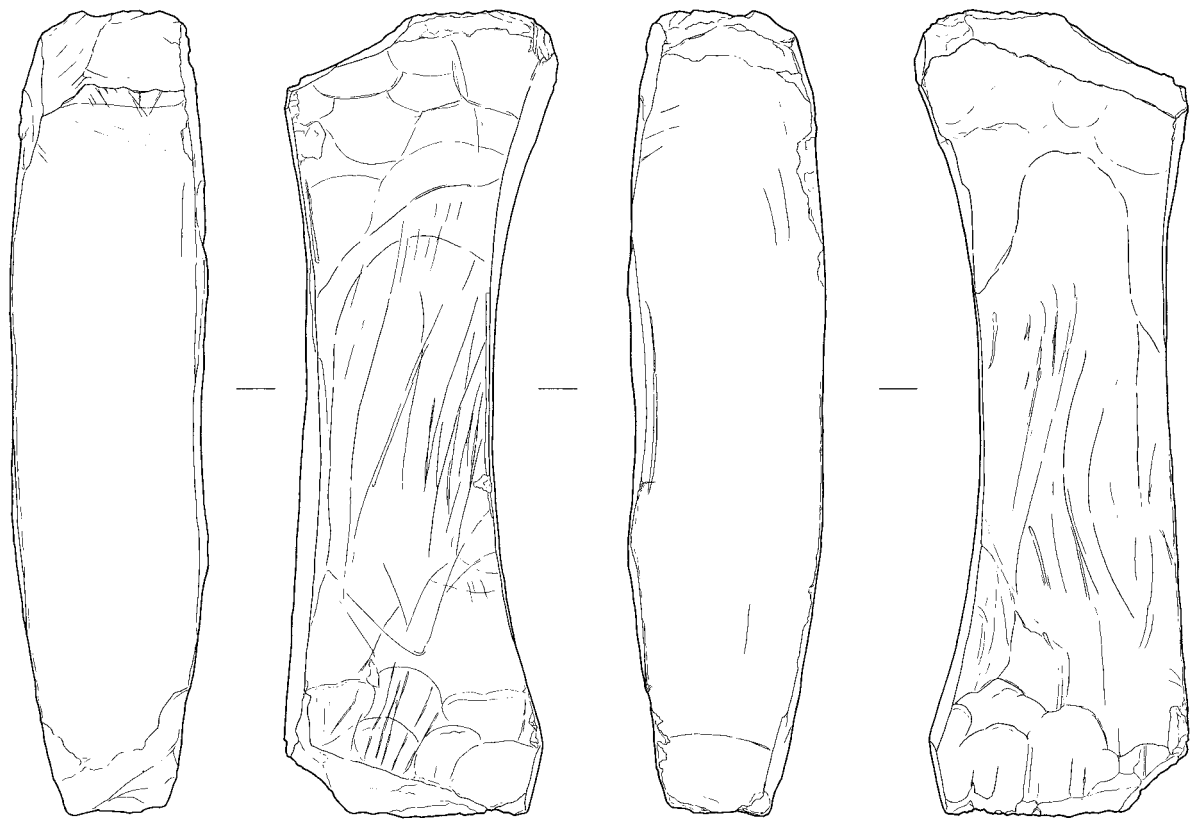
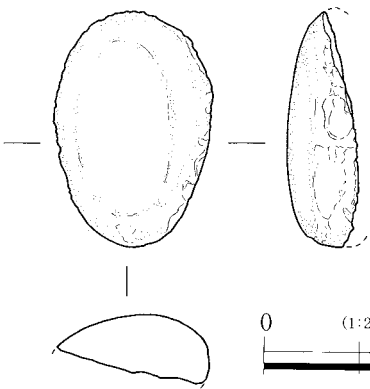
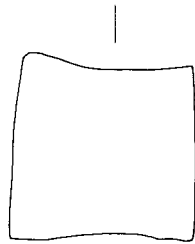


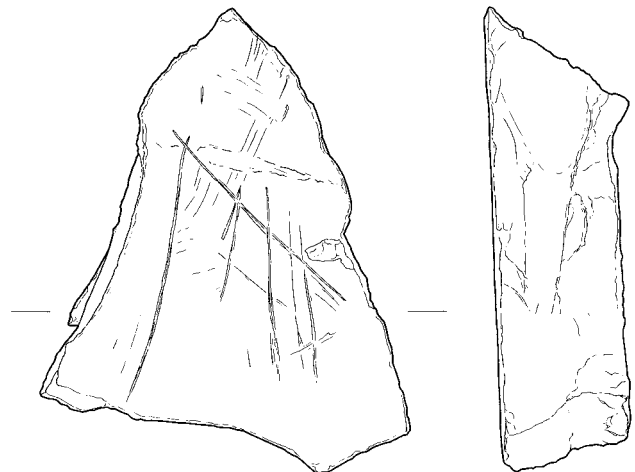
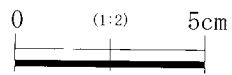
图191 流路1-4域 出土遺物45



1561



1562



1563

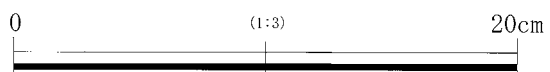
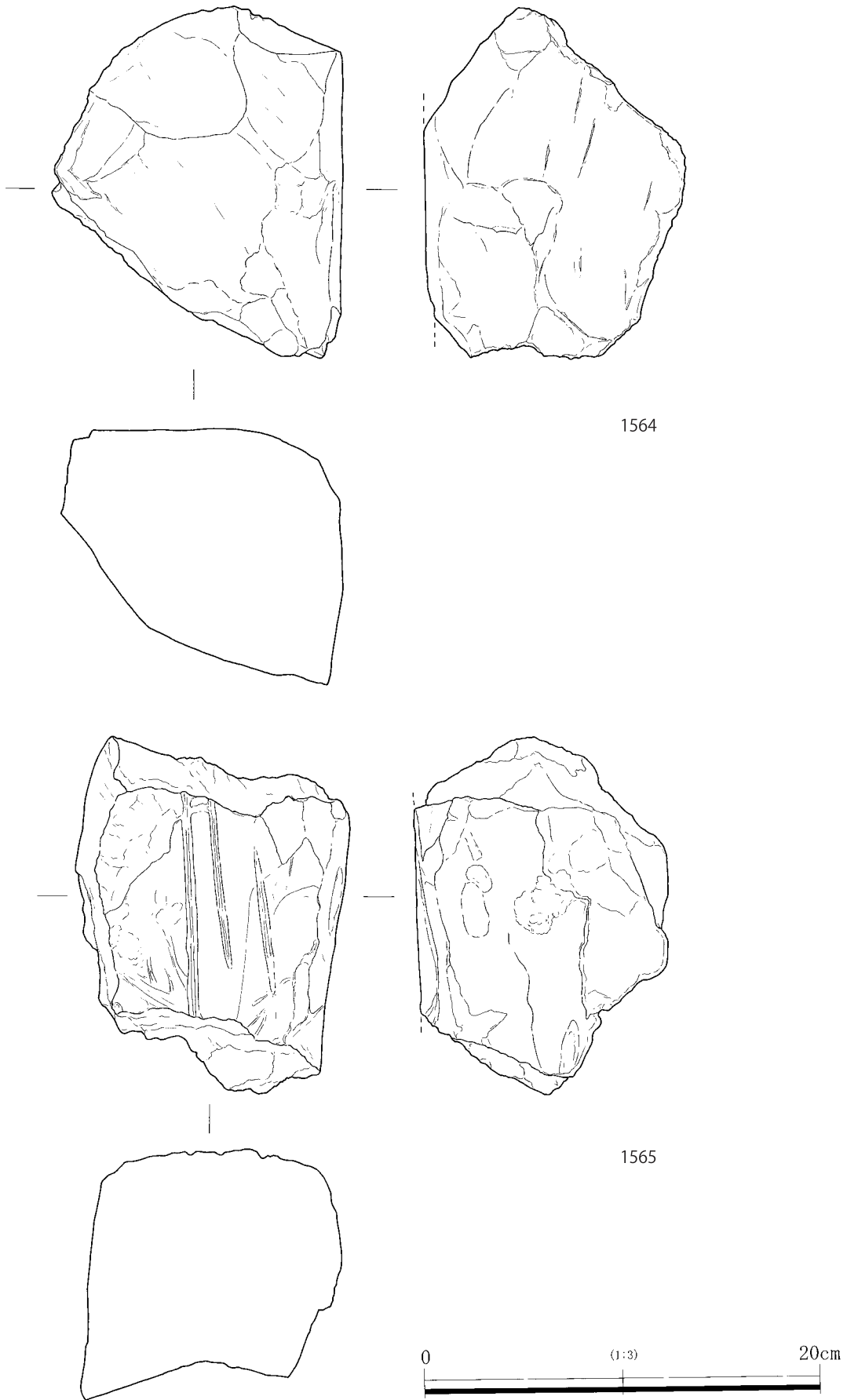


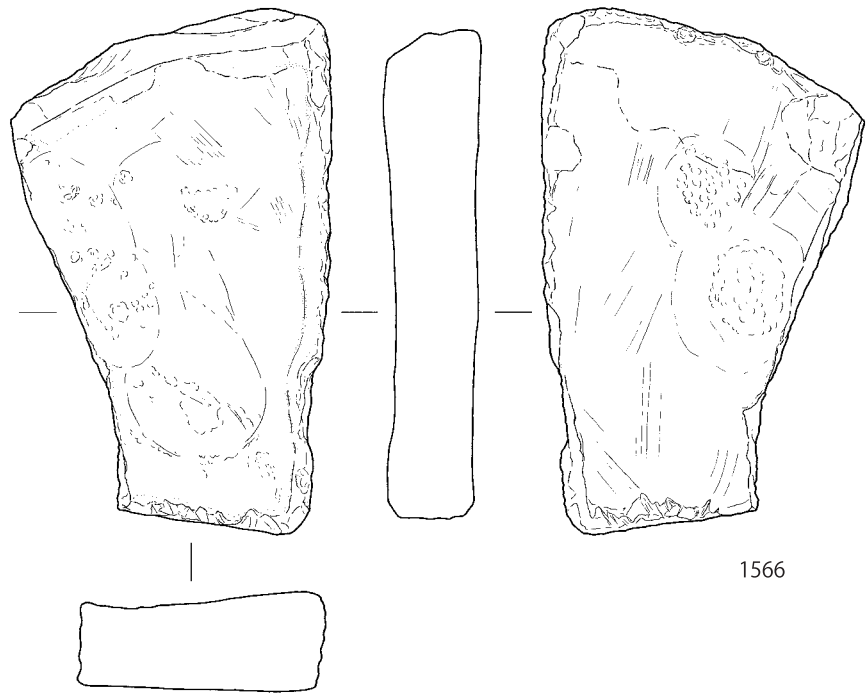
图192 流路1—4域 出土遺物46



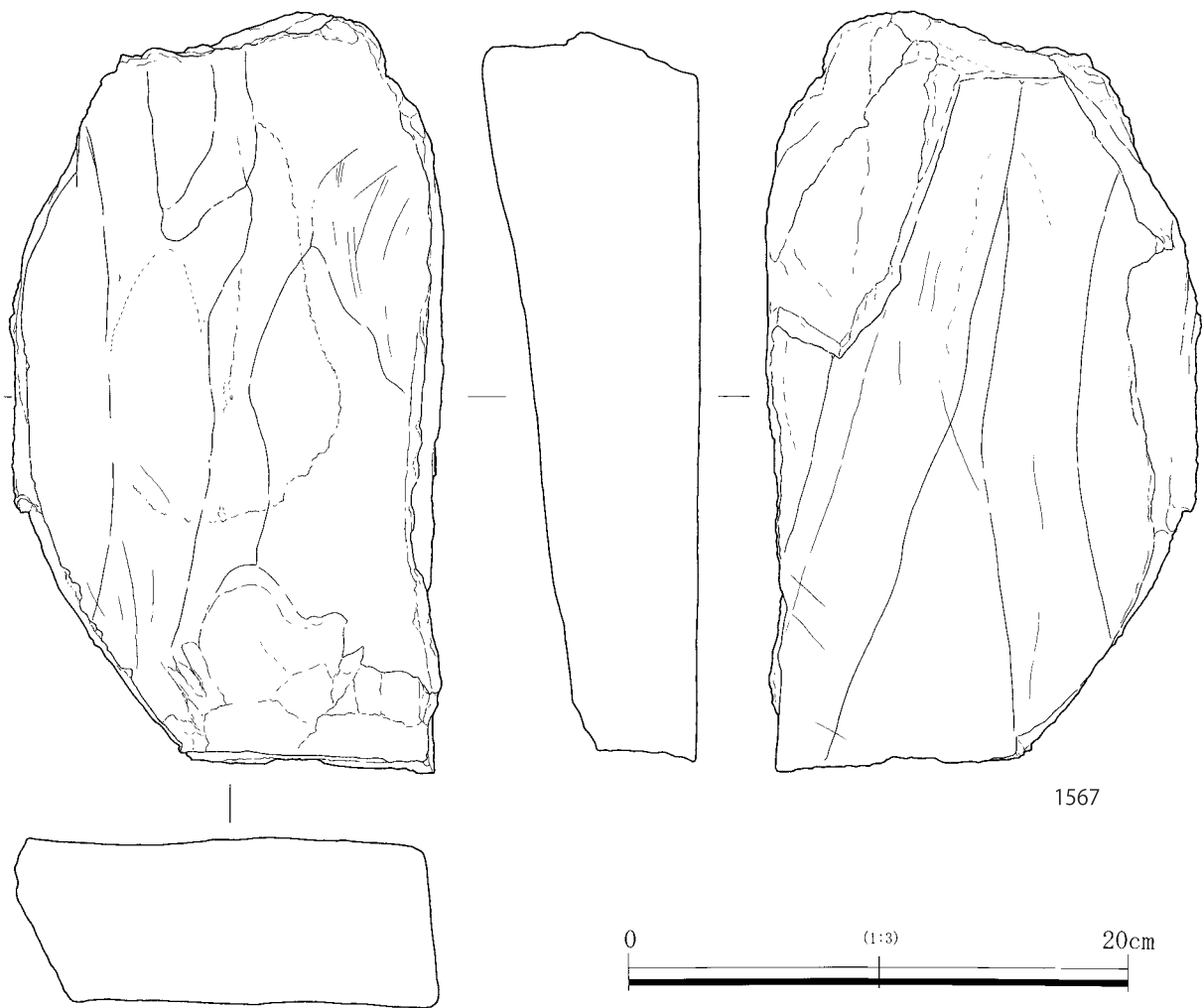
1564

1565

图193 流路1-4域 出土遺物47



1566



1567

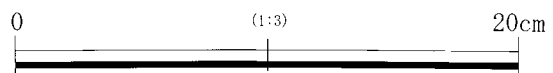
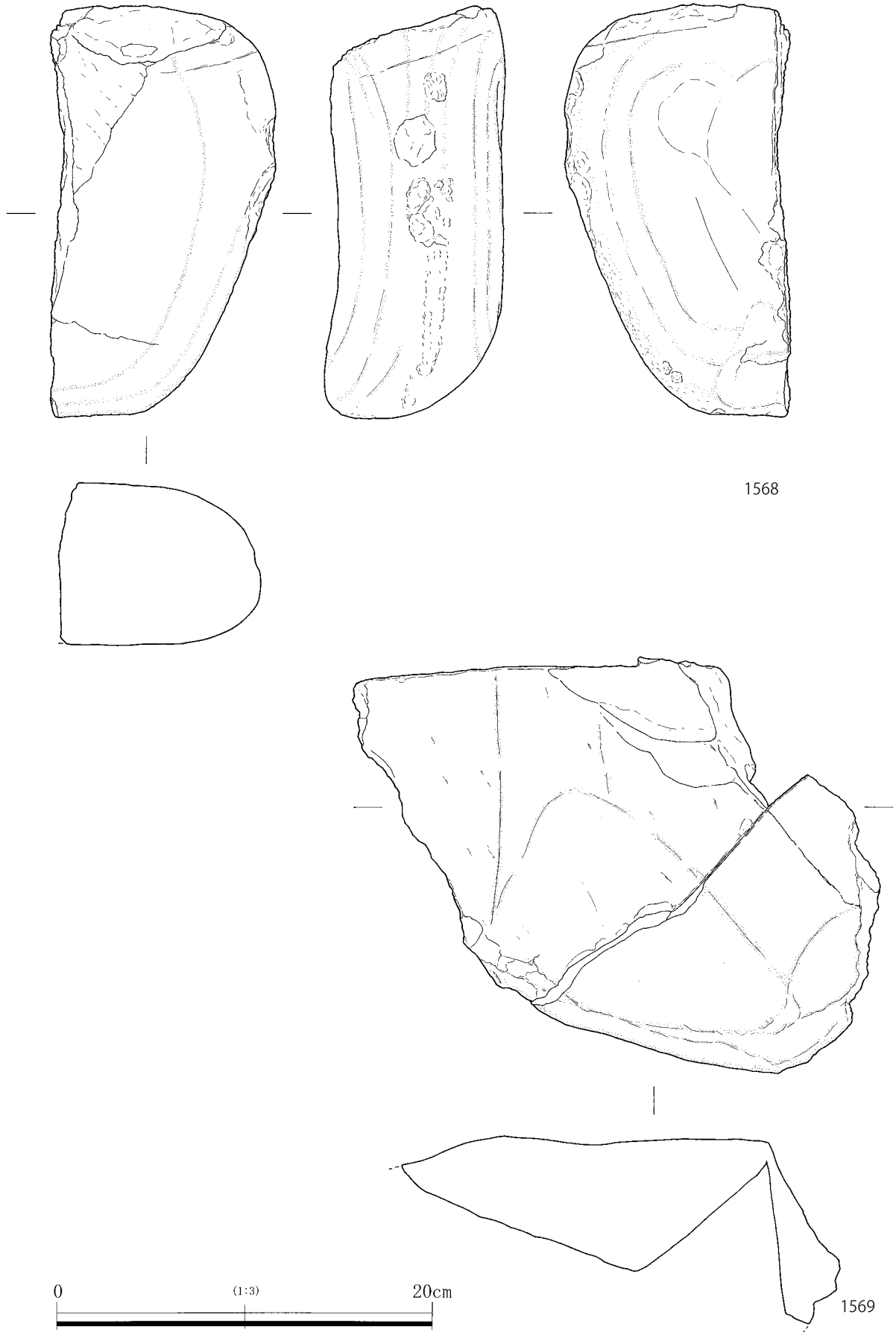


图194 流路1—4域 出土遺物48



1568

1569

图195 流路1-4域 出土遺物49

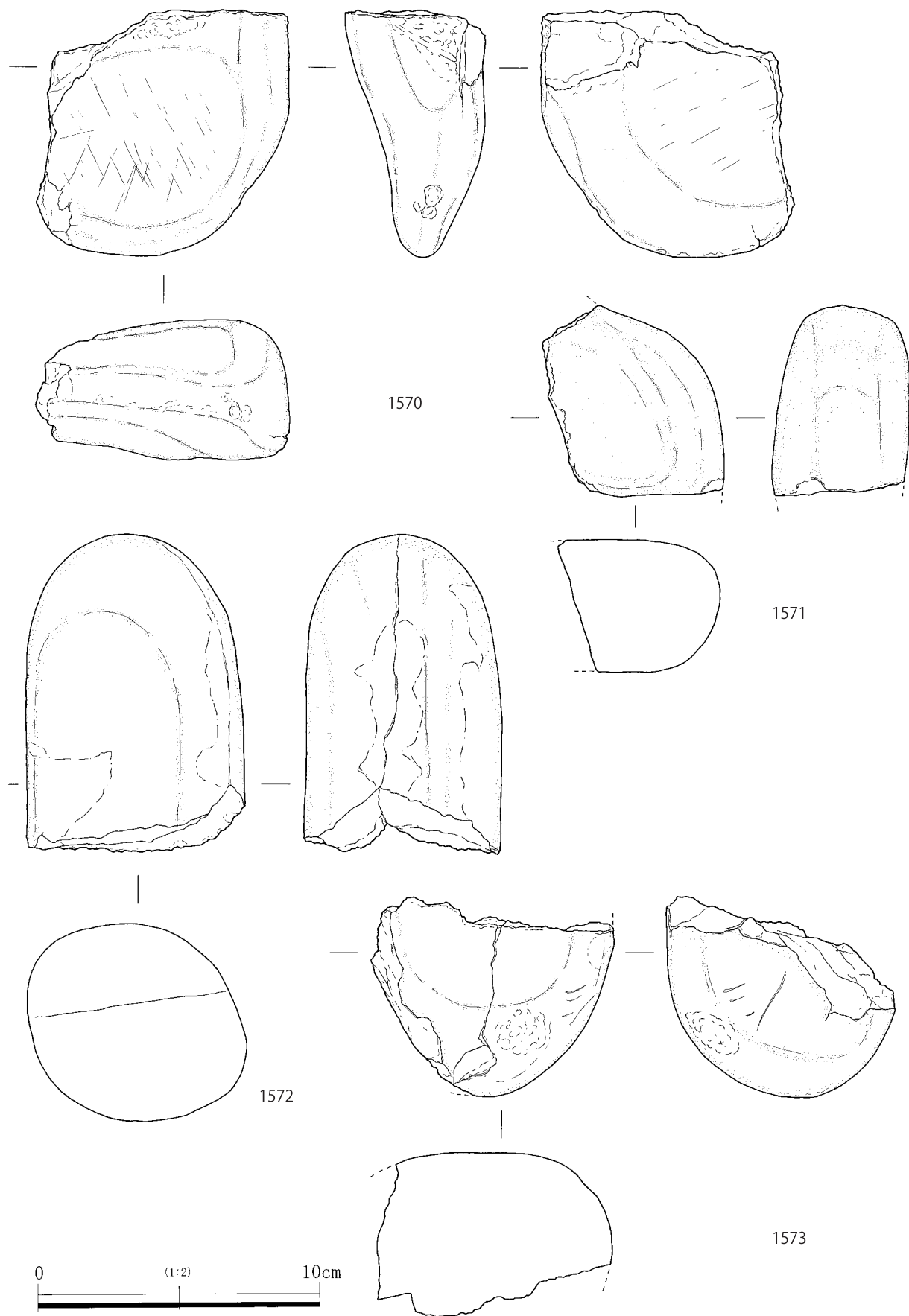


图196 流路1—4域 出土遺物50



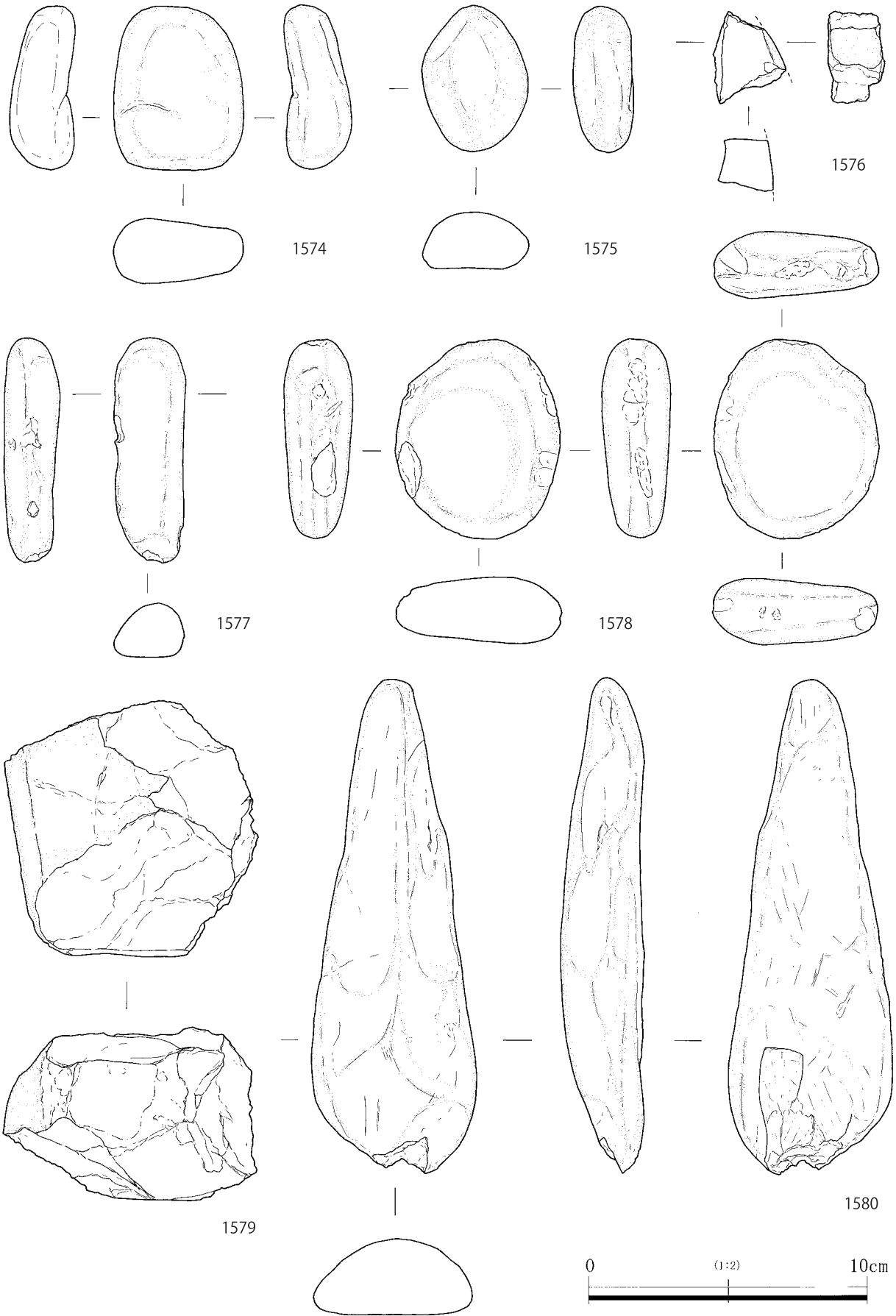
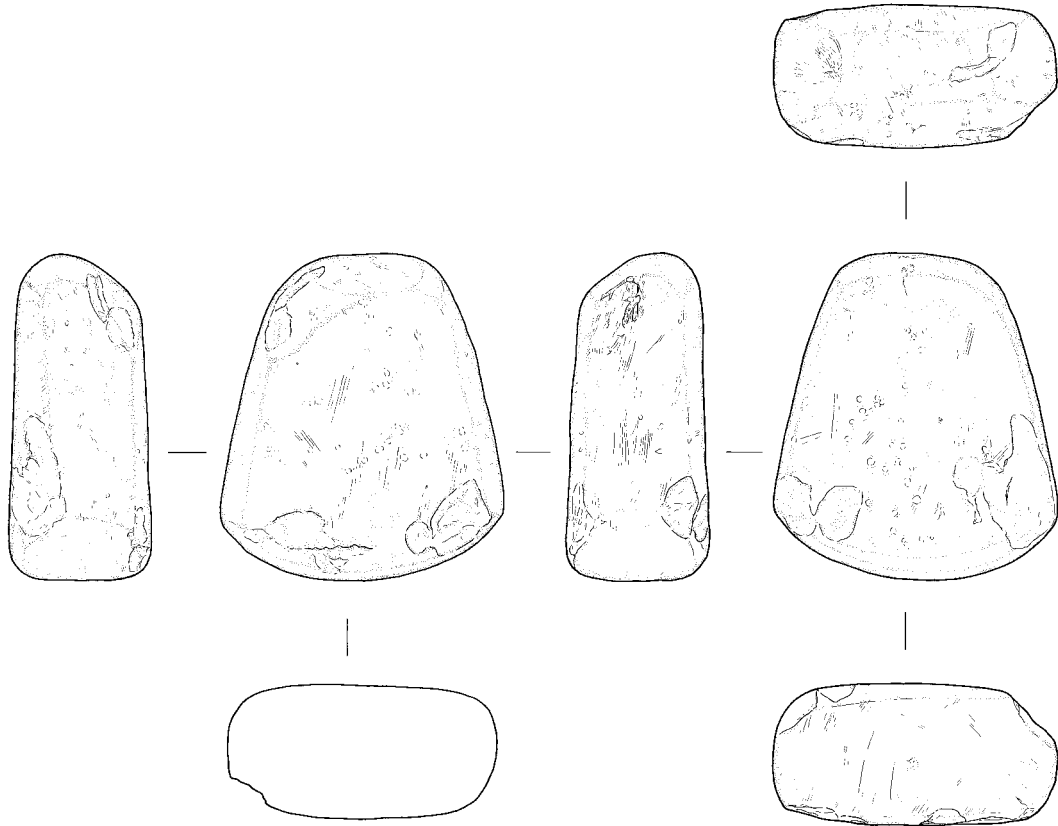
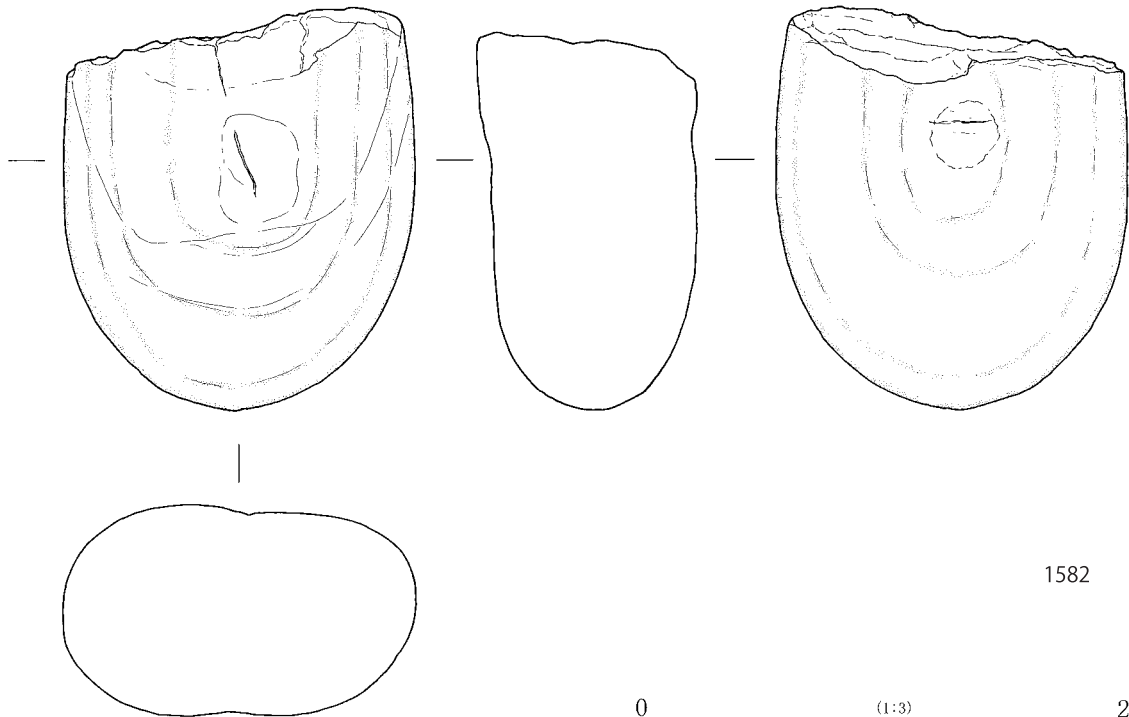


图197 流路1-4域 出土遺物51



1581



1582

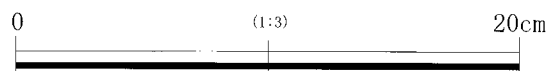
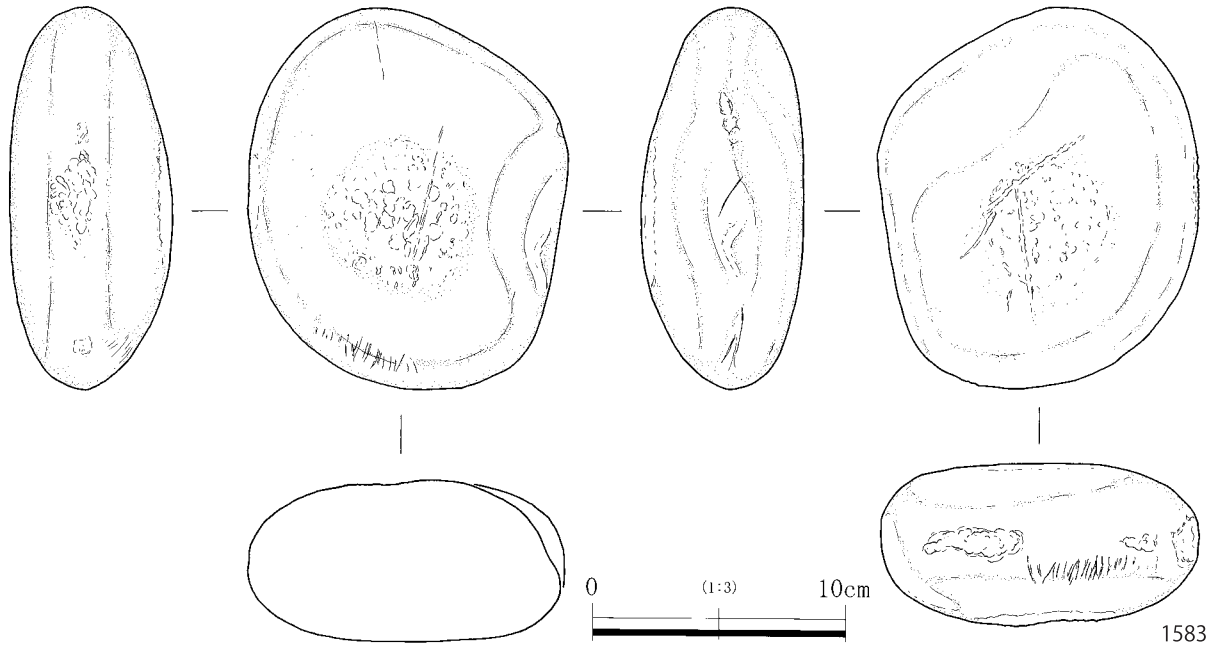
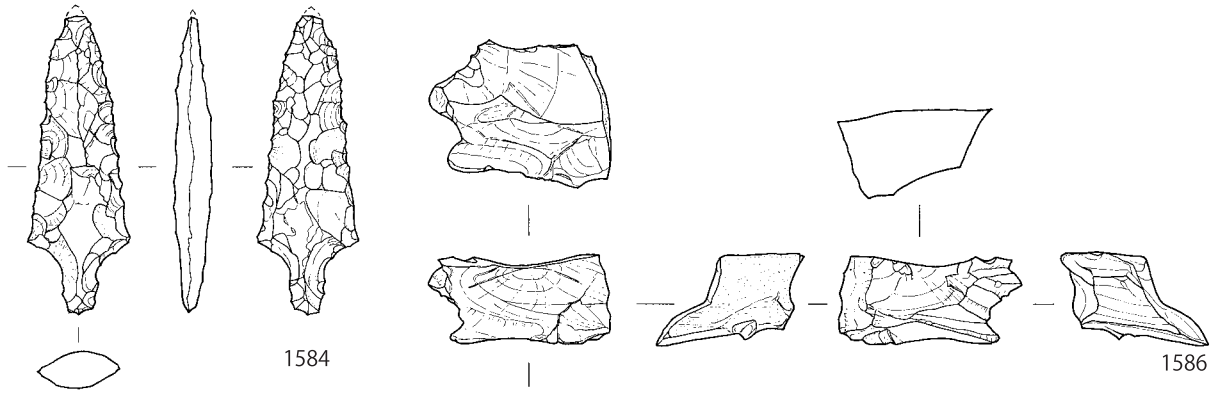


图198 流路1—4域 出土遺物52



1583



1584

1586



1585

1587

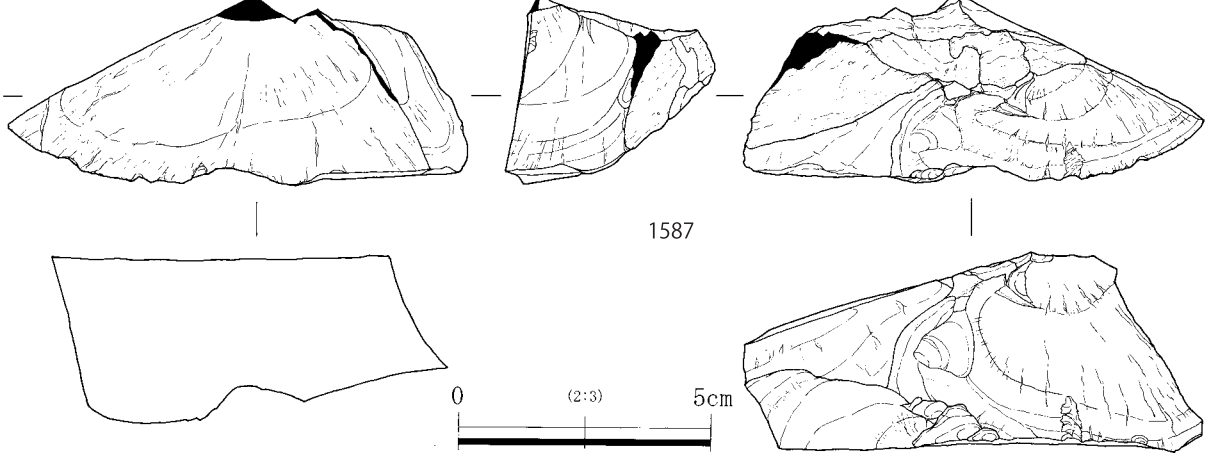


图199 流路1-4域 出土遺物53

える。1582ははんれい岩製の凹石かと考えられるもので、一部の残存であるが、上下面にくぼみがみられる。図199-1583は砂岩製の凹石で、上面と下面にはくぼみが形成され、周囲3辺に敲打痕や擦痕がみられる。多様な用途に供されたものと考えられる。1584はサヌカイト製の有茎式石鏃で、先端の一部を欠くが、残存長5.9cm、最大幅2.0cm、最大厚0.8cmを測る。重量は6.9gで、大型の石鏃である。1585はサヌカイト製の剥片で、主要剥離面がよく残るものである。重量は2.6gを測る。1586もサヌカイト製の剥片で、重量は14gを測る。1587は長さ3.7cm、幅9.2cm、厚さ4.1cmを測る。大型の剥片で、重量は106.3gを測る。1585・1586・1587はともに、斑晶の発達、風化面、リング・フィッシャーの発達などの面において熱処理された剥片に特徴的な痕跡が認められ、被熱の可能性が指摘される。

写真のみ掲載した石製の遺物は49点あるが、細片と化したものが多く、厳密に用途を特定できないものも多い。砥石には2904・2905・2913・2918・2922・2970がある。2904は頁岩製で、残存長約30cm、厚さ約10cm、重量9kgに及ぼうかという大型のもので、上面には線状の傷を含む使用痕跡が顕著である。2905も残存長25cm、厚さ9cm、重量8.9kgのものであるが、使用痕の残る範囲は比較的狭い。台石と考えられるものに2906-2908・2910・2911・2914-2916・2917・2969・2976がある。2906は大型の台石で、残存長21.0cm、幅15.5cm、厚さ10.3cm、重量6450gを測る。上面に敲きによる痕跡が残る。敲石かと思えるものに2919・2920・2921があるが、敲打痕の残るものにも磨石として使用されたものも含まれていると考える。明瞭な使用痕跡の認められないものを自然石と称するが、元々、礫類の堆積する環境とは考えがたいこともあり、もち込まれて投棄されたか、何らかの用途があったものかと思える。2924・2925・2954・2957-2961・2963・2968・2972・2973・2980・2981・2985-2993・3001がこれに該当すると判断した。また、剥片には2966・2967があるが、2966はホルンフェルス化した頁岩、2967は無斑晶ガラス質安山岩である。いずれも流路に伴うものの、下層の弥生時代の遺構に伴うものが混在すると考える。

図200-図206には木製品を示す。製品として理解できたものを中心に図示するが、これ以外に樹種同定のみ行った杭などの材については第5章第2節に表1において記載する。

図200-1558はコナラ属アカガシ亜属を用いた部材で、用途は厳密にはわからないが、一方を鉤状に加工したもので、表面は丁寧に整えられている。あくまで想像ではあるが、倉庫扉の門など、別部材に組み合わせて使用するものかと推測する。1589は背負子と考えるもので、樹種はサカキである。背負子は流路1-3域で出土した図133-762があるが、材の太さや細部形状に違いはあるものの、全体的な形状は同様である。基部と斜め上方に延びる爪部からなり、基部の先端（下端）には頭部を削りだし、若干の紐擦れ痕跡が残る。爪部の先端は欠失するが、762を参考にすると頭部を削り出していた可能性がある。基部は比較的扁平な蒲鉾形の断面形状をもち、背面は平坦である。1590はアカトリで、樹種はケヤキである。遺存状態は悪く、基部から底の一部と一方の側が遺存する。したがって確定的な法量は深さが6cmということに限られる。1591は腕木状の製品で、樹種はマツ属複維管束亜属である。本体を失い、先端部分にも加工痕があるが、欠損しているものと考えられる。形状は蓋の腕木に類似するが、腕木の長さがやや短いと考えられるところもあり、別の製品の一部である可能性もある。1592・1593は用途、名称は不明であるが、棒状の製品で、1条の溝をもつ。樹種はそれぞれイヌガヤとカヤである。図201-1594は方形の小型槽で、不整な直方体に加工した材の、一方の小口寄りに方形の繰り込みを施す。全体の法量に比べ繰り込みは浅い印象がある。樹種はマツ属複維管束亜属である。1595は弓の弓幹と考えられる部分で、樹種はアジサイ属である。やや扁平な本体から細い突起をのぼす。突起部の長さは7mm程度であり、弦を張った痕跡はみられないため、用途、名称も推測の域をでるものではない。1596は三稜

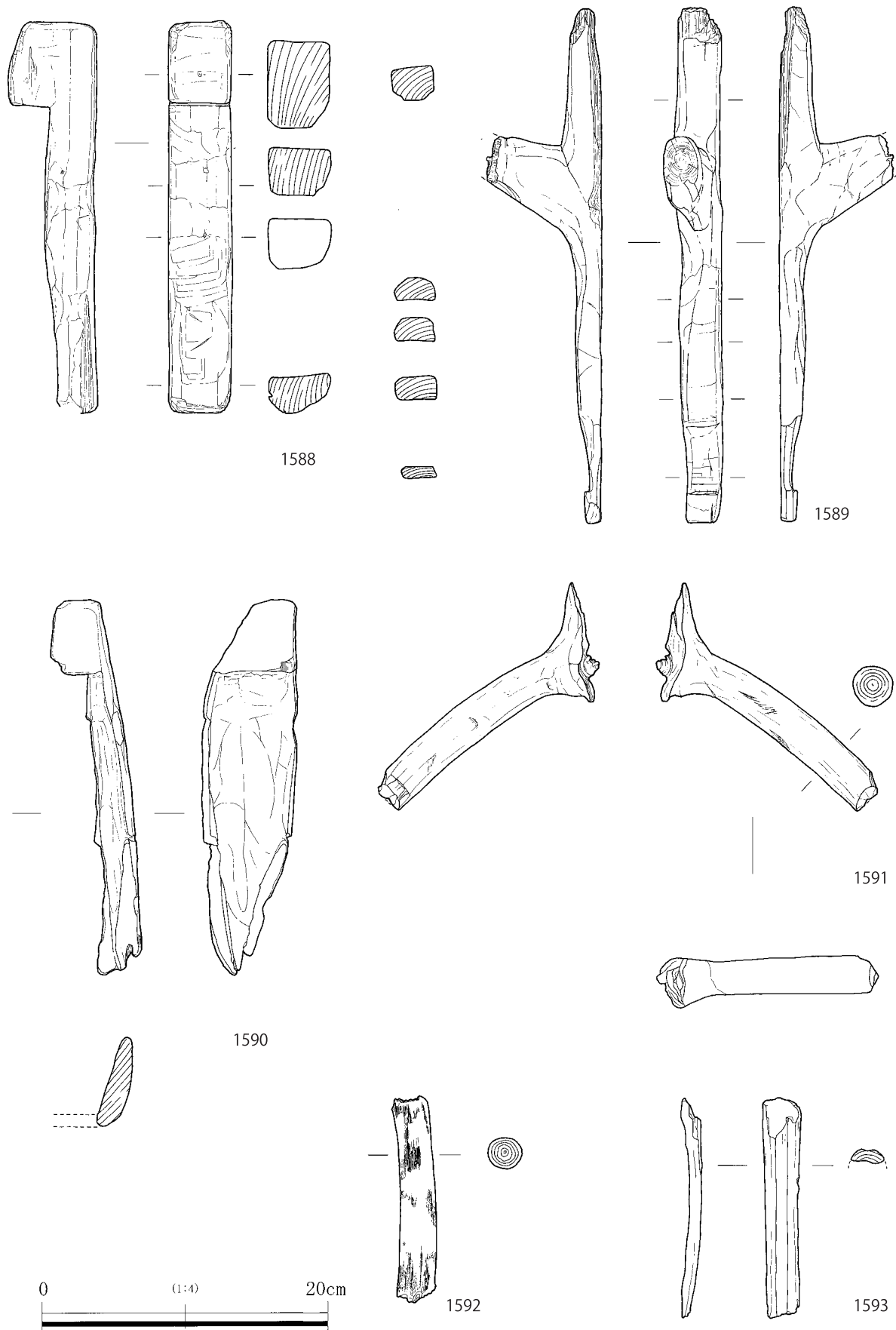


图200 流路1-4域 出土遺物54

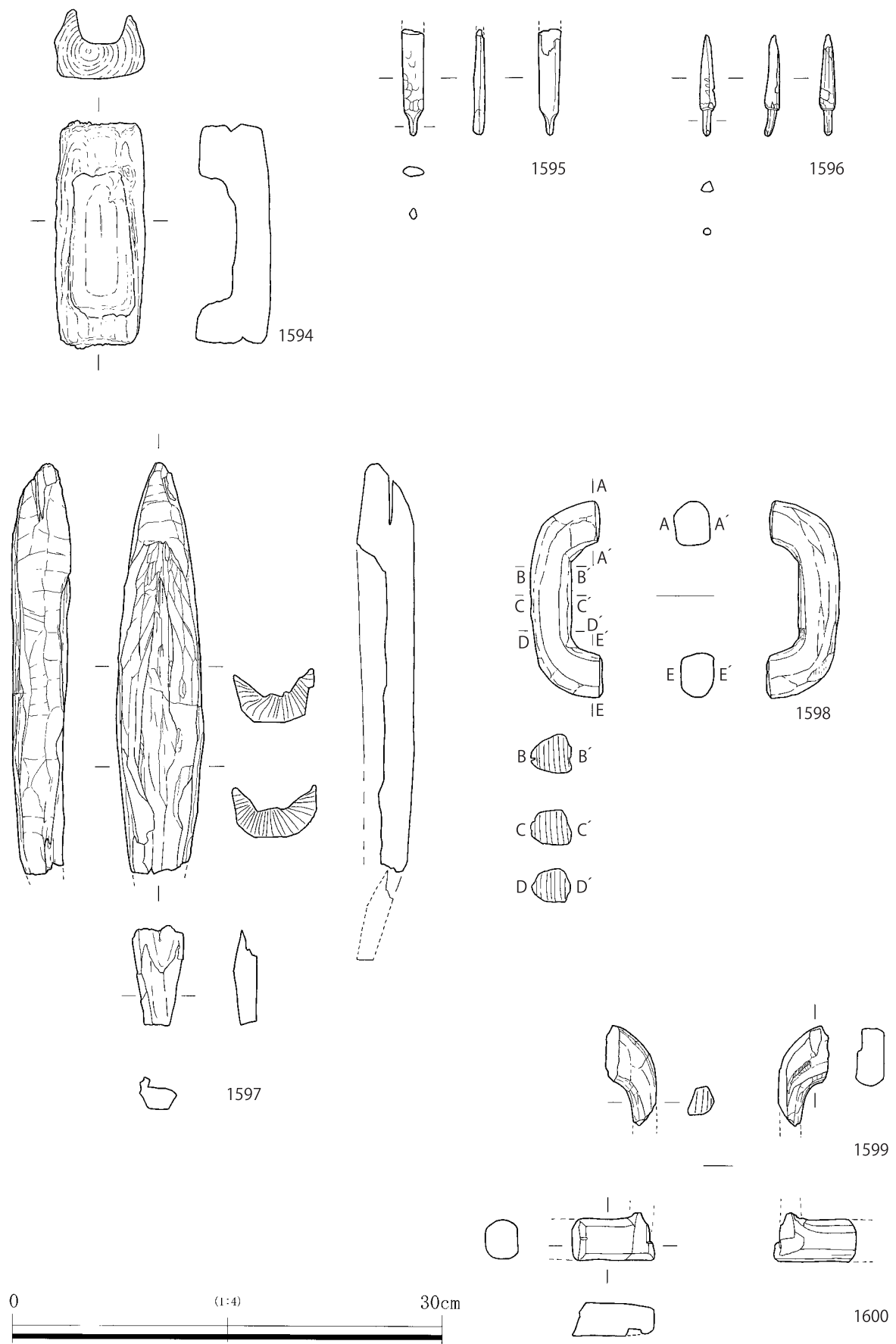
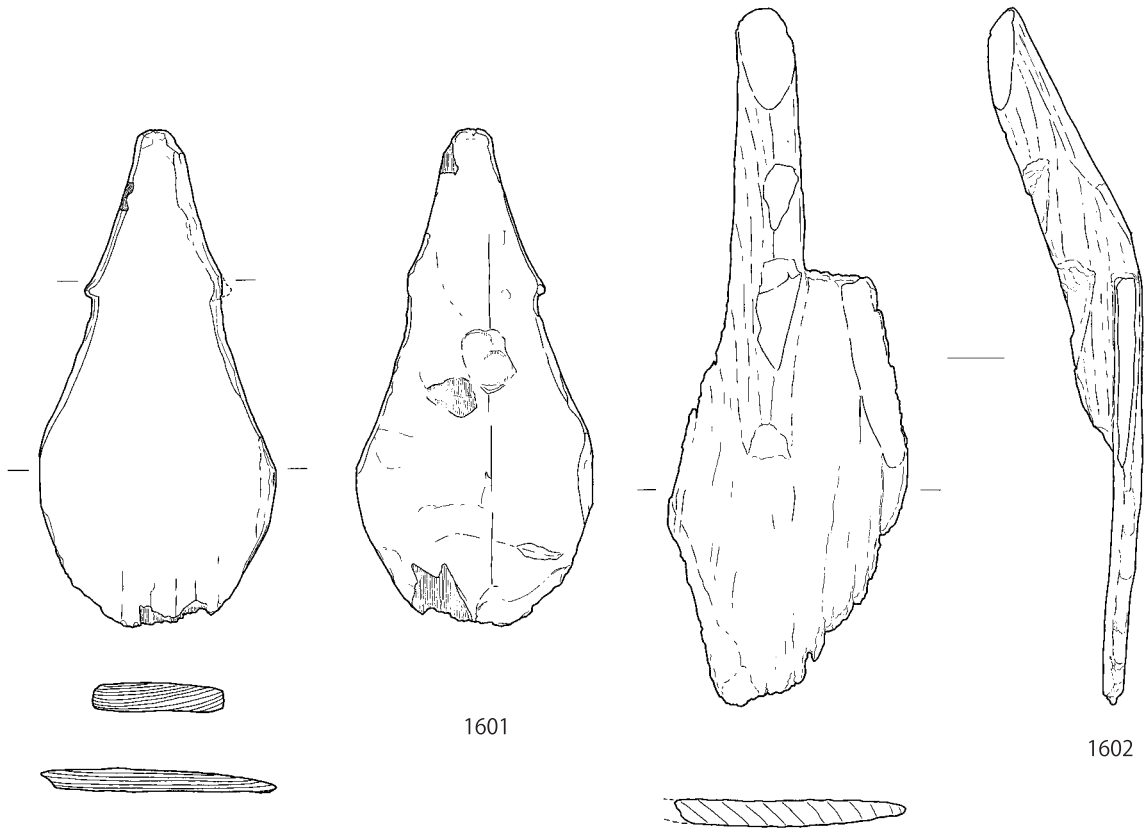


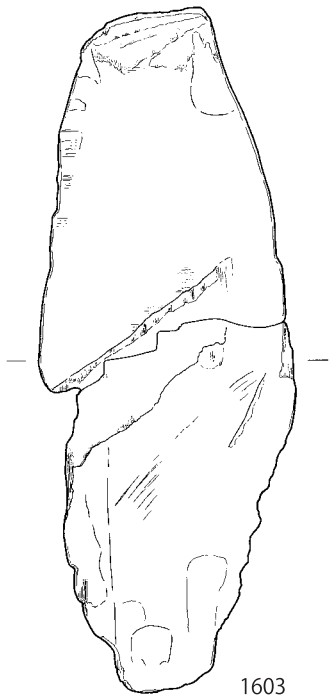
图201 流路1—4域 出土遺物55



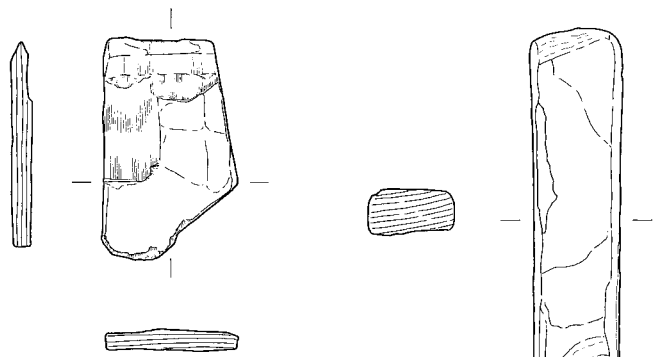


1601

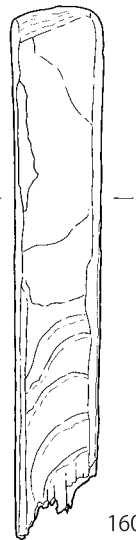
1602



1603



1604



1605

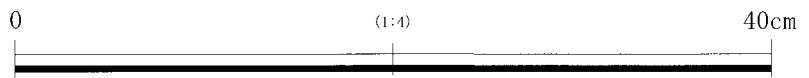


图202 流路1—4域 出土遺物56

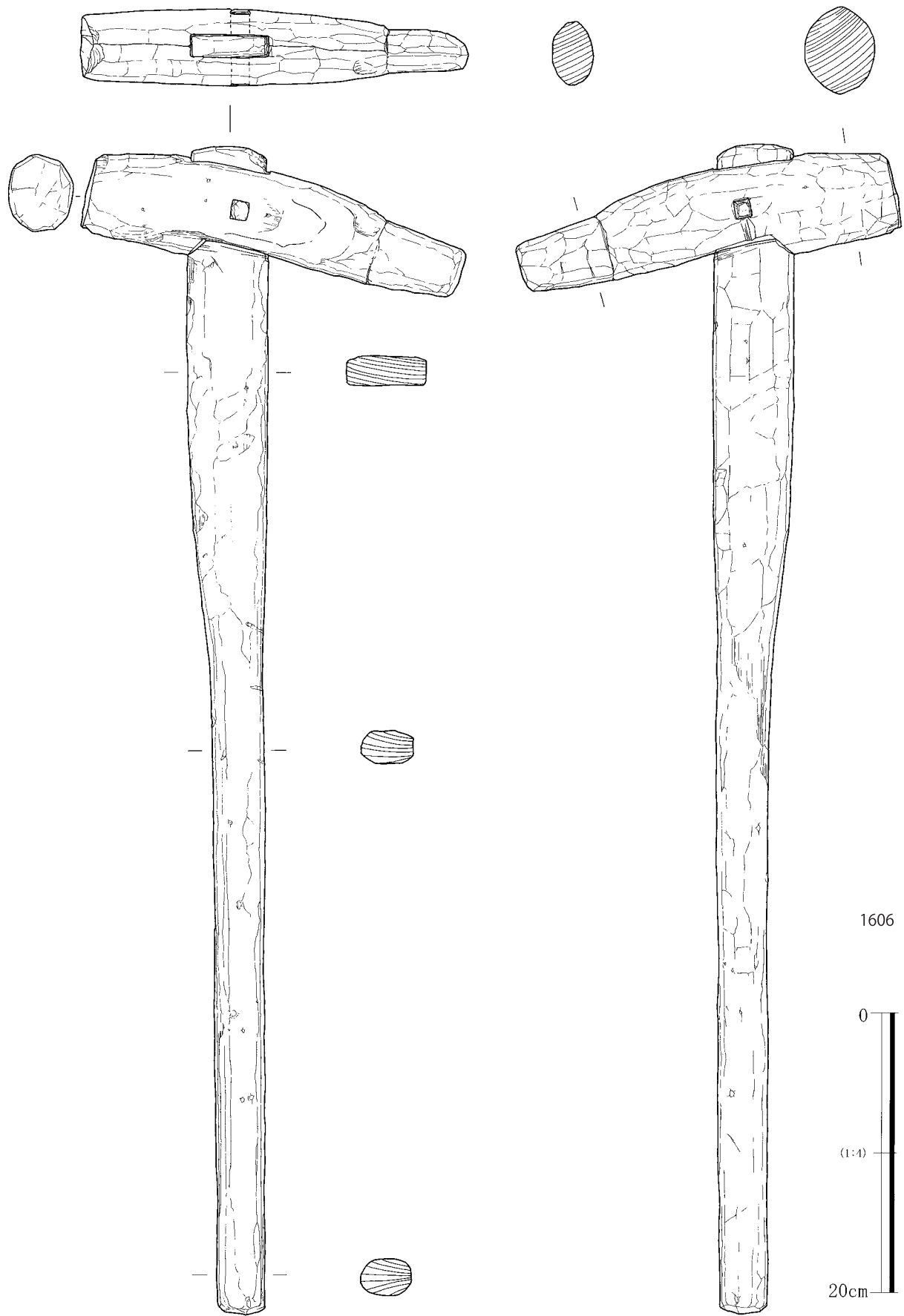


图203 流路1—4域 出土遺物57

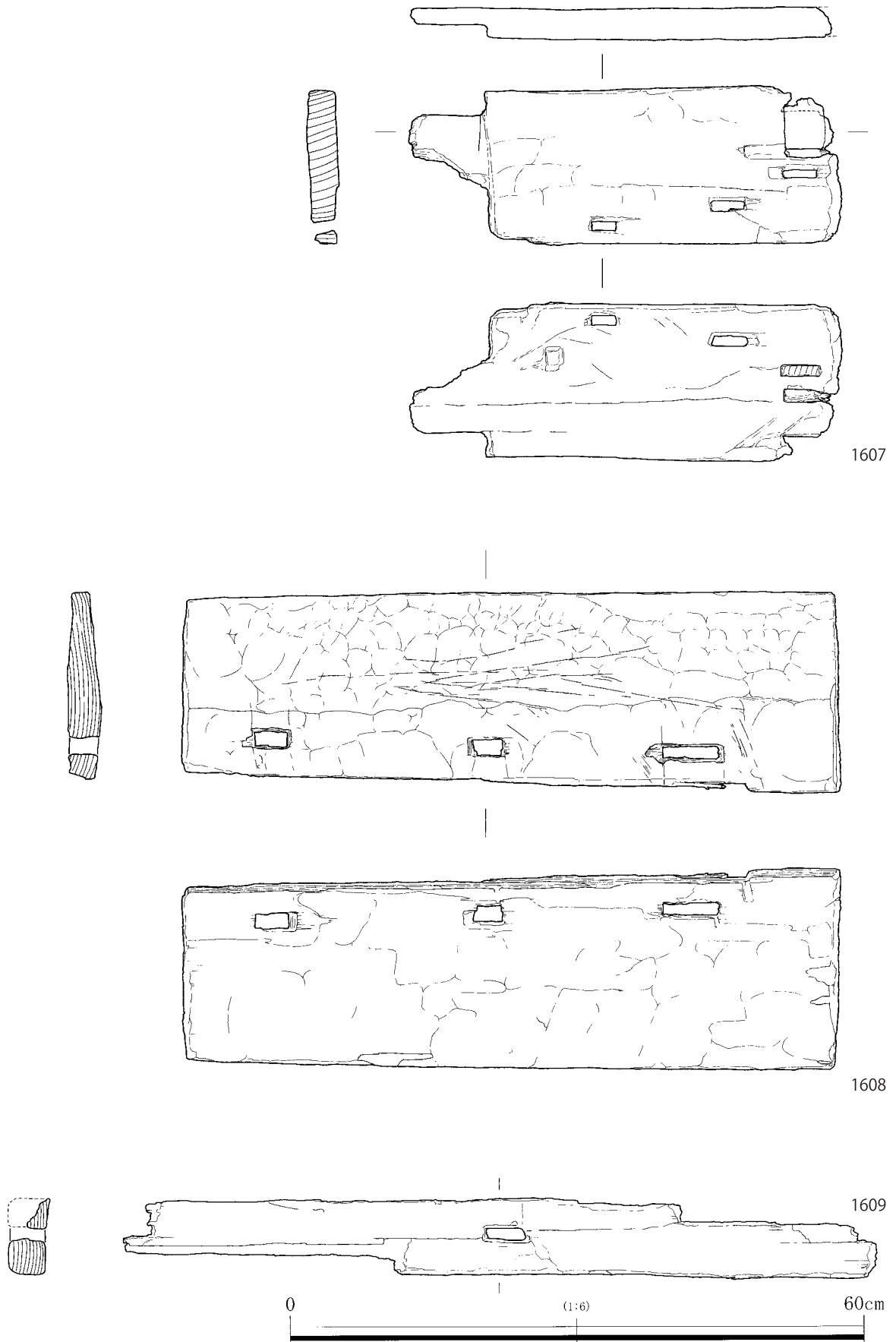


图204 流路1-4域 出土遺物58

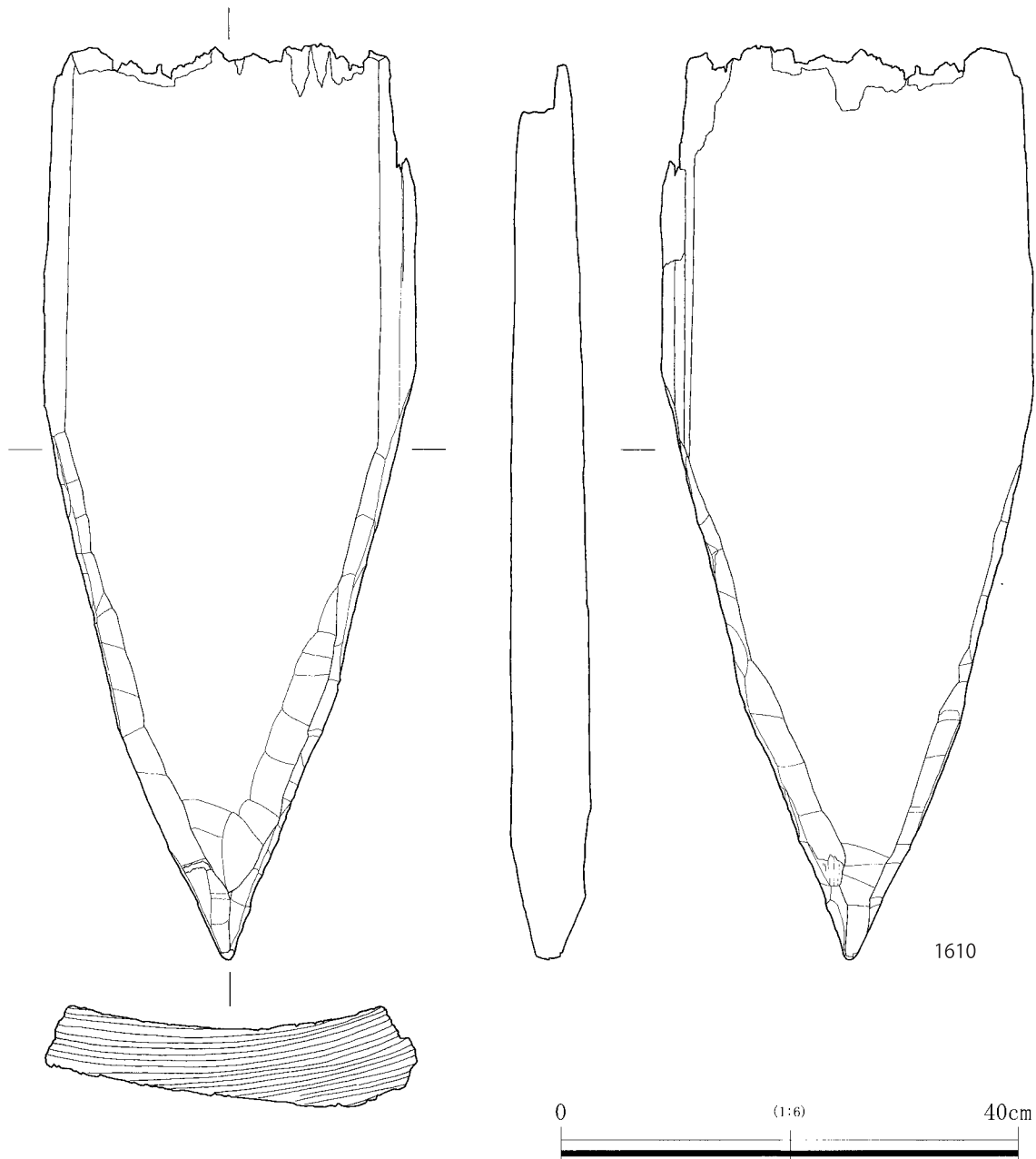


図205 流路1-4域 出土遺物59

鎌で、残存長7.1cm、幅1.0cm、厚さ0.8cmを測る。鎌身の先端部を欠損する。やや湾曲がみられるが、茎部に顕著である。稜に傷があるが、実際に使用されたものであるかどうかはわからない。樹種はモミ属である。1597は舟形木製品と称されるもので、先端の一部を欠くが、別の個体が同一個体の可能性があり、併せて図示した。面取りを施した丸太材の先端を尖らせ、繰り込みを施したもので、断面形状からは繰り込みが浅い印象がある。形代であろう。樹種はヤナギ属である。1598～1599は馬具を構成する鐙の残欠と考えられる。1598はスタジイを用い、隅丸方形の輪部をもつ鐙と考えられる。輪の内側の加工をみると、やや平坦に調整した部分があり、これが足を乗せる側とすると、残存部位は側辺と考えられる。1599・1600は同一個体の残欠と考えられ、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。極小片のみの残存であるので、復元部位の推測も難しいが、材の厚みの変化と内側部分の直線的な加工から、釣鐘形の輪部をもつものと推測しておく。図202-1601はナスビ形鋤で、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。水滴

形の平面形をもち、上端から8cm付近に突起を削りだしている。刃の部分は扁平であるが、先端に欠損があり、劣化も進行していることから、鉄製刃先の装着については良くわからない。1602は一木作りの鋤で、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。扁平な刃部に約25度の角度をもって柄が取り付く形状をもつ。全体の遺存状態は悪い。1603は農具かと考えられる薄い材である。樹種はコナラ属アカガシ亜属であるが、遺存状態が悪く細部は不明瞭である。1604も用途不明の材である。板状に加工され、表面に加工痕跡をよく残す。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。1605は断面系が長方形の棒材である。端部をやや丸く加工するが、基本的に角をよく残す形態をもつ。表面の加工痕をよく残すが、具体的な用途は不明である。樹種はツガ属である。図203-1606は縦斧の柄で、柄、斧台、両者を留める木釘からなる。樹種はいずれもアカガシ亜属である。斧台は長さ27cm、幅7cm、厚さ5.4cmのもので、先端6cmの部分に鉄斧の装着部を削りだす。柄は長さ83cm、幅5.8cm、厚さ2cmを測り、先端から30cm付近までは断面形を方形に、それより持ち手に近い側を断面形円形に作っている。現代の工具の柄と同じである。柄の先端を、斧台の方形に貫通させたほぞ穴に挿入し、木製釘で固定する。装着角度は約75度程度である。木釘孔は正方形のもので、木釘は断面形が円形のを打ち込んだようである。図204-1607・1608はともに準構造船の舷側板で、二次利用のために再加工されたものと考えられる。1607はスギ、1608はヒノキである。1607は厚さ3cm程度の板材で、貫通する長方形の穴が4ヶ所あり、縦に並ぶ穴のうちのひとつには巻かれた樹皮と、それを固定する木栓が残される。1608は最大厚3.4cm、上方へ厚さを減じる板材で、材の下より、長辺に沿って長方形の穴を3ヶ所に配している。表面には加工痕を顕著に残し、遺存状態はよい。1609は用途不明の材で、断面形が方形の棒材の中央付近に長方形の穴（ほぞ穴？）が配されるものである。樹種はスギである。図205-1610は流路1-4域に構築された、杭列5に転用された材で、残存長80cm、残存幅32.9cm、厚さ7.6cmの大型材である。出土状況から推測すると、杭として再利用する際に先端を尖らせる加工を施したと考えられ、本来は内側を削り抜いた丸太材であったと考えられる。材の規模、形状から推測して、本来は船の本体部分であったと推測する。樹種はスギである。

図206には長尺の材を示す。1611は杭列2に用いられた杭材である。最大径15cmを測る大型の材で、樹種はヒノキである。先端を加工し、尖らすが、本来は柱などの材であったと推測する。1612も大型の杭材で、長さ1.5m、径12cm程度を測る。樹種はスギで、規模の面からはやはり柱材などの再利用ではないかと推測する。流路に投棄された状態で出土した。1613は用途不明の材で、断面形状が長方形の材に、2列に方形の穴を配置するものである。残存長は145cmを測る。穴の間隔は約30cm程度であり、規則的な配置である。両端部の形状は欠失があり定かではないが、一方にはほぞ穴の残欠と考えられる痕跡を残す。樹種はスギである。1614は天秤棒かと考える、ゆるやかに湾曲する棒材である。残存長は168cmを測る。一方の端部を失うが、残存する側には面取りの加工が認められる。天秤棒かと推測する根拠はあくまでその形状から得られる印象によるものであって、弱い。樹種はスギである。

1615は流路1-1域において出土した材で、本来は当該の項目において記載すべきものではあるが、その法量から図206に図示することとした。残存長201.2cmを測る、本書において報告する最も長尺の木製品である。断面形態は方形の材で、幅広の面に5ヶ所、もう一方の面に3ヶ所の方形の穴（ほぞ穴？）を配置する。穴の配置間隔は厳密ではないようであるが、60cm程度の間隔をもつ部分と、10cm程度の間隔をもつ部分とがある。穴同士が材の中心で連結する箇所があるが、それが機能的に意味をもつものであるのかどうかは不明である。他の部材と組み合わせられることは間違いないが、本体の規模からは建築材とみることは躊躇される。2mを越える長さや穴の数や配置が適切かどうかについては不明な部分も

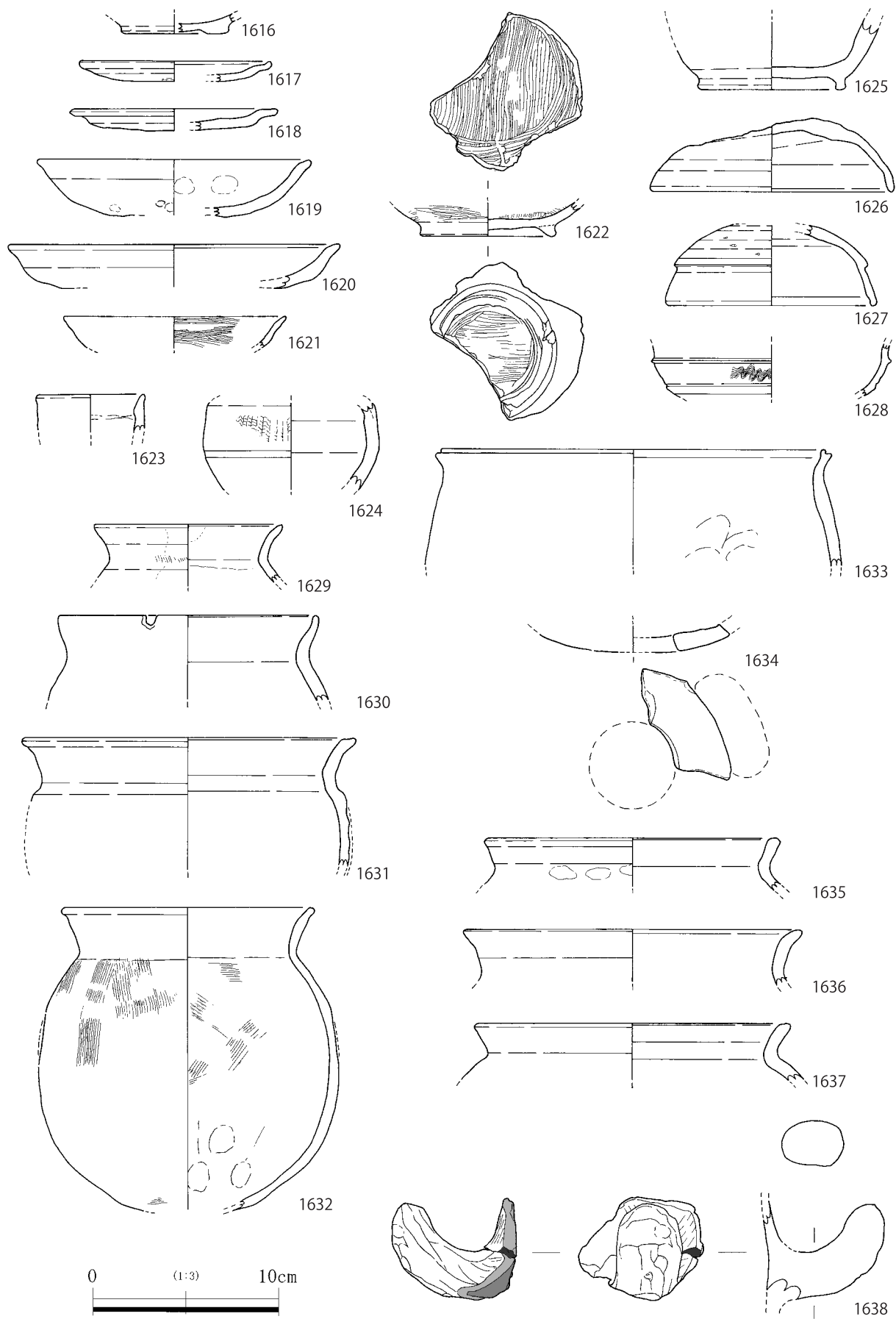


图207 流路1-4域 上層出土遺物 1



多く残るが、地機の機台である可能性を指摘しておきたい。樹種はヒノキ科である。

図207～図209は流路1～4域の範囲における、直上層出土の遺物を示す。図207には第1-5層出土の遺物を示す。1616は青磁碗で、削りだし高台をもつ底部の1/4程度の残存である。1617・1618は土師器皿で、「て」字状口縁をもつものである。1619・1620も土師器の皿で、いずれも遺存状態は悪い。1621は黒色土器A類、1622は黒色土器B類のそれぞれ碗である。1622は高台内側の底面にも密なミガキが観察される。1616～1622は流路には直接かかわらない時期のものと判断され、第1～5層の形成時期を示す遺物かと考えられる。1623は土師器の壺で、流路1～4域出土の1155などと類似する形態である。1624は土師器の壺で、体部中央位を沈線と波状紋で飾る。酸化炎焼成された須恵器か考える。1625は須恵器壺の高台部分である。これも流路の時期よりは新しい可能性が高い。1626・1627は須恵器の坏蓋で、1626は流路出土遺物の中では最も新しい時期に帰属するものである。1628は須恵器無蓋高坏である。1629～1632は土師器の甕で、1631の時期は古代に下るものと考えられる。1633・1634は土師器の甕で、1633は口縁端部に段差をもつ特異な形状である。1634は中央に正円形、四方に楕円形の蒸気孔を配するものである。1635～1637は土師器甕で、比較的短い口縁部をもつものである。1638は韓式系土器の把手で、下面に刺突痕跡を残すものである。

図208・図209は第2a層出土の須恵器である。1639・1640は坏蓋で、1639は流路出土遺物の中では最も新しい段階のものである。1641は有蓋高坏の蓋、1642は有蓋高坏である。いずれも流路1～4域出土遺物の中では、量的に最も多い時期のものである。1643～1647は坏身で、1643が時期的に新しい。1644は時期的には最も少ない段階のもので、量的な意味では注目される。1648は須恵器の無蓋高坏かと思われるもので、極微細な破片から復元して図化したものである。したがって若干の誤差はもつものかと思慮するが、須恵器に一般的な器形でないことは明らかで、焼成も独特のものである。単純に還元炎焼成された土師器とすることには躊躇する。1649・1650は須恵器壺である。図209-1651～1653は大甕で、

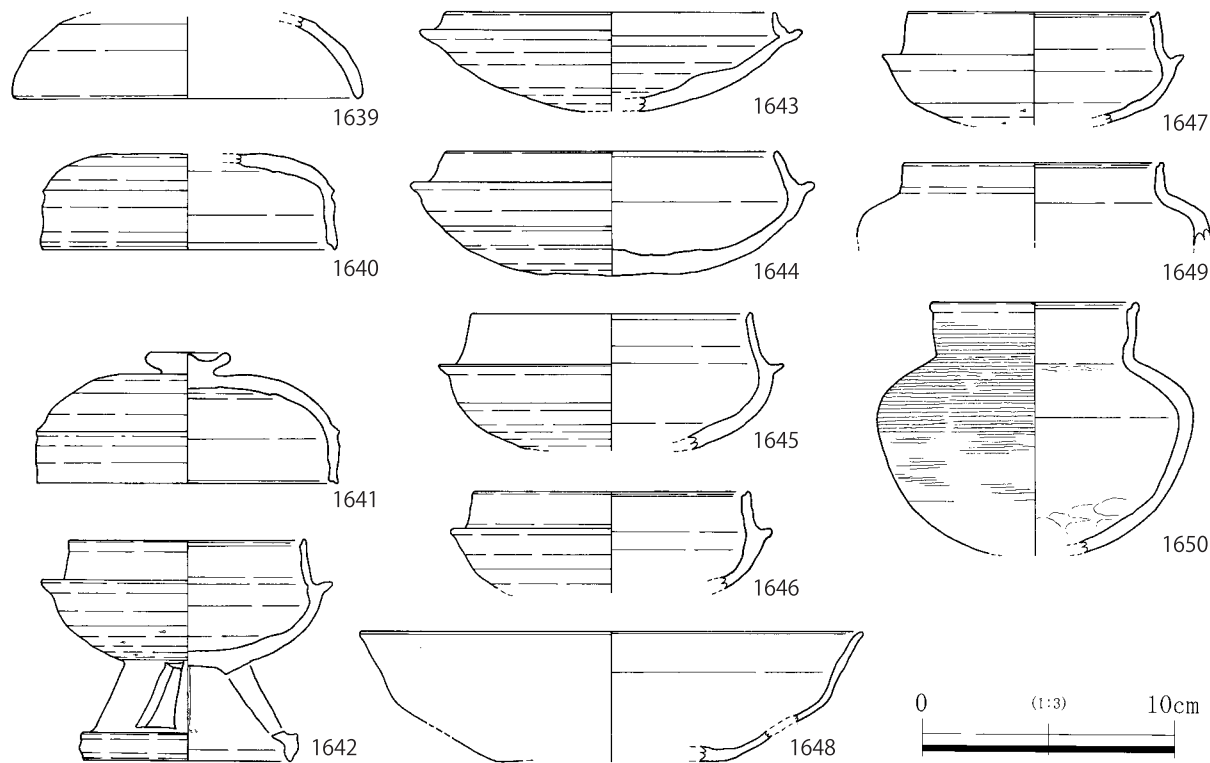


図208 流路1～4域 上層出土遺物 2

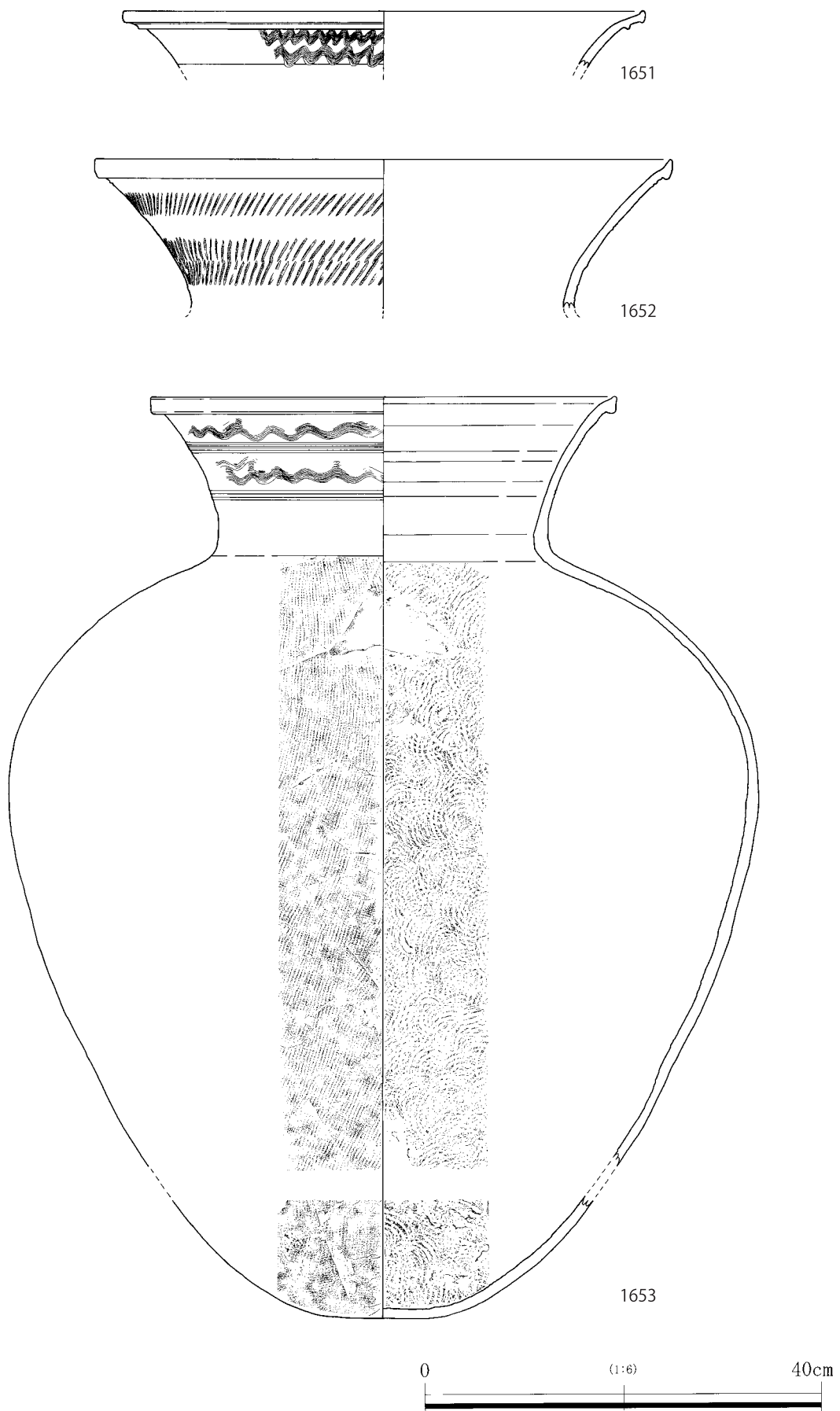


图209 流路1-4域 上層出土遺物 3

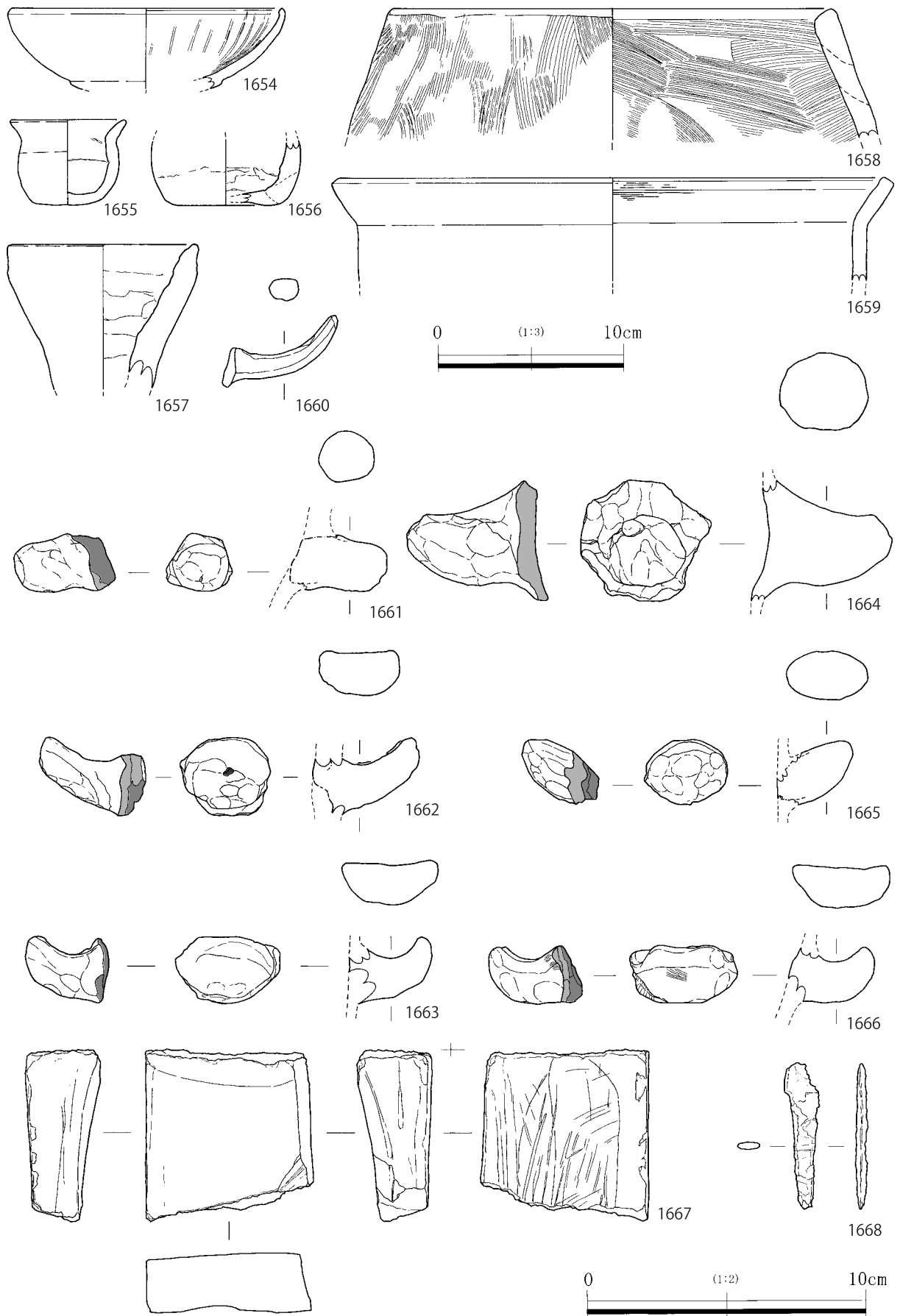


图210 流路1-4域 上層出土遺物 4

1653は器高90cmを越えるものである。

図210-1654~1666は第2a層出土の土師器である。1654は高坏で赤褐色を呈し、見込みに放射状のミガキを施す特徴的な類型に属するものである。1655は小型壺、1656は平底の壺底部かと考えられるが、造りも粗く、製塩土器の可能性がある。1657も製塩土器と考えるが、流路の時期より後出のものかと考えられる。1658は移動式竈の釜孔部、1959は鍋の口縁~頸部である。1660は把手付瓿の把手部分で、流路1においても出土数は極少数である。1661~1666は把手で、切込みや刺突という特徴をもつものは含まれないが、1661は棒状の把手で、先端を丸く収めるものであるが、水平方向に延びるようであり、軟質土器の形状に近いものである。

1667は流紋岩製の砥石で、扁平な形状をもつものである。上面には滑らかな使用面がみられるが、下面には粗い線状の痕跡が多く残される。用途により使用面を使い分けたものかと推測する。1668は鉄鏃と考える鉄製品で、遺存状態が悪く、全面に錆化が進行している。詳細については観察できない部分もあるが、扁平な茎部分と、わずかに鏃身部が残されているようである。残存長は5.3cmを測るもので、茎の幅は5~10mm程度である。

### 第7項 流路2

流路2は03-5-4トレンチ、03-5-5トレンチに位置するもので、検出長、約30mを測る。西側は流路1の屈曲部に取り付き、平面検出時の所見では最終的な流路1の充填堆積物が、流路2の堆積物を切ることを確認したが、流路1には少なくとも2段階の埋積が確認されていることから、当初は連結していた可能性が高い。検出範囲における形状は、ほぼ直線的に東西方向に流れるものであるが、東側は調査範囲外へ延びることから様相は不明であるものの、直線的にのびると微高地1に達する位置関係となる。幅は約3mで、ゆるやかな逆台形状の断面形状をみせる部分がおおい。人為的な掘削により形成されたものかどうかを判断する材料は形状以外に乏しいが、直線的にのびることからは人為的に掘削された可能性を想定しておきたい。

流路内堆積物については、図211に土層断面図を、図版46に同写真を掲出するが、下位には壁面から流出したと考えられる砂、シルトの堆積があり、それ以上はほぼ一連の作用により埋積したと考えられる極細粒砂やシルトの互層で満たされている。流路1、特に新しい堆積物と比べ泥質の堆積物が少なく、比較的流れを保ったまま埋積が進んだものと推測する。

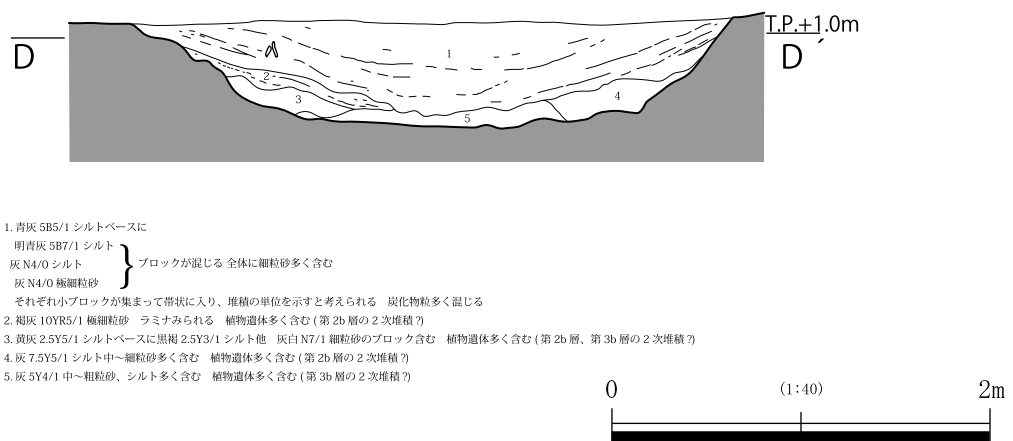


図211 流路2 土層断面図

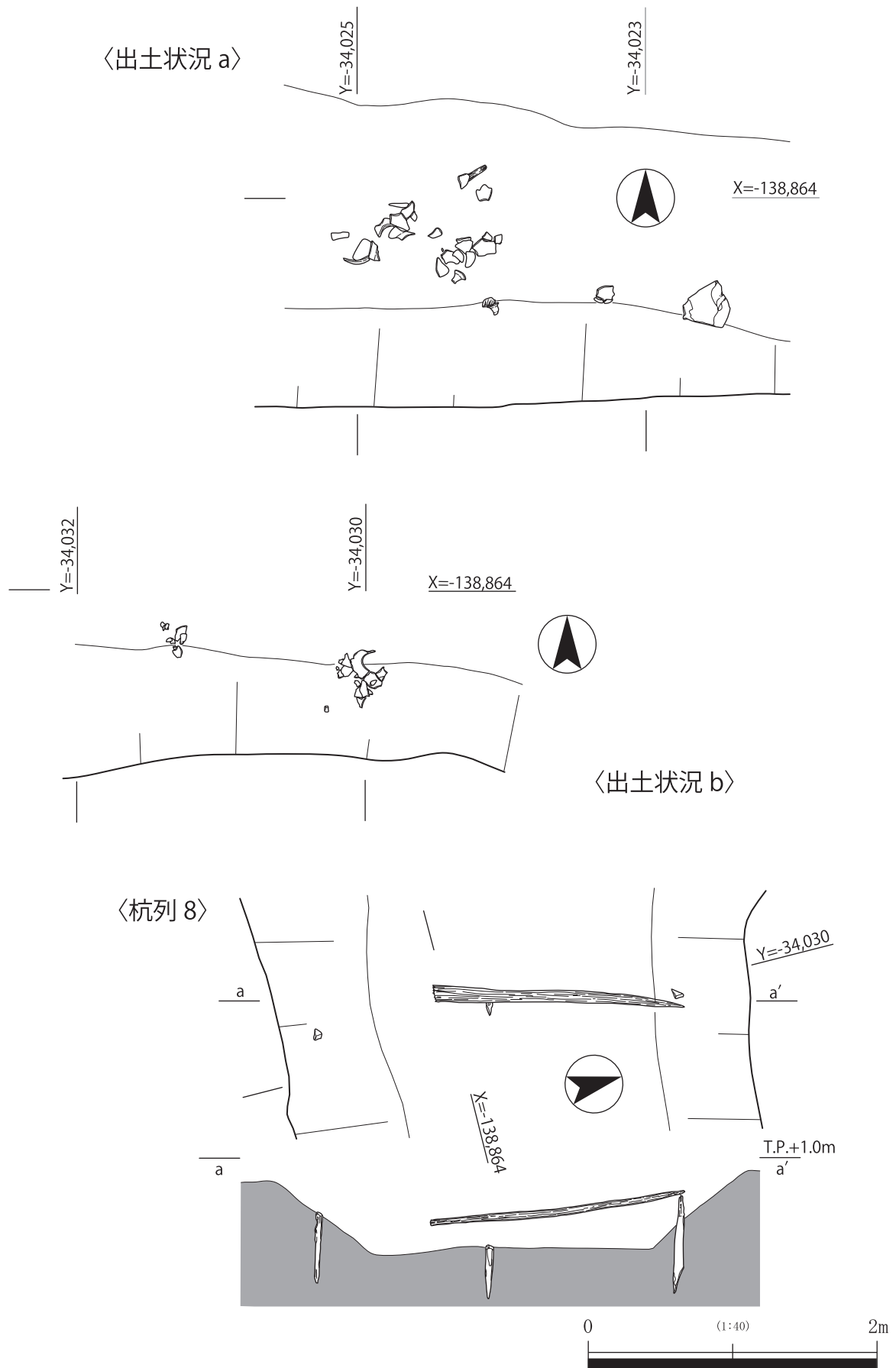


图212 流路2 遺物出土状况图 杭列8 平·断面图

流路2内の遺物の出土状況については、図面に記録したものを図212の上段に、写真を図版46に掲出した。底付近に比較的土器や木材などがまとまって分布するが、意識的な配置は見出せず、埋置行為は無かったものと推測する。流路1ほどではないが、土器細片や木材などは流路内堆積物中から散在的に出土しており、周辺からの投棄や堆積物に含まれていたものが主体であると考えられる。基本的に完形土器の出土は無く、破片と化したものや、一部を欠くものに限られる。なお流路1同様、流路の掘削により下層の堆積層を掘り込んでいることから、弥生土器時代の遺物が混入する可能性がある点には留意しておきたい。

流路内に設置された遺構としては杭列8をあげることができる(図212下段)。検出範囲の西寄り、流路1との合流地点に近い位置に設置されたもので、流路2の南北斜面と中央底に計3本の縦杭を打設し、その上に横木を渡した構造が遺存する。堰とするには縦杭の間隔がまばらであり、堰きとめて上昇させた水位をどのように利用するのかについても不明瞭である。実態として使用が可能かどうかは不明であるが、流路をわたる簡便な橋のような施設を候補としておきたい。

#### 流路2出土遺物(図213～図216)

流路2出土遺物の中で図示し得たものは土器、石器類併せて46点である。鉄器については出土せず、堆積物の洗浄も行っていないが、玉類など微細遺物の出土も確認していない。

図213-1669は須恵器で、頸部以上を欠く。体部には紋様を施さないものである。流路2からの須恵器の出土点数は限られており、1669以外には大甕の破片が数点出土するにとどまる。1670-1685は土師器の高坏で、図示し得た土器の中では最も点数が多い。坏部の形態では体部と底部の境界が明瞭で稜をもつもの(1670-1673・1675)、境界ははっきりしないが稜をもつもの(1677)、体部と底部がなだらかにつながるもの(1676・1678-1680)、塊形のもの(1674)に類別できる。内外面の調整にはハケメを施すものが多いが、1674などは比較的密度の高いヘラミガキが残される。脚部については内面に強い稜を形成し開くもの(1681-1684)、ゆるやかに開くもの(1685)に類別できるが、1681は坏部との接合部分から釣鐘状の脚柱部をもつもので、特徴的である。透かしをもつものが少ない中で、1674には円形の透かしが4方向に配される。

図214-1686-1965は土師器の甕である。1695を除くと、いずれも極部分的な残存状態を示すものから復元的に図化したものである。1688・1690は頸部の接合時に内面の接合痕を消しきれていないものである。器壁も厚い。1691-1695は頸部から口縁部にかけて古式土師器の特徴を残すものである。細かい形態はさらに分類も可能であるが、いずれも口縁端部内面を肥厚させる点を同じくする。体部の調整は内面にヘラケズリを施すものがある一方、1695の球形の体部については内面に指頭圧痕がよく残されており、ヘラケズリの省略がなされたことも考慮されるが、それでも器壁を比較的薄く作り上げている点には注意される。1696は土師器の鉢で、口縁部を欠くが体部の残存率は比較的高い。1697は厚い底をもつ土師器で上半部を欠くが、甕形の製塩土器ではないかと推測する。1698は土師器器台で、接合面に棒状の道具による凹圧が施された痕跡をみることができる。1699は製塩土器の小型の脚台部分である。1700は土師器の把手で、断面形状は卵形である。

図215-1701-1704は土師器の小型壺であるが、それぞれに特徴的な形態を示す。1701は手握ねに近い形状、調整をみせるが、1704は器壁も薄く、調整も丁寧である。1705-1707は中型の壺であるが、いずれも体部内面にヘラケズリを施している点が注意される。1708は大型の壺で、頸部からゆるやかに外反



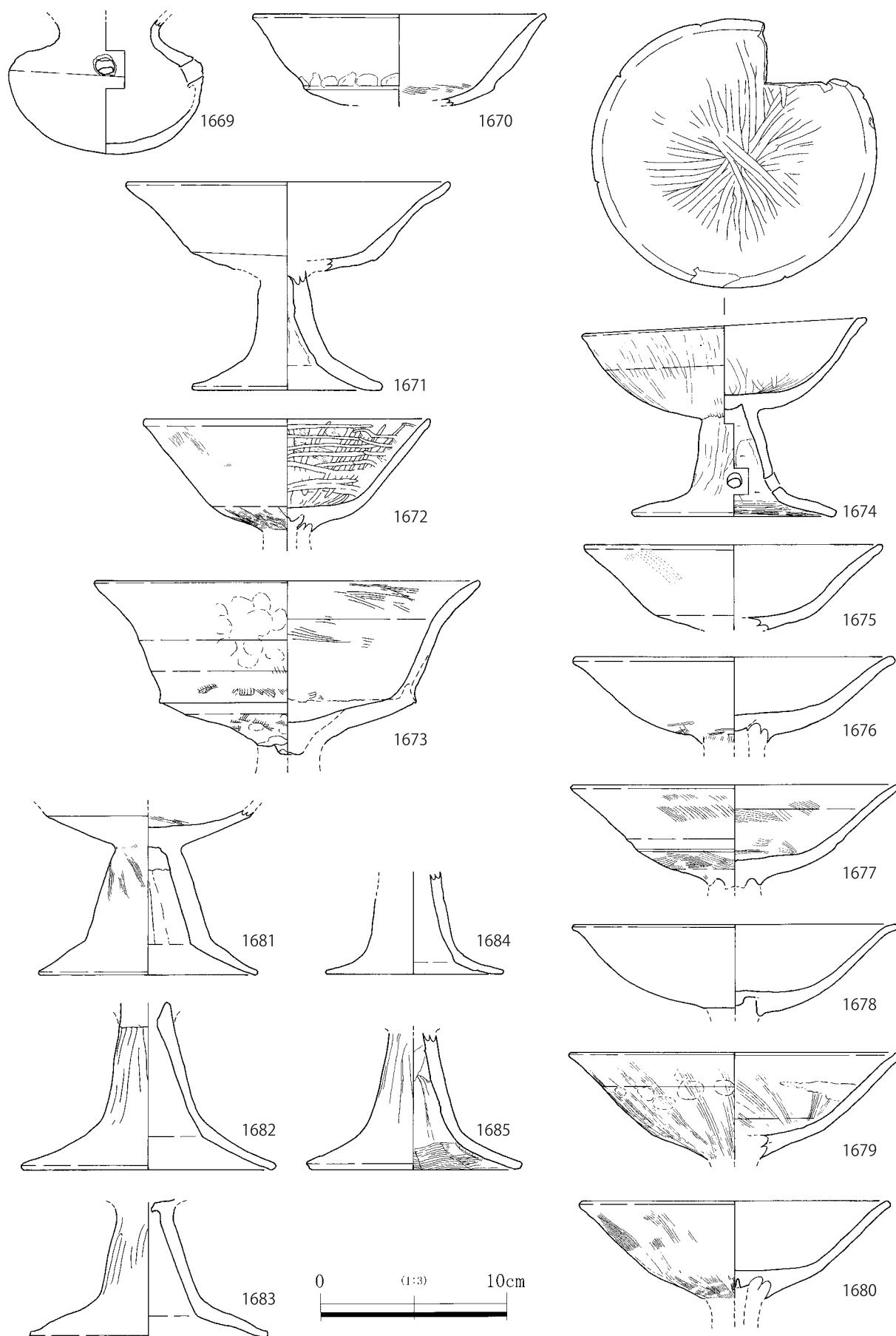


图213 流路2 出土遺物1

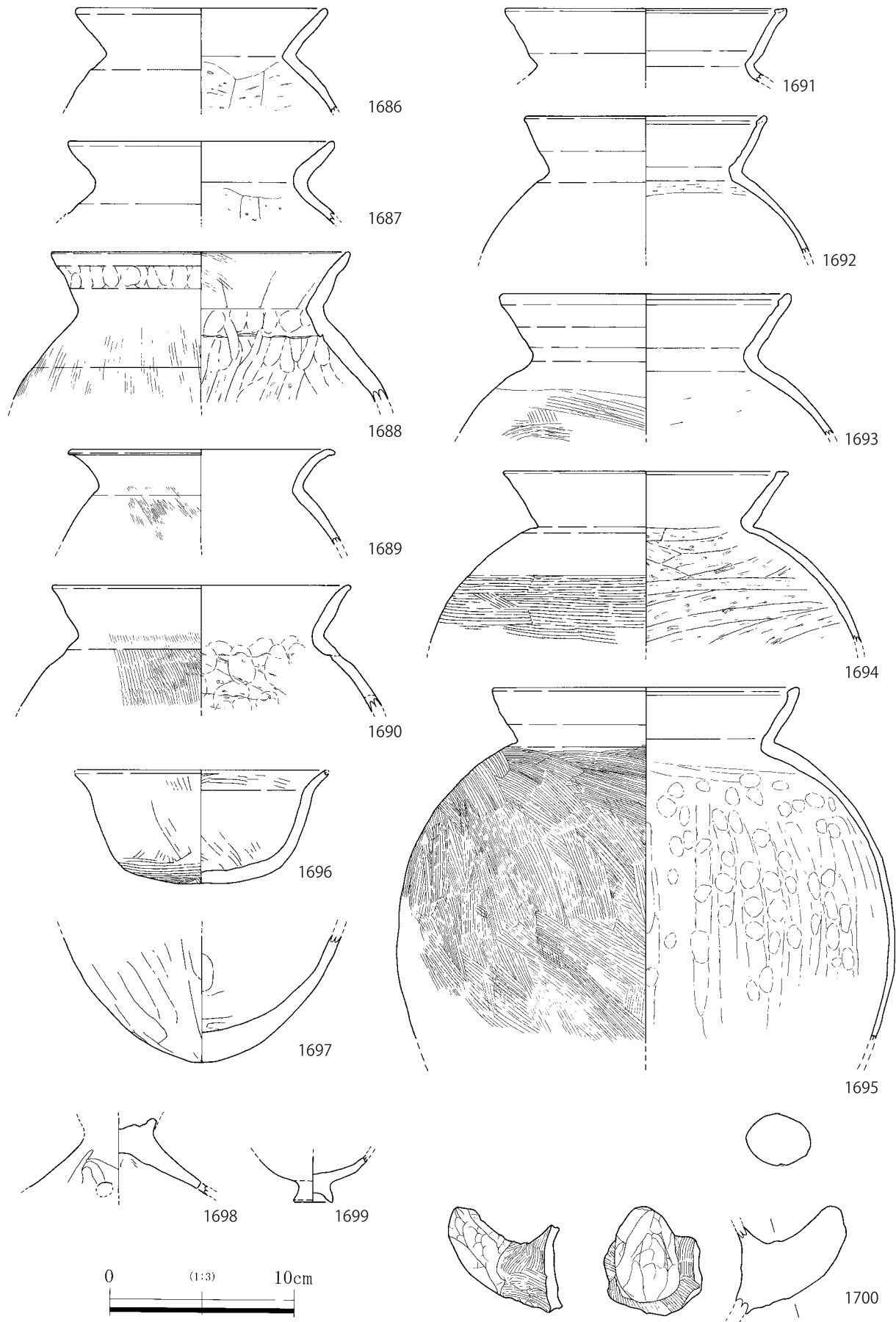


图214 流路2 出土遺物2

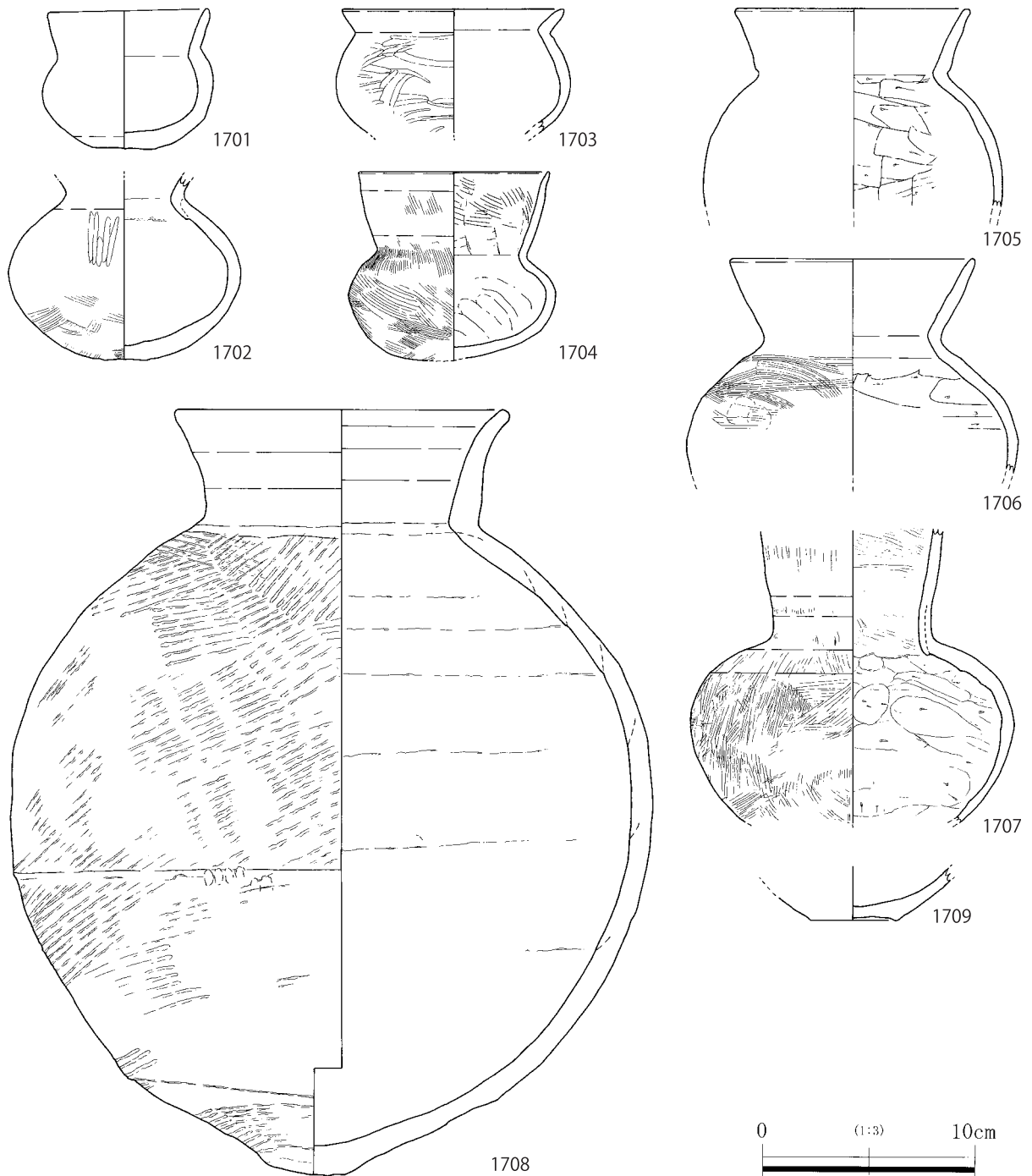


図215 流路2 出土遺物3

する口縁部をもち、端部は丸く収めている。底部は高さの低い平底をもち、分割成形とみることのできる痕跡をもつ。体部の内面には粘土紐の接合痕跡をよく残し、調整はゆき届いていないが、外面調整は右肩上がりのタタキを施している。土器の諸特徴は弥生時代後期後半に特徴的なものであって、流路2出土の他の土器とは様相を異にする。1709も小さな平底をもつもので、中央部は上げ底風に成形される。

図216-1710~1714は石器類である。いずれも円礫に近い形状を残すものであるが、1710以外は石器であると考えられる。1710は珪石製の礫で、顕著な使用痕はみられない。1711~1714はいずれも砂岩製で、敲打痕、擦痕などから用途を推定した。1714は長さ20.7cm、重さ1.1kgを測る大型のもので、整った形状を示す。

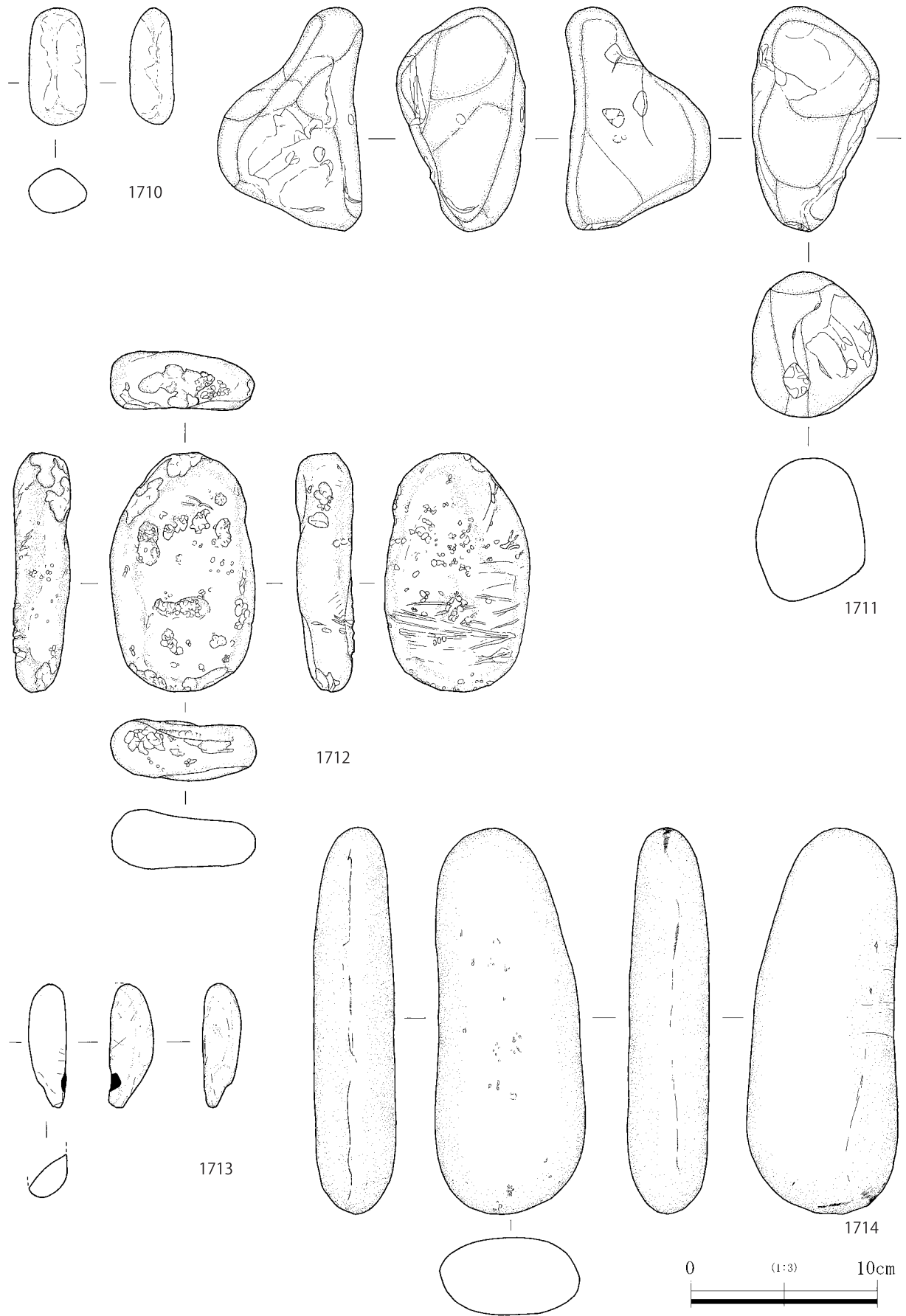


图216 流路2 出土遺物4

## 第3節 第2面の調査成果

### 第1項 第2面の概要

第1面以下、調査深度最下部に広がる第3面までの間に存在する、複数の遺構面を総称して第2面とする。調査範囲全体に広がる第3面上面は数度の洪水堆積層に覆われるが、それら堆積物の残存範囲は調査範囲全体に及ぶものではなく、本来的に部分的な土地利用が行われたと推測されるものを含めて、それぞれを独立した遺構面と呼称することに躊躇するものであった。このため、大きくは第2面とした上で、細分される遺構面については第2-1面から第2-4面の呼称を上から付すこととした。本項では個別の報告に先立ち、層位的な認識の整理と各遺構面の概要を記載する。

調査範囲全域で確認できる第4層は、黒色の粘土と緑灰色の粘土が互層を形成する特徴的な層準であるが、この層の上面を削りながら、黒色シルトを主体とする第3-4層が形成される。第4層との間に明瞭な堆積層を残さず、第3-4層はほぼ、攪拌を伴う土壌と考えられ、03-5-1トレンチ、03-5-2トレンチ、03-5-5トレンチ、03-5-10トレンチでは畦畔を伴う溝、畦畔などが確認され、一部ではピットや土坑が確認された（第2-4面）。調査範囲西寄りの部分では、大阪府教育委員会の指示により、この面の調査を行っていない部分があり、様相が不明である。また調査範囲中央部分では上層の侵食、あるいは地震による変形などにより、面として把握できない範囲がみられた。

第2-4面は遺存状態のよいところでは上面が灰白色のシルトに覆われ、さらにその上位は砂へと変化していくようである（第3-3b層）。それらを母材として、一部に攪拌を伴い土壌化した層が第3-3層であり、03-5-4トレンチの範囲ではその上面に水田畦畔、溝が良好に遺存していた（第2-3面）。第2-4面同様、調査範囲西寄りでは調査を実施していない部分もあるが、03-5-8トレンチにおいては第3-3層が第3-2層による侵食を受け遺存せず、第3-3層・第2-3面は調査範囲東寄りに遺存する層・面であるといえる。

第2-3面は大規模な洪水に襲われ、厚いところでは厚さ1mを超える堆積層に覆われる。この堆積層は下位を中心にシルトや植物遺体の堆積がみられるが、上位は粗い砂を主体とし、調査範囲内の各所に微高地を形成する（第3-2b層）。このうち、調査範囲西側のものは微高地1として第1面にまで残存する。また03-5-1トレンチ、03-5-2トレンチ、03-5-4トレンチ、03-5-10トレンチの範囲に分布する、南から北へ張出す微高地上では、堆積層上面でピット、土坑、溝などが集中する範囲を検出し、土壌層（第3-2a層）上面では、水田畦畔を検出した。土壌層上面を第2-2面、堆積層上面を第2-2b面と呼称する。これらの面は微高地1となる部分を除き、その後の堆積層による侵食を受け、さらに第1面の流路1により削られている範囲もある。したがって全体的な広がりについては連続して層を追うことはできなかったが、03-5-8トレンチ付近まで第3-2a層の広がりが認められ、それ以外の範囲では遺存していないものと考えられる。

第2-2面も洪水に襲われたと考えられるが、その痕跡は03-5-2トレンチ南寄りにおいてのみ認められ、極部分的にしか遺存していない。逆に調査範囲北寄りの部分では微高地2を形成する堆積活動があったことが明らかであるが、それが南寄りの範囲でのどの層準に対応するのかについては不明瞭である。しかし第2-2面以降の堆積により第1面が形成されるまでの間に遺構の切込み面が存在し、03-5-1トレンチ、03-5-2トレンチ、06-2-1トレンチ、06-2-2トレンチにおいて流路状の遺構と、その内部に構築された杭列を検出した。これらも明確な土壌が遺存するものではなく、遺構面としての対応も連続して確認することはできなかったが、段階的に把握すると第2-1面に置くことが適当と考えられる。

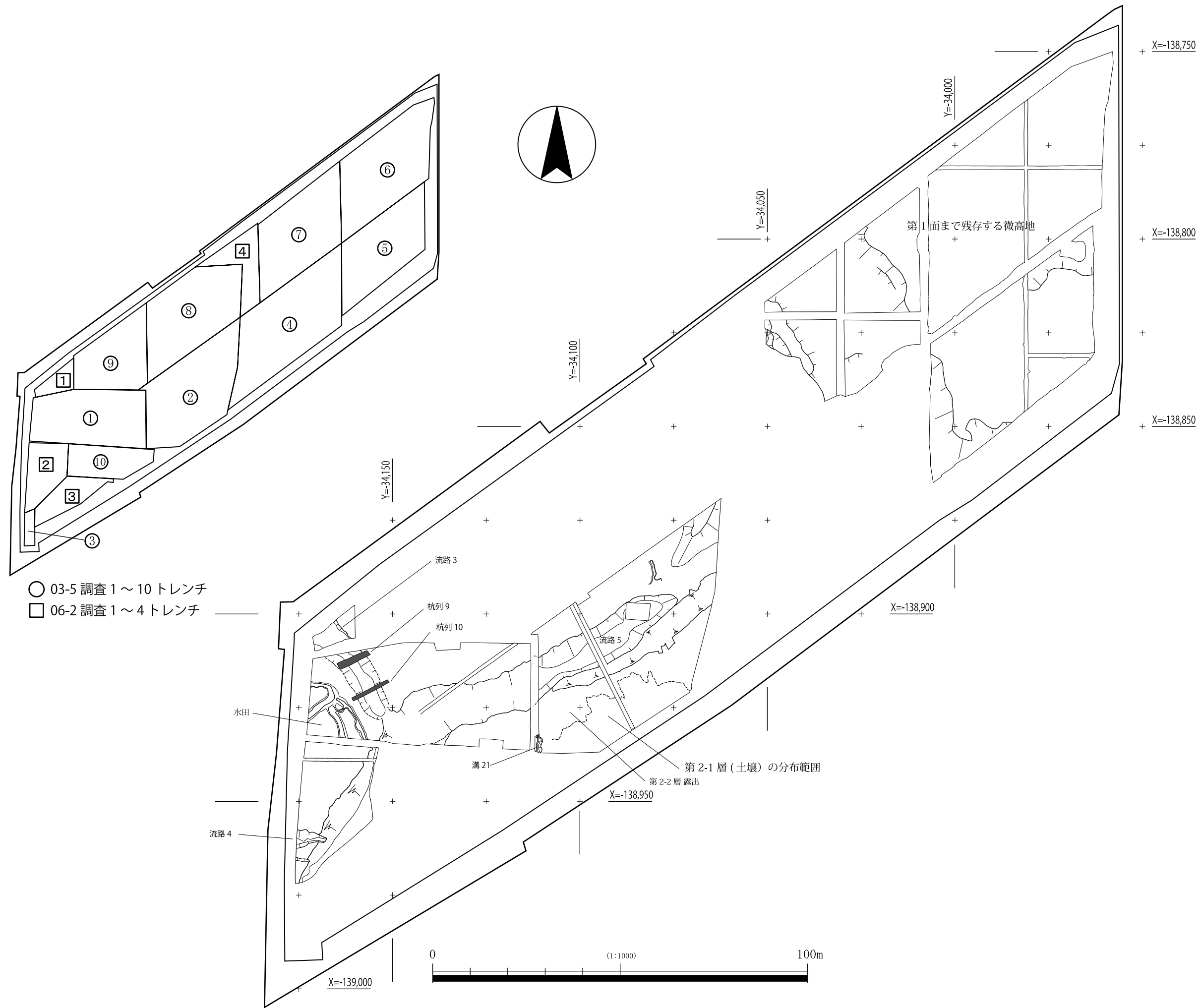


図217 第2面(第2-1面) 遺構分布図 (s=1/1000)



第2項 第2-1面 (図217)

第2-1面では調査範囲南側の微高地に残存する土壌と溝、北西角部分で検出した流路、杭列が確認された。また西側の微高地上では水田畦畔と、流路と呼ぶが流水による侵食痕跡が認められた。南側の土壌

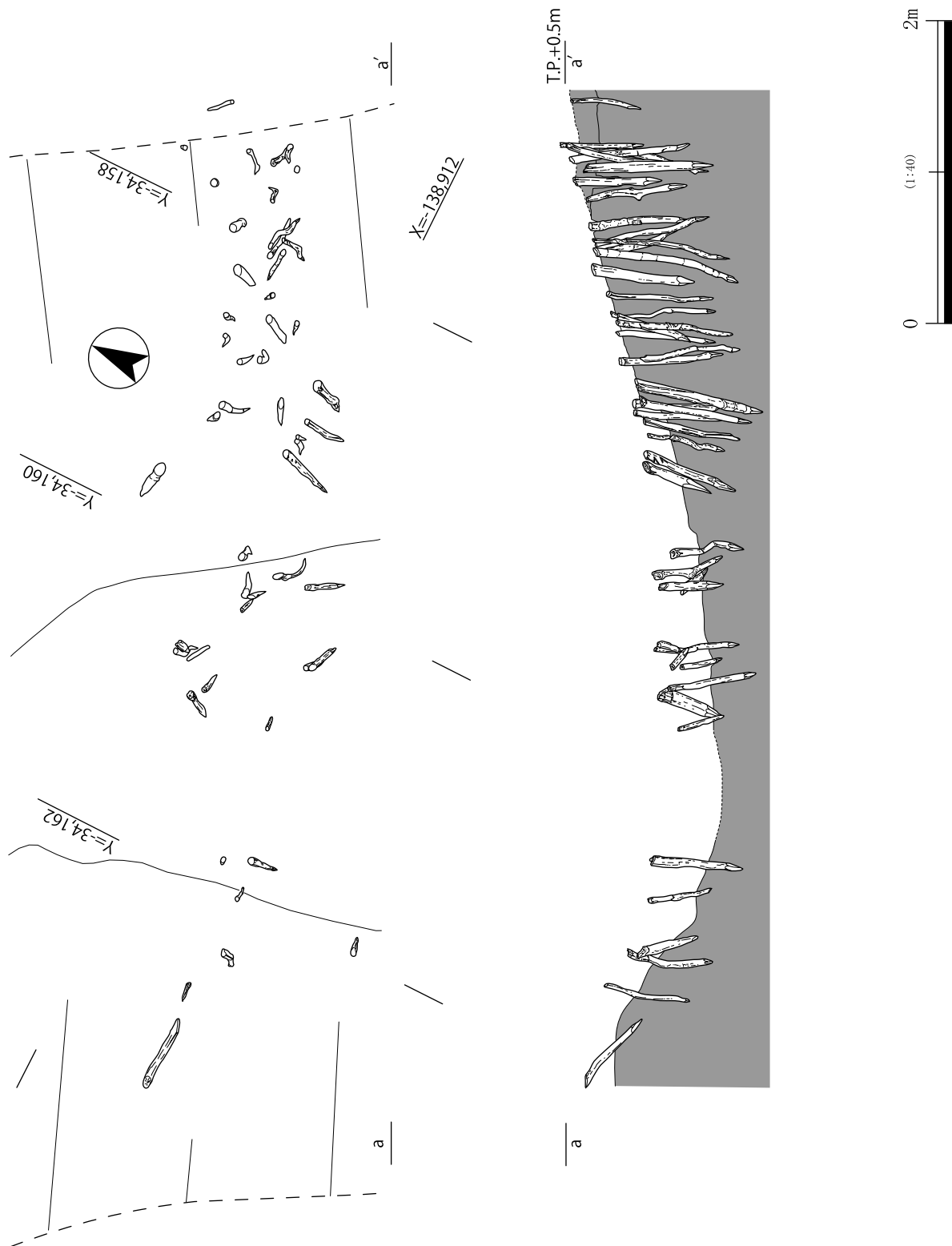


図218 杭列9 平・立面図

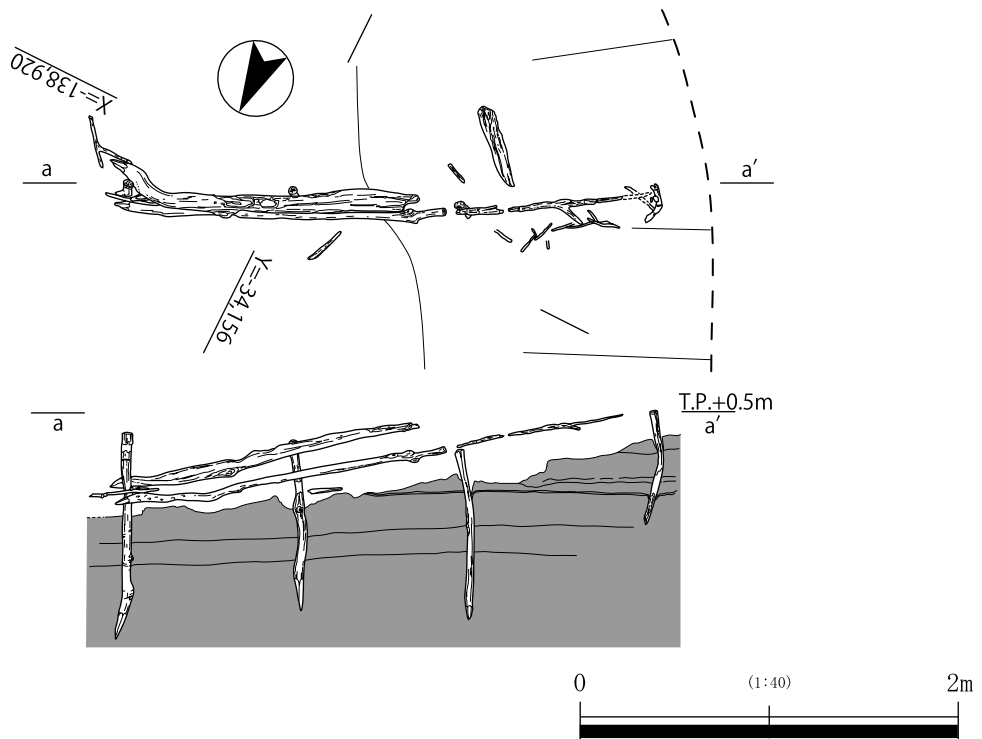


図219 杭列10 平・立面図

部分は、層相からは水田作土層かと考えられるが、上面が遺存しておらず、畦畔の存在は不明である。水田であったとしても地形的に広範囲に広がっていたものではなく、部分的な土地利用であったと推測する。溝21はトレンチの境界付近にあり、両端を確認できなかった。規模などについても不明瞭であるが、地形の高いほうから低いほうへのびる点のみ指摘しておきたい。遺物は弥生土器片が数点出土しており、図225-1755・1756に掲出した。南側微高地部分における第2-1面残存範囲の標高は、最も高いところでT.P.+0.9m、そこから12mほど離れた最も低いところでT.P.+0.5m、を測り、南から北へゆるやかな傾斜を示す。

西側微高地部分において検出した水田域は検出範囲が狭く、全体的な畦畔の配置については不明な部分があるが、微高地の尾根部分に大型の畦畔が走り、それに取り付く形で微高地の縁辺を巡る畦畔や、それに平行し、斜面地形を区切る畦畔が認められる。基本的に第2-2面において検出した畦畔を踏襲するが、畦畔の数は第2-2面より増加しており、一見、滞水域の拡大を志向したものとみえるが、大畦畔以外の部分は第2-1面段階の攪拌により、古い畦畔が失われた可能性も高く、積極的な評価は難しい。

流路については流路3～5の遺構番号を付した。流路5は第1面流路1の下層に位置し、流路1の形成要因ともなる地形の鞍部を形成していたものと考えられる。流路3は流路2に流れ込むもので、肩を良好に検出できなかったが、おおむね8～10mの幅をもつものと考えられる。流路内は細粒砂～シルトを主体とする堆積物で充填されている。流路内には2基の杭列が設置され、北のものを杭列9、南のものを杭列10とする。杭列9は流路の横断方向に小規模な杭材を比較的密接して打ち込むもので、流芯部分はややまばらで、東斜面に密である。堰と同じ構造とみることができ、分水路などは検出していない。杭列10は杭列9の約10m下流側に打設されたもので、流路の西側斜面に約1mの間隔をあけて4本の縦杭を打ち込み、その上部に横木を渡すものである。間隔がまばらな点で堰とはいいがたい側面が

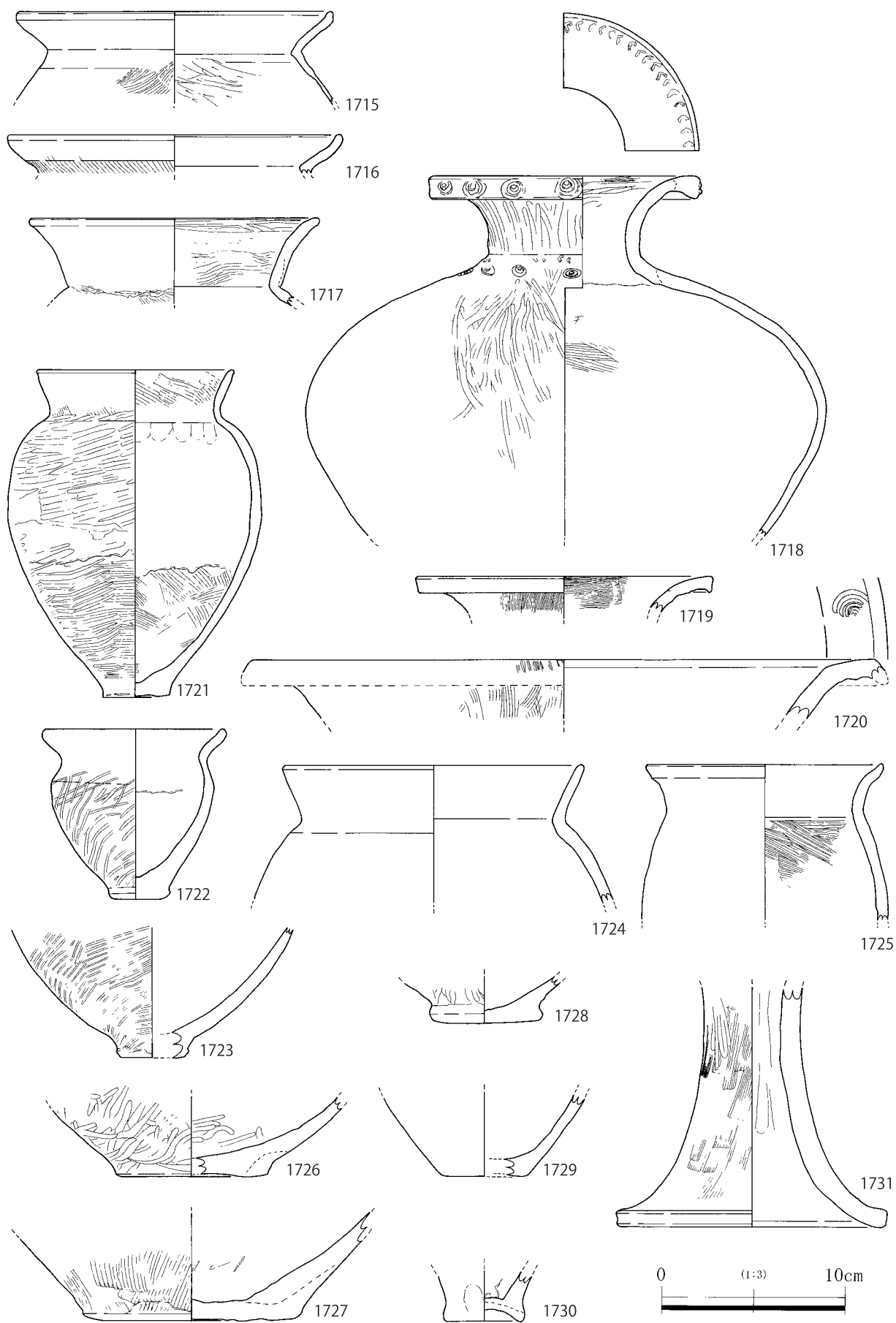


图220 第2b层 出土遗物 1

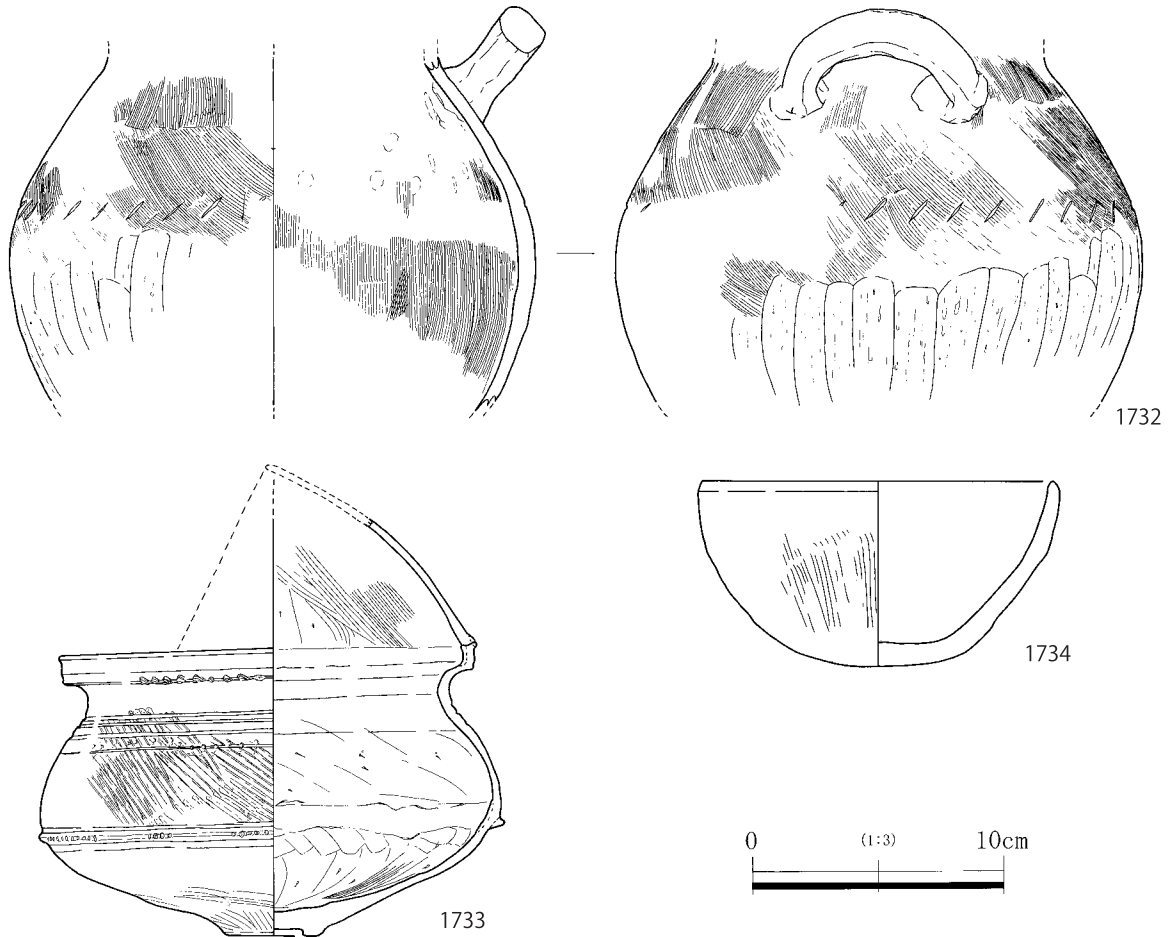


図221 第2b層 出土遺物 2

あり、性格は不明である。流路4は調査範囲の西端部で確認したもので、第1面において微高地4とした高まり上に痕跡を残す、流水による侵食痕かと考えられる。幅5mから東寄りに規模を減じ、流路5に相当する地形鞍部へ抜けたものと想定する。流路内は比較的粗い砂を中心とした流水堆積物で満たされており、侵食後に埋没したものと考えられる。流路4の充填堆積物からは図222-1735に示した弥生土器無頸壺が出土している。口縁端部をわずかに残す体部上半の破片であり、体部外面にはハケ調整を施すものである。体部下半の形状について不明ではあるが、ややゆるやかに屈曲するものと考えられることから、第IV様式に帰属するものと考えられる。

第2-1面に直接かかわる遺物は少なく、図220-1715~図221-1734には第2-1面を覆う、第2b層出土土器を示す。弥生土器から古式土師器までが含まれる。1715は口縁端部の造形がやや甘い、庄内型甕の口縁部と考えられ、1718の口縁端部や頸部を竹管紋で飾る壺や、1733に示す手焙形土器も含め、弥生時代後期から庄内期にかけての遺物が含まれる。1721~1723に示すタタキ甕も同時期のものであろう。また、1720に示す広口壺は、極わずかの部分の遺存ではあるが、大きく開いた口縁部上面に扇形紋を配するもので、IV様式に帰属する弥生土器かとする。1732に示す水差し形土器も、肩部にヘラによる刺突紋がみられるものの無紋化が進んでいるものであり、体部が球形化していることから、ほぼ同じ時期のものかとする。1726・1727の弥生土器底部は外面の調整はヘラミガキ、ハケと異なるが、いずれも比較的薄い底部を示している。1730は小型の弥生土器底部であるが、上げ底に成形している。なお1734は第2b層出土の遺物であるためここに配したが、流路1の肩付近での出土であり、混入の可能性はある。

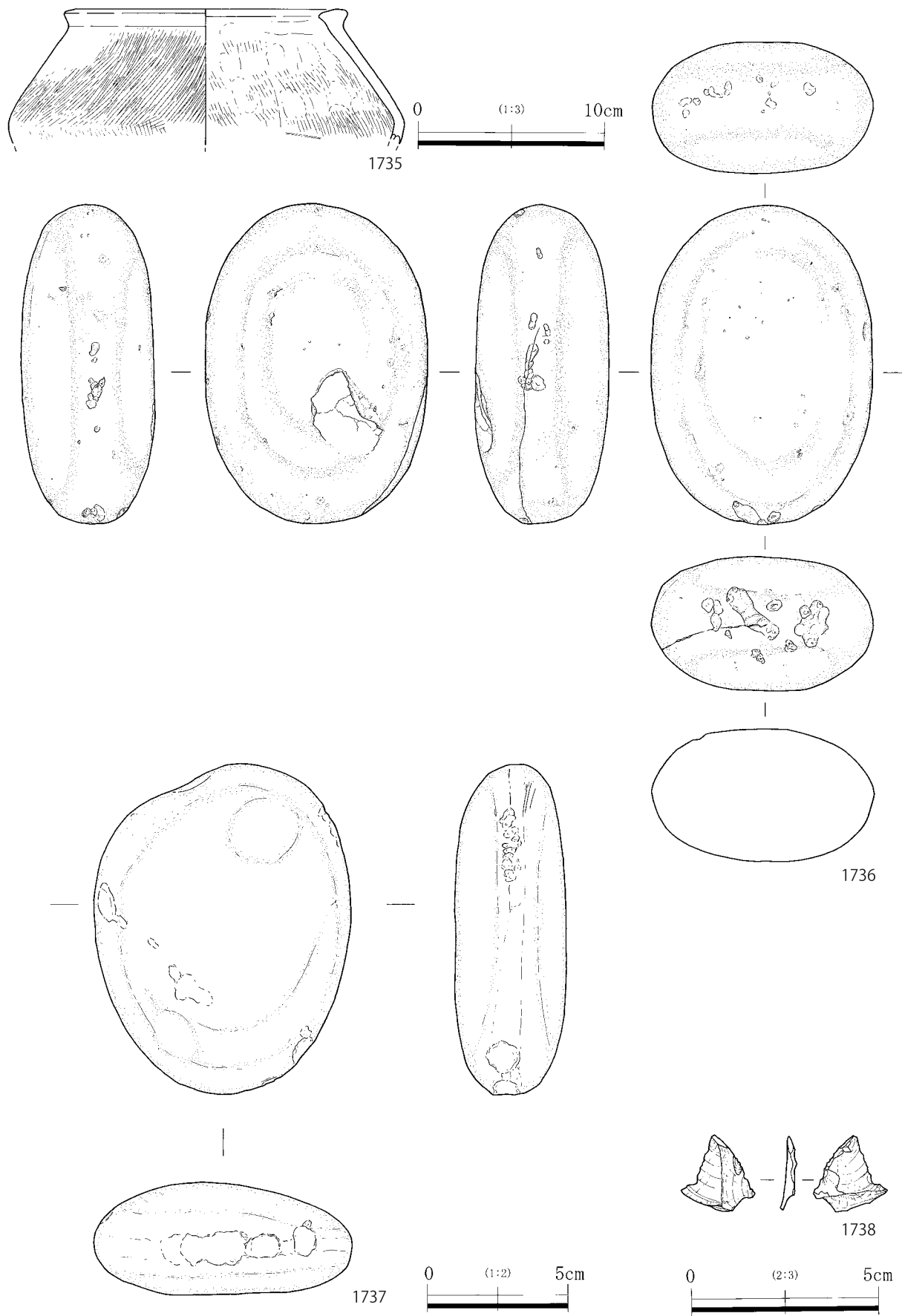


图222 第2b層 出土遺物 3 · 第2-1面出土遺物

図222-1736は細粒黒雲母トータル岩製の敲石で周囲の4方向に敲打痕を残す。また1737は砂岩製の敲石で、下端と側面に敲打痕を残す。1738はサヌカイト剥片である。

第2-1面の帰属時期は、遺構に直接かかわる遺物が乏しい中で、上層出土遺物なども勘案する必要があるが、流路4出土の1735、第2b層出土の1720・1732などが第Ⅳ様式に属すると考えられることから廃絶に近い時期を該期に置くものとしておきたい。第2b層自体は、最末期の弥生土器や庄内期の土師器がみられることから、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて埋積が進行したものと考えられる。同じ時期には既に微高地と化している微高地1上では土地利用が開始されているものと考えられ、いくつかの遺構から弥生時代末の弥生土器が出土している。

### 第3項 第2-2面 (図223)

第2-2面の調査は、調査範囲東側の微高地1、第1面・第2-1面において検出した流路により侵食を受けた部分、当初より調査を実施しなかった部分においては遺構面を確認できていないが、調査範囲南側と西側の微高地上では水田域を、北側の低地部分では土壌の分布を確認した。また03-5-10トレンチの範囲では、水田土壌を除去した面(第2-2b面)において、ピット、土坑、溝など、集落にかかわる可能性の高い遺構群を検出した。地形的には南側の微高地は、削平を受けているものの06-2-3トレンチ部分が最も高く、T.P.+1.0mを測る。ここから北側へ高さを減じ、約30m離れた付近でT.P.+0.5m程度となり、水田畦畔の分布もこのあたりまでとなる。一方、西側微高地では検出範囲も狭いが、最も高いところでT.P.+0.5m程度、低いところでT.P.+0.2m程度を測る。

西側微高地部分で検出した水田域は、第2-1面の水田との間に堆積層を介していないため、直接的には新しい作土層を除去することで、古い作土層の上面を検出したことになる。したがって、第2-2面の水田面として検出した範囲も、厳密にはその上面は遺存していないと考えられ、大畦畔以外に畦畔がみられない点も、かかる要因で説明できることと考える。もとより検出範囲が狭く、畦畔の設置にかかわる具体的様相も示すことはできないが、このような理解のうえでは大畦畔を基軸に、小畦畔を巡らすことで滞水面を確保するという、第2-1面においてみられた様相と基本的には変わらない水田域の形態であったものと考えられる。

南側微高地上の水田域については、検出範囲が幅は20m程度と狭いが、畦畔の確認できなかった部分を挟むものの、長さは150mに及ぶもので、比較的広い水田域であると評価することができる。調査範囲南側への展開については想像の域を出ないが、今回検出した部分が微高地の縁辺であると考えられることから、微高地上を覆う水田の広がりを見定めることも可能であろう。検出した水田域ではそれぞれの畦畔も大型のものが多く、基本的には等高線に直交する方向のものがより大型であり、それにより画された大型の区画を高低差にあわせてやや小ぶりの畦畔で区画したものと考えられる。具体的な給・排水にかかわる水路などは検出されなかったが、03-5-10トレンチ部分で検出した東西方向の畦畔は、途中でとぎれる箇所があり、この面の埋没時期(季節)にもよるが、検出範囲に限れば畦畔を超えての給水がなされていたものと考えられる。また03-5-2トレンチにおいて検出した畦畔は、母材となる第3-2b層が粗い砂主体のものであることから、いずれも砂質の強い土壌で構築されているが、中には芯にあまり攪拌を受けていない砂の残るものも認められた。それらを大畦畔として毎年の攪拌を受けないものとして理解することもできるが、そうみると毎年の耕起に際して作り変えられる畦が少なくないことにもなる。いずれにしても個々の畦畔の意味については十分に検討できなかった部分が残された。



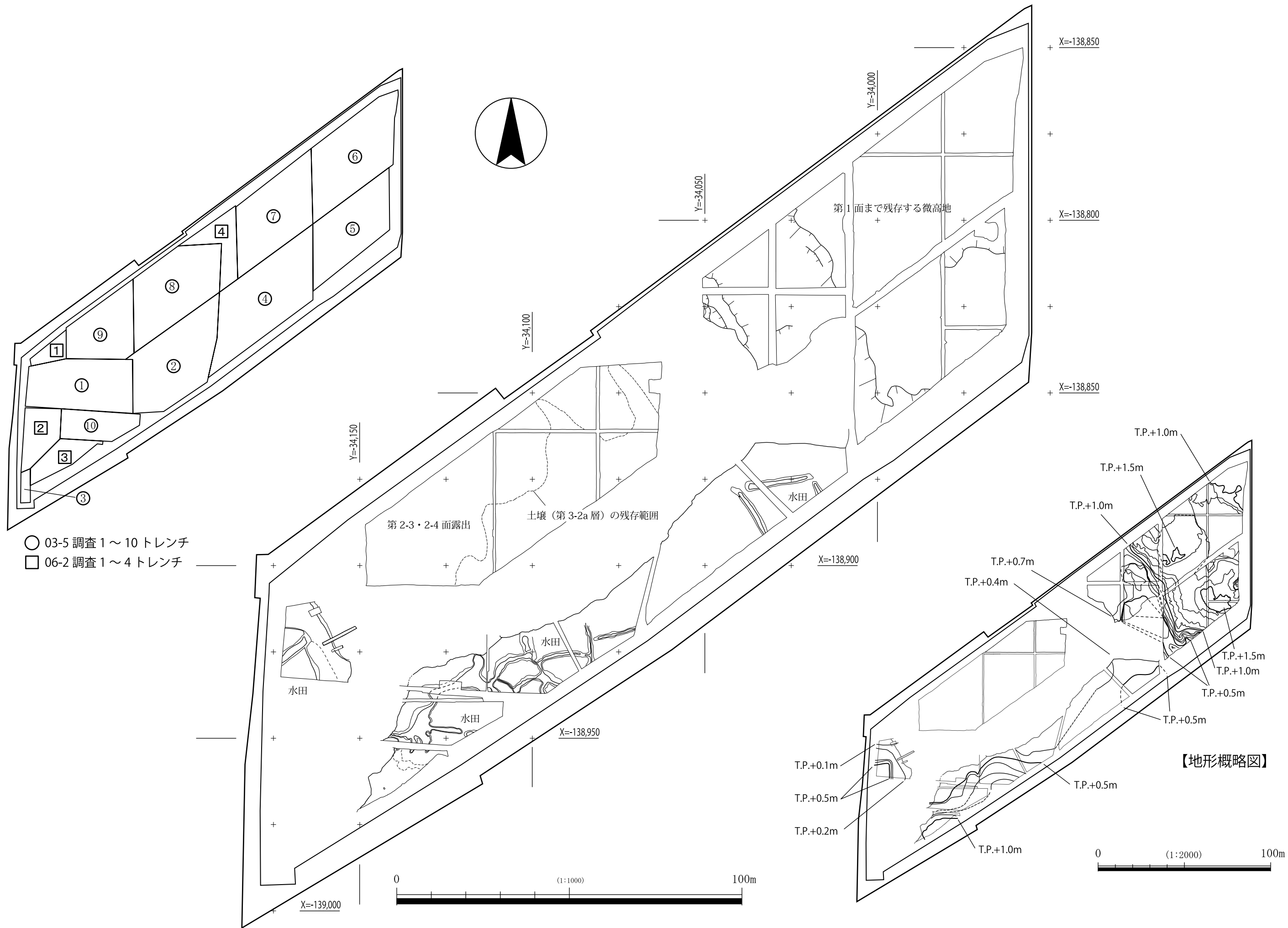


図223 第2面(第2-2面) 遺構分布図 (s=1/1000) ・地形概略図

第2-2面においては水田域での土器類の出土は無く、水田の時期について直接することはできないが、第2-1面の帰属時期を弥生時代中期とし、後述する第2-2面作土下で確認された遺構出土の遺物もやはり弥生時代中期のものであること、またベースとなる第3-2b層からも弥生時代中期の土器が出土していることと併せると、水田の時期も弥生時代中期と判断できる。なお、03-5-1トレンチ西端に位置する箇所畦畔部分を掘り下げている過程で石庖丁の出土をみ、隣接する03-5-2トレンチの畦畔部分の掘削においても石庖丁の出土がみられた。明確な埋納遺構のようなものは確認できなかったが、ほぼ同一箇所から複数の遺物が出土していることから、意識的な埋納によるものであったと推測する。

#### 第2-2b面（図224）

第3-2a層、すなわち第2-2面における土壌層を除去すると、南側微高地部分では比較的層厚のある第3-2b層が露出するが、03-5-10トレンチではこの段階においてピット、土坑、溝などを検出した。連続する面については、北東側の03-5-2トレンチにおいては遺構の検出は無く、西南側の06-2-3トレンチにおいては第2-2（a）面を最終遺構面とするよう、行政指導がなされたことから面そのものを検出していない。遺構の分布範囲はおそらく南西側には一定の広がりをもっているものと推測され、調査範囲外では南西側に広がると予想される微高地上に連続するものと推測する。

検出した遺構には土坑76～81、溝22～29、ピット178～182の遺構番号を付した。おおまかな遺構分布の特徴としては、微高地の等高線に平行する方向に複数の溝が密集する様相がみられ、その溝群と重なるかあるいは地盤が高い側にピットが分布する。土坑とした遺構も溝群以南に集中するが、やや大型の土坑数基は溝より北側に分布する。個々の遺構同士の有意の関係までは不明であるが、調査範囲南側が地形的により高いものと推測されることから、南側に広がる集落域の縁辺部にあたるものと考えられる。

土坑76・77は溝群より北側に位置する一群で、土坑76は不整形なものであるが、土坑77は直径約2mの円形の平面形を呈する。土坑76からは図示し得る遺物の出土は無く、弥生土器の細片が出土したのみである。土坑77からは図225-1739～1746に示した弥生土器、図227-1778に示した石器のほか、弥生土器片、自然礫と思われる礫2点が出土した。1739は壺で口縁端部にキザミを施すものである。1741は剥離の著しい壺口縁部で、口縁端部が下垂する広口壺かと思われる。1742・1743は鉢で、1743は口縁端部内外面の角にキザミを施している。1747・1748は壺の体部片と考えるが、1747は粗い櫛描紋を、1748は櫛描列点紋をそれぞれ施している。弥生土器の底は3点を示したが、なかでも1744は新しい形態をみせる。1778は砂岩製の敲石で、側面に敲打痕がみられる。前面、背面とも角部分が打ちかかっているようにみられ、敲石としての使用に際しての加工であるか、使用後に何らかの製品への再加工を試みたかのいずれかによるものと考えられる。

土坑78・79・80は溝が密集する部分の南寄りに、東西方向に並ぶ円形の小規模な土坑である。土坑78からは図225-1749・1750に示す土器のほか、弥生土器細片が出土している。土坑79からも弥生土器細片が、土坑80からは図225-1751に示した甕口縁が出土している。

土坑81は調査区南側の壁にみられた遺構で、側溝の掘削ならびに壁面から遺物を採取した。図225-1752は長頸の広口壺で、頸部はミガキによる調整を施し、上下にわずかに拡張する口縁端部には波状紋を施している。1253・1254は甕の口縁部で、いずれも残存率の低い個体である。

溝22はおおむね南北方向を指向する溝で、南端でやや大型の土坑に連続する。また土坑につながる手前で東西方向に2条が平行する溝24・25とも接続する。溝24・25も西端部で円形の土坑状の遺構に連結する。それぞれの関係については明瞭な切り合い関係はみられなかったが、細部においては相互の関係

が不明瞭なまま残された。また溝22の東側に位置する溝23も溝24と同じ方向をとり、関連する遺構かと考えられる。溝22からは図226-1760-1772に掲載した土器類が出土したほか、図228-1792と接合する広口壺片もみられたが、多くは南側の土坑状を呈する部分からの出土である。1760は小型器種であるが、外傾する口縁端部をもち、高坏かと考えられる。1761、1762は有段口縁の壺で、1762は外面に雑な簾状紋が2段に施される。簾状紋は1763の上端にも認められるが、同下半や1766には櫛描直線紋が施される。甕にもいくつかの特徴がみられるが、1767・1770・1771のようにゆるやかに外反する口縁部をもつものと、1768・1772のように内面に鋭い稜をつくり、「く」の字に外反するものがある。また1768・1769では口縁端部にキザミメを施す。溝23からは図225-1757-1759に示した土器が出土した。1757は玉縁状の口縁部をもつ無頸壺（甕）で、図236-1901に類する器形と考える。溝24からは図226-1775に示した弥生土器底部が出土している。

溝26-28は平行し、円弧を描くように位置する溝である。それぞれが有意に関連するものと思われるが、埋土に切り合いが認められる関係もあり、同時期に開削されたものではないようである。溝26と比べると溝28は浅い小規模なものである。これら溝からの出土遺物としては、溝26から広口壺の口縁（図226-1773）を、溝27からは甕口縁（図226-1774）のそれぞれ細片を図示したにとどまる。

溝29は溝26とも連結するものであるが、北東方向、微高地の縁に沿ってのびるものである。北端は第1面流路1に削られており、失われている。出土遺物には図226-1776-1777に示した弥生土器があげられる。1777の広口壺は体部外面の遺存状況は悪いが、ミガキが施されているようである。

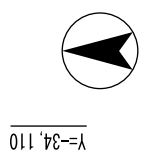
ピット178-182はいずれも溝群周辺に分布するもので、遺物の出土がみられたことから遺構番号を付したが、建物を構成するなどの、有意の関係性は見いだせなかった。出土遺物にはいずれのピットからも弥生土器の細片が出土しているのみである。

第2-2b面に対応する土壌層である第3-2a層からも、図228-1779-1783に示すように遺物がまとまって出土している。図228-1779-1783は弥生土器の蓋で、比較的整った外面調整をみせる。1784-1801は壺で、広口壺の割合が多い。装飾面で見ると口縁端部の端面に波状紋を施す1784・1788や、端部に下端にキザミメを施す1785・1789・1790・1791・1793がある。有段口縁をもつものには1794・1795があり、口縁端部や段部の外面にキザミメを巡らしている。1796・1798は形態が類似する口縁で、壺としたが、甕の可能性も考慮される。1798-1801の口縁部とも装飾性に乏しいものである。

図229-1802は無頸壺としておくが、内傾するシンプルな口縁端部をもつものの、端部にはキザミ、外面には櫛描波状紋と直線紋で飾るものである。1803・1804は壺頸部であるが、1803には断面三角形突帯が2段に巡り、1804は雑な櫛描直線紋で飾る。1805-1812は細片ではあるが、特徴的な紋様が施されるものである。1813-1817・1819-1826は高坏と考えられるものである。坏部から脚部にかけて遺存するものは無く、1819のみ、それぞれが同一個体かと考えられる。1818は残存率が極めて低い個体で、1827とも甕かと考える。1828も残存率が低く、判断も難しいが、1802と類似する装飾をもつ。

図230-1829-1851は甕で、法量、形態ともさまざまである。全体の形態では1837や1849が如意形を呈する可能性があり、口縁部の分類では短く外反し、丸く収める1829-1831や、頸部内面はゆるやかでありながらも大きく外反する1836・1842などがある。するどく「く」字状に外反するものには1835・1839・1841などがある。1843-1845は残存率が極めて低く、甕以外の器種の可能性も考慮する必要がある。1852・1853は鉢と考えるものであるが、やはり残存率が著しく低い。

図231には弥生土器の底部を配した。厳密な器種同定は難しい。底部外面に葉脈の痕跡を残すものが一



Y=-34, 110

Y=-34, 120

Y=-34, 130

Y=-34, 140

Y=-34, 150

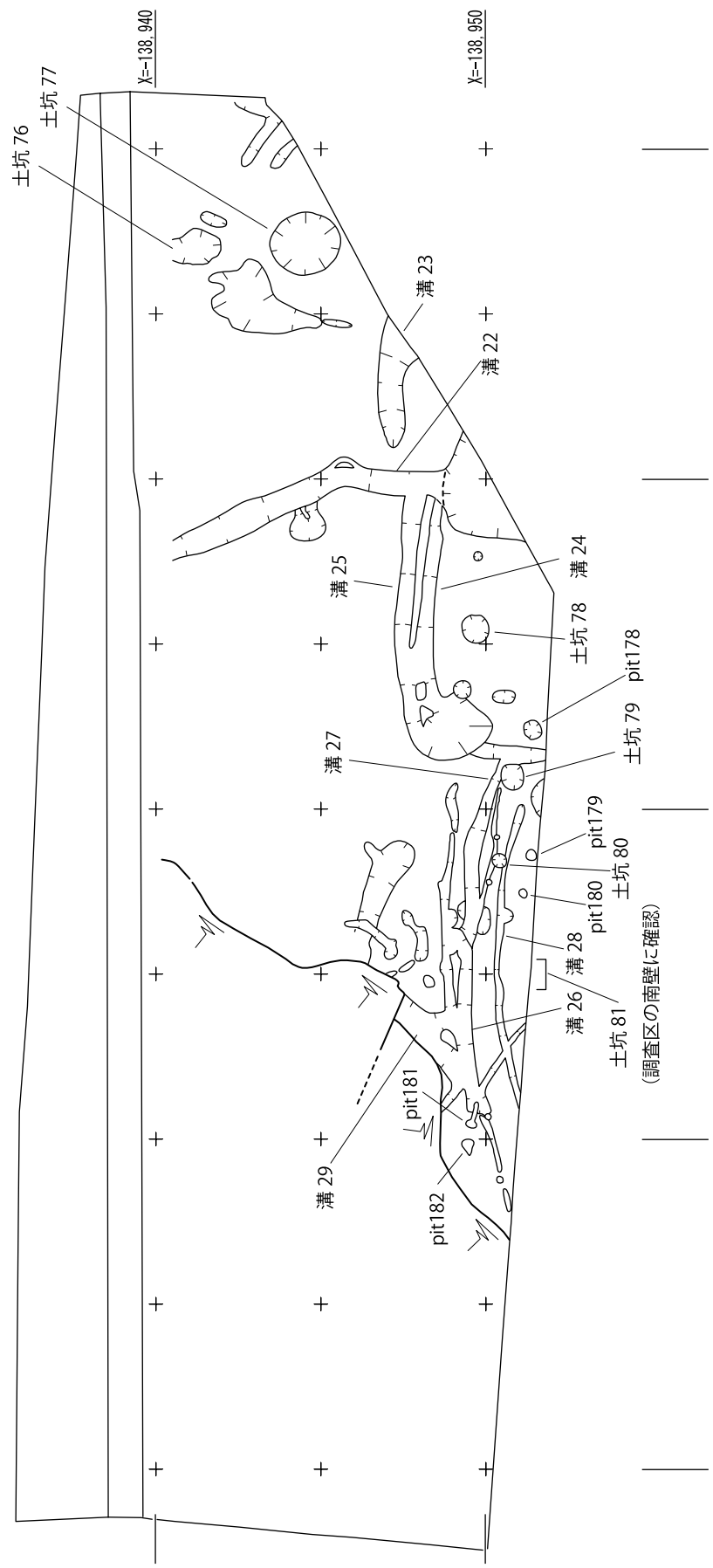


図224 第2b-2面 南微高地 遺構分布図 (s=1/200)

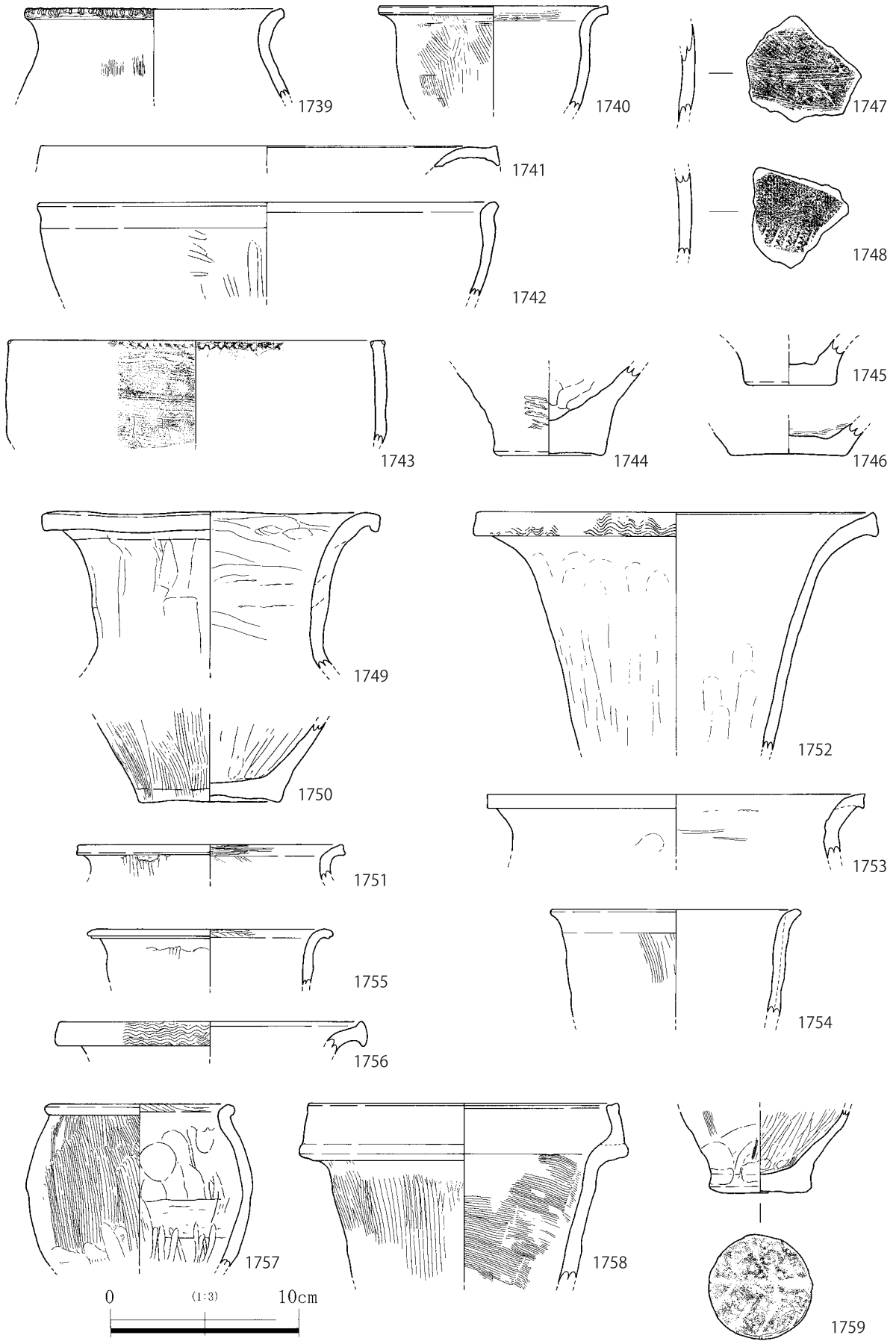


图225 第2-2b面遺構出土遺物 1

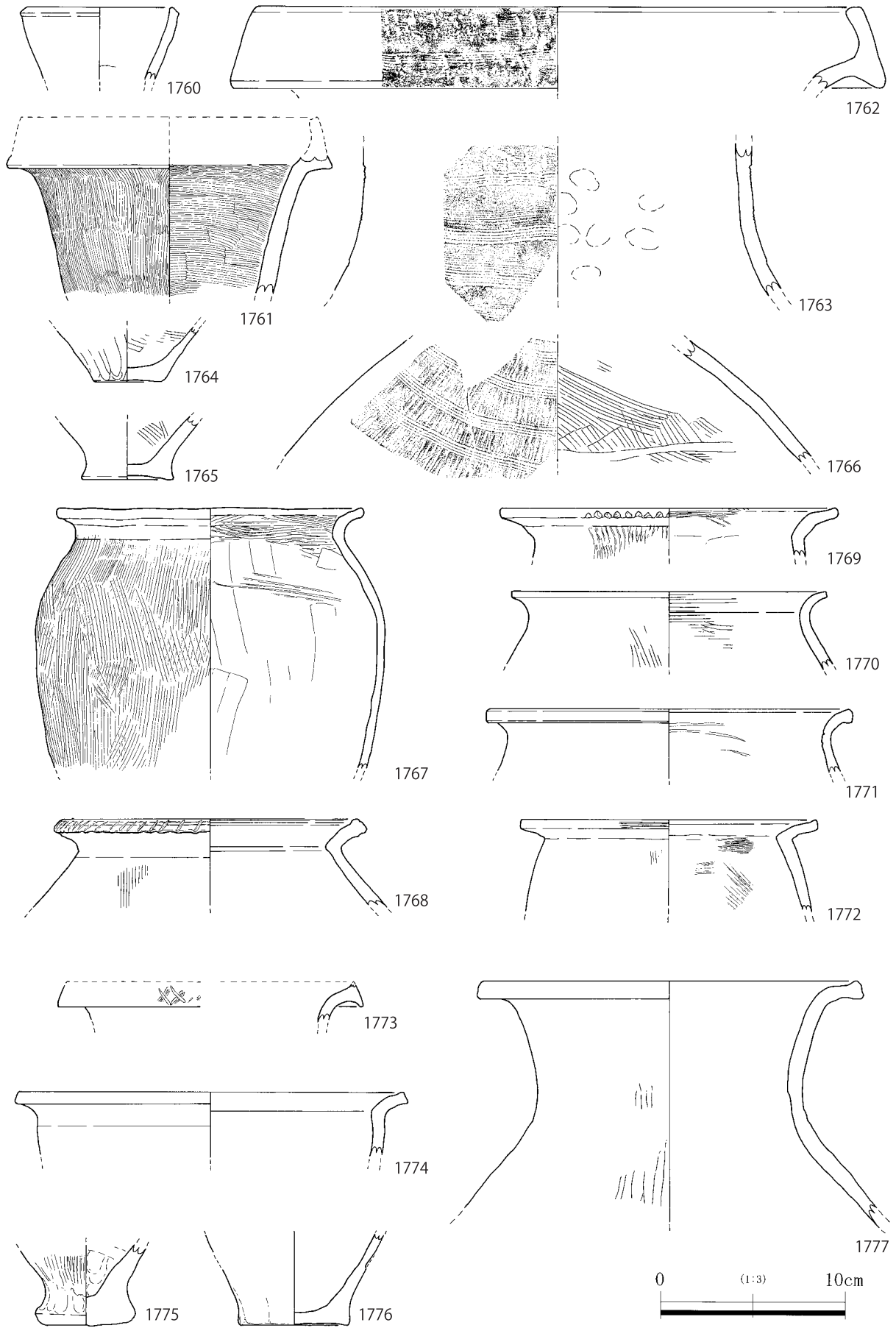


图226 第2-2b面遺構出土遺物 2



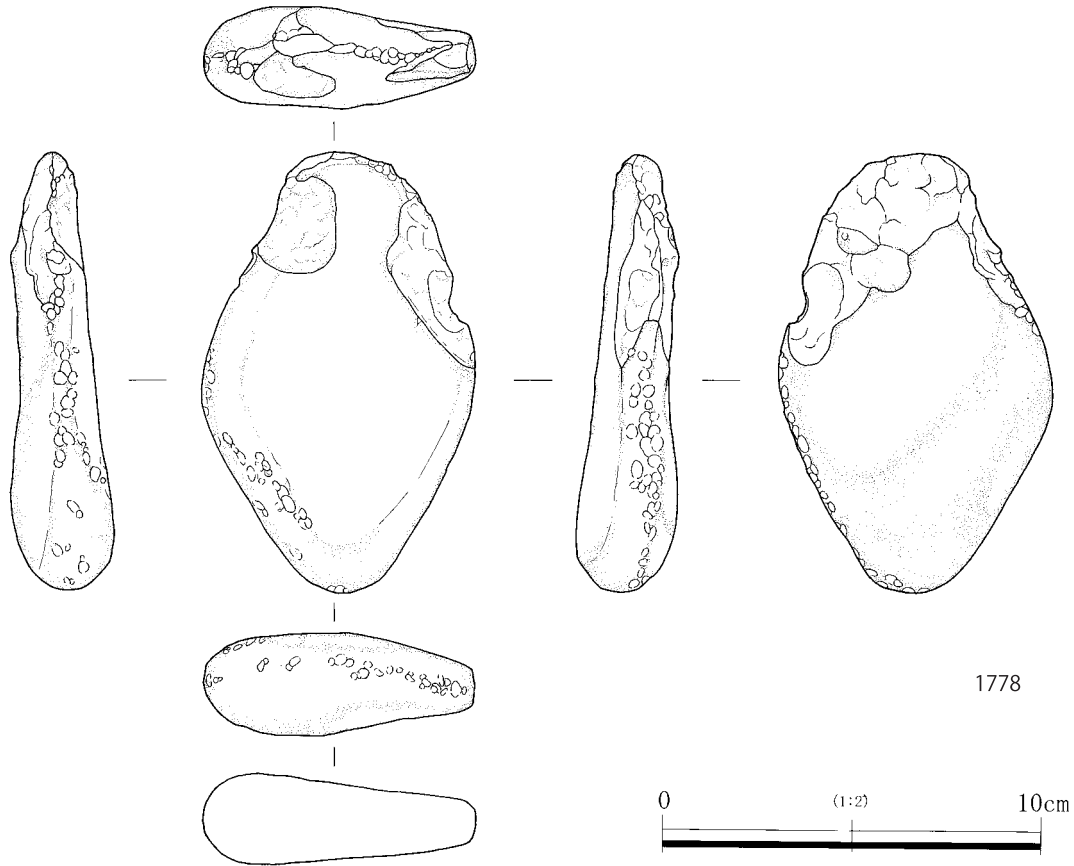


図227 第2-2b面遺構出土遺物 3

定数あり、上げ底風のものでは輪台状の部分に異なる痕跡を残すものもみとめられる。

図232-1879~1885は側溝、ないしは断ち割りなどの掘削時に出土したもので、第2a層出土と限定できない一群である。1879は縄文土器の深鉢で、ゆるやかな有段状の口縁端部にキザミを施すものである。残存率の低い個体ではあるが、後期に属するものかと考えられる。1880・1881は弥生土器の鉢あるいは高坏の坏部かと考えられるが、残存率はきわめて低い。1882の高坏脚は柱実の脚内部に円形に削りを実施する特徴的なものである。1884は丸底状の底部外面に指頭圧痕を顕著に残すものであるが、本来の器壁面ではない可能性がある。

図232-1886・1887は石庖丁で、水田畦畔を構成する第2a層出土のものである。1886は直線刃半月形を呈し、石材は頁岩である。1887は杏仁形を呈する可能性もあるが、残存部が少なく全容はよくわからない。紐穴の位置が低い点が特徴的で、石材は緑泥石片岩である。1888は欠損が著しいが、頁岩製の石棒と考えられる。残存長は11.3cmで、断面形状は長楕円形を呈し、長径3.5cm、短径3.0cmを測る。側溝掘削時に出土したものであるが、第2a層以下の層出土である。1888・1889はサヌカイト剥片である。1890は背面に横方向の剥離痕が認められる。

図233-1891は脈石英製の敲石と考えられるが、表面中央部にも敲打痕を残す。凹石的な使用がなされた可能性もある。重量は270gを測る。1892は砥石と考えられるものの残欠で、上面が平滑に加工されている。石材は砂岩である。1893は火山礫凝灰岩製の台石かと考えられるもので、重量は1.5kgを測る。上面各所に礫の分離痕とともに敲打痕が多数残されるが、側面は比較的平滑に仕上げられており、砥石としての使用も推測される。

出土土器には一部にⅡ様式を含み、Ⅲ~Ⅳ様式が主体となる。居住域の機能時期もこれをあてたい。

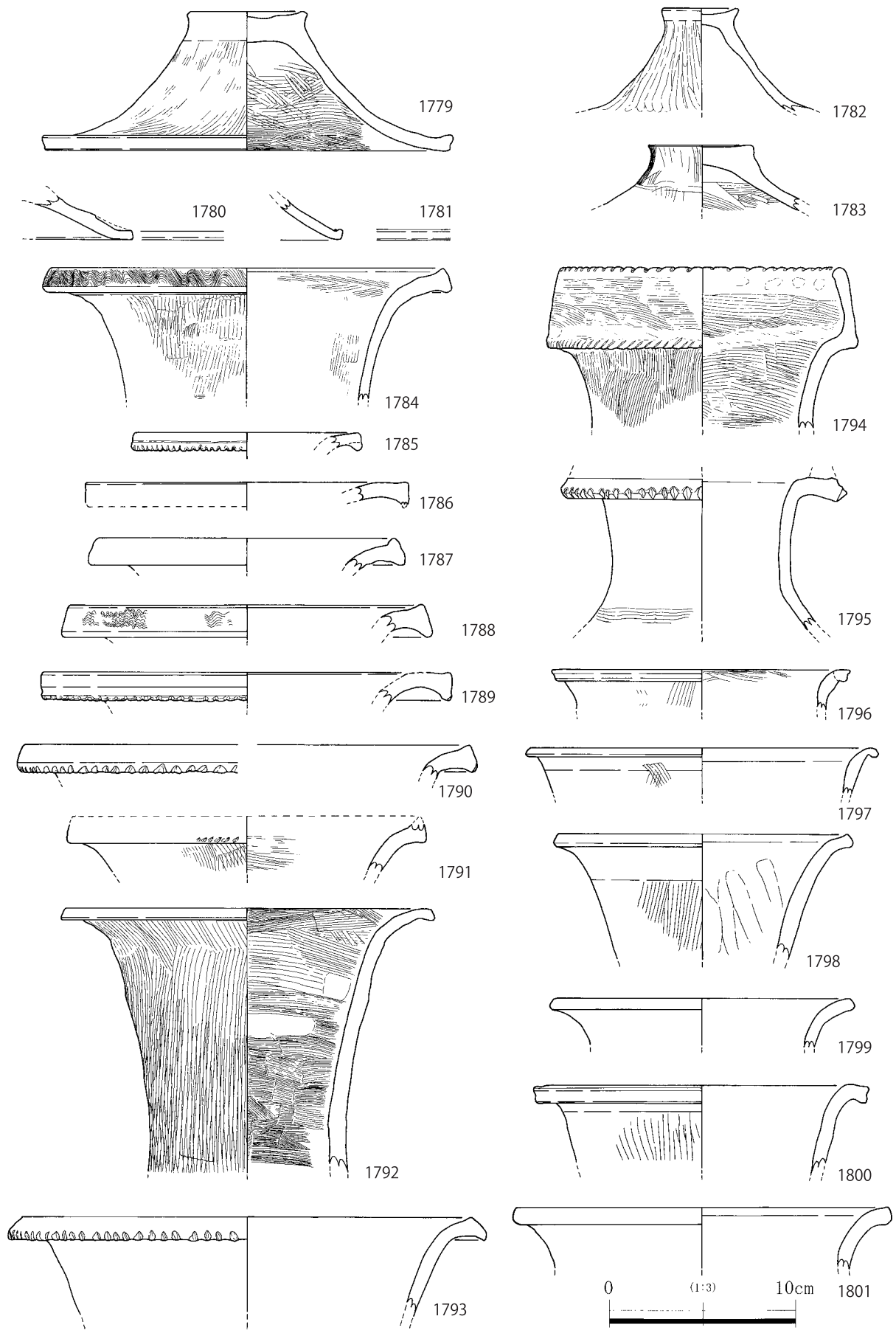


图228 南微高地 第3-2a层 出土遗物 1

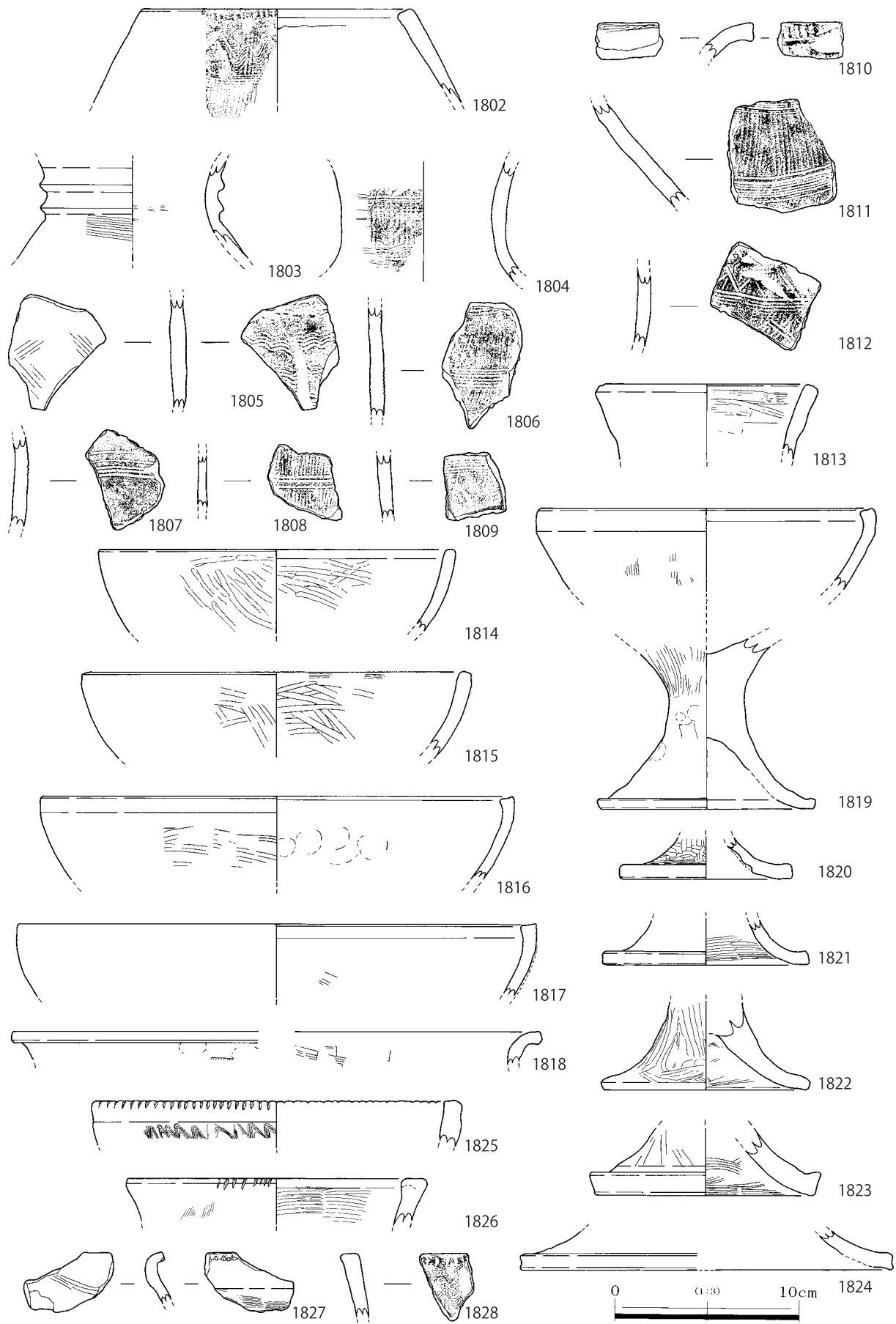


图229 南微高地 第3-2a层 出土遗物 2

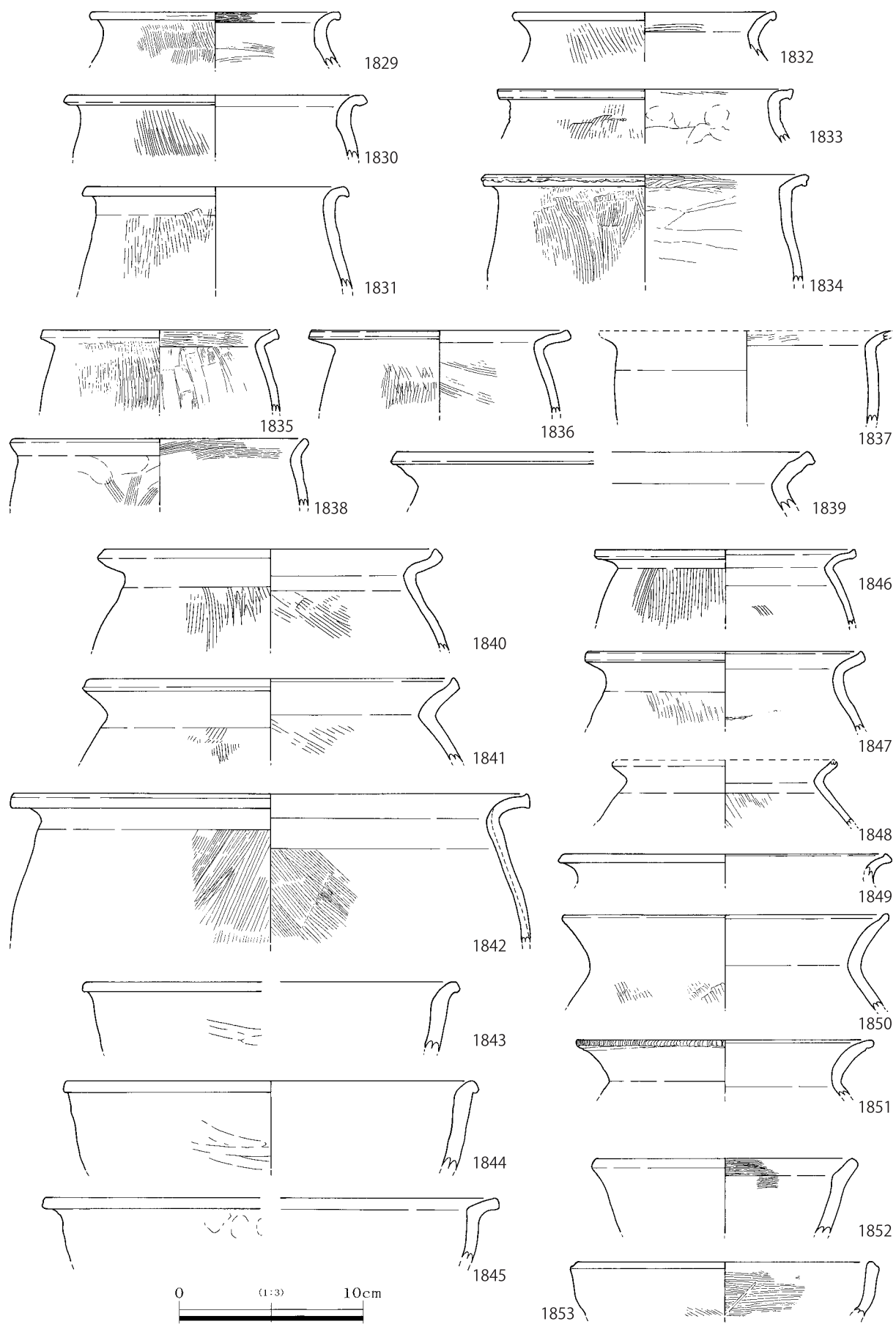


图230 南微高地 第3-2a层 出土遗物 3

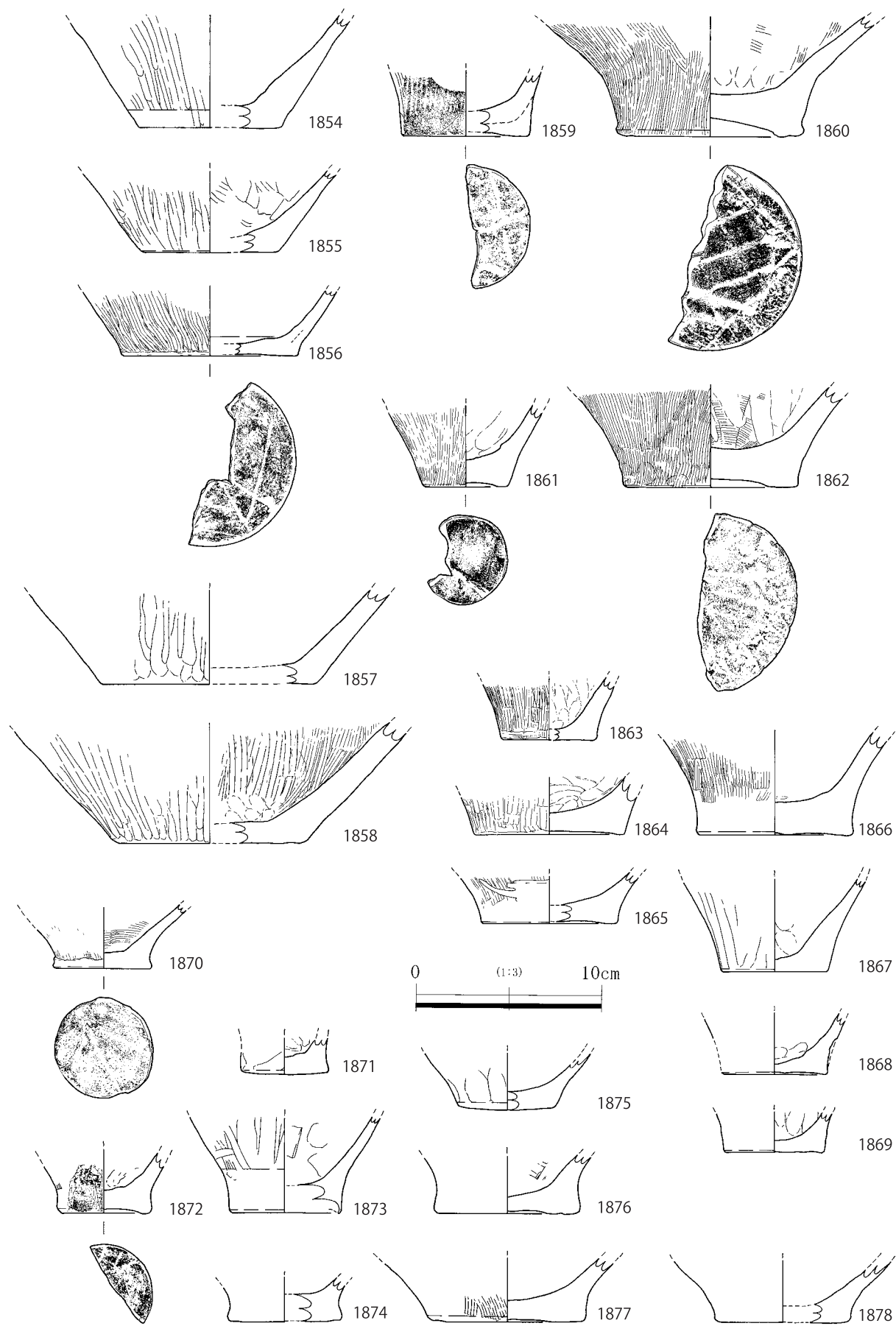


图231 南微高地 第3-2a层 出土遗物 4

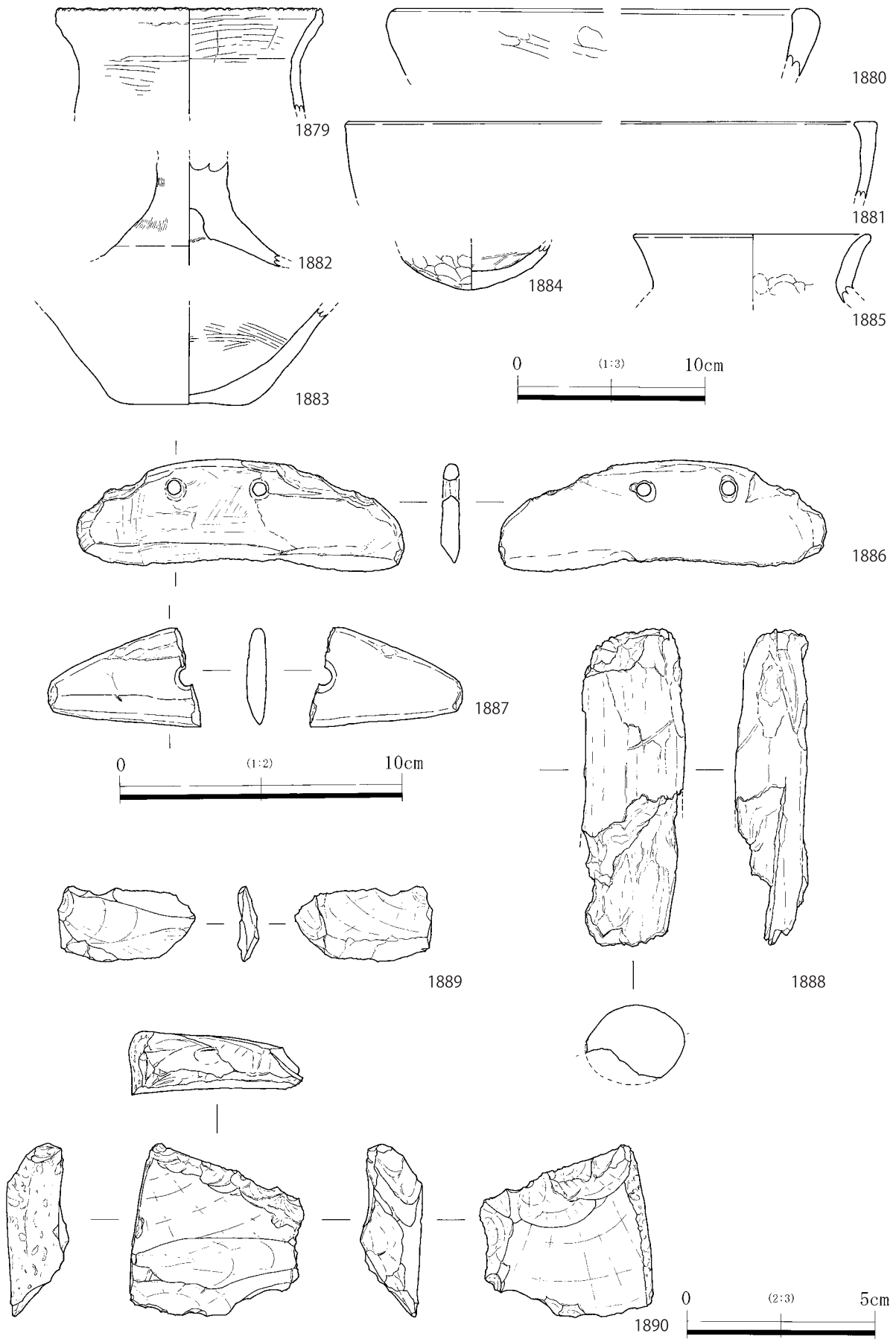


图232 南微高地 第3-2a层 出土遗物 5



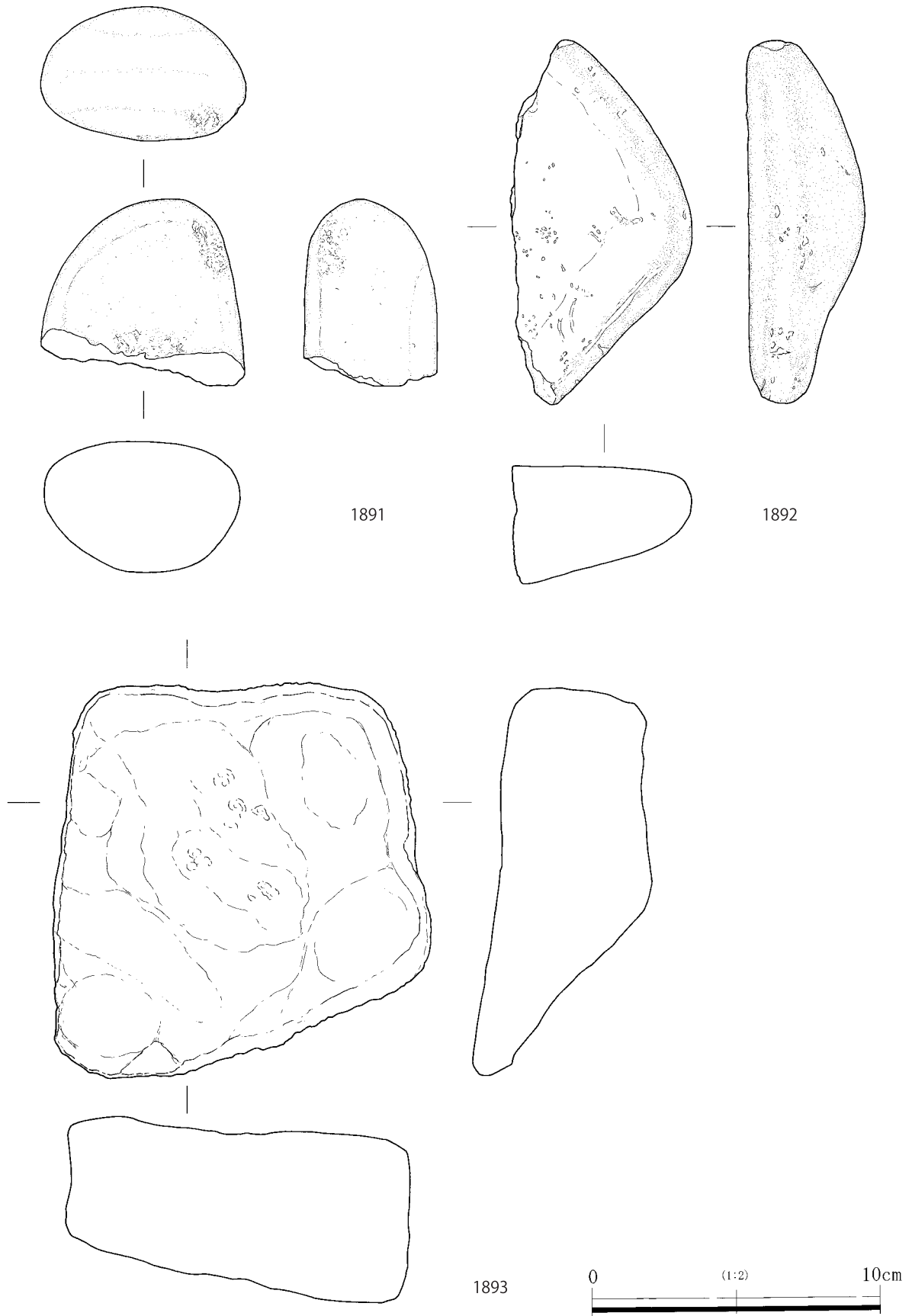


图233 南微高地 第3-2a层 出土遗物 6

#### 第4項 第2-3面（図234）

第2-3面は第3-2b層とする調査範囲南東側では厚く堆積した堆積層を除去することで検出される遺構面である。直上には植物遺体を多く含むシルト層が堆積している範囲がほとんどであり、旧地表面の遺存状況はよい。調査範囲東寄りとなる03-5-2トレンチ・03-5-4～7トレンチにおいては堆積層を除去し、遺構面を検出することができた。しかし、厳密には確認できなかったが、第2-3面の土壌、あるいはその母材となる第3-3層の広がりには03-5-1トレンチ、03-5-8～9トレンチには達しておらず、また03-5-10トレンチには第3-2b層最下部あるいは第3-3b層と考えられる堆積層のみが認められ、明確な地表面を認めることができなかった。さらに06-2-4トレンチでは第1面以下の調査を実施しておらず、06-2-2～3トレンチにおいても第2-1面ないしは第2-2面以下の調査は実施していないことから、図234においても調査範囲北西部については空白の表示とした。

第2-3面の全体的な地形としては、調査範囲中央南寄りに第1面にまで影響を残す微高地があり、標高は高いところでT.P.+0.3m程度を測る。ここより西側、北側への傾斜がみられるが、北側にややゆるやかで、最も低いところではT.P.+0.1m程度まで下る。また奈良時代にまで大きな地形変化をみせなかった微高地1もこの段階には形成されておらず、第2-3面では南側の微高地から浅い鞍部を挟み、調査範囲東端へと上る緩傾斜面が形成されている。03-5-5トレンチ東端では標高がT.P.+0.5m程度まで上ることから、緩傾斜面といっても相対的にはきつい勾配といえるかもしれない。

第2-3面では、03-5-4トレンチにあたる調査範囲南側の微高地部分において、堆積層に厚く覆われた水田域を検出した。また微高地東寄りの最も高い尾根部分では直線にのびる溝（溝30）を検出し、部分的ではあるが、03-5-7トレンチにまで達していることも確認した。同じトレンチの西端では南北方向の溝を検出したが、03-5-2トレンチ南西角にあたる微高地の縁辺で検出した数基のピットとともに、第2-3面に帰属を限定できるかどうかは不明瞭である。

南側微高地で検出された水田域は、長さ70m、幅35mの範囲において畦畔が遺存していた。調査範囲から南側の様相についてはもとより不明ではあるが、検出部分が微高地の縁辺部であることを考えると、さらに南側に広がるのが推測される。東側は溝30で画されるようであるが、西寄りの畦畔は徐々に高さを減じ、痕跡程度のものとなることから、溝と畦畔の関係はやや不明瞭である。また北側、西側については畦畔の存在は確認できておらず、痕跡程度になったものか、作土自体が残存しない可能性もある。

確認できた畦畔や作土上面は堆積層に覆われており、遺存状態は良好であった。畦畔の配列をみると、西寄りの蛇行する部分は等高線に沿った配置とみることができ、東寄りの文字通り「田」字を呈する部分では、等高線に直交する南北の畦畔と、それに交差する東西の畦畔という配置をみることができる。個々の畦畔は第2-2面でみられたものと比べると細く低い。おおむね下端の幅が70cm程度、高さは3～8cm程度であり、10cmを超えるところは無いようである。畦畔の上面は比較的細かな起伏が多数みられ、また畦畔両側の作土上面には畦畔に沿ってこまかな凹凸の連続する箇所が認められた。これらが埋没直前の畦畔、作土上面の形がそのまま検出されたという前提が必要ではあるが、作土を盛り、畦畔を造成した直後に埋没した可能性を指摘しておきたい。

この水田面からは残りのよい足跡が多数検出された。水鳥や偶蹄目の動物足跡も含まれるが、多くはヒトのそれであった。記録し得たものを図235に示すが、詳細な検討にはいたらないものの、歩行痕跡を確認できるものも多く含まれている。東寄りの区画では畦畔に沿って小刻みな歩行を行っている様子が見て取れる箇所もあるが、多くの足跡は等高線に直交する方向、すなわち高いほうから低い方への往復

を示している。さらにやや恣意的な見方になるかもしれないが、足跡の出所がある程度集中するようにも見受けられ、同一の箇所から畦畔を越えての各所への往復歩行が推定できるかもしれない。この点からは水田に稲が植えられている段階のものではないということが推測される。また足跡には砂が充填されており、一見残された足跡に砂が入り込んだかに思えるが、作土層上面にこれだけの足跡が残され、洪水に襲われるまでそれが残されていたと考えることは難しい。このような足跡は作土上面が相当軟弱であった場合に付けられると考えられるが、それが滞水環境であったならば、おそらくは足が引きぬかれた直後に何らかの堆積物（泥化した作土）が流れ込むであろうし、ある程度の乾燥状態であれば他に砂の入る乾痕も多くみられるはずである。いずれの痕跡も認めがたいことから、足跡が付けられた直後、すなわち足を抜いた段階にはすでに作土上面が砂を含む滞水環境にあったと考えることが合理的である。しかし比較的層厚のある第3-2b層の上面から踏み込んだとしても、作土面に足跡が残らないことも事実である。したがって、断定は難しいもののこれら多数の足跡は、畦畔の造成が終了した直後、水田面が洪水におそわれ、ある程度の堆積物が水田面に流れ込んだ段階の極短時間に残されたものであると結論付けておきたい。

水田域の東側ではほぼ直線にのびる溝30が位置する。砂により内部が充填されるもので、内部からは足跡ともに鋤の痕跡が認められた。詳細は不明であるが、水田域の給排水をになった水路と考える。掘削後、時間をおかずに砂に覆われたものと理解しておくが、こう考えると水路の掘削が水田畦畔の造成と同時にあるいは遅れる可能性も考慮する必要がある。主に排水を担うためのものであったと仮定すると、畦畔の造成に遅れてもよいのかもしれないが、推測の域をでるものではない。

微高地西縁で検出した数基のピットは、すべての検出面を確認できないが、唯一、遺物の出土したピット183については、第2-2面に帰属する水田畦畔の直下であり、畦畔を構成する作土が埋土となるものであった。出土遺物は弥生土器の体部片が1点であり、意図的な埋納という行為によるものかどうかは判断できない。ただ、ピットが集中すること、また畦畔作土中から石庖丁が2点出土した場所に近いことから、第2-2面の水田造成にかかわる遺構である可能性は高いと考える。

第2-3面の水田や溝に直接かかわる遺物は認められなかった。図236-1894~1911には第2-3面を覆う関係となる、第3-2b層出土土器を掲載した。1894は弥生時代後期に下る甕で、調査時に第3-2b層出土としたが、層位を正確に確認できなかったものである。1895は厚い器壁をもつ甕で、内外面は緻密なハケで調整される。1897は尖底気味の底をもつ鉢で、口縁部をユビオサエで成形し、調整は粗雑である。1898~1900は比較的口径の大きい甕で、1900はゆるやかに開いた口縁端部にキザミを施す、前期にさかのぼるものかと思われる。1901は微高地1の下層から出土した無頸壺（甕）で、完形のまま遺存する。1904は短く外反する口縁部と、「く」の字の屈曲が推定される体部をもつ甕で、口縁部外面には粘土の接合痕跡をよく残すものである。近畿の弥生土器の系譜にはのらない土器かと思われる。1906は鉢で、外面に簾状紋が施される。1907・1908は口縁端部直下に刻目突帯を施す深鉢で、口縁端部は明確に面取りを施しており、滋賀里Ⅳ式にさかのぼるものと考えられる。1909は浅鉢かと考えられるが、口縁部直下の外面に浮線網状紋が施される。1910は口縁端部にキザミを施す深鉢で、縄文時代晩期のものかと考えられる。1911は深鉢の体部と考えられる細片であるが、外面に沈線による紋様が認められる。縄文時代中期にさかのぼる資料かと考えられる。

図237-1912~1919は第3-2b層の最下部に堆積する植物遺体を多く含むシルト層出土の土器である。細片ばかりであり、甕が主体である。1914は台付鉢の脚台部で、脚端部付近には凹線紋が施される。

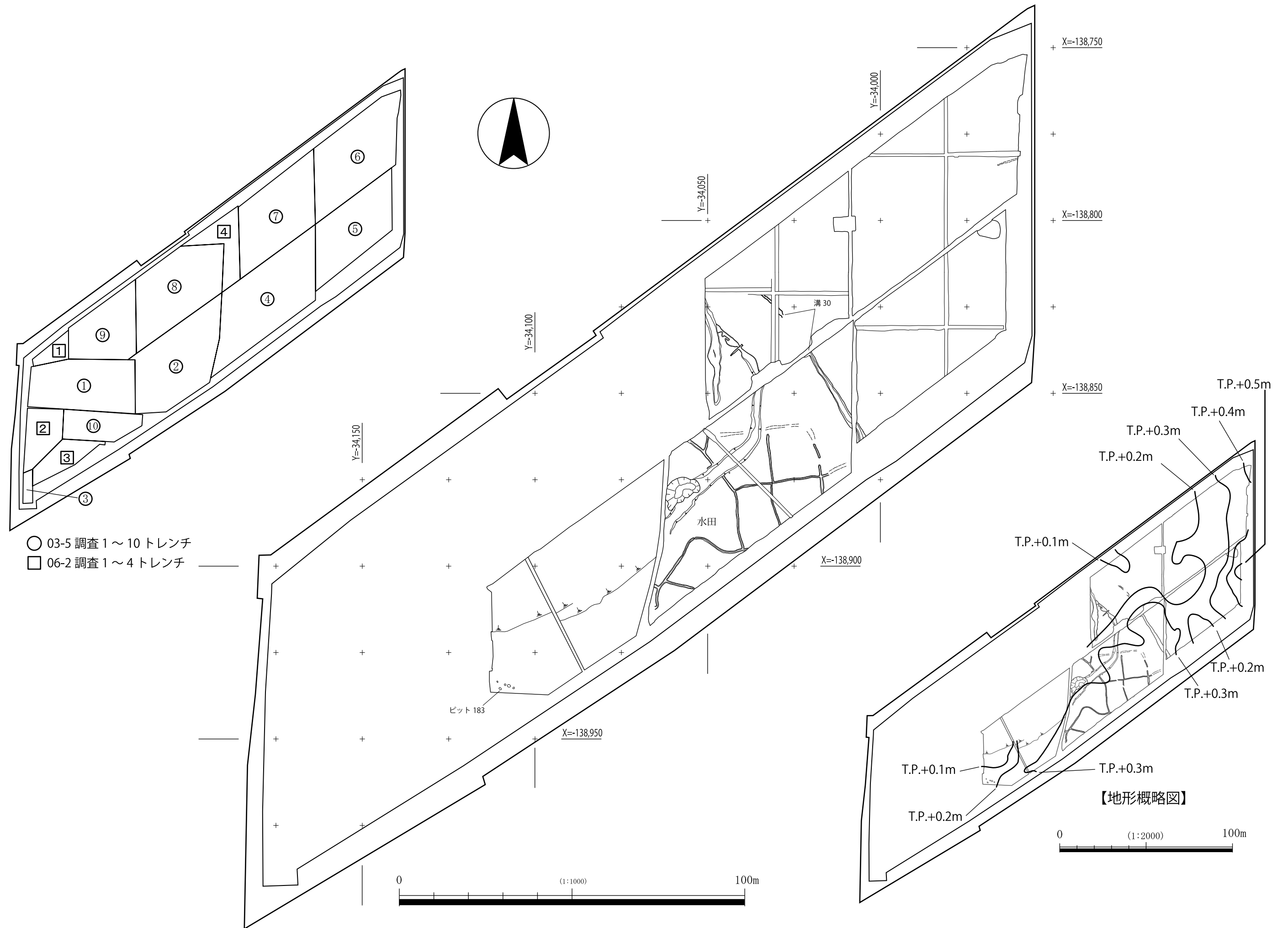


図234 第2面(第2-3面) 遺構分布図 (s=1/1000) ・地形概略図



図235 第2-3面 足跡 (s=1/200)

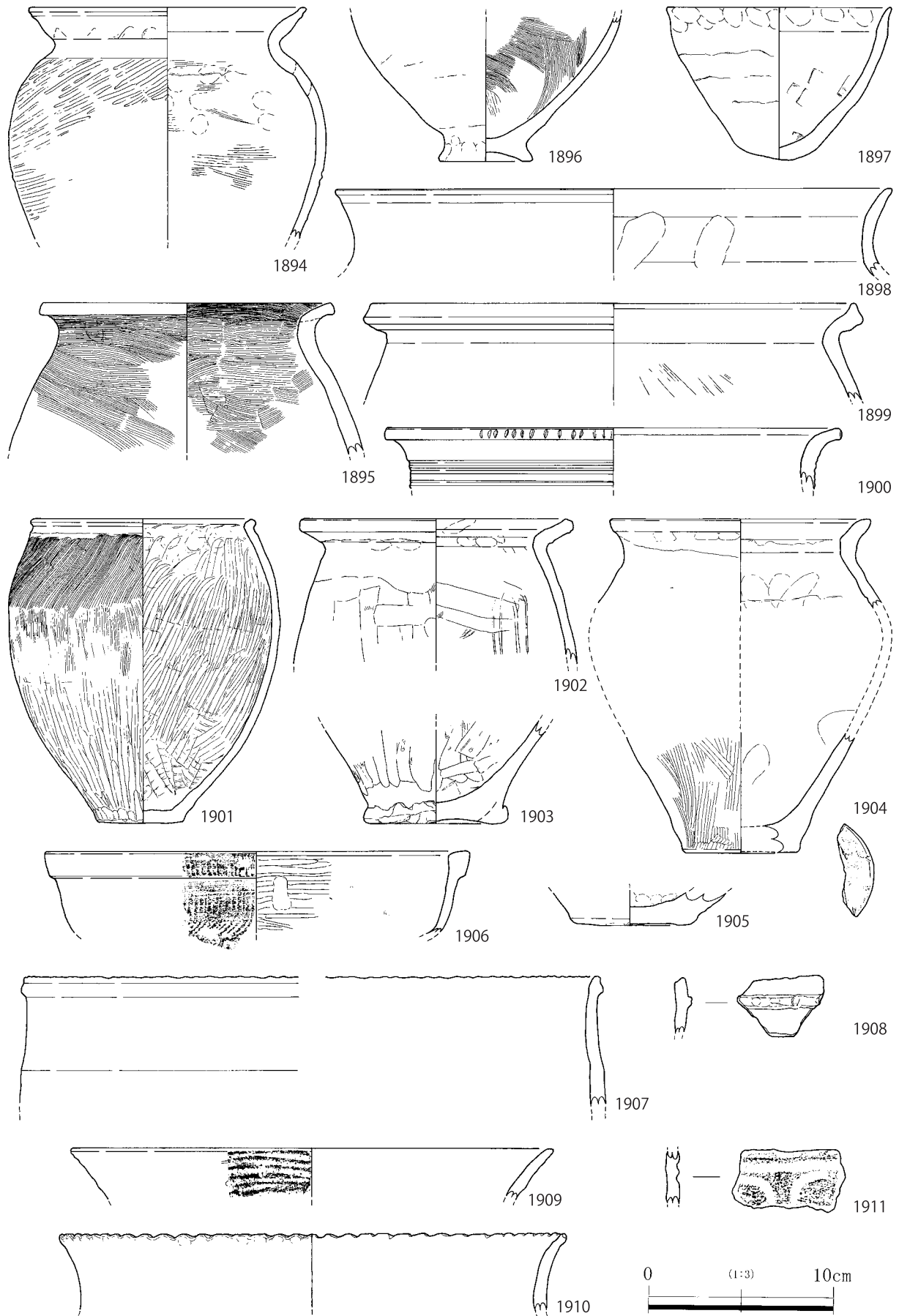


图236 西北低地 第3-1~3-4层出土遗物 1



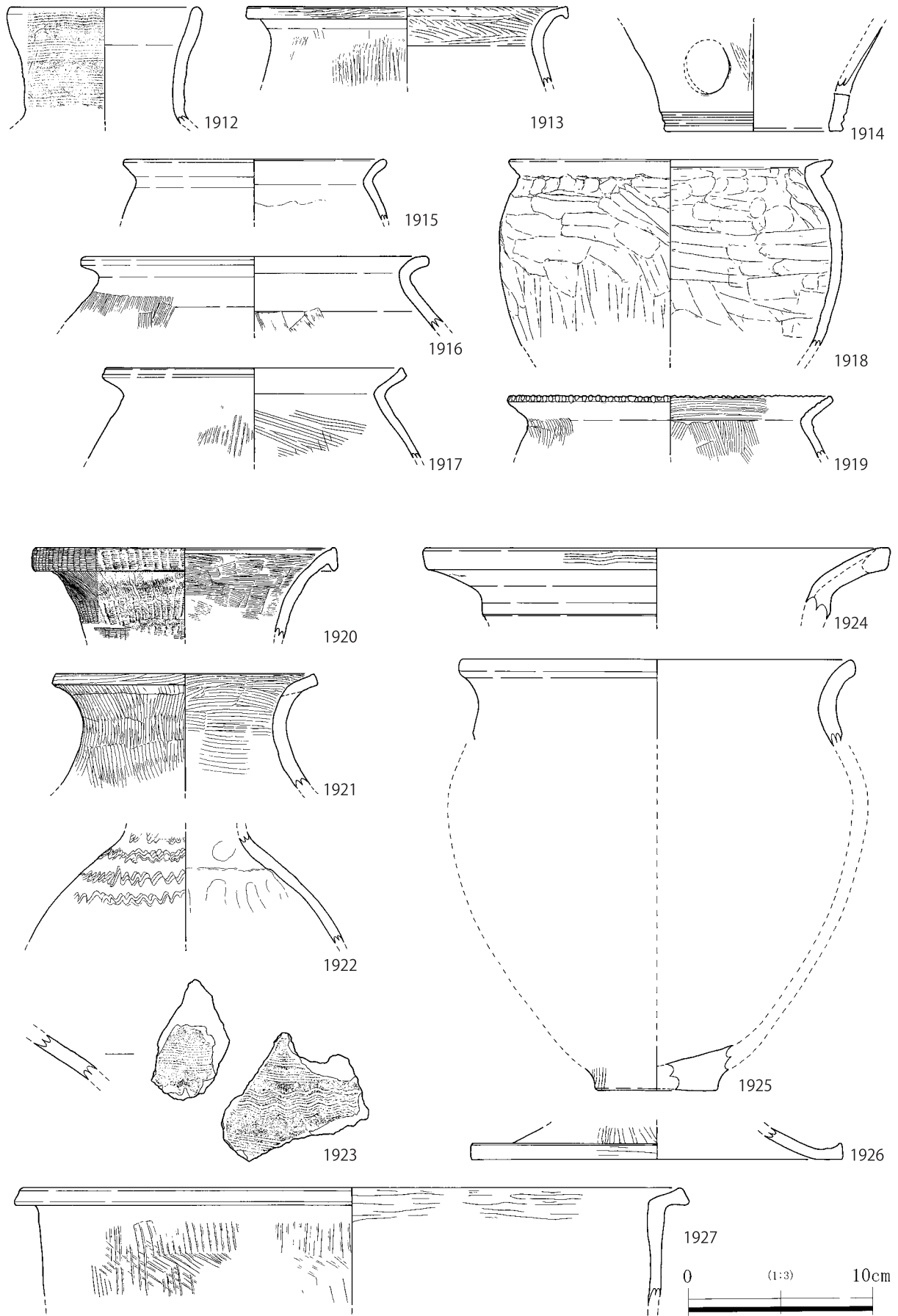


图237 西北低地 第3-1~3-4层出土遗物 2

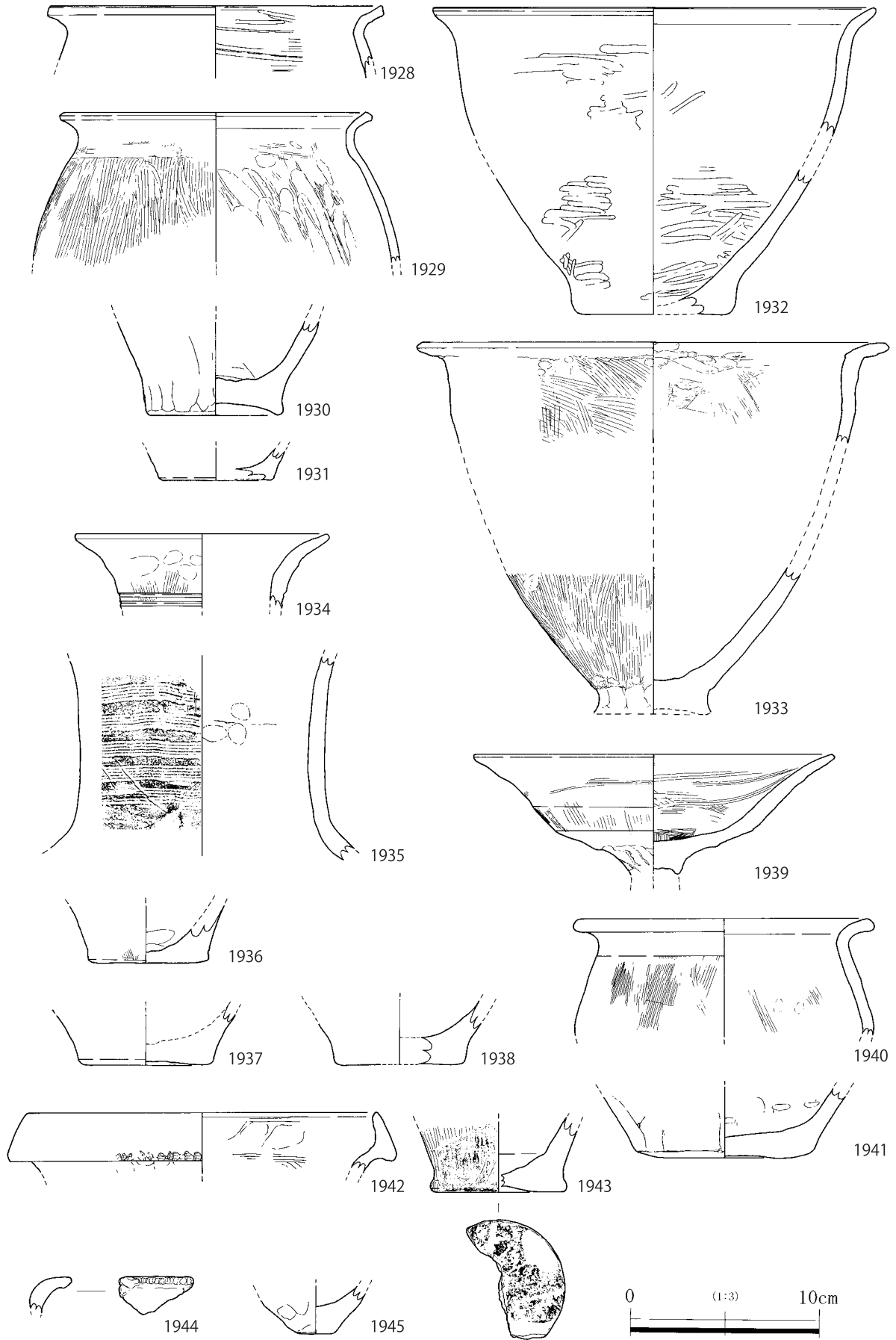


图238 西北低地 第3-1~3-4层出土遗物 3